

茨城県笠間市

塙谷遺跡2

県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書

2011

笠間市教育委員会
有限会社 毛野考古学研究所

茨城県笠間市

塙谷遺跡2

県営刈地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書

2011

笠間市教育委員会

有限会社 毛野考古学研究所



調査地区空撮（南西から。中央がB区、右奥はA区、左手前は長峰東遺跡。）



調査地区空撮（南東から。中央がA区、左はB3区。）

巻頭写真図版 2



A区空撮
(上が西)



B区空撮
(北から)



A区54号住居跡完掘状況



A区41号住居跡カマド遺物出土状況

卷頭写真図版 4



B 2 区 1 号石器集中地点と基本層序



遺物集合写真(弥生時代)

序

笠間市は、茨城県のほぼ中央に位置し、北西部には八溝山系が、南西部には吾国山・難台山・愛宕山が連なり、中央を北西部から東部にかけて涸沼川が大地を潤す自然豊かな地域です。また、河川流域や台地上より数多くの埋蔵文化財が確認されていることから、原始・古代より人々が生活を営むうえで最適の地域であったといえます。

今回の調査は県営畠地帯総合整備事業に伴う塙谷遺跡の発掘調査であります。この調査の結果、弥生時代から古墳前期と古墳後期、奈良・平安時代を主体とする集落跡が確認されました。特に弥生時代の住居跡が69軒検出され、地域の歴史を知る上で重要な資料を得ることができました。この報告書を通して郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化向上の一助として多くの人々に広く活用されることを強く願っている次第です。

最後に、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大なるご指導・ご協力を賜りました関係機関並びに関係者に対しまして心より感謝申し上げます。

平成23年3月

笠間市教育委員会

教育長 飯 島 勇

例　　言

1. 本書は、茨城県笠間市小原地区に所在する塙谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、県営畠地帯整備事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査による記録保存を目的として実施された。
3. 調査及び報告書作成は、笠間市教育委員会の指導・委託を受けて、有限会社毛野考古学研究所が実施した。
4. 遺跡の所在地、調査期間、調査面積は以下の通りである。

所在地　笠間市小原 564番地他
調査面積　11,819m²（A区 10,487m²、B 1区 996m²、B 2区 254m²、B 3区 1,362m²）
調査期間　平成20年8月18日～平成21年1月30日
整理期間　平成22年6月10日～平成23年3月15日
5. 発掘・整理担当者は以下の通りである（担当者は毛野考古学研究所）。

発掘調査　土生朗治（A区・B 3区）　高橋清文（B 2区・B 3区）　南田法正（A区・B 1区）
整理調査　土井道昭（旧石器時代）　高橋（縄文時代）　南田・浅間陽・常深尚（弥生～古墳時代前期）
土生（古墳時代後期～近世）
6. 本書の執筆分担は、以下の通りである。

第I～Ⅲ章、第IV章第2～4節（69～103住、方形周溝状遺構）・第5節、第VI章第3節1（4住）・第4節、
第VII章第1節1（2住～）、第2節1・2（2周溝墓）、第VIII章第3～5節、遺物観察表（古墳時代後期以降の
遺物）－土生
第IV章第1節2、第V章第3節2、第VI章第2節・第3節（1～3住）・第5節1・2、第VII章第1節1（1住）・
第2節2（1周溝墓）、第VIII章第1節、遺物観察表（縄文土器）－高橋
第IV章第1節1・第2～4節（1～67住）、第V章第1節1・第2節・第3節－南田
第IV章第2節2、第VII章第1節2、第VIII章第3節、第IX章第2節、遺物観察表（弥生時代の遺物）－浅間
第VII章第1節、遺物観察表（石器・石製品）－土井
遺物観察表（古墳時代前期の遺物）－常深
7. 本書の編集は、常深が担当した。
8. 調査で得られた資料は笠間市教育委員会で保管している。
9. 調査及び報告書作成に際し、下記の諸氏・機関からご指導・ご協力を賜った。記して感謝を申し上げます。

赤井博之　飯島一生　稻田健・海老澤稔　大木伸一郎　大賀健　大間武　川口武彦　川崎純徳　瓦吹堅
斎藤弘道　坂口一　佐々木義則　菅澤泰史　菅谷通保　鈴木徳雄　鈴木正博　鈴木素行　谷藤保彦　鶴見貞
能島清光　藤田典夫　比毛君男　三宅敦氣
スカイサーバイ（順不同・敬称略）
10. 本書の作成にあたっては、青柳美保、石田満理、石丸敦史、磯洋子、内田恵美子、大塚規子、鬼山山子
小野沢絹子、賀来孝代、加藤陽子、樋沢美枝、龟田浩子、木村宏次、小出琢磨、合田幸子、菅谷万須美
仙波菜津美、高橋真弓、永島美和子、根本正子、半澤利江、伴場りく、福江千英里、山下奈邦子の協力を得た。
11. 発掘調査参加者は以下の通りである。

青木豊、青木誠、飯田博美、飯田昭、石川克己、石川久男、海老原龍生、大山年昭、大内英雄、岡根光雄
大平昭夫、小坂部克己、人和田卓、小堤静江、小野瀬晃、小瀬靖夫、小山義則、川又誠二、川上孝子
梶山洋二、北村禪、黒沢明美、小柴常光、小山範子、坂倉巡一、佐久間頼美、佐藤としえ、佐藤利男
塩畑勝利、篠原一郎、白澤清三、菅谷正義、菅谷和子、鈴木とし江、鈴木浩、鈴木晃佳、関律子、仙波由美子
高橋真弓、高岡真士、瀧江稔、高田幸江、竹内郁夫、豊島美則、飛田和郎、仲田仙、中島とみ子、中島秀雄
中村伊重、中村薫、中村柄繁次、野村正子、塙英知、広水一真、吹野昇、福島えり子、松本修児、三河博志
武藤瑞良、山口致辰、横田忠利、吉田正子

凡　　例

1. 本書で使用した地図は、国土地理院発行2万5千分の1地形図、笠岡市発行2千5百分の1都市計画図である。

2. 出土遺物の注記で使用した遺構の略号は以下の通りである。

S 1…竪穴住居跡 S K…土坑 S D…溝 P…ピット K…カクラン

3. 実測図で使用した縮尺は以下の通りである。

竪穴住居跡…1／60 掘立柱建物跡…1／60 土坑・陥穴・井戸・地下式坑…1／60

溝・道路跡…1／60, 1／300 方形周溝状遺構…1／60 周溝墓…1／80, 1／100

ピット群・ピット列…1／60 石器集中地点…1／60

土器…1／3 旧石器…3／4 石器・石製品…1／1, 1／2, 1／3, 1／4

土製品・金属製品…1／3

4. 土層と遺物の色調は『新版標準土色帳』(小山正忠・竹原秀雄編著 (財)日本色彩研究所)を使用した。

5. 遺構一覧表・遺物観察表の表記は〈 〉内数値が計測推定値を、[]内数値は残存値を表す。

6. 遺物観察表(弥生土器)において附加条縄文の原体については鈴木素行1998を一部参考にし、附加条縄文の種類(輪縄の原体+附加した縄の条数と原体)のように表記した。

(例) 附加条1種縄文 (L R + 2 R) = 単節L R縄文に無節R縄文を2条附加

輪縄が不明のものについては「R・S」のように表記し、R・Sの場合は無節RをS巻き、R・Zの場合にはZ巻きであることを表す。なお、小文字r、lは撚り糸(0段の縄)の撚り方向を表す。また、施文方向は基本的に横方向であるため、記述を省略し、横方向以外の場合のみ記載した。

7. 遺物観察表(弥生土器)においてコゲ等について、内容物が焦げ付き、厚く付着する場合を「コゲ」、薄く付着する場合を「ヨゴレ」、被熱によりスジが消失した部分を「スス酸化消失」と表記した。

8. 実測図中のスクリーントーンは以下の通りである。

遺構 粘土 燃土

遺物 赤彩 油煙

目 次

著者等真司謹

序 文
例 言
凡 例
目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査の経過	1	第2部 奈良・平安時代	278
第1節 調査に至る経緯	1	1 壁穴住居跡	278
第2節 調査の経過	1	2 池	280
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2	第3部 時期不明の遺構と遺構外出土遺物	280
第1節 地理的環境	2	1 時期不明の遺構	280
第2節 歴史的環境	3	2 遺構外出土遺物	280
第Ⅲ章 調査の方法と基本順序	4	第VI章 B 2 区の遺構と遺物	281
第1節 調査の方法	4	第1節 古石器時代	281
第2節 基本順序	5	1 古石器中地点	281
第Ⅳ章 A 区の遺構と遺物	12	第2節 獣文時代	287
第1節 獣文時代	12	1 壁穴住居跡	287
1 陰穴	12	第3節 弥生時代	289
2 遺構外出土遺物	13	1 壁穴住居跡	289
第2節 弥生時代	15	第4節 奈良・平安時代	293
1 壁穴住居跡	15	1 壁穴住居跡	293
2 遺構外出土遺物	109	第5節 時期不明の遺構と遺構外出土遺物	294
第3節 古墳時代	113	1 池	294
1 壁穴住居跡	113	2 土坑・ピット	294
2 台形層及び遺構外山上遺物	153	3 遺構外出土遺物	295
第4節 奈良・平安時代	154	第VII章 B 3 区の遺構と遺物	296
1 壁穴住居跡	154	第1節 弥生時代	296
2 拠立付建物跡	235	1 壁穴住居跡	296
3 方形周溝状遺構	242	第2節 古墳時代	299
第5節 中世以降	243	1 壁穴住居跡	299
1 通式式坑	243	2 周溝墓	331
2 升戸	248	第3節 遺構外山上遺物	336
3 土坑	250	第VIII章 総括	337
4 盆井状遺構	252	第1節 獣文時代	337
5 ピット群・ピット列	252	第2節 弥生時代	338
6 池・道路跡	255	第3節 古墳時代	343
第V章 B 1 区の遺構と遺物	267	第4節 奈良・平安時代	344
第1節 弥生時代	267	第5節 中世	346
1 壁穴住居跡	267		
2 遺構外山上遺物	277		

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	2
第2図	調査地区的位置図	3
第3図	基本上層図	5
第4図	遺構全体図	6
第5図	A区遺構全体図	7
第6図	B 1区遺構全体図	9
第7図	B 2区遺構全体図	10
第8図	B 3区遺構全体図	11
第9図	1・2号窓穴・出土遺物	12
第10図	A区遺構外出土遺物①	13
第11図	A区遺構外出土遺物②	14
第12図	2号住居跡	15
第13図	2号住居跡出土遺物	16
第14図	3号住居跡出土遺物	16
第15図	3号住居跡	17
第16図	6号住居跡	18
第17図	6号住居跡出土遺物	19
第18図	9号住居跡	21
第19図	9号住居跡出土遺物	22
第20図	14号住居跡	23
第21図	14号住居跡出土遺物	24
第22図	16号住居跡	25
第23図	16号住居跡出土遺物	26
第24図	18号住居跡	28
第25図	18号住居跡出土遺物①	28
第26図	18号住居跡出土遺物②	29
第27図	27号住居跡	31
第28図	27号住居跡出土遺物①	32
第29図	27号住居跡出土遺物②	33
第30図	29号住居跡出土遺物	34
第31図	29号住居跡	35
第32図	30号住居跡	37
第33図	35号住居跡	37
第34図	37号住居跡	38
第35図	37号住居跡出土遺物	39
第36図	39号住居跡・出土遺物	41
第37図	44号住居跡	43
第38図	44号住居跡掘り方	44
第39図	44号住居跡出土遺物	45
第40図	45号住居跡・出土遺物	46
第41図	48号住居跡	48
第42図	48号住居跡出土遺物	49
第43図	49号住居跡	51
第44図	49号住居跡出土遺物	52
第45図	50号住居跡	53
第46図	51号住居跡	54
第47図	52号住居跡・出土遺物	55
第48図	54号住居跡	57
第49図	54号住居跡出土遺物	58
第50図	56号住居跡	59
第51図	57号住居跡	60
第52図	58号住居跡出土遺物	61
第53図	58号住居跡	63
第54図	58号住居跡出土遺物	64
第55図	61号住居跡・出土遺物	66
第56図	64号住居跡・出土遺物①	68
第57図	64号住居跡出土遺物②	69
第58図	66号住居跡	70
第59図	66号住居跡出土遺物	71
第60図	67号住居跡・出土遺物	73
第61図	73号住居跡・出土遺物	74
第62図	74号住居跡・出土遺物	76
第63図	77号住居跡・出土遺物	78
第64図	79号住居跡	79
第65図	79号住居跡出土遺物①	80
第66図	79号住居跡出土遺物②	81
第67図	80号住居跡	83
第68図	80号住居跡出土遺物	84
第69図	83a号住居跡出土遺物	85
第70図	83a・b号住居跡	86
第71図	85号住居跡	88
第72図	85号住居跡出土遺物①	89
第73図	85号住居跡出土遺物②	90
第74図	86号住居跡	91
第75図	86号住居跡出土遺物①	92
第76図	86号住居跡出土遺物②	93
第77図	88号住居跡出土遺物	94
第78図	88号住居跡	95
第79図	90号住居跡	96
第80図	90号住居跡出土遺物	97
第81図	93号住居跡・出土遺物	98
第82図	96号住居跡・出土遺物	99
第83図	97号住居跡・出土遺物	101
第84図	98号住居跡	102
第85図	98号住居跡出土遺物	103
第86図	99号住居跡・出土遺物	104
第87図	100号住居跡	104
第88図	100号住居跡出土遺物	105
第89図	101号住居跡・出土遺物	106
第90図	102号住居跡	107
第91図	103号住居跡・出土遺物	108
第92図	遺構外出土遺物①	109
第93図	遺構外出土遺物②	110
第94図	1号住居跡	114
第95図	1号住居跡出土遺物①	115
第96図	1号住居跡出土遺物②	116
第97図	4号住居跡出土遺物①	117
第98図	4号住居跡	118
第99図	4号住居跡出土遺物②	119
第100図	5号住居跡	120
第101図	5号住居跡掘り方	121
第102図	5号住居跡出土遺物①	122
第103図	5号住居跡出土遺物②	123
第104図	8号住居跡	126
第105図	8号住居跡掘り方	127
第106図	8号住居跡出土遺物①	128
第107図	8号住居跡出土遺物②	129
第108図	8号住居跡出土遺物③	130
第109図	12号住居跡	132
第110図	12号住居跡出土遺物	132

第111図	13号住居跡	133
第112図	15号住居跡	135
第113図	15号住居跡出土遺物	136
第114図	15号住居跡掘り方	137
第115図	23号住居跡	138
第116図	23号住居跡出土遺物	139
第117図	32号住居跡	140
第118図	33号住居跡	141
第119図	33号住居跡出土遺物	142
第120図	81号住居跡	144
第121図	81号住居跡出土遺物	145
第122図	83b号住居跡出土遺物	146
第123図	87号住居跡・出土遺物	147
第124図	92号住居跡出土遺物	148
第125図	92号住居跡	149
第126図	94号住居跡	151
第127図	94号住居跡出土遺物	152
第128図	包含層及び遺構外出土遺物	153
第129図	7号住居跡	155
第130図	7号住居跡出土遺物①	156
第131図	7号住居跡出土遺物②	157
第132図	10号住居跡	158
第133図	10号住居跡出土遺物	159
第134図	11号住居跡	160
第135図	11号住居跡掘り方	161
第136図	11号住居跡出土遺物	161
第137図	17号住居跡	163
第138図	17号住居跡出土遺物	164
第139図	19号住居跡	166
第140図	19号住居跡出土遺物	167
第141図	21号住居跡	168
第142図	21号住居跡カマド・掘り方	169
第143図	21号住居跡出土遺物	170
第144図	22号住居跡	172
第145図	22号住居跡出土遺物	173
第146図	24号住居跡	174
第147図	24号住居跡出土遺物	175
第148図	26号住居跡	176
第149図	26号住居跡出土遺物	177
第150図	31号住居跡出土遺物	179
第151図	31号住居跡	180
第152図	38号住居跡	182
第153図	38号住居跡カマド・掘り方	183
第154図	38号住居跡出土遺物①	184
第155図	38号住居跡出土遺物③	185
第156図	40号住居跡	187
第157図	40号住居跡掘り方	188
第158図	40号住居跡出土遺物	189
第159図	41・42号住居跡	191
第160図	41・42号住居跡・42号住居跡出土遺物	192
第161図	41号住居跡出土遺物	193
第162図	43号住居跡	195
第163図	43号住居跡出土遺物	196
第164図	46号住居跡	197
第165図	46号住居跡カマド・掘り方	198
第166図	46号住居跡出土遺物	199
第167図	47号住居跡	201
第168図	47号住居跡掘り方	202
第169図	47号住居跡出土遺物①	203
第170図	47号住居跡出土遺物②	204
第171図	47号住居跡出土遺物③	205
第172図	53号住居跡・出土遺物①	207
第173図	53号住居跡出土遺物②	208
第174図	55号住居跡・出土遺物	209
第175図	59号住居跡	210
第176図	59号住居跡出土遺物①	211
第177図	59号住居跡出土遺物②	212
第178図	60号住居跡	214
第179図	60号住居跡出土遺物	215
第180図	63号住居跡	216
第181図	63号住居跡出土遺物	217
第182図	65号住居跡・出土遺物③	218
第183図	65号住居跡出土遺物②	219
第184図	69号住居跡	221
第185図	70号住居跡・出土遺物	222
第186図	71号住居跡	223
第187図	71号住居跡出土遺物	224
第188図	75号住居跡	225
第189図	75号住居跡出土遺物	226
第190図	76号住居跡・山上遺物	227
第191図	78号住居跡	228
第192図	78号住居跡出土遺物	229
第193図	82号住居跡出土遺物	230
第194図	82号住居跡	231
第195図	84号住居跡	232
第196図	84号住居跡出土遺物	233
第197図	95号住居跡	234
第198図	95号住居跡出土遺物	235
第199図	1・3号掘立柱建物跡・出土遺物	237
第200図	4・6号掘立柱建物跡	238
第201図	7号掘立柱建物跡	239
第202図	7号掘立柱建物跡出土遺物	240
第203図	11・12号掘立柱建物跡	241
第204図	1号方形周溝状遺構	242
第205図	1号地下式坑	243
第206図	2号・3号地下式坑	244
第207図	4号・5号地下式坑	245
第208図	6号・7号地下式坑	246
第209図	地下水式坑出土遺物	247
第210図	1号井戸・出土遺物	249
第211図	2号井戸	249
第212図	72号上坑出土遺物	250
第213図	澗井状遺構出土遺物	252
第214図	1号ピット群	253
第215図	1号ピット列	253
第216図	2号・3号ピット列	254
第217図	7号溝・1号道跡跡	256
第218図	溝・道路跡出土遺物	256
第219図	1号住居跡	258
第220図	1号住居跡出土遺物	259
第221図	2号住居跡	261
第222図	2号住居跡出土遺物	262
第223図	3号住居跡	264
第224図	3号住居跡出土遺物①	265
第225図	3号住居跡出土遺物②	266
第226図	5号住居跡	267
第227図	5号住居跡出土遺物	268
第228図	6号住居跡	270
第229図	6号住居跡出土遺物	271
第230図	7号住居跡・出土遺物①	273

第231図	7号住居跡出土遺物②	274
第232図	8号住居跡	275
第233図	8号住居跡出土遺物	276
第234図	9号住居跡	277
第235図	遺構外山土遺物	278
第236図	4号住居跡・出土遺物	279
第237図	遺構外出土遺物	280
第238図	1号石器集中地点(器種別)	282
第239図	1号石器集中地点(石材別)	283
第240図	1号石器集中地点出土遺物①	284
第241図	1号石器集中地点出土遺物②	285
第242図	1号住居跡出土遺物	287
第243図	1号住居跡	288
第244図	2号住居跡	289
第245図	2号住居跡出土遺物	290
第246図	3号住居跡	291
第247図	4号住居跡・出土遺物	292
第248図	5号住居跡・出土遺物	293
第249図	1号溝	294
第250図	1号～5号干坑	295
第251図	ピット・遺構外出土遺物	296
第252図	1号住居跡出土遺物	296
第253図	1号住居跡	297
第254図	2号住居跡	298
第255図	2号住居跡掘り方・出土遺物①	299
第256図	2号住居跡出土遺物②	300
第257図	3号住居跡	302
第258図	3号住居跡出土遺物①	303
第259図	3号住居跡出土遺物②	304
第260図	3号住居跡出土遺物③	305
第261図	4号住居跡	308
第262図	4号住居跡出土遺物①	309
第263図	4号住居跡出土遺物②	310
第264図	4号住居跡出土遺物③	311
第265図	5号住居跡出土遺物	312
第266図	5号住居跡	313
第267図	6号住居跡・出土遺物	315
第268図	8号住居跡・出土遺物	317
第269図	9号住居跡出土遺物	318
第270図	9号住居跡	319
第271図	10号住居跡・出土遺物	321
第272図	11号住居跡	322
第273図	11号住居跡出土遺物	323
第274図	12号住居跡	325
第275図	12号住居跡出土遺物①	326
第276図	12号住居跡出土遺物②	327
第277図	13号住居跡・出土遺物	328
第278図	7号住居跡出土遺物①	329
第279図	7号住居跡	330
第280図	7号住居跡出土遺物②	331
第281図	1号周溝墓・出土遺物	332
第282図	2号周溝墓	334
第283図	2号周溝墓出土遺物	335
第284図	遺構外出土遺物	336
第285図	茨城県における绳文前期前半の6木主柱穴 住居跡	337
第286図	弥生土器の変遷図(2～4期を抜粋)	339
第287図	典型的な土台式土器から外れる個体	339
第288図	弥生葉巻の変遷	341
第289図	付図・弥生土器のスス・コゲ	342
第290図	「野藏穴の移動」より	343
第291図	長峰東・塙谷遺跡 住居の比較	343
第292図	墓穴住居の変化	344
第293図	特殊な器形の環状器	344
第294図	須恵器大形高台付鉢	345
第295図	8世紀の土師器供膳具	345
第296図	「山口守」壙書(60住)	345

表 目 次

表1	1号陥穴出土遺物観察表	13
表2	A区遺構外出土遺物観察表	14
表3	2号住居跡出土遺物観察表	16
表4	3号住居跡出土遺物観察表	16
表5	6号住居跡出土遺物観察表	17
表6	9号住居跡出土遺物観察表	21
表7	14号住居跡出土遺物観察表	22
表8	16号住居跡出土遺物観察表	24
表9	18号住居跡出土遺物観察表	27
表10	27号住居跡出土遺物観察表	31
表11	29号住居跡出土遺物観察表	35
表12	37号住居跡出土遺物観察表	39
表13	39号住居跡出土遺物観察表	40
表14	44号住居跡出土遺物観察表	42
表15	45号住居跡出土遺物観察表	47
表16	48号住居跡出土遺物観察表	47
表17	49号住居跡出土遺物観察表	50

表18	52号住居跡出土遺物観察表	56
表19	54号住居跡出土遺物観察表	56
表20	57号住居跡出土遺物観察表	62
表21	58号住居跡出土遺物観察表	63
表22	61号住居跡出土遺物観察表	67
表23	64号住居跡出土遺物観察表	67
表24	66号住居跡出土遺物観察表	70
表25	67号住居跡出土遺物観察表	72
表26	73号住居跡出土遺物観察表	75
表27	74号住居跡出土遺物観察表	75
表28	77号住居跡出土遺物観察表	77
表29	79号住居跡出土遺物観察表	81
表30	80号住居跡出土遺物観察表	82
表31	83号住居跡出土遺物観察表	86
表32	85号住居跡出土遺物観察表	87
表33	86号住居跡出土遺物観察表	93
表34	88号住居跡出土遺物観察表	94

表35 90号住居跡出土遺物観察表	97	表85 76号住居跡出土遺物観察表	228
表36 93号住居跡出土遺物観察表	97	表86 78号住居跡出土遺物観察表	229
表37 96号住居跡出土遺物観察表	100	表87 82号住居跡出土遺物観察表	230
表38 97号住居跡出土遺物観察表	100	表88 84号住居跡出土遺物観察表	233
表39 98号住居跡出土遺物観察表	103	表89 95号住居跡出土遺物観察表	235
表40 99号住居跡出土遺物観察表	104	表90 3号掘立柱建物跡出土遺物観察表	236
表41 100号住居跡出土遺物観察表	105	表91 7号掘立柱建物跡出土遺物観察表	240
表42 101号住居跡出土遺物観察表	106	表92 地下式坑一覧表	243
表43 103号住居跡出土遺物観察表	108	表93 地下式坑出土遺物観察表	248
表44 A区遺構外出土遺物観察表	111	表94 升戸一覧表	248
表45 1号住居跡出土遺物観察表	113	表95 井戸出土遺物観察表	248
表46 4号住居跡出土遺物観察表	119	表96 72号土坑出土遺物観察表	250
表47 5号住居跡出土遺物観察表	124	表97 A区土坑一覧表	251
表48 8号住居跡出土遺物観察表	125	表98 潜井状遺構出土遺物観察表	252
表49 12号住居跡出土遺物観察表	133	表99 漢・道路跡出土遺物観察表	253
表50 15号住居跡出土遺物観察表	134	表100 1号住居跡出土遺物観察表	257
表51 23号住居跡出土遺物観察表	139	表101 2号住居跡出土遺物観察表	260
表52 33号住居跡出土遺物観察表	143	表102 3号住居跡出土遺物観察表	263
表53 81号住居跡出土遺物観察表	145	表103 5号住居跡出土遺物観察表	268
表54 83b号住居跡出土遺物観察表	146	表104 6号住居跡出土遺物観察表	272
表55 87号住居跡出土遺物観察表	146	表105 7号住居跡出土遺物観察表	272
表56 92号住居跡出土遺物観察表	148	表106 8号住居跡出土遺物観察表	276
表57 94号住居跡出土遺物観察表	150	表107 遺構外出土遺物観察表	278
表58 包含層及び遺構外出土遺物観察表	153	表108 4号住居跡出土遺物観察表	279
表59 7号住居跡出土遺物観察表	154	表109 B区土坑一覧表	280
表60 10号住居跡出土遺物観察表	159	表110 遺構外出土遺物観察表	280
表61 11号住居跡出土遺物観察表	162	表111 1号石器集中地点出土石器組成表	283
表62 17号住居跡出土遺物観察表	162	表112 1号石器集中地点出土石器一覧表	285
表63 19号住居跡出土遺物観察表	165	表113 1号住居跡出土遺物観察表	287
表64 21号住居跡出土遺物観察表	171	表114 2号住居跡出土遺物観察表	290
表65 22号住居跡出土遺物観察表	173	表115 4号住居跡出土遺物観察表	291
表66 24号住居跡出土遺物観察表	175	表116 5号住居跡出土遺物観察表	294
表67 26号住居跡出土遺物観察表	178	表117 B区土坑一覧表	294
表68 31号住居跡出土遺物観察表	181	表118 ピット・遺構外出土遺物観察表	295
表69 38号住居跡出土遺物観察表	186	表119 1号住居跡出土遺物観察表	296
表70 40号住居跡出土遺物観察表	188	表120 2号住居跡出土遺物観察表	301
表71 41号住居跡出土遺物観察表	191	表121 3号住居跡出土遺物観察表	302
表72 42号住居跡出土遺物観察表	194	表122 4号住居跡出土遺物観察表	307
表73 43号住居跡出土遺物観察表	196	表123 5号住居跡出土遺物観察表	314
表74 46号住居跡出土遺物観察表	200	表124 6号住居跡出土遺物観察表	316
表75 47号住居跡出土遺物観察表	202	表125 8号住居跡出土遺物観察表	316
表76 53号住居跡出土遺物観察表	206	表126 9号住居跡出土遺物観察表	318
表77 55号住居跡出土遺物観察表	208	表127 10号住居跡出土遺物観察表	320
表78 59号住居跡出土遺物観察表	213	表128 11号住居跡出土遺物観察表	323
表79 60号住居跡出土遺物観察表	215	表129 12号住居跡出土遺物観察表	324
表80 63号住居跡出土遺物観察表	217	表130 13号住居跡出土遺物観察表	326
表81 65号住居跡出土遺物観察表	217	表131 7号住居跡出土遺物観察表	331
表82 70号住居跡出土遺物観察表	221	表132 1号周溝墓出土遺物観察表	333
表83 71号住居跡出土遺物観察表	224	表133 2号周溝墓出土遺物観察表	333
表84 75号住居跡出土遺物観察表	224	表134 遺構外出土遺物観察表	336

写真図版目次

- P L . 1 A区の遺構（縄文時代・弥生時代） 1・2号陥穴、6・14・16・27・29・37号住居跡
P L . 2 A区の遺構（弥生時代） 44・45・48・49・54・56・57・58号住居跡
P L . 3 A区の遺構（弥生時代） 67・73・77・79・85・86・88号住居跡
P L . 4 A区の遺構（弥生時代・古墳時代） 93・97・102・1・4号住居跡
P L . 5 A区の遺構（古墳時代） 5・8・15・33・87・92号住居跡
P L . 6 A区の遺構（奈良・平安時代） 7・10・11・17・19号住居跡
P L . 7 A区の遺構（奈良・平安時代） 21・22・24・26・31・38号住居跡
P L . 8 A区の遺構（奈良・平安時代） 38・40・41・42・43号住居跡
P L . 9 A区の遺構（奈良・平安時代） 43・46・47・53号住居跡
P L . 10 A区の遺構（奈良・平安時代） 55・59・60・65・75・84号住居跡
P L . 11 A区の遺構（奈良・平安時代） 1・3・4・6・7・11・12号掘立柱建物跡、1号方形周溝状遺構
P L . 12 A区の遺構（中世以降） 1・2・3・4・7号地下式坑、1・2号井戸、土坑群
P L . 13 A区の遺構（中世以降） 深井状遺構、1・2・5・7・8・9号溝、1号道路跡、1号段切り
P L . 14 B 1区の遺構 1・2・3・4・6・7・8号住居跡
P L . 15 B 2区の遺構 1号石器集中地点、1・2・4号住居跡、1号溝
P L . 16 B 3区の遺構（弥生時代） 1・2・3・4・5・8・9号住居跡
P L . 17 B 3区の遺構（弥生時代・古墳時代） 10・11・12・7号住居跡、1・2号周溝墓
P L . 18 A・B 1～3区の遺物（縄文時代） A区1号住居跡陥穴・遺構外出土遺物、B 1区遺構外出土遺物、
B 2区1号住居跡・遺構外出土遺物、B 3区遺構外出土遺物
P L . 19 A区の遺物（弥生時代） 14・18・27・44号住居跡出土遺物
P L . 20 A区の遺物（弥生時代） 48・49・54・57・58・66号住居跡出土遺物
P L . 21 A区の遺物（弥生時代） 64・79・80・86号住居跡出土遺物
P L . 22 A区の遺物（弥生時代） 85・100号住居跡・遺構外出土遺物
P L . 23 A区の遺物（弥生時代） 16・37・49・52・57・58・66・74・77・85・86・90・98号住居跡・
遺構外出土遺物
P L . 24 A区の遺物（古墳時代） 1・4・5号住居跡出土遺物
P L . 25 A区の遺物（古墳時代） 5・8・33号住居跡出土遺物
P L . 26 A区の遺物（古墳時代・奈良・平安時代） 7・10・11・15号住居跡出土遺物
P L . 27 A区の遺物（奈良・平安時代） 17・19・21・22・24・26号住居跡出土遺物
P L . 28 A区の遺物（奈良・平安時代） 31・38・40・41・43・46号住居跡出土遺物
P L . 29 A区の遺物（奈良・平安時代） 47・53・55・59・60号住居跡出土遺物
P L . 30 A区の遺物（奈良・平安時代以降） 26・65・76・84・87・92・94・95号住居跡・溝井状遺構出土遺物
P L . 31 B 1区の遺物（弥生時代） 3・6号住居跡出土遺物
P L . 32 B 2区の遺物（旧石器時代） 1号石器集中地点出土遺物
P L . 33 B 3区の遺物（弥生時代） 2・3号住居跡出土遺物
P L . 34 B 3区の遺物（弥生時代） 3・4・5号住居跡出土遺物
P L . 35 B 3区の遺物（弥生時代） 9・11・12号住居跡出土遺物
P L . 36 B 3区の遺物（弥生時代・古墳時代） 1・7・11・13号住居跡・2号周溝墓・遺構外出土遺物
P L . 37 A・B 1～3区の遺物（金属製品・石製品・石器） A区83a・66号住居跡、B 1区2・8号住居跡、
B 3区3・4・5・7・11号住居跡出土遺物
P L . 38 A・B 1～3区の遺物（土製紡錘車） A区18・48・61号住居跡・遺構外出土遺物、B 1区1・2・3・
11号住居跡、B 2区2号住居跡・遺構外出土遺物、
B 3区4・11号住居跡出土遺物

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

畑地帯総合整備事業は、農業に伴う道路・灌漑施設・農地などの生産基盤を総合的に整備することによって、作物品質の向上、生産作物の拡大、収取の増加、輸送費の削減、荷傷みの防止など、より高い生産性と品質のさらなる向上を目指している。

笠間市では基本施策を総合計画で目標を定め、農林業の振興を図ることを目的とした産業振興プロジェクトが重点的に進められている。また、農業生産基盤の整備の一環として、平成13年に小原地区土地改良組合が設立され、茨城県の指導の下、効率的な畑作農業地域を作るための整備事業が実施されている。

この整備事業の計画地は常磐線をはさんで南北に分かれている。この地区には市内最大級の山王塚古墳を有する一本松古墳群があり、重要な遺跡の包蔵地である。このことから整備事業計画の中で平成15年に三本松遺跡の発掘調査、平成16・17年に小原遺跡の発掘調査、さらに平成20年に塙谷遺跡（一部）の発掘調査が行われ、多大な成果が得られている。

今回の整備事業計画地は塙谷遺跡の範囲内であることから、笠間市教育委員会は平成19年度・20年度に笠間市文化財保護審議会委員の能鳥清光氏に試掘調査を依頼した。その結果トレンチから住居跡が確認され、出土遺物などから弥生時代を主体とした集落があることが推定された。

工事主体者である水戸土地改良事務所（現県央農林事務所）は、茨城県教育委員会教育長に対して、平成19年7月10日付けで遺跡について文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要と判断し、平成19年11月2日付けで工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

これを受け、笠間市教育委員会は有限会社毛野考古学研究所と委託契約を締結して調査を依頼した。笠間市教育委員会・水戸土地改良事務所・有限会社毛野考古学研究所は三者協議を行い、試掘調査の結果に基づき、平成20年7月18日付けで文化財保護法第92条第1項の規定による発掘調査届出を茨城県教育委員会教育長へ提出、茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳氏、笠間市文化財保護審議会委員の能鳥清光氏を指導委員として平成20年8月18日から平成21年1月30日まで、発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

平成20年8月18日、重機による表土除去作業をA区から開始する。8月20日からは、作業員による遺構確認作業を開始し、A区からは住居跡が100軒余り確認される。9月1日からは、堅穴住居跡の掘り込み作業を開始する。9月中旬には堅穴住居跡の調査を進めるとともにB区の遺構確認作業を行い、20軒余りの堅穴住居跡が確認される。9月末からB区の遺構調査を行い、10月中旬にB1・B2区の堅穴住居跡の調査を終了し、B3区と△区の調査を開始する。11月も引き続き、A区とB3区の調査を継続し、12月中旬にはB3区の調査を終了する。平成21年1月10日現地説明会を実施し、最後まで残っていたA区の調査は1月19日で終了し、図面作業を含むすべての調査は1月末で終了する。

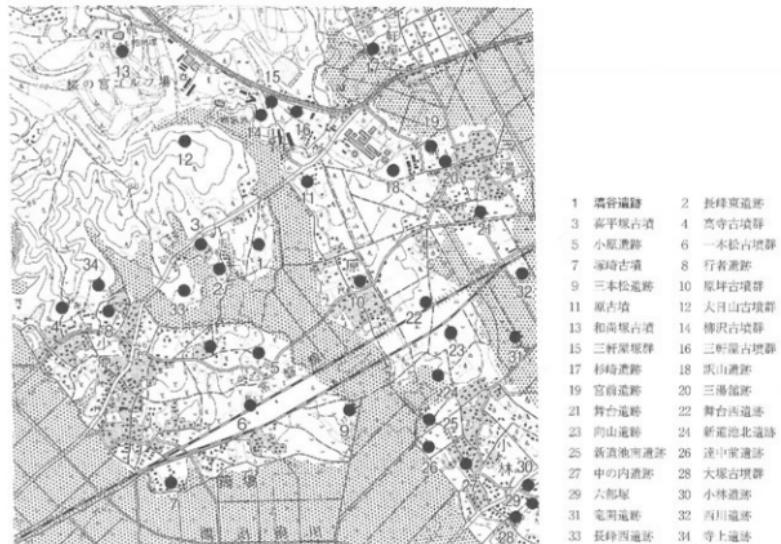
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

笠間市は茨城県のほぼ中央にあり、東は水戸市、西は桜川市、南は石岡市・小美玉市、北は城里町・栃木県茂木町にそれぞれ接している。市域の北部は八溝山系鶏足山塊から連なる友部丘陵が水戸市の西部にかけて広がる。一方、南西部は筑波山塊に接し、鶏足山塊と並んで県西と県央を東西に隔てている。市域の東部から南部は平坦な東茨城台地が展開しており、茨城町から大洗町まで伸長する。この台地上を利根沼川が下刻し、茨城県の中央を東走して太平洋に注ぐ。加えて、市域西部の飯田川・片庭川・稲田川、市域東部の利根沼前川・枝折川などが利根沼川に合流し、それぞれの流域で沖積世低地を形成する。

塙谷遺跡は小原地区の東寄りに位置する。友部丘陵南東端の緩斜面上にあり、利根沼前川に繋がる小支谷に接する。塙谷遺跡から北側は傾斜面が続き標高100m前後の丘陵尾根部に至る。

現在は小河川の上流に溜池を配し、丘陵緩斜面地を畑地、小支谷の平坦地を水田として利用している。また、立ちはだかる筑波山塊と鶏足山塊の合間に見越して、北側の丘陵部には国道50号、南側の平地には鉄道の常磐線が通う。古代においても、地形的な制約から小原地区を通るルートが東西を結ぶ幹線に選ばれていたものと思われる。北関東地方における東西間交通ルートの結節点であるとともに、豊かな水と山野の資源に恵まれており、農耕や交易にも適した立地環境であると言える。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1:25,000)

第2節 歴史的環境

小原地区は、これまで高寺古墳群や一本松古墳群、中世小原城跡の存在がよく知られていた。近年、小原地区では三本松遺跡（板野他 2003）から始まり、小原遺跡（吉田他 2005・能島 2007）、長峰東遺跡（土生 2010）、長峰西遺跡（大賀他 2010）、行者遺跡と広範囲に発掘調査が行われている。それらの成果から、小原地区の丘陵や台地上には、旧石器時代から中・近世にわたって繰り広げられてきた人々の生活跡が残っていることが明らかとなってきた。

旧石器時代では、長峰西遺跡から珪質頁岩製のナイフ形石器が、行者遺跡から瑪瑙製の削器が出土している。本遺跡からも旧石器のユニットが B2 区から確認されている。

縄文時代では、小原地区内における遺構・遺物の出土はやや少ない。陥穴が平成 19 年度調査の塙谷遺跡 C 区、長峰東遺跡、小原遺跡などに散在する。加えて、本遺跡で前期中葉の竪穴住居跡が認められた。また、遺構に伴わないものの、長峰東遺跡で前期中葉の関山 II 式や黒浜式等、長峰西遺跡で早期前葉の無文土器および前期中葉・中期後半・後期前半といった縄文土器が報告されている。



第2図 調査地区的位置図 (1:2,500)

弥生時代では、後期後半期に竪穴住居跡の数が非常に多くなる点が注目される。三本松遺跡で15軒、小原遺跡で2軒、平成19年度の塙谷遺跡C区で10軒、長峰東遺跡で9軒、長峰西遺跡で7軒、行者遺跡で1軒である。本遺跡を含めると弥生時代後期後半の住居軒数は県内でも特に多い地域と見られ、弥生時代後期後半から終末期にいたる地域的な特性が窺える。

古墳時代では、小原地区内からは古墳時代前期・中期・後期の集落が見られる。長峰東遺跡では弥生時代終末から古墳時代前期へ移り変わった時期の竪穴住居跡で弥生時代終末期の竪穴との配置関係や構造に関連性があると思われる竪穴住居跡が見られる。塙谷遺跡では古墳時代前期に住居数が多く、方形周溝墓も造られている。古墳時代後期には三本松遺跡や小原遺跡、長峰西遺跡等に集落の広がりが見られる。これは後期古墳の造成の盛んな時期に対応しているものと思われる。小原地区的古墳群では、高寺古墳群があげられる。高寺2号墳は花崗岩の割石積の横穴式石室を持ち、墳丘南東部から武人埴輪や円筒埴輪が、石室内からは、玉類、刀や劍などの鉄製品が出土している。高寺古墳群に属すると見られる行者遺跡からは、高寺2号墳に先行する時期の2基の古墳が確認され、人物・馬形の形象埴輪と多数の円筒埴輪が出土している。

奈良・平安時代の集落は、三本松遺跡他、地区内で発掘調査が行われた遺跡すべてにおいて確認されており、いずれも8世紀後半頃から急激に竪穴住居跡は数を増し、9世紀～10世紀にかけて集落が継続している様子が窺える。奈良時代になってからの急激な集落の増加は、この地域の東西に隣接する、笠間市大淵窯や水戸市木葉下窯など須恵器生産地帯の成長との関わりも想定される。

中世のこの地区には、戦国期の城跡と伝えられる小原城が本遺跡の南西約1.2kmの位置にある。小原城は16世紀の初めころ、里見氏の居城として造られ戦国末期には佐竹氏との激しい攻防の末、滅ぼされている。

第三章 調査の方法と基本層序

第1節 調査の方法

塙谷遺跡の発掘調査は、県営畠地帯総合整備事業に伴うに伴う埋蔵文化財発掘調査として行われた。畠地帯整備事業にかかる塙谷遺跡の範囲は、事前に試掘調査によって範囲が絞られ、A・B1・B2・B3区の各名称が使用されている。

調査範囲は、調査区の内側から外に向かって住居跡などの遺構が連続して延びる場合調査区の拡張をした。A区では、調査区外に長く延びると見られる溝と道路については、調査区内のみ調査を実施した。B1区とB3区については、調査区の外側で確認された遺構の中で、県営畠地帯総合整備事業による切り土の実施されない部分については、保存区域として調査から除いた。B2区は、当初予定していた調査区の北側で、IH石器のユニット、竪穴住居跡2軒、ピット群が確認され、ここが切り土される地区に当たるため調査区を拡張して調査を行った。その際、竪穴住居跡については、笠間市教育委員会が調査を実施し、本報告の中に含めた。

塙谷遺跡の平面測量は世界測地系第IX系上の公共座標に基づいて行なった。公共座標上で、各調査区の全体を含む範囲の北西角のX軸、Y軸の交点を起点として、南方向と東方向に20mおきにグリッドラインを設定し、交差したマス目に各区の全体図にあるようにA1、K7等のようにグリッド名をふり遺構の位置を示した。

調査は表土掘削、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、写真撮影、測量の手順で行った。

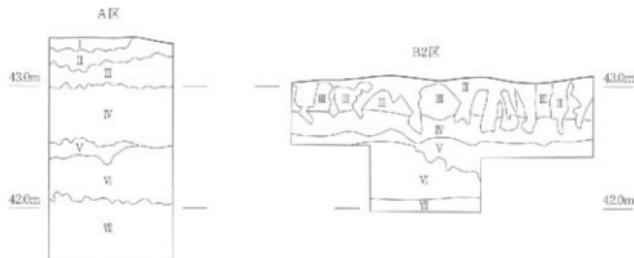
遺構の記録は $1/20$ 縮尺を基本として平面・断面図を作成し、遺構・遺物の規模や性格により、 $1/10$ 、 $1/20$ 、 $1/40$ 縮尺を使用した。遺跡全測図は $1/200$ で作成した。

写真撮影は、白黒35mm判、リバーサル35mm判、デジタルカメラを使用し、調査の各段階に隨時行った。

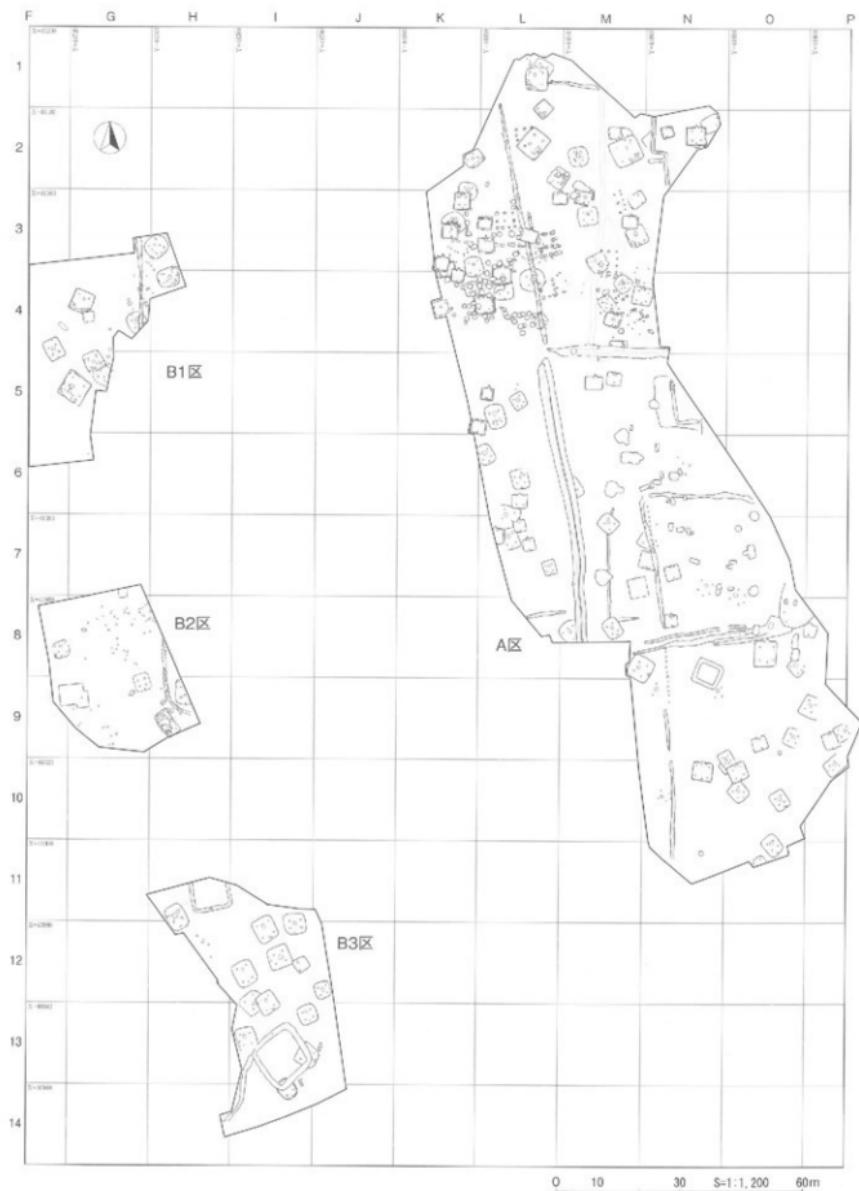
第2節 基本層序

基本層序はA区およびB2区において観察した。A区は調査区中央部に位置する4号地下式坑の主室西面(M6グリッド)、B2区は調査区南西部の試掘坑(F9グリッド)で記録している。

層序はIからVI層まで認められた。I層はにぶい黄褐色を呈するソフトローム層で、径2mmほどの浅黄色粒や微細な白灰色粒を少量含む。B2区の観察地点では削平されていたが、2mほど東側に位置する旧石器時代の調査地点で見ることができた(第238図)。II層はハードロームへの漸移層であり、I層に比べて色調が暗い。B2区では層位の高低差が一定していなかった。III～V層は黄褐色ないしにぶい黄褐色を呈するハードローム層で、III層はIV・V層に比べて色調が明るい。IV・V層には赤城-鹿沼テフラ(Ag-KP: 31,000～32,000年前)が混入する。とくにV層で多量に包含されており、一部に窪み状の層位が見受けられた。VI層は赤城-鹿沼テフラの一次堆積層に相当し、複数のフォールユニットが認められる。VI層は粘性のある暗褐色土で、混入物が非常に少ない。



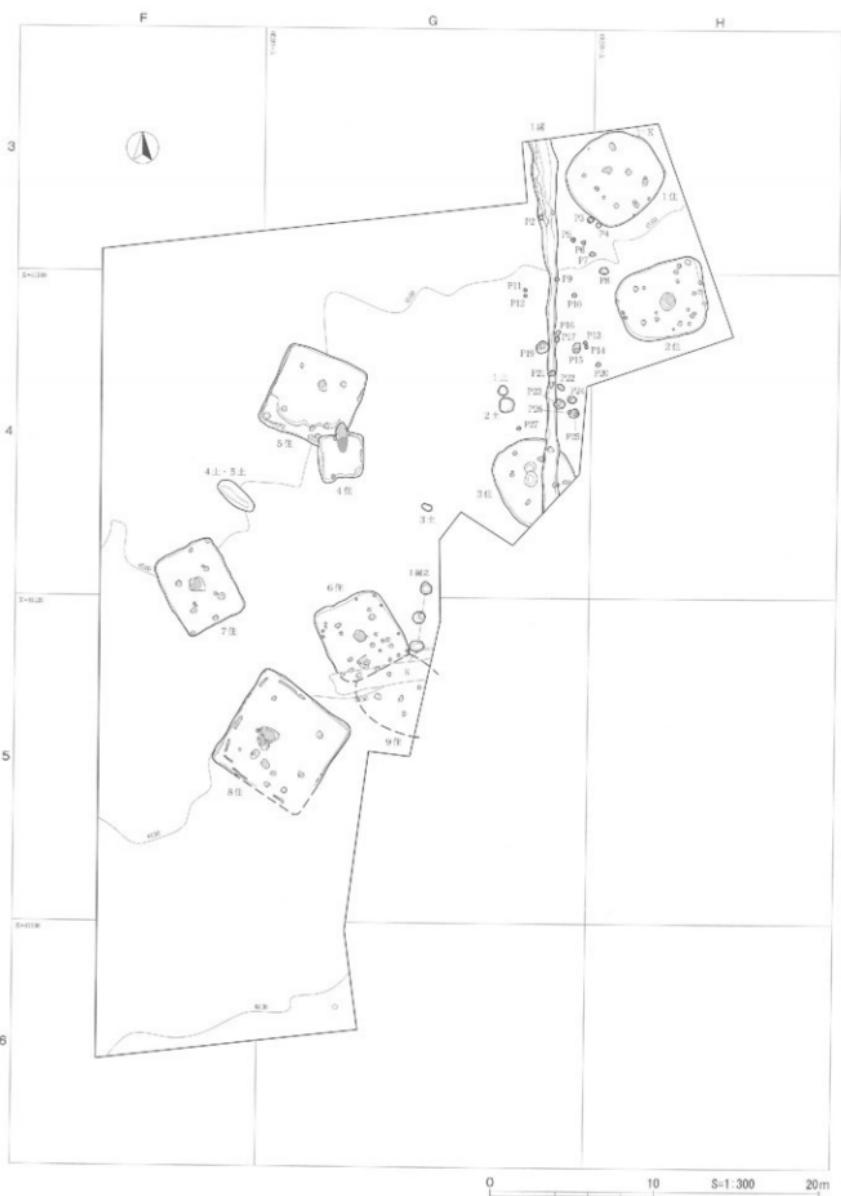
第3図 基本土層図 (1:40)



第4図 遺跡全体図



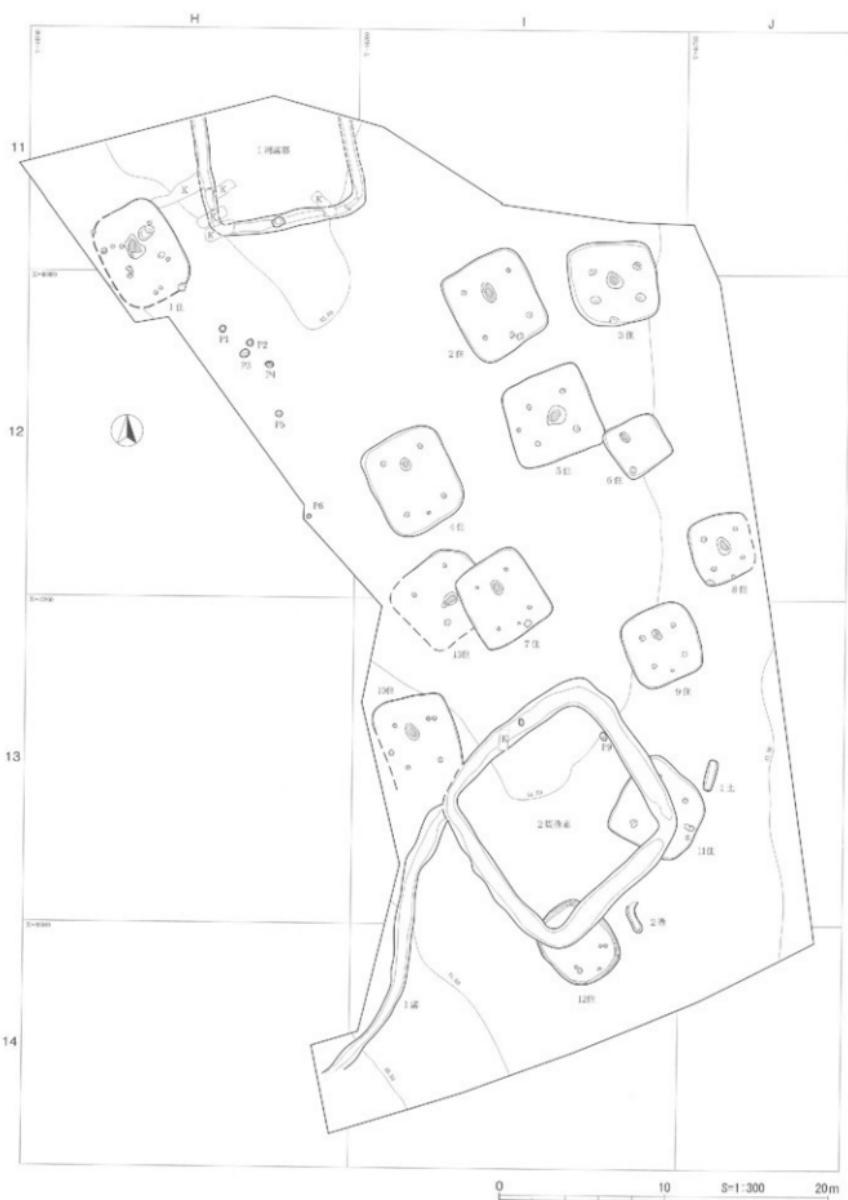
第5図 A区遺構全体図



第6図 B1区遺構全体図



第7図 B2区遺構全体図



第8図 B 3区遺構全体図

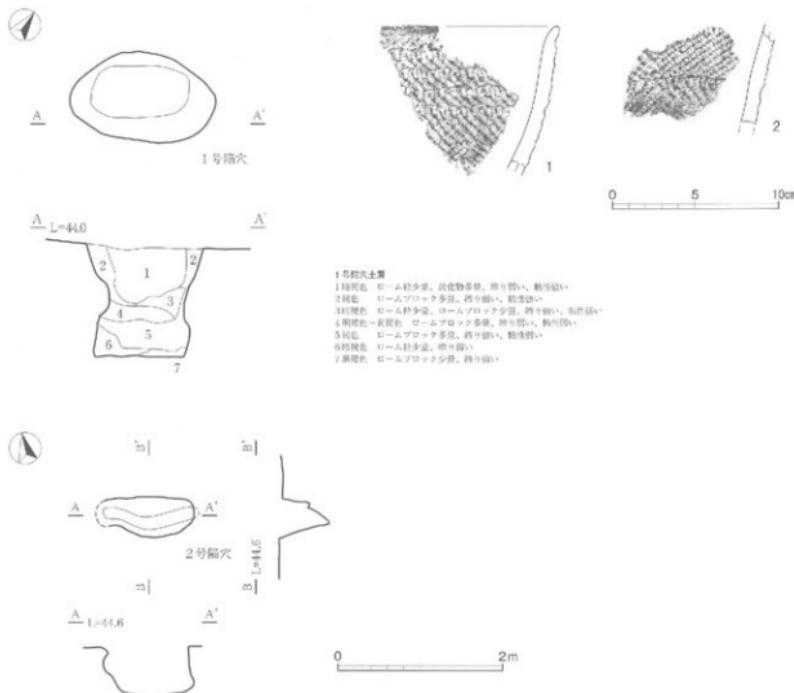
第Ⅳ章 A区の遺構と遺物

第1節 繩文時代

1 陥穴

1号陥穴（第9図）

位置 A区北部、M4グリッドに位置する。 平面形・規模 長軸1.65m×短軸1.08m、深さ1.4m。平面は長椭円形を呈し、底面は不整隅丸長方形に近い。横断面形はわずかに袋状を呈する。 主軸方位 N-57°-E 覆土 暗褐色土や褐色土がレンズ状に自然堆積する。 遺物 覆土上層から、同一個体の縄文土器片が4点出土し、そのうち3点が接合した（1・2）。縄文前期中葉関山II式に比定される。なお、著しい被然痕を有する安山岩の破損块が1点検出されている。 所見 典型的な陥穴の形状である。関山II式の土器しか認められないが、覆土上層で出土しているため、構築時期は前期中葉以前と幅をもたせておきたい。



第9図 1・2号陥穴・出土遺物

2号窓穴（第9図）

位置 A区北部、L 3 グリッドに位置する。平面形・規模 長軸推定 1.33 m × 短軸 0.50 m、深さ 0.6 m。平面は不整長楕円形を呈し、47号住居跡に西端を破壊される。主軸方位 N - 74° - W 覆土 中央部は暗褐色土、壁際はローム質の褐色土が堆積する。遺物 — 所見 規模は小さいが、いわゆる溝型窓穴である。構築時期は繩文時代早・前期と推測する。

表1 1号窓穴出土遺物観察表

団版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	出土	焼成	魚鱗	備考
1	繩文土器 深鉢	— — —	口縁～崩壊片、開窓窓付車輪縞文(RL-0423a)を焼付施文。口縁部には茎葉縞を重張に配す。内面は横穴のミズキ。	破損	不良	外：褐・暗褐色 内：にぶい黄褐色	関山Ⅱ式
2	繩文土器 深鉢	— — —	底部片、開窓窓付車輪縞文(RL-1R.0423a)を焼付施文。内面は範依の丁字なナメ。	破損	不良	外：橙色 内：にぶい黄褐色	関山Ⅱ式

2 遺構外出土遺物

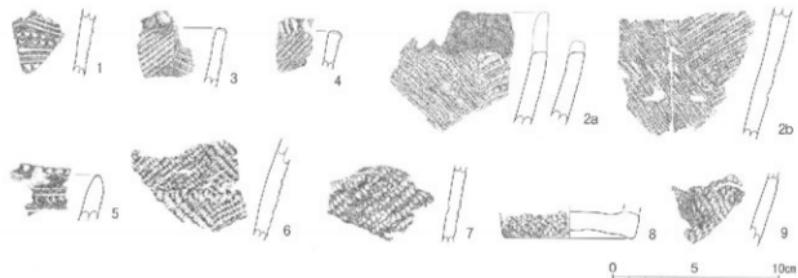
繩文土器（第10・11図）

弥生後期・古代の遺構や表土層等から36点の破片が出土した。調査区中央の未検出地点を挟んだ北側(M 2~4・N 2~4 グリッド)および南側(N 8~10・O 8~11・P 9 グリッド)に偏在する。細別は早期中葉田戸下層式(1)・前期中葉関山Ⅱ式および黒浜式(2~8)・前期後葉穂磯a式(9)・中期前半(10)・後期初頭稱名守Ⅱ式(11)・後期前葉堀之内I式(12)に比定され、前期中葉のものがほとんどを占める。

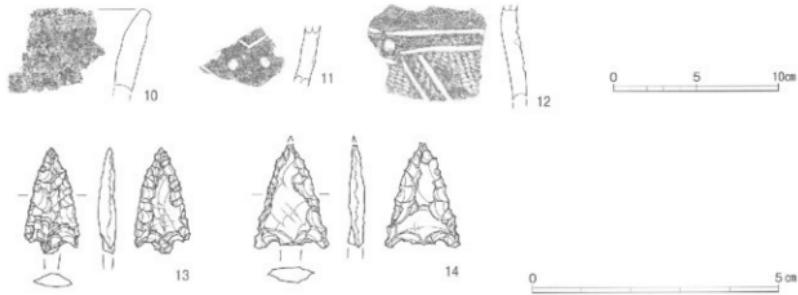
前期中葉の資料は調査区北側および南側の両者で認められ、37・38・82号住居跡に集中する。37・38号住居跡出土の遺物は、近在する1号窓穴のものとの関係も踏まえて検証する必要がある。一方、他の時期の資料は調査区南側のみに分布する。検出点数が少ないとから有意な傾向は把握しづらいが、丘陵先端部を主体とした活動が予想される。

石器（第11図）

古代の遺構から2点の石鏃が出土した(13・14)。いずれも凹基有茎で、繩文晩期に多い形態を呈する。本調査区において該期の痕跡は希薄であることから、遺構や土器を伴わない活動ないし弥生後期に帰属する可能性等を考慮する必要があろう。



第10図 A区遺構外出土遺物①



第11図 A区遺構外出土遺物②

表2 A区遺構外出土遺物観察表

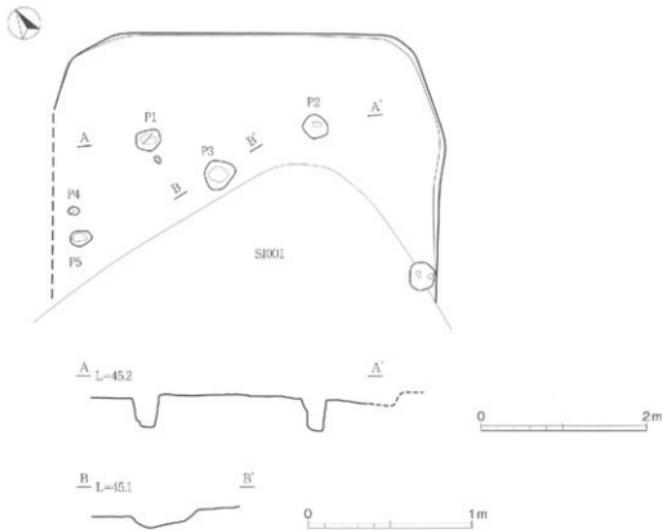
回収番号	種別 器種	口径 器底 底盤 底盤 底盤 底盤 底盤 底盤 底盤 底盤 底盤 底盤 底盤 底盤 底盤 底盤 底盤 底盤	特 徴	胎土	造成	色調	備考
1	縄文土器 深鉢	— — — — — — — — — — — — — — — — — —	腹部片。尖頭状工具による数箇所の穿孔焼で複位、三角形状に区画。底盤内に納留の貝邊復元紋、角状工具による剥突孔、内面はナゲ。	角陶石	不良	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	A区88号住居跡出土 田口下形式
2	縄文土器 深鉢	— — — — — — — — — — — — — — — — — —	口縁一部破片。羽加条純文(IZR、L-L、LR+R-IR)を複位。底盤・多量の白色粒	底盤・多量の白色粒	不良	外：灰青褐色・褐色 内：灰青褐色・褐色	A区1号方形周溝状住居土廻山式
3	縄文土器 深鉢	— — — — — — — — — — — — — — — — — —	口縁部分。半錐彫純文(IZR、L-L、LR+R-IR)を複位。内面は複位工具によるキザミ(を加えた突起)。内面は複位のミガキ。	底盤	不良	外：灰青褐色 内：褐色	A区82号住居跡掘り方出土 前原中型
4	縄文土器 深鉢	— — — — — — — — — — — — — — — — — —	口縁部分。半錐彫純文(IZR、L-L、LR+R-IR)を複位施文。口唇部にヘラ状工具によるキザミ(を加えた突起)。内面は複位のミガキ。	底盤	不良	外：明黃褐色 内：明黃褐色	A区82号住居跡掘り方出土 前原中型
5	縄文土器 深鉢	— — — — — — — — — — — — — — — — — —	口縁部分。半錐彫純工具による複位の平行沈線→複位に沿って貝の工具による剥突孔。口唇部に先端拵工具によるキザミ。内面はミガキ。	底盤	不良	外：褐色 内：褐色	A区86号住居跡出土 廻山式
6	縄文土器 深鉢	— — — — — — — — — — — — — — — — — —	腹部片。扇葉状單線純文(RL-LR、O段3条)を複位。底盤に沿って貝の工具による剥突孔。内面はミガキ。	底盤	不良	外：青褐色 内：灰青褐色 内：灰青褐色	A区37号住居跡上層出土 廻山式
7	縄文土器 深鉢	— — — — — — — — — — — — — — — — — —	腹部片。半錐彫純文(LR)を複位施文。内面はナゲ。	底盤	不良	外：褐色 内：暗褐色	A区6号住居跡出土 廻山式
8	縄文土器 深鉢	— 78	底盤片。瓶縁純文を施文。内面は指痕板。表面はナゲ。	底盤・多量の赤褐色	不良	外：明赤褐色 内：褐色	A区38号住居跡出土 廻山式
9	縄文土器 深鉢	— — — — — — — — — — — — — — — — — —	剥切片。底盤を伴う單線純文(RL)を複位施文。内面は横・海扇形骨刺・複位のナゲ。	海扇形骨刺	良好	外：灰褐色 内：明赤褐色	A区95号住居跡出土 廻山式
10	縄文土器 深鉢	— — — — — — — — — — — — — — — — — —	口縁部分。複位のナゲ。口唇下に横彫痕。内面はナゲ。	多量の石英・漂母	良好	外：漂母褐色 内：褐色	A区84号住居跡出土 中期廻山
11	縄文土器 深鉢	— — — — — — — — — — — — — — — — — —	剥切片。尖頭状工具による平行化粧→底盤間にヘラ状工具による剥突孔。内面は複位のナゲ。	多量の白色砂	良好	外：褐・黑色 内：褐・黑色	A区92号住居跡出土 名古山式
12	縄文土器 深鉢	— — — — — — — — — — — — — — — — — —	腹部・底盤。体部に纵彫純文(RL)を複・斜化施文→剥切・剥突孔を丸彫状工具による平行化粧で複位施文→平行沈線上に窓文。体部に新位等の側面沈線。内面は複位のミガキ。	多量の砂・角陶石	良好	外：褐色 内：褐色	A区36号住居跡之内式
13	石器 石器	— — — — — — — — — — — — — — — — — —	圓盤有茎。基部先端が欠損。石材：チャート。残存長215cm・幅11cm・厚さ35cm・重さ97g。	—	—	—	A区7号土壤
14	石器 石器	— — — — — — — — — — — — — — — — — —	圓盤有茎。先端部・基部が欠損。小孔痕片の縦辺に剥離加工。石材：チャート。残存長215cm・幅15cm・厚さ0.035cm・重さ69g。	—	—	—	A区19号住居跡出土

第2節 弥生時代

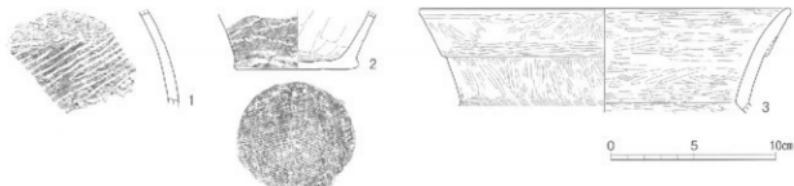
1 堅穴住居跡

2号住居跡（第12・13図）

位置 A区北端、L1グリッドに位置する。規模と平面形 南北方向は不明ながら、東西方向は約4.7mと推測する。平面は隅丸方形か。南西側は1号住居跡に、西側は擾乱によって壊され、3号住居跡とも重複する。主軸方位 N-57°-W 壁 壁高は北東辺で5~7cmを測り、垂直気味に立ち上がる。床 全体に平坦で、硬化面は認められない。ピット5箇所ある。P1・P2が主柱穴、P4・5は壁柱穴と推測される。炉 P3が炉の可能性がある。覆土 褐色土主体で、自然堆積状。遺物 覆土中から少量の弥生土器片が出土している。所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。3号住居跡との新旧関係は、擾乱のため不明である。A区において、弥生時代の住居跡同士が重複する例は、本例を含め2例（61住と64住）ある。



第12図 2号住居跡



第13図 2号住居跡出土遺物

表3 2号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	側部輪郭不明の附加条縄文（r・S）→頸項部7本筋の 斜状区画状文→底部横状波文（下→上）。	金雲母	普通	にぶい青褐色	斜部外面スヌ付 裏、内面あばた 状剥離
2	弥生土器 壺	7.5	腹部ナメ→輪郭不明の附加条縄文（L・S）。底部毎1筋、内 面は斜状のナメ。外面まばらにスヌ付着。	石英、白色粒	普通	にぶい黄褐色	斜部外面にスヌ 付着
3	土器器 壺	(22.6) -	L1底部内外面ヘラミガキ、底部内外面ハケメ後にヘラミガ キ。	角閃石、骨粉	良好	にぶい青褐色	口縁部内外面あ ばた状剥離

3号住居跡（第14・15図）

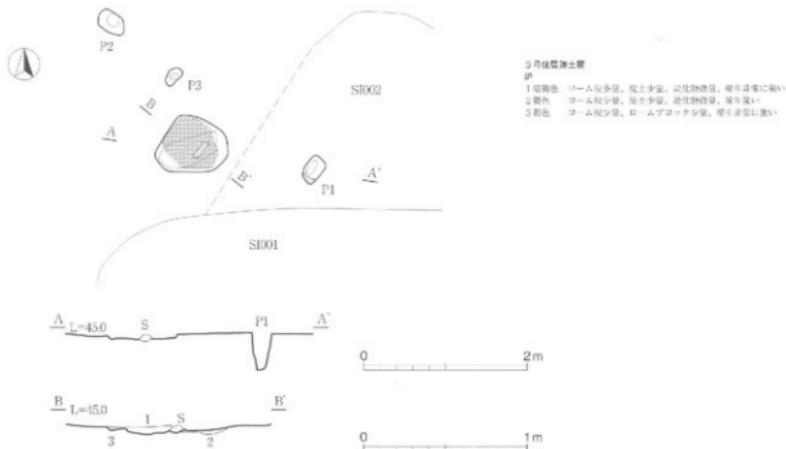
位置 A区北端、L1 グリッドに位置する。 規模と平面形 撥乱や重複によって不明である。南西半分は 1号住居跡に、西側は撥乱によって壊されている。また、3号住居跡と重複する。 主軸方位 N-2° - W 壁 - 床 - ピット 3箇所ある。P 1・2が主柱穴と推測される。 炉 平面不整円形で、浅い皿状を呈する。中央に不整形な砂岩製の炉石が設置されている。 覆土 - 遺物 床面から弥生土器片が僅かに出土している。 所見 2号住居跡との新旧関係は不明である。住居跡の時期は、弥生時代後期後半と推定される。



第14図 3号住居跡出土遺物

表4 3号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	底部押捺痕4条→口縁部4本筋の横波状文（下→上）。 底部純全直文→底拉或状文（下→上）。	金雲母、骨粉	普通	にぶい褐色	



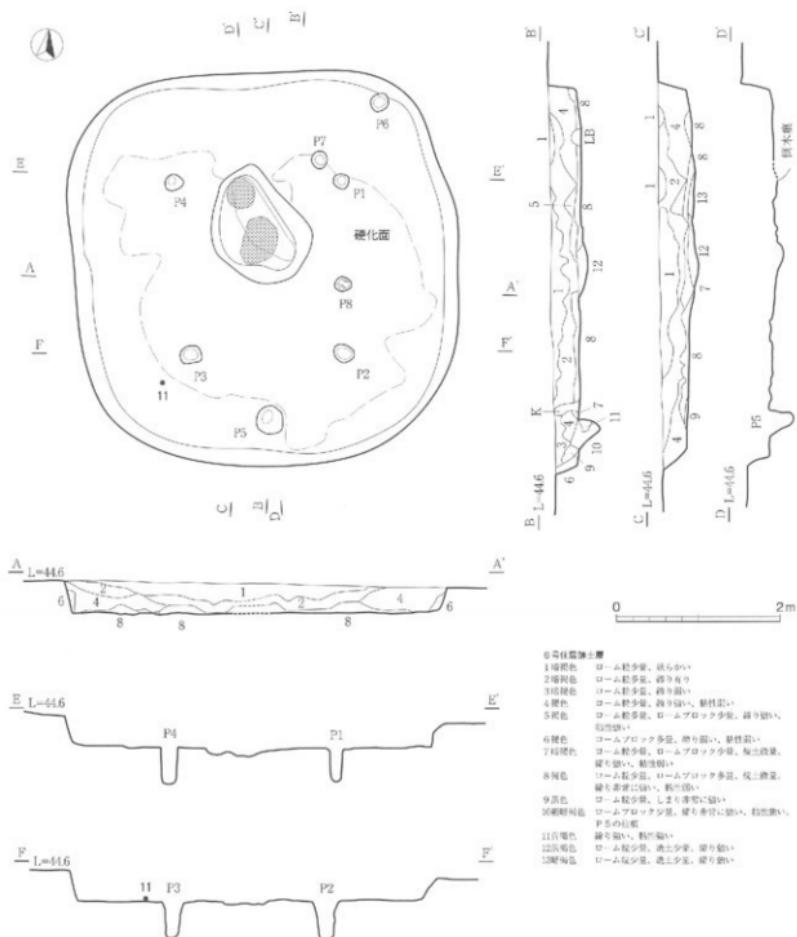
第15図 3号住居跡

6号住居跡（第16・17図）

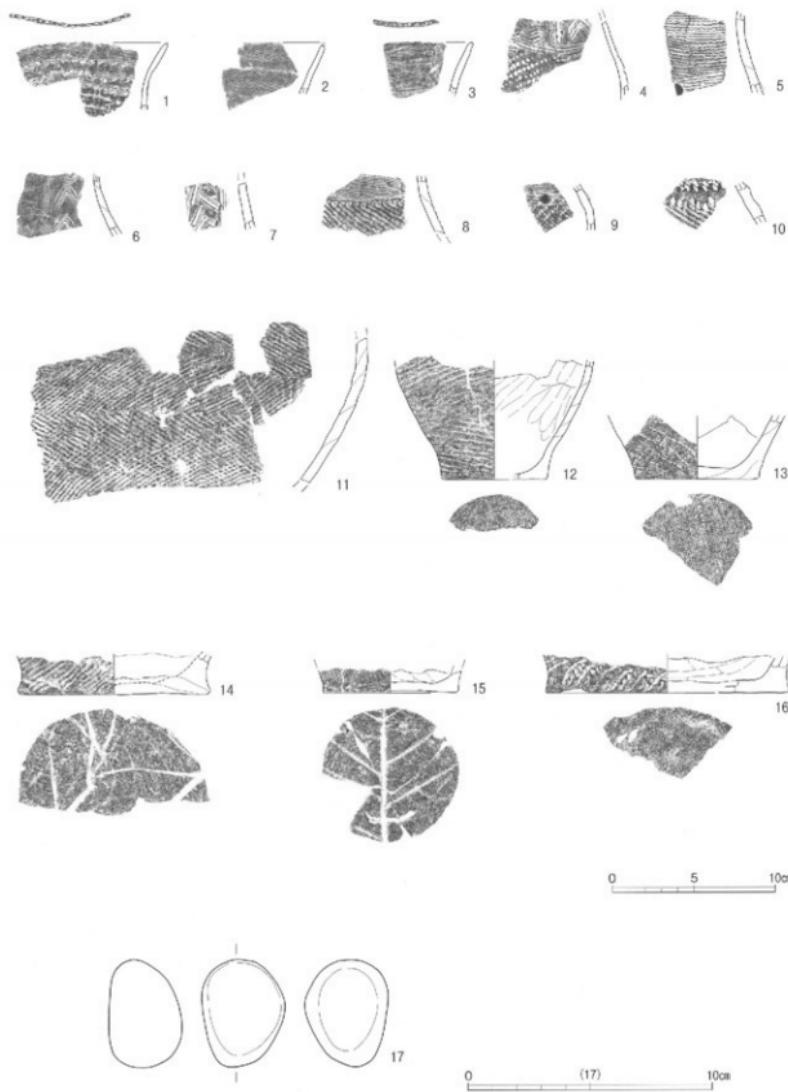
位置 A区北端、M2グリッドに位置する。規模と平面形 南北の主軸方向 4.85 m、東西方向 4.7 mを測り、不整隅丸方形を呈する。床面には時期不明の複数のピットが不規則にある。竪穴の北壁側は風倒木痕を破壊して構築している。主軸方位 N-11°-W 壁 壁高は38cmを測り、垂直に近い。床 炉の北側と壁際以外の中央部が硬化する。ピット 6箇所ある。P1~4が主柱穴、P5が出入り口ピット、P6が聚粧穴と考えられる。P7~8は浅く、補助的柱穴であろうか。P1・4・5・6で明晰な柱痕が観察された。炉 平面不整梢円形で、浅皿状を呈する。顕著な被熱部が2箇所認められた。覆土 覆土には褐色土、竪穴中央最上層には暗褐色土が堆積し、自然埋没と考えられる。床面直上の黒色土9層は非常に強くしまり、敷物等の存在、もしくは埋没初期過程での踏みしめ行為などを暗示させる。遺物 覆土中から弥生土器片が出土している。遺物の出土量はやや多く、小破片が多い。十王台式土器主体で、10・11・14など二軒屋式系の上器も目立っている。所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。

表5 6号住居跡出土遺物観察表

団体番号	種別	口径 基高 底径	特徴	土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 甌	-	口唇部ハラキザミ。口縁部3本歯の横位波次文(時計回り)、聚粧系痕のある薄い杯盤模様3条。内面は横位のナズ。	石英、長石、角閃石	普通	外: にぶい褐色 内: 淡褐色	十王台式
		-					
		-					
2	弥生土器 甌	-	口唇部ハラキザミ。口縁部5本歯の横位波次文。内面は	石英、長石	良好	にぶい黄褐色	十王台式
		-	横位のナズ。				
3	弥生土器 甌	-	L1唇部ハラキザミ。頭縁は8本歯の縱位直側文→横位波次文(下→上)。内面は横位のナズ。	石英、長石、金雲母	普通	外: にぶい黄褐色 内: 灰褐色	十王台式
		-					



第16図 6号住居跡



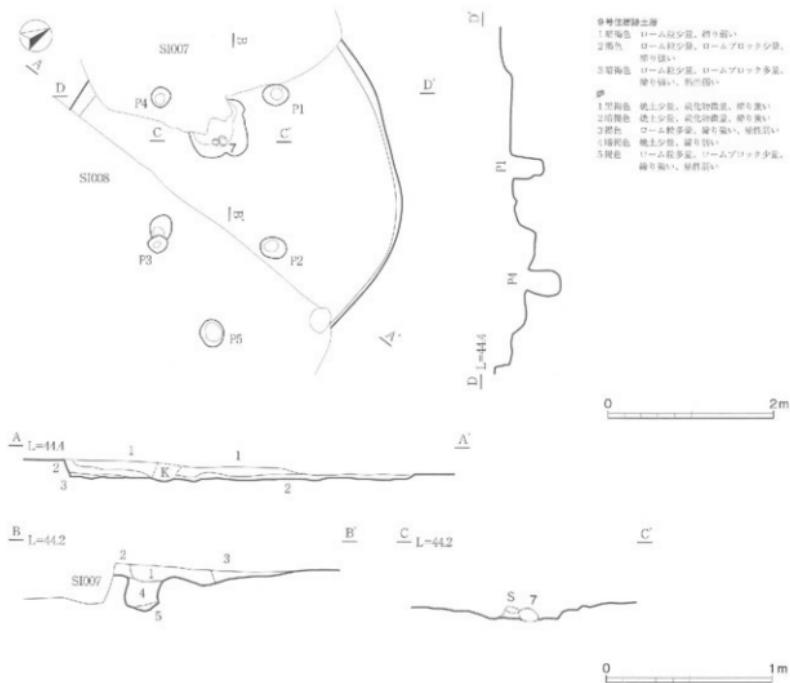
第17図 6号住居跡出土遺物

回収番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器 壺	-	底部破損不明の附加条縄文（R・S・L・Z）→腹部4本筋の腹波直縄文（反時計回り）→横波直縄文→腹波直縄文・側面波状文。内面は擦・刮削のナメ。	石英、長石、角閃石	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい橙色	十王台式
5	弥生土器 壺	-	頸部も本筋の腹波状波文（下→上）→円形貼付文。内面はナメ。	石英、長石、角閃石、赤鉄鉱	普通	にぶい黄褐色	十王台式
6	弥生土器 壺	-	頸部4本筋の腹波直縄文→波状文。内面は波・斜波のナメ。	石英、長石	普通	にぶい黄褐色	十王台式
7	弥生土器 壺	-	頸部4本筋の腹波直縄文→腹波斜波文（↓→下）。内面は石英、長石	良好	外：にぶい黄褐色 内：明赤褐色	十三台式	
8	弥生土器 壺	-	腹波無地縄文（L）→頸部6本筋の波状文（下→上）。内凹は擦・斜波のナメ。	石英、長石、赤鉄 石	良好	外：褐色 内：墨褐色	
9	弥生土器 壺	-	頸部破損不明の附加条縄文（R・S・L・Z）→腹部 石英、白色粘土 4本筋の腹波直縄文→腹波直縄文→円形貼付文。内面は擦のナメ。外側にスス付着。	普通	普通	にぶい黄褐色	十王台式
10	弥生土器 壺	-	頸部破損不明の附加条縄文（R・Z）→腹部 石英、多量の白色粘土 による焦青帯。腹部は頸部と肩縁なる縫文原体を施波直縄文。柱、赤色粘土 内面は擦。	石英、多量の白色粘土	普通	外：にぶい黄褐色、 内：にぶい墨褐色	
11	弥生土器 壺	-	腹波無地縄文の附加条縄文（R・S・L・Z：上→下）。内面はナメ。刮削なし。	多量の石英、長石	不良	外：灰黃褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
12	弥生土器 壺	(64)	頸部破損不明の附加条縄文（R・S・L・Z：上→下、 反時計回り）。底部赤鉄。内面は堅・斜波のナメ。外側 スス・内面ヨコリ・付着。	石英、長石	良好	淡黄褐色	深黄色上 十王台式
13	弥生土器 壺	(74)	頸部附加条2種縄文（L R）。底部布目質。内面は十 字。外側スス付着。	石英、角閃石	良好	外：にぶい黄褐色 内：橙色	十王台式
14	弥生土器 壺	(118)	制器は加条矢1種縄文（L R + 2 R）。底部木質。内面 は割れのため不明。	多量の石英、長石	普通	外：灰黃褐色 内：褐色	二割戸式
15	弥生土器 壺	(83)	底部附加条1種縄文（L R + r）→底部下端擦区のナメ。 火照小縄文。内面は斜波のナメ。	石英、赤色粘土	普通	にぶい黄褐色	
16	弥生土器 壺	(150)	底部無地縄文の附加条縄文（L・S）。底部砂質、堅い微々 石。内面は擦・斜波のナメ。	石英、長石、角閃石、 石、金剛石、骨針	良好	にぶい黄褐色	十王台式
17	石器 磨石		小型圓の芯、黒圓全体に財葉裏。表面は平滑。 石材：長英、長さ44cm、幅34cm、厚さ30cm、重さ59.2kg。				

9号住居跡（第18・19図）

位置 A区北端、M 2グリッドに位置する。規模と平面形 南北方向約40m、東西の主軸方向約4.4mの不整円形状と推測される。7号住居跡・8号住居跡に塙され、全体の約1/3を失っている。主軸方位 N-58°-W 壁 粘高は13cmを測り、垂直に近い。床 やや凸凹があり、硬化面は認められない。ピット 5箇所ある。P 1~4が主柱穴、P 5が出入り口ピットと考えられる。P 3・5は8号住居跡掘り方面で、P 4は7号住居跡床面で確認した。炉7号住居跡のカマドによって一部壊されている。平面形は不整隅丸方形と推測され、浅い皿状を呈する。7の磨石と小円錐が並んで置かれていた。覆土 褐色土を主体とし、最上層には暗褐色土が堆積する。遺物 覆土中から少量の弥生土器片が出土している。3~5は頸部と胴部の区画が直線文で、十王台式土器でも前半期の様相を呈している。所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。

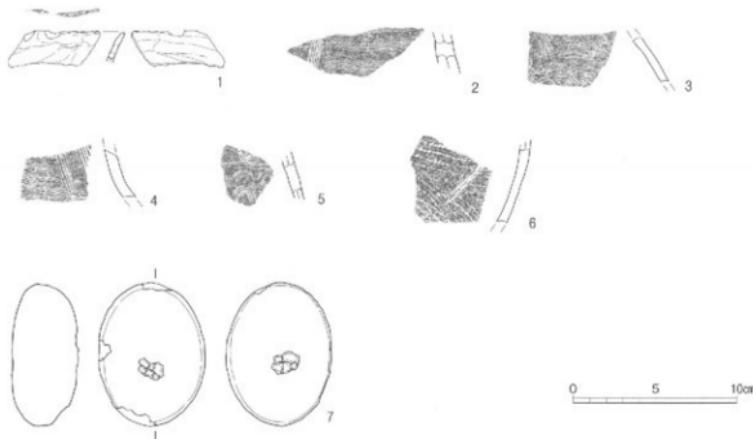
第2節 幼生時代



第18図 9号住居跡

表6 9号住居跡出土遺物観察表

回収 品番 号	種 類	器 種	口縁 器高 底径	特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
1	泥生土器 甕	-	-	口唇部ハラキザミ。内・外面とも斜・横底のナデ。	石英	普通	黒褐色	十王台式
2	泥生土器 甕	-	-	頸部本体は傾直直縁文→傾位波状文。内面はナデ。	石英、長石、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十王台式
3	泥生土器 甕	-	-	頸部輪廓不明の波加条縁文(L-Z)→窓形本体の横直縁文→上開き波状文・傾位波状文。内面は傾位のナデ。	石英、長石、骨針	良好	明黄色	十王台式
4	泥生土器 甕	-	-	頸部4本底の傾位波状文→窓位直縁文・横底波状文。内面は波・横底のナデ。外面にスズ付着。	石英、長石、角閃石、赤色粒	不良	灰褐色	十王台式
5	泥生土器 甕	-	-	頸部は4本底の傾位波状文→窓位直縁文。内面はナデ。	石英、長石、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十王台式
6	泥生土器 甕	-	-	頸部輪廓不明の波加条縁文(R-S、L-Z:下→上)。内面は傾位のナデ。内面に帯状のヨゴレ付着。	石英、長石、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十王台式
7	石器 磨光石	-	-	穿→凹。後円形の縁を丸くし表・裏面全体に磨光板。表・裏面の中央に敲打痕。表面は敲熱により変色。石材: 石英安山岩。長さ87.5cm・幅6.4cm・厚さ4.1cm・重さ332.46g。			砂岩	



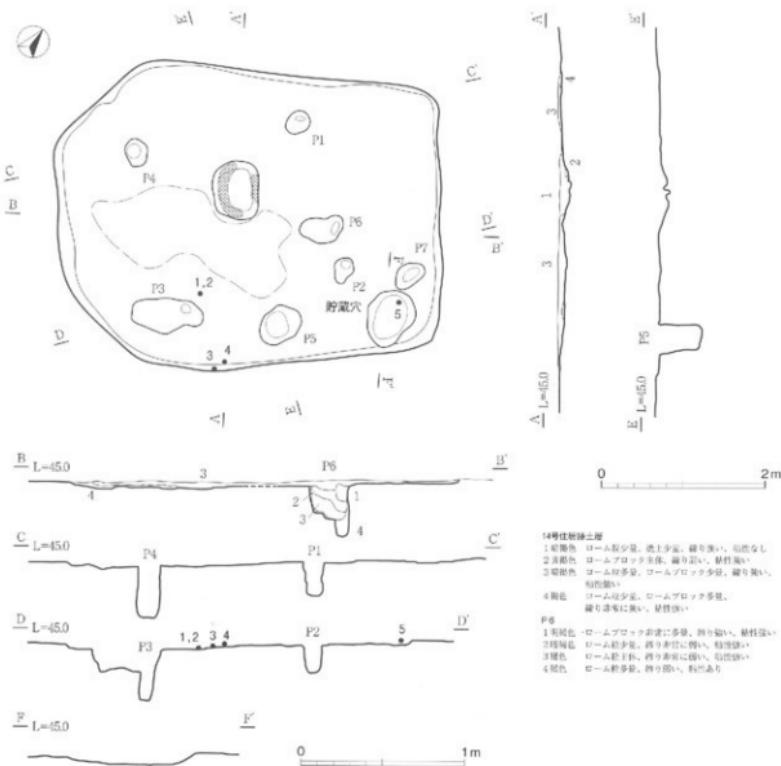
第19図 9号住居跡出土遺物

14号住居跡（第20・21図）

位置 A区北端西側、K2 グリッドに位置する。規模と平面形 南北方向 3.72 m、東西方向 4.63 m の不整隅九方形を呈する。東壁の位置と平面形に違和感があるが、覆土の堆積状況などからこの形状と判断した。北壁は調査区外の搅乱によって破壊されている。主軸方位 N - 50° - W 壁 壁高は 3 cm を測る。床 炉の南側が帶状に硬化する。全体にやや凹凸がある。ピット 7箇所ある。P 1～4 が主柱穴、P 5 が出入口ピットと考えられ、P 6・7 は性格不明である。P 3 は搅乱によって破壊を受けている。P 1・2 は黒褐色土の柱痕を、P 4・5 ではロームブロックを多量に含む軟弱な柱材抜取痕を断面で観察した。また、南東隅には不整梢円形の浅い土坑があり、貯蔵穴と考えられる。炉 平面形は不整隅丸方形で、浅い皿状を呈する。覆土 褐色土を主体とした自然堆積層である。遺物 P 3脇の覆土中からほぼ完形の弥生土器（1）が出土している。所見 住居跡の廃絶および構築時期は、弥生時代後期後半と考えられる。

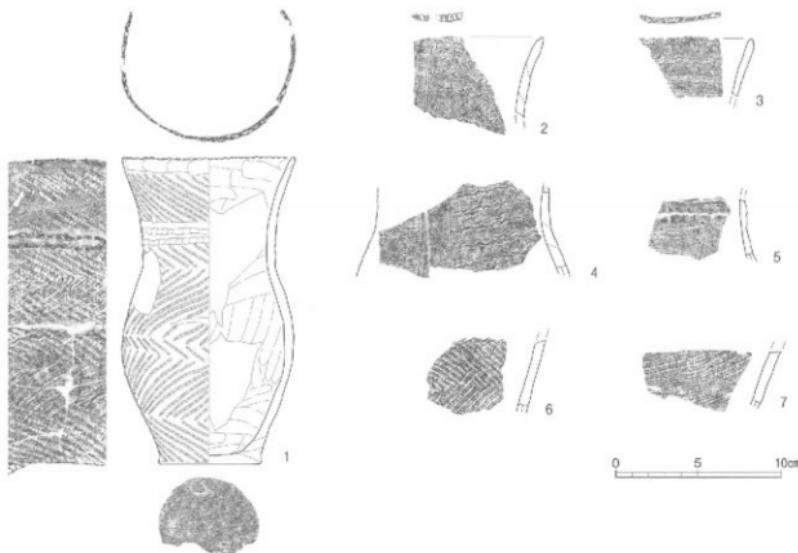
表7 14号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色面	備考
1	弥生土器 壺	10.9 18.9 6.1	口唇部ハラキザミ。口縁部株間不明の附加条陶文（L - Z）→横紋のナメ。底～底部株間不明の附加条陶文（L - Z → R - S の織に施文）。底部を直線。内面底、斜底のナメ。	石英、長石、角閃石	普通	外：にぶい褐色 内：褐灰色	覆土下層 土台式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部の内側にハラキザミ。口縁部は5本筋の複位窓陶文→横板条状文（ナード）。内面の口唇部有蓋は横位の丁寧なナメ。他は複位の丁寧なナメ。外側にスヌ付着。	石英、角閃石	良好	にぶい黄褐色	覆土下層 土台式



第20図 14号住居跡

図版番号	種別	器皿類	口袋器類底性	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	弥生土器	-	-	口唇部ヘラギ型。口縁部5本唐の輪位状況。内面は縦・斜位のナデ。外側にスス付着	石英、多量の金雲母	普通	外：に赤い黄褐色 内：に赤い黄色	床面直上 十手台式
4	弥生土器	-	-	頭部5本唐の輪位直線文→輪位状況(時計回り)。内面は斜位のナデ。外側にスス付着	石英、角閃石、金雲母	普通	外：浅黃褐色 内：に赤い黄色	床面直上 十手台式
5	弥生土器	-	-	頭部2条の輪位斜等→5本唐の輪位直線文(上→下)→輪位状況(下→上)。内面は斜位のナデ。外側にスス付着。4と同一器体。	石英、角閃石、金雲母	普通	浅黃褐色	床面直上 十手台式
6	弥生土器	-	-	頭部輪位不明の冠加奈縞文(R-S, L-Z)。内面は器面丸みが美しい。	多量の石英、長石 多量、赤色粘土	普通	に赤い黄褐色	床面直上 二重式
7	弥生土器	-	-	頭部輪位不明の附加奈縞文(R-S)。内面は器面荒れが著しい。	石英、長石	良好	浅黃褐色	床面直上 十手台式



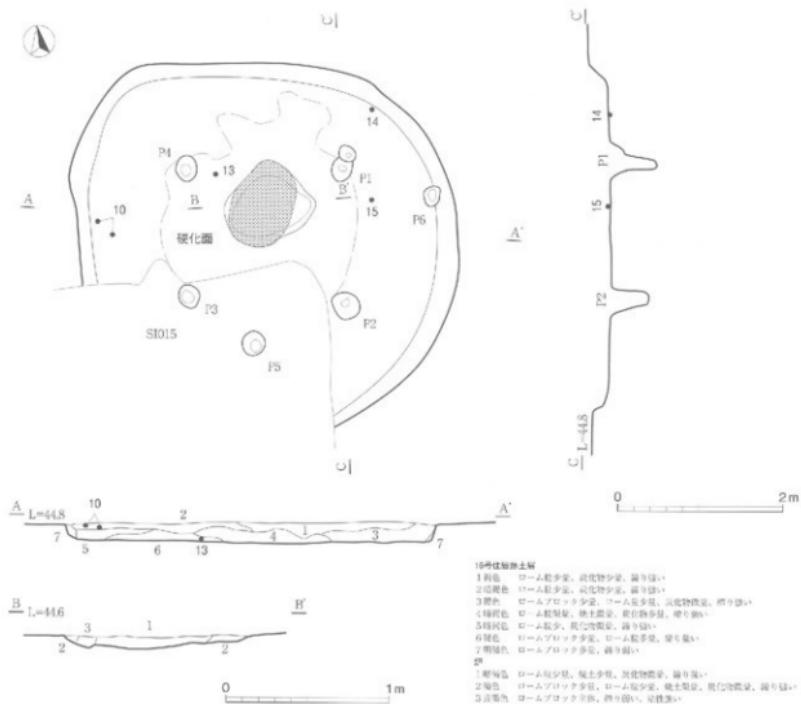
第21図 14号住居跡出土遺物

16号住居跡（第22・23図）

位置 A区北西部、K2～K3グリッドに位置する。規模と平面形 南北方向4.56m、東西方向4.70mの不整隅丸方形を呈する。竪穴の南西隅を、古墳時代後期の15号住居跡によって壊されている。主軸方位N-8°-E 繫 壁高は20cmを測る。床 平坦で、中央部が硬化する。ビット 6箇所ある。P1～4が主柱穴、P5が出入りビットと考えられ、P6は壁柱穴であろうか。P3・5は15号住居跡掘り方面で確認した。P1～3は暗～黒褐色土の軟弱な柱痕と褐色土の根固め層が上層断面で観察できた。炉 平面不整形で、浅い皿状を呈する。火床面の被熱は強い。覆土 下層は褐色土、上層は暗褐色土を主体とする自然堆積と思われる。遺物 出土した弥生土器の遺物量は比較的多いが、小片主体で時期にまとまりがない。15は紡錘車で、表面・側面に描写直線文・波状文が施される。所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。

表8 16号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口径 底面 選択	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	— — —	口縁部ヘラキザミ、小突起。底部薄い押捺縁帯→口縁部4本筋の稍位波状文(上→下)。底部模位波状文。内面はU縁。底部模様のナギ、以下は複数のナギ。	石英	普通	外：黒褐色 内：灰青褐色	床面直上 十王台式
2	弥生土器 壺	— — —	口縁部ヘラキザミ。口縁部4本筋の稍位波状文(上→下)。内面は模様のナギ。	石英	良好	外：に赤い黄褐色 内：に赤い褐色	十王台式



第22図 16号住居跡

回数 番号	種別 器種	口径 器種 直径	特 記	粘土	塊成	色調	備考
3	弥生土器 壺	-	口唇部ヘラキザミ、小突起。口縁部は灰文(後・斜紋のナデ)。内面は焼紋のナデ。	石英、長石	普通	外:にぶい黄褐色 内:灰青褐色	十手台式
4	弥生土器 壺	-	有段口縁。口唇部ヘラキザミ。口縁部は灰文(し)→下端にヘラキザミ→円錐形底紋。内面は口唇部付近焼紋のナデ。他は斜紋のナデ。外周スス付着。	石英、角閃石	普通	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	
5	弥生土器 壺	-	有段口縁。ヘラキザミ。口縁部は灰文(し)→下端にヘラキザミ→円錐形底紋。内面は口唇部付近焼紋のナデ。他は斜紋のナデ。口唇部外周に帯状スス付着。	石英	普通	外:にぶい黄褐色 内:灰青褐色	
6	弥生土器 壺	-	胎膜剥離不明の附加条紋文(し・Z)→側剖面に6本消の後空き痕文→胎膜剥離底紋。外周全面にスス付着。内面は胎膜が付いた斜紋のナデ。瓶詰が縦・斜紋のナデ。肩部附近にコヨレ村。	石英、長石、角閃石 赤玉松	良好	外:黒褐色 内:にぶい黄褐色	十手台式
7	弥生土器 壺	-	口部第4本消の胎膜底紋文。口唇部は側剖面4条消溝を形成。肩部4本消の瓶詰文(瓶詰文→側剖底紋文)。内面は丁寧な縦・斜紋のナデ。外周スス付着。	多量の石英、角閃石	普通	黒褐色	十手台式
8	弥生土器 壺	-	肩部5本消の斜紋底紋文3条+横割底紋文(下→上)。内面は縦・斜紋のナデ。外周スス付着。	多量の石英、角閃石、赤玉松	普通	にぶい黄褐色	十手台式



第23図 16号住居跡出土遺物

図版 番号	種別 器種	口径 深さ 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
9	角底土器 盤	— — —	縁部は斜面部・角形の棒状工具によるキダモ鉋形→5本側の複位直旋文→撫位波状文。内面は須空のナデ。	石英、角閃石、骨 針	普通	外：灰青褐色 内：褐灰色	十手台式
10	斜底土器 盤	— — —	側縁輪廓不明の附加条縦文（R・S・L・Z：上→下）。内面に斜位のナデ。	石英、長石	普通	にぼい黄褐色	十手台式

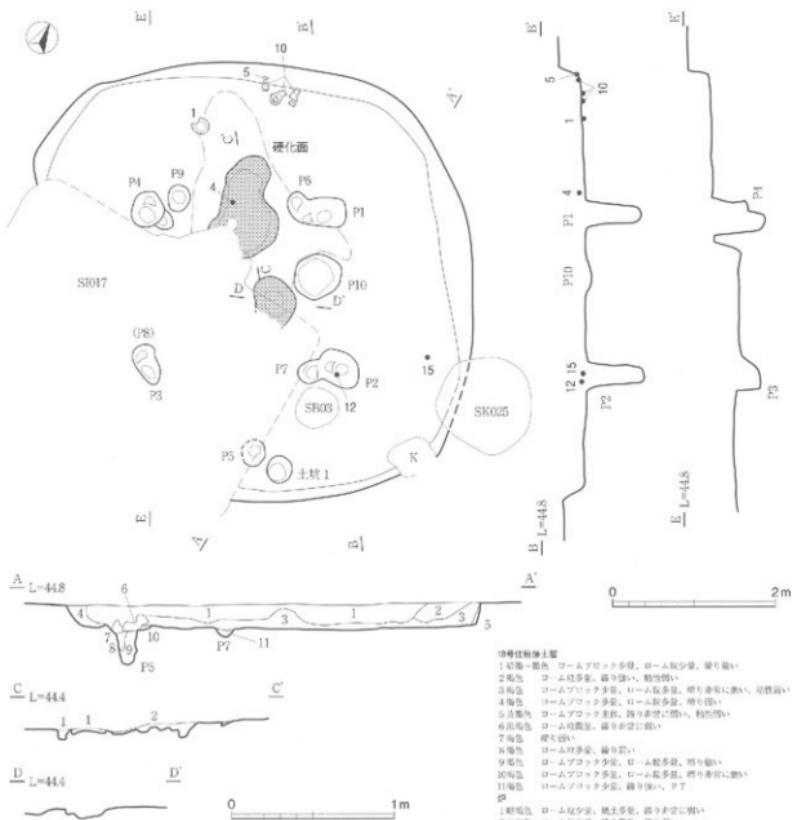
図版番号	種別器種	口径高底径	特徴	施土	焼成	色調	備考
11	弥生土器 甕	-	腹部輪廓不明の附耳条縫文（R - S, L - Z : 上→下）。石英、長石、角閃、黄鐵 内面に網状～下伏が確認のナメ。底部付近が斜面のナメ。有			に赤い黄褐色	十王台式
12	弥生土器 甕	- (36)	頸部輪廓不明の附耳条縫文（R - S）。底部直口直。内 面は施位のナメ。	石英、長石、角閃、黄鐵		に赤い褐色	十王台式
13	弥生土器 甕	- (78)	腹部輪廓加条1種縫文（L + 2L）。底部木葉柄。内面は横 多量の石英、角閃、良好 位のナメ。			外：墨褐色 内：に赤い褐色	二井屋式
14	弥生土器 甕	- (154)	腹部輪廓不明の附耳条縫文（R - S, L - Z : F→上）。石英、長石、角閃、黄鐵 底部直口。内面は施位著しく、不明。	石英、金雲母		に赤い黄褐色	十王台式
15	土製品 筋跡車		伴（4.9）、深さ8.5、丸径（0.33）、重量（10.7）g。表面直 に4本筋の横筋波状文。表面を ナメミガラ鉄板。	石英	普通	に赤い黄褐色	

18号住居跡（第24～26図）

位置 A区北西端、K 3 グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は5.42mを測り、東西方向は5.7m前後と推測する。平面はやや円形に近い不整隅丸正方形を呈する。古代の17号住居跡によつて、南北幅約1/3を失う。3号掘立柱建物跡の柱穴と25号土坑によって一部破壊される。主軸方位 N - 33° - Wで、北北西を指向する。壁 壁高は23～28cmを測り、やや傾斜する。床 全体に平坦で、炉周辺が硬化する。ピット P 1～4が新主柱穴、P 6～9が旧主柱穴、P 5は出入入口ピットと考えられる。P 1～4の底面には段差があり、それぞれ柱材端部の硬化圧痕（いわゆる、あたり）を検出した。浅い方の上面はいずれも貼床で閉塞されていた。よつて、同一地点で2回利用したものと判断できる。P 8は17号住居跡によつて消滅したものと推測した。P 6・7・9（各深度20cm・52cm・15cm）はその配置から主柱穴と判断した。主柱穴配置の変遷は、P 6・7・(8)・9 → P 1・2・3・4 → P 1・2・3・4と想定する。土坑Iは深さ21cmと浅く、貯藏穴と推定される。P10は深さ約12cmで底面に凹凸があり、用途不明である。炉 浅く掘り込まれた炉が2箇所ある。洋梨状の不整梢円形（126×84cm）を呈する方が新炉と考えられ、竪穴中央に位置する不整円形（61×49cm）の方は被熱が弱く、旧炉と考えられる。新炉も平面形、規模から推測すると、隣り合う2基の炉であった可能性が高い。覆土 下層は褐色土、上層は暗褐色土が主体で、自然堆積状を呈する。遺物 北東部の覆土下層から、ややまとまって出土した。遺物の出土量は多く、大半が十王台式後半期の土器である。所見 主柱穴と炉は2回更新し、同一竪穴を3回利用したものと推察する。主柱穴配置の拡張とともに、炉は竪穴中央から北東方向へと移設されたのであろう。竪穴自体の更新や拡張の痕跡は見いだせなかった。住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。

表9 18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径高底径	特徴	施土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 甕	- (183)	口唇部ヘラキザミ、小突起。腹部薄い押捺縫文3条→口 縫部4本筋の横筋波状文7条（上→下、反時計回り）。底 部擬似波状文→横筋波状文。内面は模、斜めのナメ。外 面全周にスズ、内面全面にヨコレ付着。	石英、金雲母	普通	黒褐色	十三台式
2	弥生土器 甕	-	口唇部ヘラキザミ。口縫部は本筋の横筋波状文（上→下、 反時計回り）。内面は1基の横筋のナメ。	石英	普通	灰褐色	十王台式
3	弥生土器 甕	-	口唇部ヘラキザミ。口縫部は3本筋の横筋波状文（下→上、 石英、赤色趁 反時計回り）。内面は1基の横筋のナメ。		普通	に赤い黄褐色	十王台式



第24図 18号住居跡



第25図 18号住居跡出土遺物①



第26図 18号住居跡出土遺物③

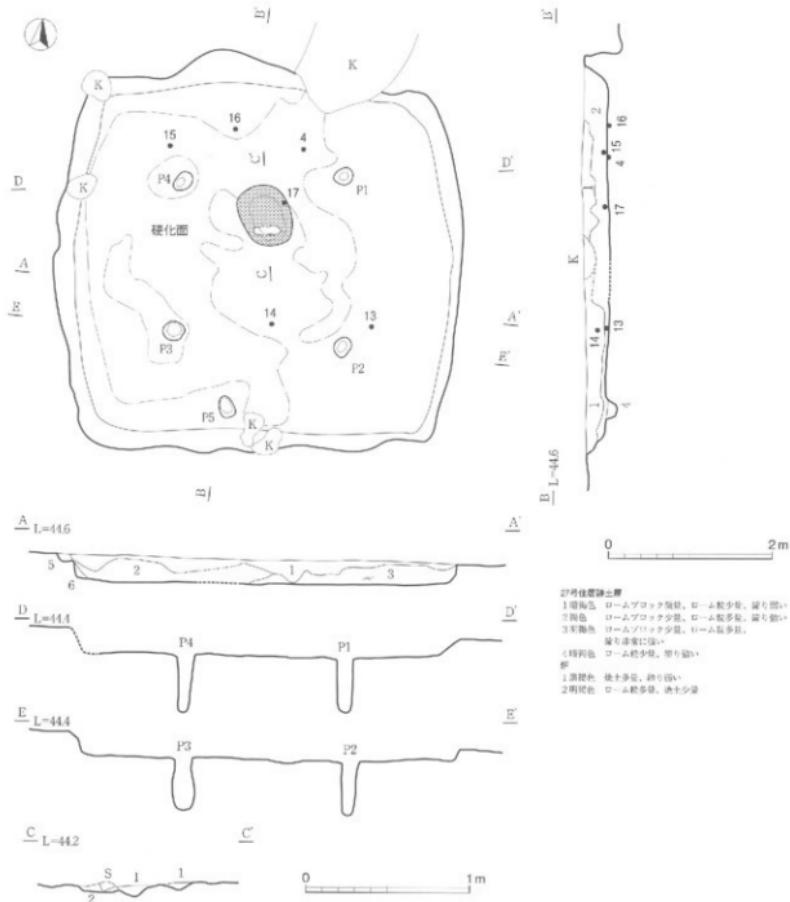
図版番号	種別 器種	口径 高さ 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器 甕	-	腹部輪加文2種類文(「Rし+2尺、LR+2尺」→輪加文5本面の段状文・横位(△)文)波状文(上→下)、反時計回り。内面は輪部が横位、底部が直位のナダ。	多量の石英・灰石、角閃石、骨灰、赤鉄	真好	外: に赤い褐色 内: 灰青褐色	SD017 カマドと 連合 上王台式
5	弥生土器 甕	-	腹部輪加不明の附加条縞文(「R - S、L - Z: 下→上」)→輪加文5本面の横位波状文→3条1単位の輪加文 波文・横位波状文(「下→上」)。内面はナダ。外底スリット有、	右英	普通	外: に赤い褐色 内: に赤い褐色	十王台式
6	弥生土器 甕	-	腹部輪加直位→腹部と本面の腹直位直文・横位波状文。内面は横位のナダ。4と羽二重作。	多量の石英・灰石、角閃石	真好	外: に赤い褐色 内: に赤い褐色	上王台式
7	弥生土器 甕	-	腹部輪加不明の附加輪加不規則な条縞文(「R - S」→右英 輪加7本面の段状の段状波文→横位波状文(「下→上」))。内面は輪部のナダ、強張界より上にスリット有。内面は輪部のナダ、バッタ状の凹凸有。8と同一個体。	右英	普通	外: 褐青褐色 内: に赤い褐色	十王台式
8	弥生土器 甕	-	腹部輪加直位→腹部と本面の腹直位直文・横位波状文(「下→上」)。内面は横位のナダ。頭頂部より上にスリット有。内面は帯状のヨコシルバ付書とバッタ状の凹凸。7と同個体。	右英	普通	外: 褐青褐色 内: に赤い褐色	十王台式
9	弥生土器 甕	-	腹部輪加不明の附加条縞文(「R - S」→輪加文3本面の横位波状文→3条1単位の腹直位直文・横位波状文(「下→上」)。内面は横位のナダ。	右英、角閃石、赤鉄	普通	外: 黑褐色 内: に赤い褐色	上王台式
10	弥生土器 甕	-	腹部輪加直位2種類文(「Rし+2尺、LR+2尺」→「下→上」)。内面は横位のナダ。	多量の石英・灰石、赤鉄	真好	に赤い褐色	十王台式
11	弥生土器 甕	-	腹部輪加直位1種類文(「Rし+2尺、LR+2尺」→「下→上」)。内面は横位のナダ。外底スリット有。内面は下位に横位のヨコシルバとバッタ状の凹凸。	右英、角閃石	普通	外: 灰青褐色 内: に赤い褐色	十三台式
12	弥生土器 甕	-	腹部輪加不明の附加条縞文(「R - Z」)。底部本墨面。内面は灰・斜位のナダ。	多量の石英・灰石	普通	に赤い褐色	二軒屋式
13	弥生土器 甕	(7.3)	腹部下段部位のナダ→輪加不規則の附加条縞文(「R - S」)→底盤砂粒。内面は横位のナダ。	右英、灰石、金閃石、赤鉄	普通	外: に赤い褐色 内: に赤い褐色	上王台式
14	弥生土器 高杯	-	口部部ハフキヤミ、口縁部斜位・横位のナダ。内面は横・斜位のナダ。	右英	真好	に赤い褐色	十王台式
15	中品 燒成土	-	様(475)、底33、孔径(0.3)、重量 [553] g、表面直面 もナダ底面。片割字。	右英、角閃石	普通	深褐色	-

27号住居跡（第27～29図）

位置 A区北端部付近、M 3 グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は 4.26m ~ 4.56m を測る。北壁は崩れているため、最大値は 4.95m となる。東西方向は 4.38m ~ 4.96m を測る。平面は東西辺がわずかに膨らんだ隅丸正方形形状を呈する。北壁の一部が搅乱で壊され、床面にはピット状の搅乱が認められる。主軸方位 N - 6° - W で、真北に近い。壁 壁高は 15 ~ 33cm を測り、傾斜がやや強い。

床 ほぼ平坦で、窓穴の西側 2/3 が硬化する。特に、P 1 ~ 4 を結んだラインの内側が最も硬く、炉の南側床面が軟弱で、硬化面が馬蹄形に残存している。ピット P 1 ~ 4 が主柱穴と考えられる。P 5 は出入口ピットの可能性がある。南壁際にピット状の搅乱があるため、出入りロビットが失われている可能性もある。主柱穴の覆土はいずれも軟弱で、P 2 では直径 14cm の柱痕とローム質の根固め土を断面観察で確認した。

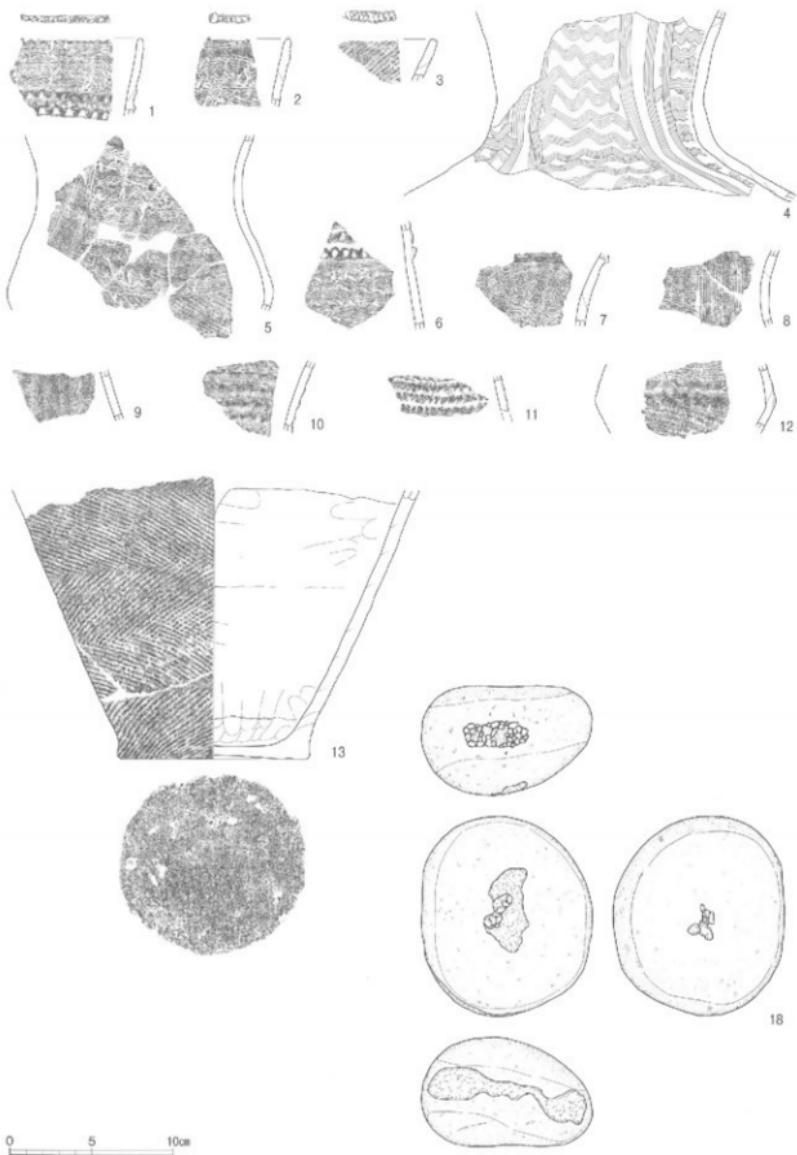
炉 床面中央北寄りに構築される。平面不整梢円形で、規模は 76cm × 59cm を測り、浅く掘り込まれている。被熱は著しく、南側に三角柱状の自然礫を炉石として設置している。炉石は平坦な面を上向きにしている。覆土 下層が褐色土、上層が暗褐色土で、自然堆積状を呈する。遺物 P 2 北東の覆土下層から 13 が、炉の北側床面から 4 の口部部破片が出土している。炉から 17 の高杯の破片が出土している。遺物の出土量は多く、遺存状況は比較的良好である。十王台後半期の土器が主体だが、二軒屋式系の壺 (15・16) も少量出土している。4 は十王台式の変形土器だが、肩が極端に張る。17 は体部と脚部に横位の櫛捺波状文を施す高杯である。所見 住居跡の構築および廃絶時期は、弥生時代後期後半と考えられる。



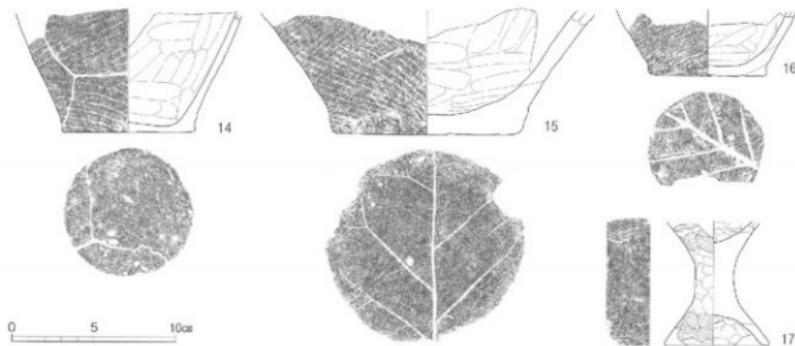
第27図 27号住居跡

表10 27号住居跡出土遺物観察表

団査 番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 甕	- - -	口唇部ヘラカギミ。底部押捺痕等→口縁部6本歯の焼成状況(下→上、反時計回り)。内面は焼成のナマ。	石英、角閃石、金雲母、赤色鉄	普通	にぶい黄褐色	十手台式
2	弥生土器 甕	- - -	口唇部ヘラカギミ、小突起。口縁部4本歯の焼成状況(下→上)。内面は焼成のナマ。	石英、長石、角閃石、赤色鉄	普通	にぶい黄褐色	十手台式



第28図 27号住跡出土遺物①



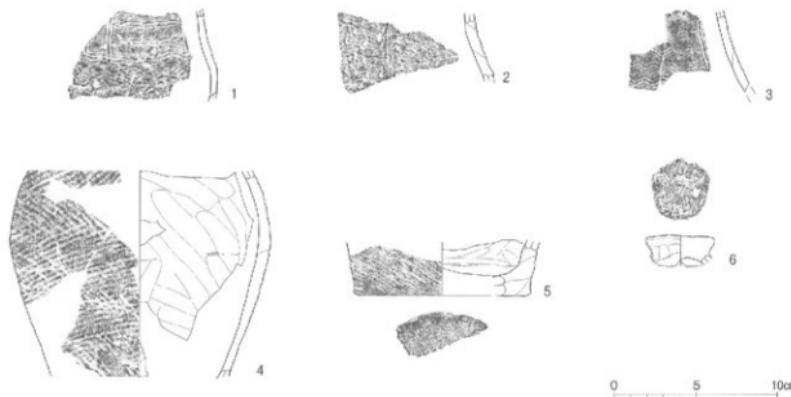
第29図 27号住居跡出土遺物②

回収番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	弥生土器 壺	- - -	口部剥離不明の肩付壺1脚周文(左L+右R)を呈示。口部は同様の本体を複数個。内面は被付のナダ。	石英	普通	にぶい黄褐色	
4	弥生土器 壺	- - -	頭部5本筋の複数点直線文(3~4条を一單位)→複数波状文(下→上)→複数直線文(一部)。内面は底部上部が被付のナダ。溝織著しい。	多量の石英・長石、 角閃石、金雲母	良好	褐色	覆土下層 十三台式
5	弥生土器 壺	- - -	頭部羽目条1脚周文(左L+右Z)→頭部押捺痕等→頭部5本筋の複数点直線文→複数波状文(下→上)12段。内面は頭部上部が複数のナダ、中一下位が被付のナダ。外表面スリラ。	石英、角閃石、青 銅針	普通	外:灰褐色 内:灰黃褐色	十王台式
6	弥生土器 壺	- - -	頭部弱い押捺痕等→6本筋の複数点直線文(下→上)。内面はナダ。	角閃石、金雲母、 赤色鉄	普通	にぶい黄褐色	十王台式
7	弥生土器 壺	- - -	頭部弱い二角形の肥い壁帯→4本筋の複数点直線文(上→下)。内面は横・新付のナダ。	石英、長石	不良	外:黒褐色 内:にぶい黄褐色	十王台式
8	弥生土器 壺	- - -	頭部4本筋の複数点直線文(3条一單位)→積成波状文。内面は新付のナダ。外表面スリラ。	石英、長石	良好	外:黒褐色 内:にぶい褐色	十王台式
9	弥生土器 壺	- - -	頭部5本筋の複数点直線文(4条一單位)→複数波状文。内面は複数のナダ。	石英、角閃石、赤 色鉄	普通	にぶい黄褐色	十王台式
10	弥生土器 壺	- - -	頭部弱い押捺痕等4条→頭部5本筋の複数点直線文、頭部複数点直線文→複数波状文。内面は横・斜付のナダ。外表面スリラ。	石英、長石、骨針	良好	にぶい黄褐色	十王台式
11	弥生土器 壺	- - -	頭部爪痕のある薄い押捺痕等→口部複数点直線不明の複数波状文。内面は被付のナダ。	石英、赤色鉄	普通	にぶい黄褐色	十王台式
12	弥生土器 壺	- - -	頭部弱い押捺痕等→頭部5本筋の複数点直線文、頭部軸跡不明の複数点直線文(左-S、L-Z:下→上)。内面は複数のナダ。	石英、長石	良好	外:灰黃褐色 内:にぶい褐色	十王台式
13	弥生土器 壺	- 11.5	頭部軸跡不明の複数点直線文(左-S、L-Z:下→上)。底部丸皿底、植物模様子立瓦底。内面は横・斜付のナダ。外表面付着物のナダ。陶は削落。	多量の石英・長石、 赤色鉄	不良	外:にぶい黄褐色、 灰白色 内:にぶい褐色	覆土下層 十王台式
14	弥生土器 壺	- 8.0	頭部軸跡不明の複数点直線文(左-S、L-Z:下→上)、頭部丸皿底、植物模様子立瓦底。内面は頭部下位が横・斜付のナダ。外表面付着物のナダ。	石英、骨針	良好	外:にぶい黄褐色 内:灰黃褐色	覆土下層 十三台式
15	弥生土器 壺	- 11.4	頭部軸跡不明の複数点直線文(左-S、L-Z:下→上)、頭部丸皿底、植物模様子立瓦底。内面は頭部下位が横・斜付のナダ。外表面付着物のナダ。	多量の石英、白色 鉄、角閃石、赤色 鉄	普通	にぶい黄褐色	覆土下層 二軒屋式6

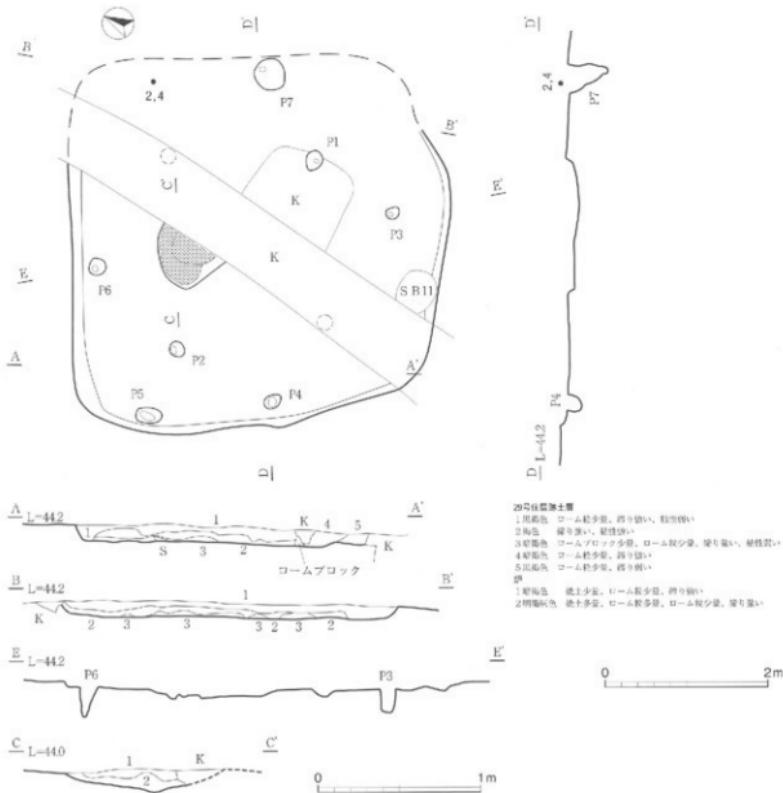
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
16	弥生土器 壺	— — (7.0)	腹部附加有1様開文(L.R+2尺:時計回り)。底部木痕痕。内面は焼・斜位のナガ。外面ス付唇。	多量の石英・白色粒、角閃石	良好	外:黒褐色 内:黄褐色	床面直上 二重匣式
17	弥生土器 高杯	— — (6.3)	体部・脚部下位に5本筋の横波紋文(時計回り、下→上)。脚部中位は横・斜位のナガ。内面は体部が横・斜位のナガ、脚部が縦・横位のナガ。	多量の石英・白色粒、角閃石、赤色粒	普通	にぶい黄褐色	如 十王台式
18	石器 瓶石		自然端を素材とし表・裏面中央や上・下側に敲打痕。 石材:石英安山岩。長さ12.25cm・幅10.5cm・厚さ2.75cm・重さ12764g。				

29号住居跡(第30・31図)

位置 A区北部、M3グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は4.4m~4.66mを測る。東壁は残存しないため、東西方向は約4.5mと推測する。平面は、不整形な隅丸逆台形もしくは隅丸正方形と思われる。北東部は風倒木痕を壊して構築しており、中央部は擾乱の溝・土坑によって大きく壊され、11号掘立柱建物跡とも重複する。主軸方位 N-31°W 肩 壁高は7~29cmを測り、傾斜する。床はほぼ平坦で、顕著な硬化面は認められない。ピット P1・2(各深度31cm・39cm)が主柱穴、P3が出入口ピットと考えられる。北東・南西の主柱穴は擾乱で消滅しており、推定位置を破線で示した。P3・4・6・7は各辺(壁)の中央あるいは中軸付近に位置している。炉 床面中央北寄りに構築され、南東部は擾乱によって壊されている。残存規模は89cm×56cmを測り、浅く掘り込まれている。被熱は顕著である。覆土 下層が褐色土、上層が暗褐色土で、自然堆積状を呈する。遺物 わずかに弥生土器片が出土している。P2・P3脇の覆土下層から、破碎した同一個体と見られる自然角擗が出土している。遺物の出土量は少なく、大半が小破片で出土している。十王台式後半期の土器が主体で明確な二軒屋式系の土器は出土していない。6は蓋形土器の摘み部である。所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。



第30図 29号住居跡出土遺物



第31図 29号住居跡

表11 29号住居跡出土遺物観察表

調査 番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特徴	埴土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	頸部附丸角2種周文（L+L）→頸膜界4本筋の横條文 再び状文→頸部底位直縞文→横條波状文。内面は楕・斜 位のナダ。	石英、角閃石	普通	外：明赤褐色 内：に赤い黄褐色	覆土上糊 十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	頸部4本筋の横條直縞文→横條波状文（下→上）。内面は 楕・斜位のナダ。	多量の石英・白色 粒、赤色粒	良好	外：オリーブ褐色 内：明赤褐色	覆土上糊 十王台式
3	弥生土器 壺	- - -	頸部5本筋の複縞直縞文→横條波状文（下→上）。内面は 横條のナダ。外面スス付焉。	石英	普通	に赤い黄褐色	覆土上糊 十王台式

図版 番号	種別 器種	口径 器底 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	碗中子器 底	-	切跡や縫合部が不明の附加系陶文（R・S・L・Z：下→上）。内面は崩落上へ半径が斜位のナデ。下縁一端部付近は積位のナデ。外縁部上段に空穴のスヌ、内面はコケ付着。	石英、多量の白色 鉄	良好	外：赤い黄褐色 内：赤い褐色	質土上層 「毛舌式」
5	弥生土器 底	(11.0)	切跡や縫合部が不明の附加系陶文（R・S・R・Z：下→上）。底部を目前。内面は横・斜位のナデ。	石英、無鉄石	良好	外：明赤褐色 内：棕色	質土上層 「毛舌式」
6	碗中子器 底	-	拂み径 19.5cm。納入部側面にナデ（沿底状態）。面部に植物根子の压痕。内凹は体部がナデ。	石英	不良	外：明赤褐色 内：赤褐色	

30号住居跡（第32図）

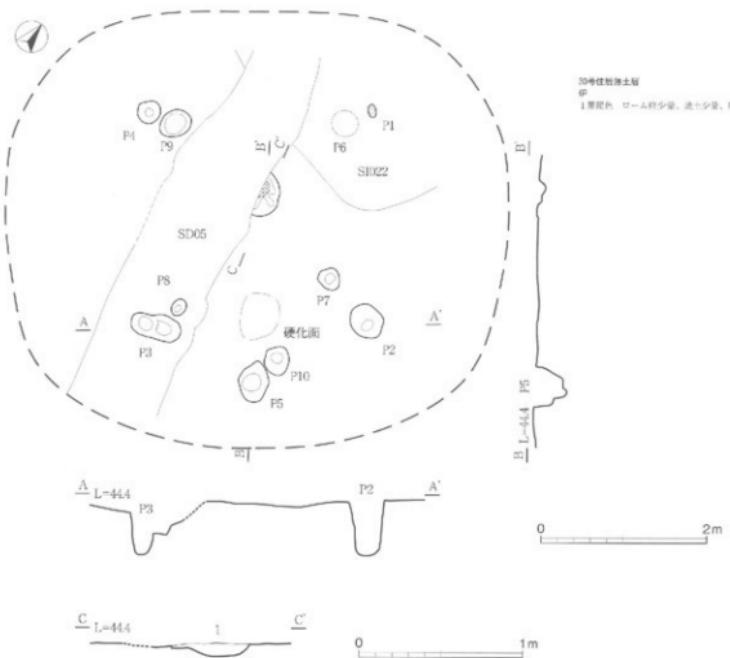
位置 A区北部、L 3グリッドに位置する。規模と平面形 確認面では堅穴は残存しなかつたため、柱穴配置と49号住居跡を参考にして堅穴規模を推定復元している。本住居跡は5号溝・22号住居跡・7号掘立柱建物跡・時期不明の土坑群によって一部壊されている。主軸方位 N-40°-W 壁 - 床 床面は、ほとんど残っていない。P 5・10の北側に硬化面がわずかに残存している。ピット P 1~4が新主柱穴、P 6~9が旧主柱穴、P 5・P10（深さ38cm）が新・旧の出入口ピットであろう。P 6は推定位置を破線で示した。P 1も22号住居跡掘り方面にわずかな窪みとして残存するのみである。P 7・8が深さ38cmと35cmあるのに対し、P 9は深さ13cmしかないが、その位置から主柱穴と判断した。炉 床面中央やや北寄りに位置する。北東部は5号溝によって壊されている。残存規模は57cm×25cmを測り、浅い掘り込みを伴う。覆土 - 遺物 柱穴内から弥生土器の小片が出土した。所見 住居跡の時期は弥生時代後期後半と考えられる。本遺跡の弥生時代の住居跡の中では、比較的規模が大きい。

35号住居跡（第33図）

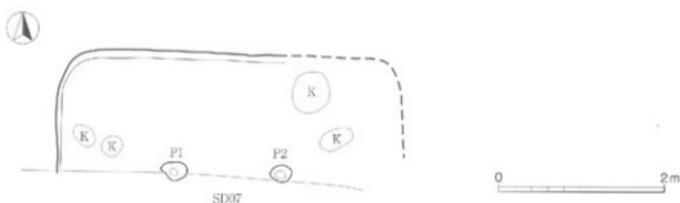
位置 A区北部、M 4グリッドに位置する。規模と平面形 堅穴の跡の一部が残存している。東西は推定4.2m、南北は不明である。大半は7号溝・1号道路跡によって壊されている。主軸方位 N-1°-E 壁 やや傾斜し、最大で5cmを測る。床 ほぼ平坦である。ピット P 1・2は、深さ24cm・30cmを測り、主柱穴の可能性がある。炉 - 覆土 - 遺物 - 所見 残存する壁やピット等の構造から、弥生時代の住居と推測する。

37号住居跡（第34・35図）

位置 A区北部、M 4グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は4.11m、東西方向は3.7m～4.21mを測る。平面は不整形な隅丸台形状であるが、西壁については主柱穴配置や主軸と整合しない。漸移層に掘り込まれた西壁が木の根等によって侵食された可能性があり、本来は隅丸長方形であったと推測する。床面にはピット状搅乱が点在する。主軸方位 N-59°-W 壁 壁高は9cmを測り、傾斜する。床 やや凹凸のある地床で、炉の周りに不整形な硬化面が広がる。ピット P 1~4が主柱穴、P 7が壁

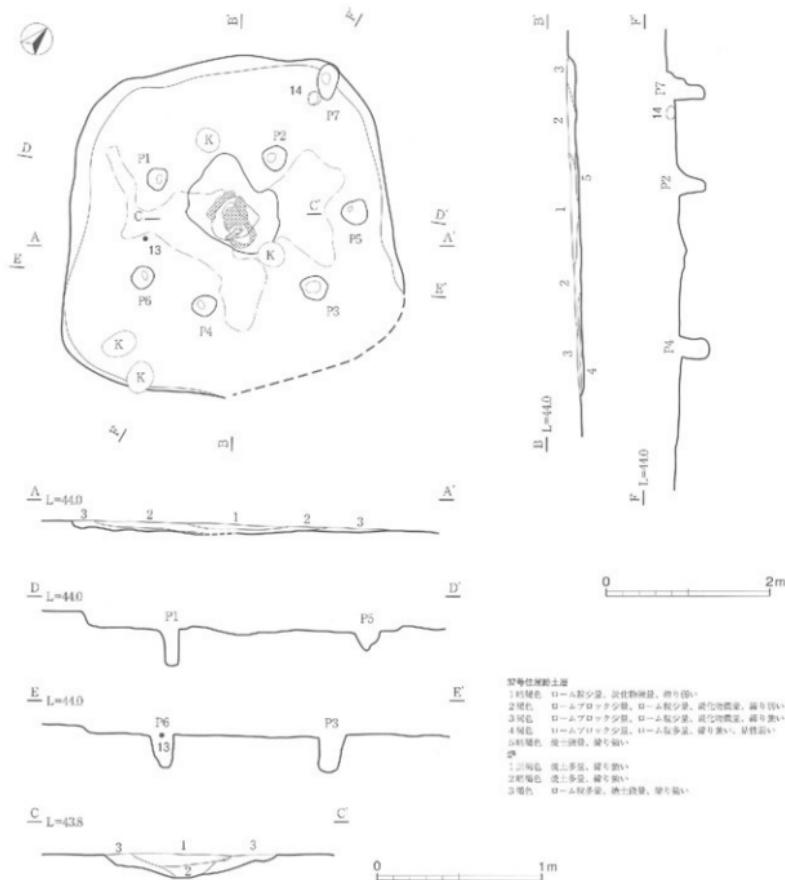


第32図 30号住居跡

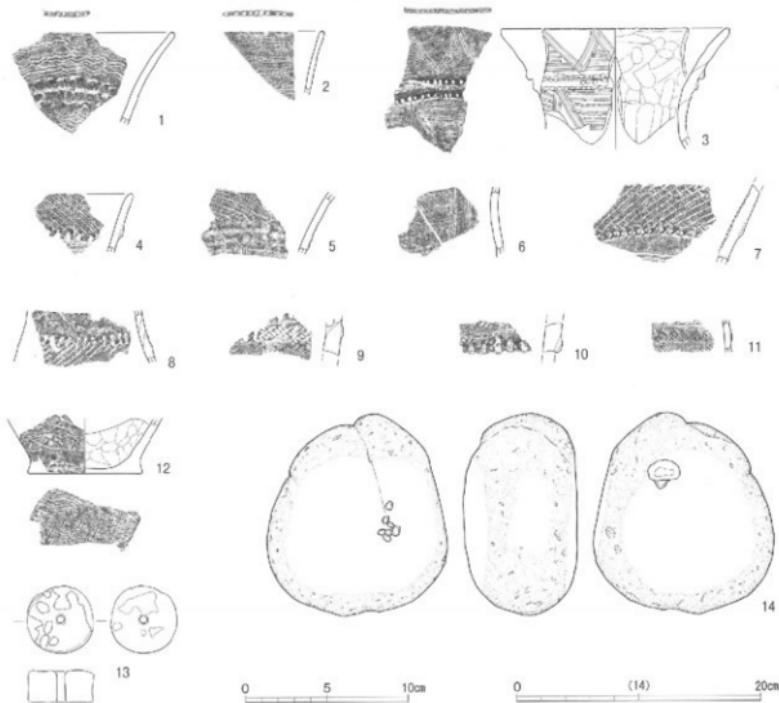


第33図 35号住居跡

柱穴であろう。P5・6は補助柱穴と推測するが、出入口ピットの可能性も残される。 炉 床面中央に位置し、土坑状に広く、やや深く掘り込まれている。不整形な棒状礫を炉石としている。 覆土 下層が褐色土、上層が暗褐色土で、自然堆積状を呈する。 遺物 少量の弥生土器片が出土している。P7脇の床面からは14の台石が出土している。 遺物の出土量はやや少なく、大半が小破片で出土している。十王台式前半期の土器と二軒屋式系の土器が混在する。3は十王台式の範疇であるが、口縁部と頸部に横指鋸齒文を施文する。4・7・8は二軒屋式系の土器である。 所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。



第34図 37号住居跡



第35図 37号住居跡出土遺物

表12 37号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口徑 器蓋 蓋邊	特徴	施土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 甕	- - -	口唇部へタキザミ。頭部爪痕のある造り出しの縁帶2条→口縁部・頭部5本筋の横粒波次文(上→下)。内面は横筋のナギ。外面スズ待考。	石英。多量の白色粒、赤色粒	普通	外:灰褐色 内:灰黃褐色	覆土上層 十五台式
2	弥生土器 甕	- -	口唇部丸棒状工具によるオザミ。口縁部2本筋の範粒波次文→横粒波次文。内面は横筋のナギ。	石英	良好	外:灰黃褐色 内:粉色	覆土上層 十五台式
3	弥生土器 甕	(138) - -	口唇部ヘタキザミ。丸棒状工具による肩突のある厚い盤帶2条→口縁部・頭部山形文(反時計回り)→山形文開きを一帯おきに横粒波次文で充填(上→下)。外面部全面にスズ有石。内面に織・削空のナギ。	石英	良好	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	覆土上層 十五台式
4	弥生土器 甕	- - -	口唇部下端に陶文施加を伴う→始燒不明の附加条縁文(R-Z)。頭部5本筋の横粒波次文。内面は横・斜筋のナギ。外面スズ、内面シラ付等。	石英、角閃石、赤色粒	普通	にぶい棕色	覆土上層
5	弥生土器 甕	- - -	頭部薄・脇持縁帶3条→口縁部附添余2箇圓文(し+し)。頭部5本筋の覆空直線文。内面は横・斜筋のナギ。外面スズ、内面シラ付等。	石英、角閃石	良好	外:にぶい褐色 内:黒褐色	覆土上層 十五台式

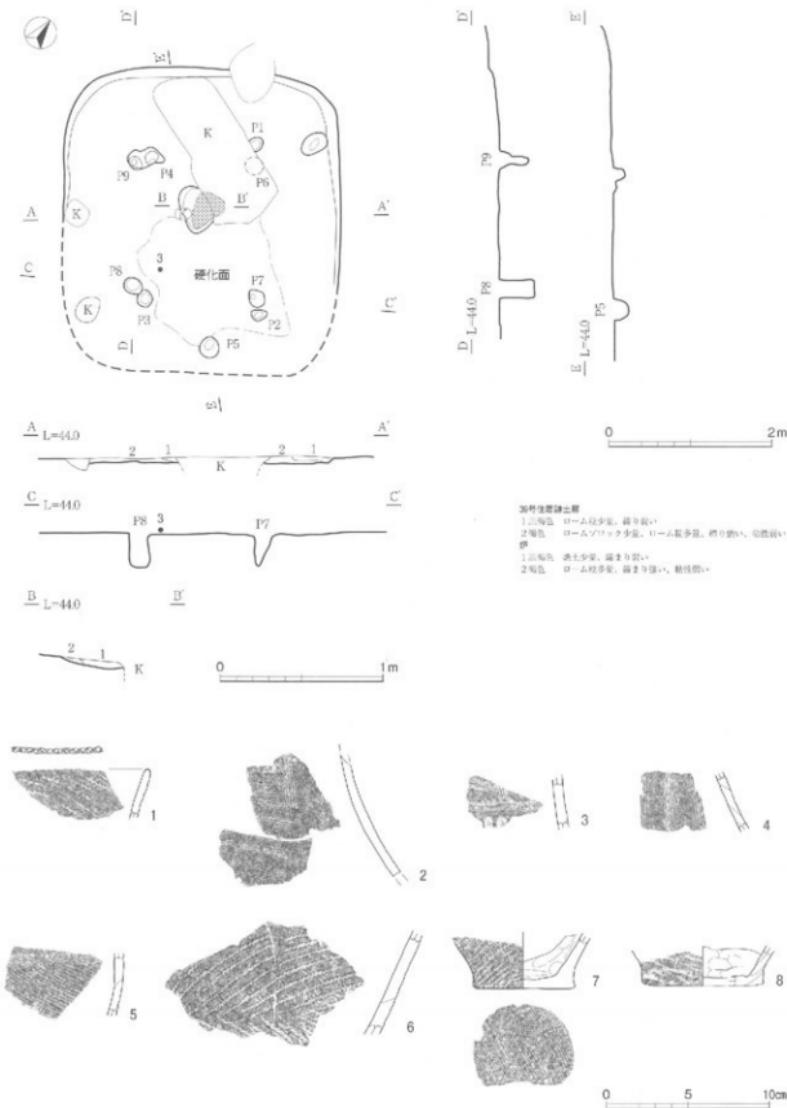
図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
6	弥生土器盤	-	輪郭輪郭不明の前加添縞文(Ⅱ・S)→輪郭5本直の足底正縞文→横状波状文。内面は擦・斜位のナデ。外面スッキリ。	石英、赤色粒	不良	外：灰褐色 内：灰青褐色	覆土上層 十王台式
7	弥生土器盤	-	口唇部附加条1種横文(LR=2.2)と輪郭不明の前加添縞文(Ⅱ・S)をトからぐる横文。口沿部下端に同赤色粒様の輪郭波状文。底部5本削以上の横状波状文。内面は擦・斜位のナデ。	多量の石英、長石、普通	外：に赤い褐色 内：に赤い黄褐色	覆土上層 二軒屋式	
8	丸牛土器盤	-	頭部無文(擦位のナデ)→頭部丸地焼工法による剥安 テラ・頭部頭部小窓の前加添縞文(Ⅱ・S)。内面は斜位のナデ。	多量の石英、長石、赤色粒	不良	外：に赤い黄色 内：に赤い黄褐色	P1 二軒屋式
9	弥生土器盤	-	頭部附加条1種横文(LR+2R)を頭部延焼した腰帶。腰帶輪は横位のナデで撹突。内面は擦位のナデ。	多量の石英、長石	良好	に赤い黄褐色	覆土上層
10	弥生土器盤	-	深部附加条1種横文(LR+2R)を頭部延焼した長い斜 テラ・頭部下端に同様の草体輪郭を押印。内面は斜位のナ デ。	多量の石英、長石	普通	外：に赤い黄褐色 内：に赤い黄褐色	覆土上層
11	弥生土器盤	-	頭部輪郭のある薄い押捺長石、腹沿上と腰帶に前加添2種 縞文(LR+2L)。内面は斜位のナデ。	石英、チャート、 骨針	不良	に赤い褐色	覆土上層
12	弥生土器盤	-	頭部輪郭不明の附加条縞文(Ⅱ・Z)。底部は目皿。内面は 斜位のナデ。	石英	普通	外：に赤い黄褐色 内：に赤い黄褐色	覆土上層 十王台式
13	土器的 彷彿車	-	様(41)、古20、孔様(05)、重層(43.28)g。表裏面とも 瓦礫落着している。ナデ撹突。	多量の石英、白色 粒	不良	褐色色	床面直上
14	石器 角石	-	人形頭の表・裏面や右側面に岩粉痕。周辺範囲の一帯に敲打痕とみられる凹穴。 右側: 石英安山岩、長さ16.45cm・幅14.85cm・厚さ9.2cm・重さ3960.0g。				床面直上

39号住居跡(第36図)

位置 A区北部、M 4 グリッドに位置する。 規模と平面形 南北(主軸)方向は推定3.75m、東西方向は3.40mを測る。南壁はローム層上面では残存しないが、平面は不整隅丸長方形であろう。中央部は長方形状の搅乱に破壊される。 主軸方位 N - 35° - W 壁 壁高は5 cmを測り、やや傾斜する。 床 やや凹凸があり、炉の周りに不整形な硬化面が広がる。 ピット P 7 ~ 9 が主柱穴、P 5 が出入入口ピットであろう。P 6 は不明ながら、推定位置を破線で示した。P 1 ~ 4 は深さ13cm ~ 27cmと浅いが、P 7 ~ 9 とはほぼ同位置であり、古い主柱穴の可能性もある。 炉 床面中央やや北寄りに位置し、浅い皿状を呈する。搅乱によつて一部を失うが、被熱範囲が検出できた。 覆土 自然堆積状を呈するが、ロームブロック・ローム粒がやや目立つ。 遺物 少量の弥生土器片が出土している。遺物の出土量は少なく、小~中破片で出土している。十王台式後半期の土器が主体で明確な二軒屋式系の土器は出土していない。 所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。

表13 39号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器盤	-	口唇部ヘラキザミ。口唇部附加条2種横文(LR=2L)。内面は口唇部付近横位のナデ。他は斜位のナデ。	石英、長石	普通	灰青褐色	十王台式
2	弥生土器盤	-	頭部5本直の輪郭波状文・旋紋波状文→輪位波状文。外 面磨きスム、全周コケ附着。	石英	普通	外：に赤い黄褐色 内：黒色	十王台式
3	弥生土器盤	-	頭部5本直の輪位区画波状文、その直下にナデ(輪位 直下)→頭部頭部直波文→頭位波状文。内面は斜位のナデ。	石英、角閃石、赤 色粒	普通	外：に赤い黄褐色 内：灰青褐色	十王台式



第36図 39号住居跡・出土遺物

図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器 壺	-	底部5本業の縦紋と横文、間に段階波状文を挟む。内面は板状のナガ。	石英	普通	外：灰青褐色 内：黑色	十王台式
5	弥生土器 壺	-	筋茆形加多2連繩文「L R + L」→筋茆形5本業の横位瓦巻文。内面は斜位のナガ。外面白全面にスス、内面全面にコゲ付着。	石英	不良	灰青褐色	十王台式
6	弥生土器 壺	-	筋茆形加多2種繩文(R+R)と輪茆不規の附加条繩文(R+Z:上→下)。内面は板・斜位のナガ。	多量の石英・長石、普通 骨粉	普通	外：黒褐色 内：灰青褐色	十王台式
7	弥生土器 壺	5.9	筋茆形加多不明の附加条繩文(R+Z)。底部を兵刃、内面は開口が斜位のナガ。底部付近が焼けたナガ。外面白スス付着。	多量の石英、長石、良好 骨灰	良好	外：に赤い黄褐色 内：明赤褐色	十王台式
8	弥生土器 壺	(7.4)	筋茆形不規の附加条繩文(R+Z)。底部斜面。内面は焼けたナガ。	石英、長石、余灰 母	不良	に赤い黄褐色	十王台式

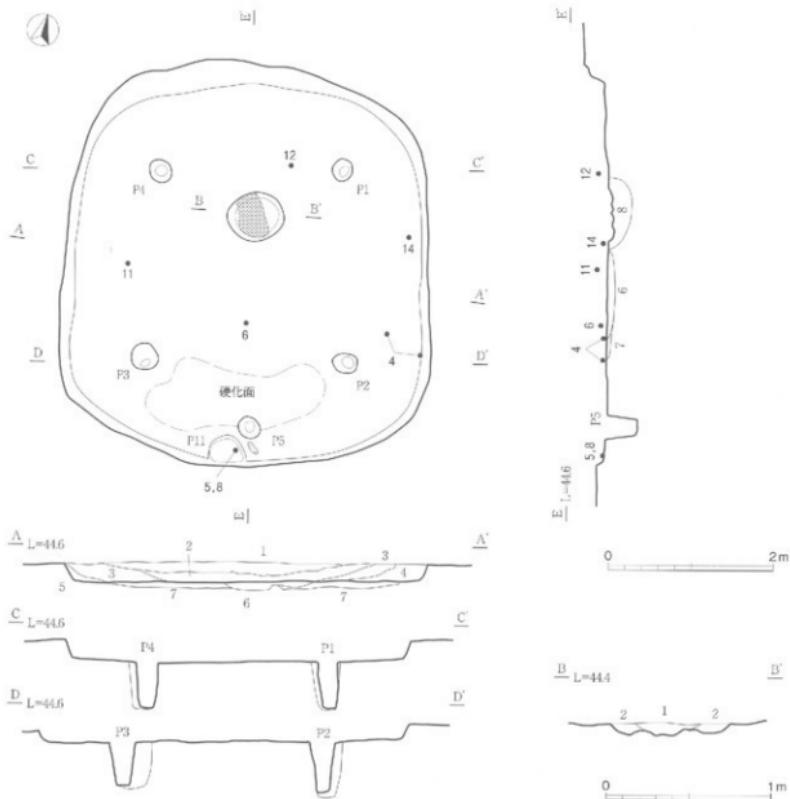
44号住居跡（第37～39図）

位置 A区北部、K 3～K 4グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は5.00m、東西方向は4.52mを測る。平面形は隅丸長方形。主軸方位 N - 15° - W 聖 壁高は8～22cmを測り、傾斜する。床 新旧2面あり、堅穴を拡張・更新している。新床面は平坦で、中央部は旧床面を埋め戻した貼床である。出入口部前面が帯状に硬化している。旧床面は中央部がやや窪んでいる。その他の部分で新しい床面とは明瞭な高低差がなかった。ビット P 1～4が主柱穴、P 6～9（深さ34～46cm）が旧主柱穴、P 5が出入口ビット、P10（深さ33cm）が古い出入口ビットであろう。いずれも柱痕は検出できず、抜取と思われる。P11は深さ5～8cmと浅い。炉 床面中央部北寄りに位置し、被熱は顯著で、浅い皿状を呈する。覆土 自然堆積状を呈する。1・2層の暗～黒褐色土と、3～5層の褐色土が明瞭に別れる。

遺物 3～5層から少量の弥生土器が出土している。P11の直上からは5・8の壺が出土し、P 5脇の床面には棒状の自然礫が置かれていた。また、2層からは土師器の高環（15）が出土し、注意される。遺物の出土量はやや多く、中～大破片の割合が高い。十王台式後半期の土器が主体である。7は繩文地の胴部に円形刺突文が施される。8は撚り紐rをS巻きにした軸縄不明の附加条繩文と附加条2種繩文（附加2条）を非羽状構成で施している。15は土師器高環の口縁部片で赤彩が施されている。所見 堅穴と柱穴の拡張・更新が明瞭で、上屋を含む建て替えと判断できる。旧堅穴の推定規模は南北4.0m×東西3.7mで、平面形は新堅穴と相似形と推定し、破報で図示した。炉を移設・更新した痕跡が全く認められないため、連続的な建て替えであろう。遺物の出土状況から、少なくとも1・2層は占墳前期以降の埋没と想定される。住居跡の構築および廃絶時期は、弥生時代後期後半に求められる。

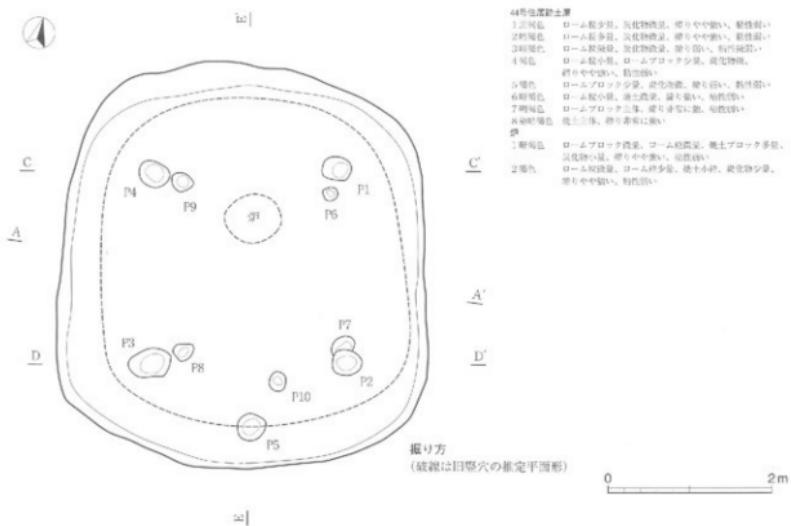
表14 44号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	口唇部繩文を貫軸施文。L形瓦巻横波状文(上→下)。内面は板状のナガ。	石英、余灰母、水 洗灰	良好	淡青褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	-	口唇部丸撚状1月によるキズ。口輪部5本業の横位波状文(上→下)→瓦巻横波状文。内面は板状のナガ。	石英	良好	に赤い黄褐色	十王台式



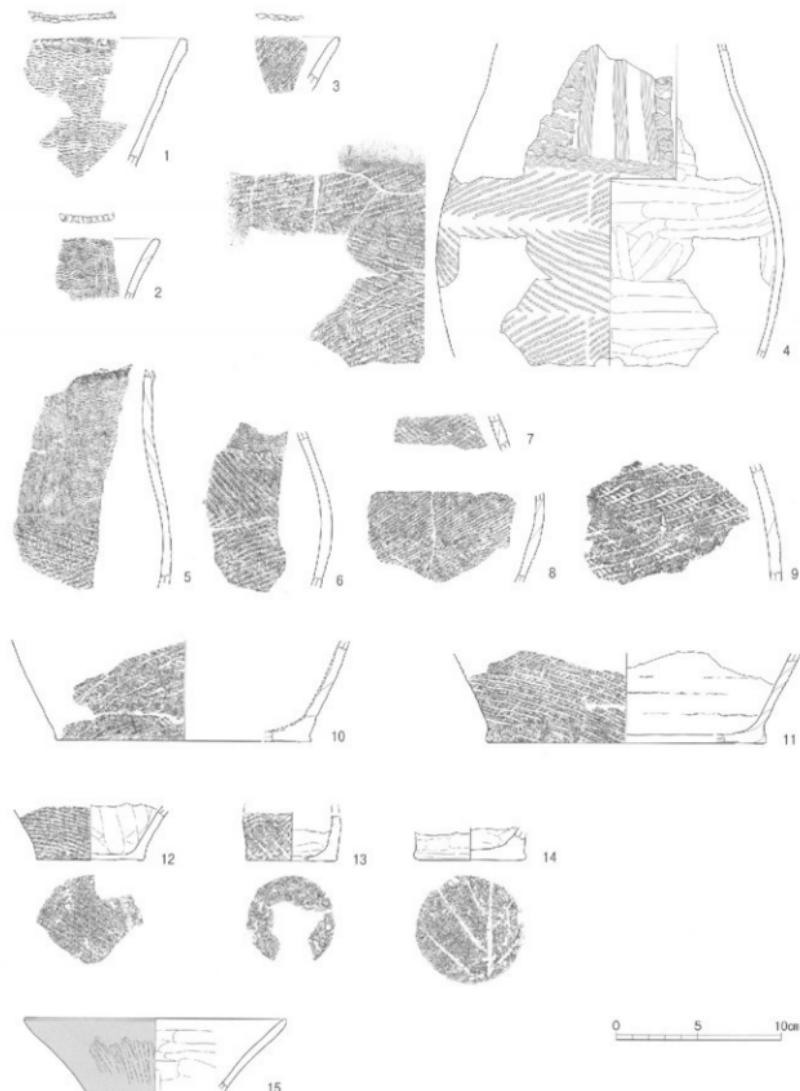
第37図 44号住居跡

回復 番号	種別 格	口後 器高 度	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	張生土器 窓	- - -	口沿部縦文全体によるキギ。口縁部輪郭不明の羽加条 窓文 (R-S)。内面は焼成のナダ。外面に濃いスヌ付着。	石英、角閃石	普通	に赤い黄褐色	十王台式
4	張生土器 窓	- - -	斜面部縦文の羽加条窓文 (R-S, L-Z-T: 上→下, 反時計回り) → 焼成窓 7本前の横窓区窓文状文 → 胎部輪 郭直縦文3条→窓文 → 窓文直縦文 (左側: 下→上, 右側: 上→下)。内面は斜面部窓のナダ。斜面部窓と窓部のナダ → 焼成のナダ。微細な植土。外周窓部→斜面部に濃いスヌ、 瓶中位に薄いスヌ。内周窓下部に密次のコガ付着。	石英	良好	に赤い黄褐色	覆上下層 十三台式
5	張生土器 窓	- - -	頭部輪郭急落、斜面部窓不規の羽加条窓文 (L-S, Z-T: S: 下→上) → 5本前の窓文直縦文 → 窓文直縦文 (下 →上)。頭部輪郭窓区窓文放散文。内面は頭部輪郭・窓部の ナダ。斜面部窓のナダ。外周窓部→窓部にスヌ。内 周窓部に焼成のヨゴレ付着。	多量の石英、石英、 骨粉、赤色灰	普通	に赤い黄褐色	覆上下層 十王台式



第38図 44号住居跡掘り方

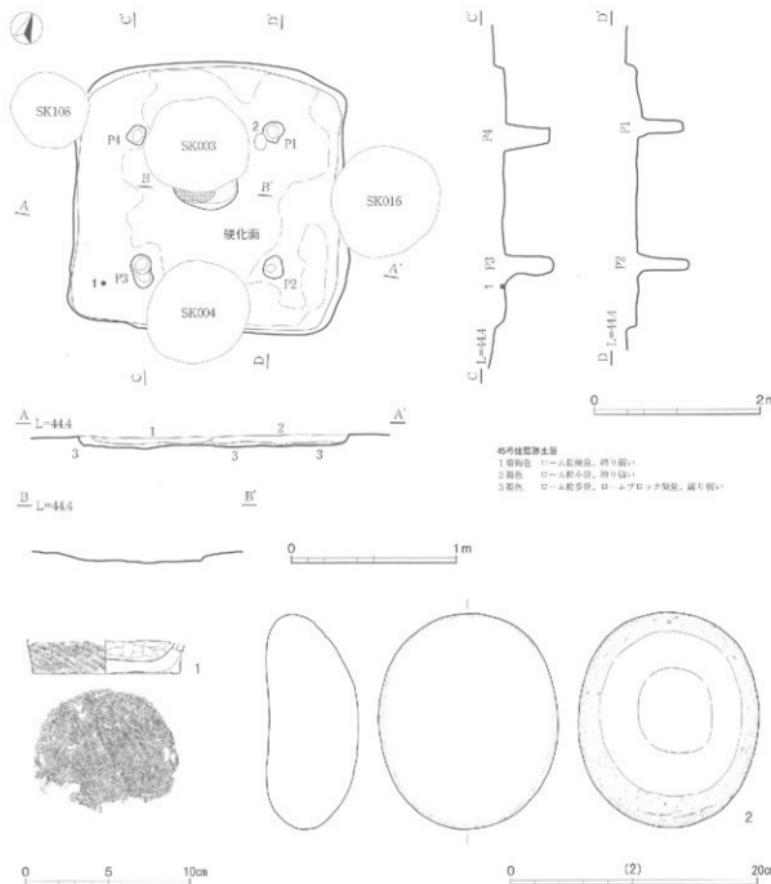
层級 番号	種別 器種	口径 高 底径	特 徴	土質	規版	色調	備考
6	弥生土器 壺	-	削部破損不明の刃加奈縄文(文・S、L・Z:下→上)。底部5本の継ぎ直縄文・稚形波状文、須制等横区横波状文。内面は頭部継ぎのナデ。他は器面荒れ。外面又付着。	多量の石英、白色 砂	普通	外:に赤い黄褐色 内:褐色	覆土中層 十王台式
7	弥生土器 壺	-	底部破損不明の刃加奈縄文(R・S、L・Z)→新しい丸棒工具による板根糞突支1条。内面は板根のナデ。	石英、チャート、普通 角閃石、赤色砂	普通	外:に赤い黄褐色 内:淡黃褐色	
8	弥生土器 壺	-	削部破損不明の刃加奈縄文(文・S)、刃加奈2種縄文(R+2L)の継に上→下へ旋び→須制等5本の横区横波状文。内面は横・斜位のナデ。外面スス、内面ヨシシ付着。	多量の石英、白色 砂、角閃石	普通	外:に赤い黄褐色 内:に赤い黄褐色	覆土下層 十王台式
9	弥生土器 壺	-	削部破損2種縄文(R+R)。内面は新位のナデ。	石英、長石、角閃 石、金雲母、赤色 砂	普通	に赤い黄褐色	十王台式
10	弥生土器 壺	(15.5)	削部破損2種縄文(R+R)。底部陥没。内面は剥落。	石英、長石、角閃 石、金雲母、赤色 砂	不良	明黄褐色	十王台式
11	弥生土器 壺	(17.0)	削部破損2種縄文(L R+2L、RL+2R:下→上)。底部砂漠。内面は剥落。	石英、長石、角閃 石、金雲母	普通	に赤い黄褐色	十王台式
12	弥生土器 壺	(6.4)	削部破損不明の刃加奈縄文(L・Z)。底部が目前。内面は新位のナデ。外面板根による赤色化、又付着。	石英、角閃石	普通	に赤い黄褐色	覆土中層 十王台式
13	弥生土器 壺	(5.5)	削部破損1種縄文(R L+2L)、破損不明の滑溜糞突 文(R-S)。底部帯形成。内面は焼位のナデ。	多量の石英、長石	普通	外:に赤い黄褐色 内:深褐色	
14	弥生土器 壺	68	削部破損不明の刃加奈縄文(文・Z)。底部下端破損のナデ。底盤木焼痕。内面は板根のナデ。	石英、角閃石	普通	に赤い黄褐色	覆土下層
15	土器等 壺々	(15.8)	外面板根のミガキ。内面は焼位のナデ。外面赤彩。	石英、角閃石	普通	外:褐色 内:に赤い黄褐色	



第39図 44号住居跡出土遺物

45号住居跡（第40図）

位置 A区北部、K 4 グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は 3.32m、東西方向は 3.41m を測る。平面は隅丸正方形を呈する。3・4・16・108号土坑に壠されている。主軸方位 N - 20° - W 壁 壁高は 13cm を測り、やや傾斜する。床 中央部が硬化している。ピット P 1 - 4 が主柱穴である。P 1・2・4 では直径 15cm 前後の柱痕を断面で検出した。炉 床面中央に位置し、3号土坑によつて北半分を失っている。浅い皿状を呈し、被熱は顕著である。覆土 自然堆積状を呈する。遺物 P 1



第40図 45号住居跡・出土遺物

脇の床面には2の台石が置かれており、P 3付近の床面直上からは弥生土器の底部破片（1）が出土している。遺物の出土量は非常に少なく、大半が小破片で出土している。十手台式を主体とする。所見 住居跡の構築および廃絶時期は、弥生時代後期後半と考えられる。

表15 45号住居跡出土遺物観察表

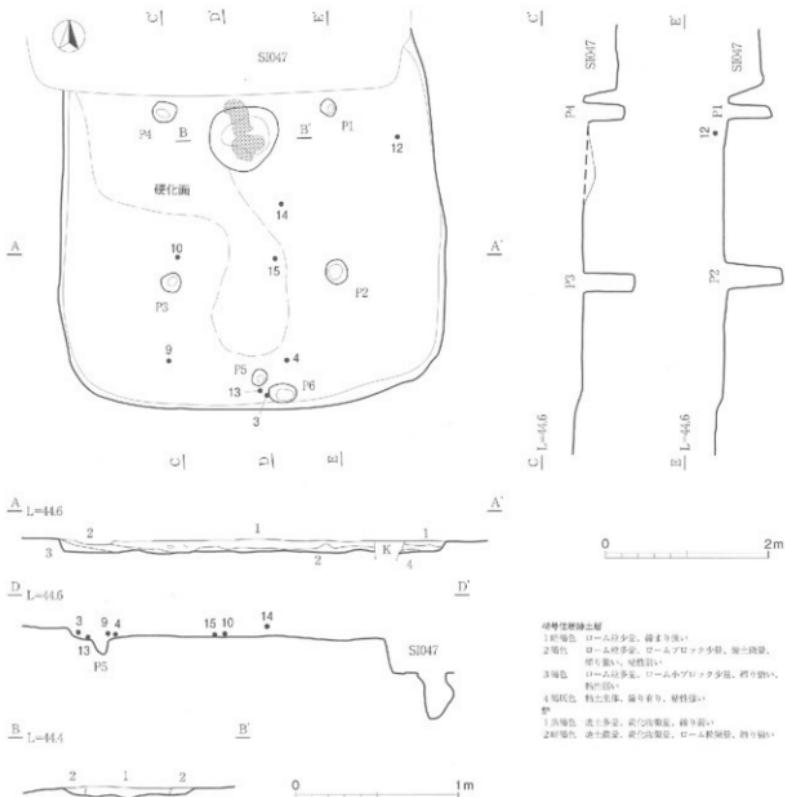
団体番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	— 90	直部縫跡不明の附加条縫文（R・Z）。蓋部有目。内面は滑、斜位のナグ。底部有脚。	石英、角閃石、金星母	良好	にぶい褐色	覆土上 十手台式
2	石器 骨石		大型標的の矢、玄同に刷毛印。表面は明著な磨耗により中央部分が深く擦りぬけ。石斧：砂岩、長さ175cm・幅147cm・厚さ75cm・重さ27193g。				床面直上

48号住居跡（第41・42図）

位置 A区北部、L 4グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は推定5.00m、東西方向は北側で4.46m、南側で4.76mを測る。平面は隅丸方形形状を呈する。47号住居跡および18・19号土坑によって、北側を壊されている。主軸方位 N -3° -W 壁 壁高は10～15cmを測り、やや傾斜する。床 ほぼ平坦で、P 5から竪穴西北部にかけて帯状に硬化している。ピット P 1～4が主柱穴、P 5が出入りピットであろう。P 1とP 3では、それぞれ直径11cm・13cmの柱痕を断面で検出した。P 6（深さ26cm）はいわゆる貯蔵穴であろう。炉 床面中央部北寄りに位置し、浅い皿状に掘り込まれ、被熱は著しい。覆土 2・3層はローム紋、ブロックがやや多く、人為的埋没の可能性がある。また、4層は白色粘土主体である。遺物 竪穴中央の覆土下層からは土製錘車（15）が、P 5脇の床面直上からは弥生土器の高杯（13）が出土している。また、竪穴中央部の1層からは土師器（14）が出土している。遺物の出土量はやや多く、中～大破片の割合が高い。十手台式後半期の土器が主体である。明確な二軒屋式系の土器は確認できない。13は無文の弥生系高杯、14は外面に刷毛目を施す土師器（壺カ）である。15はほぼ完形の土製錘車である。所見 古墳時代前期の土師器が、埋没最終過程の時期を示している。住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。

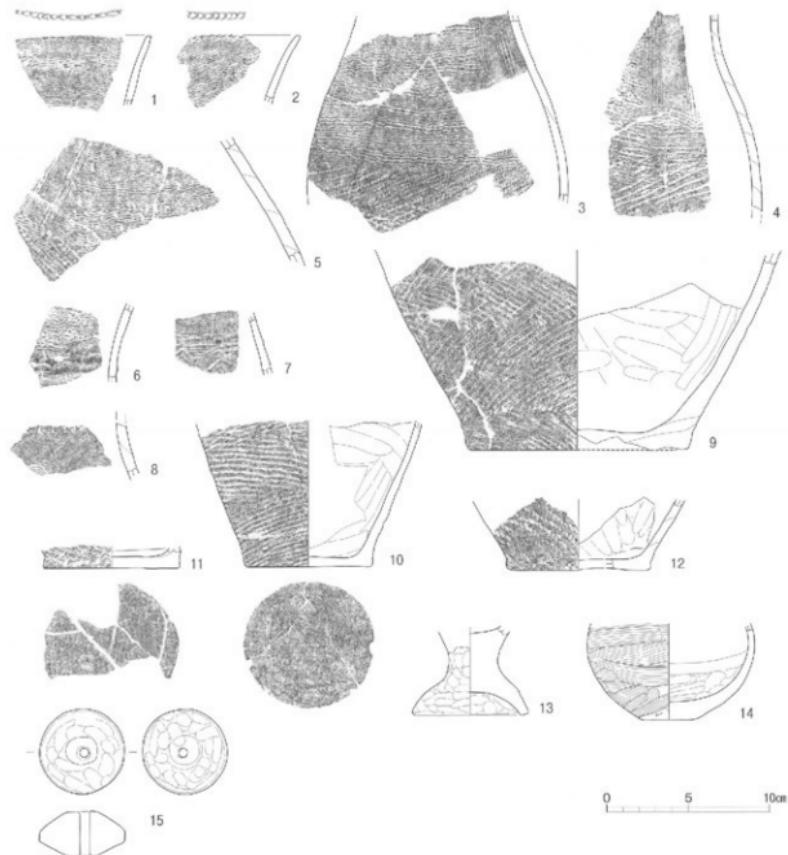
表16 48号住居跡出土遺物観察表

団体 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	— — —	口唇部角張状2肩によるキテ。口縫部4本筋の複位波次成（上→下）。内口は口唇部付近が複位の丁寧なナグ、他は斜位の丁寧なナグ。外側スズ付。	石英	良好	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	十手台式
2	弥生土器 壺	— — —	口唇部角張状1肩によるキテ。口縫部4本筋の複位波次成（概ね上→下）。内口は斜位の丁寧なナグ。	石英、骨針	良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	十手台式
3	弥生土器 壺	— — —	別部複位不明の附加条縫文（R・S・L・Z：下→上、右肩、骨針成文）刷毛目。内口は斜位の丁寧なナグ。	石英	良好	にぶい赤褐色	覆土上 十手台式
4	弥生土器 壺	— — —	別部複位不明の附加条縫文（R・S・L・Z：下→上）→底部有目。内口は斜位の丁寧なナグ。底部有脚。外側スズ付。	石英、角閃石、金星母、多量の白色火照帶成文（下→上）→底部複位成文（上→下）→底部上位が鋸歯状の丁寧なナグ、底部下位が複位のナグ。外側スズ付。	良好	外：にぶい黄褐色 内：灰青色	十手台式
5	弥生土器 壺	— — —	別部複位不明の附加条縫文（R・S・L・Z：下→上）→底部4本筋の複位波成（左：石英、右：角閃石、金星母、多量の白色火照帶成文（下→上）→底部複位成文（上→下）→底部上位が鋸歯状のナグ。外側スズ付。内口は複位のコヅレ付。	石英、角閃石、金星母、多量の石英、白石英	良好	外：明る褐色 内：にぶい黄褐色	十手台式



第41図 48号住跡

図版 番号	種別 器種	口径 高さ 直径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
6	弥生土器 豆	- -	頭部落し押捺縦文3条→粗粒直線文→、口絆部横條波次文(下→上、反対斜彎り)。内面は斜化したナメ。	石英、長石、角閃石	普通	外：暗褐色 内：に赤い黄褐色	十手台式
7	弥生土器 豆	- -	肩部輪郭不明の頭部直線文(下→S)、茎部界4本両の横文直線文→上開きの通溝文、翼部直線文横文→横捺波状文→頭部貼付文。内面はナメ。外面部熱による赤褐色。	石英、多量の白色 粘土、赤色	不良	外：深赤褐色 内：浅褐色	十手台式
8	弥生土器 豆	- -	頭部(切端)横捺波状文、单壁純文(下Lき)。内面 は横波のナメ。	石英、赤色粘土	普通	に赤い黄褐色	
9	弥生土器 豆	- 13.5	肩部(切端)横捺波状文(左L=+2L、右L=+2R:下→上)、 底部直線文。内面は縦・横波のナメ、底面付着は薄墨。	石英、角閃石、金 雲母、紫針	普通	外：に赤い黄褐色 内：に赤い黄褐色	



第42図 48号住跡出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 深さ 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
10	弥生土器 壺	— — 7.7	肩部輪廓不明の背加条縦文（R・S・L・Z：下→上、反時計回り）。底部奉皿形。内面は植付・新位のナダ。外面全体にまばらに入ス付着。内面の脚部下位に逆次のコギ。底は全体的にヨゴレ付着。	石英、長石、角閃石	普通	外：にぶい黄褐色 内：黒色	陶土中層 十三台式
11	弥生土器 壺	— — (8.3)	肩部輪廓不明の背加条縦文（R・Z）。底部木製底。内面はコギ付着。	多量の石英、白色粘土	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	十三台式
12	弥生土器 壺	— — (8.8)	肩部輪廓不明の背加条縦文（L・Z）。底部砂岩。内面は斜窓のナダ。外面スス、内面ヨゴレ付着。	石英、角閃石、多量の白色粘土	普通	外：灰黄色 内：灰紫褐色	陶土上層 十三台式

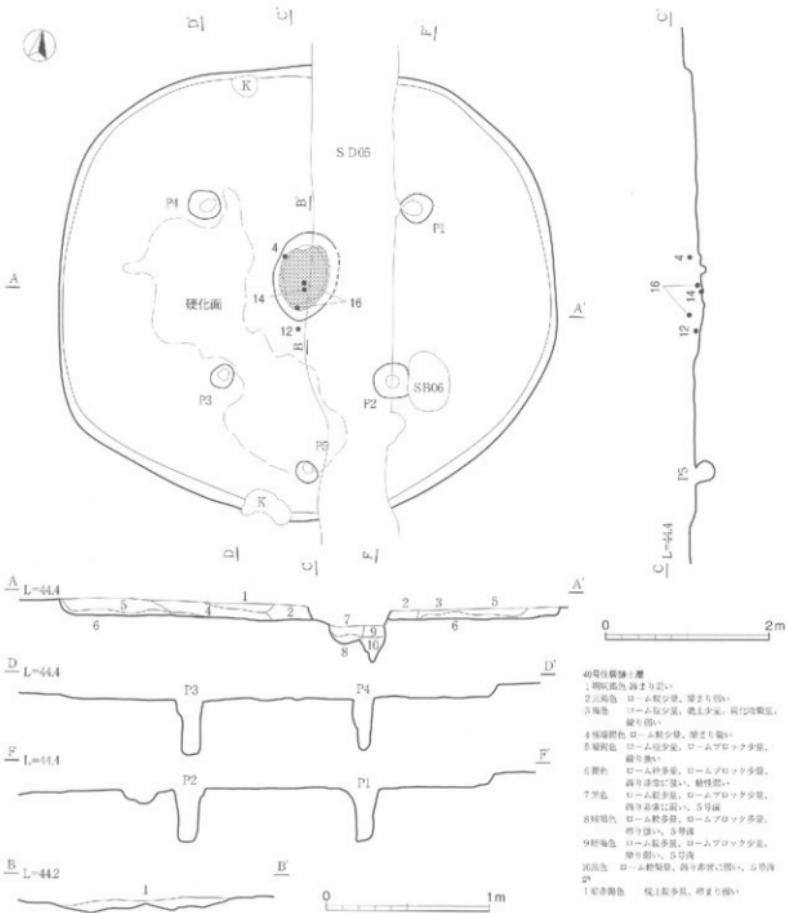
図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
13	弥生土器壺	-	脚部稍膨のナデ(瓶ね反時針回り)。脚部部木素痕。内面は脚部が擦・斜段のナデ。	石英、角閃石、金星母、骨灰、赤色、灰	良好	に赤い黄褐色	宋画上
14	十字彫付壺	6.6 3.25	外口はヘラケズリー唇・斜段のハケ。内面は横段のナデ。多量の石英、角閃、良好石、骨灰	外:灰青褐色 内:に赤い赤褐色	外:灰青褐色 内:に赤い赤褐色	壁土上向	
15	土質品 燒跡串		詳52、高27、毛深0.55、重700g。表裏面ともナゲ調整。石英、角閃石、骨灰好評	石英、角閃石、骨灰好評 片剥離孔。	良好	に赤い黄褐色	壁土中層

49号住居跡（第43・44図）

位置 A区北部、L4グリッドに位置する。規模と平面形 南北方向は5.58m、東西方向は6.06mを測る。平面形は橢円形。中世以降の5号溝が中央部を縱断し、多数のビットが重複する。また、古代の6号掘立柱建物跡の柱穴が重複している。主軸方位 N-10°-W 壁 壁高は5~20cmを測り、傾斜する。床 ほぼ平坦である。P4からP5にかけて硬化している。ビット P1~4が主柱穴、P5が出入口ビットであろう。炉 床面中央に位置し、浅い皿状に掘り込まれ、火床面の被熱は顯著である。覆土 自然堆積状である 遺物 遺物の出土量はやや多く、中へ破片の割合が高い。4・12・14・15・16はいずれも炉の直上にあたる覆土中から出土した。十王台式後半期の土器が主体で5・9・10・12は撲描文・縄文原体・胎土の特徴から二軒屋式系と考えられる。所見 住居跡の構築および廃絶時期は、弥生時代後期後半と考えられる。住居規模は、比較的大きいが、建替えの痕跡は全く認められない。

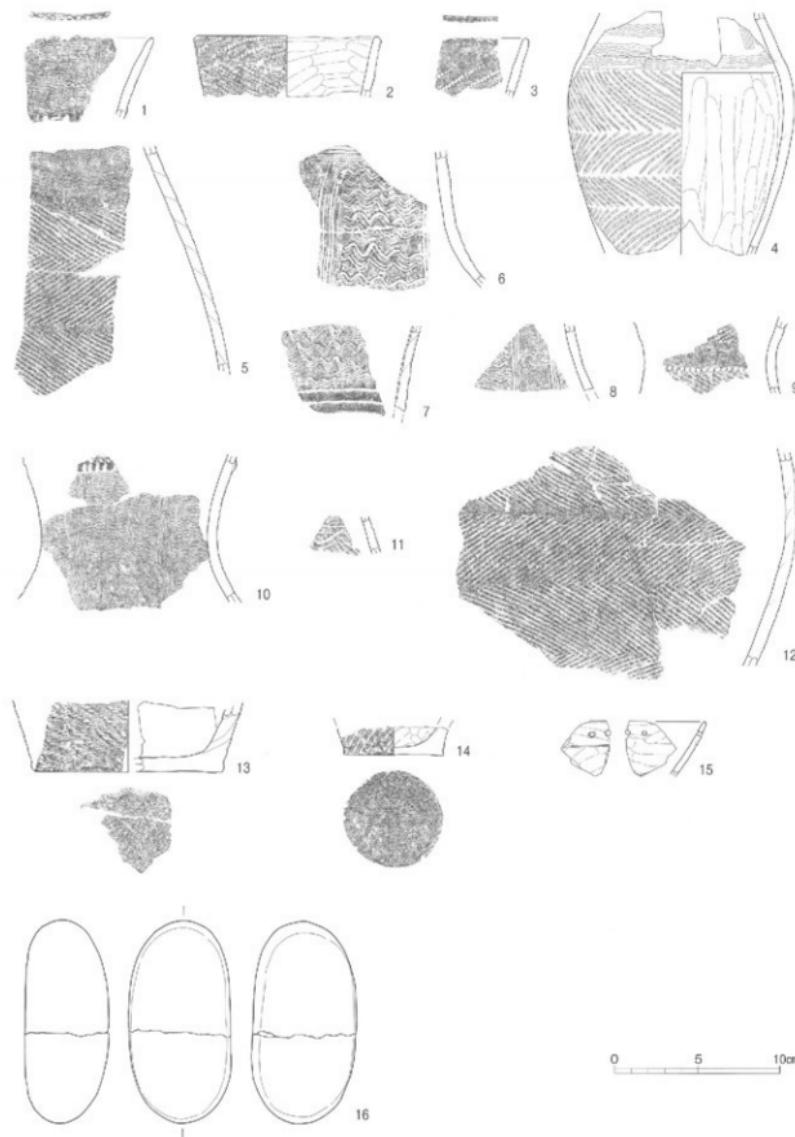
表17 49号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	-	内面部ヘラキザミ。脚部薄い浮出腰帶→内面部ら本面の壁足部又は脚位波状波(下→上)、内面は口付部近接部のナデ、底下は斜位のナデ。外面スス付帯。	石英	良好	外:褐色 内:に赤い黄褐色	十王台式
2	弥生土器壺	-	口縁部脚部小柄の附加条縄文(R-S-L-Z:下→F)。多量の石英、内面は斜位のナデ。		良好	黒褐色	十王台式
3	弥生土器壺	-	口肩部キザミ。口縁部斜位小柄の附加条縄文(R-S)。石英、内面は斜位のナデ。		良好	外:に赤い黄褐色 内:灰青褐色	十王台式
4	弥生土器壺	-	底部附細小柄の底部波状文(下→上)→脚部波状文(下→上)→腰帶部波状文(下→上)→腰帶部波状文(下→上)。内面は斜位のナデ。外面剥落部にスス付帯。		普通	外:灰青褐色 内:に赤い黄褐色	十王台式
5	弥生土器壺	-	脚部附加細小柄波状文(RL-T-L, LR+T-R:下→上)。多量の石英、長石、頭部10本の波状波状文。内面は斜位のナデ。		良好	に赤い黄褐色	
6	弥生土器壺	-	頭部5本の經位波状文→腰位波状文(上→下)→頭部 石英、金星母、骨灰		不良	赤褐色	十王台式
7	弥生土器壺	-	頭部5本の經位波状文→腰位波状文(上→下)。内面は骨灰。	骨灰	良好	に赤い黄褐色	十王台式
8	弥生土器壺	-	頭部4本の經位波状文→腰位波状文(上→下)。内面は石英、金星母、赤色		黒褐色		十王台式
9	弥生土器壺	-	頭部斜位不明の附加条縄文(R-S), 腰部附細小柄の好 多量の石英、白色、普通 附加条縄文(L-Z)→頭部9本の腰位波状文(上→下)。内面は石英、金星母、赤色				二井田式



第43図 49号住居跡

段階 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
10	弥生土器 壺	- - -	口底界に交叉網文を有する陰唇→側部 10 本の縦粒状 縫文→横捻状(下→上)。内面は擦痕のナガ。	多量の石英・漂石	良好	にぼい黄褐色	
11	弥生土器 壺	- - -	横部輪縫不明の対角条縫文(し・ぞ)→側部界之本同時 陶文による側部直縫文→上開きの透蓋文。内面は擦痕 のナガ。外腹スカベ。	石英	普通	外: 黒褐色 内: 灰青褐色	十三合式

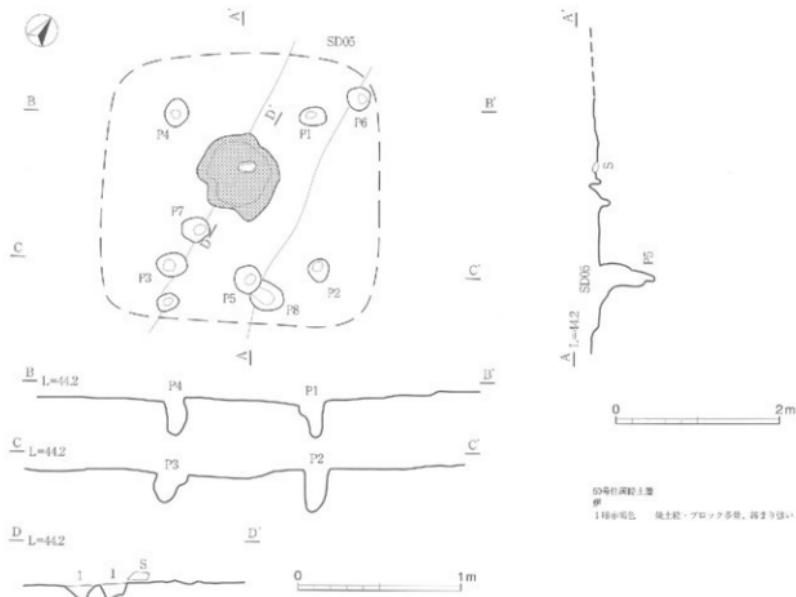


第44図 49号住居跡出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 器底直徑	特徴	埴土	焼成	色調	備考
12	弥生土器 壺	-	剥離輪明の附加条縦文 (R - S, L - Z : 上→下)。内面は横・斜位のナデ。外面板然による赤色化、内面削離中位に帯状のコグ付壁。	多量の石英	普通	外：赤褐色 内：黄褐色	二重式
13	弥生土器 壺	- (114)	剥離輪明の附加条縦文 (R - Z)。底部垂耳目板。内面は剥離。	多量の石英・白色 砂、角閃石	普通	赤褐色	十手式
14	弥生土器 壺	- 6.0	剥離輪明の附加条縦文 (R - S)。底部垂耳目板。内面は剥離のナデ。	石英、角閃石	良好	外：灰褐色 内：赤褐色	十手式
15	弥生土器 壺	- -	折り返し口縁。外面・内面ともに横・斜位のナデ。縫隙孔2箇所。	石英、金雲母	普通	赤褐色	
16	石器 形石		自然礫の表面全体に磨耗痕。被熱により表面全体が赤褐色に変色。石材：石英安山岩。長さ12.3cm・幅6.3cm・厚さ5.0cm・重さ509.7g。				

50号住居跡（第45図）

位置 A区北部、L 4 グリッドに位置する。規模と平面形が柱穴が確認されている。堅穴の規模は残存していないため不明であるが、45号住居跡を参考にして堅穴の推定破線を示した。中央を5号溝が縱断し、壊されている。主軸方位 N - 37° - W 壁 残存していない。床 - ピット P 1～4が主柱穴、P 5が出入り口ピットであろう。P 6・7（深さ39cm・34cm）は壁柱穴・補助柱穴であろうか。P 8（深

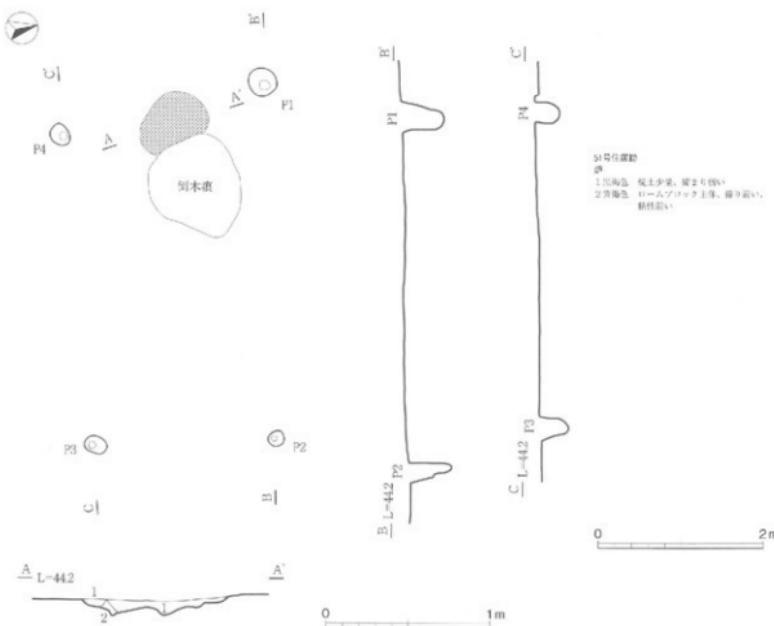


第45図 50号住居跡

さ23cm)は貯藏穴の可能性がある。 炉 床面中央に位置し、掘りこみはなく、被熱は強い。火床面からわずかに浮いた位置で、炉石が出土している。 覆土 - 遺物 柱穴から弥生土器の小片がわずかに出土している。 所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。

51号住居跡（第46図）

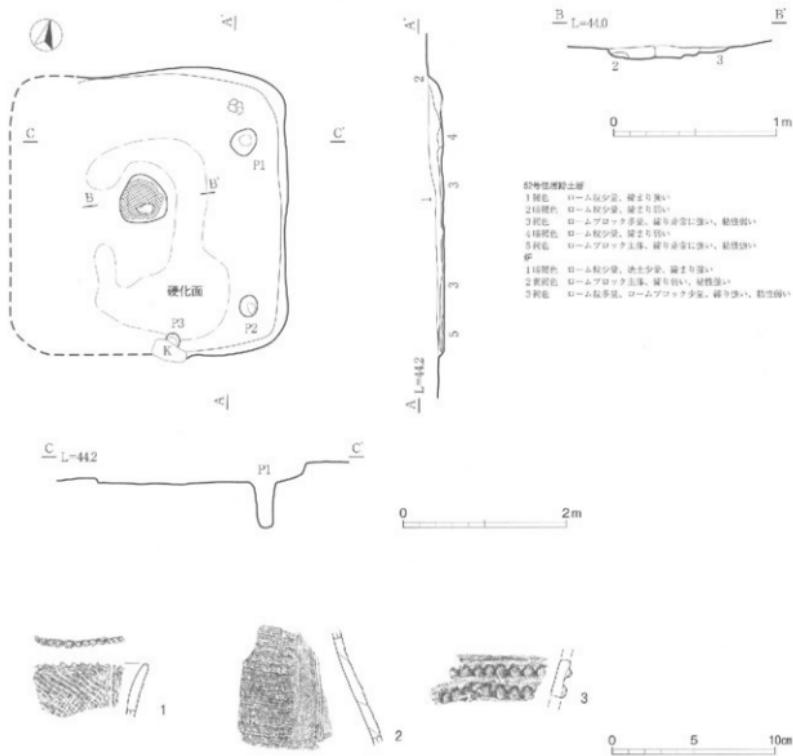
位置 A区北部、M4グリッドに位置する。 規模と平面形 堅穴は残存せず、主柱穴も確定できないため、規模・平面形は不明である。 主軸方位 - 壁 - 床 - ピット P1~4は、主柱穴の可能性があるが断定はできない。 炉 浅い皿状に掘り込まれ、被熱はやや強い。 覆土 - 遺物 - 所見 所属時期を判断する資料に欠けるが、炉や柱穴内の堆積土の状況から、弥生時代に帰属する可能性がある。



第46図 51号住居跡

52号住居跡（第47図）

位置 A区北部、K 4 グリッドに位置する。 **規模と平面形** 南北（主軸）方向は 3.55m を測り、東西方向は約 3.4m と推定する。平面は不整隅丸正方形であろう。 **主軸方位** N - 15° - W **壁 壁高** は 6 ~ 16cm を測り、傾斜する。 **床** 南壁際にのみ貼床がある。炉の周囲を除いた中央部が硬化し、周辺よりもわずかに高い。 **ピット** P 1・2 が主柱穴、P 3 が出入入口ピットであろう。主柱穴は北東隅と南東隅に寄った位置にある。 **炉** 床面中央に浅い皿状の炉があり、被熱は著しい。片岩系の自然礫を炉石としている。 **覆土** 自然堆積状を呈する。 **遺物** 遺物の出土量は少なく、大半が小破片で出土している。北東隅の覆土下層から、弥生土器の大型破片が出土している。十王台式主体で 1 は縦位の櫛撚直線文と附加条 1 種繩文によるやや異質な文様構成を呈する。 **所見** 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。



第47図 52号住居跡・出土遺物

表 18 52号住居跡出土遺物観察表

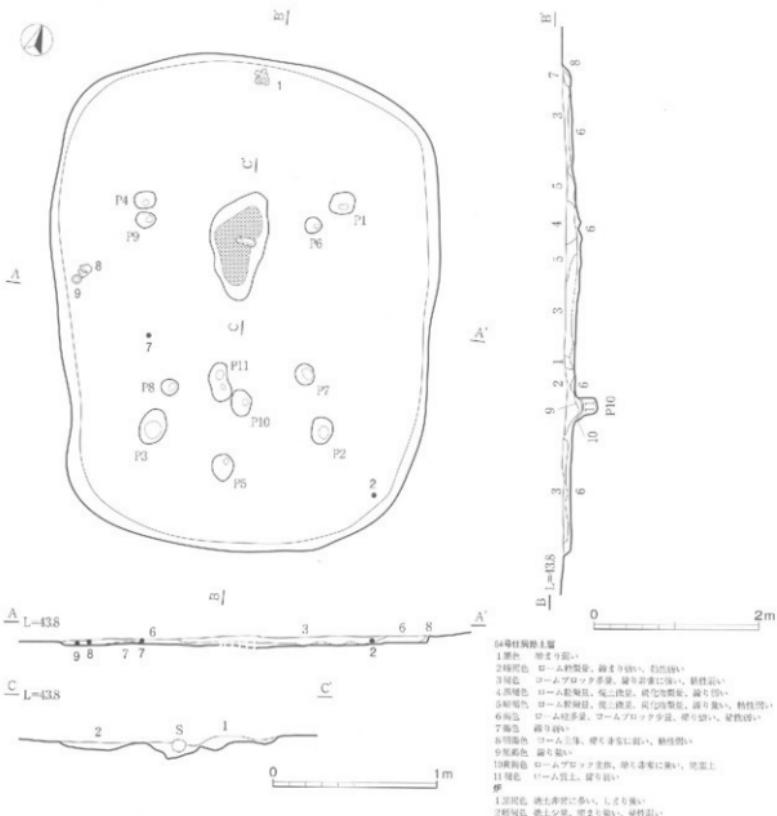
団版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	口部高さ底径によるキザミ、口部斜削加厚1種複文(3L+1L)、輪郭不明の附加条彫文(R-L-S)を下→上→右文→2次刻印施文式による継続の痕跡、内面は模倣のナダ。	石英	普通	外: 黒褐色 内: 灰褐色	
2	弥生土器 壺	-	照桐界3本唐の模倣区画状文→頭部笠置痕文→模倣液状文、西面は範例のナダ、外面スヌ、内面ヨゴレ付着。	石英	良好	に赤い黒褐色	丁口台式
3	弥生土器 壺	-	底部凸版のある厚い複合造形。内面は模倣のナダ。	石英、青石	普通	外: 廉赤褐色 内: 赤い赤褐色	十王台式

54号住居跡（第48・49図、巻頭写真図版3）

位置 A区北部、L 5グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は6.11m、東西方向は4.76mを測る。平面は不整長方形と不整隅丸長方形の中間形状を呈し、いわゆる小判形に近い。主軸方位 N - 18° - Wを指し、北北西に近い。壁 壁高は6～10cmを測り、傾斜する。床 ほぼ平坦な地床で、中央部がわずかに窪み、明瞭な硬化面は確認できない。ピット P 1～4が新主柱穴、P 6～9が旧主柱穴、P 5が新出入入口ピット、P 10・11が旧出入入口ピットと判断する。P 1では、直径19cmの暗褐色土の柱痕とローム質土の根固めを明瞭に検出した。また、P 6・9・10ではローム質土による閉塞あるいは貼床を確認している。P 2～4は抜取と判断したが、P 2底面では自然円礫を根石としていた。炉 床面中央北寄りに位置する。浅く掘り込まれ、被熱は著しい。平面は不整形で規模がやや大きく、同一地点で2時期の利用を考えられる。中央部には自然角礫の炉石が設置されているが、火床面からわずかに浮いている。覆土 自然堆積状を呈するが、6層はローム粒・ブロックが多く、人為埋没の可能性がある。炉とP 10の上では埋没の進行が遅く、特に4・5層については埋没過程においても炉の直上で被熱行為が継続したような状況が想定できる。遺物 北壁中央直下の床面において、1の略完形個体土器が横位で出土している。8・9弥生土器の底部が、西壁際から出土している。遺物の出土量は多く、中～大破片の割合が高い。十王台式後半

表 19 54号住居跡出土遺物観察表

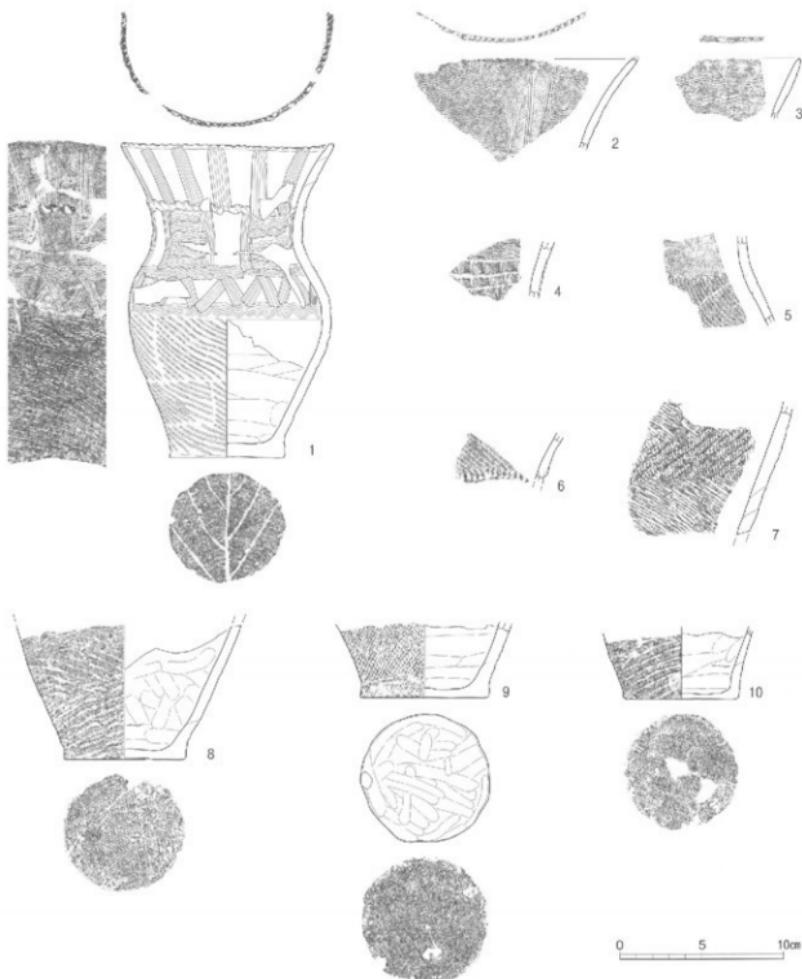
団版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	(12.7) 19.4 7.0	口部部へクザミ、頭部押捺痕第1条～1段部部5～6本の縦目痕文、輪郭附加1種複文(R-L+2L)と輪郭不明の頭部複文(R-L-Z)を下から上、反時計方向に施す。骨部・底部は1余字ずつ笠置区画復文・輪郭複文(反時計回り)、頭部複文(直順)、2～3段部は1種複文複数文(直順)、頭部複文(直順)、内面は模倣のナダ。外面骨部より上に赤いスヌ付着、底部以下と底端開脚に薄いスヌ付着。内面は模倣のナダ、底端に帯状のヨゴレ付着。	石英、青閃石、多 量の白色粘土		灰褐色	
2	弥生土器 壺	-	口部部へクザミ、小突起。口部複数笠置痕文3条一平、右英→腰部波状文(丁子上)、口部部1段に模倣区画波状文1条。内面は模倣のナダ、外面スヌ付着。	石英	良好	外: 黑褐色 内: 赤い黄褐色	十三台式
3	弥生土器 壺	-	口部部へクザミ、口部複数の模倣波状文。内面は多量の石英・白色 粘土付着。外面スヌ付着。	石英 粘土	普通	外: 赤い黄褐色 内: 淡褐色	上口台式
4	弥生土器 壺	-	複文3条のヘタ彫き複合縫隙で模倣波状文→内面に帶状剥離・右英 文が模倣・頭部部5本肩の模倣波状文。内面は模倣のナダ。	石英	普通	外: 赤い黄褐色 内: 黑褐色	十王台式
5	弥生土器 壺	-	複部延長1種彫文(R-L)を 模倣複数のナダ。	右英、骨針	良好	に赤い黒褐色	
6	弥生土器 壺	-	口部部頭部1種彫文(R-L+2L)→口部部下端に模 倣の墨牛で塗抹。内面は模倣のナダ。外面スヌ、内面 はヨゴレ付着。	右英	普通	外: 赤い黄褐色 内: 黑褐色	一軒所式系



第48図 54号住居跡

開拓番号	種別 器種	口径 基部 底径	特徴	粘土	焼成	色調	備考
7	粘土上器 蓋	-	圓形輪加施文(?)と前後段輪加施文(?)を交互に下から上へ施す。内面は施文のナダ。	多量の石英、長石、角閃石	良好	外: に赤い黄褐色 内: 明赤褐色	
8	強生土器 蓋	- 74	輪加施文不明の圓形輪加施文(L-S-L-Z: 下→上)。底面は横・斜位のナダ。外面スス、内面はグリッケ。	多量の石英、長石、角閃石、金雲母、骨灰、赤色斑	良好	に赤い黄褐色	十三台式
9	強生土器 蓋	- 79	底面輪加施文(L-R+2R、L-R+2L: 下→上)。底面ナダが溝。多量の石英、長石	多量の石英、長石、角閃石	良好	に赤い黄褐色	二軒式系
10	強生土器 蓋	- 70	圓形輪加施文(2種類文(L-R+2R、L-R+2L: 下→上))。底面は横・斜位のナダ。外面スス、内面はグリッケ。	石英、長石、角閃石	普通	外: 赤褐色 内: に赤い黄褐色	十三台式

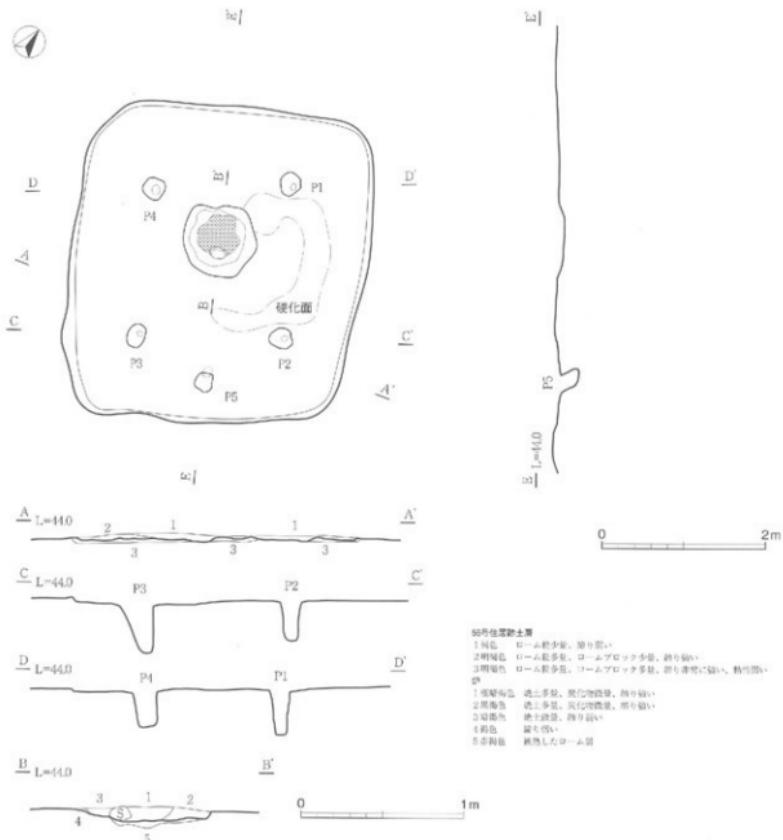
期の土器が主体だが、1は十王台式と二軒屋式の要素が混在する。5は頭部に無文帯を有し、胴部に单節R L繩文を施す。7は無節Rと前々段附加条1種の特殊な繩文原体を使用している。9は底部圧痕がなく、ナデによって調整されている。所見 主柱穴配置は、P 9を起点にして拡張・更新している。竪穴の拡張も十分想定できるが、その痕跡は見いだせなかった。住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。



第49図 54号住居跡出土遺物

56号住居跡（第50図）

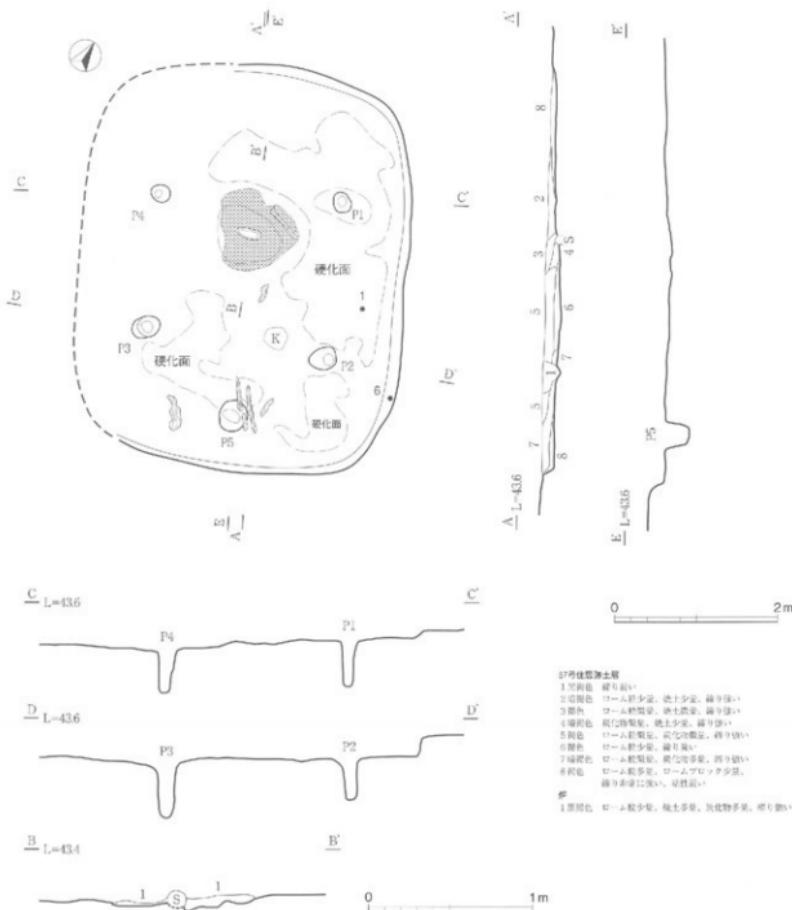
位置 A区北部、L5グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は3.95m、東西方向は3.67mを測る。平面は不整隅丸長方形状を呈する。主軸方位 N-33°W 壁 壁高は4cmを測り、やや傾斜する。床 やや凹凸があり、炉の周りが馬蹄状に硬化する。薄い貼床を伴う。ピット P1～4が主柱穴、P5が出入口ピットと考えられる。P2では、直径10～15cmの軟弱な黒褐色土の柱痕を検出したが、ほかは抜取と判断された。P5は斜めに穿たれている。炉 床面中央やや北寄りに構築され、砂岩の自然円礫が炉石として設置されていた。覆土 自然堆積であろう。遺物 覆土中からごく少量の弥生土器が出土したもののみ、図示できる遺物はなかった。所見 住居跡の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。



第50図 56号住居跡

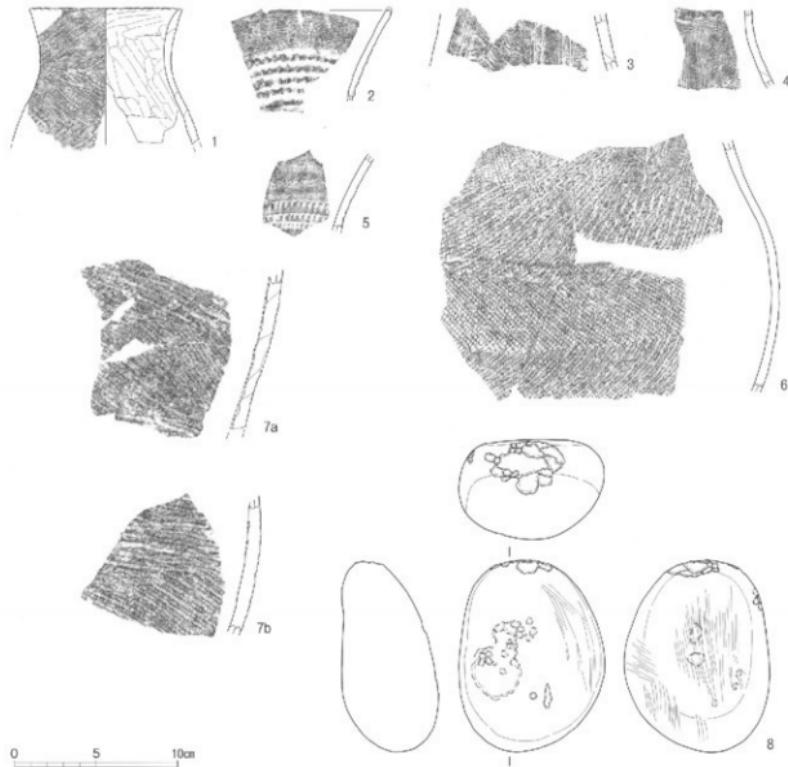
57号住居跡（第51・52図）

位置 A区北部、L6グリッドに位置する。規模と平面形 西壁側は搅乱によって壊されている。南北(主軸)方向は5.02mを測り、東西方向は約4.0mと推定する。平面は不整圓角長方形であろう。主軸方位 N-32°W 壁 壁高は3~26cmを測り、傾斜する。床 やや凹凸があり、床面の東側から南側にかけて硬化する。ただし、主柱穴周辺と炉の南側はやや軟弱である。ピット P1~4を主柱穴、P5を出



第51図 57号住居跡

人口ピットと判断する。柱痕と根固めを明瞭に検出できたピットはない。 炉 床面中央やや北寄りに位置し、規模がやや大きい。被熱は顕著で、中央には砂岩の自然円礫が炉石として設置されている。ただし、石の被熱は弱い。 覆土 8層は人為埋没の可能性がある。7層は炭化材が含まれる層である。2～4層の堆積状況は、炉直上の埋没が最も運かったことを示しており、埋没過程にあっても、炉が使用され続けていた可能性がある。 遺物 遺物の出土量はやや少なく、小～中破片の割合が高い。南東隅の覆土上層から6の胸部の大型破片が、東壁近くの竪穴中央部からは1の口縁部破片が出土している。十王台式土器が主体である。5は頭部に帯状刻突文が3条施文される。6・7は附加2条の附加条1種縄文が施文されている。竪穴南側と炉の南側および炉内から、床面から少し浮いた位置で炭化材を検出している。 所見 8層埋没後に上屋が焼失したものと想定する。住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。



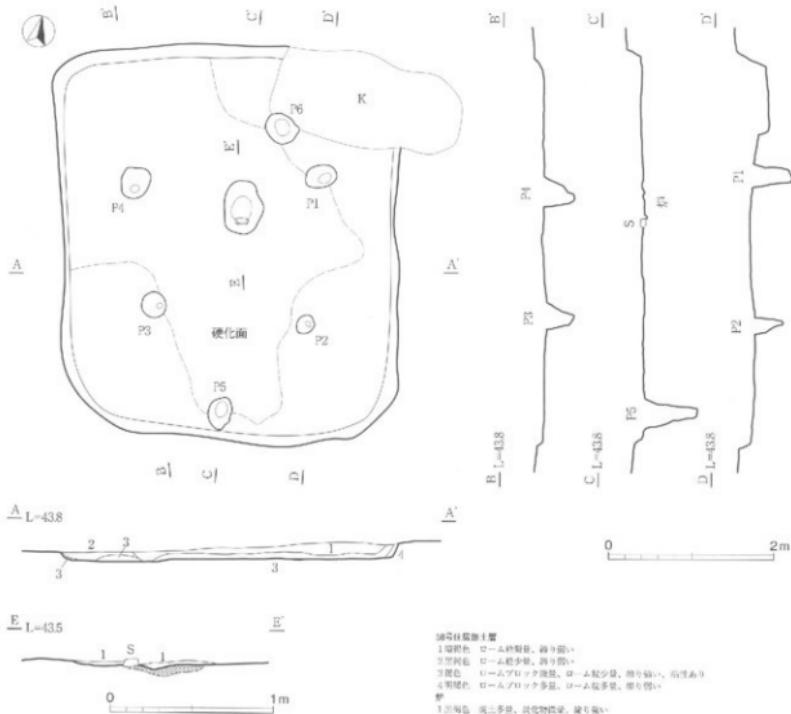
第52図 57号住居跡出土遺物

表20 57号住居跡出土遺物観察表

国版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	(9.2) -	口唇部へテカサ [△] 。口内～頂部附加条：横底文(矢I+L, I+R,I+下)。口縁部はコナゲ。内面は腹～胴部斜底 のナダ [△] 。縦底文コナゲ、外面にスス付着。	石英、角閃石	普通	外：油褐色 内：灰青褐色	
			-	-	-	-	-
2	弥生土器 壺	-	口唇部小突起。頭部押捺痕5条～口縁部5本筋の横位 流状文(下→上)。底部押捺痕5条。内面は口唇部付近横 位のナダ [△] 。他は斜位のナダ [△] 。	石英、長石、多量 の金云母	良好	外：に赤い黃褐色 内：暗灰黃褐色	十王台式
			-	-	-	-	-
3	弥生土器 壺	-	腹部5本筋の斜位直線文2条～半脱～側位波状文(下→ 上)。内面剥離のナダ [△] 。	石英、角閃石、金 雲母、赤色粒	普通	外：に赤い黃褐色 内：灰青褐色	十王台式
			-	-	-	-	-
4	弥生土器 壺	-	腹部爪痕のある押捺痕 [△] →7本筋の底位直線文～横位波 状文(下→上)。頭部押捺痕5条の横位波状文。内面は底位 のナダ [△] 。外側スリット型。	石英、角閃石、赤 色粒	普通	灰青褐色	十王台式
			-	-	-	-	-
5	弥生土器 壺	-	頭部底位のヘラ跡と頭底痕 [△] →側位斜文3条～口縁部5 本筋の横位波状文。内面は横位のナダ [△] 。	石英	良好	外：黒褐色 内：に赤い黃褐色	十王台式
			-	-	-	-	-
6	弥生土器 壺	-	頭～胴部斜加条1種横文(矢I+2L, I+R+2L: 下 →上, 反時計回り)。内面は頭部が横位のナダ [△] 、胴部が斜・ 斜位のナダ [△] 。	石英、角閃石、金 雲母、赤色粒	良好	外：に赤い黃褐色 内：灰青褐色	
			-	-	-	-	-
7	弥生土器 壺	-	頭部斜加条1種横文(矢I+2L: 上→下)。横位斜文 [△] ～斜位直 線文 [△] 。内面は頭部焼けた、剥落。外壁熱による剥離、内面コケ 付着。	多量の石英、長石	普通	外：に赤い黃褐色 内：灰青褐色	
			-	-	-	-	-
8	石器 磨石類	-	表・裏面(點→齊)、上口(齊→縫)。直縫縁の表面全体に磨耗紋や剥離。表・裏面や上口に嵌刺痕。下面に 鉋形充満。石材：石英安山岩。長さ11.7cm、幅8.9cm、厚さ6.1cm、重さ8,877.0g。	-	-	-	-

58号住居跡（第53・54図）

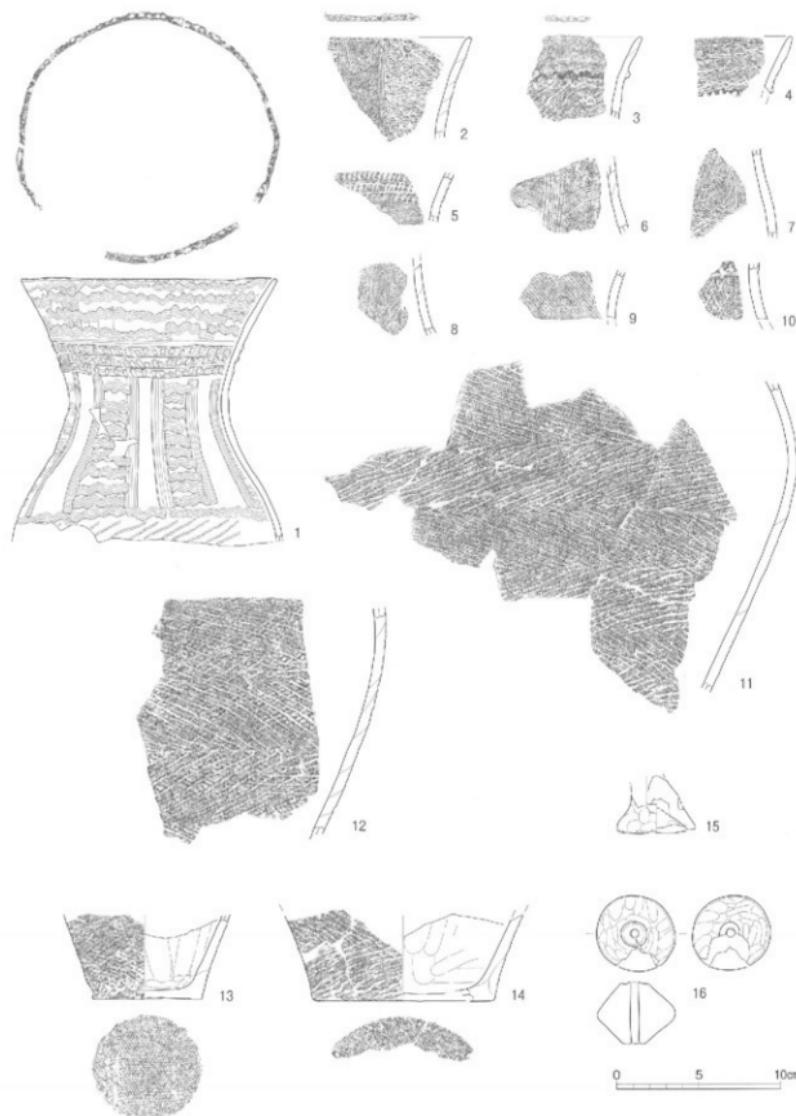
位置 A区中央部、L 6 グリッドにある。規模と平面形 460 × 390 m のやや縱に長い長方形。主軸方向 N - 2° - W 裏 壁高は10cmを測り、やや外傾する。床 P 5 から住居中央部、さらにP 4周辺部にかけて硬化している。ピット 6箇所。P 1 ~ 4 は主柱穴。P 5 は炉の対面の壁際にあり、出入り口ピットと考えられる。P 6 は性格不明。炉 長径60cm、短径45cmの楕円形で深さ4cm。覆土 床上を全体に暗褐色土主体とした2枚の層が被覆している。遺物 住居中央部や東側の床面から弥生時代後期の煮の破片が出土している。遺物の出土量は多く、中へ大破片の割合が高い。十王台式後半期の土器が主体で1は頭部隆帯に棒状工具による刺突が加えられ、表面は濃いススが付着している。5は頭部に帶状突突如文が施文される。6は櫛描文の特徴、胎土から二軒屋式系と考えられる。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第53図 58号住居跡

表21 58号住居跡出土遺物観察表

回収番号	種別 器種	口唇 器等 底径	特 徴	粘土	焼成	色調	備考
1	泥生土器 甕	15.2	口唇部丸錐状工具によるギザミ。頸部同様の工具によるギザミ(底部3ヶ所)・口唇部4~5本両の腹壁直轄文(一部)→横波状文(下→上、反対側)有り)、腹部斜面不明の滑面直轄文(上)、腹部一側波状文(下→上、右→左)、内面は斜面直轄、頭部斜面、1縦部横波状のナヂ(瓶底下から上へ調整)。外面部直上及(一)縦部、瓶底下(一)腹部直上壁に長いスス、内面は直直状のヨゴレ有る。	石英、角閃石、骨針	良好	外:にぶい褐色 内:にぶい黄褐色	十三台式
2	泥生土器 甕	-	口唇部ヘラギザミ。口唇部5本両の腹壁直轄文2条1基位・横波状文(下→上)、ストリット内山形文(左→右)。内面は横波状。	石英、角閃石、赤色粘土	良好	にぶい黄褐色	十五台式
3	生生土器 甕	-	口唇部ヘラギザミ。口唇部無文(横波のナヂ)。颈部斜面 縫合1条→対波状1條波文(L.R+R)。内面は横波のナヂ。外底スス付頚。	石英	普通	外:にぶい黄褐色 内:黄褐色	

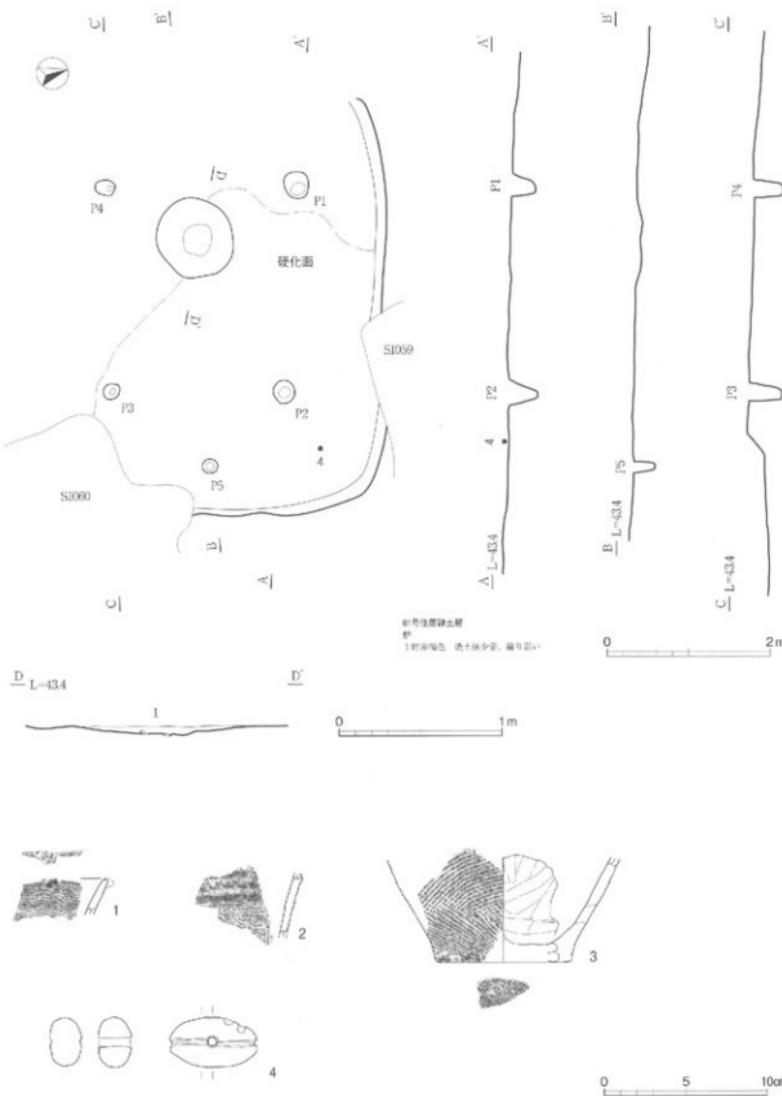


第54図 58号住居跡出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 底高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器 壺	-	須部丸状工具によるキサリ跡等→口部等3本脚の位置 石英、角閃石 粗粒灰。内面は横位のナゲ。外面スス付帯。	普通	に赤い黄褐色	十三台式	
5	弥生土器 壺	-	須部横位のヘラ括き跡沈刷→帶状斜突文→3本脚の位置 芯厚文、模様波状文。内面は横位のナゲ。外面スス付帯。	石英、角閃石	普通	外：灰黄褐色 内：に赤い黄褐色	十台式
6	弥生土器 壺	-	腹部9~10本脚の下巻き蓮瓣文→横位直腹文。内面は横位のナゲ。	多量の石英、長石	良好	に赤い赤褐色	二軒式系
7	弥生土器 壺	-	須部横不明の附加柔彫文(R・S)→底部横位直腹文 波紋文2条→底部直腹文→横位直腹文(下→上、左→右)。 内面は横位のナゲ。外面スス付帯。	石英	普通	外：灰黄色 内：に赤い黄褐色	十三台式
8	弥生土器 壺	-	腹部R・S章の横位直腹文→横位直腹文(下→上、右→左) 内面は斜位のナゲ。外面スス付帯。	石英、長石	普通	外：に赤い黄褐色 内：に赤い黄褐色	十台式
9	弥生土器 壺	-	口縁剛陶系1種残文(R L + 2 L)、須部熱充満(疑似 のナゲ)。内面は粗、絆合のナゲ。外面スス付帯。	石英、角閃石	普通	灰黄褐色	
10	弥生土器 壺	-	須部剛陶系→4本脚の堅直直腹文→横位波文(ヘリ 端を斜切)文(左上がり→右上がり)。内面は斜位のナゲ リ・ナゲ。	石英	良好	に赤い黄褐色	十三台式
11	弥生土器 壺	-	須部剛陶系2種複文(L R + 2 L)、輪間不明の附加各 残文(R・S・S)を下→上へ施す。内面は粗、斜位のナゲ。 外スス、内面はゴレ付帯。脚部付近に墨斑。	石英、長石、角閃 石、青鉄	良好	外：に赤い黄褐色 内：に赤い橙色	十台式
12	弥生土器 壺	-	須部剛陶系2種複文(L R + 2 L、RL + 2 RL)。内面は 直腹文。内面は横位のナゲ。下部が撲焼のナゲ。	石英、長石、角閃 石、金雲母	良好	明黄褐色	十五台式
13	弥生土器 壺	66	須部剛陶系2種複文(R・R)。底部 直腹文。内面は横位のナゲ(下→上)→複数のナゲ。 外スス、内面ゴレ付帯。	石英、長石	良好	外：に赤い黄褐色 内：に赤い知色	十三台式
14	弥生土器 壺	(10.8)	須部剛陶系2種複文(R・S、L・Z、下→上)。 底部横不明の附加柔彫文(R・S)。内面は 斜位のナゲ(細密なナゲ)。	石英、長石、角閃 石、金雲母、赤色 鉄	普通	外：に赤い黄褐色 内：に赤い橙色	十台式
15	弥生土器 ミニチュア壺	47	外唇ナゲ。内面ナゲ。縦筋模様押り出し。	石英、多量の白色 鉄	不良	黄褐色	
16	上製品 幼年期		径4.7cm、高3.8cm、孔径(0.45)、重約480g、表面面ナ ベ素地。片割れ、片割れ。	石英	良好	褐灰色	

61号住居跡(第55図)

位置 A区中央部、L 6~L 7グリッドにある。規模と平面形 (5.00) × (3.50) mで、59号住居・60号住居によって床面の一部が壊されている。主軸方向 N=68°-W 壁 - 床 炉の東側全体が礎化している。西側の床面は地形傾斜で削平されている。ピット 5箇所。P 1~4は土柱穴。P 5は炉の対面の壁際にあり出入り口ピットと考えられる。炉 長径96cm、短径88cmの楕円形で深さ4cm。覆土 - 遺物 遺物の出土量は非常に少なく、大半が小破片で出土している。住居西側の隅部床面から4の上縁が出土している。所見 出土遺物と造構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第55図 61号住居跡・出土遺物

表22 61号住居跡出土遺物観察表

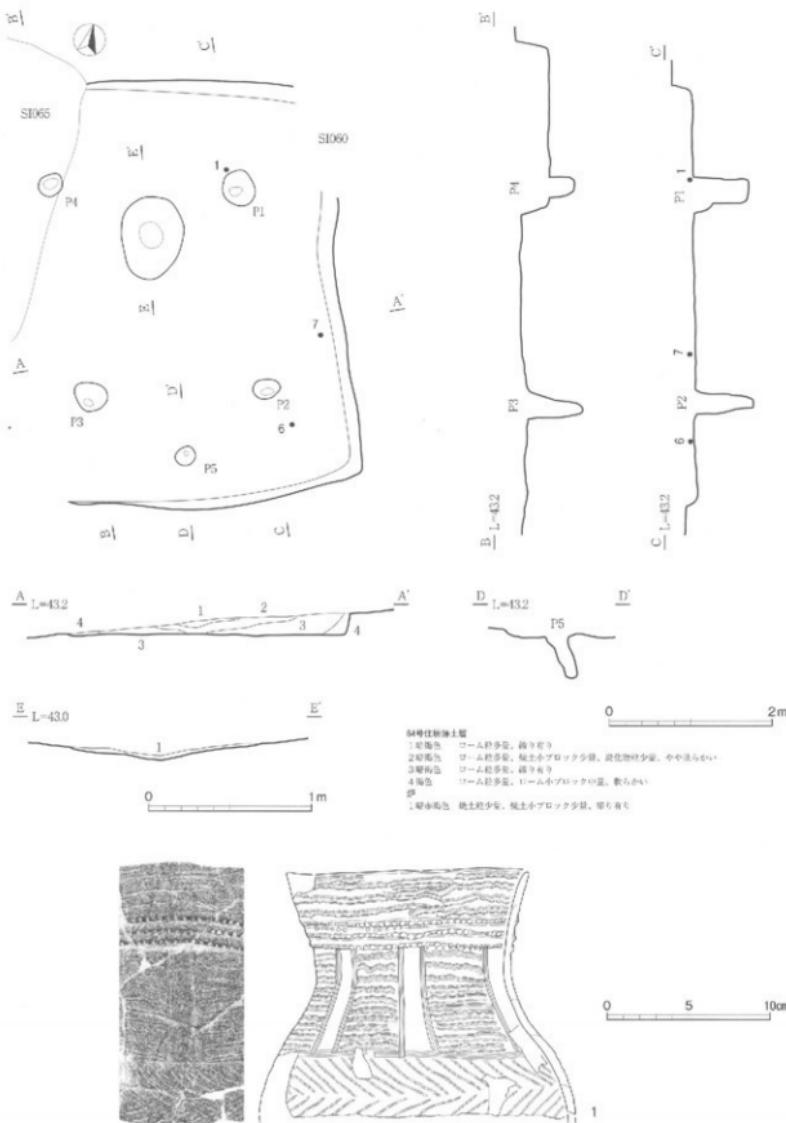
団版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	猪生土器 空	-	口唇部横文キザミを施した先端研削口→ハラキザミ→口 縁部3本筋の横文(底付文(下→上)、内面は横・斜位のナデ、 外面部ス付文)	石英	普通	外: 黒褐色 内: に赤い黄褐色	七王台式
2	弥生土器 壺	-	頸部算い平培隆型3系→口部3本筋の横位横底文、重 複底部直線文→横位直底文(上→下)。内面は横・斜位の ナデ。	石英	普通	外: 黑褐色 内: に赤い黄褐色	十三台式
3	弥生土器 壺	(82)	腹部加厚1種複火(R L + 2 L, LR + 2 R + 1下)、多量の石英、長石 底部直線文。内面は斜位のナデ。外面部ばらなス、内面 は赤いヨゴレ文。	多量の石英、長石	良好	外: 黑褐色 内: 橙色	-
4	十製品 土罐	-	長33、幅30、厚2.0、孔径(0.55)、重[31.77] g。表裏 面をナゲ彫刻。片側空孔。	多量の石英、角閃 石、赤色柱	普通	浅黄色	-

64号住居跡(第56・57図)

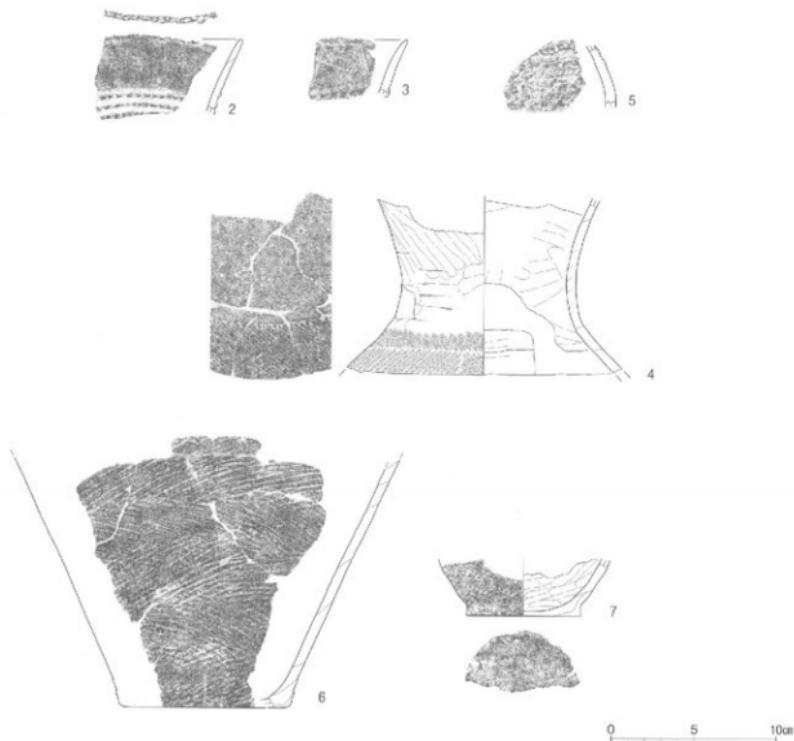
位置 A区中央部、L 7グリッドにある。規模と平面形 5.03×(3.50)mで、60・65号住居によって床面の一部が壊されている。主軸方向 N-17°-W 壁 燃高は約23cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居全体に弱く硬化している。ピット 5箇所。P 1からP 4は主柱穴。P 5は深さ50cmで斜に約68°の角度で掘りこまれている。出入り口ピットと考えられる。炉 長径94cm、短径73cmの楕円形で深さ5cm。覆土 ローム粒を多量に含んだ暗褐色土を主体にした覆土上。遺物 P 1の周辺から1、P 2の周辺からは6・7の弥生土器が覆土3層中より出土している。遺物の出土量はやや多く、中~大破片の割合が高い。十王台式前半期の土器を主体とする。4・5は十王台式ではなく、4は頭部に無文帯を有し、単節RLとLRの原体により羽状縦文が構成されている。5は肩部に竹管文が施される。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

表23 64号住居跡出土遺物観察表

団版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	(149)	腹部丸棒状工具によるキザミ底付口→口縁部3本筋の 横位直底文(下→上)、反時針回り)、頸部強焼小明の附加 直線文(下→上)、尻部付口(縫合せ付)→頭 部横底文(直線文)→横部底文2条×6段位→块 位底付文(上→下、右→左)。内面は口部計2横位のナデ、 底部が研磨のナデ。外面部まばらにスス付文。肩部付 近は赤いスス付。	石英、長石、多量 の骨針	良好	に赤い黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	-	口唇部横文キザミ、口縁部無文(横位のナデ)。頭部押出 縦等、内面は横位のナデ。	石英、長石、骨針	普通	褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	-	腹部印物隆型→口部4本筋の山形文(反時針回り)。内 面は横位のナデ。外面部ス付文。	石英、長石、余霧 母、骨針	普通	に赤い黄褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	-	口縁→頭部は無地(横・斜位のナデ、焼結)。肩部以下單 節縞文(良し、し)と横底付文(上→下)。内面は頭部斜 位のナデ。肩部は焼結のナデ。	多量の石英、長石、 骨針	普通	に赤い黄褐色	濃方
5	弥生土器 壺	-	腹部強焼小明の附加直底文(R-S)。底部は弱焼接溝 で底部に骨質工具による軋突文。内面は横・斜位の ナデ。	多量の石英、白色	不良	青灰色	-
6	弥生土器 壺	(100)	腹部強焼小明の附加直底文(R-L+2L)。軋突不明の附加斜 位(R-S)を下→上へ変文。内面は直・斜位のナデ(裂 石、金雲母、骨針)。	石英、長石、角閃 石、金雲母、骨針	良好	外: に赤褐色 内: に赤い褐色	-
7	弥生土器 壺	(70)	腹部強焼不明の附加直底文(L-Z)。底部有孔底。内 面は横・斜位のナデ。外面部まばらにスス付。	石英、長石、骨針	普通	外: 深青褐色 内: に赤い褐色	十王台式



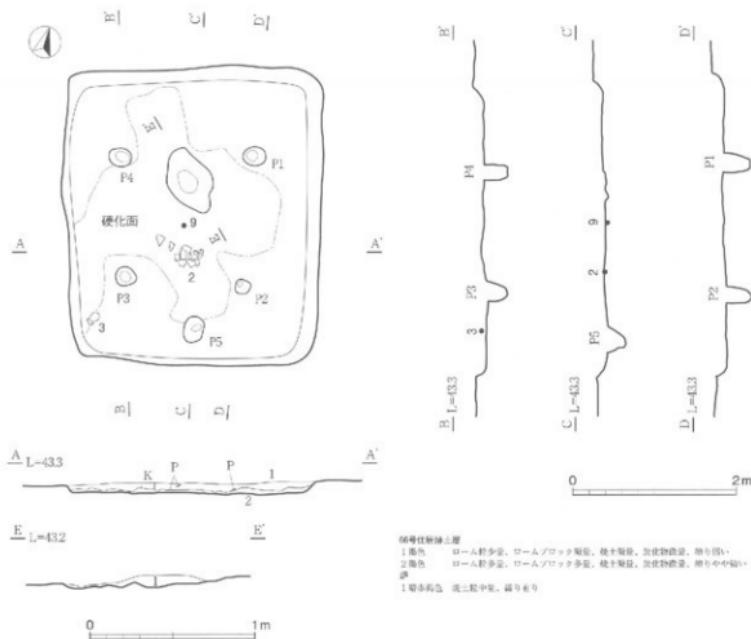
第56図 64号住居跡・出土遺物①



第57図 64号住居跡出土遺物②

66号住居跡（第58・59図）

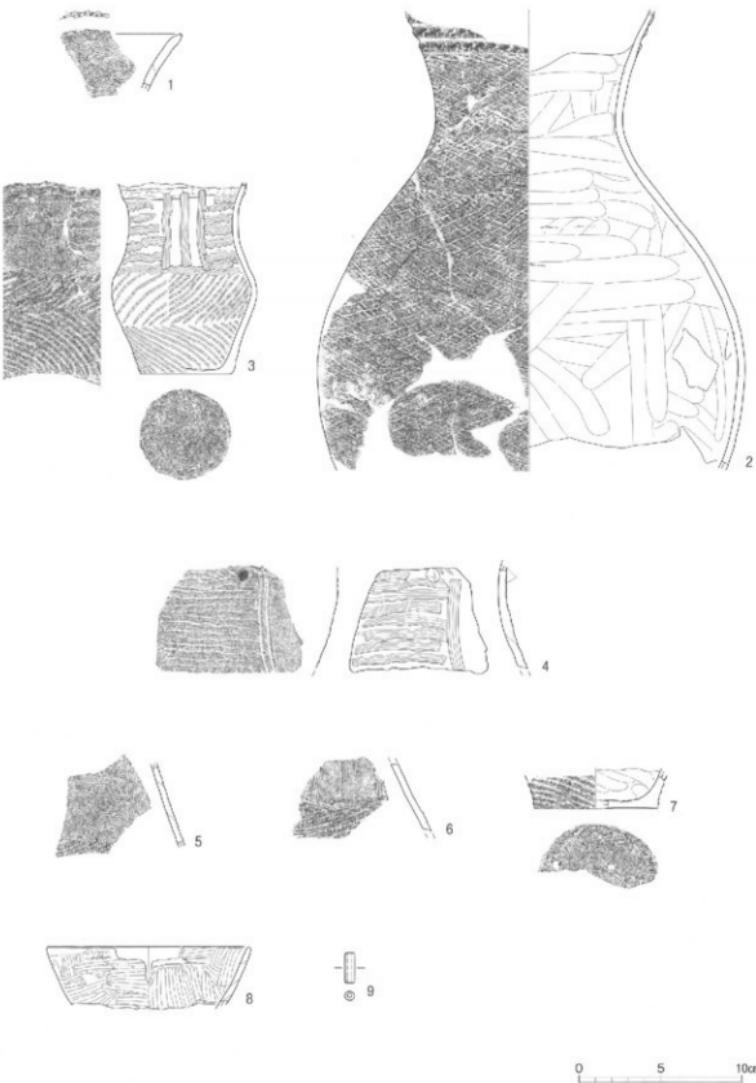
位置 A区中央部、L 7グリッドにある。規模と平面形 2.90 × 3.40 mの縦長長方形。主軸方向 N - 12° - W 壁 壁高は約13cm、やや外傾して立ち上がる。床 住居の中央部を中心に硬化している。ピット 5箇所。P 1からP 4は主柱穴。P 5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径82cm、短径51cmの梢円形で深さ7cm。覆土 褐色土を主体にした覆土で、床面を直接被覆する下層堆積にはロームブロックが多量に含まれる。遺物 炉の南側床面から9の緑色凝灰岩製の管玉が、住居南西隅の床面から3の小型壺が出土している。遺物の出土量は多く、大破片の割合が高い。十王台式後半期の土器を主体とする。4は円錐状の貼り付け文を施す。8は土師器の堀でミガキが施されている。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第58図 66号住居跡

表24 66号住居跡出土遺物観察表

器種番号	種別種	口徑 器高 直徑	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弦生土器 壺	- -	口唇部ヘラキザミ。口部沿4本面の傾位波状文(下→上)。内面は底部のナギ。	石英	普通	外: 黄褐色 内: 深黄色	十王台式
2	弦生土器 壺	- -	底部八角のある押捺波状3条→周→腹部附加条2種類文(L+1, R+1: 下→上)。内面は底・斜位のナギ→積位のナギ。外側まばらな墨斑。	石英、長石、角閃石、チャート、金雲母	良好	外: に赤い黄褐色 内: に赤い褐色	十王台式
3	弦生土器 壺	- 5.5	副部輪跳不明の附加条繩文(R-S, L-Z: 下→上)。口唇界部・輪跳窓部、頸部界4本面の繩位区脚波状文→底部附加条繩文3条×4段位→環状波状文(下→上、時計回り)。底部丸真。内面は底部窓、斜位のナギ。腹部はあたたかの剥落者らしい。外面全体にスス付着、底・切端部は赤色化着しい。	石英	普通	灰青褐色	十王台式
4	弦生土器 壺	- -	底部輪跳不明の附加条繩文(R-S)→4本面の輪跳窓部繩文→環状波状文(下→上)→円錐形の突起。内面は輪・斜位のナギ。	石英、多量の角閃石、骨針、赤色粒	良好	外: に赤い黄褐色 内: に赤い褐色	十王台式
5	弦生土器 壺	-	副部輪跳不明の附加条繩文(R-S)→底部5本面の輪跳窓部繩文3条→頭部多精量区脚波状文(反時計回り)→頭部横波状文。内面は底・斜位のナギ。	石英、骨針	良好	外: に赤い黄褐色 内: に赤い褐色	十王台式
6	弦生土器 壺	- -	副部輪跳不明の附加条繩文(R-S)→頭部5本面の輪跳窓部繩文3条→頭部多精量区脚波状文(反時計回り)→頭部横波状文。内面は底・斜位のナギ。	石英、骨針	良好	外: に赤い黄褐色 内: に赤い褐色	十王台式



第59図 66号住居跡出土遺物

第IV章 A区の遺構と遺物

因版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
7	弥生土器 壺	- - (7.6)	頸部付加条2枚調文（L+R型）。腹部有目模・植物種子 压痕。内部同位のナデ。外側はぼらにスス、内面全口 にコロ留め。底面には折子形等。	石英、長石、角閃 石	普通	外：灰青褐色 内：墨褐色	十王台式
8	十円器 壺	(12.5)	口唇部底辺のミガキ→模位のミガキ、口唇部付近模位の・石英、金雲母 ナデ。内面は模位のハケメーリー層・新位のミガキ。	普通	灰青色		
9	石製品 骨器	-	長185、幅66、厚20、孔径0.3、重11g。片側穿孔。丁寧な精緻。緑色玻璃岩質。				

67号住居跡（第60図）

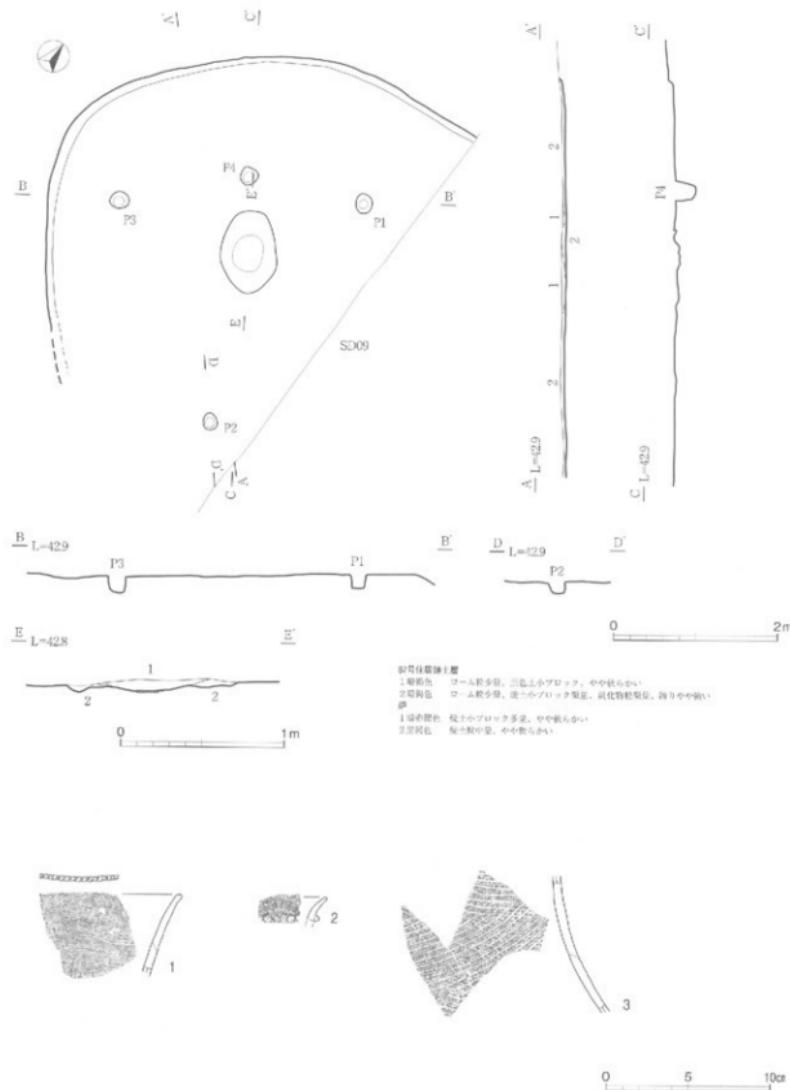
位置 A区中央部、M8グリッドにある。 規模と平面形 $4.22 \times 3.98\text{ m}$ 主軸方向 N- 2° -E 壁
壁高は約4cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 床 全体に弱く硬化している。 ピット 4箇所。P1は深さ
13cm、P2は深さ12cm、P3は深さ16cm、P4は深さ23cm。 炉 長径96cm、短径66cmの長辺円形で深
さ6cm。 覆土 暗褐色土を主体としている。 遺物 遺物の出土量は非常に少なく、大半が小～中破片
で出土している。弥生時代後期の煮小片が出土している。すべて十王台式期の所産と考えられるが、詳細な
時期は不明である。 所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

表25 67号住居跡出土遺物観察表

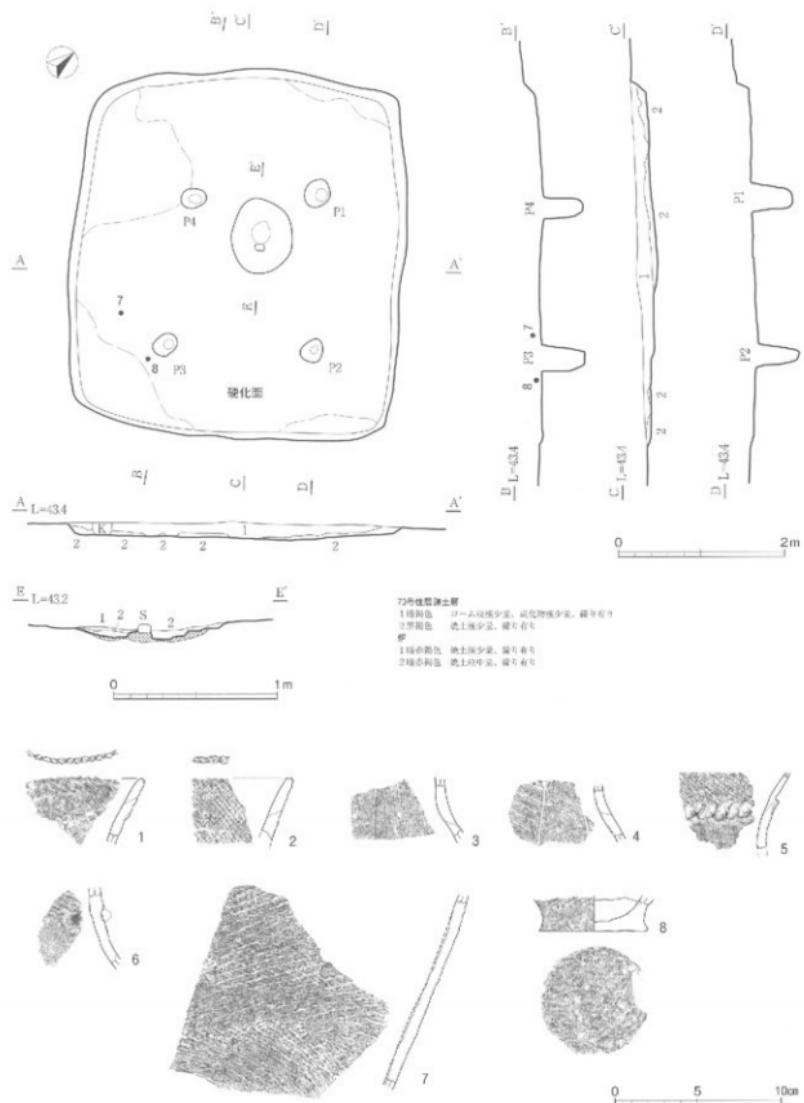
因版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	口唇部ハラキズミ、口縁部6本脚の横位模状文（左斜顎 右直）、内面は模位のナデ。	石英、長石 等	普通	において青褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	口唇部模文（焼位のナデ）。強調模文模位によるキダミ模 位。内面は模位のナデ。	石英、多量の金雲母 等・白色粘	普通	外：において黄褐色 内：墨褐色	
3	弥生土器 壺	- -	頸～脛部付加条2枚模文（R+L）、輪綱不明の系乱模 文（L-Z）を上→下へ模文。内面は強・弱位のナデ。	石英、金雲石、金 雲母	普通	灰青褐色	十王台式

73号住居跡（第61図）

位置 A区中央部、M6・M7グリッドにある。 規模と平面形 $3.9 \times 4.35\text{ m}$ の僅かに縱長の方形。 主
軸方向 N- 48° -W 壁 壁高は約17cm。 床 全体に硬化しているが、住居四隅とP4の西側の硬化が
弱い。 ピット 4箇所。P1からP4は主柱穴。 炉 長径92cm、短径74cmの梅円形で深さ7cm。 加
石を持つ。 覆土 暗褐色土主体の覆土である。 遺物 P3付近の覆土から、8の壺底部片、7の胴部片
が出土している。遺物の出土量は少なく、小～中破片の割合が高い。十王台式主体だが、二軒屋式系（5・6）
やその他の系統の土器（2）も含んでいる。 所見 出土遺物から弥生時代後期の十王台式期の住居跡と考
えられる。



第60図 67号住居跡・出土遺物



第61図 73号住居跡・出土遺物

表 26 73号住居跡出土遺物観察表

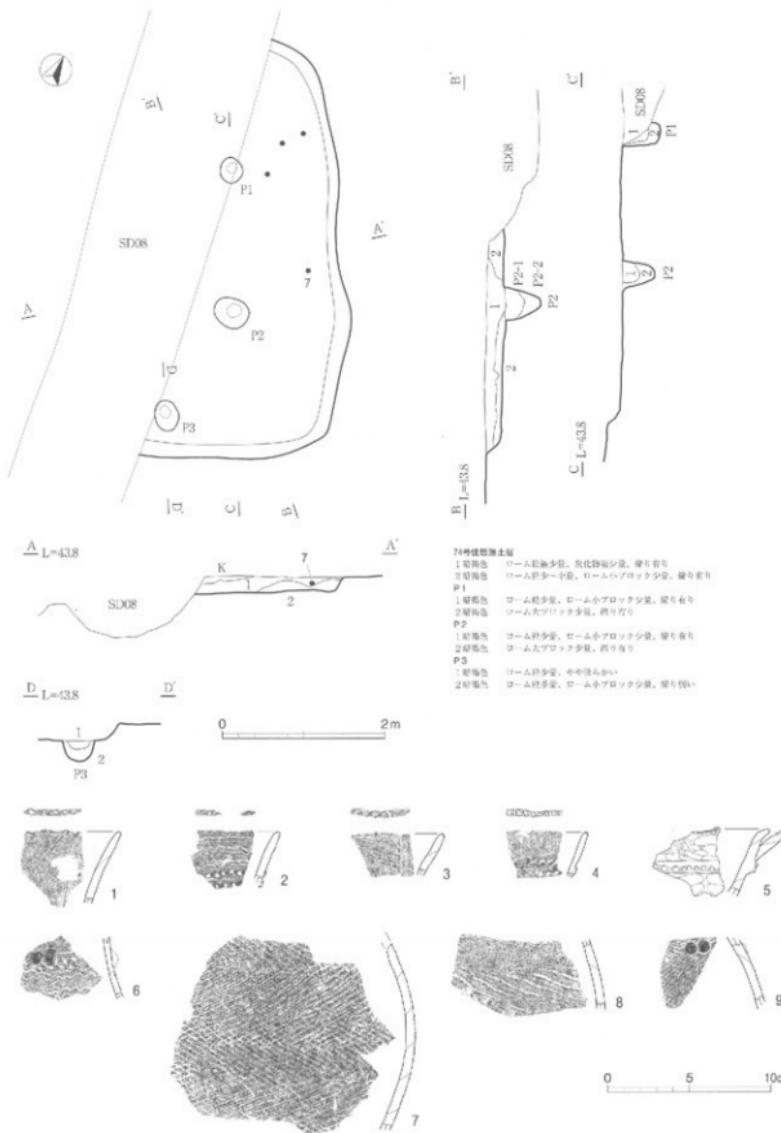
図版番号	種別種	口徑 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 甕	-	山野部遺文を含む。口縁部別部矢1種焼文(R.L~2.L)。口縁部に複数工具によるキザミ。内面は横位のナゲ。外底スリット。	多量の石英、長石 普通	に赤い褐色	-	十王台式
2	弥生土器 甕	-	口縁部ヘリキザミ。口縁部底部焼文(R.L)、一部ナゲ焼し。内面は横・斜位のナゲ。	石英、長石、角閃石、赤色板	良好	褐褐色	-
3	弥生土器 甕	5.6	頭部2本面の腹位焼成状。内面は横・斜位のナゲ。	石英、長石、角閃石 普通	外: 緑灰青色 内: 淡黄色	十王台式	-
4	弥生土器 甕	-	頭部4本面の腹位直線文→焼成後次文。内面は横・斜位のナゲ。剥落。	石英、角閃石、多量の白色粉	不良	外: 黄褐色 内: 淡灰青色	十王台式
5	弥生土器 甕	-	口縁部焼文(横位のナゲ)。剥離圧痕のある仰位→胎体不明の重加焼文(L~Z)。内面は口縁部横位のナゲ。留めは横・斜位のナゲ。	石英 普通	黄褐色	-	-
6	弥生土器 甕	-	口縁部胎体不明の附加焼文(L~Z)→口縁部下段に附着焼文(僅みに押し込む)。底部焼文(横・斜位のナゲ)。内面は横位のナゲ。	多量の石英、長石 良好	外: に赤褐色 内: 棕色	十王台式	-
7	弥生土器 甕	-	頭部焼成不明の附加焼文(R~Z、L~S: T→上)。内面は横・斜位のナゲ。大半が剥落。	多量の石英、長石、角閃石、骨 良好	褐色	-	-
8	弥生土器 甕	6.7	底部下端焼成のナゲ→頭部胎体不明の附加焼文(R~S)。底部モリ痕。内面は剥離焼成。底面に焼成工具の凹陥・剥離。	石英、長石、角閃石、赤 良好	褐色	-	十王台式

74号住居跡（第62図）

位置 A区中央部、M6グリッドにある。規模と平面形 5.20 × (2.21) mで、8号溝に住居の西側半分を壊されている。主軸方向 N - 32° - W 壁 壁高は約22cm、外傾して立ち上がる。床 全体にやや軟質な床面である。ピット 3箇所。P1は深さ48cm、P2は深さ19cm、主柱穴と考えられる。P3は深さ25cm、出入り口ピットと考えられる。炉 - 覆土 炭化物を極少量含んだ暗褐色土が主体である。
遺物 遺物の出土量はやや少なく、中～大破片の割合が高い。十王台式前半期の土器が主体であり、5は片口壺である。覆土1層から7の胴部片が出土している。所見 出土遺物から弥生時代後期の十王台式期の住居跡と考えられる。

表 27 74号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別種	口徑 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 甕	-	口縁部ヘリキザミ。口縁部スリット内に5本の山形文(反対折り目)、縦直線文→横位焼成状。内面は横位のナゲ。	石英、多量の角閃石、赤色板	普通	浅黃褐色	-
2	弥生土器 甕	-	口縁部丸棒状工具によるキザミ。口縁部3本面の横位焼成文。内面は横・斜位のナゲ。外底スリット。	石英、骨 普通	外: 深黄褐色 内: に赤い褐色	十王台式	-
3	弥生土器 甕	-	口縁部丸棒状工具によるキザミ。口縁部2本面の腹位直線文→横位焼成文(△+上)。内面は横位のナゲ。	石英、角閃石、骨 良好	浅黃褐色	-	十王台式
4	弥生土器 甕	-	口縁部ヘリキザミ。頭部溶着→墨書きを押切→口縁・腹部後方に丸棒状工具によるキザミ。内面は口・石英、角閃石、全焼成横位のナゲ・斜位のミガキ。頭部横位のナゲ。内面 底面は焼・縮位のナゲ。	石英 普通	外: 淡褐色 内: 淡灰色	-	-
5	弥生土器 片口甕	-	口縁部・頭部溶着に丸棒状工具によるキザミ。内面は口・石英、角閃石、全焼成横位のナゲ・斜位のミガキ。頭部横位のナゲ。内面 底面は焼・縮位のナゲ。	石英 良好	外: 淡褐色 内: に赤い褐色	十王台式	-



第62図 74号住居跡・出土遺物

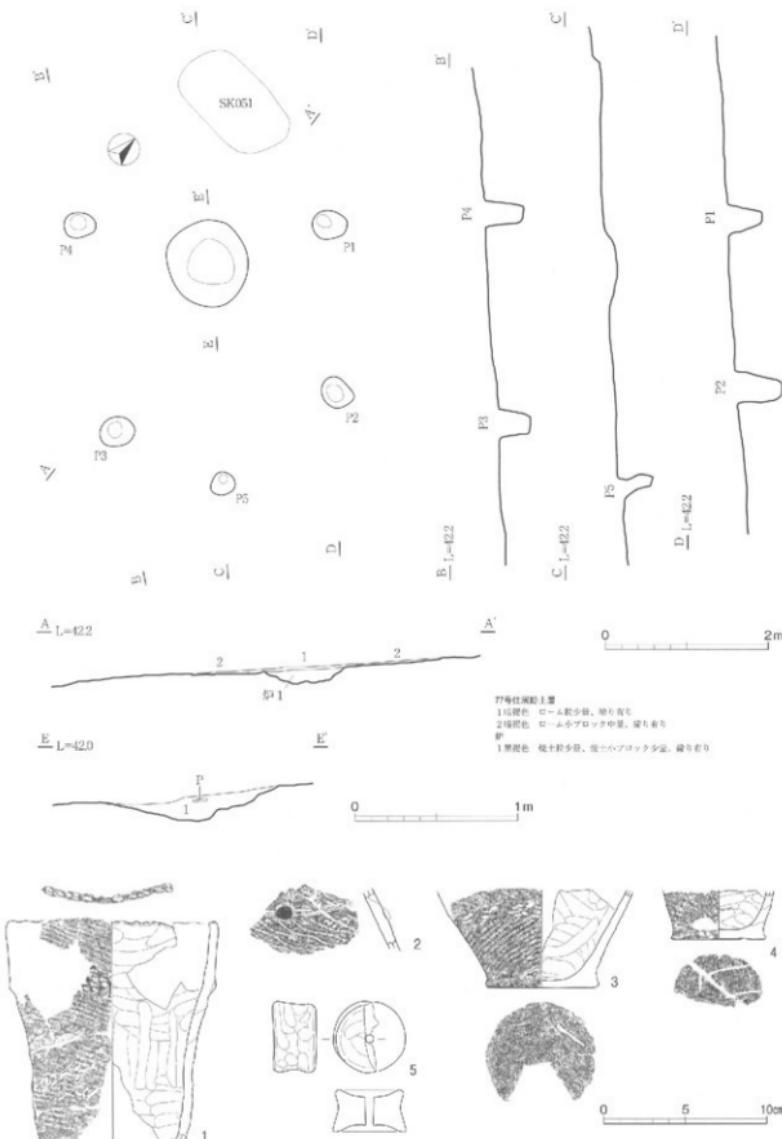
図版 番号	種別 器種	口径 最高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
6	弥生土器 壺	-	京都内軸の残る半裁竹管状工具による模倣焼成→筒状 右尖 の工具による横空波状文、丸棒状工具による羽突文→2 箇所の斜付文。内面は斜位のナガ。	普通	灰青褐色		
7	弥生土器 壺	-	崩落焼成不明の附加条縞文（R・Z・L・S・D→上）。石英、長石、角閃石 内面は粗、斜位のナガ。斜下斜位付基部を焼付のナガ。	石英、長石、角閃石 石英、赤色斑	外：灰褐色 内：に赤い褐色		
8	弥生土器 壺	-	崩落焼成不明の附加条縞文（L・Z）→底部界5本筋の 石質、長石、多量 備燒 楕円底更直線文→腹部底位更直線文→輪位波状文。内面は の金髪雲、斜付 線+斜位のナガ。外周部スリット付。	普通	外：灰青褐色 内：に赤い黄褐色	十三台式	
9	弥生土器 壺	-	底部界加1直線文（L R + Z R）、崩落不明の附加条縞文 内面（L・Z）→底部界3本筋以上の横位波状文→2底 付のボタン状斜付文。内面は残底のナガ。	石英、角閃石 石英、角閃石	普通	外：灰青褐色 内：に赤い黄褐色	

77号住居跡（第63図）

位置 A区中央部、O 7～O 8グリッドにある。 規模と平面形 - 主軸方向 N = 48° - W 壁 - 床 全体にやや織りのある床面として確認された。 ピット 5箇所。P 1からP 4は主柱穴。P 5は出入り口ピットと考えられる。 炉 長径106cm、短径98cmの楕円形で深さ15cm。 覆土 植薄く暗褐色土が残存していた。 遺物 炉の覆土から壺の底部や胴部片、紡錘車等が出土している。遺物の出土量はやや少なく、中～大破片の割合が高い。1は十手台式の深鉢形土器である。 所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

表28 77号住居跡出土遺物観察表

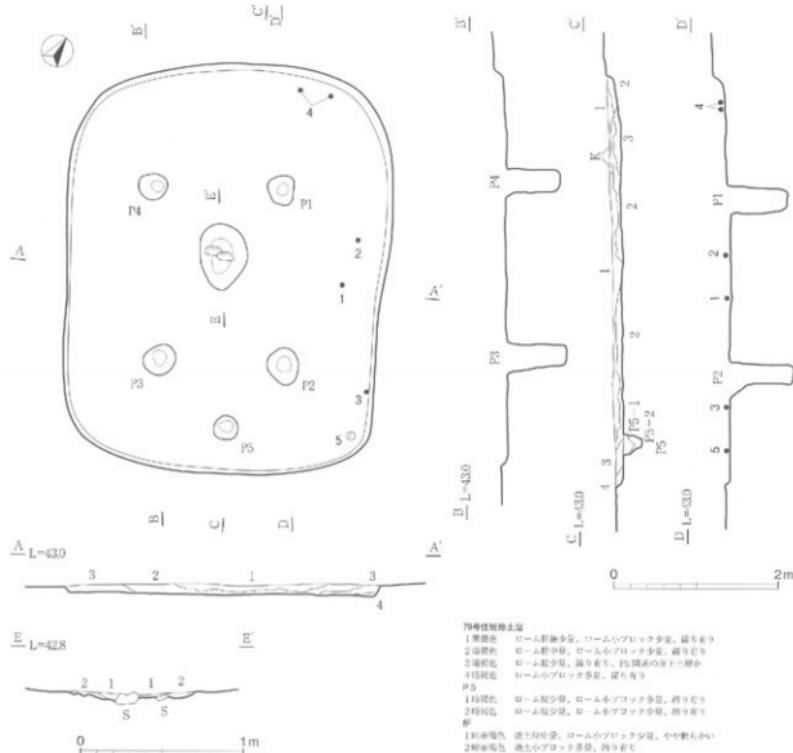
図版 番号	種別 器種	口径 最高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺鉢	-	口沿～腹部輪郭不明の附加条縞文（L・S・L・Z） →一部崩落焼成。口唇部、瓶底に同様の墨体による焼文 キテ有り。内側には凹線、済造焼成のナガ、崩落後、斜位の ナガ。外周部は紀に赤いスレ。以下に薄いスレ付着。内 面には山口路～数段にヨコレ付着。	石英	普通	外：に赤い黄褐色 内：灰青褐色	十三台式
2	弥生土器 壺	-	崩落焼成2種縞文（L・L）→底部界3本筋の偏心凹 面直線文→頭部底位直線文→ヘラ書き崩落文（左上が リーカー上がり）→頭部界ボタン状斜付文。右底は西面歪れ。 外周スリット付。	石英、長石、香料、 赤色粒	普通	外：に赤い黄褐色 内：に赤い黄褐色	十三台式
3	弥生土器 壺	67	崩落焼成不明の附加条縞文（R・S・R・Z・D→上、 時計回り旋文）。底部界直線。内面は横、斜位のナガ、斜 位へのナガ。外周まばらにスレ付着、底面は底一付着。 内面まばらにヨコレ付着。	石英、角閃石	普通	外：に赤い黄褐色 内：灰青褐色	十三台式
4	弥生土器 壺	(56)	崩落焼成不明の附加条縞文（L・Z）→底部界底付の ナガ。底部不整。内面は斜位のナガ。	石英	普通	外：灰青褐色 内：に赤い黄褐色	
5	土器片 紡錘車	-	径(4.4)、高27.孔径(0.6)、重(27.9) g、表面凹凸溝壁、 裏面は頑、斜位のナガ調整、片裂隙孔。	石英、長石、安息 石英		に赤い褐色	



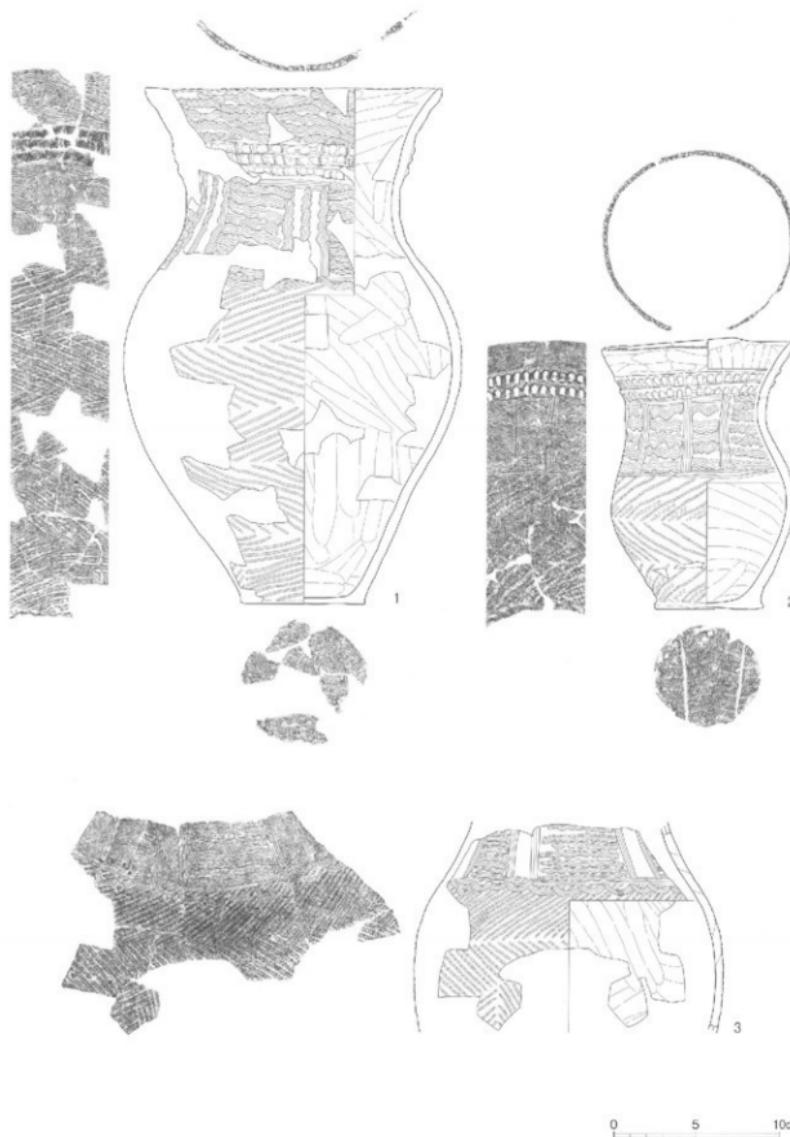
第63図 77号住居跡・出土遺物

79号住居跡（第64～66図）

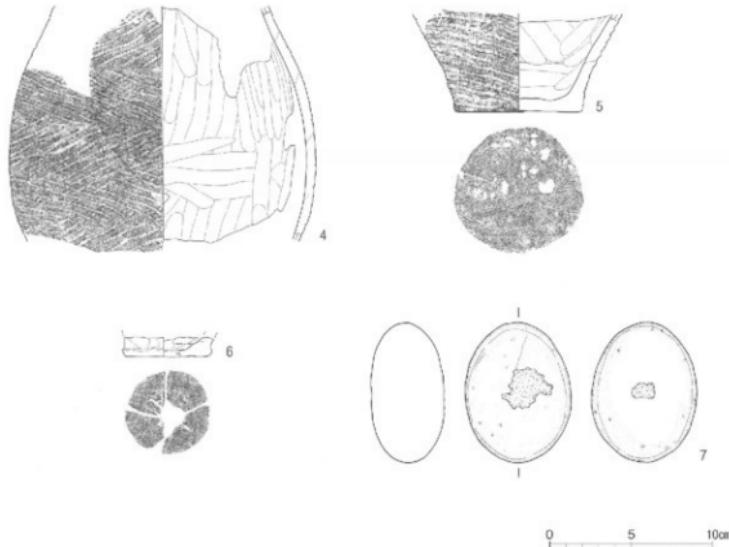
位置 A区中央部、M8グリッドにある。規模と平面形 5.07×3.90 mの縦に長い長方形。主軸方向 N- 38° -W 壁高は約11cmである。床 全体にやや弱いが硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径82cm、短径59cmの楕円形で深さ5cm。中央やや南寄りに自然石を2つ設置して炉石としている。覆土 上層が黒褐色土層、下層が暗褐色土の自然堆積層。遺物 1・2は東壁際、3・5は南東隅の壁際、4は北東隅の壁際で床面から僅かに浮いた状態で出土している。また、1は小～中破片でまとまり、2は形状をとどめ、横倒しの状態で出土している。遺物の出土量は多く、中～大破片の割合が高い。十王台式前半期の土器を主体とし、明確な二軒屋式土器は出土していない。1は頭朋界の区画文に直線と波状文、3は直線文と上開きの連弧文が施文される。所見 出土遺物から、弥生時代後期十王台式期の住居跡と考えられる。



第64図 79号住居跡



第65図 79号住居跡出土遺物①



第66図 79号住居跡出土遺物②

表29 79号住居跡出土遺物観察表

回数 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	粘土	焼成	色調	備考
1	茎生土器 鉢	(18.0) 31.8 (7.5)	口部無縫或縫（R）を斜弧状文。腹部爪孔のある押出模倣3条～4縫文。本筋の横粒状紋。網目状織不明。刃切条縫文（r・S、L・Z・上→下）。口部素・削削具痕直縫文・上端き逃張文・斜弧腹壁法文3条×新定6半位・横弧底状文（r～L）。記記有目食。内面は副部下に底壁のナギ。底面付近部位のナギ。但は斜位のナギ。外面部脚中位から上位S筋、以下はスラス化消失。内面はスラスに充満するヨゴレ付着。一部擦状をなす。	石英、骨針	良好	灰青褐色	十三台式
2	茎生土器 盤	11.5 16.8 6.5	口唇部へヨサミ。口端界丸縫状文。其によるオギテ縫帶2条・口部無縫文（脚位のナギ）。腹部は複数窓のアーチ模倣直縫文1筋既文（L.R+2.R）、と輪環状の横粒直縫文（L.R+2.R）。脚部は複数窓1筋既文。脚部前部は斜位2条の横粒直縫文。脚部後部は1筋既文（下→上・右→左）。底部木質層。内面は口部無縫位のナギ。口部斜縫文・脚・脚部上縫。斜位のナギ。脚部下半は薄いスラスはらな赤色化。口端部・脚・斜縫位・脚部のナギ。内面は横弧底状文。内面は脚部下半～脚部に濃いスラスで乾はれ、オス付着。内面は脚部下半～脚部に濃いヨゴレ付着。以上は薄いヨゴレ付着。	石英	良好	にぶい褐色	十三台式
3	茎生土器 盃	- - -	副部羽加縫1縫縫文（R.L+2.L、L.R+2.R各1筋・横粒直縫文・下→上）→頭部界4本筋の横粒直縫文・上開き泡弧文（反対唇回）、颈部横粒直縫文2条×3半位既文→横粒波次状（下→上）。内面は紙・斜位のナギ。外面部～肩部に濃いスラス。乾はれ、オス付着。内面は深いヨゴレがまばらに付着。	石英、角閃石、金雲母、赤色	良好	灰青褐色	十三台式
4	茎生土器 盃	- - -	頭～脚部斜縫不規則条縫文（R・S・L・Z・上→下）。内面は側部上・下位に底位のナギ。副部中位に脚位のナギ。外面部～脚部上位に濃いスラス。乾はれ、金雲母・オス付着。内面は底部下位に帯状の濃いヨゴレ付着。	石英、角閃石、骨針、多量の白色粒、赤色	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	十三台式

第Ⅳ章 A区の遺構と遺物

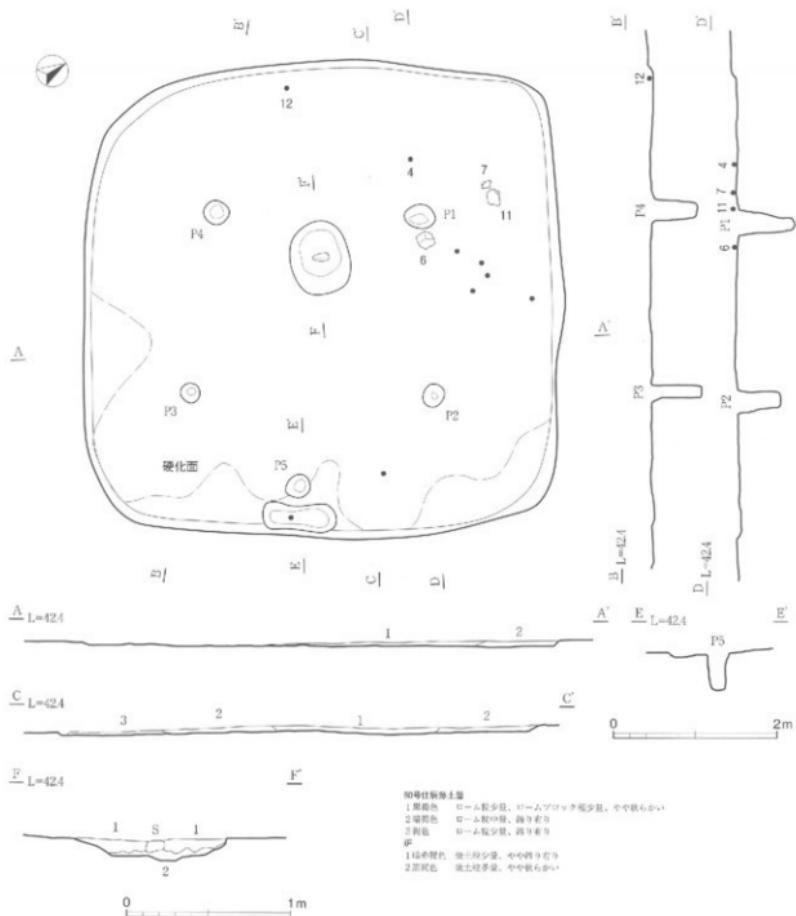
図版番号	種別器種	口径基高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
5	弥生土器豆	- 77	底部脚輪小明の附加条縫文（L、Z：時計回り）。底部市販。外側は部分的にスリ付有、赤色化。内面は底面付近に落し口ゴム付有。	石英、長石、角閃石、骨灰、赤色化	良好	に赤い黄褐色	十王台式
6	弥生土器豆	- 52	底部へ複数位のナデ。底部木免表→周辺部ナデ消し、内面は横位のナデ。被燒面未加工。底部焼成後にガタリ。	石英	良好	外：に赤い黄褐色 内：灰青褐色	
7	石器 長石		自然端を素材として有、裏面中央に小さな斜打痕。表面に剥落有。石材：右英安口。長さ85cm・幅65cm・厚さ15mm・重さ3570g。				

80号住居跡（第67・68図）

位置 A区南部、M8・N8・M9・N9グリッドにある。規模と平面形 5.88 × 5.82 m の方形。主軸方向 N - 62° - W 壁 隅高は約 8 cm。床 全体に硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径 88cm、短径 72cm の楕円形で深さ 13cm。中央部に炉石が設置されている。覆土 中央部には黒褐色土、周辺部にいくにしたがい褐色土が堆積している。遺物 遺物の出土量は多く、小～中破片の割合が高い。4・6・7・11はP1周辺の床面上から出土している。十王台式前半期の土器を主体とするが、4・13・15など二軒屋式系の比率がやや高い。所見 出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

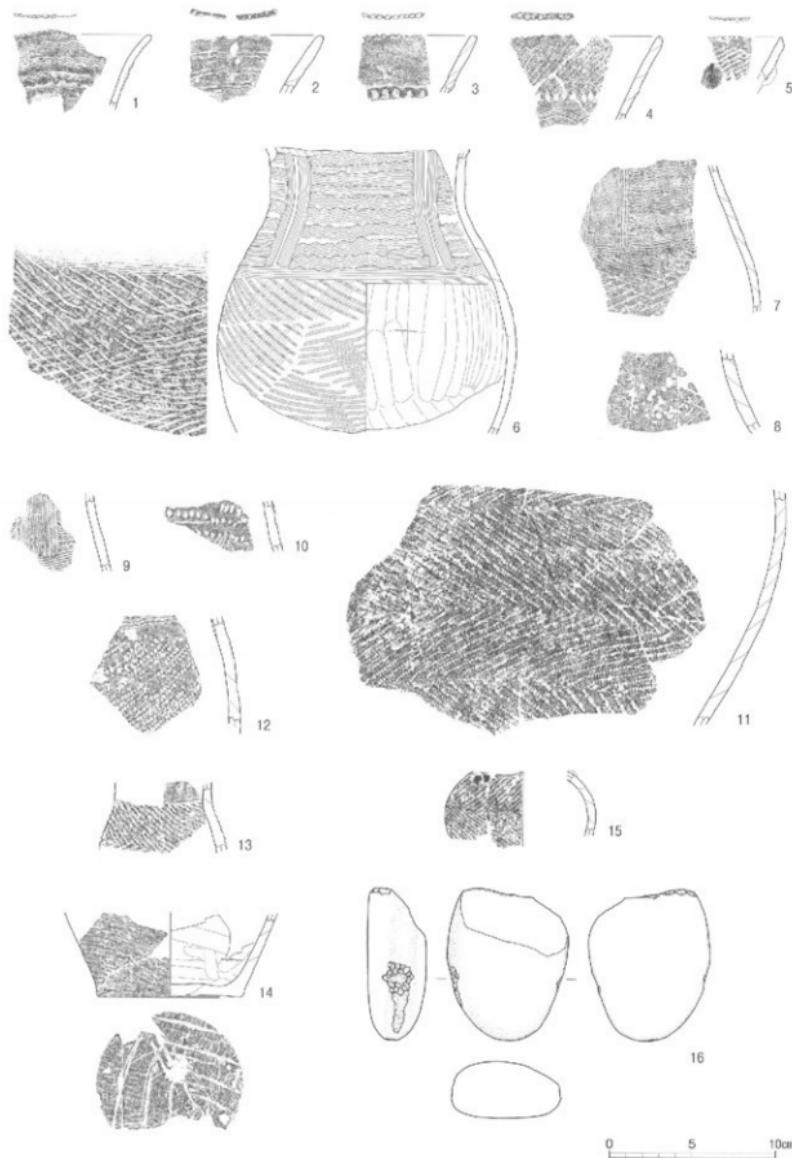
表30 80号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径基高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器豆	- -	口部脚輪位のナデ→ヘラキザミ、底部落葉・押捺縫等 3 条+口部記 3 本筋の横位捺状、脚部輕度底付、内面は横位のナデ、外側スリ付有、赤色化。	石英、角閃石、多量の白色粘	普通	灰黃褐色	十王台式
2	弥生土器豆	- -	口部脚輪位のナデ→ヘラキザミ、底部落葉・本筋の横位捺状文（反時計回り）、内面は頑・斜位のナデ。	石英、多量の骨針	良好	に赤い褐色	十王台式
3	弥生土器豆	- -	口部脚輪位のナデによるキザミ。口部脚輪位のナデ・斜位のナデ。底部脚輪位付、内面は横位のナデ、外側スリ付有。	石英、骨針	普通	に赤い黄褐色	十王台式
4	弥生土器豆	- -	口部脚輪ヘラキザミ。口部脚輪位付に先拂狀矢印によるキザミ、斜脚柔 1 矢印文（LR + 2 R）、底部木免表以上の横位捺状文。内面は横位のナデ。外側スリ付有。	多量の石英、長石、白色粘、角閃石	不良	灰黃褐色	二軒屋式
5	弥生土器豆	- -	口部脚輪位のナデ・キザミ。口部脚輪位付不明の附加条縫文（R、S → 口部脚輪下部）→脚部脚輪位付→脚部火炎の點付文。内面は横位のナデ。外側スリ付有、赤色化。	石英	普通	外：に赤い褐色 内：灰青褐色	P4
6	弥生土器豆	- -	脚部附加 2 槌縫文（RL + 2 R、L + z）→堅模量不平の複数位口部捺縫文→脚部脚輪位付 2 条×堅模量 4 斜位→脚部脚輪位付（上部→一筋→下部→上部、右→左）。内面は頑、脚部下位に斜位のナデ。脚部火炎位に横位のナデ。外側まではらにスリ付有、内面焼成化下位にコテ付有。	多量の石英、角閃石	良好	灰黃褐色	十王台式
7	弥生土器豆	- -	脚部脚輪位付の附加条縫文（R、Z、L、S → L + z）→堅模量不平の複数位口部捺縫文→脚部脚輪位付縫縫文→脚部脚輪位付（上部→一筋→下部→上部、右→左）。内面は頑、赤色化。	石英、金雲母、多量の白色粘	良好	外：灰黃褐色 内：に赤い黄褐色	十王台式
8	弥生土器豆	- -	脚部脚輪位付の附加条縫文（R、Z → 口部脚輪位付）→脚部脚輪位付縫縫文→脚部脚輪位付縫縫文→脚部脚輪位付（上部→一筋→下部→上部、右→左）。内面は頑、斜位のナデ。外側スリ付有、赤色化。	石英、長石、骨針、良好 白色粘	外：に赤い褐色 内：に赤い黄褐色	十王台式	
9	弥生土器豆	- -	脚部脚輪位付の附加条縫文→脚部脚輪位付縫縫文→脚部脚輪位付縫縫文→脚部脚輪位付縫縫文。内面は縫位のナデ。外側スリ付有。	石英、角閃石	良好	外：灰黃褐色 内：に赤い黄褐色	P2 十三合式



第67図 80号住居跡

80号住居跡土層
1黒褐色 ローム質少粒、ロームツバック風少且、やや軟らかい
2褐褐色 ローム質少粒、弱り者有
3剥離 ローム板少量、弱り者有
4
1粘土質、微少量、やや凹凸有
2黑色、微少量、やや軟らかい

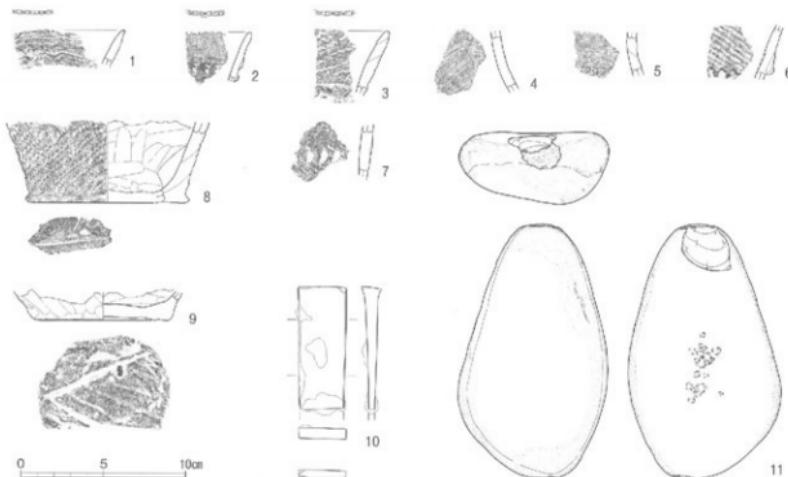


第68図 80号住居跡出土上遺物

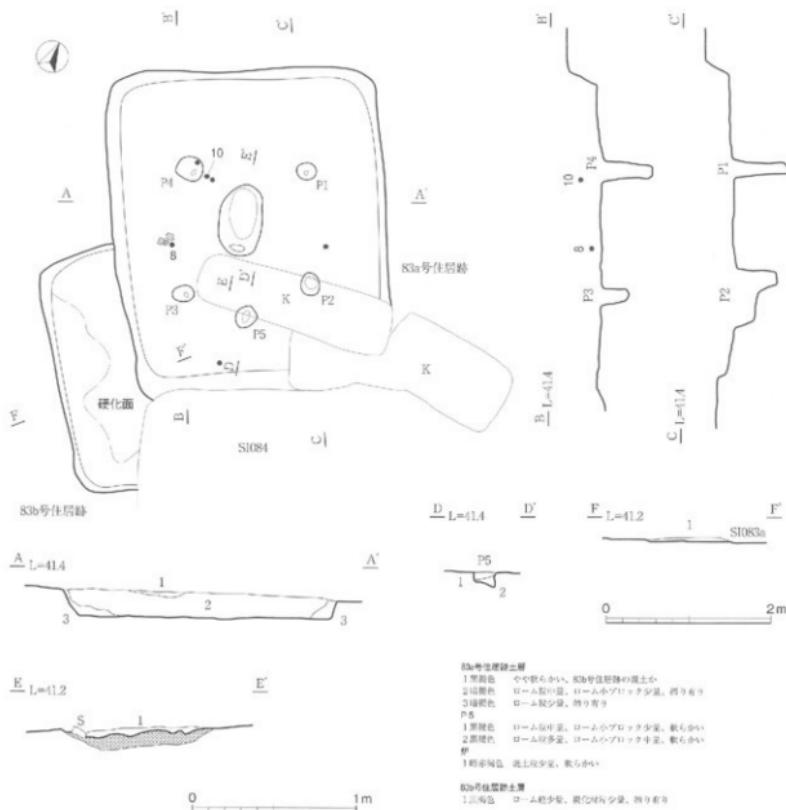
団体 番号	種別 器	口径 部高 底径	特徴	出土	焼成	色調	備考
12	弥生土器 壺	— — —	斜部附加条1種縦文(L, R + R) → 斜部界3本筋の構造。裏面灰皮文ないし直皮文。内面は焼・新焼のテグ。	石英、長石、角閃石、金雲母、青鉄、赤色粒	普通	に赤い黄褐色	
13	弥生土器 壺	—	斜部無文等(燒紅のナダ)。附加条加条1種縦文(R L + 2 L)。内面は斜位のテグ。	多量の石英・長石	不良	外:に赤い黄色 内:灰褐色	P 6 二軒屋式系
14	弥生土器 壺	— 8.8	斜部縫縫不明の附加条縦文(R + Z : 時計回り)。底部木炭痕。内面は焼・焼紅のナダ。内面全面にコゲ付着。	石英、長石、青灰 色粒	普通	外:に赤い黄褐色 内:灰褐色	
15	弥生土器 壺	— —	斜部付縫不明の附加条縦文(r - S, I - Z) → 斜部3本筋の不規則区画横縦文 → 2個一対の円形點付丈×指定7~8半径。内面は器皿黒れ。外底スス付着。	多量の石英・長石	普通	外:に赤い黄褐色 内:明褐色	二軒屋式系
16	石器 磨石類		透→鏡。自然縫の背・腹面に磨耗軌。左側面に顯著な凹打痕。上端部に斜削痕および磨耗軌。石材:石英安山岩。長さ9.5cm・幅7.4cm・厚さ3.5cm・重さ3200g。				

83a号住居跡（第69・70図）

位置 A区中央部・南東部N9・O9・N10・O10グリッドにある。規模と平面形 3.80 × 3.34 m のやや縱長長方形。83b号住居跡に壁と覆土上層を掘りこまれている。主軸方向 N - 30° - W 壁 壁高は約30cm、外傾して立ち上がる。床 全体にやや硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は支柱穴、P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径90cm、短径32cmの梢円形で深さ5cm。覆土 ローム粒を含んだ締りのある暗褐色土が主に堆積している。遺物 遺物の出土量は少なく、小破片のみの出土である。十王台式主体であるが、5・6など二軒屋式系の比率がやや高い。9は底面に木葉痕を有する土師器の壺、10は鍛造品の板状鉄斧である。いずれも覆土上2層中から出土している。所見 出土遺物から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第69図 83a号住居跡出土遺物



第70図 83a・b号住居跡

表31 83a号住居跡出土遺物観察表

回数 番号	種別 器種	口径 断面 直径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	赤生土鉈 鋤	-	口部彫丸棒状工具によるキザミ。口縁部3本脚の痕跡波状文。内面は側位のナデ。外削ス付着。	石英、角閃石、多量の白色泥	雪透	明赤褐色	十王台式
2	赤生土鋤 鋤	-	口部彫丸棒状工具によるキザミ。口縁部輪郭不明の拡加条文(し・S)。頭部等、押捺痕。内面は側位のナデ。	石英、奈糸	普通	外:黒褐色 内:にぶい褐色	
3	赤生土鋤 鋤	-	口部彫丸棒状工具によるキザミ。口縁部輪郭不明の拡加条文(し・S)。頭部等、押捺痕。内面は側位のナデ。	多量の石英、石英、骨粉、赤色土	普通	褐色	3 ^回 十王台式

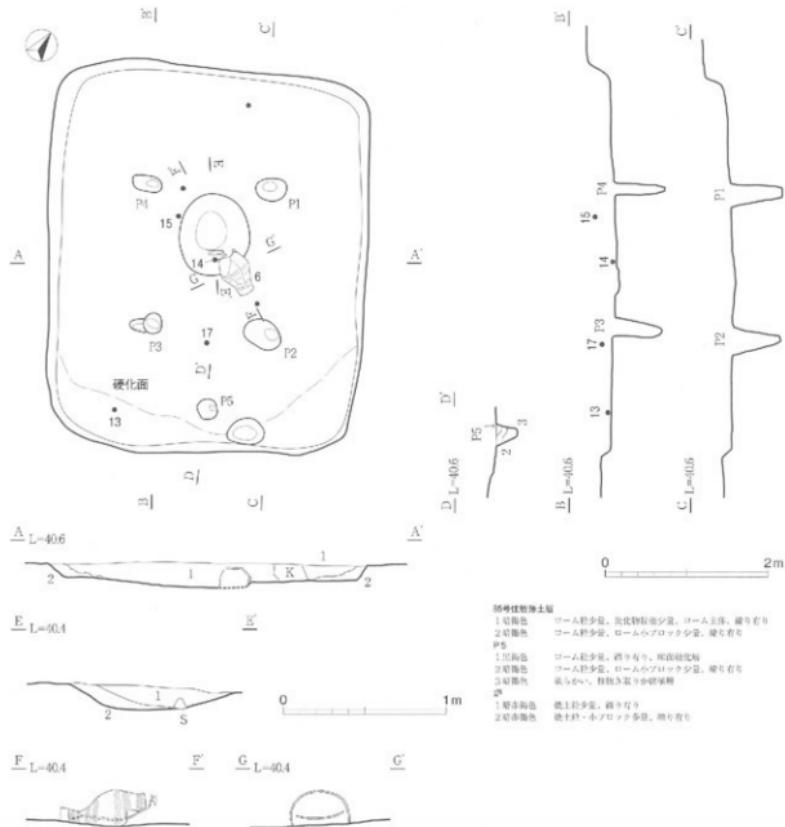
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特　徴	施土	焼成	色調	備考
4	弥生土器 豆	-	頭部5本歯の複合切突文(テニガリ→右上がり)。内面・石英 は複位のナダ。外腹スジ、内面ヨレ付垂。	良好	外：にぼい黄褐色 内：褐灰色	十王台式	
5	弥生土器 壺	-	頭部泥加須1種縞文(L.R+2.R+) 頭部界10~11 石壳、角閃石 内面の横帯区画蓋文ないし、底沈文(時計回り)→下 開き底沈文、内面は横・斜位のナダ。外腹スジ付垂。	普通	にぼい黄褐色	二軒屋式	
6	弥生土器 壺	-	頭部縞文全体(無筋し)を平行した隆筋→口唇部横縞不 明の内沿及縞文(L.Z)。頭部横位の底沈文(並位不明) 内面は斜筋。	多量の石英、長石、良好 角閃石	外：明赤褐色 内：褐色	二軒屋式	
7	弥生土器 豆	-	頭部底沈文2種縞文(R.L+2.R.L) と同様の原厚断面を判明し押捺、内面は斜位のナダ。	多量の石英、長石、普通	外：にぼい黄褐色 内：にぼい褐色		
8	弥生土器 壺	-	頭部底沈文2種縞文(R.L+2.R.L) 頭部下腹横位のナ ダ。底部木炭斑、内面は横・斜位のナダ。外腹スジ、内 面ヨレ付垂。	石英、角閃石	良好	外：にぼい黄褐色 内：にぼい褐色	
9	土器 壺	-	頭部底沈ヘラケズリ→ナダ。底部木炭斑。内面は模定の ナダ。	石英、角閃石、多 量の白色粒	良好	外：褐色 内：明赤褐色	
10	鉄製品 鉢	-	長(7.0)、幅大標295、底小標275、基部厚1.2cm。板状鉄片(微 鉄)。刃部欠損。	-	-	-	
11	石器 磨石類	-	鉄→石。自然岩の表・裏面に磨耗。1・下端部や裏面の一部に銛打痕。新潟縣産は熱風により黒色に変色。芦石 石英。長さ15.45cm、幅9.1cm、厚さ4.95cm、重さ819g。	-	-	-	

85号住居跡（第71~73図）

位置 A区南東部O 10グリッドにある。規模と平面形 4.76 × 3.90 mの長方形。主軸方向 N = 34° - W 壁 壁高は約18cm。床 南側のコーナー部を除いて全体に硬化している。ビット 5箇所。P 1からP 4は主穴。P 5は出入り口ビットと考えられる。炉 長径100cm、短径86cmの楕円形で深さ16cm。覆土 ロームを多く含んだ暗褐色土が堆積している。遺物 炉の南東側床面に、6の大判壺が横位で出土している。遺物の出土量は多く、中～大破片の割合が高い。十王台式前半期の上器を主体とするが、十王台式以外の土器も目立つ。4・5・10は二軒屋式系、16はS字結節文を施す南関東系土器と考えられる。所見 出土遺物から、弥生時代後期の十王台式の住居跡と考えられる。

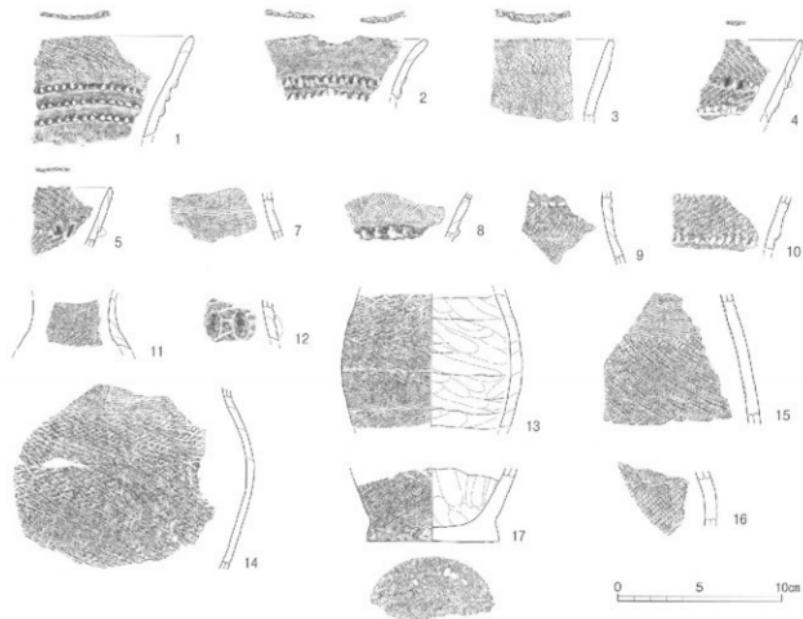
表32 85号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特　徴	施土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	口唇部文全体によるキザミ。頭部縞文全体によるキ ザミと底沈3条→底沈5本の冠位底沈文→横位底沈文。内 面は頭部横位のナダ。頭部横位のナダ。	石英、骨針、赤色 普通	にぼい黄褐色	十王台式	
2	弥生土器 壺	-	口唇部底沈カキザミ。口唇部竹状工具による剥穴の ある底沈等→口唇部縞文(横位のナダ)。内面は模定のナダ。 外腹スジ付垂。	石英、角閃石	普通	黒褐色	十王台式
3	弥生土器 豆	-	口唇部底沈文全体(無筋L.S.)キザミ。口唇部縞文(横 位L.)→口唇部付垂等・斜位のナダ。内面は横位のナダ。	石英、骨針	良好	褐色	
4	弥生土器 壺	-	口唇部ヘラキザミ。口唇部横縞不明の附加縞文(R.S. L.Z)。口唇部下側に同様の底沈によるキザミ→2重 一对の貼り文。内面は底・斜位のナダ。5と底・斜位。	多量の石英、長石 良好	褐色	二軒屋式	
5	弥生土器 壺	-	口唇部ヘラキザミ。口唇部横縞不明の附加縞文(R.S. L.Z)→2重一对の貼り文。内面は横位のナダ。5と 底・斜位。	多量の石英、長石 良好	褐色	二軒屋式	
6	弥生土器 豆	162	頭部丸棒式工具によるギザミと底沈2条以上→頭部對 接美1種縞文(R.L-L.R+R)。頭部下部から上は 下→上底沈、頭部位から下は上→下底沈、底部等底沈。 内面は底部付近堅厚のナダ。地は割落。	多量の石英、長石、普通 角閃石、褐色	普通	にぼい黄褐色	



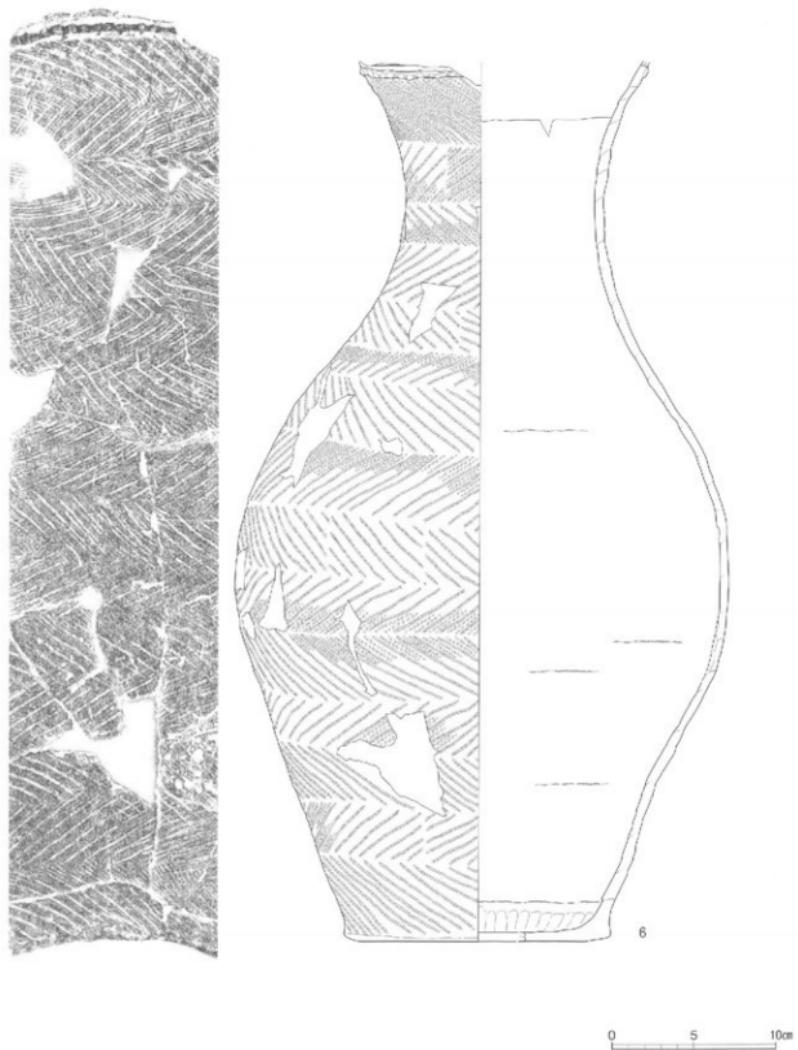
第71図 85号住居跡

遺構番号	種別 器種	口径 器底 底径	特 徴	土	強度	色調	備考
7	器上器 蓋	-	頭部4本前の横位区画直線文→腹直線文→横波状文。内面は横空のナメ。	多量の石灰・熱石、骨粉	普通	にぶい黄褐色	十正台式
8	泥生土器 蓋	-	頭部押抜痕帯→口縁部3本前の山形文(時計回り)。内面は斜位のナメ。外面スス付着。	石英、長石、角閃石、多量の白色粉	不良	にぶい黄褐色	十正台式
9	泥生土器 蓋	-	頭部斜文帯(横空のナメ)を挟んで竹管状工具による側突文2条、单脚脚文(L R)。内面は横空のナメ。	石英、角閃石	普通	灰黃褐色	



第72図 85号住居跡出土遺物①

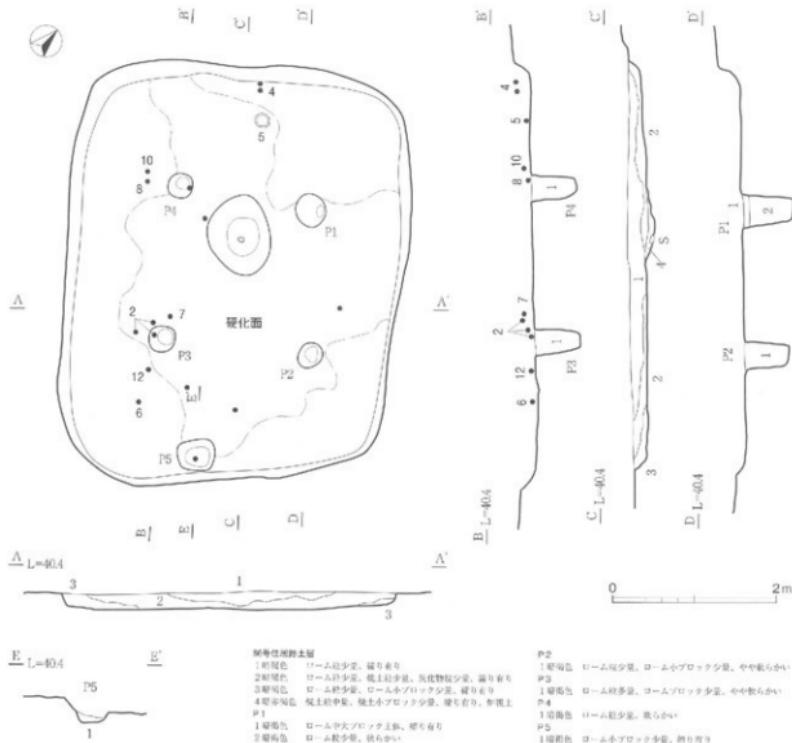
図版番号	種別	器種	口径 器蓋 基盤	特徴	土色	焼成	色調	備考
10	張生土器	甌	-	口縁部附加条1種純文(L R + 2 R)、口縁部下端に同様の筋状によるみ字。頭部2本側以上の横位波状文。内面に横位のナデ。外面スズ付着。	多量の石英・長石	良好	外：暗灰黄色 内：にぶい黄褐色	二軒臺式
11	張生土器	甌	-	頭部横位2種純文のナデ。肩部輪廓不明の附矢条純文(只 S - L - Z)。内面は微凹のナデ。粘土接合部は横位のナデ。外面スズ付着。	石英	良好	明黄褐色	
12	張生土器	甌	-	頭部2段、財油条2種純文(R L + 2 L 等)。→2次1財油条の筋状文。内面は横・斜位のナデ。外面スズ付着。	石英、骨針、赤色	普通	外：にぶい褐色 内：にぶい黄褐色	
13	張生土器	甌	-	頭～肩部輪廓不明の附矢条純文(L - S - L - Z - 下→上)。内面は横・斜位のナデ。	多量の石英・長石、角閃石	良好	褐色	
14	張生土器	甌	-	頭部横位2種純文(L + L)→頭部4本側の筋位純文。内面に頭部斜位のナデ。剥離範囲のナデ。外面スズ付着。	多量の石英・長石、角閃石、骨針	良好	にぶい黄褐色	十平台式
15	張生土器	甌	-	頭部横位2種純文(L + L)と輪廓不明の附矢条純文(R - S)を下→1へ油条→頭部3本側の筋位純文→横位波状文。内面は横筋。	石英、赤色	良好	外：にぶい黄褐色 内：褐色	十平台式
16	張生土器	甌	-	頭部S字純縦文、底部純文(L-R)。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石	良好	褐色	
17	張生土器	甌	(81)	頭部横位1種純文(L + L 等)と輪廓不明の附矢条純文(L - Z)を下→1へ油条。頭部下端横位のナデ。底部に目痕→ナデ溝。内面は横・斜位のナデ。	石英、角閃石	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄色	



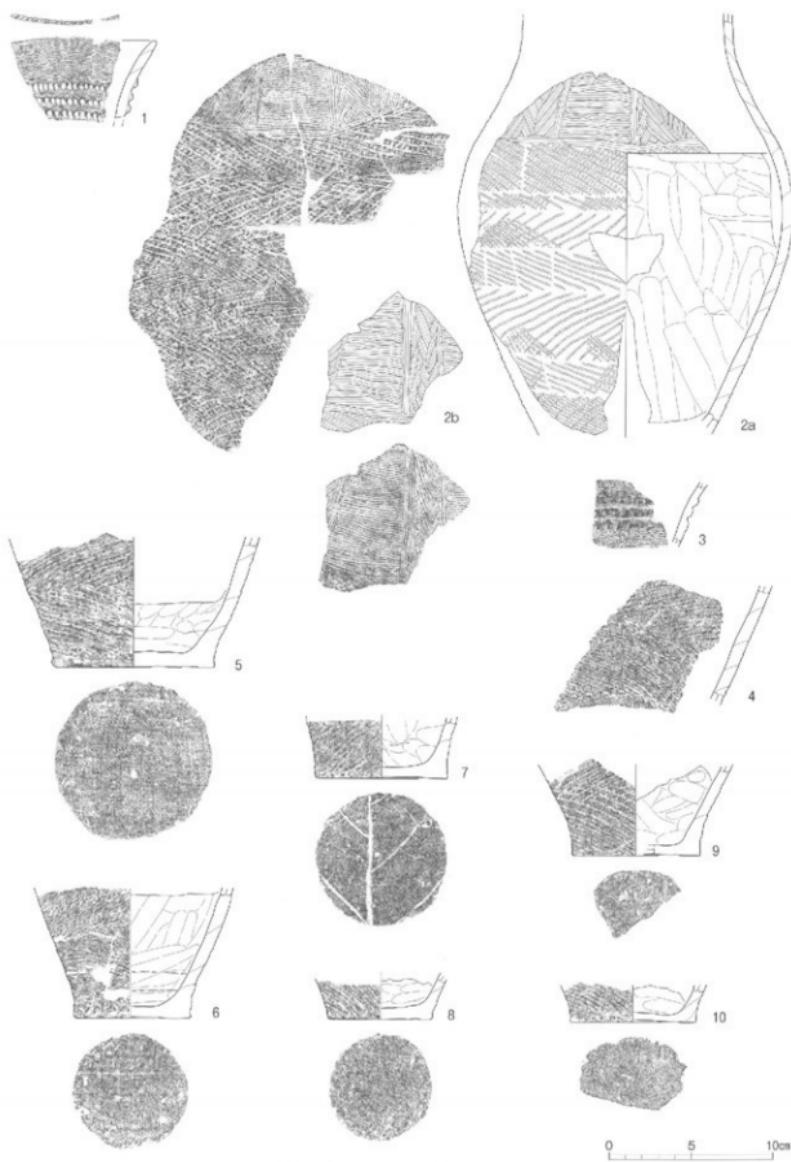
第73図 85号住居跡出土遺物②

86号住居跡（第74～76図）

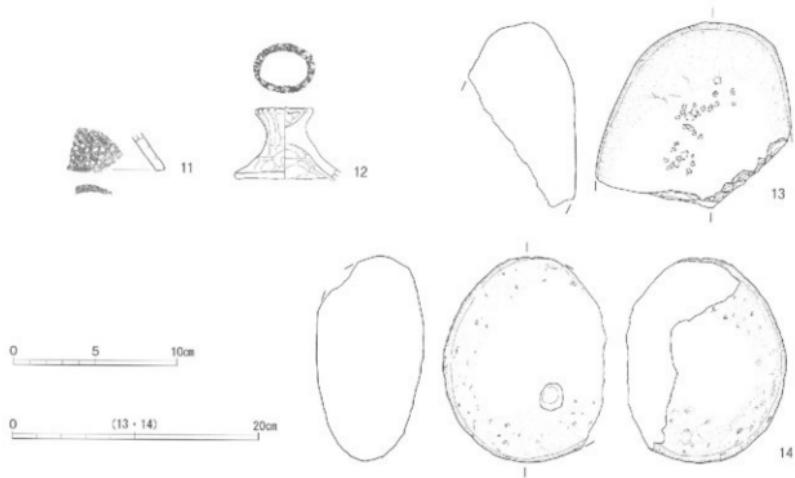
位置 A区南東部、O 10・O 11グリッドにある。 規模と平面形 5.08 × 4.92 mの隅丸長方形。 主軸方向 N - 45° - W 壁 壁高は約20cm、やや外傾して立ち上がる。 床 住居のコーナー部と西壁際を除いて硬化している。 ピット 5箇所。P 1からP 4は主柱穴。P 5は出入り口ピットと考えられる。 炉 長径98cm、短径73cmの楕円形で深さ16cm。炉の中央やや南寄りに小型の炉石が設置されている。 覆土 暗褐色土主体の自然堆積層。 遺物 覆土中の遺物の出土量はやや多く、中～大破片の割合が高い。北壁中央部(4・5)、P 3周辺(2・6・7・12)、P 4周辺(8・10)に遺物の集中が認められる。4は壁際の1層上位、その他は1層下位～2層中より出土している。十王台式前半期の土器を主体とする。7は二軒屋式系、11は2列の円形刺突文が施文される高坏、12は蓋形土器と考えられる。 所見 出土遺物から弥生時代後期の十王台式期の住居跡と考えられる。



第74図 86号住居跡



第75図 86号住居跡出土遺物①



第76図 86号住居跡出土遺物②

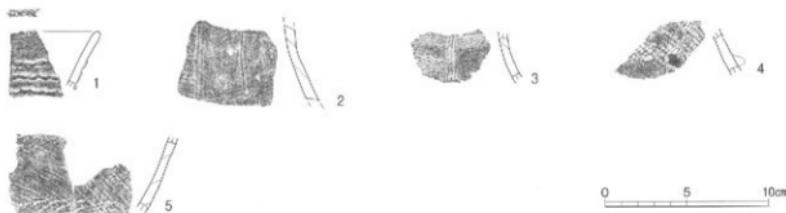
表33 86号住居跡出土遺物観察表

回版 番号	種別 器種	口徑 縦高 底径	特徴	胎土	焼度	色調	備考
1	弥生土器 甕	- - -	口唇部ハラキギ。前丸陣状工判による今子型と深第3全 てに内面は本體の模倣底板式、胎土網底板式。内面は模 倣のナヂ、外面スズ付着。	石英、角閃石、赤 色粒	良好	外：黒褐色 内：深褐色	十王台式
2	弥生土器 甕	- - -	肩部織加条2種複文（R L + R、L R + L）：下→上、 反時計回り。斜肩部3本筋の複雑な表面装飾文・斜肩部 複合文・斜肩部複文（左→右、下→上）、括り線の小さ い横波状文。内面は腹・斜板のナヂ。	石英、角閃石、骨 針、多量の白色粒	良好	外：黒褐色 内：灰青褐色	十三台式
3	弥生土器 甕	- -	腹部織加条3筋の複合装飾文3本筋の複雑な表面装 飾状況。内面は斜板のナヂ。外面スズ付着。	石英	普通	外：黒褐色 内：に赤い黄褐色	十王台式
4	弥生土器 甕	- -	腹部織加条不明の複合装飾文（R - S、R - Z：下→上）。 内面は幅・斜板のナヂ。	石英	良好	外：灰青褐色 内：に赤い黄褐色	十王台式
5	弥生土器 甕	- 9.75	腹部織加条不明の複合装飾文（R - Z、L - S）。腹部下 端部豊かなナヂ。底部付目板。内面は腹部付近横板のナヂ、 側山腹・斜板のナヂ。	石英、角閃石、骨 針	良好	褐色	十王台式
6	弥生土器 甕	- 7.1	腹部織加条1種複文（R + R、L + L）：下→上、斜板回り。 斜肩部滑溜状のナヂ。底部付目板（格子状の压痕あり）。 内面は綾・斜板のナヂ。	石英、角閃石	普通	に赤い黄褐色	
7	弥生土器 甕	- 8.1	斜肩部加条1種複文（L R + 2 R：反時計回り）。底部付目板。 内面は模・斜板のナヂ。外面スズ、内面四隅のコゴ付着。	多量の石英、長石	普通	に赤い黄褐色	二河原式
8	弥生土器 甕	- 6.3	腹部織加条1種複文（R L + 2 L）。底部付目板。内面は 斜板のナヂ。外面スズ、内面四隅のコゴ付着。	石英、骨針、多量 の白色粒	不良	に赤い黄褐色	
9	弥生土器 甕	- (7.8)	腹部織加条2種複文（L + L、R + R：下→上）。底 部付目板（粘土付着）。内面は模・斜板のナヂ。	石英	普通	外：に赤い黄褐色 内：褐色	十王台式
10	弥生土器 甕	- (7.6)	斜肩部織加条不明の複合装飾文（L - Z）。底部ナヂ調整（光 沢を帯びる）。内面は模のナヂ。内面コゲ付着。	多量の石英、長石	良好	外：灰青褐色 内：に赤い黄褐色	

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
11	弥生土器 壺	— — —	肩部輪郭不明の附加条縦文（し・Z）→呂賀状工具による割突文2条。脚踏底部直机。内面は焼成のナデ。	石英	良好	外：にぶい褐色 内：にぶい褐色	
12	弥生土器 壺	— — —	摘み口唇部爪彫によるキザミ。我み部縦位のナデ→脚踏のナデ。受け部の脚踏部直机。内面は摘み、受け部とも斜位のナデ。受け部の脚踏部直机。内面は摘み、受け部とも斜位のナデ。受け部の脚踏部直机。内面は摘み、受け部とも斜位のナデ。	石英、角閃石	良好	明示褐色	
13	石器 台石		鉢→壺。欠損部。大型標の表面中央に磨耗痕および軋打痕。下腹部に欠損後の剥離痕。石材：砂岩。残存長15.15cm、残存幅15.85cm、残存厚8.7cm、重さ2288.1g。				
14	石器 磨石類		壺→壺。欠損部。自然標の表・裏面中央に削耗痕。表面下部に凹穴。石材：石英安山岩。残存長12.5cm、残存幅9.75cm、厚さ6.05cm、重さ1026.7g。				

88号住居跡（第77・78図）

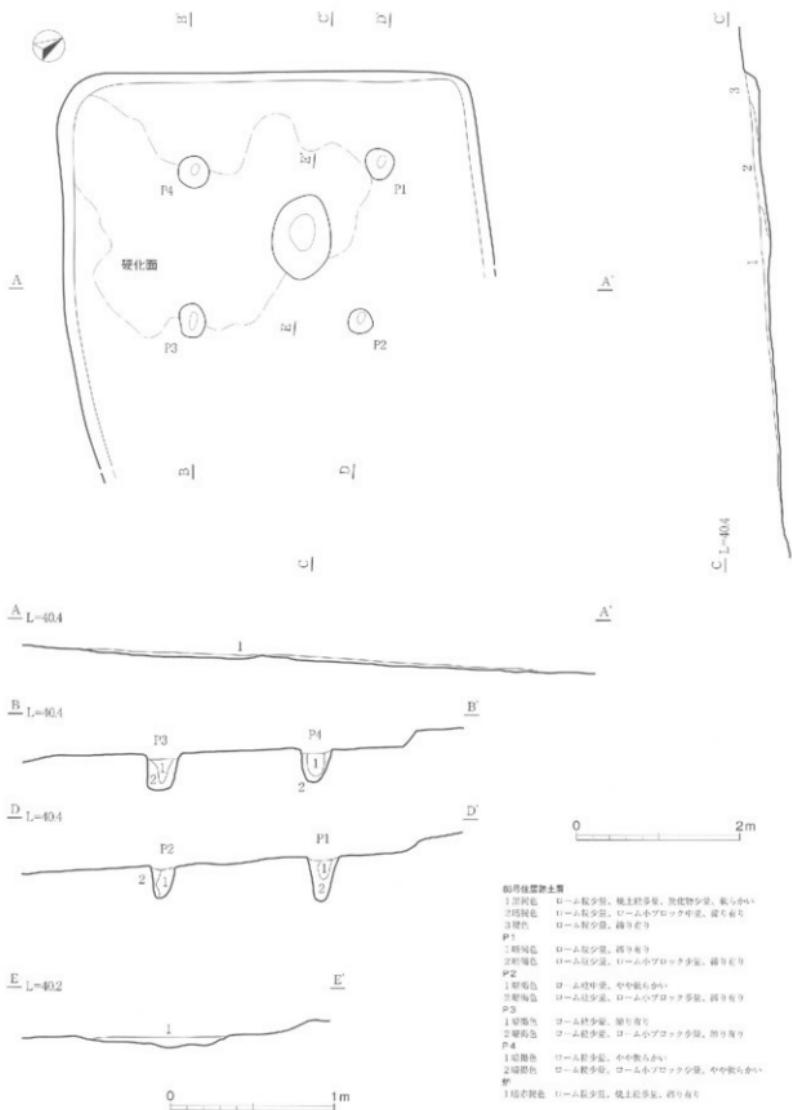
位置 A区南東部、O 9・P 9 グリッドにある。規模と平面形 5.22 × (4.60) mで東側が地形傾斜によつて削平されている。主軸方向 N - 30° - E 聖 壁高は約 6 cm。床 爐の周囲から西南側が特に硬化している。ピット 4箇所。P 1 から P 4 は主柱穴。炉 長径 104cm、短径 72cm の楕円形で深さ 6 cm。覆土 褐色土主体の堆積土が床上を薄く覆っている。遺物 覆土から弥生土器の壺片が出土している。遺物の出土量は非常に少なく、小破片のみの出土である。十王台式主体で4は単節R L縄文を施す。所見 出土遺物と炉や柱穴の配置関係から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第77図 88号住居跡出土遺物

表34 88号住居跡出土遺物観察表

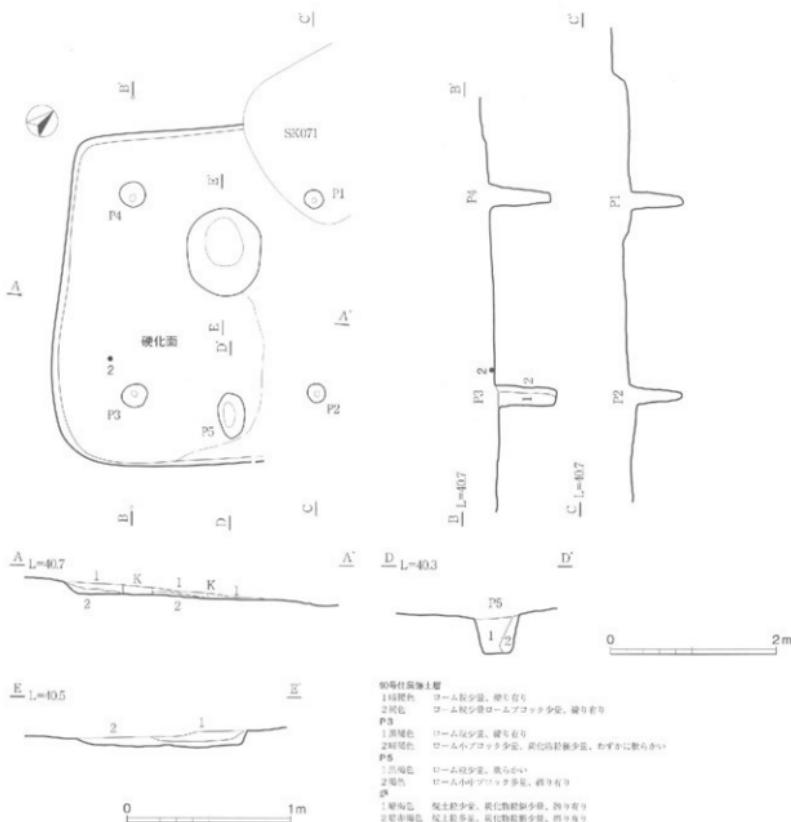
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	— — —	口部縦文カギザミ。口部無文（横位のナデ）。脚踏部直机。内面は削・斜位のナデ。外面スリット。	石英、角閃石	普通	外：灰青褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	— — —	剥離痕7-8本前の輪郭直縦文→脚踏部直縦文ないし、波状文。内面は脚踏のナデ→脚踏のナデ。外面スリット。	多量の石英、長石 石、金雲母、滑石	普通	外：にぶい褐色 内：明褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	— — —	裏部6本前の剥離直縦文→脚踏部次文、スリット間に剥離波状文1条。内面は脚踏のナデ→脚踏のナデ。外面スリット。	多量の石英、長石	普通	外：黒褐色 内：にぶい褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	— — —	剥離直縫文（R L）、無文帶（横位のナデ）→内縫状の貼付文。内面は削・斜位のナデ。	石英、角閃石、金雲母、多量の白雲母	良好	にぶい黄褐色	
5	弥生土器 壺	— — —	剥離縫附加1脚踏文（R L + 2 R、L R - 2 R : 下→上）。内面は脚踏のナデ。内面全周濃いヨゴレ付着。	石英	普通	外：にぶい褐色 内：黒褐色	



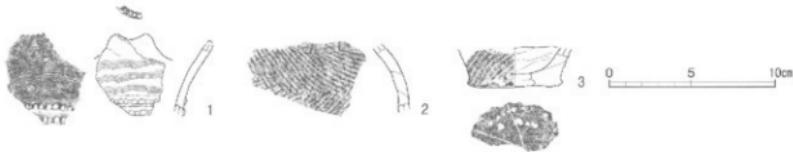
第78図 88号住居跡

90号住居跡（第79・80図）

位置 A区南東部、O8グリッドにある。規模と平面形 $4.14 \times (2.50)$ m。主軸方向 N- 48° -W 壁 壁高は約14cm、外傾気味に立ち上がる。床 床面東側が地形の傾斜によって削平されている。ピット 5箇所。P1からP4は柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径108cm、短径88cmの橢円形で深さ9cm。覆土 自然堆積と考えられる暗褐色～褐色土が堆積している。遺物 床面直上から2の壺形部片が出土している。遺物の出土量は非常に少なく、小破片の割合が高い。1は十王台式の片口壺、2・3は二軒屋式系の土器である。所見 出土遺物と炉や柱穴の配置関係から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第79図 90号住居跡



第80図 90号住居跡出土遺物

表35 90号住居跡出土遺物観察表

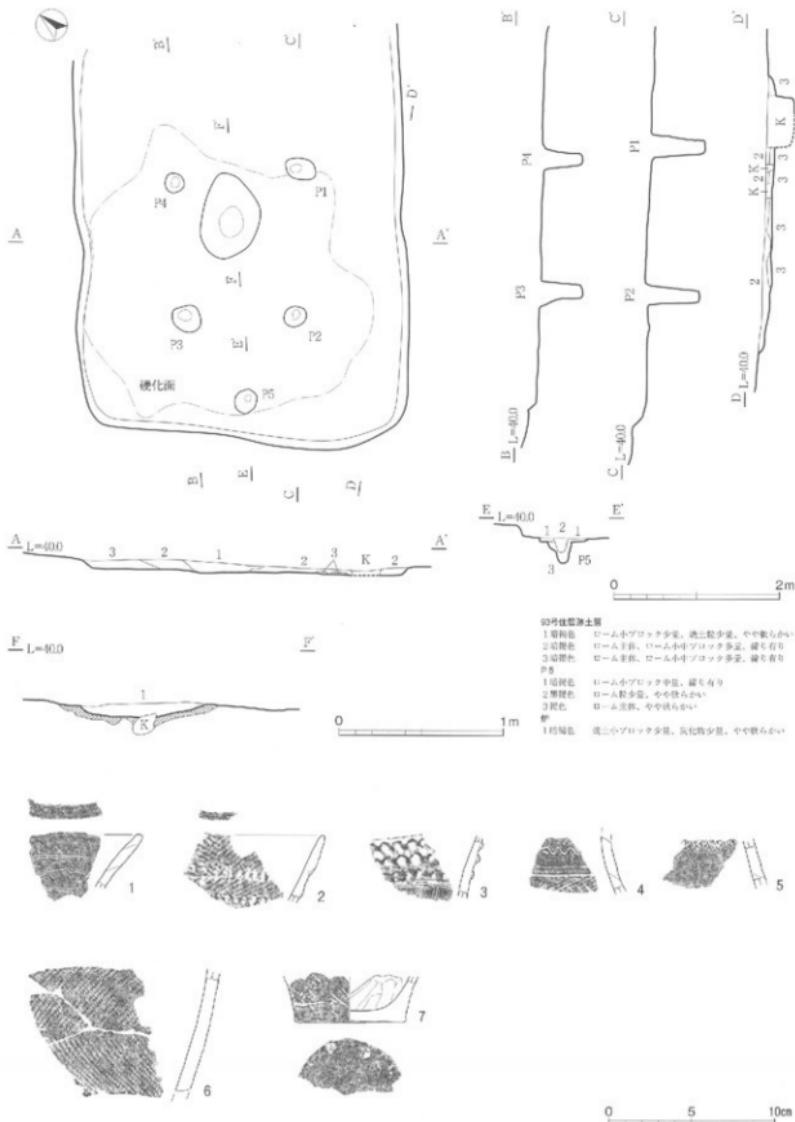
団版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生上器 壺	— — —	片口壺、口唇部丸撫次工具によるキザミ。口縁部4本の横筋模次文、刻部口縁部と同様のキザミ縦帯。内面は横・斜波のナメ。注ぎ口付近に風化。	石英、角閃石、赤 鉄鉱	普通	にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	— — —	刻部附加帶1種模文（R L = 2 L、L R + 2 R：上→下）。→刻部5本横筋上の等間隔に縦状文（時計回り）。内面は横・斜波のナメ。	多量の石英、長石 良好	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	二軒屋式	
3	弥生土器 壺	— — (5.8)	刻部附加帶1種模文（L R + 2 R）。底部木炭痕。内面は横・斜波のナメ。	石英	普通	外：にぶい黄褐色 内：灰褐色	二軒屋式

93号住居跡（第81図）

位置 A区南東部、P 9・P 10グリッドにある。規模と平面形（5.00）×4.10 m 主軸方向 N=50°-E 聖 壁高は約10cmである。床 主柱穴から出入口ピットにかけて全体に硬化している。ピット5箇所。P 1からP 4は主柱穴。P 5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径104cm、短径72cmの楕円形で深さ14cm。覆土 - 遺物 遺物の出土量は少なく、小～中破片の割合が高い。十王台式前半期の上器を主体とするが、二軒屋式（2・4・5）の比率も高い。所見 出土遺物や遺構の形態から、弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。

表36 93号住居跡出土遺物観察表

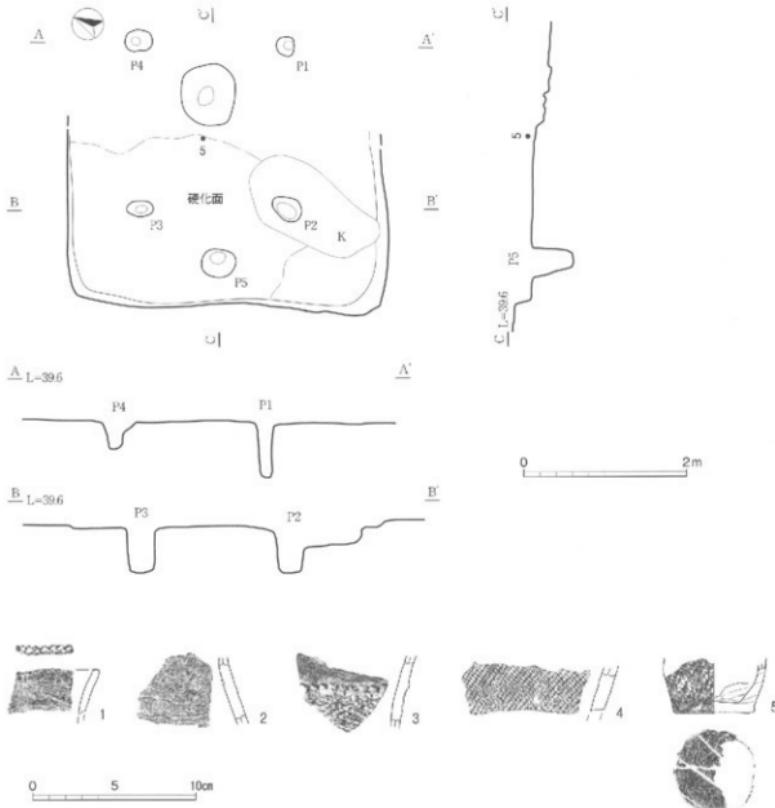
団版番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	— — —	口唇部模文不明。口縁部3本の横筋模次文。内面は横波のナメ。外側スズ付着。	石英、角閃石 普通	外：褐灰色 内：にぶい黄褐色	十王台式	
2	弥生上器 壺	— — —	口唇部模文カキザミ。有段口縁を呈し、口縁部上段は輪筋不明の附加帶模文、範位の羽状模文をなす。下段は輪筋不明の附加帶模文（R - S、L - Z：反時計回り）。→刻部7-8本の横筋区画直線文、刻部模次文。内面は横波のナメ。外側スズ付着。	石英、長石 普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	二軒屋式	
3	弥生土器 壺	—	頭部付加輪筋帶（上下から輪筋）3条→頭部直下に3本の横筋区画直線文→頭部輪筋直線文。内面は斜波のナメ。外側スズ付着。	石英 普通	外：灰褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式	
4	弥生土器 壺	— — —	頭部輪筋不明の附加帶模文（R - S、L - Z）→頭部7-8本の横筋区画直線文、刻部模次文。内面は横・斜波のナメ。外側スズ付着。	多量の石英、長石、赤 鉄鉱 普通	外：灰褐色 内：にぶい黄褐色	二軒屋式	
5	弥生土器 壺	—	頭部附加帶1種模文（L R + 2 R）→頭部直線文（範位のナメ+輪筋のナメ）。内面は横・斜波のナメ。	多量の石英、長石 良好	外：にぶい褐色 内：褐色	二軒屋式	
6	弥生土器 壺	— —	頭部直線模文（R L、L R）を複数施文。内面は横・斜波のナメ。	石英、角閃石、赤 鉄鉱、多量の白色 滑	普通	外：にぶい褐色 内：にぶい黄褐色	
7	弥生土器 壺	— (6.6)	頭部附加帶2種模文（L + L）。底部布目板→ナメ調整。内面は斜波のナメ。内面ゴレ付着。	石英、長石、角閃石、赤 鉄鉱 普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	十王台式	



第81図 93号住居跡・出土遺物

96号住居跡（第82図）

位置 A区の南東部P9グリッドにある。規模と平面形 $3.86 \times (3.40)$ mで、94号住居跡に壁の一部が壊されている。主軸方向 N-63°E 壁 壁高は約20cm残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居の西側半分は硬化面が残存しているが、東半分は傾斜地形によって削平されている。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径76cm、短径66cmの梢円形で深さ6cm。覆土 西壁際に暗褐色のやや軟らかい覆土が堆積している。遺物 遺物の出土量は非常に少なく、小破片のみの出土である。覆土中から5の底面部が出土している。4は半筒L.R縦文を施す。所見出土遺物や遺構の形態から、弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第82図 96号住居跡・出土遺物

表37 96号住居跡出土遺物観察表

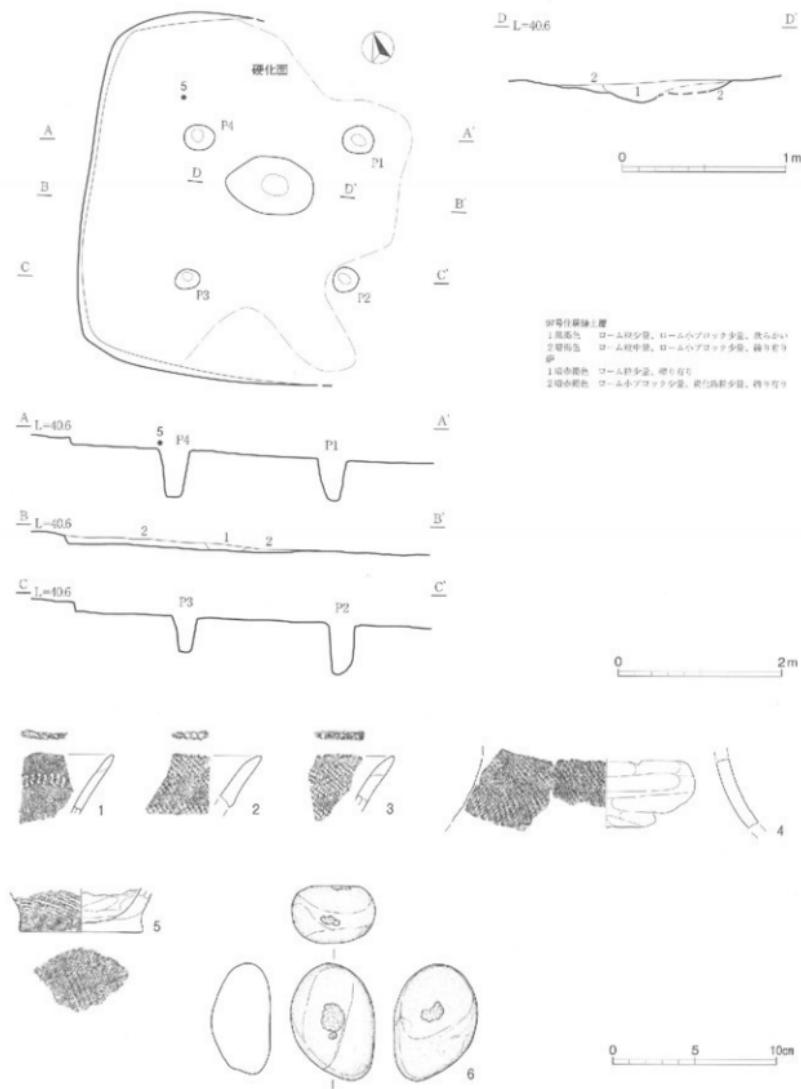
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	口唇部縦文カギミ(底部R L ナ). 口唇部6本筋の模倣波状 文(下→上). 内面は焼成のナダ。	石英、長石、多量 の焼成色	普通	オリーブ黒色	
2	弥生土器 壺	-	頭部輪郭不明の施油垂繩文(R - Z). 頭部輪郭6本筋 の模倣色. 縦文文-腹部斜紋直縫文-振りぬけの入り模 の白色釉	石英、長石、多量 の白色釉	不良	外：にぶい黄褐色 内：別赤褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	-	口唇部輪郭不明の施油垂繩文(R - Z). 施油垂繩文-カギミ-斜紋 文-頭部輪郭不明の施油垂繩文(R - Z). 内面は堅 斜紋のナダ-焼成のナダ. 外面スス付。	石英、長石、多量 の白色釉	良好	にぶい褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	-	頭部輪郭垂繩文(R R)を施油垂繩. 内面は斜紋のナダ、 鋸歯状。	石英、長石、白砂 岩	普通	外：にぶい黄褐色 内：淡色	
5	弥生土器 壺	455	頭部輪郭不明の附加垂繩文(R - S). 頭部下端斜紋の ナダ. 施油垂繩. 内面は横-頭部のナダ. 外面スス付。 底盤2箇所。	石英、長石、多量 の白色釉	普通	外：にぶい黄褐色 内：明黄褐色	

97号住居跡（第83図）

位置 A区の南東部O9グリッドにある。規模と平面形 4.96 × (3.60) m. 主軸方向 N - 25° - E
壁 壁高は約14cm残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。床 床面全体が硬化している。ビット 4箇所。
P1からP4は柱穴。炉 長径108cm、短径70cmの楕円形で深さ11cm。覆土 下層にはロームの含有の多い暗褐色土が堆積している。遺物 遺物の出土量は非常に少なく、小破片のみの出土である。十王台式後半期の土器を主体とする。1は頭部に帶状刺突文が施文される。単節縄文を施文する個体(2~4)が目立つ。5の壺底部は床面から出土している。所見 柱穴の配置と炉の位置、出土遺物などから弥生時代後期十王台式後半の堅穴住居跡と考えられる。

表38 97号住居跡出土遺物観察表

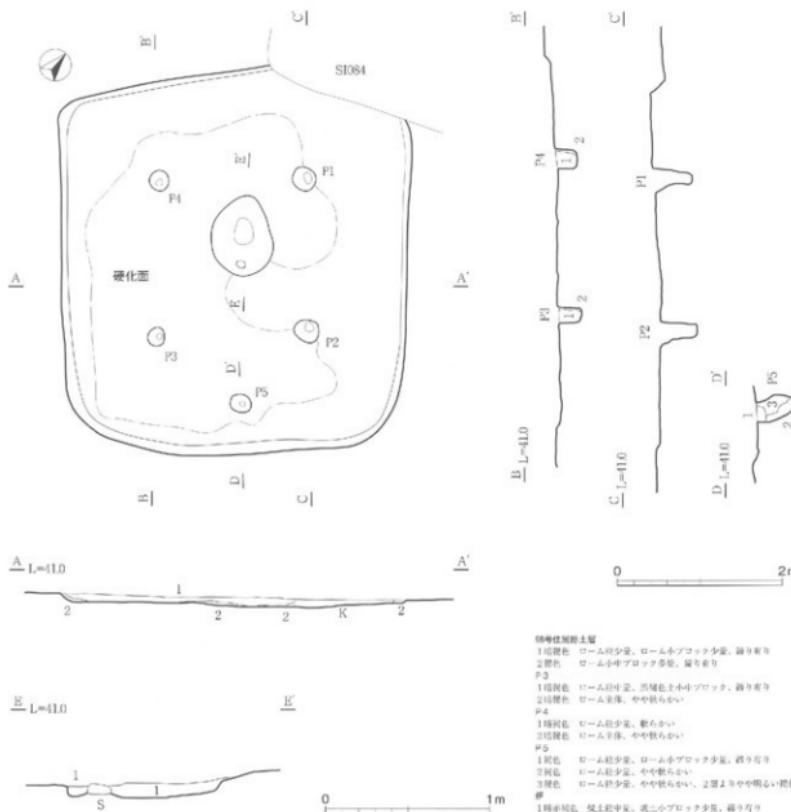
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	口唇部ヘラキザミ. 口唇部無文(位置のナダ). 縫文直伝(無 縫口)による押縄文2条. 頭部6本筋の縦び直伝文-横 び波次文. 内面は頭部斜紋のナダ-口唇部無文のナダ. 外 面スス付。	多量の石英、長石. 普通	普通	外：にぶい黄褐色 内：にぶい青褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	-	口唇部ヘラキザミ. 口唇部無文(R L)を模倣施文. 石英 内面は焼成のナダ。	石英	普通	にぶい黄褐色	
3	弥生土器 壺	-	口唇部ヘラキザミ. 口唇部無文(R L) 石英 を模倣施文. 内面は焼成のナダ。	石英	普通	にぶい黄褐色	
4	弥生土器 壺	-	頭部輪郭垂繩文(R L)を横-斜紋施文. 内面は焼成のナダ. 外面スス. 内面ヨレ付。	石英、多量の白色 釉	普通	外：黑褐色 内：灰青褐色	
5	弥生土器 壺	(74)	頭部輪郭不明の附加垂繩文(R - Z). 表部帯目痕(私 上右有). 内面は横-斜紋のナダ. 外面スス付. 内面ヨレ. ヨレヨレ付。	石英、多量の白色 釉	良好	にぶい褐色	十王台式
6	石器品 端石類	-	小型器の表、裏面や上端部に打撲痕。 石材: 猪耳石. 長さ7.1cm、幅5.5cm、厚さ3.95cm、重さ186.1g。				



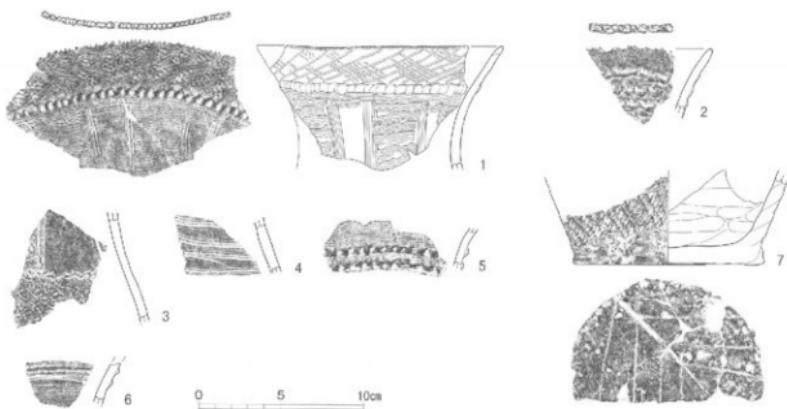
第83図 97号住居跡・出土遺物

98号住居跡（第84・85図）

位置 A区の南東部O10グリッドにある。規模と平面形 $4.76 \times 4.24\text{ m}$ 。主軸方向 N- 44° -W
壁 壁高は約10cm。床 住居中央から南側にかけて硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は
主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。炉 長径100cm、短径76cmの楕円形で深さ18cm。覆
土 繕りのある暗褐色～褐色土が堆積している。遺物 遺物の出土量は少なく、小～中破片の割合が高い。
十王台式を主体とするが、新旧の個体が混在する。所見 出土遺物などから弥生時代後期後半の堅穴住居
跡と考えられる。



第84図 98号住居跡



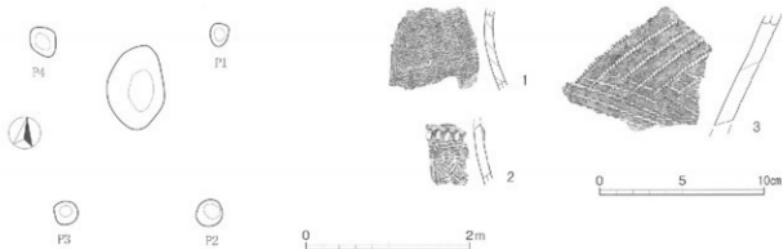
第85図 98号住居跡出土遺物

表39 98号住居跡出土遺物観察表

回復 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	粘土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	口唇部堆積工具によるギザ。口面界押出線1条→口縁部堆積2種繩文(左L+R)。探査坑下に5本前の堆積区画波状文→堆積区直線文2条→單位波状文(上→下)。内面は堆積部位のナゲ→経部堆積のナゲ、外面誠いスヌ付着。	石英、金針	良好	外:灰青褐色 内:に赤い背景	十王台式
2	弥生土器 壺	-	口唇部堆積文ギザ。口唇部無文(佛堂のナゲ)。頭部薄い押出線等3条→3本前以上の横幅波状文。内面は堆積のナゲ、外面スヌ付着。	石英、金雲母	普通	灰青褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	-	頭部堆積文2律繩文(L+L)→運搬界3本前の堆積区画波状文→頭部堆積直線文→横幅波状文。内面は後段のケズリ→堆積のナゲ。	石英、金雲母、滑石、赤色粒	普通	灰青褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	-	類部3本前の横幅直線文。内面は堆積のナゲ、器面丸れ。	石英、角閃石、多量の白色粒	良好	外:明褐色 内:灰色	
5	弥生土器 壺	-	頭部薄い押出線等→3本前の横幅直線文ないし、波状文。内面は新笠のナゲ。	多量の石英・白色粒	普通	外:灰褐色 内:灰青褐色	十王台式
6	弥生土器 壺	-	頭部無文の餘器(底面二角形)→3~4本前の横幅直線文、横幅波状文。内面は新笠のナゲ。	石英	普通	外:灰褐色 内:灰青褐色	十王台式
7	弥生土器 壺	115	頭部直線文(底面L)を斜め旋文。胴部下西横位のナゲ。底部不規則。内面は模・斜位のナゲ。	多量の石英・長石・滑石、赤色粒	良好	外:に赤い背景色 内:に赤い褐色	

99号住居跡(第86図)

位置 A区の南東部N9グリッドにある。規模と平面形 ピットと炉が確認されている。主軸方向 N - 13° - W 壁 - 床 削平されて残存していない。ピット 4箇所。P1~P4は主柱穴。炉 縦長の楕円形で、火床面は焼土化している。覆土 - 遺物 遺物の出土量は非常に少なく、小破片のみの出土である。所見 柱穴の配置と炉の位置から弥生時代後期後半の堅穴住居跡と考えられる。



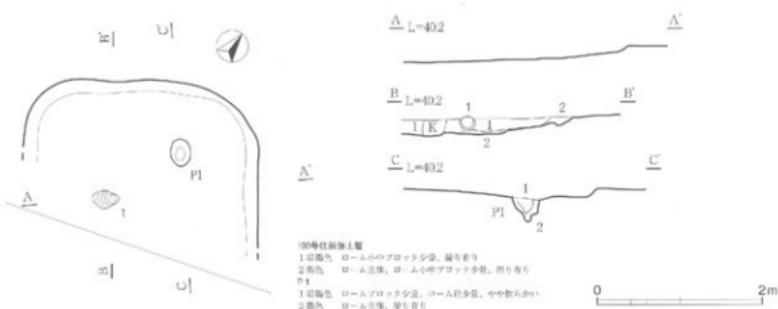
第 86 図 99 号住居跡・出土遺物

表 40 99 号住居跡出土遺物観察表

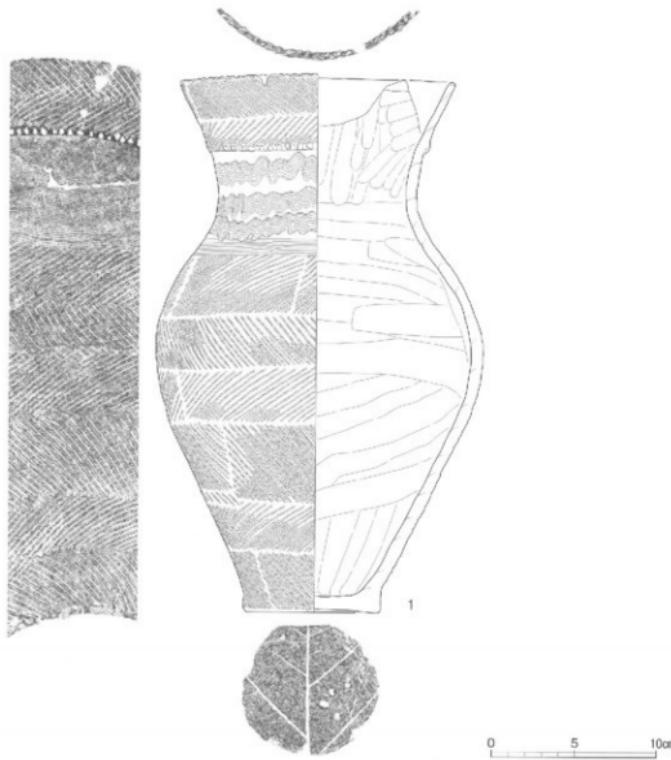
図版番号	種別	器種	口徑 基底 高度	特徴	土色	焼成	色調	備考
1	弥生土器	壺	-	底部7本筋の複合式範文→藝術卯文式(下→上)。内面は斜位のヘラナゲ式→壁室のヘラナゲ式、外面スス村式。	多量の石英・白色粘	普通	外: 黒褐色 内: に赤い黄褐色	十王台式
2	弥生土器	壺	-	底部丸形状工具によるキザミ鉢沿→垂乳直下に4本筋の横筋(区段)と波状文→頭威探官式模様→藝術羽状文(右→左、下→上)。内面は傾位のナヂ、外面スス付式。	石英	普通	外: 灰灰褐色 内: に赤い黄褐色	十王台式
3	弥生土器	壺	-	削部輪郭不明の細加条範文(R-S、R-Z: 下→上)。内面は傾・斜位のナヂ。	多量の石英・白色粘	良好	に赤い黄褐色	十王台式

100号住居跡 (第 87・88 図)

位置 A区の南東部O11グリッドにある。規模と平面形 2.90 × (2.40) m。主軸方向 N - 38° - W 壁 壁高は約 12cm。床 - ピット 1箇所。P1は深さ 28cm。炉 - 覆土 ローム小中プロックを含んだ繊りのある覆土である。遺物 1は二軒屋式の壺は完形個体である。その他、十王台式土器の小片が極少量出土している。所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第 87 図 100号住居跡



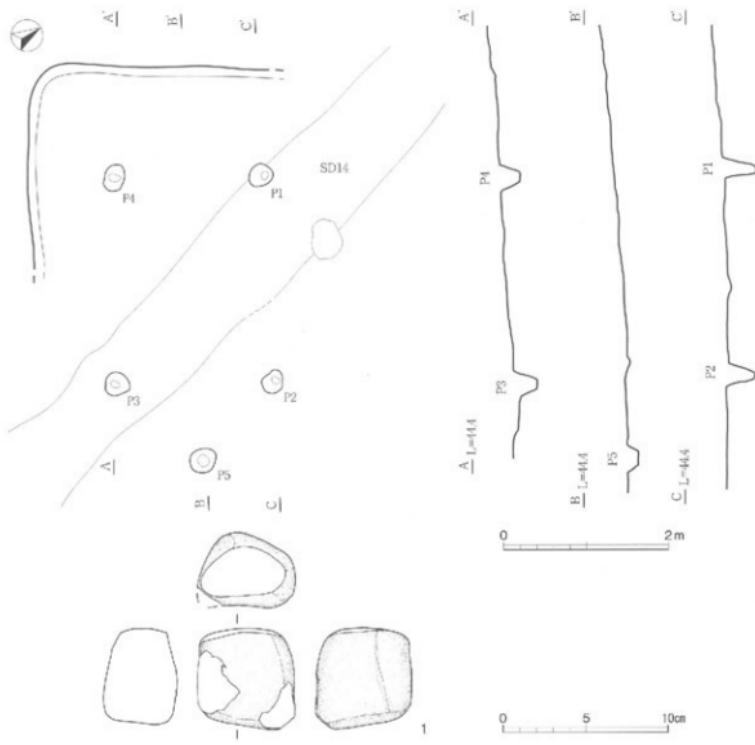
第88図 100号住居跡出土遺物

表41 100号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種 器 類	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	赤土器 壺	(169) 331 82	口縁部に刷毛印と鉢を呈し、附加素 材陶文(2L+2R、LR+2R:下上)を模範陶文 割離附加素材陶文(2L+2R、LR+2R:下上) →器底9本筋の堆積区画と陶文1条→堆積区画3条(上 →下、反時計回り)、底盤木痕真。内面は單一底盤下部は横 ・斜筋のヘラナカル。底→一口底盤は新笠のナメ、外面單一 頭蓋、底盤下部に濃いスヌ付有。底盤中位はスヌ性化消失。 内面は新笠中位以下に濃青るミゾシ、以上は薄いヨブレ 付有。	多量の石英・長石	良好	外：灰青褐色 内：黒褐色	二軒式

101号住居跡（第89図）

位置 A区中央部、M 7・N 7グリッドにある。 規模と平面形 $(5.08) \times (3.88)$ m。 主軸方向 N - 62° - E 壁 - 床 硬化した床は残存していない。 ピット 5箇所。 P 1からP 4は主柱穴。 P 5は出入り口ピットと考えられる。 覆土 非常に浅くほとんど残存していない。 遺物 - 所見 柱穴の配置と炉の位置などから弥生時代後期の堅穴住居跡と見られる。



第89図 101号住居跡・出土遺物

表42 101号住居跡出土遺物観察表

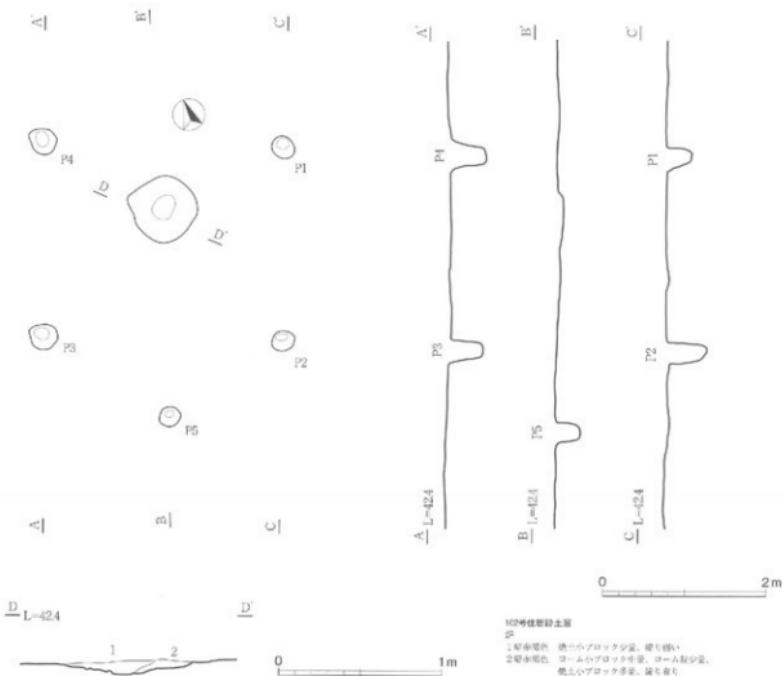
深度 番号	種別 測定	口径 器高 底径	特 徴	油土	焼成	色調	備考
1	石器 礫石		自然縁の上面に顕著な擦耗面、磨耗面の一部は赤褐色に変色。両側縁の一部に擦痕。				

石材: 砂岩, 長さ6.15cm・幅5.9cm・厚さ4.65cm・重さ2430g。

102号住居跡（第90図）

位置 A区中央部、N 7グリッドにある。 規模と平面形 ピットとがが確認されている。 主軸方向 N - 17° - E 壁 - 床 削平されて残存していない。 ピット 5箇所。 P 1からP 4は主柱穴。 P 5は

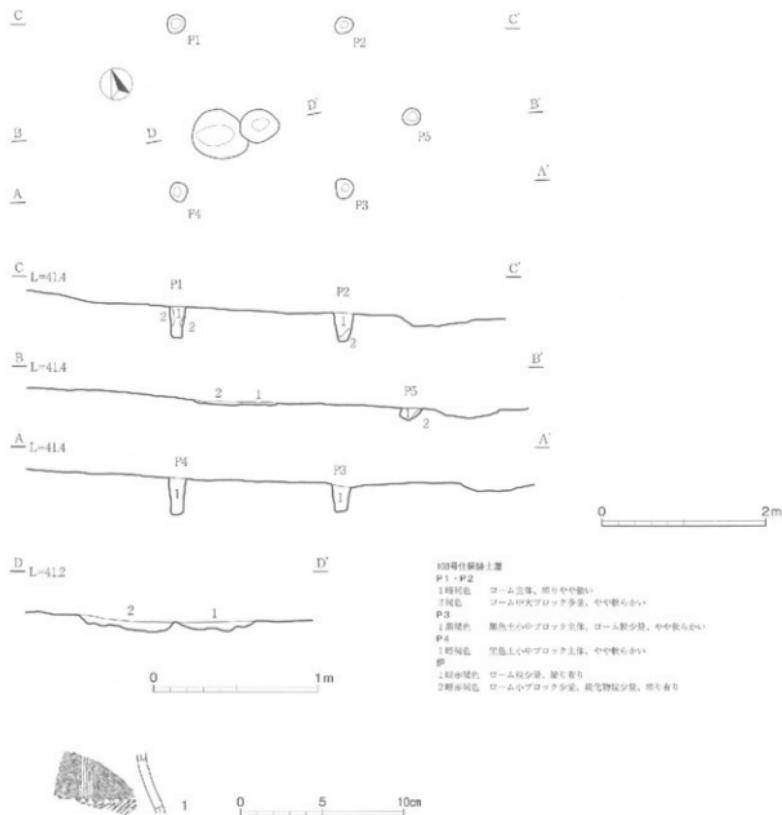
出入り口ピットと考えられる。 炉 長径86cm、短径80cmの楕円形で深さ8cm。 覆土 - 遺物 遺物の出土量は非常に少なく、小破片のみのため図示し得ない。 所見 柱穴の配置と炉の位置などから弥生時代後期の堅穴住居跡と見られる。



第90図 103号住居跡

103号住居跡 (第91図)

位置 A区南部、N 10 グリッドにある。 規模と平面形 床面は削平を受けており、4本の主柱穴と出入り口ピット穴、炉跡の掘り込みが確認されたのみで、遺構の平面形は捉えられなかった。 主軸方向 N - 73° - W 床 大部分は削平されている。 ピット 5箇所。 P 1 から P 4 は主柱穴。 P 5 は出入り口ピットと考えられる。 炉 2か所ある。炉1は、長径48cm、短径40cmの楕円形で深さ5cm。炉2は長径70cm、短径60cmの楕円形で深さ6cm。 遺物 遺物の出土量は非常に少なく、小破片のみの出土である。 1は十王台式の範疇だが、頸胴界を縄文原体端部(無筋R)で押捺し、区画する。 所見 柱穴の配置と炉の位置、出土遺物などから弥生時代後期の堅穴住居跡と考えられる。



第91図 103号住居跡・出土遺物

表43 103号住居跡出土遺物観察表

回収番号	種別 器種	口径 高さ 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	粘土土器 壺	- - -	腹部輪郭不明の附加条理（R-S）→腹部等高線の筋 体側部による押捺印→腹部S表面の成形状況→筋压印 縞文。内面は模倣のナメ。外腹は付帯。	石英	普通	外：黒褐色 内：灰紫色	十五石式

2 遺構外出土遺物

1～5、9～17、23～27は十王台式土器の範疇で捉えられる壺である。4は口縁部の最上段に上開きの櫛描孤文が施文される。9は傾きの程度から壺としたが、高壺の可能性もある。11縁部の内外面に櫛描波状文が施文される。15は縦位の櫛描波状文と横位区画直線文が施文される細頸壺でやや異質な文様構成を呈する。16は櫛描直線文と附加条縦文を縦位に施文する希少な個体である。胴部は輪縫不明の附加条縦文(23・25・27)、ないし附加条2種縦文(24・26)が施文され、底部は布目痕(26・27)である。

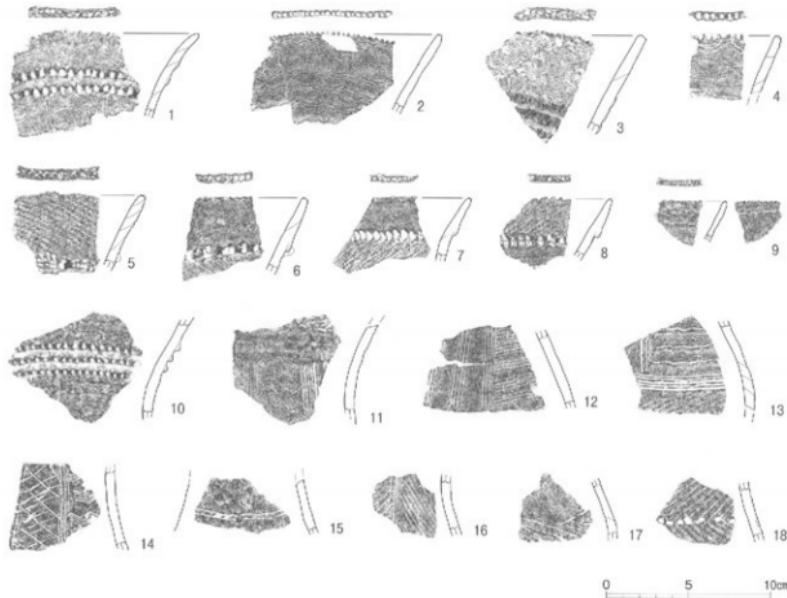
18は円形の刺突列と附加条1種縦文が施文され、19は頸部に無文帶を有し、単節L R純文、円形貼付文が施文される。いずれも霞ヶ浦沿岸から南関東に出自をもつ土器群と考えられる。

20～22・28・29は二軒屋式土器の範疇で捉えられる壺である。多条の櫛描文(20～22)、附加2条の附加条1種縦文(22・29)、底部の木葉痕(28・29)、多量の石英・長石が含まれる胎土などの諸特徴を備える。

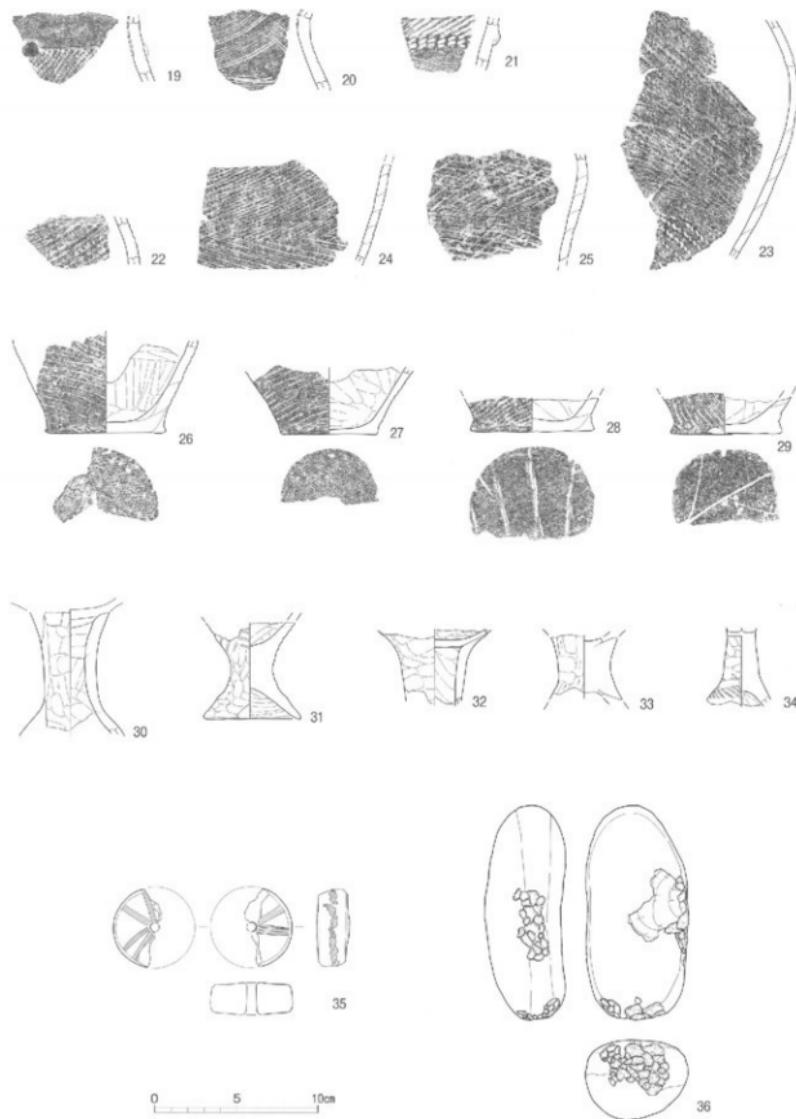
30～34は弥生系(十王台式カ)の高壺である。脚部の成形技法には中空のもの(30・32)と中実のもの(31・33・34)の2種類が認められる。

35は土製紡錘車である。表裏面に3本歯の櫛描放射状文、側面に櫛描波状文が施文される。

36は磨石類である。36には磨耗痕とともに顕著な敲打痕が認められる。



第92図 遺構外出土遺物①



第93図 遺構外出土遺物②

表 44 A区遺構外出土遺物觀察表

図版 番号	種類 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	灰生土器 壺	-	口唇部横文(内側)キザミラヘラキザミ。腹部横状4-5に よるキザミ内側2条→外側の横位直彫文→横位底彫文 (下→上)。内側は口唇部横位のナダ→口唇部底位のナダ、 外門入ス付着。	多量の石英・白色 粒、角閃石	良好	外: 黒褐色 内: 順色	SI076 漢人 土上式
2	灰生土器 壺	-	口唇部ヘラキザミ。口唇部4本面の横位底彫文。内側は 口唇部横位のナダ→口唇部底位のナダ。外門入ス付 着。	石英	良好	外: 次更褐色 内: に赤い黄褐色	灰土 王台式
3	灰生土器 壺	-	口唇部横文原体(加熱しカ)キザミ。口唇部横位底彫文、 内側は口唇部本体の横位底彫文(下→上)。内側は横位 のナダ。	石英、金雲母	良好	外: 明黄褐色 内: に赤い黄褐色	表土 土上式
4	灰生土器 壺	-	口唇部ヘラキザミ。口唇部4本面の上開き底彫文、横位 底彫文。内側は横位のナダ。	石英、骨针	良好	に赤い黄褐色	SD08-09西の 表土
5	灰生土器 壺	-	口唇部横位縦彫文(L+R)。口唇部底彫文不明の 附加系彫文(R、Z、R、S)→口唇部3本以上 の横位底彫文。内側はナダ。外門入ス付着。	石英、角閃石	普通	外: に赤い褐色 内: に赤い黄褐色	SI01 漢入
6	灰生土器 壺	-	口唇部横文原体(加熱し)キザミ。頭部底位1本横彫文(R + Z)→口唇部底彫文「品」による刺彫→2重一対の 貼付文。内側は斜位のナダ。外門入ス付着。	多量の石英・長石	良好	外: 黄褐色 内: 黄褐色	SD13-A 漢人
7	灰生土器 壺	-	頭部横位不明の附加系彫文(R-S)→口唇下斜向彫の 原体でナダ。内側は横位のナダ。外門入ス付着。	石英	普通	に赤い黄褐色	SI092 漢人
8	灰生土器 壺	-	口唇部横位工具によるキザミ。口唇部底彫文・横彫文 (L+R+2L)→口唇部底彫の原体によるキザミ。頭 部彫文(横位のナダ)。内側は横位のナダ。外門入ス付着。	多量の石英・長石	良好	に赤い黄褐色	SD02 漢入
9	灰生土器 壺	-	口唇部ヘラキザミ。口唇部4本面の横位底彫文(下→上)。 内側は横位底彫文。以上は横位のナダ。	石英、赤色粒	普通	外: 純色 内: 淡黃褐色	SI007 漢入
10	灰生土器 壺	-	頭部を鉛錠工具によるキザミ隆起3条→口唇部4本面の 横位底彫文。頭部横位の直彫文→横位の横彫文。内側は横 位のナダ。外門入ス付着。	多量の石英・白色	普通	外: に赤い黄褐色 内: 純色	A区一期
11	灰生土器 壺	-	口唇部横位不明の附加系彫文(R-S)。口唇部横位直彫 粒・横位6本面の横位の直彫文→横位底彫文。内側は 横位・斜位のナダ。外門入ス。内側は2重一対のナダ。外門入ス、 内側ヨコリ付着。	石英、角閃石	普通	黄褐色	SD05 漢人
12	灰生土器 壺	-	頭部水牛型の複合横彫工具による横位直彫文3条と 単位→横位底彫文。内側は横位・斜位のナダ。外門入ス、 内側ヨコリ付着。	石英	良好	外: 帯赤褐色 内: に赤い黄褐色	SD13B 漢入
13	灰生土器 壺	-	頭部加刷1本横彫文(L+2L)→頭部斜位4本面の横位 底彫文→頭部底位直彫文→横位底彫文。内側は頭部 が横位のナダ。頭部が斜位のナダ。外門入ス付着。	石英、角閃石、骨 針、赤色粒	普通	に赤い黄褐色	3号地下式坑道 人
14	灰生土器 壺	-	頭部2重の複合底彫文→ヘラ引き斜位横彫文→横位底彫 文。内側は横・斜位のナダ。	石英、角閃石、赤 色粒	良好	褐色	3号地下式坑道 人
15	灰生土器 壺	-	頭部2本同時底彫文による横位の曲面底彫文→3本面の 横位底彫文。内側は横・斜位のナダ。外門入ス、内側ヨ コリ付着。	石英	普通	黄褐色	SI082 カマド漢 入
16	灰生土器 壺	-	頭部・本面の横位直彫文→頭部斜位1本横彫文(L+R+2L + RL+2L)を複位底彫。内側は横位のナダ。外門入ス付 着。	石英、角閃石、赤 色粒	普通	外: に赤い黄褐色 内: 純色	SI000 初入
17	灰生土器 壺	-	頭部横位不明の附加系彫文(1-2)→頭部底位3本面の 山彫形(時計時回り)。内側は斜位のナダ。外門入ス付着。	石英、骨针	普通	外: 黑褐色 内: 黑褐色	SI051 カクラン
18	灰生土器 壺	-	頭部斜位1本横彫文(L+R+2L、RL+2L)を複位 底彫。火状横彫の双頭火に赤土色工具による横位の刺突 文1重。内側はナダ。外門入ス付着。	石英、角閃石	普通	外: に赤い黄褐色 内: に赤い黄褐色	3号地下式坑道 人
19	灰生土器 壺	-	頭部横位彫文(シ)を複位底彫。横文底彫等による横位 底彫文。内側は斜位のナダ。設面彫刻。	多量の石英、角閃 石	良好	外: 黑褐色 内: 明赤褐色	SX01 上場
20	灰生土器 壺	-	頭部本面の横位直彫文、上開きの直彫文ないし、山形 彫文(斜位回り)。内側は斜位のナダ。	多量の石英・長石	普通	外: 明赤褐色 内: 純色	6号地下式坑道 人 一期型式
21	灰生土器 壺	-	口唇部横位縦彫文(L)。口唇部底位は同様の 原形底彫文によるキザミ。頭部は赤色の骨質な漫彫文 (時計回り)。内側は斜位のナダ。	多量の石英、赤色	普通	外: に赤い黄褐色 内: 純色	SI007 漢入 二期型式
22	灰生土器 壺	-	口唇部横位加刷1本横彫文(L+2R)→頭部等灰生土器めか の横位底彫文(時計回り)。内側は横・斜位のナダ。	石英、角閃石、多 量の白色粒	普通	に赤い黄褐色	SI082 漢入 二期型式

図版番号	種別 器種	口径 基底 底板	特徴	胎土	焼成	色調	備考
23	弥生土器 碗	-	柄部輪廻不明の附加系縄文（R・Z・L・Z：「→上」）下部2段目のR・Z。肩羽状構成。内面は肩部が斜位のナガ、側部が直位のナダ。外腹スヌ（肩部に鋸歯）、内腹側壁下部にヨコレ付帯。	石英、長石、骨閃石、金云母 赤色粒	良好 普通	外：褐色 内：に赤い黄褐色	表土 土玉吉式
24	弥生土器 盤	-	側部附加渠2種縄文（R.L.+2L、しま-2L：「→上、反時計回り」）。内凹は斜位のナダ。	石英、長石、骨閃石、金云母	良好 普通	外：に赤い黄褐色 内：に赤い黄褐色	SD09 深入 十三合式
25	弥生土器 碗	-	柄部輪廻不明の附加系縄文（R・S・L・Z：「→下」）。内面は底・斜位のナダ。外腹スヌ付帯、焼成による赤化・剥離。	石英、多量の白色粒	普通	外：赤褐色 内：に赤い黄褐色	弥生土器個人 土玉吉式
26	弥生土器 皿	(7.3)	柄部附加渠2種縄文（L+L）。底張布目柄。内凹は斜位のヘラナダ→側位のヘラナダ・ナダ。	石英、骨閃石、骨針	良好	に赤い黄褐色	5号地下式焼成 土玉吉式
27	弥生土器 盤	(5.9)	柄部輪廻不明の附加系縄文（R・S・L：「馬跡回り」）。底張布目柄。内面は底・斜位のナダ。外腹スヌ付帯。	石英、白閃石、多量の白色粒、赤色粒	普通	外：に赤い黄褐色 内：浅褐色	5号地下式焼成 土玉吉式
28	弥生土器 碗	7.3	柄部輪廻不明の附加系縄文（R・S）。底張布目柄。内面は斜位のナダ。底張口再SL。	多量の石英、長石、赤石、赤色粒	良好	暗灰褐色	4号地下式サバ 人二井屋式
29	弥生土器 皿	(6.6)	柄部附加渠1種縄文（R.L.+2L）。底張布目柄。内面は斜位のナダ。外腹スヌ付帯。	多量の石英、赤石	普通	に赤い黄褐色	SX01 深入 二井屋式
30	弥生土器 瓶	-	側部中空。側部斜位のヘラケリヨ→横・斜位のナダ。内面は横・斜位のナダ。	石英、骨閃石、骨針	普通	に赤い黄褐色	SD47 深入
31	弥生土器 高杯	(6.0)	側部中空。吹き抜れ輪廻不明の附加系縄文（L・S・S・L・Z：「→時計回り」）。側部底盤・斜位のナダ→側位のナダ。内面は片赤褐色・斜位のナダ。側部底盤のナダ。	石英、角閃石、赤色粒	良好	に赤い黄褐色	SD05 深入
32	弥生土器 高杯	-	側部中空。吹き抜れ・側位のナダ。内面は斜位のナダ。石英、角閃石、多量の白色粒、赤色粒	普通	に赤い黄褐色	SD08 深入	
33	弥生土器 高杯	-	側部中空で底盤をソケット式に施す。側部底盤のヘラケリヨ→斜位のナダ。内面はナダ。	多量の石英、白色粒、骨閃石、赤色粒	普通	に赤い黄褐色	SP02 深入、表土
34	弥生土器 高杯	-	側部中空。側部底盤・斜位のナダ。側部輪廻不明の附加系縄文（L・Z：「時計回り」）→側位のナダ。内面は側部斜位のナダ。	石英、角閃石、赤色粒	普通	に赤い黄褐色	SD026 カラン
35	土製品 纺錘車	-	径(5.0)、高(2.0)、孔径(0.6)、重(36.47)g。表面陶土テクスチャ・日本産の吹き抜れ底盤文。側面両側の工具による成形状況。片側丸孔。	石英、多量の白色粒、骨针 灰青和丸	普通	SD017 深入	
36	石斧 磨石類	-	素→刃。自然側の表面全体に磨耗痕。刃部は平滑。刃質面や刃端部に誤差な磨打痕。刃材：石英岩正岩。長さ130mm、幅63mm、厚さ4.9mm、重さ66.2kg。				A区1号窓カタ ラン出二

第3節 古墳時代

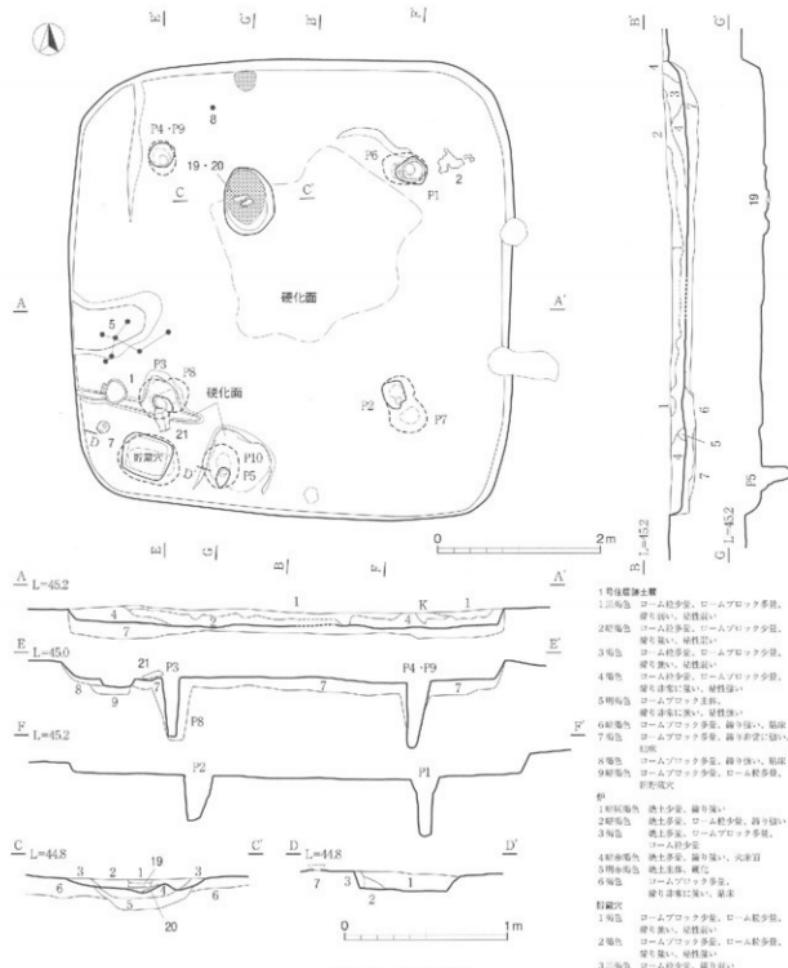
1 窓穴住居跡

1号住居跡（第94～96図）

位置 A区北端、L 1 グリッドに位置する。 規模と平面形 南北方向 5.62 m、東西方向 5.46 mを測り、台形に近い隅丸正方形を呈する。弥生時代の2・3号住居跡を壊し、1号溝によって東壁の一部が壊される。主軸方位 N - 2° - W 壁 壁高は 26cm を測り、やや傾斜する。床 中央部が硬化する。また、出入り口部周辺と貯蔵穴の周堤北側の2箇所に高まりが認められる。掘り方平面図は掲載していないが、壁際には幅 60 ~ 100cm 程の浅い溝状掘り方がある。ピット 10箇所ある。P 1 ~ 4 が主柱穴、掘り方面で確認した P 6 ~ 9 が占い主柱穴、P 5・10 が出入り口ピットであろう。P 1 ~ 4 の掘り方と P 6 ~ 9 は破線で表現してある。P 1 ~ 3 は直径約 20cm の柱痕が断面で観察され、P 1 ~ 5、P 8 ~ 10 の柱穴底面には直径 10cm 前後の灰褐色化した硬化圧痕を明瞭に検出した。P 4・9 はほぼ同一地点を利用しており、P 4 の硬化圧痕を掘り抜くと、黒色土を抉んで P 9 の硬化圧痕が現れた。P 5 は斜めに穿たれている。南西隅部には隅丸方形の貯蔵穴がある。北側には硬化した周堤が設けられる。炉 窓穴中央北西寄りに位置する。平面は不整梢円形で、浅い皿状を呈する。被熱は顯著である。中央部に平たい棒状に成形・焼成された土製品が2個並んで設置されており、炉石として使用したものと思われる。覆土 窓穴中央最上層から壁際下層にかけて、暗~黒褐色土、褐色土、明褐色土の順に自然堆積する。遺物 貯蔵穴の西脇からほぼ完形の7の鉢が逆位で、貯蔵穴北側の周堤上から1の壺が横位の状態で出土している。P 3 の脇には21の台石が置かれている。所見 P 5 の出入り口部の高まりと貯蔵穴および周堤は輪方向がほぼ一致するが、窓穴主軸とは直交していない。貯蔵穴も新旧が認められ、古い貯蔵穴（破線で表現）の底部を貼床状に埋め戻している。各主柱穴はほぼ同一位置で建て直しされている。住居跡の時期は、古墳時代前期に比定される。

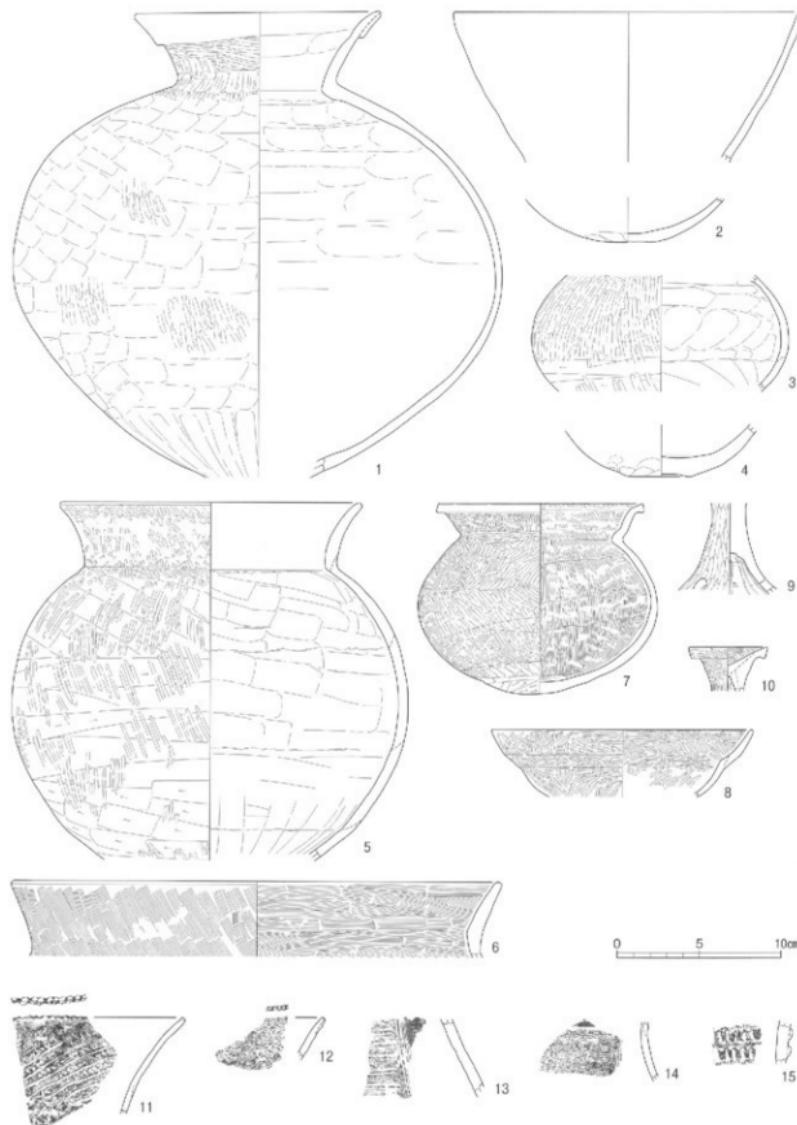
表45 1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	14.9 - -	口縁部ヨコナデ、外縁部内面ハラケズリ後にヘラミガキ、石英斑 キ、山隣部内面折痕、内証側部ナダ、側部外側に赤彩の痕 跡。	良好	に赤い黄褐色	内側部以下あ ばた状剥離	
2	土器	11.2 - -	山隣部ヨコナデ、群部～底部外側ハラケズリ後に側部ナ ダ、側部～底部内面ナダ。	石洗、費母	普通	に赤い黄褐色	口縁外側スス、 底部～底部内面 あばた状剥離
3	土器	- -	側部外側ハラケズリ後にヘラミガキ、底部内面ハラケズ リ後にヘラナダ。	費母	良好	に赤い黄褐色	
4	土器	- 37	側部外側ヘラケズリ後にナダ、底部外側ヘラケズリ、鶴 部～底部内面ナダ。	石洗、チャート、良好 石母	に赤い黄褐色	側部～底部内面 あばた状剥離	
5	土器	18.4 - -	口縁部ヨコナデ後に外側ヘラミガキ、側部外側ヘラケズ リ後にヘラミガキ、側部内面ヘラナダ。	石洗、青母、白色 石母	普通	褐色	外側部巾位にス ス、内証側は下 手あばた状剥離
6	土器	29.8 -	口縁部内外面ハラケメ。	石洗、角閃石	普通	褐色	
7	土器	12.6 11.7 -	口縁部ヨコナデ、側部ヘラミガキ、頂部外側ハラケズ リ後にヘラミガキ、底部外側ヘラケズリ、側部～底部内面 ナダ後にヘラミガキ。	石英、青母、角閃 石	普通	に赤い黄褐色	内凹側巾位以 下に赤褐色剥 離
8	土器	15.9 -	口縁部～体部外側ヘラミガキ、口縁部～体部内面ハラケメ 後にヘラミガキ。	石英、青母	普通	暗赤褐色	内外質無形、体 部内面あばた状 剥離

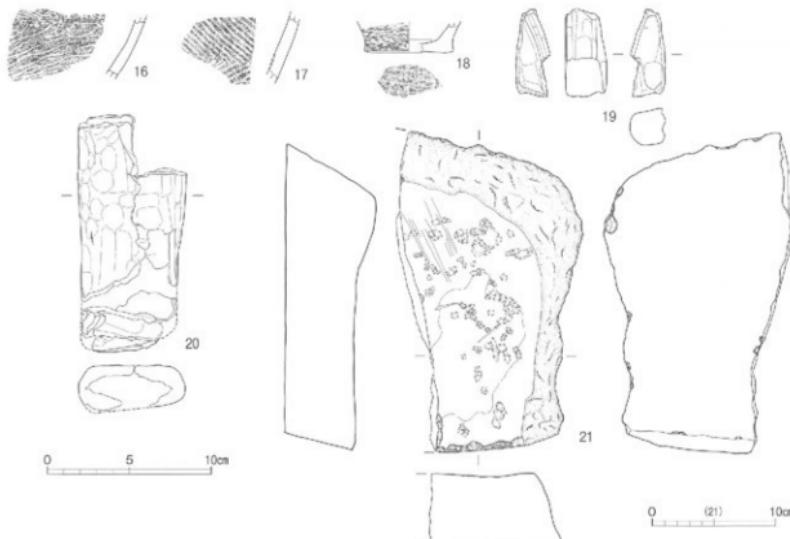


第94図 1号住居跡

段落 番号	種別 器種	口径 剖面 度数	特徴	土質	焼成	色調	備考
9	土器類 実物	-	構部3方向に透孔。脚部外縁へラケズリ後にヘラミガキ。構部内面へフナド。	滑石、角閃石、褐 色鉱	普通	浅黄褐色	
10	土器類 器台	4.8	口縁部内部而端部へヘラミガキ。	石英、雲母	普通	灰黄褐色	



第95図 1号住居跡出土遺物①

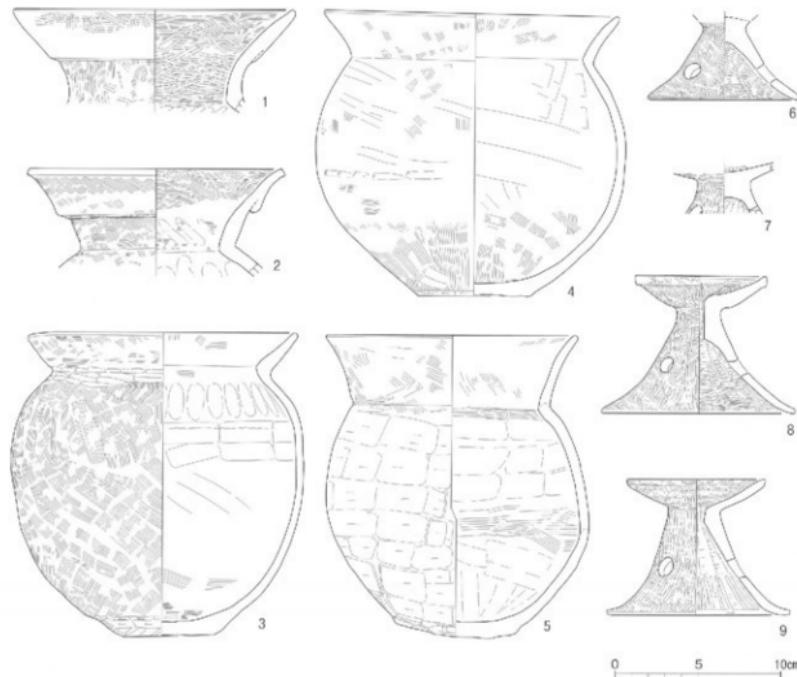


第96図 1号住居跡出土遺物②

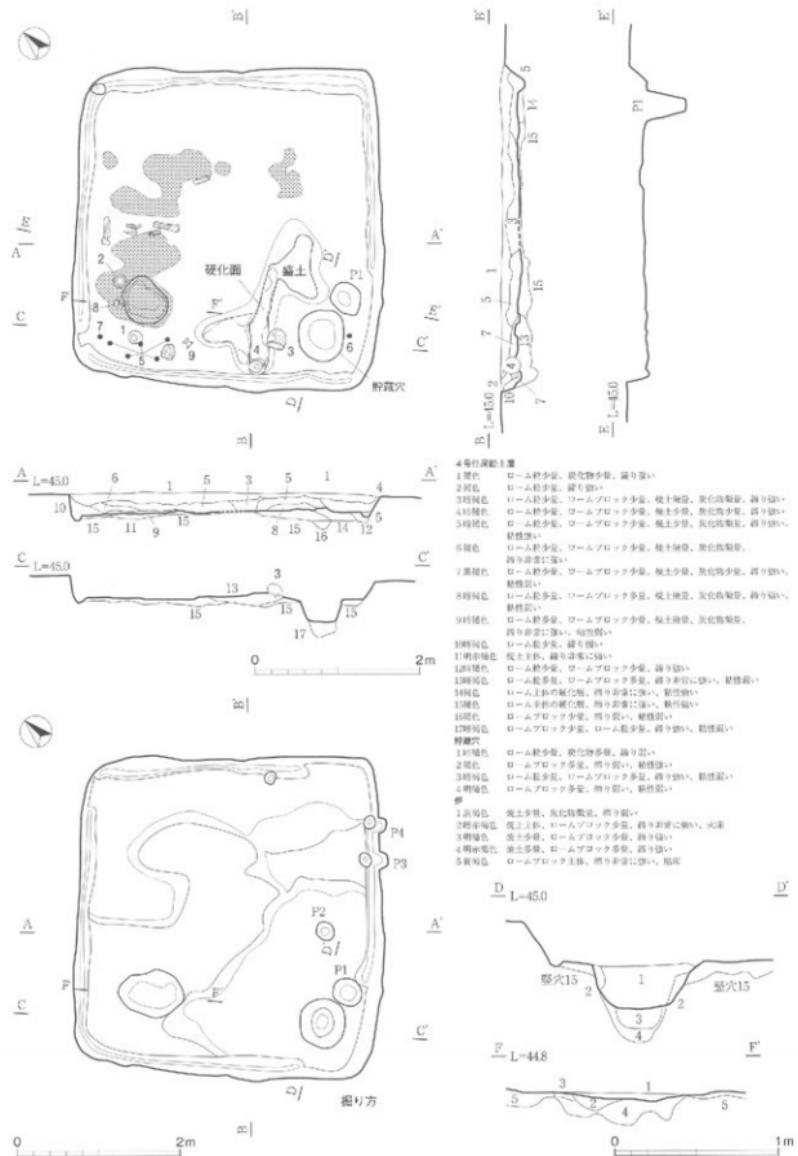
器種 番号	種別 器種	口径 器高 基底	特　　性	胎土	焼成	色調	備考
11	弦生土器 豆	— — —	口唇部ヘラキザミ。口縁部附加条2種々縞文。	霰母、骨針	普通	にぶい黄褐色	十王台式
12	弦生土器 甕	— —	口唇部ヘラキザミ。口縁部4本筋の横位波状文。	石英、霰母	普通	橙色	十王台式
13	弦生土器 豆	— — —	頸部6本筋の横位直縞文→變型直縞文→横位波状文。	石英、チャート	普通	橙色	十王台式
14	弦生土器 甕	— —	頸部6本筋の縱位直縞文→横位波状文。外面スス付垂。	霰母	普通	にぶい黄褐色	十王台式
15	弦生土器 甕	— — —	頸部茎部上にヘラキザミ。	霰母、角閃石	普通	にぶい黄褐色	
16	弦生土器 豆	— —	頸部輪縫不明の附加条縞文(R-S)。	石英、霰母、角閃石	灰黃褐色	十王台式	
17	弦生土器 甕	— —	頸部輪縫不明の附加条縞文(R-S-L-Z:上→下)。	石英、霰母、骨針	普通	にぶい黄褐色	十三台式
18	弦生土器 豆	(54)	頸部輪縫不明の附加条縞文(R-S)。底部布目質。	石英、霰母	普通	にぶい黄褐色	十三台式
19	土製品 不明		残長54cm、厚さ2.1cmの板状土製品。外面ナメ。	石英、チャート	普通	橙色	印
20	土製品 不明		残長14.7cm、幅6.6cm、厚さ2.8cmの板状土製品。外面にナメと指擦痕。二次的な被熱による感熱きず。	石英、霰母、骨針	普通	にぶい橙色	印
21	石器 台石		欠損品。縦→横。大形板状圓の表・裏面に斬削痕。表面は平滑。表面に敲打痕および擦痕。 石材: 鈴岩。残存長20.25cm・残存幅15.2cm・残存厚7.3cm・重さ38500g。			米開直上	

4号住居跡（第97~99図）

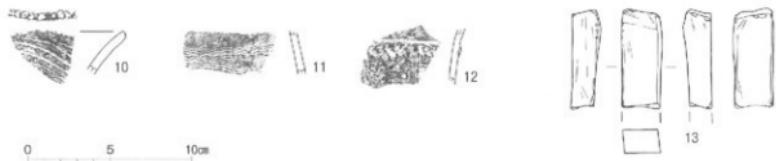
位置 A区北端、L1～L2グリッドに位置する。規模と平面形 主軸方向 3.77m × 3.96m、隅丸正方形に近い。主軸方位 N-42°-W 壁 壁高は26cmを測り、やや傾斜する。床 貯蔵穴北側にある周堤盛土上が硬化する。周溝はほぼ全周する。掘り方は、貯蔵穴周辺がやや深く掘り込まれている。ピット4箇所。P1は出入口ピット。P2～4は掘り方で確認した。P3・4は堅穴壁にやや斜めに穿たれている。南西隅には、ほぼ椿円形の貯蔵穴があり、断面漏斗状である。炉 位置は北西隅に近い。平面は不整楕円形で、浅皿状を呈する。炉の東側床面は著しく被熱しており、上屋焼失時のものと推測される。覆土 1・2・10層以外からは焼土塊・炭化材が検出され、上屋の焼失が想定できる。遺物 貯蔵穴北側の周堤状の高まり部の直上から、正位・横位の状態で2点の壺(3・4)が出土している。炉の周りの床面からも、1・2の壺口縁部や8・9の器台が出土している。所見 住居跡の時期は、古墳時代前期に比定される。同時期の焼失事例には23号住居跡が挙げられ、炉の周りの床面が著しく焼けている点や主柱穴をもたないことが共通する。貯蔵穴施設周辺からほぼ完形の土器が出土する事例は1号住居跡でも認められ、生活時の状況を反映している可能性がある。



第97図 4号住居跡出土遺物①



第98図 4号住居跡



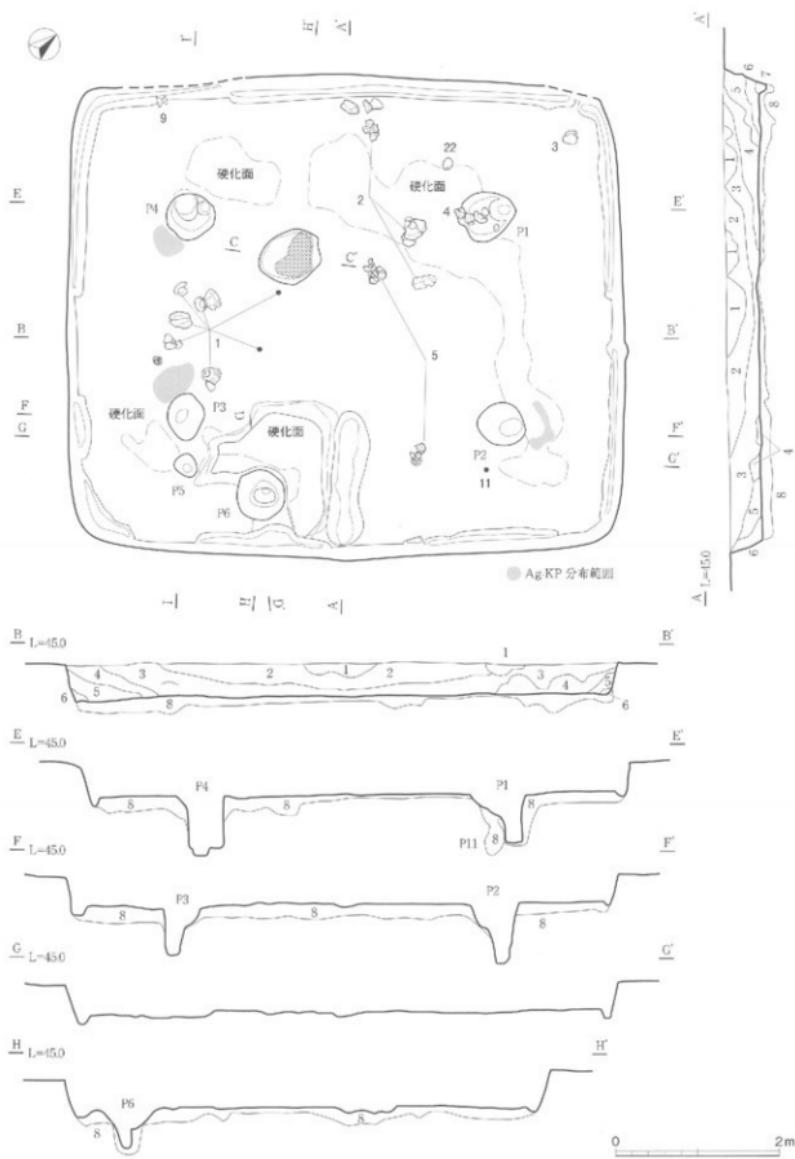
第99図 4号住居跡出土遺物②

表46 4号住居跡出土遺物調査表

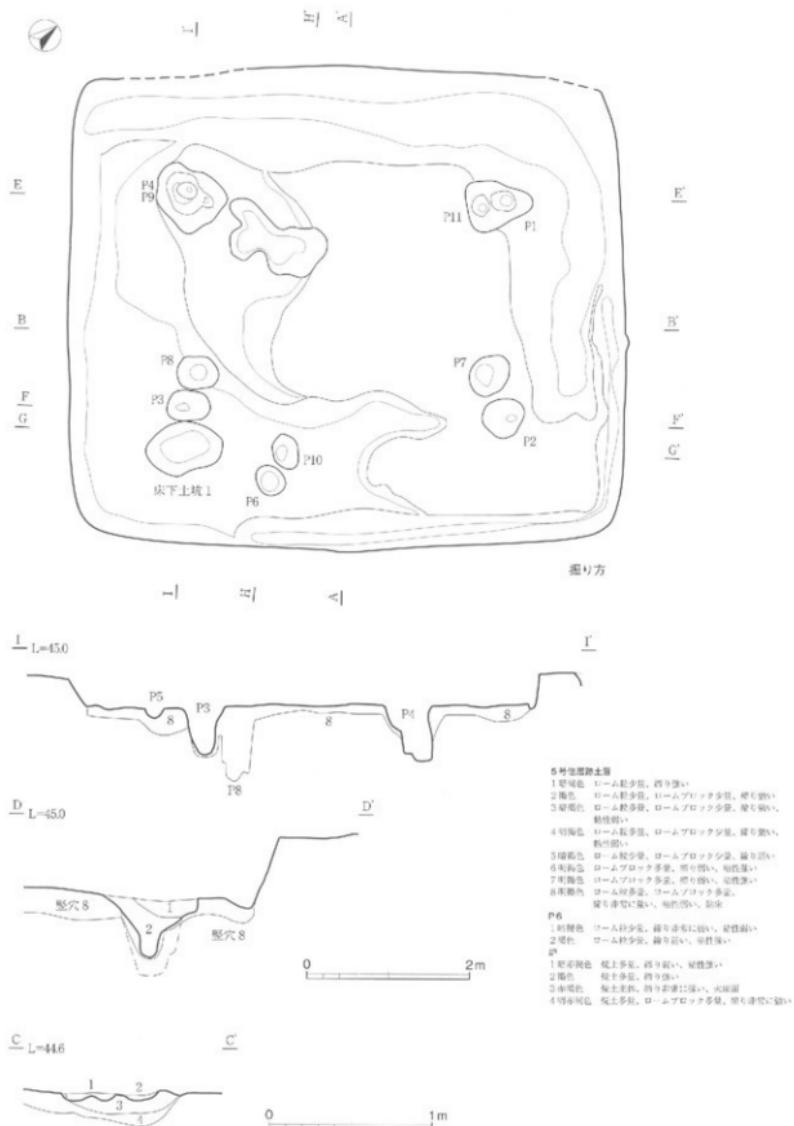
調査番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺	17.2 —	口部外ハケメ後にハミガキ。	石英、チャート、骨針	普通	褐色	腹部打ち欠き調整し新台使用
2	土師器 壺	15.7 —	口部外面ハケメ後にナデ、口部内部ハケメ後に腹部ナデ。	石英、雲母、白色 骨	良好	褐色	腹部打ち欠き調整し新台使用
3	土師器 壺	16.5 18.7 5.5	口部内部外面ハケメ後にヨコナデ、頸部外面ナデ、腹部外面ハラズミ後にハク抜孔、底部外面ハラズミ、腹部内面ハラズミ、底部内面ハラズミ。	石英、骨針	普通	褐色	腹外面にスス、内面側面下部以下あばた状形成
4	土師器 壺	17.9 12.5 6.3	口部内部ハケメ後にヨコナデ、腹部外面ハケメ後に上半ナデ、外面側面下部ハラズミ、内面側面上半ハラズミ、下半ハラズミ、下半ハラズミ後にハラダ。	石英、雲母	普通	にふい褐色	外面部上半にスス付着
5	土師器 壺	15.3 18.6 7.5	口部ハケメ後にヨコナデ、腹部一部外面暗黒なハラズミ、内面側面ハラズミ。	石英、雲母	普通	褐色	外面部然とスス、腹部内面以下あばた状形成
6	土師器 壺	— — 9.2	腹部3方向に透孔。腹部外面ハケメ後にハミガキ。	石英、チャート、 白色骨	良好	褐色	
7	土師器 壺	— — —	腹部3方向に透孔。颈部一部外面ハミガキ、環内面ハミガキ、腹部内面ナデ。	石英、骨針	良好	明赤褐色	
8	土師器 壺	7.8 8.5 11.7	腹部3方向に透孔。环内面外周ヨコナデ後にハミガキ、腹部外周ハケメ後にハミガキ、腹部内面ハラズミとヨコナデ後にハミガキ。	石英、チャート、 骨針	普通	褐色	颈部と腹部の内面あばた状形成
9	土師器 壺	8.4 8.3 (11.1)	腹部3方向に透孔。环内面外周ヨコナデ後にハミガキ、腹部外周ハミガキ、腹部内面ハラズミ後にヨコナデ。	石英、チャート、 骨針	良好	褐色	
10	株生土器 壺	— — —	口部外輪文カキザミ。口部外輪文不明の肩加条綱文(L-Z)。	雲母	普通	にふい黄褐色	十手台式
11	株生土器 壺	— — —	頸部4本筋の横紋波状文、弧状文。	石英、雲母	普通	にふい黄褐色	十手台式
12	株生土器 壺	— — —	腹部横文模様によるヨリカミ縫合→口部5~6本筋の横位波状文。腹部縫合直線文→横位波状文。	石英、黄閃石	普通	にふい黄褐色	十手台式
13	石製品 砥石		欠損品。4面使用。底面はいずれも平滑。 石英・流紋岩。残存長6.1cm・幅2.50cm・厚さ1.05cm・重さ48.5g。				

5号住居跡（第100~103図）

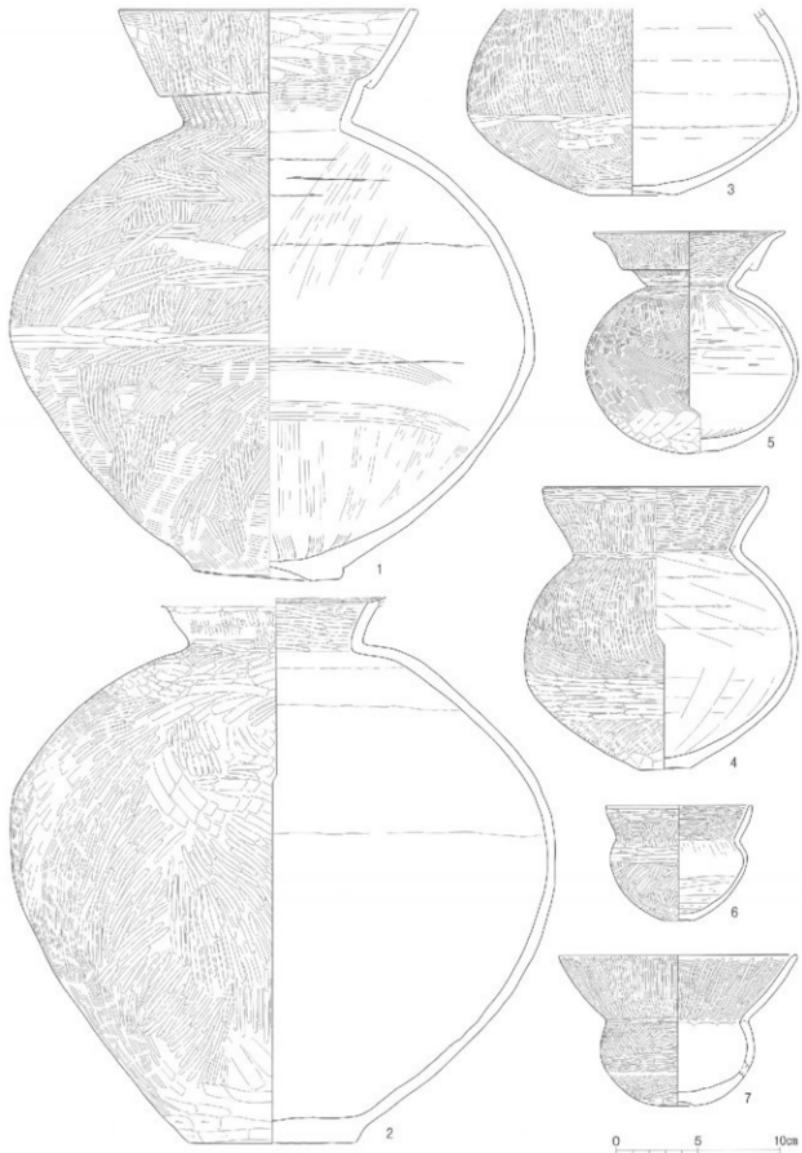
位置 A区北端、L 2 グリッドに位置する。規模と平面形 5.95 m × 6.77 mで、隅丸長方形。古代の1号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡の方が古い。主軸方位 N = 51° - W 壁 壁高は42cmを測り、垂直に近く立ち上がる。床 やや凹凸があり、主柱穴をつなぐように帶状に硬化する。P 6 の周堤も硬化し、主軸上に浅い溝がある。溝状掘り方を伴う。ピット 11箇所ある。P 1 ~ 4 が主柱穴で、掘り方面で確



第100図 5号住居跡

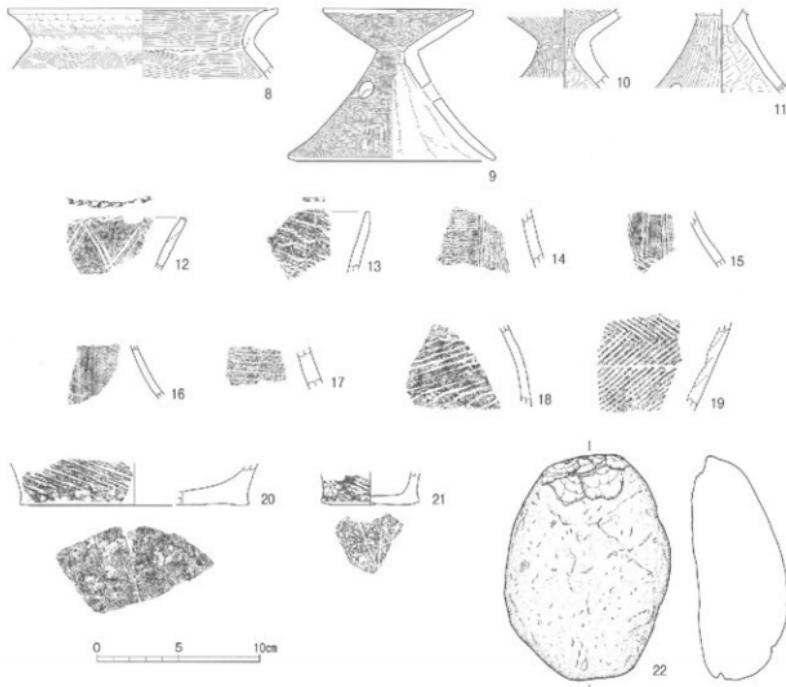


第101図 5号住居断面図



第102図 5号住居跡出土遺物①

認したP 7～9・11（深さ 65～92cm）は古い主柱穴、P 6が新しい出入り口ピットで、P10が古い出入り口ピットと考えられる。主柱穴配置は拡張して建替えられており、拡張規模を柱穴心々距離から測定すると、西方向に約19cm、東方向に約28cm、南方向に約58cmとなる。P 2～4の脇の床面にのみ、Ag-KP ブロックが検出され、新主柱穴掘削時の排土をそのまま貼床にしたのであろう。P 5は掘り方調査で、その下部から貯蔵穴と推測される床下土坑1を確認した。この土坑は貼床によって埋め戻されており、古い主柱穴に伴うものと想定される。P 6は断面漏斗状を呈し、硬化した盛土で開まれる。炉 竪穴中央北西寄りに位置する。平面は不整楕円形で、浅い皿状を呈する。被熱部は東側に偏っている。平面的に炉の位置に新旧の差は認められない。覆土 純色～暗褐色土の自然堆積状である。遺物 竪穴中央部や北壁際の覆土上層～下層にかけて、破碎した壺類が出土している。西隅付近の北壁直下からは9の完形の器台が出土している。また、P 1 覆土上層には壺（4）が含まれている。住居跡廃絶時にP 1 の柱材を抜取り、その穴に遺棄あるいは廃棄されたものと推測する。所見 住居跡の廃絶および構築時期は、古墳時代前期に比定される。



第103図 5号住居跡出土遺物②

表47 5号住居跡出土遺物類表

団体番号	種別種	口径高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	18.2 35.2 9.2	口縁部～腹部内面ハケメ後に輪なるハミガキ、底部外側へハケメ、口縁部内面ハケメ後に他なハミガキ、底部～底部内面ハケメ後にナゲ。	石英、白色粒、骨針	良好	褐色	頂部外縁に墨色 腹土上～下層
2	土器	- 10.2	腹部外側ハケメ後にハミガキ、胴部外縁へハケメり後にナゲ、口縁部内面ハミガキ、胴部～底部内面ナゲ。	石英、白色粒、骨針	良好	褐色	口縁打ち欠き、 胴部～底部内面 あばた状痕跡
3	土器	- 5.2	胴部外側ハケメり後にハミガキ、底部外側ハケメり、胴部～底部内面ハミガキが確認。	石英、白色粒、骨針	普通	褐色	覆土上層
4	土器	13.8 17.4 3.1	口縁部～胴部外側ハミガキ後にハミガキ、底部下端～底 部外側ハケメり、口縁部内面ハミガキ後にハミガキ、 胴部内面ハケメ後に他なハミガキ。	石英、白色粒、白 灰石	良好	明赤褐色	頂部～底部内面 あばた状痕跡 P：上層
5	土器	11.7 14.7 2.2	口縁部内面ハケメ後にハミガキ、胴部外縁ハケメ後 のハミガキ確認、胴部下端外側ハケメり後ハミガ キ確認、底部内面ハケメり、胴部～底部内面ハミガキ。	石英、角閃石、白 灰色	褐色	褐色	覆土下層
6	土器	8.9 7.1 1.8	口縁部内面ハケメ後にハミガキ、胴部外側ハケメ り後ハミガキ確認、底部外縁ハケメり、胴部～半 底部内面ハミガキ、底部下～底部内面ハケメり。	石英、チャート、普通 角閃石	褐色	褐色	底部～底部内面 あばた状痕跡
7	土器	14.6 9.3 2.2	口縁部内面ハケメ地にハミガキ、胴部～底部外側ハ ミガキ後ハミガキ、底部内面ハミガキ。	石英、角閃石、骨 針	普通	に赤褐色	胴部～底部内面 あばた状痕跡
8	土器	(16.5) -	口縁部ハケメ後にロコナデと軽擦痕、底部内面ハミ ガキ。	石英、角閃石	良好	褐色	
9	土器	9.2 9.4 12.7	縦跡3方に通孔。受部～一部底部外側ハミガキ、受部内 面ハミガキ、底部内面ハミガキ。	石英、チャート、 角閃石	普通	褐色	覆土上層
10	土器	- -	受部～底部外側ハミガキ、受部内面ハミガキ後にハミ ガキ、底部内面ハケメ。	石英、角閃石、白 色砂	普通	に赤褐色	
11	土器	- -	底部3方向に通孔。脚部外縁ハミガキ、脚部内面ハ ミガキ。	石英、角閃石、骨 針	褐色	褐色	覆土下層
12	陶土器	- -	口縁部横文キザミ。口縁部4本筋の山形文(反時計回 り)。	石母、角閃石	普通	に赤褐色	P：上台式
13	陶土器	- -	口縁部横文原版によるキザミ。口縁部難観不明の附加条 筋文(R+Z)。	石母、チャート、 角閃石	普通	褐色	十王台式
14	陶土器	- -	縦跡4本筋の横筋直羅文→横筋直状文。	石英、骨母	普通	に赤褐色	十三台式
15	陶土器	-	胴部右筋小明の附加条文(R+L-Z)→豊野4本筋の 横筋直羅文→胴部3筋一単位の船底直羅文→横筋直 状文。	石英、骨母	普通	に赤褐色	十王台式
16	陶土器	-	豊野5本筋の縱筋直羅文→横筋直状文。	石英、骨母	普通	に赤褐色	十王台式
17	陶土器	-	縦跡7～8本筋の横筋直状文。	石英、骨母多量、 チャート	普通	に赤褐色	
18	陶土器	-	横筋附加条2種類文(R+L)→豊野7本以上の横筋文 横筋状文。	石英、骨母	普通	に赤褐色	十王台式
19	陶土器	-	胴部接縫不明の附加条文(R+S,L-Z:上→F)。	石英多量、骨母	普通	に赤褐色	二新里式
20	陶土器	- 14.0	胴部袖縫不明の附加条文(L-Z)。底部有自然。	石英、チャート、白 色粒	普通	に赤褐色	
21	陶土器	- 6.0	胴部原然不明の織文。底部有自然。	石英、角閃石	良好	褐色	
22	石製品	整石	自然縫の上縫部に刻痕。石材：チャート。 長さ138cm、幅101.5cm、厚さ5.9cm、重さ1087.2g。				覆土下層

8号住居跡（第104～108図）

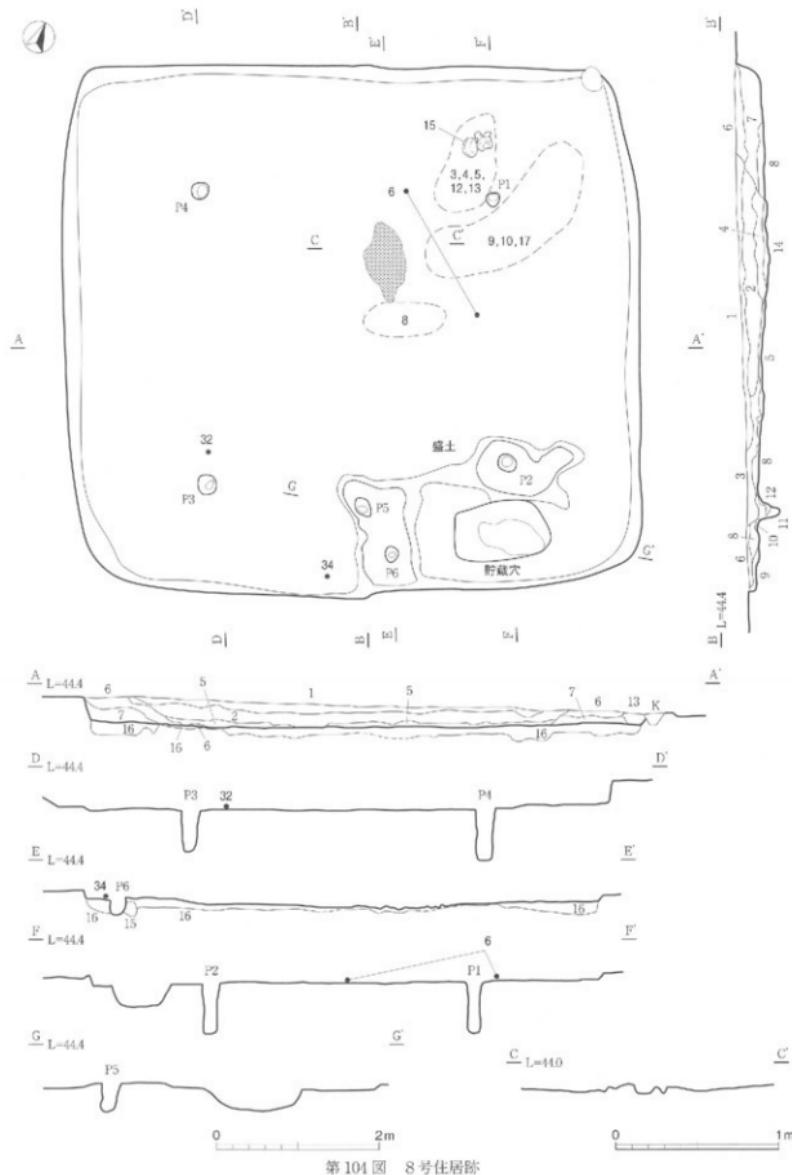
位置 A区北端、M2グリッドに位置する。規模と平面形 南北の主軸方向6.55m、東西方向7.07mを測り、隅丸正方形に近い形状を呈する。弥生時代の9号住居跡を破壊する。主軸方位 N-26°Wを指向し、12・33号住居跡に非常に近似する。壁 壁高は8～31cmを測り、やや傾斜する。床 貯蔵穴～出入り口部にかけて硬化した周堤状盛土がみられる。住居床下の掘り方は壁際がわずかに窪んでいる。

ピット 10箇所ある。P1～4が主柱穴、掘り方面で確認したP7～10が古い主柱穴、P5・6がいわゆる出入口ピットであろう。P1～4は直径18～24cmを測り、それぞれ軟弱で均質な黒色土・褐色土の柱痕とローム質土の根固めを検出した。新旧主柱穴はほぼ同位置に掘削されており、上層規模に大きな変化はなかったと推測される。P6には柱痕を検出できなかったが、非常に軟弱な土質であった。旧主柱穴（深さ59～69cm）はロームブロックを多く含む土で一様に埋め戻されていた。南東隅部には、隅丸長方形の貯蔵穴があり、同一地点での造り替えを確認した。古い貯蔵穴は掘り方面で確認でき、暗褐色土で底面・壁面を硬く埋め戻して、一回り小さい規模の新しい貯蔵穴を構築していた。貯蔵穴の北側には明瞭に硬化した周堤状の盛土があり、P2はこの盛土を掘り込んでいる。炉 穴式中央北寄りに位置し、ほぼ主軸ライン上である。平面は菱形状の不整橢円形である。火床は赤化粧化し掘り込みはない。覆土 壁際から穴式中央最上層にかけて、明褐色土・褐色土・暗～黒褐色土の順に自然堆積する。遺物 P1の周りと炉の南東側一帯（破線で表示）で、多量の土器が出土している。数個体の甕や鉢等が、穴式北東隅から廃棄された状況で、壁際の覆土上層から炉付近の床面直上まで、埋没土のレンズ状堆積と同様の出土状態を呈する。床面からは32・34などの磨石・砥石類が出土している。また、南西隅部付近の覆土上位から、炭化材を1点検出した。

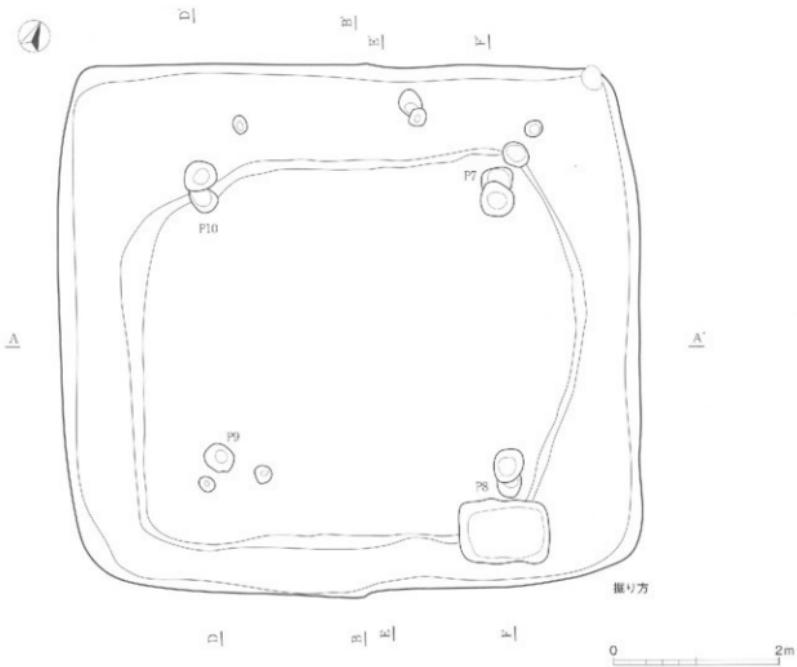
所見 主柱穴・貯蔵穴は造り直しているが、炉や窓穴にはその痕跡が認められない。住居跡の時期は、古墳時代前期に比定される。

表48 8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 基高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 甕	(15.4) — —	口縁部外側面ヨコナデ後にハラミガキ。	石英、チャート、 角閃石	普通	桜色	口縁部内面あばた状剥離
2	土師器 蓋	— — —	口縁部外側面ハケメ後にハラミガキ、頸部外側面ヨコナデ後にハラミガキと組み、蓋部外側ハラミガキ、頸部内面指痕。	石英、角閃石、骨 針	普通	桜色	
3	土師器 甕	— 49	頸部外側面ナデ、底部木葉模。	石英、雲母	普通	に赤い黄緑色	
4	土師器 甕	9.2 5.5 1.6	口縁部外側面ヨコナデ後にハラミガキ、頸部～底部外側面ハラケズリ後に底部ハラミガキ、頸部～底部内面ハラミガキ。	石英、角閃石 骨針	普通	桜色	底部～底部内面 あばた状剥離
5	土師器 甕	29.7 26.1 6.2	口縁部外側面ヨコナデ後にハケメと内面ハラミガキ、頸部外側面ハラケズリ、頸部～底部内面ハラナダ。	石英、チャート、 骨針	普通	桜色	外縁にススと吹きこぼれ、内 面あばた状剥離
6	土師器 甕	24.1	口縁部外側面ヨコナデ後にハケメ、頸部外側面ハラケズリ後にハケメ、口縁部～頸部内面ハラケズリ後にハラナダ。	石英、チャート、 骨針	普通	に赤い桜色	外周部中位に スス付着
7	土師器 甕	(18.1) — —	口縁部外側面ヨコナデ後に建ならなハラミガキ、頸部外側面ハラケメ後に建ならなハラミガキ、頸部内面ハラケメ。	角閃石、雲母	普通	に赤い黄緑色	
8	土師器 甕	(17.7) — —	口縁部外側面ヨコナデ後にハケメと内面はハラミガキ、頸部外側面ハラミガキ状のナデ、頸部内面ハラミガキ。	石英、雲母	普通	に赤い桜色	

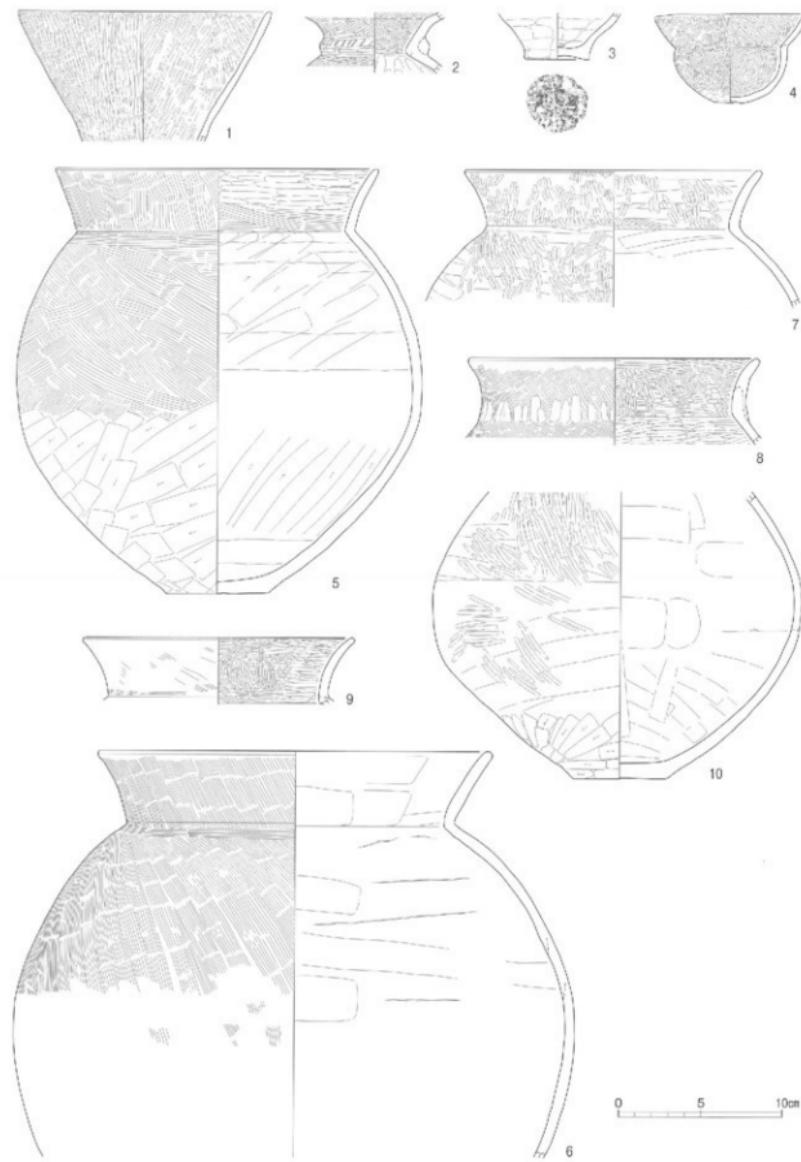


第104図 8号住居跡

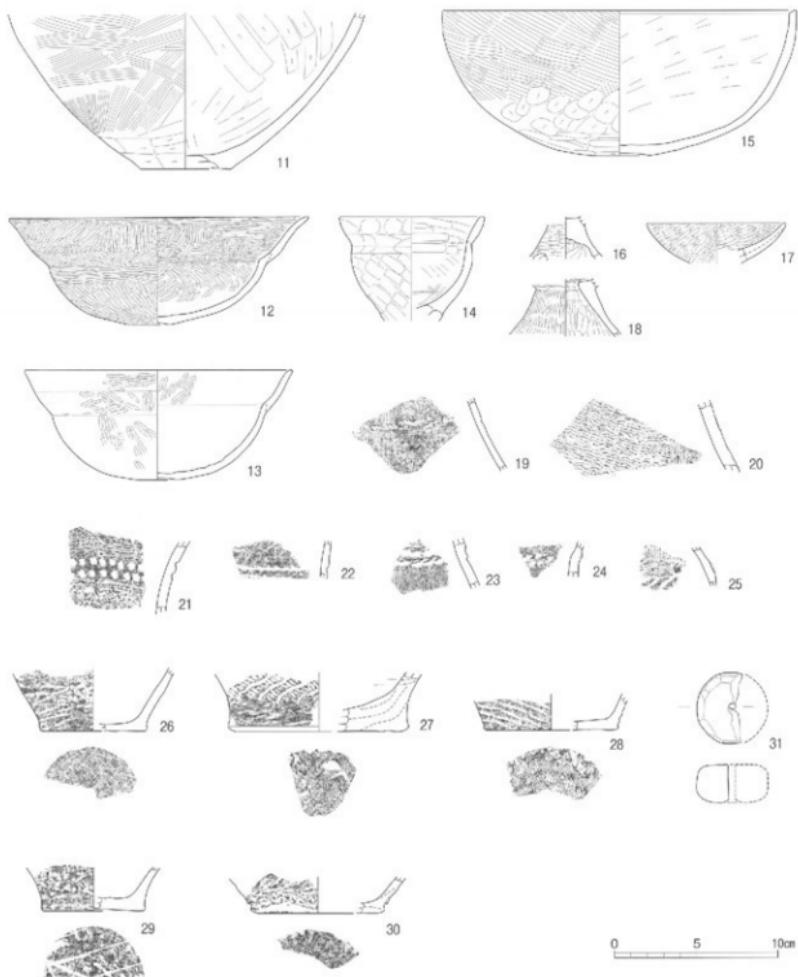


- 8号住居跡土層
 1 黒褐色、薄り重い。
 2 黒褐色 ローム较少量、薄り重い。
 3 黒褐色 薄り重い、完置黏土。
 4 黑褐色 ローム较少量、粘土少量、薄り重い。物理固い。
 5 黑褐色 ローム较少量、ロームプロック少量。薄り重い。颗粒混じ
 6 黑褐色 薄り重い、完置黏土。
 7 黑褐色 薄り重い、完置黏土。
 8 黑褐色 ローム较少量、ロームプロック少量。薄り重い。颗粒混じ
 9 黑褐色 ローム较少量、薄り重い、粒度細い
 10 黑褐色 ローム上層、薄り重い、粒度細い
 11 黑褐色 ロームプロック少量、薄り重いに似る。
 12 黑褐色 ローム終生土
 13 黑褐色 ローム終生土
 14 黑褐色 ローム较少量、粘土少量、薄り重い、少堅土
 15 黑褐色 ローム较少量、ロームプロック少量、ローム終生土、薄り重い、堅土
 16 黑褐色 ロームプロック少量、薄り重い、P3 振り方

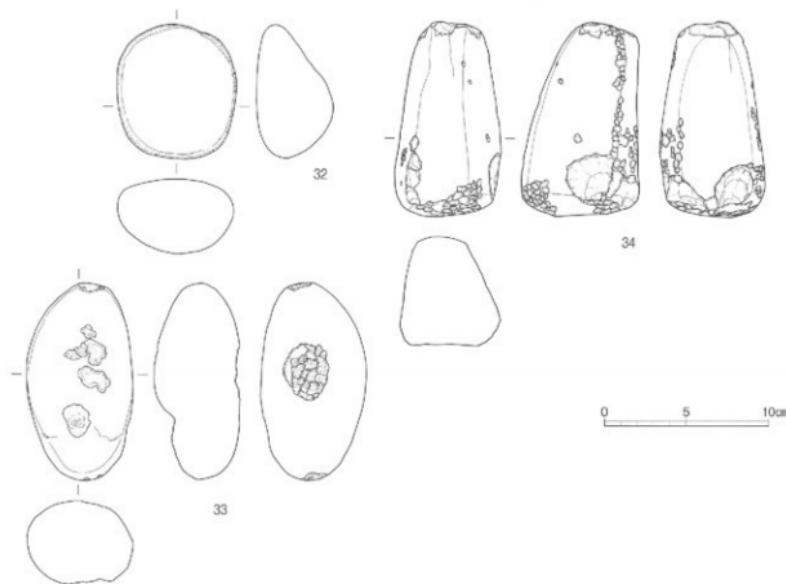
第105図 8号住居跡振り方



第106図 8号住居跡出土遺物①



第107図 8号住居跡出土遺物②



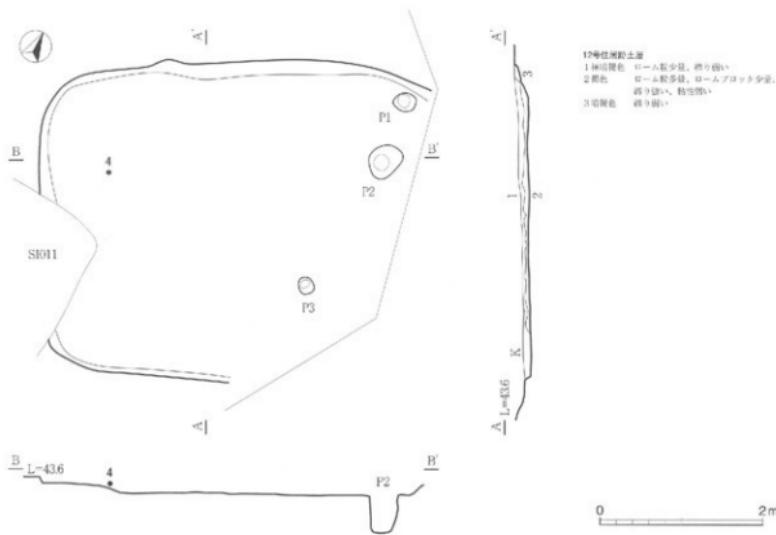
第108図 8号住居跡出土遺物③

団体番号	種別 器種	口縁 器底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
9	土器器 窓	(16.5) — —	口縁部外側ハケメ後にヨコナギ、口縁部内面ヨコナギ後 にヘラミガキ。	石英、角閃石、骨 針	良好	明赤褐色	口縁部外面に次 きこぼれ板
10	土器器 窓	— — 5.6	外表面断続・半ハケメと緑なヘラミガキ、脇部下手ヘラケ メり後ヒザハラミガキ、底部外周ヘラケズリ、脇部～ 底部へラナダ。	石英、角閃石、雲 母	良好	に赤い黄褐色	外表面断部中位に スヌ付着
11	土器器 窓	— — 5.4	脇部外周ハケメ、脇部下端～底部外周ヘラケズリ、脇部 内面ヘラナダ、底部内面ヘラケズリ後にヘラナダ。	石英、チャート、 雲母	良好	褐色	底部内面あばた 次剥離
12	土器器 窓	(18.2) 6.6 2.5	口縁部外周ヘラミガキ、脇部～底部外周ヘラケズリ後 に体部ヘラミガキ、底部内面ヘラミガキ。	石英、チャート、 角閃石	普通	褐色	底部内面あばた 次剥離
13	土器器 窓	(16.3) 6.7 2.5	口縁部内外ヨコナギ後に緑なヘラミガキ、脇部～底部 外周ヘラケズリ後に体部内面ヘラミガキ。	石英、チャート、 角閃石	普通	褐色	内面体部～底部 あばた次剥離
14	土器器 窓	(8.9) — —	口縁部外周ヨコナギと骨頭痕、底部外周ヘラナダ、口縁 部～体部内面ヘラナダ。	チャート、雲母	普通	明赤褐色	口縁部外面にス ヌ付着
15	土器器 窓	21.6 13.9 3.2	要未成形の軸用(口唇部に墨染)、口唇部はヘラケズリに より面取り。脇部～底部外周ヘラケズリ後に体部ハケメ、 体部～底部内面ヘラケズリ後にヘラナダ。	石英、雲母	良好	褐色	体部外周～スヌ、 内面体部～底部 あばた次剥離

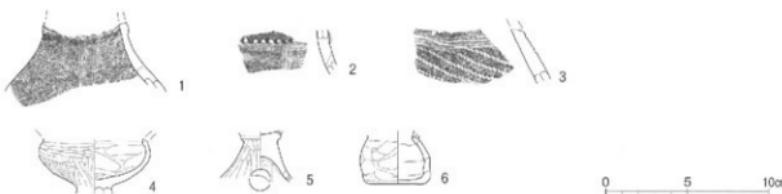
図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
16	上縁部 高杯	-	脚部3方向に透孔。脚部外側ハラミガキ、脚部内側ナダ。石英、白砂粒	良好	褐色		
17	土師器 器合	8.5	受部内外側ハラミガキ。	石英、角閃石、骨 針	良好	褐色	
18	土器器 器内	-	脚部外側ハラミガキ、脚部内側ハナツア。	石英、チャート、角 閃石	普通	明赤褐色	
19	弦束土器 等	-	頸部3本溝の縱横直線文と同様の工具による焼成剥皮文。	石英、雲母、チャー ト	普通	褐色	
20	弦束土器 蓋	-	腹部4本溝の縱横直線文→傾斜状文。	石英、雲母	普通	に赤い黄褐色	十王台式
21	弦束土器 蓋	-	頸部5~6本溝の横位区段直線文→傾位直線文→横位直 線文。区段直線文上に2条の横位剥皮文。	石英、チャート	普通	に赤い黄褐色	十王台式
22	弦束土器 等	-	頸部後部3条溝。口縁部全体不明の焼文。	雲母	普通	灰黃褐色	
23	弦束土器 蓋	-	腹部チャート隆起3条溝→5本溝の縱横直線文。	チャート、骨針	普通	褐色	
24	弦束土器 蓋	-	脚部隆起上にヘラ状工具先端による剥皮穴。	石英	普通	に赤い黄褐色	
25	弦束土器 等	-	脚部剥皮不明の附加焼成文(R・S)→頸部6本溝の横位 区段直線文→傾位直線文→円形剥皮付文。	雲母	普通	に赤い黄褐色	
26	弦束土器 蓋	6.6	脚部剥皮不明の附加焼成文(R・S)。底部布石板。	石英、チャート	普通	に赤い黄褐色	十王台式
27	弦束土器 蓋	11.0	腹部附加条2條焼成文(左+右)。底部布石板。	石英、チャート	普通	に赤い黄褐色	十王台式
28	弦束土器 等	8.0	脚部剥皮不规则附加焼成文(L-Z)。変形布石板。	石英、骨針	普通	に赤い黄褐色	十王台式
29	弦束土器 蓋	6.4	脚部全体不明の焼文。底部木炭痕。	石英、チャート	普通	に赤い黄褐色	
30	弦束土器 蓋	8.2	腹部始端不明の附加焼成文(R-S)。底部墨痕。	石英、雲母、チャー ト	普通	に赤い黄褐色	
31	上縁部 結縫部	-	径13cm、厚さ2.3cm、孔径4mm。わずかに多角形状を呈する。骨母、骨針	普通	褐色		
32	石器 磨石類	-	磨一円。自然理の表面全体に磨耗痕。上・下端部に敲打痕。芯・裏面に門穴。被熱により赤褐色に変色。石材:石英安山岩。長さ121cm、幅6.6cm、厚さ5.3cm、重さ557kg。				床面直上
33	石器 磨石	-	芦焼建の表面に磨耗痕。石材:ホルンフェルス。長さ8.25cm、幅7.2cm、厚さ4.7cm、重さ3784g。				
34	石器 磨石	-	風→吸、6面使用。底面はいずれも平滑。上・下端部や各筋の棘上に敲打痕。石材:緑色安山岩。長さ11.9cm、幅6.45cm、厚さ7.1cm、重さ725.8g。				床面直上

12号住居跡（第109・110図）

位置 A区北東端、N2グリッドに位置する。規模と平面形 南北方向3.89m、東西方向4.78mの隅丸方形状と推測する。11号住居跡に西壁の一部を壊されている。主軸方位 N-21°-W 壁 壁高は17cmを測り、ほぼ垂直に近い。床 ほぼ平坦である。ピット 浅い柱穴が3箇所あるが、いずれも主柱穴ではない。炉 - 覆土 下層が褐色土、上層が暗褐色土で、弥生時代の住居跡の土層堆積と似た堆積状況である。遺物 覆土中から少量の弥生土器片と4・5の土器師器高杯、器台、6のミニチュアの壺が出士している。所見 炉と主柱穴が認められないことから、竪穴状遺構と考えられる。時期は、古墳時代前期と考えられる。



第109図 12号住居跡



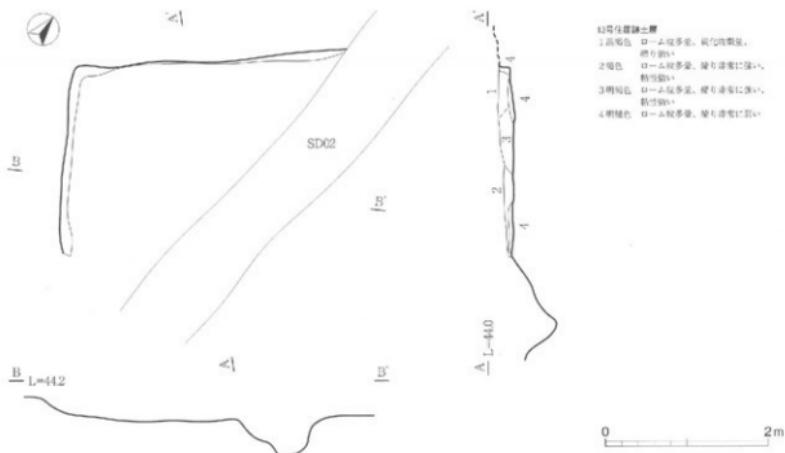
第110図 12号住居跡出土遺物

表 49 12号住居跡出土遺物観察表

団体番号	種別	口縁 器底 底径	特徴	粘土	焼成	色調	備考
1	発生土器 壺	- - -	類似深い押捺跡後→5本筋の範囲直擦文→撲捏波状文。内面は粗・削伏のナデ。	石英、長石	良好	外：明黄褐色 内：にぶい黄褐色	十五台式
2	発生土器 壺	- - -	頸部は角摺状工具による割穴を施した跡後→4本筋の範囲直擦文→撲捏波次文。内面は撲捏のナデ。外面にスッキ付着。	石英、角閃石	良好	にぶい黄褐色	十三台式
3	発生土器 壺	- - -	脚部附加条2横擦文(L+L)→底削界4本筋の横擦区 域直擦文(反時計回り)→撲捏直擦文。撲捏波状文。内面は粗粒のナデ。	石英	良好	にぶい黄褐色	十二台式
4	土器 高环	- - -	外側は撲・斜削のミガキ。内面は撲捏のナデ。	多量の石英・長 石、角閃石	良好	にぶい黄褐色	覆土中層
5	土器 高环	- - -	外側は複旋のミガキ。内面は粗粒のナデ。脚部3方向に 造孔。	石英、赤色鉄 石	普通	黒色	
6	土器 ミチュア壺	- - 34	外壁は撲・新粒のナデ。内面は粗なナデ。	石英、長石、角閃 石	良好	にぶい黄褐色	

13号住居跡（第111図）

位置 A北端、M2～N2グリッドに位置する。規模と平面形 東西方向(3.39)m、南北方向(2.33)m。南側は地形の傾斜によって消失し、豎穴中央部には搅乱が入り、東側は2号溝によって壊されている。主軸方位 - 壁 壁高は16cmを測る。床 わずかに凹凸があり、掘り方はない。ピット - 炉 - 覆土 褐色～黒褐色土による自然堆積である。遺物 図示の困難な細片が出土している。所見 遺物からは時期を特定できないが、覆土の特徴は古墳時代の住居跡に類似する。



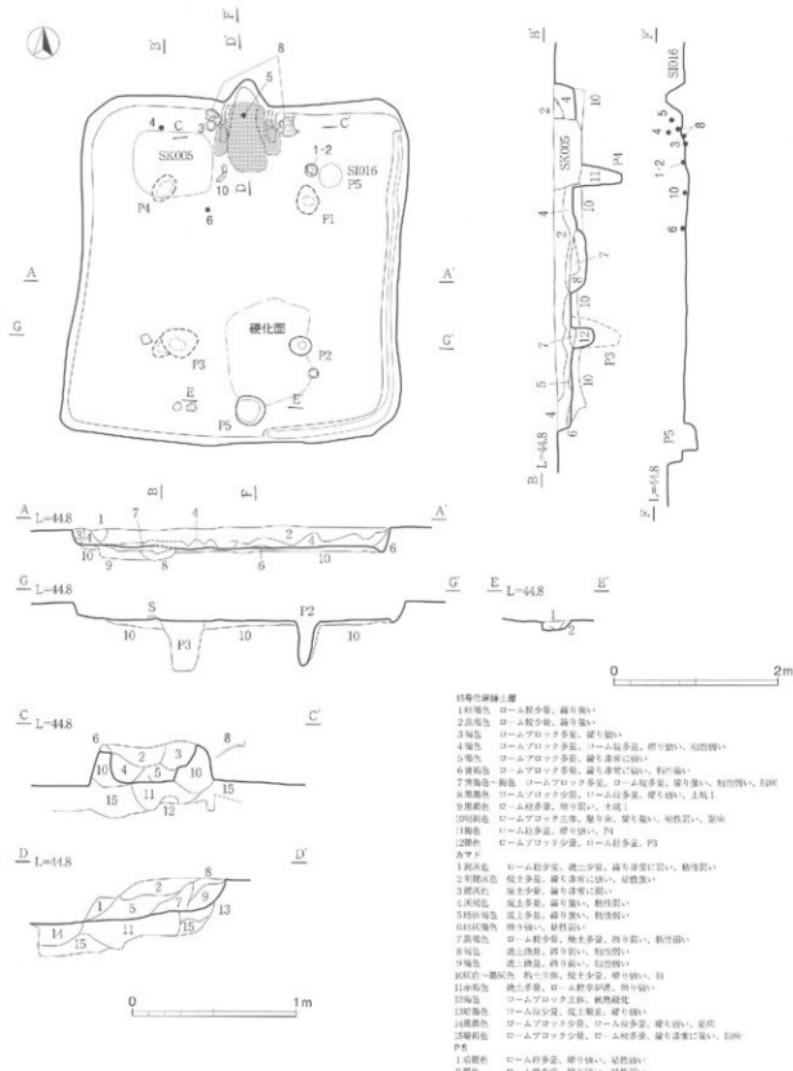
第111図 13号住居跡

15号住居跡（第112～114図）

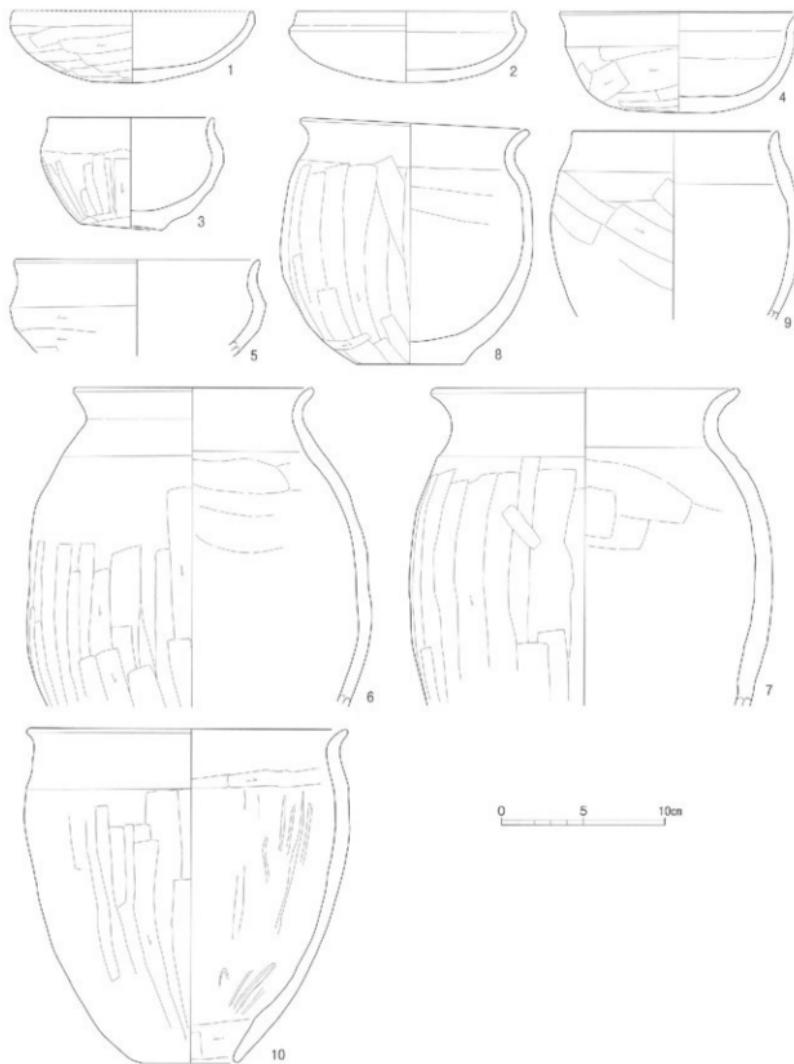
位置 A区北端、K3グリッドに位置する。規模と平面形 南北の主軸方向4.27m、東西方向4.07mを測り、隅丸綫長方形を呈する。弥生時代の16号住居跡を壞している。竪穴北西部は5号土坑によって壞されている。東壁～南壁中央部にかけての床面の縁には刷滝がみられる。主軸方位 N-1°-E 壁壁高は24cmを測り、傾斜している。床やや凹凸があり、P2とP5の周辺が硬化する。北壁周辺の掘り方が幅広い溝状を呈する。ピット 5箇所ある。P1～4が主柱穴、P5が出入口ピットである。P1・3・4は掘り方調査時に確認した。竪穴中央部西壁寄りには、不整円形の土坑1があり、床面を壊した後で埋め戻され、貼床で閉塞されている（7～9層）。カマド 北壁中央に付設され、煙道部は16号住居跡の床面と覆土を切り込んで構築されている。両袖は良好に残り、赤変化も顕著である。覆土 均質な褐色～黒褐色土による自然堆積状を呈する。遺物 カマド右袖脇からはほぼ完形の8の土師器窓が、左袖脇からは3の土師器窓が出土している。P1付近の床面からは、1・2の2点の土師器窓が重ねられた状態で出土し、P3脇の床面からは扁平で正方形の板状自然窓が置かれたように出土している。丸底の环、やや深身でU縁部が小さく外反する鉢、甕や小型甕、胴部が膨らんだ単孔式の瓶など、体部ヘラケズリの6世紀後半頃の土器が主体となっている。所見 住居跡の時期は、古墳時代後期6世紀後半頃と考えられる。

表50 15号住居跡出土遺物観察表

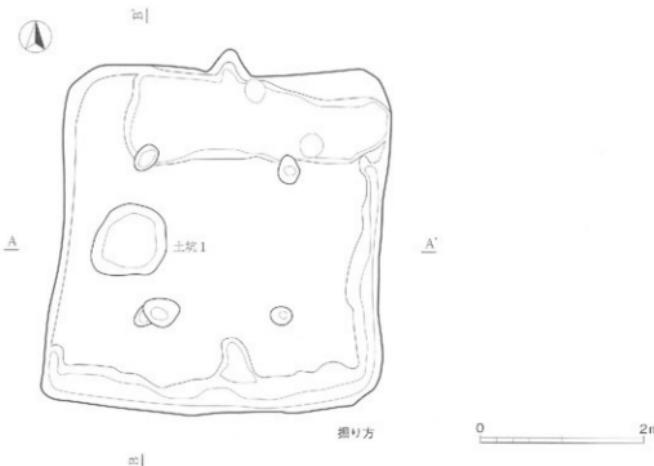
図版番号	種別 器種	口径 最高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	上部器 窓	14.8 4.5 -	体部外面ヘラケズリ、内面ヨコナダ。	長石、石英、骨針 良好	褐色	床面直上	
2	下部器 窓	(13.2) 8.4	体部外面厚托。	長石、石英、角閃石 良好	褐色	床面直上	
3	土師器 窓	11.2 6.9 5.8	口縁部内外面ヨコナダ、体部外面縱方向ヘラケズリ。	長石、石英 良好	にぶい褐色	覆土上層	
4	土師器 窓	14.6 6.2 -	口縁部内外面ヨコナダ、体部外面ナダ後ヘラケズリ。	長石、石英、骨針 普通	にぶい黒褐色	覆土上層	
5	上部器 窓	(14.8) - -	口縁部内外面ヨコナダ、体部外面横方向ヘラケズリ。	石英 普通	赤褐色	カマド	
6	土師器窓	14.0 -	口縁部外面ヨコナダ、側部外面縱方向ヘラケズリ、内面ヘラナダ。	長石、石英、骨針 普通	褐色	覆土中層	
7	土師器 窓	(18.8) - -	口縁部内外面ヨコナダ、側部外面縱方向ヘラケズリ、内面ヘラナダ。	長石、石英 普通	にぶい褐色		
8	上部器 窓	13.7 14.9 6.5	口縁部外面ヨコナダ、側部外面縱方向ヘラケズリ、内面ヘラナダ。	長石、石英 普通	にぶい褐色	90% 覆土下層	
9	上部器 小型甕	12.4 - -	口縁部外面ヨコナダ、側部外面縦方向ヘラケズリ、内面ヨコナダ。	長石、石英 普通	にぶい褐色		
10	下部器 窓	(19.6) 20.5 (6.0)	口縁部外面ヨコナダ、側部外面縱方向ヘラケズリ、内面ミガキ。底部單孔式。	長石、石英 良好	にぶい褐色	30% 覆土下層	



第112図 15号住居跡



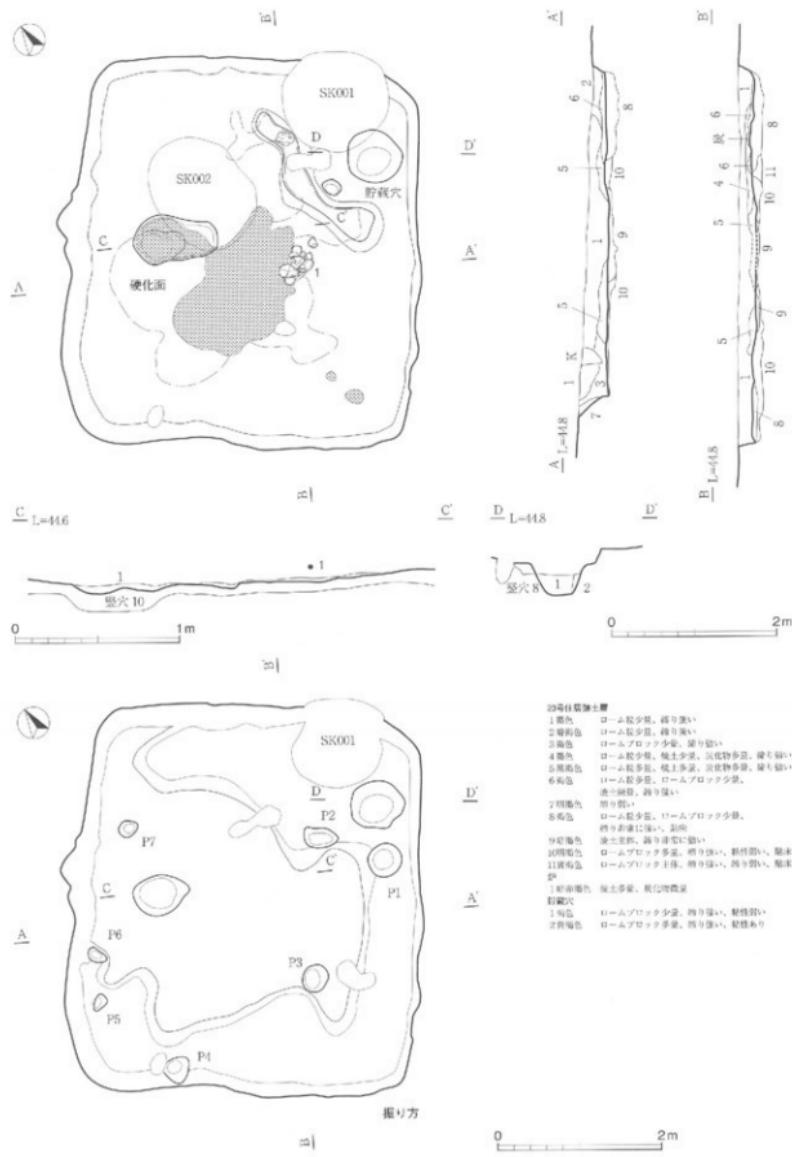
第113図 15号住居跡出土遺物



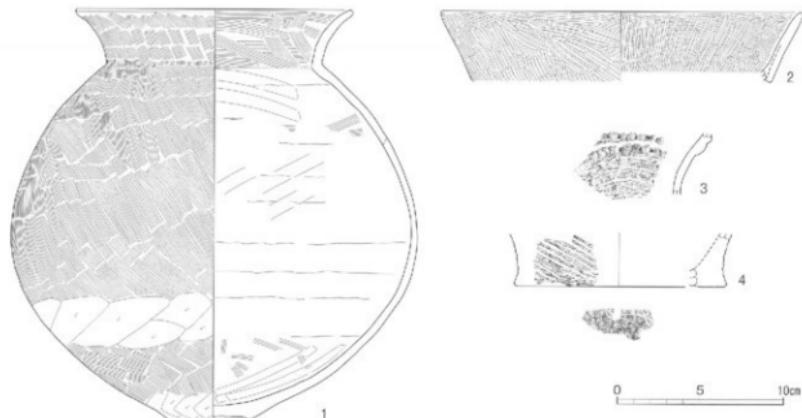
第114図 15号住居跡掘り方

23号住居跡（第115・116図）

位置 A区北端、L 2～M 2グリッドに位置する。規模と平面形 4.81 m × 4.31 mの隅丸長方形を呈する。1・2号土坑によって一部壊されている。床面にはピット状の撲乱も多数みられた。主軸方位 N - 53° - Wを示し、5号住居跡に近似する。壁 壁高は37cmを測り、傾斜して立ち上がる。床 凹凸があり、あまり平坦・水平ではない。中央部と、貯蔵穴西側の周堤盛土上が硬化する。また、床面中央部は広範囲に著しく被熱しており、4号住居跡との類似性が注意される。ピット 7箇所ある。P 1（深さ32cm）が通称出入口ピット、P 4・5・6・7（各深度22cm・22cm・19cm・10cm）が壁柱穴、P 2・3は用途不明である。東隣には貯蔵穴と考えられる円形の土坑を確認した。この土坑の周縁には、不整形な周堤状の高まりがある。炉 中央部北寄りに位置する。平面は不整楕円形で、浅い皿状を呈する。被熱による赤変硬化は著しい。被熱範囲は炉の南西側に広く展開している。覆土 暗褐色～暗褐色上の自然堆積状である。遺物 壁穴中央部の覆土下層から、壺のほか完形個体（1）が出土した。覆土中～床面からは少量ながら炭化材や焼土ブロックが検出されている。所見 床面の炉以外の広い被熱範囲は上屋焼失に関わる痕跡とみられる。住居の時期は、古墳時代前期に比定される。



第115回 23号住居跡



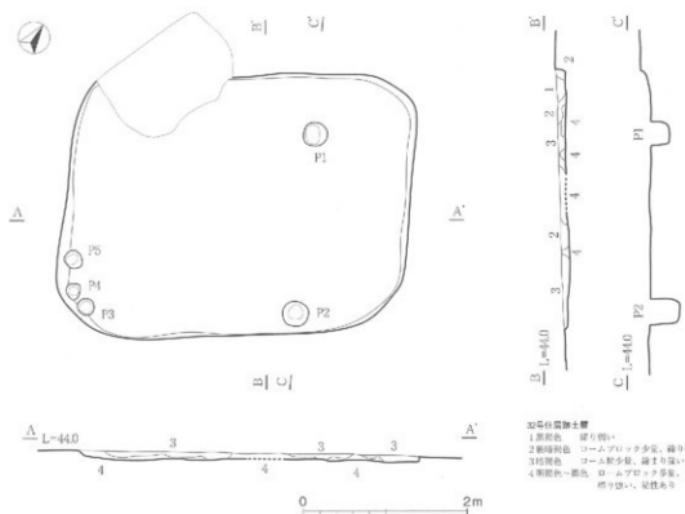
第116図 23号住居跡出土遺物

表51 23号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口径 縦高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土器 甕	16.8 25.3 4.8	口縁部内外面ヨコナギ後にハケメ、胸部～底部外表面ハケメ スリ後に胴部ハケメ、胸部～底部内面ハケメ後にハナ ゲ。	石英、チャート、 角閃石	良好	褐色	内面胸部～底部 あばた決済跡
2	土器 甕	21.8 —	口縁部内外面ハケメ後にヘラミガキ。	雲母、角閃石、骨 片	良好	明赤褐色	口縁部外面砂粒 の痕跡。
3	弥生土器 甕	— — —	頸部押捺縫。縫合の上下は痕数不明の模様波状紋。	石英、雲母	普通	にぶい黄褐色	小平口式
4	弥生土器 甕	— — 12.8	胴部附加条1脚摩文(足し+2L)、底部木製板。	石英多量	普通	褐色	

32号住居跡（第117図）

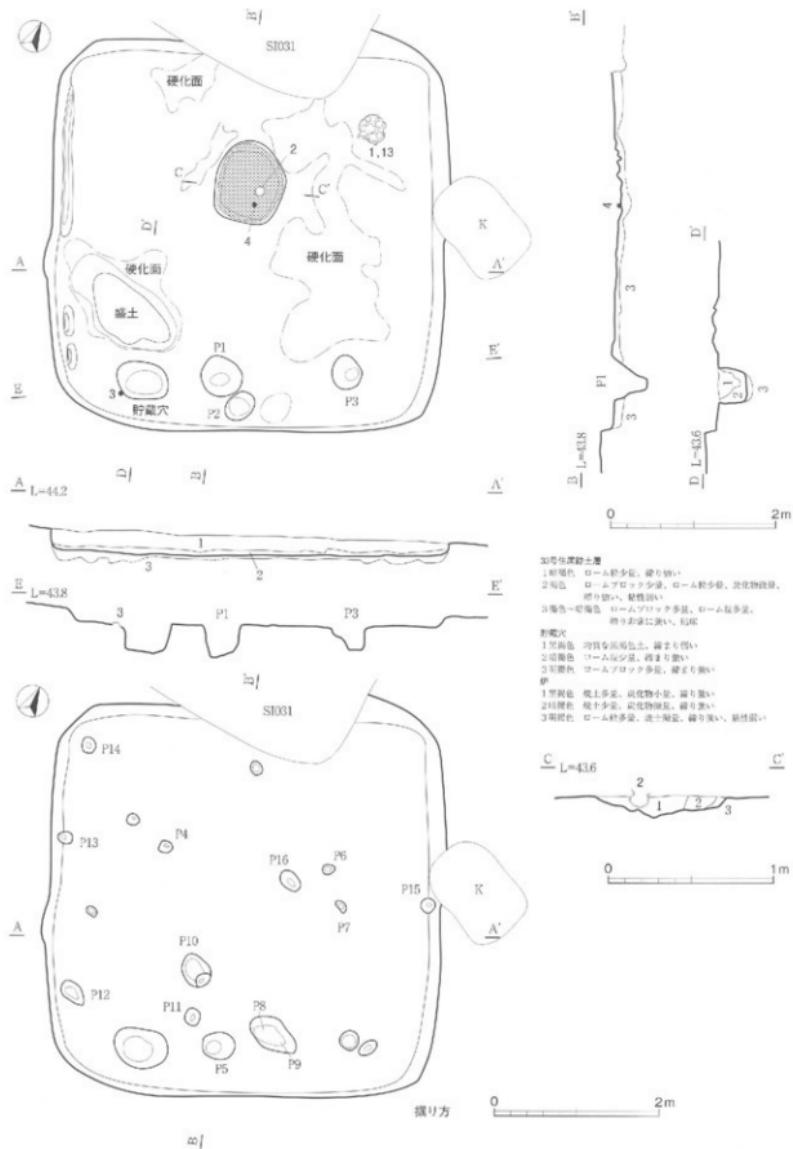
位置 A区北東部、M3グリッドに位置する。 規模と平面形 南北方向3.2m、東西方向4.19mを測り、平行四辺形に近い隅丸長方形である。北東隅は擾乱に壊されている。 主軸方位 N-27°-W 壁 壁高は11cmを測り、傾斜する箇所と垂直に立ちあがる部分がある。床 平坦で、握り方はない。 ピット P 1・2・3・4・5 (各深度35cm・28cm・30cm・36cm・25cm)、いずれも主柱穴ではない。P 1・4は断面観察で柱痕と根固めを検出した。炉 - 覆土 暗褐色～暗褐色土の自然堆積状を呈する。遺物 図示できない土器細片がわずかに出土している。 所見 出土遺物に乏しいため時期を特定できないが、覆土の色調、土質、平面形は古墳時代前期の住居跡に似ている。



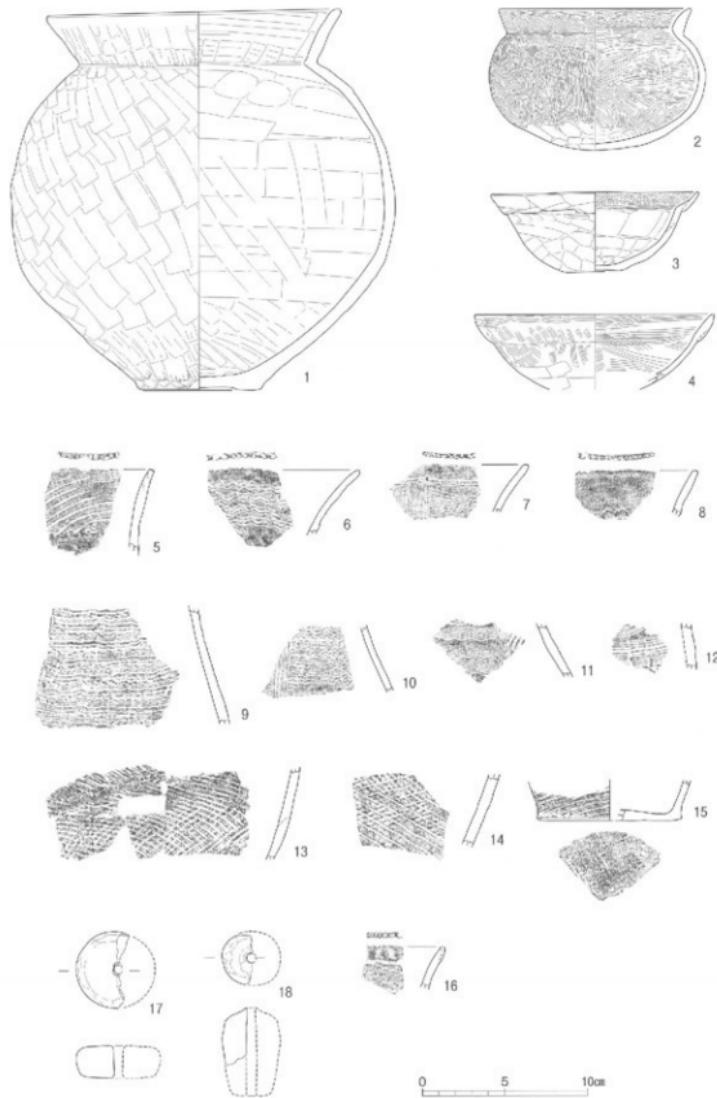
第117図 32号住居跡

33号住居跡（第118・119図）

位置 A区北東部、M3グリッドに位置する。規模と平面形 4.80 m × 4.82 mの隅丸正方形。31号住居跡に北壁中央を壊されている。主軸方位 N - 25° - W、8・12号住居跡に近似する。壁 壁高は24cmを測り、やや傾斜する。床 中央部東側や炉の周り、貯蔵穴北側にある周堤盛土などが部分的に硬化する。ピット 床面で3箇所 (P 1～3)、掘り方面で小ピットが13箇所（深さ10～35cm・平均22cm）ある。P 1が出入入口ピットで、柱材抜取痕を確認できた。P 2（深さ17cm）も出入口に関係する柱穴であろう。P 3（深さ30cm）の用途は不明である。南西隅部には、平面形が隅丸長方形の貯蔵穴があり、底面はローム質土で埋め戻されていた。貯蔵穴の北側には硬化した周堤状の高まりが見られる。炉 中央部の北寄りに位置する。平面不整梢円形で浅い皿状を呈している。全体に赤変硬化が顕著である。覆土 褐色土・暗褐色土の2層で、自然堆積であろう。遺物 窓穴北東隅付近の覆土下層から、ほぼ完形の1の甕が横位につぶれた状態で出土している。炉からも完形の2の鉢が出土しているが、火床面には接地しておらず、住居廃絶時の遺棄遺物かどうか判断が難しい。貯蔵穴脇の床面からは、ほぼ完形の3の鉢が逆位で出土している。また、覆土中から土製紡錘車と土鍤が出土している。所見 周溝は西壁にのみ認められている。窓穴・炉の造り替えは認められなかったが、2箇所の出入入口ピットと貯蔵穴の底部嵩上げは、部分的な造り替え痕跡と判断できる。住居跡は、古墳時代前期に比定される。



第118図 33号住居跡



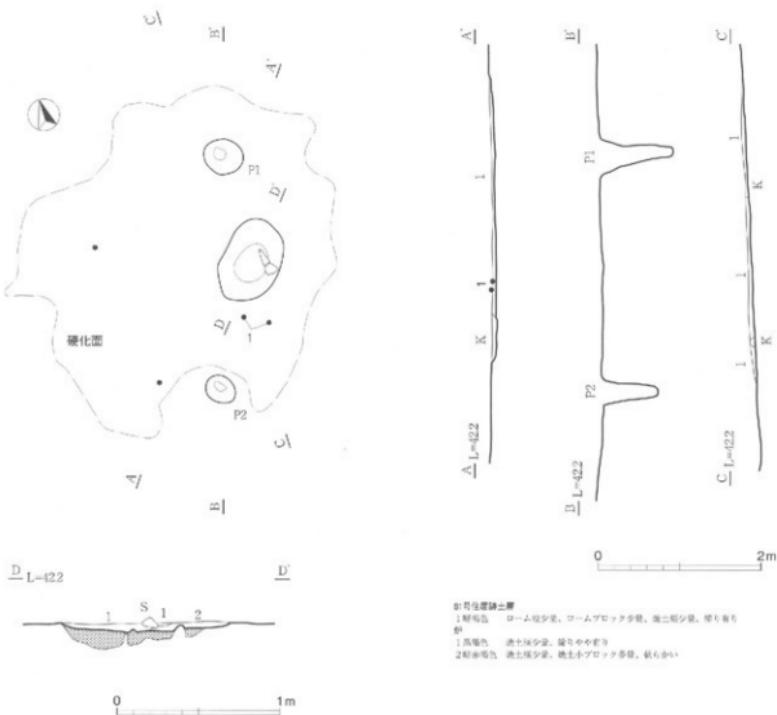
第119図 33号住居跡出土遺物

表52 33号件居跡出土遺物観察表

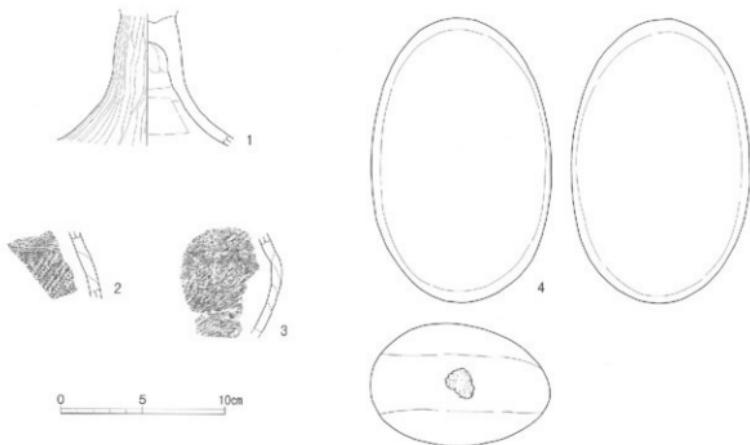
回収番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土器器 類	17.8 23.5 7.4	口縁部コナゲ後に腹部外面ナダ、頭部～底部外面ヘラケ ズリ後に繊なヘラナダ。口縁部～底部外側ヘナダ。	石英多量、雲母 良好	褐色	瓦上灰墨	
2	土器器 類	11.6 8.7 -	口縁部コナゲ後にヘラミガキ、頭部～底部外側ヘラケ ズリ後ヘラミガキ、腹部～底部内面ヘラミガキ。	石英、チャート、 角閃石	普通	褐色	細
3	土器器 類	12.6 4.9 3.0	口縁部外表面いすゞ後に繊なヘラミガキ。ね落～底部へ カラクリ後に繊なヘラミガキ。口縁部内面ヘラミガキ。 体部～底部内面ヘラケズリ後に繊なヘラミガキ。	石英、雲母、角閃 石、骨針	普通	明黄褐色	底部外表面に黒 膜 床面灰土
4	土器器 類	14.5	口縁部～全体内外面ハケメ、底部外表面ヘラケズリ。	雲母、骨針	普通	褐色	細
5	弥生土器 類	-	口唇部ヘラキザミ。口縁部焼成不明の附加条焼文（R - S）。 雲母、骨針	普通	明黄褐色	十五台式	
6	弥生土器 類	-	口縁部ヘラキザミ。口縁部6本筋の横位波状文（下→上）。雲母、角閃石	普通	に赤い黄褐色	十三合式	
7	弥生土器 類	-	口縁部5本筋・3条一半位の横位直線文→横位波状文。	石英、雲母	普通	に赤い黄褐色	十四台式
8	弥生土器 類	-	口唇部ヘラキザミ。口縁部無文（横位のチテ）。頭部押捺 雲母	普通	に赤い黄褐色		
9	弥生土器 類	-	頭部4本筋の横位直線文→横位波状文。	石英、雲母、骨針	普通	明黄褐色	十五台式
10	弥生土器 類	-	頭部4本筋の横位直線文→横位波状文。	雲母	普通	に赤い黄褐色	十七合式
11	弥生土器 類	-	頭部5世の横位直線文→横位波状文。燒成不明の附加条 焼文（R - S）。	石英、雲母	普通	に赤い黄褐色	十七台式
12	弥生土器 類	-	頭部焼成不明の附加条焼文（L - Z）→頭部界10本筋 の等間隔いめり巻状文（反時計回り）、横位波状文。	石英多量	普通	に赤い黄褐色	二井笠式
13	弥生土器 類	-	頭部焼成不明の附加条焼文（R - S、L - Z；上→下）。 右肩、チャート、 骨針	普通	に赤い黄褐色	十五台式	
14	弥生土器 類	-	頭部附加条2種焼文（R + R、L + L；下→上）。	石英、雲母、骨針	普通	に赤い黄褐色	十五台式
15	弥生土器 類	(8.8)	頭部焼成不明の附加条焼文（R - S）。头部有目痕。	石英、角閃石	普通	に赤い褐色	十五台式 内面底部周縁に コケ付着
16	弥生土器 類	-	口唇部ヘラキザミ。口縁部折り返し口縁。頭部3本筋の 横位波状文。高杯の可能性もあり。	雲母、チャート	普通	に赤い黄褐色	
17	上製品 粘土器	-	径4.9cm、厚さ2.0cm、孔径5.0mm。表面は丁寧なナダ。	雲母、角閃石、骨 針	普通	に赤い黄褐色	
18	上製品 土器	-	接合部32cm、残存長35cm、孔径5.0mm。表面に指滑痕。	石英、チャート	普通	黒褐色	

81号住居跡（第120・121図）

位置 A区南部、N8・N9グリッドにある。規模と平面形 - 主軸方向 - 壁 - 床 炉とピット周辺に床面が残存している。ピット 2箇所。P1は深さ89cm、P2は深さ70cm。炉 長径104cm、短径68cmの楕円形で深さ16cm。中心から東側に僅かに寄った位置から炉石が出土している。覆土 床面上に縦りのある暗褐色土が薄く堆積している。遺物 炉の南側から、基部が細く中空で裾部が「ハ」の字に開く1の土器器の高环脚部片が出土している。所見 炉及び炉石を持つことと出土遺物から、古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第120図 81号住居跡



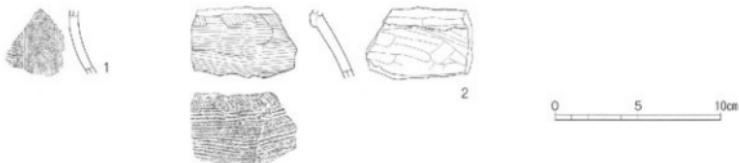
第121図 81号住居跡出土遺物

表53 81号住居跡出土遺物観察表

開版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色面	備考
1	土師器 高环	- - -	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。外面ミダギ、内面 ヘラナデ。	長石・骨針	良好	にぶい黄褐色	
2	弥生土器 主	- - -	脚部輪廓不明の附加条線文（R・S）→脚環系5本衛の 横位重複文→焼成後灰化。内面は斜泣のナデ。	多量の石英・長石	普通	にぶい黄褐色	
3	弥生土器 主	- - -	腹部無輪縁文（L：下→上）と附加余1輪純文（L+L） で母司状焼成。内面は幅・新径のナデ。外周スカリ邊。	多量の石英・長石	普通	外：にぶい黄褐色 内：明褐色	
4	石器 堅石器		基→。大型程の表面全体に施純面。上・下端部に敲打痕。裏面の一部に鉄分が沈着。 石材：砂岩。長さ17.4cm・幅10.8cm・厚さ7.6cm・重さ2012.6g。				

83b号住居跡（第70・122図）

位置 A区南東部 N 10°・O 10 グリッドにある。 規模と平面形 3.00 × 1.10 m。 主軸方向 N - 10° - W 壁 壁高は約6cm。 床 - ピット - 覆土 炭化材片を含んだ黒褐色土が堆積している。 遺物 覆土から、土師器甕片が出土している。 所見 出土遺物から古墳時代の小型住居跡と考えられる。



第122図 83b号住居跡出土遺物

表54 83b号住居跡出土遺物観察表

回収番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	赤生土器 壺	- - -	縦縫5本肩の横位直縫文→横位後次文。内面は横・斜位のナデ。外面スス付肩。	石英、骨片、赤色粒	普通	外:灰褐色 内:にぶい灰褐色	十王台式
2	土師器 壺	- -	外縫5本のハケメ→縦位のハケメ。内面は横・斜位のナデ。外面スス付肩。	石英、角閃石	良好	外:黒褐色 内:にぶい赤褐色	

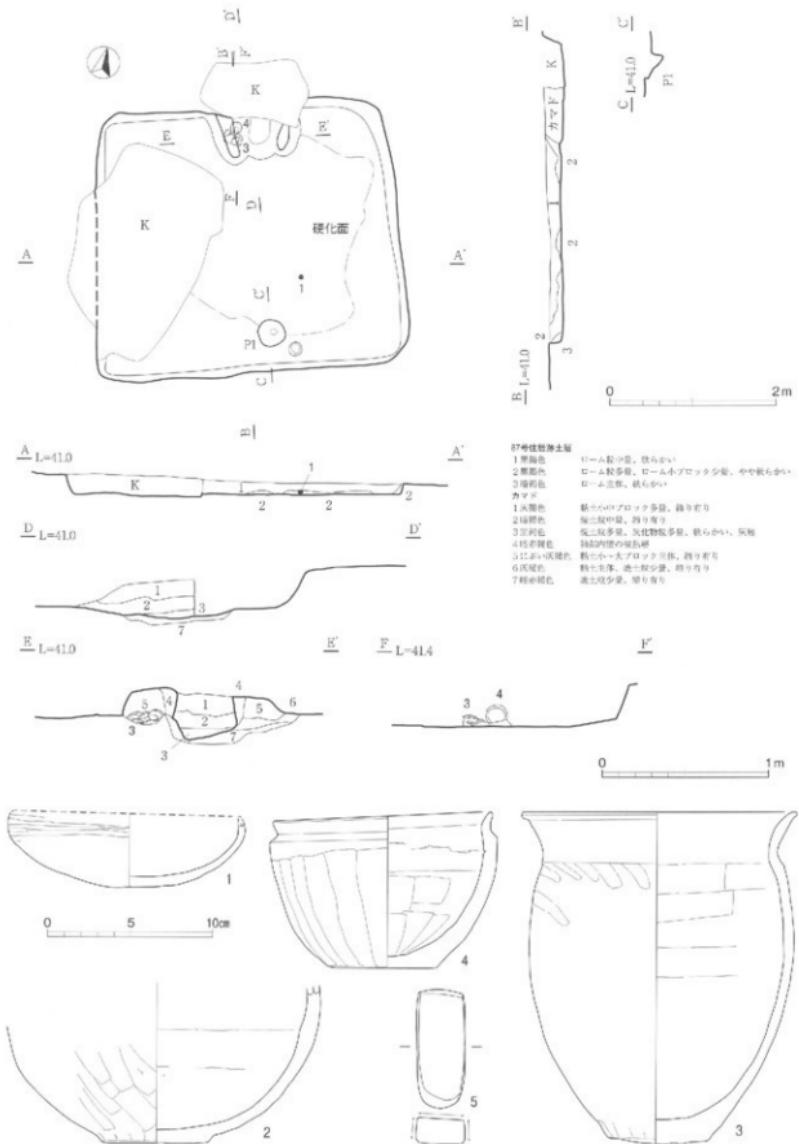
87号住居跡（第123図）

位置 A区南東部O9グリッドにある。規模と平面形 3.68×3.32 mの方形。主軸方向 N-20°-W 壁 壁高は約16cm。床 P1の北側から住居中央部が特に硬化している。ピット 1箇所。P1は深さ12cm、出入り口ピットと考えられる。カマド 煙道部分は搅乱によって壊されている。焚口部から住居の北側壁を結ぶ線までは約50cmあり、カマド袖部や燃焼部を住居内に突出させたしっかりとしたカマドで、袖部幅は109cm、灰褐色粘土と土師器の甕を袖部構築の芯材として使用している。覆土 下層にローム粒・ロームブロック混じりの黒褐色土が、上層には自然堆積と思われる黒褐色土が堆積している。遺物 丸底で体部に横位のミガキを施した1の土師器壺が床面から出土している。カマド左側袖部内からカマド構築材として使用されたと見られる、4のやや小型の土師器甕と3の器高の低い鉢型の土師器が出土している。

所見 床面出土の土師器壺から見て古墳時代後期の住居跡と考えられる。

表55 87号住居跡出土遺物観察表

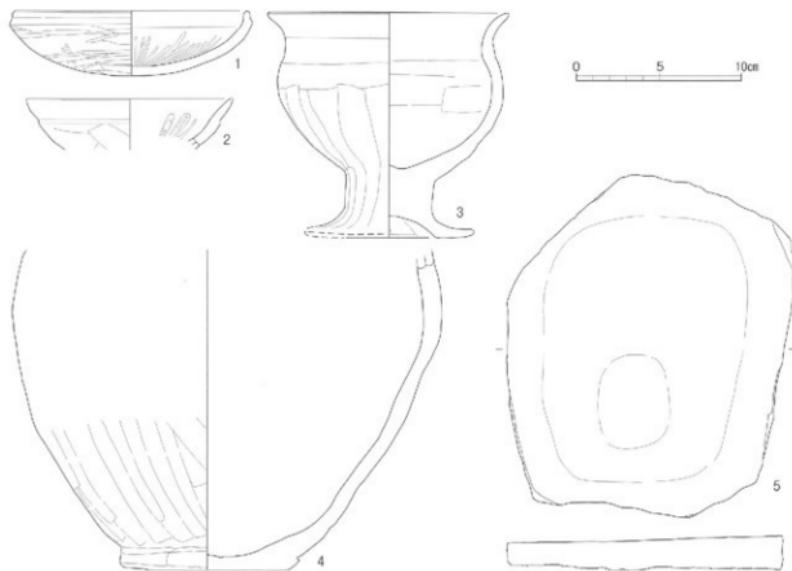
回収番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺	(13.2) (4.5) -	体部外側ミガキ、内面ヨコナデ。	長石、石英	普通	黒褐色	
2	土師器 甕	- 6.4	胴部外面ナデ、下半部ヘラケズリ、内面ナデ。底部ヘラケズリ。	長石、石英	普通	黒褐色	
3	土師器 甕	16.7 21.4 61	口縫部内外面ヨコナデ、胴上半部ヘラナデ。内面ヘラナデ。	長石、石英細粒	良好	にぶい褐色	ほぼ完形
4	土師器 甕	13.4 9.6 6.5	口縫部外側ヨコナデ。胴部腹方向ヘラケズリ、内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	長石、石英	良好	黒褐色	ほぼ完形
5	石瓢箪 甕	長7.3cm、幅29cm、厚1.6cm、重7068g、身灰岩	-	-	-	-	-



第123図 87号住居跡・出土遺物

92号住居跡（第124・125図）

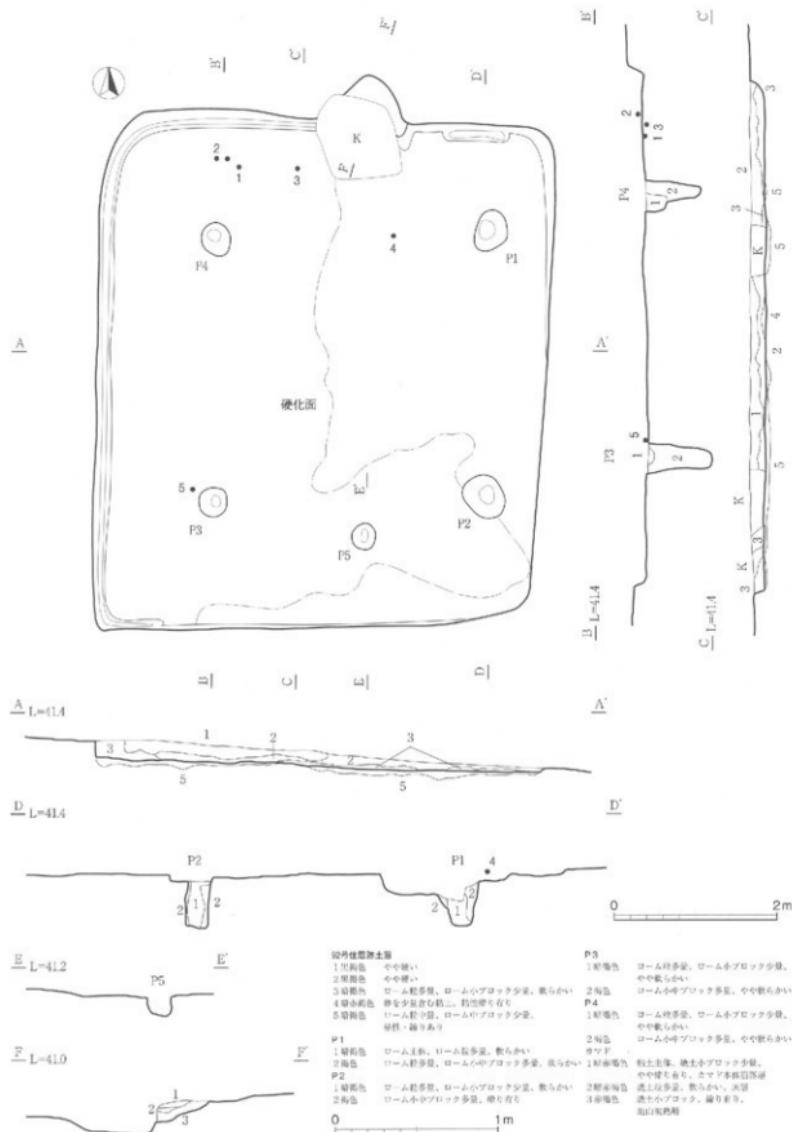
位置 A区南東部、O8グリッドにある。 規模と平面形 6.36×5.56 m、やや縦長の方形。 主軸方向 N-3°-E 壁 壁高は約20cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 床 住居の南側寄りと西側半分が硬化している。 ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。カマド 掘乱穴によって中心部が壊されている。煙道部に向かう、壁外への掘り込みは約28cmある。 覆土 やや硬化した黒褐色土を主体とした覆土である。 遺物 1の土師器の环、3の舞台の付いた鉢はカマド左側の床面から出土している。5の板状の砥石はP3近くの床面から出土している。 所見 出土遺物から古墳時代後期の住居跡と見られる。



第124図 92号住居跡出土遺物

表56 92号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種 别 器 形	口径 器高 底径	特 殊	胎 土	焼 成	色 調	備考
1	土師器 环	14.1 4.0 -	口縁部ヨコナデ。体部内外側ミガキ。	骨粉	普通	褐色	80%
2	土師器 环	12.6 -	口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラクズリ、内面ミガキ。	立つ砂粒・粘物 粒なし、稍凸	普通	黑褐色	口縁部片



第125図 92号住跡

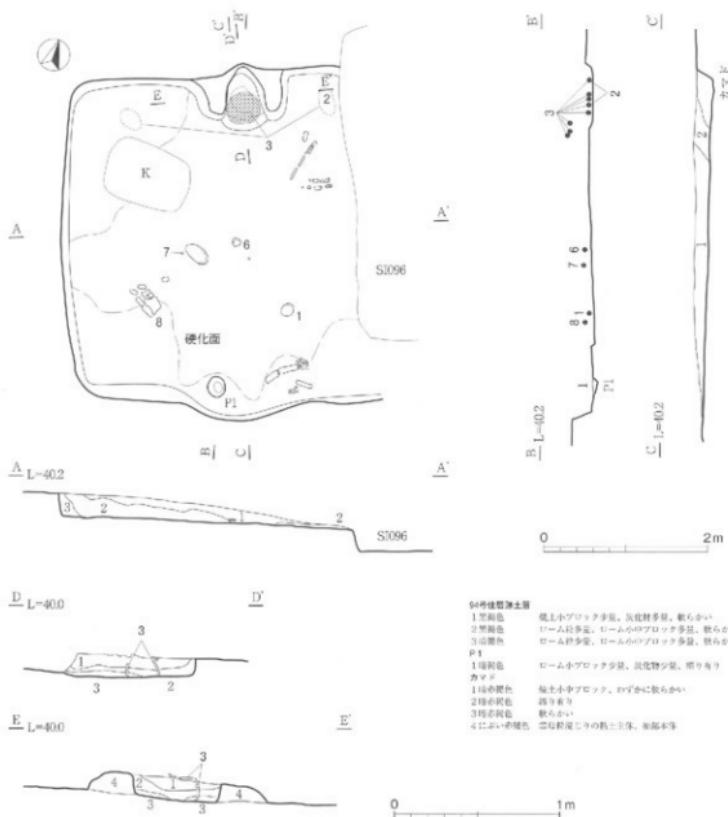
図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	土	焼成	色調	備考
3	土器器 灰付鉢	14.7 13.9 (9.8)	LJ縁部ヨコナデ。体部上位外側ナグ、下半部へ脚部ヘラケズリ。器底内面ハラナデ。	長石、石英	良好	暗褐色	80%
4	土器器 壺	- - 11.0	底部ヘラケズリ。肩部外面上半部ミガキ状のナデ、下半部ヘラケズリ後ヘラナデ。内面ナデ。	長石、石英	普通	褐色	
5	石製品 礫石	長20.7cm、幅16.8cm、厚2.1cm、重1185g、砂岩。					

94号住居跡（第126・127図）

位置 A区南東部、P 9グリッドにある。規模と平面形 4.40 × (3.60) m。主軸方向 N - 23° - W 壁 壁高は約46cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居中央部が特に硬化している。ピット 1箇所。P 1は深さ10cm、出入りLJピットと考えられる。カマド 焚口部から煙道部までは82cm、袖部幅90cmで、壁外への掘り込みは12cmである。覆土 壁際にロームブロックやローム粒を多く含む下層堆積があり、全体を被覆する上層堆積は、炭化材を多量に含む覆土である。遺物 2の土器器壺は床上から、他の土器や石製品は覆土1層中から出土している。所見 土層の堆積状況から、住居は廃絶後暫くしてから焼失している。古墳時代後期の焼失家屋と見られる。

表57 94号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	土	焼成	色調	備考
1	上部器 壺	14.0 43 -	体部内外面ミガキ。底部外側ヘラケズリ。	長石、石英、骨針	良好	暗褐色	完形
2	土器器 壺	12.0 33 -	体部外側ミガキ。内面ヨコナデ。	長石、石英	良好	暗褐色	50%
3	土器器 壺	19.8 -	LJ縁部内外面ヨコナデ。肩上半部ミガキ、下半部ヘラナデ。 内面ヘラナデ。	長石、石英	良好	にぶい褐色	80%
4	土器器 壺	(16.0) - -	LJ縁部内外面ヨコナデ。肩上半部ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	石英、長石	不良	にぶい褐色	
5	上部器 壺	15.5 (16.0) 88	口縁部内外面ヨコナデ。肩部側面ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。	長石、石英	普通	暗褐色	80%
6	手盤土器	(7.0) 38 63	外側溶接痕。内面指ナデ。	石英	普通	黒褐色	90%
7	石製品 礫石	長89cm、幅- cm、厚3.1cm、重2562g、絆石質。					
8	石製品 礫石	長32.0cm、幅17.1cm、厚8.6cm、重7645g、砂岩質。					

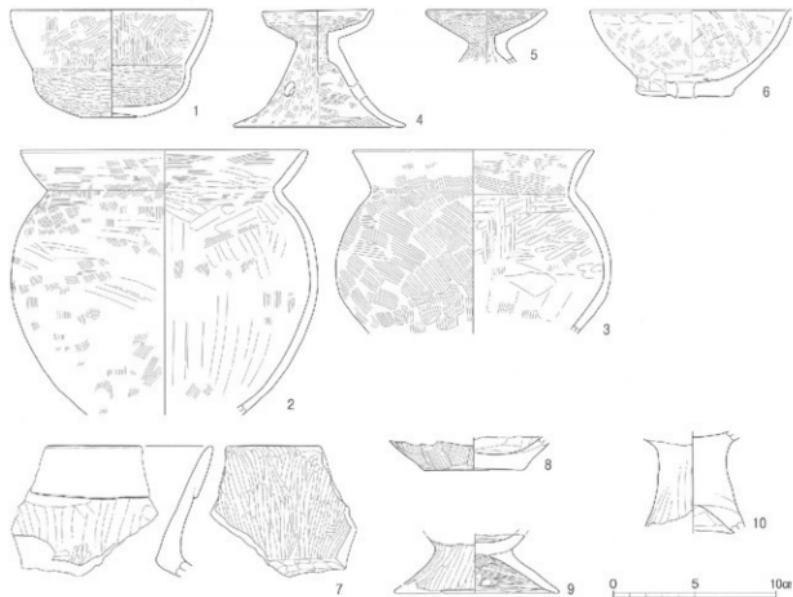


第126図 94号住居跡



第127図 94号住居跡出土遺物

2 包含層及び遺構外出土遺物（第128図）



第128図 包含層及び遺構外出土遺物

表58 包含層及び遺構外出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口縁 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 津	—	口縁部外側ハケメ後にヘラミガキ、体部～底部外側へタケツリ後ヘラミガキ、口縁部～底盤内側加なべハラミガキ。	石英、雲母、骨針	普通	に赤い褐色	包含層
2	土師器 要	—	口縁部ヨコナデ。底盤～軒部外側ハケメ後に縫なたね、頭部内面ハケメ。	石英、雲母、骨針	普通	に赤い褐色	包含層
3	土師器 要	—	口縁部ヨコナデ、頭部～軒部外側ハケメ、頭部内面ハケメ、横注内面ヘラクツリ後に施なべハラミガキ。	石英、チャート、骨針	普通	に赤い褐色	包含層
4	土師器 藤合	—	脚部の2方向に透孔。口縁部ヨコナデ、脚部ハケメ後にヘラミガキ、脚部内面ハケメ。	石英、角閃石、骨針	普通	に赤い黄褐色	包含層
5	土師器 藤合	—	口縁部内外ヨコナデ後にヘラミガキ。	雲母、角閃石、骨針	普通	に赤い黄褐色	包含層
6	土師器 有孔体	—	底部に横造直孔。口縁部ヨコナデ、脚部～底盤外側へタケツリ後にテグ、頭部～底部内側テグ。	石英、角閃石、骨針	普通	に赤い黄褐色	包含層
7	土師器 要	—	折り汲込口縁。口縁部横造のテグ。頭部横造のナデ→模様、留袋のミガキ。内面は口縁横造のナデ→模様後横造のミガキ。頭部横造のナデ。外面スス、内面頭部にヨゴレ付着。	石英、角閃石、多量の白色粘土	普通	に赤い黄褐色	武七 古墳崩壊
8	土師器 要	—	脚部横造のハケメ。底盤ヘラケツリ→ナデ。内面は焼、斜削後のナデ。	多量の石英、白色粘土、角閃石、骨針	普通	外：に赤い褐色 内：黒褐色	S1002 出入 古墳崩壊
9	土師器 高杯	—	脚部のミガキ。脚部横造のナデ→斜削のミガキ。内面は脚部のハケメ→一部斜削のナデ→脚部横造のミガキ。	多量の石英、白色粘土、角閃石、骨針	良好	外：に赤い褐色 内：に赤い褐色	表土 古墳崩壊
10	土師器 高杯	—	脚部中実。脚部横造のミガキ。一部剥落。内面は焼、斜削のナデ。	多量の石英、白色粘土	不良	外：に赤い黄褐色 内：に赤い褐色	カクラン 古墳中間

第4節 奈良・平安時代

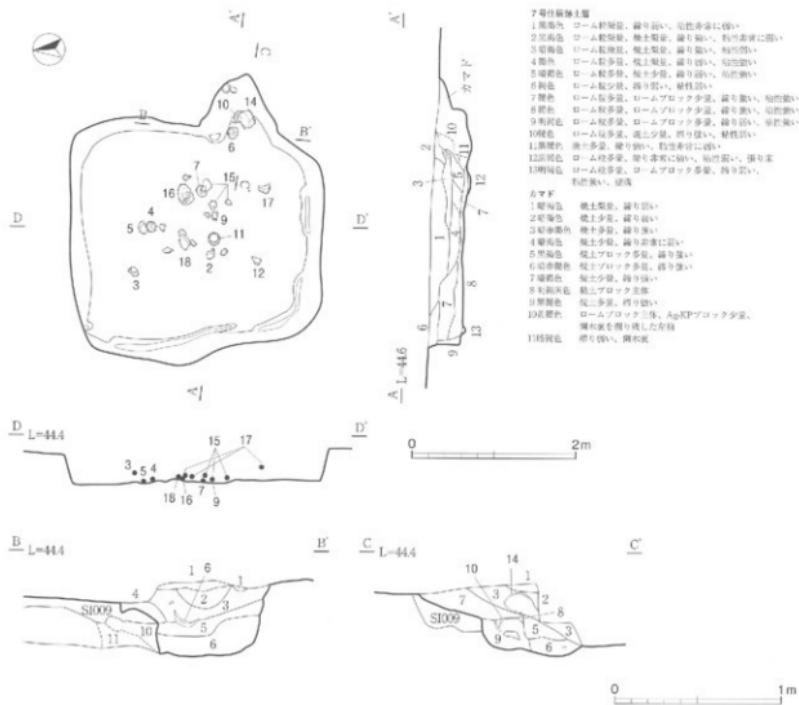
1 墓穴住居跡

7号住居跡（第129～131図）

位置 A区北端、M2グリッドに位置する。規格と平面形 東西方向は2.95m、南北方向で3.06mを測り、不整隅丸台形を呈する。弥生時代の9号住居跡と風倒木痕を壊している。主軸方位 N-93°-E
壁 壁高は38cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床 やや凹凸があり、全体によく締まる。掘り方ではなく、部分的に崩潰がめぐる。**ピット** - カマド 東壁のやや南寄りに付設され、9号住居跡の炉を壊して構築されている。ローム層の地山を掘り残した短い左袖が残っている。火床面よりもやや浮いた位置で、支脚と推定される不整直方体状の自然礫が横位で出土し、その上には高台付窯を逆位に被せていた。窯の直上からは土師器の甕が横に倒れて出土している。カマド廃絶時にこの状態で遺棄されたものと推測される。**覆土** 均質な褐色～黒褐色土による自然堆積状を呈するが、4層は人為堆積と思われる。**遺物** カマドから、6の須恵器甕や10の高台付窯、14の土師器甕などが出土している。竪穴中央部の覆土下層～中層からは須恵器、土師器が数多く出土している。覆土4層の堆積時に大半が一括投棄され、順次1・3層の埋没に伴って廃棄され続けたものと推測される。出土遺物は、8世紀後葉～9世紀前葉頃の須恵器を主体としており、蓋、甕、壺、盤、短頭壺、瓶、甕が見られる。10の高台付窯と12の甕はロクロ成形の酸化焰焼成である。10の高台付窯は内・外面に漆状の付着物が見られ、二次的に煅明皿として使用されており内面に油煙痕が残る。**所見** 掘り方をほとんどもたない小型の住居で、時期は9世紀前葉頃と考えられる。

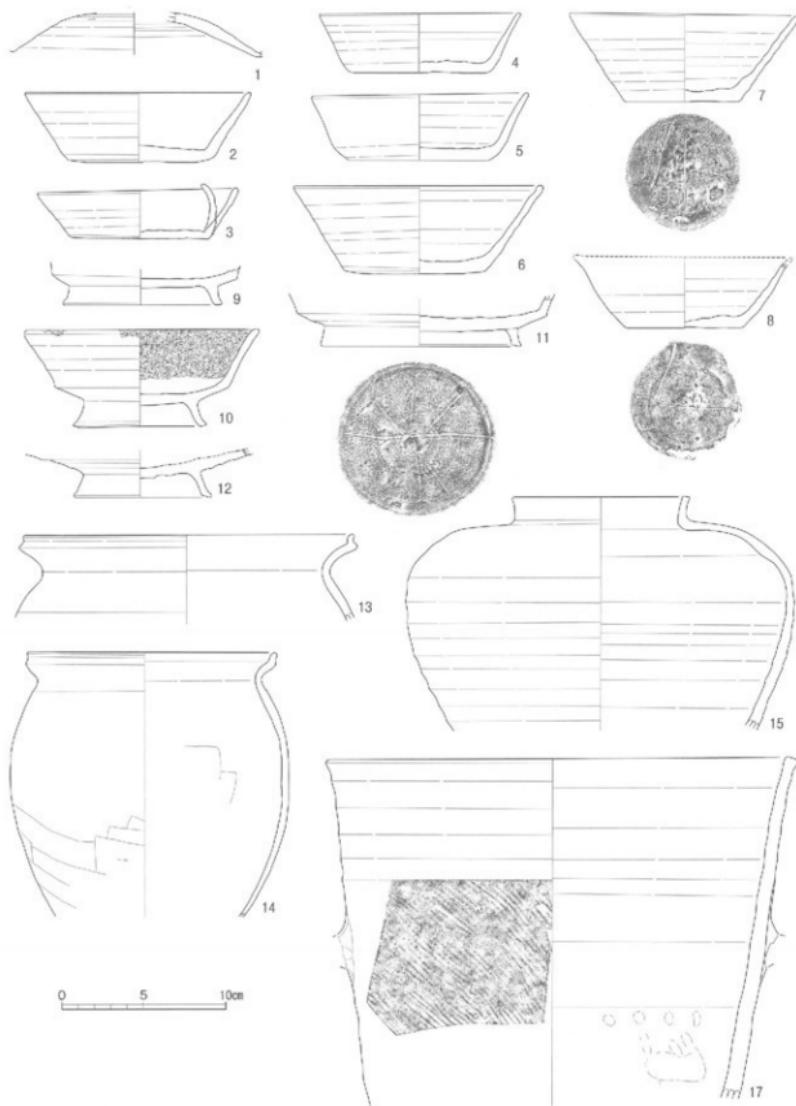
表59 7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	口径 深さ 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	- -	素面片。天井部は縦やかなゾーム状で、天井部の1/2の範囲に丁寧な凹凸模様。	精良、白色陶粒	良好	灰色	25%
2	須恵器 甕	(14.0) 4.3 8.6	底部四軒へラケズリ、ロクロ右側傾。	長石、石英、チャート	良好	灰色	
3	須恵器 甕	127 31 8.6	底部四軒へラケズリと後難々回転へラケズリ、底部下端右肩、角内筋、海底方向の半周分手持ちへラケズリ。焼き歪み。	良好 精良	灰～褐色	毫形	
4	須恵器 甕	122 37 8.1	底部四軒へラケズリと後難々回転へラケズリ、一方角へラケズリとオサエ。	長石、石英、海綿骨片、黒色陶粒	良好	灰色	ほぼ毫形
5	須恵器 甕	132 42 8.5	底部四軒へラケズリ。ロクロ左側傾。	長石、石英	良好	灰色	毫形
6	須恵器 甕	14.8 54 8.4	底部一方角後難四のヘラケズリ、口縁部を小さな下端に仕上げる。	長石、石英、チャート、海綿骨片	不良	稍灰色	ほぼ毫形 毫明皿 カマド
7	須恵器 甕	140 55 6.8	底部一方角へラケズリ、ヘラ記号「十」。底部外側火葬痕。	白色、白黄色丸座、海綿骨片	普通	深褐色	ほぼ毫形
8	須恵器 甕	- - 6.2	底部へラケズリ後オサエ。ヘラ記号「井」。	長石、石英、チャート、黑色陶粒(径4mm大)	良好	灰色	口縁部欠損
9	須恵器 高台付窯	- - 9.7	底部四軒へラケズリ、ロクロ左側傾。	長石、チャート、普通 海綿骨片		灰色	

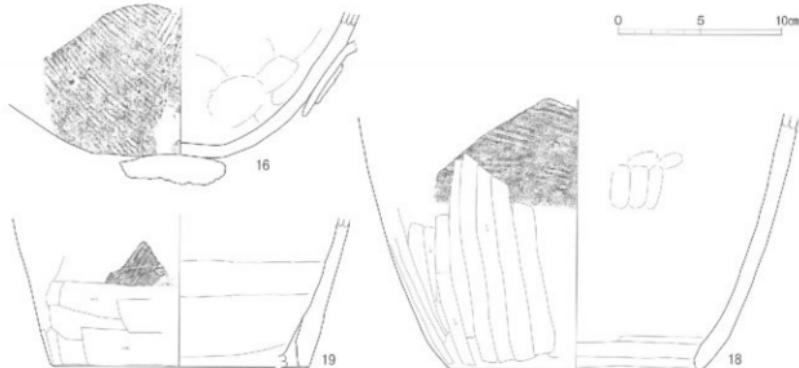


第129図 7号住居跡

団版番号	種別 器種	口径 深さ 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
10	須恵器 高台付环	142 60 79	直立器の高台付环の器形だが、氧化焰焼成でクロロ目が傾く。特に内面には漆焼痕が強く、外面上にも漆焼痕と見られる炭化物が付着している。	長石、石英、海綿 骨粉 寺針	普通	明黄褐色	透明度、完形 カマド
11	須恵器 盤	- 121	底部外側ヘラ記号「*」。	長石、黒色鐵粒	良好	灰色	
12	須恵器 盤	- 86	氧化焰焼成。	長石、石英、海綿 骨粉	普通	明黄褐色	
13	土器器 裏	(20.0) - -	口縁部内外面ヨコナデ、腹部内外面ナデ。	細砂粒	普通	にぶい褐色	
14	上輪器 甕	147 - -	口縁部折み上げ、肩部外面ナデ、下部斜傾のハラケ ズリ。	長石、石英	やや不良	にぶい褐色	カマド
15	須恵器 短腹壺	(107) - -	口縁部は平底で、口縁部は鋭く立ち上がる。肩部は上位に最大径を持つ。	長石吹、塵	やや不良	青白灰色	



第130図 7号住居跡出土遺物①

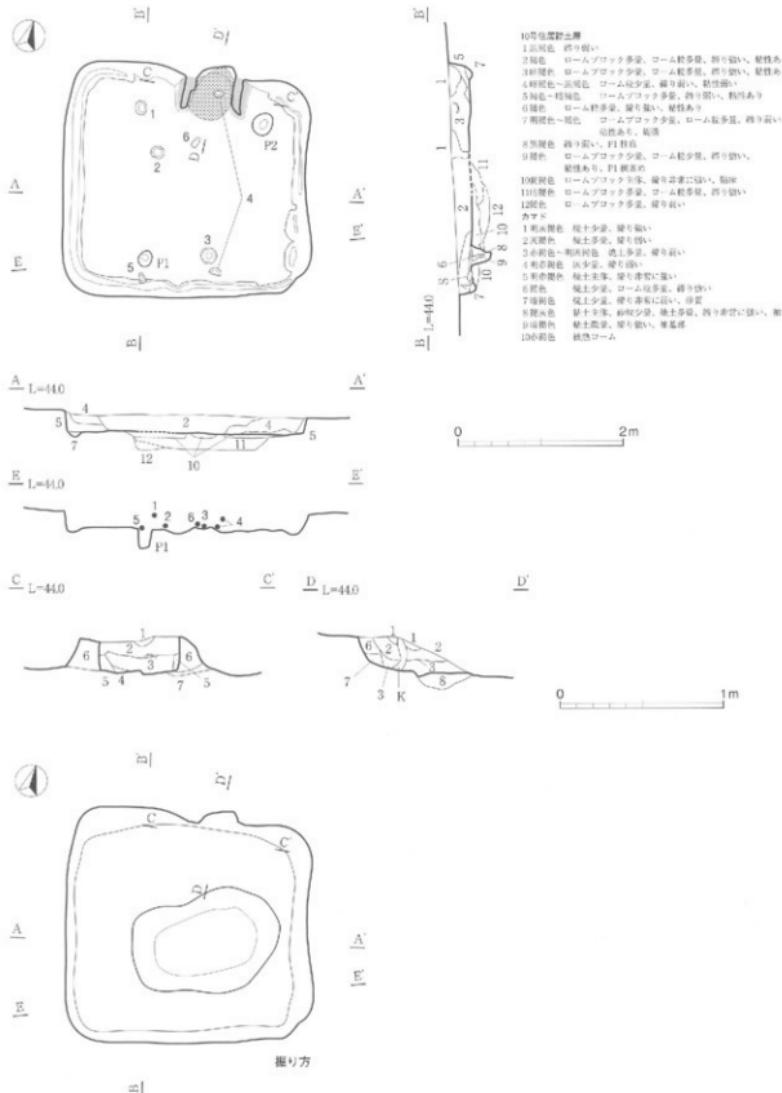


第131図 7号住居跡出土遺物②

図版番号	種別	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
16	須恵器 壺	— — —	灰褐色。丸底で、底部に窄底部。須恵器环体部が複数。肩部から平行叩き、内面裏の伝紙。	長石粒・礫、黑色 粘土	良好	灰色	
17	須恵器 壺	(28.8) — —	肩部外面斜面の平行叩き、口縁部外側～内面ロクロナギ。体部に一对の把手が付く。	長石粒・礫、海綿 骨針、石英	良好	灰色	
18	須恵器 壺	— — (15.0)	腹下部破片、腹部外面斜面の平行叩き、下半部弧方向のハラケズリ。蓋部単孔式。	長石・石英、チャート	普通	明灰色	
19	須恵器 壺	— — (15.7)	肩部外面斜面の平行叩き、下縁横方向のハラケズリ。蓋部二孔式。	長石・石英	良好	に赤い變色	

10号住居跡（第132・133図）

位置 A区北東端、N2グリッドに位置する。規模と平面形 南北の主軸方向は東側で2.62m、西側で2.89m、東西方向で2.94～3.0mを測り、隅丸正方形に近い。北壁はカマドの東西で段違い状になり西側が突出している。主軸方位 N-11°W、60号住居跡と近似する。壁・壁高は25cmを測り、わずかに傾斜する。床 全体的に硬化し、中央部に大きな床下土坑を確認した。周溝はほぼ全周する。ピットP1は、カマドを通る竪穴主軸からは外れているが、出入口ピットと推測される。カマド脇のP2は深さ約15cmで灰褐色粘土が充填されていた。カマド 北壁の中央やや東寄りに付設され、煙道が非常に短い。覆土 墓際に暗褐色～黒褐色土が自然堆積し、竪穴中央はロームブロックの多い褐色～明褐色土で人為的に埋め戻されたものと判断される。遺物 カマドの南西や竪穴南壁付近から8世紀後半頃の須恵器が出土している。3は高台部が欠損している大振りな稜槌で生焼である。2の須恵器環は高温焼成で焼き歪みが激しい。カマド前面の床面からわずかに浮いて、6の土製支脚が出土している。遺存率の良好な資料が出土したもの、すべて廃棄遺物で、住居跡発掘時に廃棄されたものではない。所見 本遺跡の古代住居跡の中では、最も小型の一群に含まれる。住居跡の発掘時期は、8世紀後半頃と考えられる。



第132図 10号住居跡



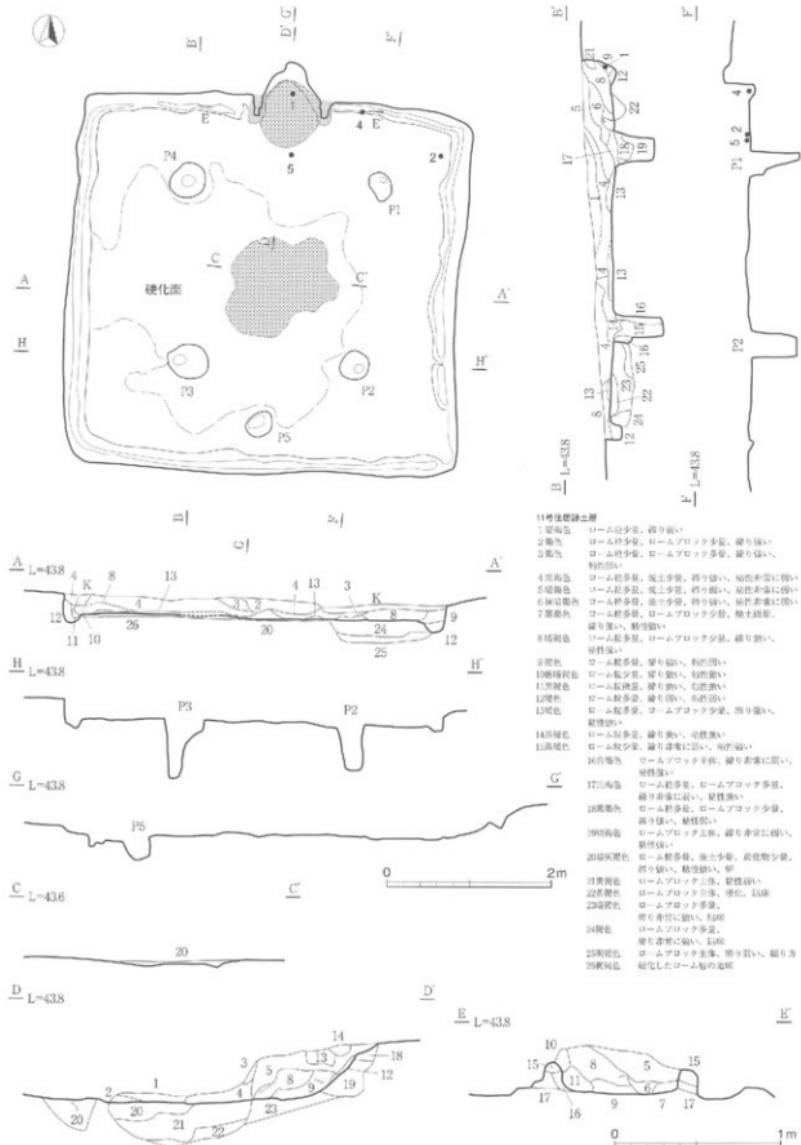
第133図 10号住居跡出土遺物

表60 10号住居跡出土遺物観察表

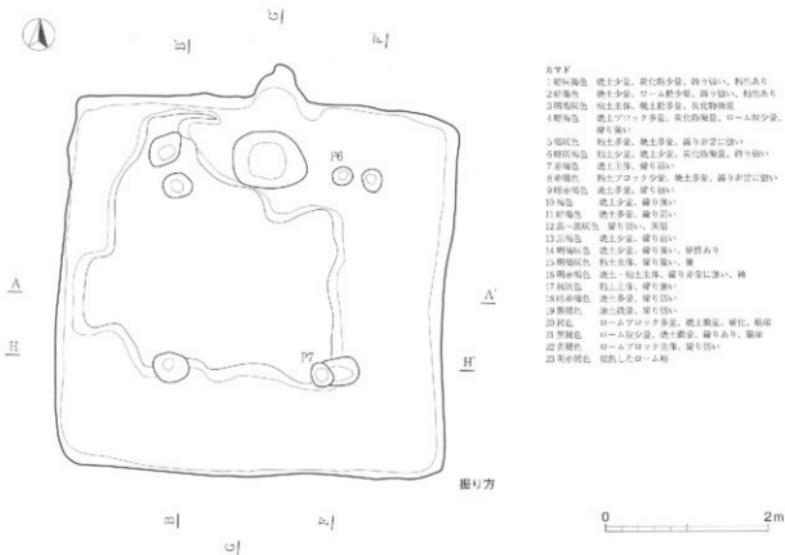
図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	環窓器 鉢	13.5 4.0 6.3	底部一方面へラケズリ。ヘラ記号「-」	長石礫、石英 及	やや不 及	灰白色	完形
2	環窓器 鉢	14.1 4.0 15.6	底部圓弧へラケズリ、ロクロ右回転。施き赤み。	石英、霞緑骨針 黒色滑溜粒	良好	灰色	ほぼ完形
3	環窓器 高台付环	18.1 — —	体部下溝凹輪へラケズリ、ロクロ右回転。残焼形状。	石英	不良	灰白色	
4	環窓器 鉢	13.6 4.3 9.1	底部圓弧へラケズリ、ロクロ右回転。	長石、チャート輝 碧玉	普通	灰白色	
5	石製品 鉢石	長12.9cm、幅8.0cm、厚5.9cm、重611g、砂岩質。					
6	土製品 支柱	長14.5cm、幅6.8cm、厚6.2cm、重600g。		長石、石英	良好	褐色	

11号住居跡（第134～136図）

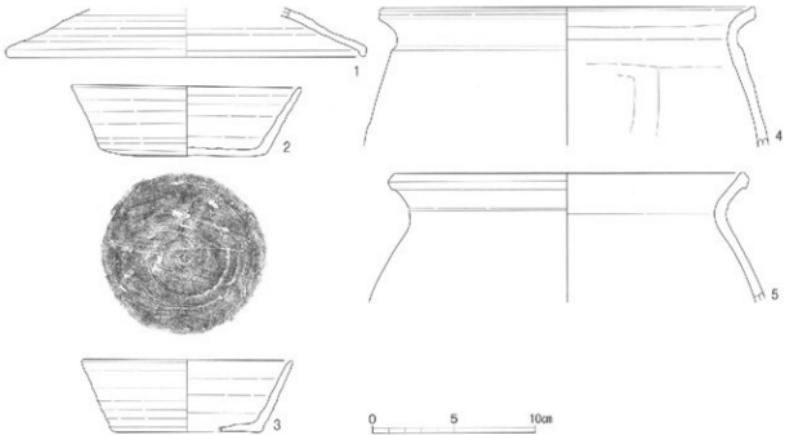
位置 A区北東端、N 2グリッドに位置する。規模と平面形 南北の主軸方向は4.47～4.68m、東西方向は4.78mを測り、正方形を呈している。主軸方位 N-1°-Wで、ほぼ真北を指向する。壁・壁高は15cmを測り、垂直に近い。床・周溝はほぼ全周する。主柱穴に囲まれた中央部の周囲が溝状の掘り方となる。主柱穴周囲の床面はやや軟弱である。ピット P 1～4は主柱穴、P 6・7は古い主柱穴、P 5は出入口ピットであろう。P 3には柱痕状の断面を観察したが、ほかの主柱穴は抜取痕と判断した。カマド・炉 カマドは北壁中央に構築され、煙道部でわずかに灰層を検出した。竪穴中央部の床面は明瞭に被熱



第134図 11号住居跡



第135図 11号住居跡掘り方



第136図 11号住居跡出土遺物

し、赤変硬化が顕著であるため、炉と判断する。覆土 全体に自然堆積状を呈している。堅穴中央部覆土上層にはローム粒の多い褐色土が堆積し、人為埋没の可能性がある。遺物 カマド前面の覆土下層からは8世紀後半頃の土師器壺が、北東隅の床面直上からは同じ頃の須恵器壺が出土している。所見 P 6・7はP 1・2と同等の深さをもち、柱穴はP 6・7・3・4からP 1～4へと替えられたものと判断できる。出土遺物は多くないが、住居跡の廃絶時期は、8世紀後半頃と考えられる。

表61 11号住居跡出土遺物観察表

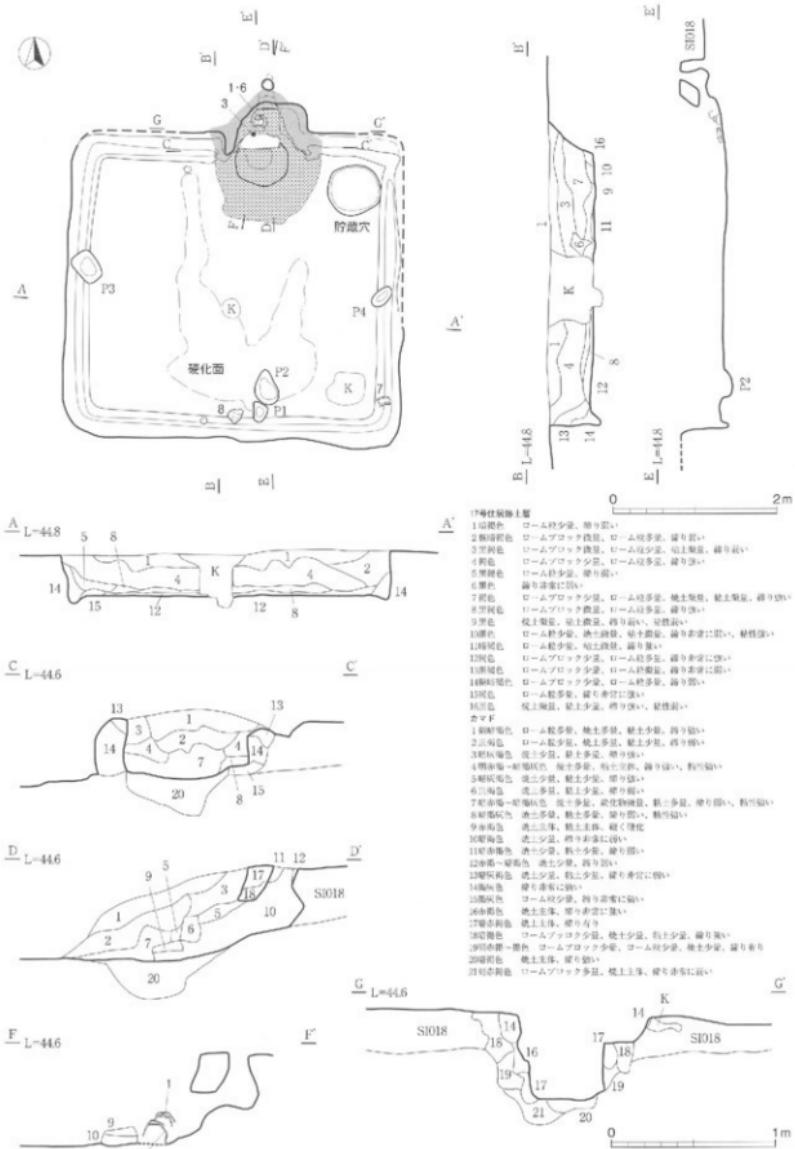
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 壺	(22.2) — —	口縁弧片。口縁端部を下方に折り戻す。	良石、海綿骨針	普通	灰褐色	カマド
2	須恵器 壺	14.2 4.2 10.1	同軸ヘア切り後一方に向かってハケズリ。ヘア符号「一」。	長石輝、石英、海綿骨針	普通	灰褐色	変形
3	須恵器 壺	(13.0) 4.5 (9.0)	底部切削ヘラケズリ。ロクロ右旋転。	良石、石英、海綿骨針	不良	灰白色	
4	土師器 壺	(21.1) — —	口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ナデ、内側ヘナナダ。	良石、石英、海綿骨針、角閃石	良好	灰褐色	
5	土師器 壺	12.4 —	口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ナデ、内側ヘナナダ。	良石、石英	普通	灰褐色	

17号住居跡（第137・138図）

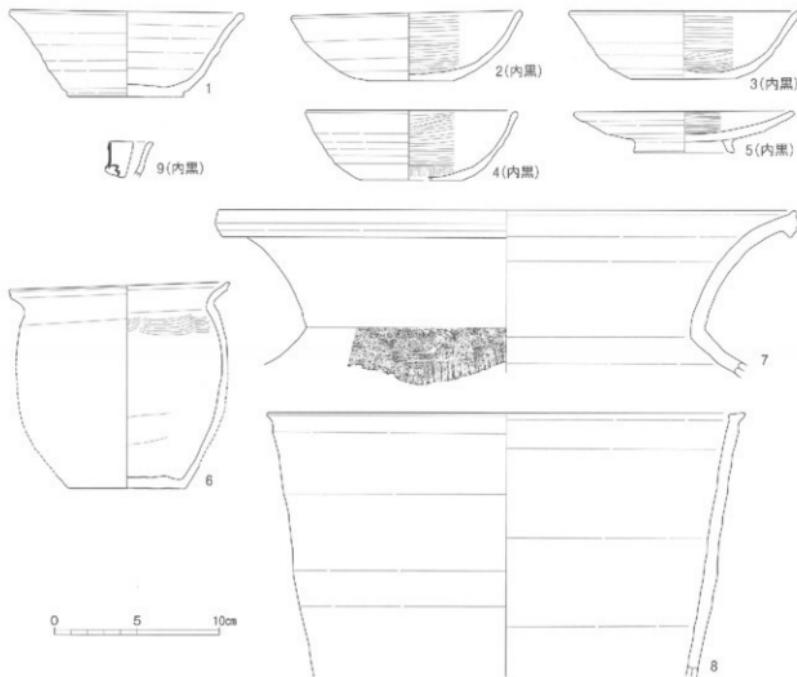
位置 A区北西端、K 3グリッドに位置する。規模と平面形 南北の主軸方向は3.88m、東西方向で4.12mを測る。平面は正方形。弥生時代の18号住居跡の南西側約1/3を壊して構築されている。堅穴中央と南東隅は搅乱ピットによって一部壊されている。3号掘立柱建物跡とも重複するが、調査時には柱穴を確認できず、本住居跡の方が新しいものと推測する。主軸方位 N - 3° - E で、ほぼ真北を指向する。壁壁高は56cmを測り、垂直気味に立ち上がる。床 平坦で凹凸がなく、堅穴中央部がよく硬化している。周溝はほぼ全周する。掘り方はない。ピット P 1・2（深さ15cm・13cm）は出入口ピット。P 3・4（深さ31cm・23cm）は柱穴であろうか。北東隅には略円形の浅い貯蔵穴（深さ7～10cm）が構築されている。カマド カマドは北壁中央やや東寄りに構築され、煙道部周辺の天井が残存していた。袖は非常に短く、軽土は煙道部の側壁にも一部貼り付けられ、袖・天井・煙道の内壁や底面は著しく被熱している。カマド中央において須恵器壺・土師器壺・土師器甕を逆位に積み重ね、それを支脚として使用している。支脚の前面では、赤変した板状の天井内壁が落下した状況が窺えた。覆土 中層はローム粒・ブロックを斑状に含み、人為的な埋め戻しや周堤の崩壊などが想定される。遺物 出土遺物は、須恵器の壺・甕・瓶、内黒土師器の壺・小型甕等9世紀中葉～後葉頃のものである。壁際の覆土下層から、須恵器甕の破片が出土している。所見 床面は平坦で凹凸がなく、堅穴中央部がよく硬化する。掘り方はなく、地床である。周溝はほぼ全周する。出土遺物から、住居跡の廃絶時期は、9世紀後葉頃と考えられる。

表62 17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 壺	14.3 5.3 6.6	底部ヘア切り施し後2方向ヘラケズリ。	チャート、良石、普通 海綿骨針	灰褐色		
2	土師器 壺	13.0 4.4 5.2	底・半腰外側ヨコナデ、下部一底部四脚ヘラケズリ。 内面黒色施墨・ミガキ。ロクロ右回転。	チャート	良好	褐色	



第137図 17号住居跡



第138図 17号住居跡出土遺物

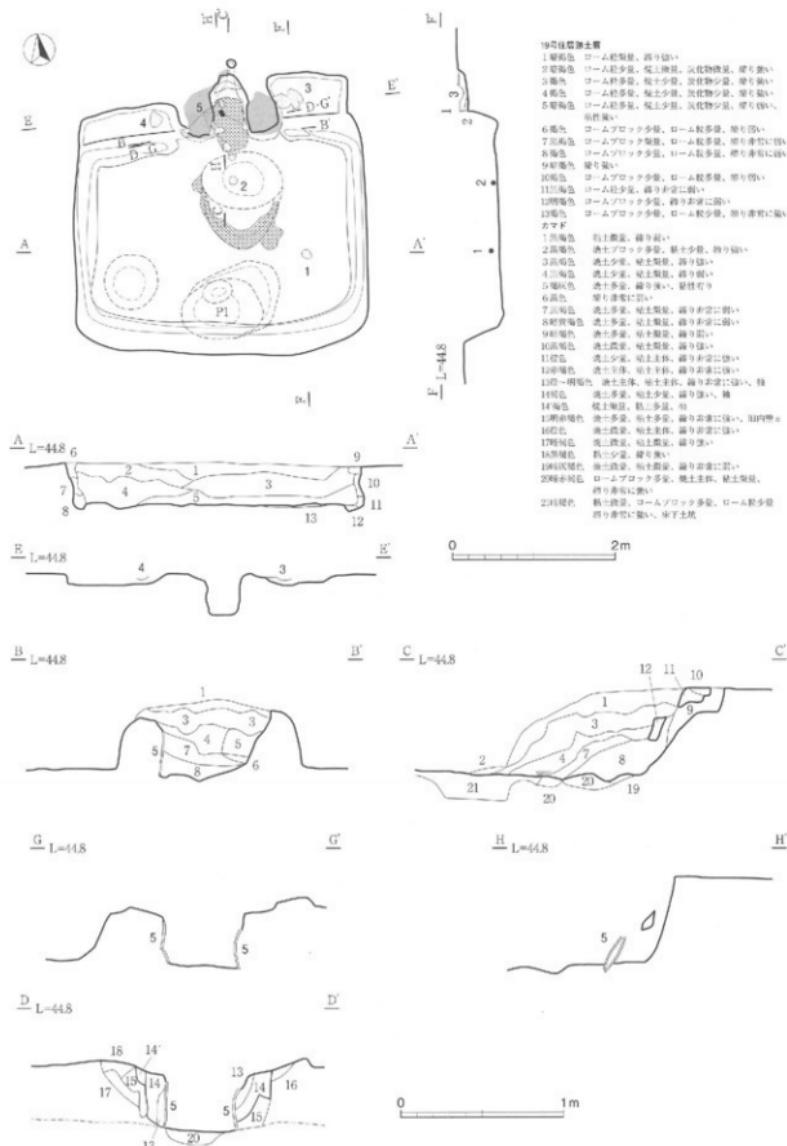
図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	土器 壺	14.0 4.2 6.2	体上半部外面クロナデ、下半部～底部直輪ヘラケズリ。内面黑色處理・ミガキ。	石英、長石、角閃石	良好	褐色	
4	土器 壺	13.8 4.3 7.0	体上半部斜面クロナデ、下干部～底部直輪ヘラケズリ。内面黑色處理・ミガキ。ロクロ有陶板。	石英、金星輝石	普通	浅黃褐色	
5	土器 壺	(13.1) 4.3 (6.1)	体部外面クロナデ、内面黑色處理・ミガキ。	石英	良好	にぶい褐色	空気
6	土器 小壺	13.2 12.5 7.2	口縁部内外面クロナデ。断上部斜子、下部直輪。底部外輪粗く、他物正転状のものあり。	長石、石英、海綿骨針	普通	褐色	
7	須恵器 壺	(35.5) — —	口縁部外面クロナデ、腹部外面平行凹き。ロクロ右回転。	長石輝、石英	普通	青灰色	
8	須恵器 壺	(24.0) —	高輪袋底。体部内外面クロナデ。	石英、チャート、海綿骨針	普通	褐色	
9	土器 壺	— — —	体部外輪墨書き。内面黑色處理・ミガキ。	海綿骨針	良好	にぶい褐色	

19号住居跡（第139・140図、巻頭写真図版3）

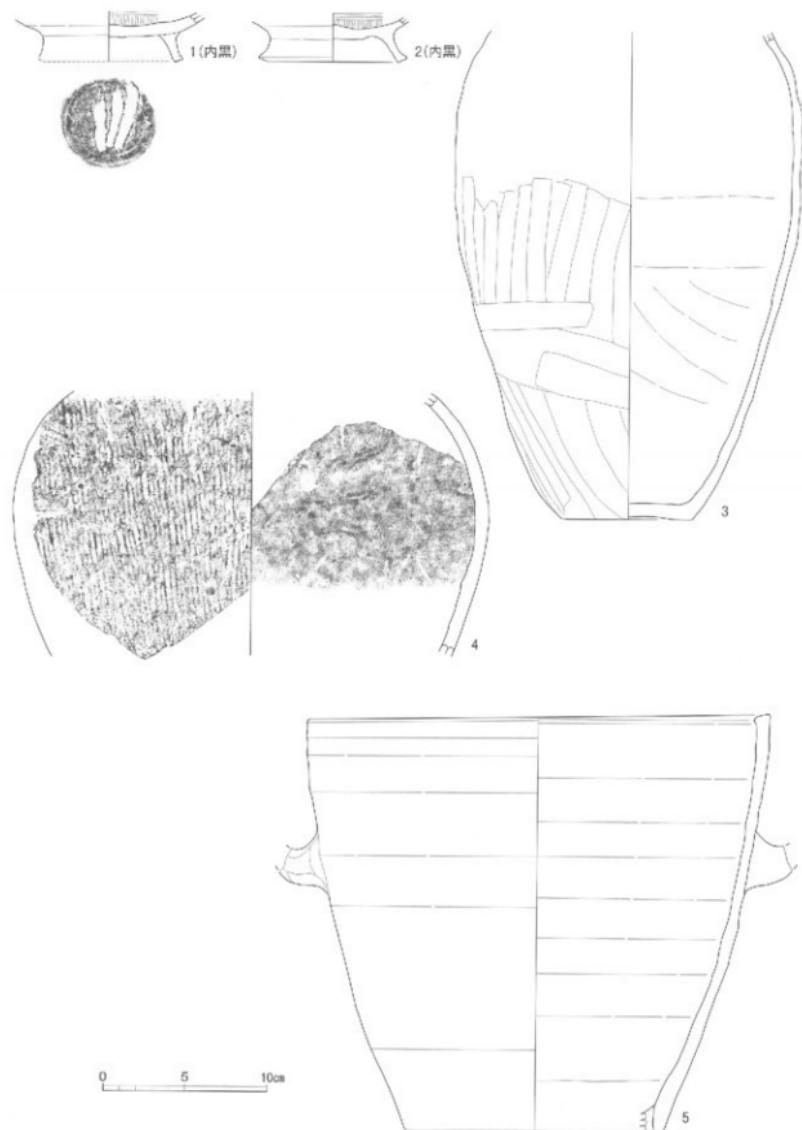
位置 A区北西端、K3～L3グリッドに位置する。規模と平面形 南北の主軸方向は東側で2.92m、西側で2.65mを測る。北壁には、棚状施設が構築されているため、それを加えると東側3.46m、西側3.03mとなる。東西方向は3.6mを測り、平面では横向きの不整隅丸台形を呈する。主軸方位 N-8°-Eで、真北に近い。壁 高さは52cmを測り、南壁が傾斜するものの、ほかは垂直に近い。床 全体に硬化している。周溝は全周する。基本的には地床だが、床下土坑（破線表示）を伴う。南西隅土坑は深さ23cmである。ピット 挖り方調査時にP1（深さ22cm）を確認した。出入口ピットと想定されるが、豊穴壁からはやや離れている。カマド・炉 北壁中央や東寄りに構築されている。袖は豊穴側にはほとんど張り出さず、幅は上面幅でも40cm前後と広い。袖戻し割りでは、内壁被熱面の内側にも間層を挟んで顕著な被熱面を検出した。内壁面に粘土を貼り直した痕跡と見られる。煙道部の天井は一部残存していた。両袖の前面端部には5の須恵器の胴部片が補強材として埋設されており、底面中央には、同じく須恵器の胴部片2点を埋設して支脚に転用していた。支脚材は煙道部方向へ斜めに傾いた状態で確認したが、本来は立位埋設の状態だったものと見られる。いずれも同一個体を細長く分割して再利用したものである。カマド覆土中からも同一個体破片が出土しており、天井部の補強材にも使用されていたものと想像される。床面中央部には、平面三日月状の顕著な被熱面を検出しており、炉と考えられる。被熱面の直下には床下土坑（深さ15cm）が見られた。覆土 下層は褐色土、上層は暗褐色土が主体で、自然堆積状を呈するが、ローム粒・ブロックがやや目立っている。6～11層は土壤化した舉体の可能性が残る。遺物 東櫛からは3の土師器甕が、西櫛からは4の須恵器甕が破片で出土している。カマド前の覆土下層からカマド覆土中にかけて、土師器の内黒挽や甕が出土している。所見 住居規模は小さいながらも、比較的大きい床下土坑が3基ある。掘り方では、カマド焚口直下も含めて周溝が全周して確認できた。櫛上から出土した土器は、本来置かれていたものがそのまま遺棄された可能性が考えられる。住居跡の廃絶時期は、10世紀前葉頃と考えられる。

表63 19号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 瓦白付甕	—	内面黑色處理、ミガキ。底部外縁にやや太い丸味を持つた工具による「二」の縦割。	石英	良好	褐色	
		8.7					
2	土師器 萬合付甕	—	内面黑色處理、ミガキ。ロクロ右回転。	石英	良好	褐色	
		8.0					
3	土師器 甕	— 7.9	胴外面上部ナデ、下千錠瓶方向のヘラケズリ、内面ハラナ。	長石、石英	普通	にがい褐色	
4	須恵器 甕	—	胴部外斜め方向の平行叩き。	長石、石英少、黑色釉出物	良好	オリーブ灰色	
5	須恵器 甕	26.1 25.4 15.5	底部破損。体部内外面ロクロナゲ。体部側面に一对の把手付き。	長石、石英少、チャート、海藻青銅	不良	淡黄褐色	70%



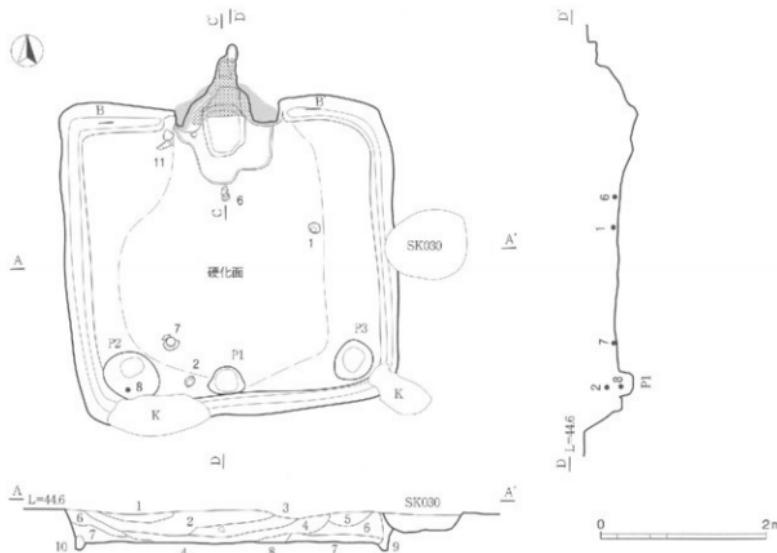
第139図 19号住居跡



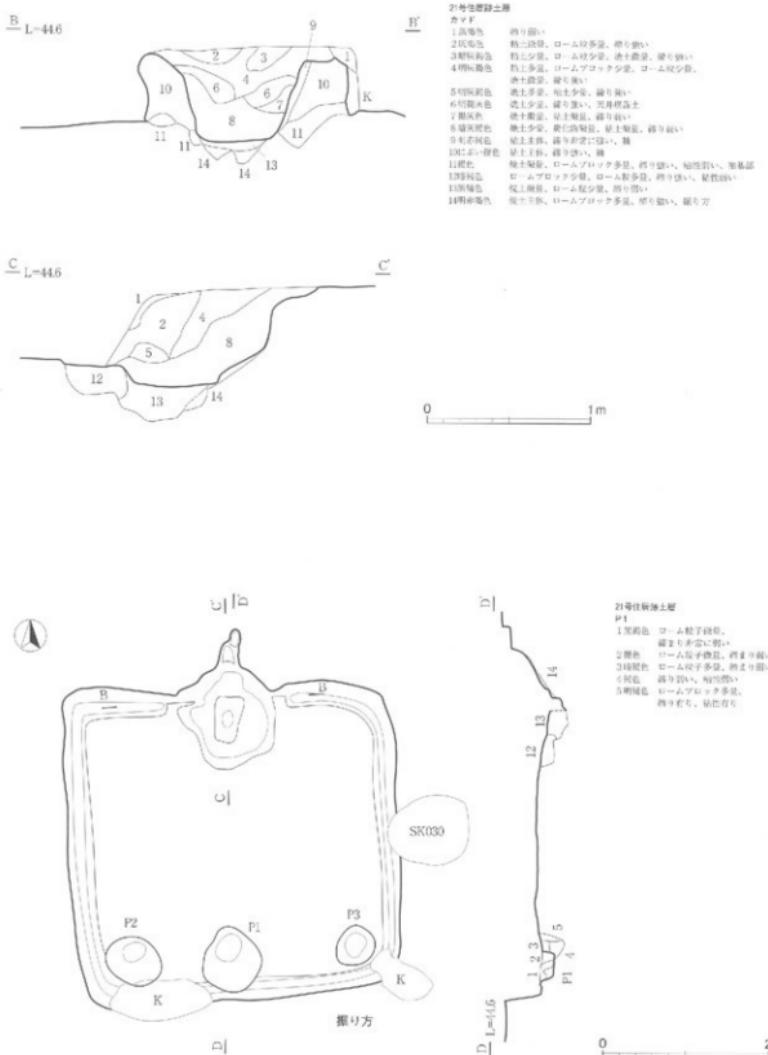
第140図 19号住居跡出土遺物

21号住居跡（第141～143図）

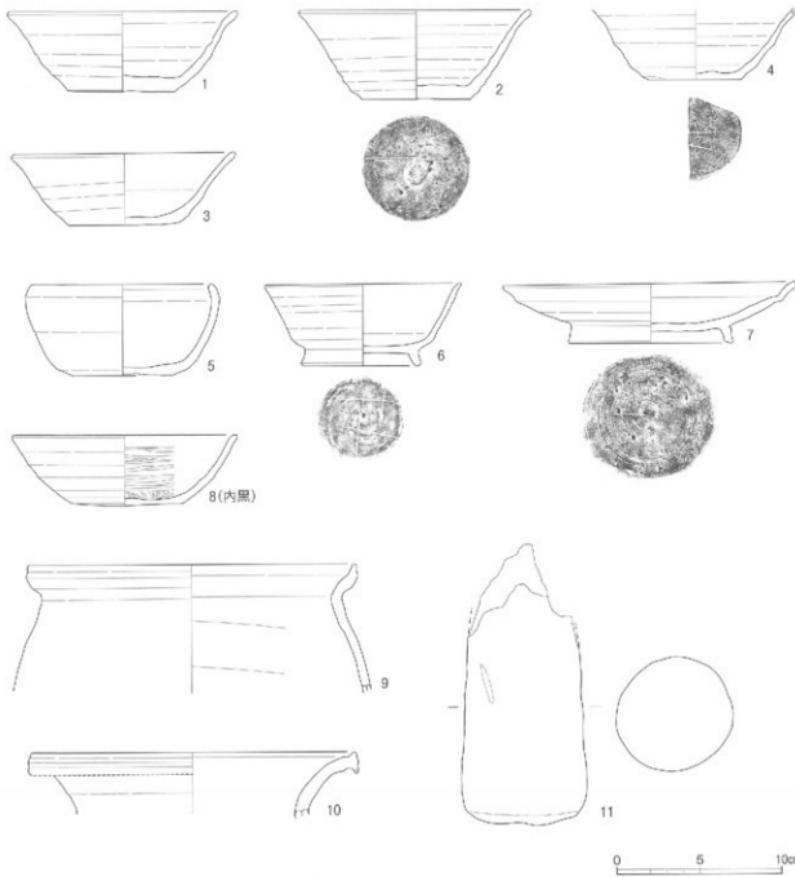
位置 A区北西端、K 3～L 3グリッドに位置する。規模と平面形 南北方向は3.78～3.97m、東西方向は4.0mを測り、平面は正方形を呈する。主軸方位 N-4°W 壁 壁高は39～43cmを測り、全体的には垂直に近く立ちあがり、北壁がやや傾斜する。床 カマドからP1にかけての床面中央部が硬化する。周溝は全周している。床下の掘り方をもたない。ピット P1はいわゆる出入口ピット。直径約10cmの柱痕を検出している。P2・P3（深さ16cm・22cm）は、用途不明である。カマド 北壁中央に構築されている。右袖は幅広く、左袖も本来は同程度の規模と推測する。焚口部は一旦土坑状に大きく掘り込み、それをある程度埋め戻して、一部に貼床を施した状態で使用している。煙道部は先端付近までよく被熱している。覆土 壁際には極暗褐色土が、中層～上層には褐色～暗褐色土が堆積している。3～5層はロームブロックが多く、人為埋没の可能性がある。遺物 ほぼ床面上から、須恵器盤1点（7）が出土している。下層からは高台付環（6）と環（2）が出土している。いずれも壁際から続く初期埋没土中に含まれる。また、カマド左袖脇の覆土中層から土製支脚（11）が出土している。須恵器環類は9世紀前葉頃のもので、5の小型の仏器のようなものもある。8の内黒土師器環はP2覆土中から出土しており、P2は住居よりも新しい遺構の可能性がある。所見 住居跡の廃絶時期は、9世紀前葉頃と考えられる。



第141図 21号住居跡



第142図 21号住居跡カマド・掘り方



第143図 21号住居跡出土遺物

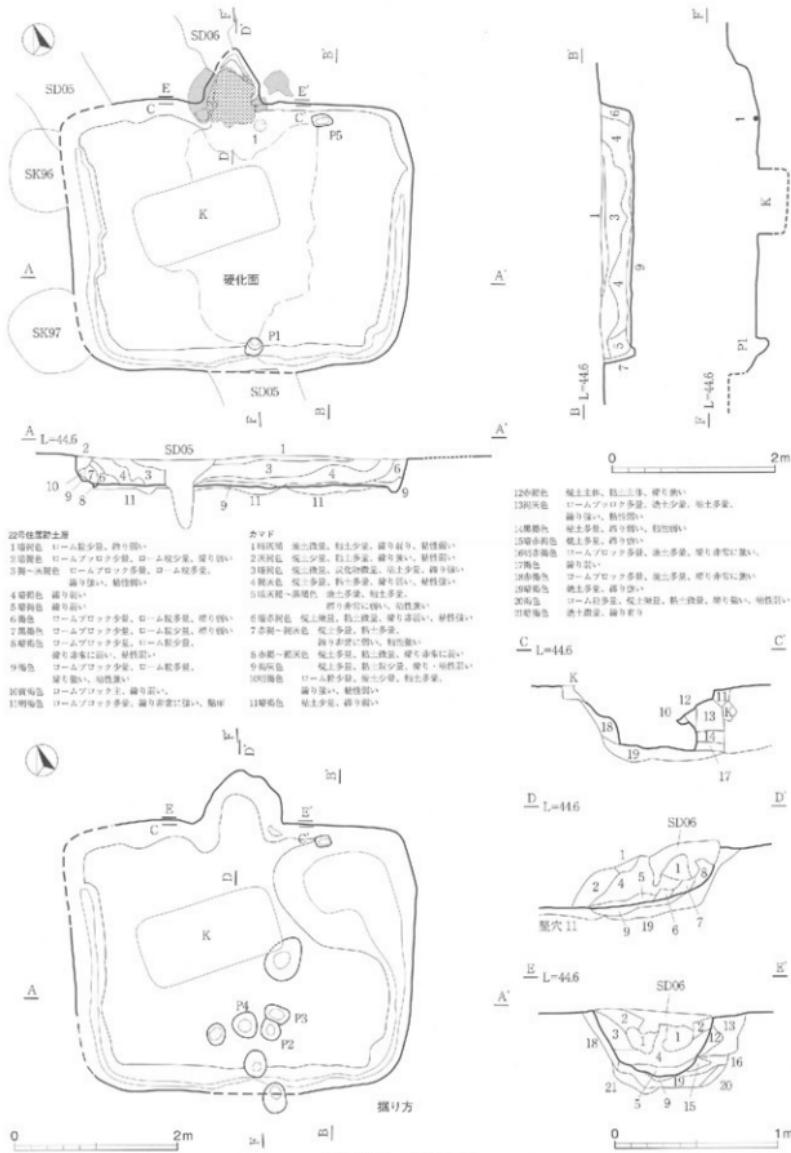
表64 21号住居跡出土遺物観察表

団版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 环	34.1 50 65	底部留板ヘラ切り端し後弱い一方斜へラケズリ。ロクロ右回転か。	長石、石英、チャート、海綿骨針	良好	灰褐色	70%
2	須恵器 环	14.1 55 66	底部開口ヘラ切を施し後斜。ヘラ記号「一」。ロクロ右回転。	長石、石英、チャート、海綿骨針	普通	灰褐色	50%
3	須恵器 环	13.6 45 68	底部留板ヘラ切り端し後オサエ、倒丁板。ロクロ右回転か。	長石、石英	やや不良	青灰色	60%
4	須恵器 环	— (57)	底部ヘラケズリ後ヘラ記号。	石英、角閃石、薄板骨針	不良	にほい褐色	30%
5	須恵器 环	(11.0) 56 (60)	外部は内溝して立ち上がる。底部開口切り端し、無調整。	長石、石英、海綿骨針	普通	暗灰色	60%
6	須恵器 糸附付环	11.9 51 73	底部外側ヘラ記号「井」。	長石、石英、チャート	普通	灰褐色	90%
7	須恵器 环	17.9 38 99	底部外側ヘラ記号「一」。	長石、石英、黑色釉	普通	灰色	90%
8	十絆器 环	(13.8) 43 68	底部外側下部留板ヘラケズリ、底部開口ヘラケズリ。内面黒色施墨、ミガキ。ロクロ右回転。	石英	普通	青褐色	72 50%
9	土師器 甕	(20.0) —	口縁部内外側ヨコナギ。構部外側ナゲ、内面ヘナゲ。	長石、石英、雲母	普通	にほい褐色	
10	須恵器 甕	(20.0) —	口縁部外側平行叩き後ロクロナギ。	長石、石英	良好	灰褐色	
11	土製品 支脚	長17.2cm、径7.6cm、重847g。		長石、石英、鐵砂	普通	褐色	

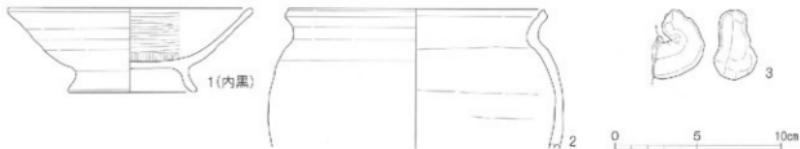
22号住居跡（第144・145図）

位置 A区北端部付近、L 3グリッドに位置する。規模と平面形 南北の主軸方向は3.33m、東西方向は北壁側で4.31m、南壁側で3.95mを測り、平面は横長長方形を呈する。竪穴中央部は搅乱で、竪穴西壁は96・97号土坑に壊され、中世以降の5・6号溝が本住居跡を縦断する。また、本住居跡は弥生時代の30号住居跡を壊している。7号掘立柱建物跡とも重複し、調査時には竪穴覆土中・床面とともに掘立柱穴を確認できなかったため、本住居跡の方が新しいと判断する。主軸方位 N-19°-Eで、およそ北東を指向する。壁 壁高は37cmを測る。全体的には垂直に近く立ちあがり、西壁と北壁西側がやや傾斜する。床 全体に貼床は薄く、北東隅の掘り方がやや深い。カマドからP 1の間が硬化する。周溝は北壁以外にめぐる。ピット P 1は、斜めに穿たれており、出入口ピットと思われる。P 5は深さ10cm程しかなく、用途不明である。P 2~4は掘り方で確認したもので、古い出入口ピットの可能性がある。カマド 北壁中央に構築され、6号溝に一部壊されている。ローム層の地山を掘り残して袖の基部としており、右袖の残りは良くない。煙道部掘り方の外側にも粘土を検出しておらず、搅乱による流失ではなく、粘土検出範囲が煙道天井部の立ち上がり部分の痕跡と推測する。覆土 下層は自然堆積状を呈するが、3層はロームブロックが斑状に多く含まれ、人為堆積の可能性がある。遺物 右袖手前の覆土下層から、ほぼ完形の内黒土師器甕1点が出土している。カマド覆土中からはII縁邊部断面が角形の土師器甕片が出土している。所見 P 2~4を古い出入口ピットと捉えた場合、現況よりも一回り小さい竪穴を想定することができる。掘り方調査時では扯張痕跡は確認できなかった。住居跡の廃絶時期は、10世紀前葉頃と考えられる。

第百章 A区の遺構と遺物



第144図 22号住居跡



第145図 22号住居跡出土遺物

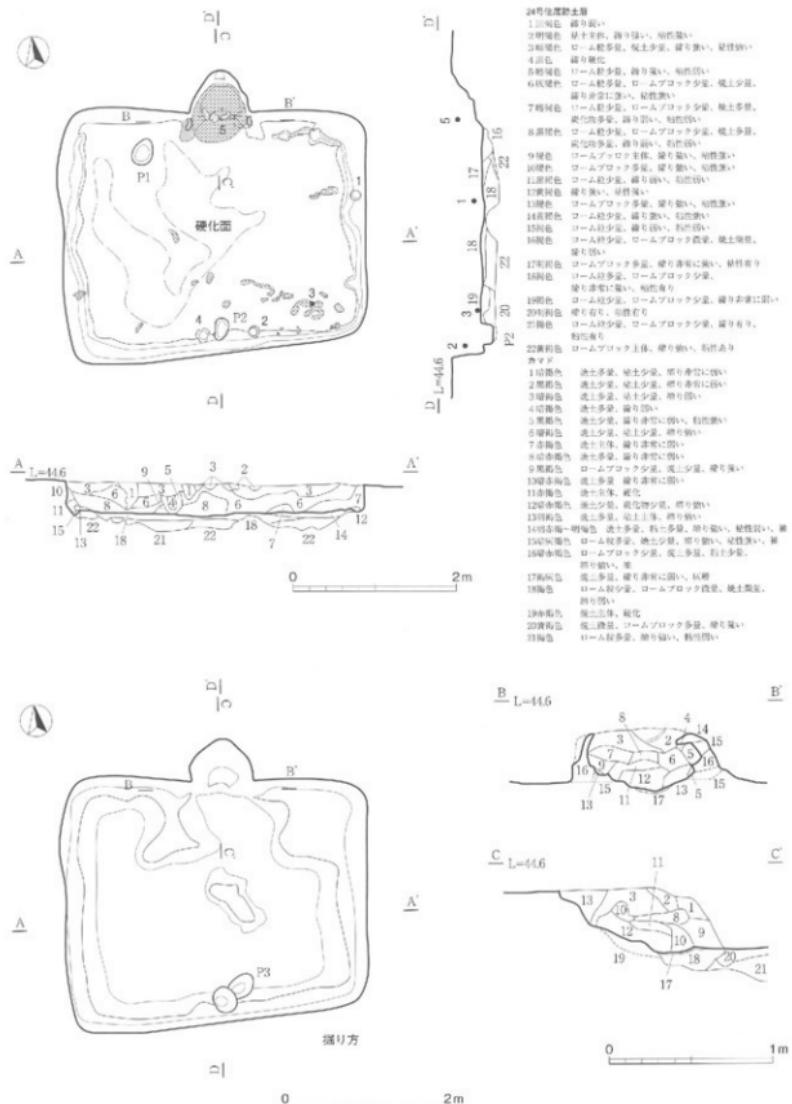
表65 22号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種 別 器 種	口徑 器高 底径	特 徴	胎土	性 度	色 調	備 考
1	土師器 碗	14.8 52 73	内面黒色処理、ミガキ。	長石、チャート、 海綿骨針	不純	にほい橙色	完形
2	土師器 壺	(16.0) — —	口縁部内外面ヨコナギ、崩形外表面ナギ、内面ヘラナギ。	石英	普通	暗褐色	
3	須恵器 瓶	— — —	瓶把手類片。	石英微粒	普通	灰色	

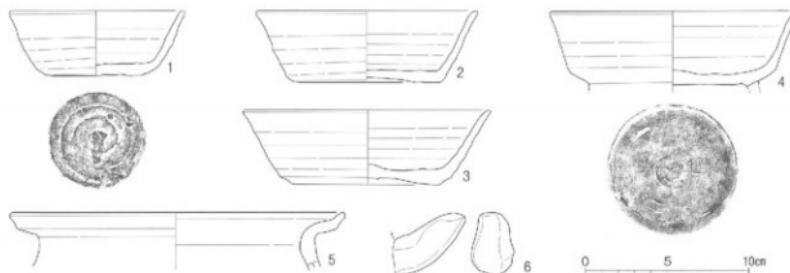
24号住居跡（第146・147図）

位置 A区北端部、L 3～M 3グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は東側 2.85m、西側 3.16m、東西方向は 3.66～3.84 m を測り、平面は横長の長方形でやや台形状を呈する。主軸方位 N - 7° - E で、真北に近い。壁 壁高は 36cm を測り、やや傾斜して立ち上がる。床 中央部は平坦で、四隅がやや低い。主軸線よりも西側が硬化している。周溝は不整形ながら、北壁西側を除き全周する。掘り方は、周溝の内側で明瞭な段差を伴ってやや深く掘り込まれている。これは、古い竪穴の存在と竪穴の更新を示しているものと考えられる。ピット P 1 は深さ 12cm と浅い。P 2 は出入口ピットであろう。P 3 は掘り方で確認しており、古い竪穴に伴う出入口ピットと考えられ、掘り方面からは深さ 14cm を測る。

カマド 北壁中央に構築され、袖は幅狭く、遺存状態は良好ではない。覆土 焼失住居であるため、下層には炭化材と焼土を含み、6 層は焼土・炭化物以外にローム粒・ブロックが目立つことから、人為的埋没の可能性が高い。4・5 層などは、埋没過程で穿たれた柱穴と判断される。遺物 南・東壁際にまとまって出土し、床面からの高さはまちまちながら、1～4 の須恵器はいずれも初期埋没土中に含まれる。炭化材や焼土ブロックも、竪穴南東側にまとまって検出された。カマド覆土上面からは土師器窯（5）が出土している。所見 掘り方の構造や P 3 の存在は、竪穴の更新・拡張の痕跡と判断できる。おそらくは、カマドの位置もわずかに変更されているであろう。旧竪穴の平面形は新竪穴と相似形で、その下端で平面規模を推測すると、主軸方向東側で 2.39m、西側で 2.79m、東西方向で 3.21m となる。基本的には周溝部分のみを拡張しており、床面積の大幅な増加にはつながらない。壁体の腐食とともに壁自体の劣化も進行し、壁体構造全体の改築を行った結果として、竪穴の拡張という現象で現れているものと想像する。住居跡の廃絶時期は、8世紀後葉頃に求められる。



第146図 24号住居跡



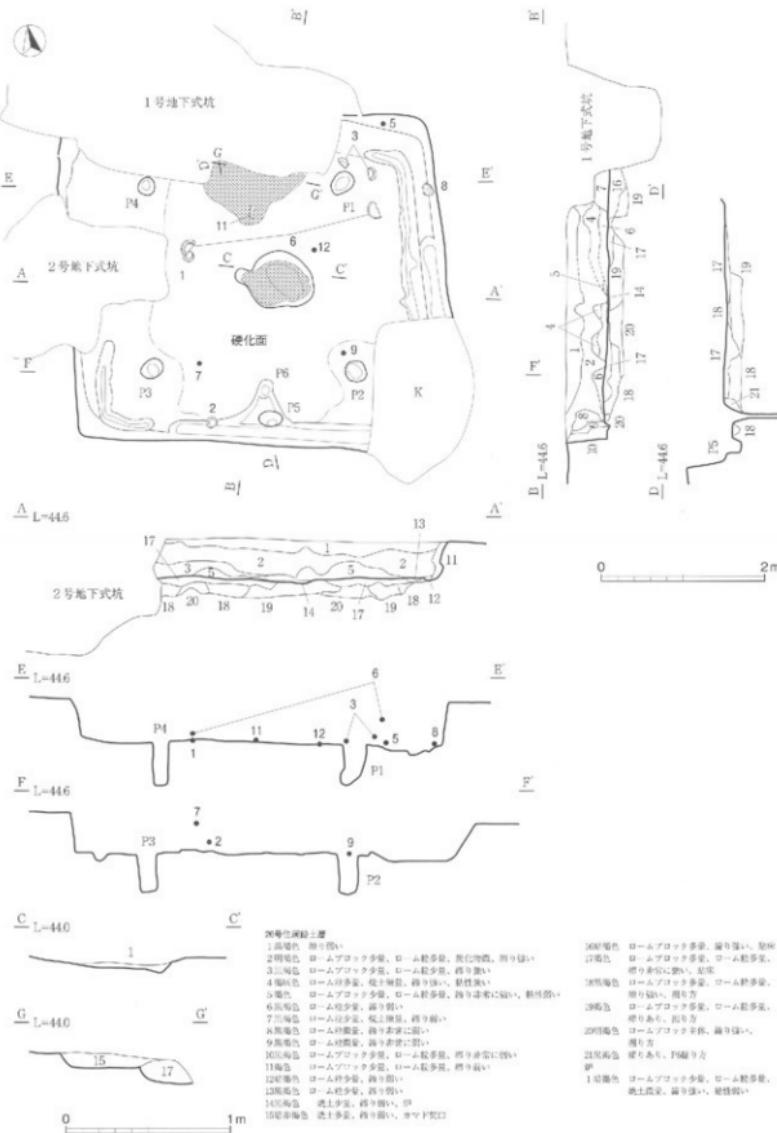
第147図 24号住居跡出土遺物

表66 24号住居跡出土遺物観察表

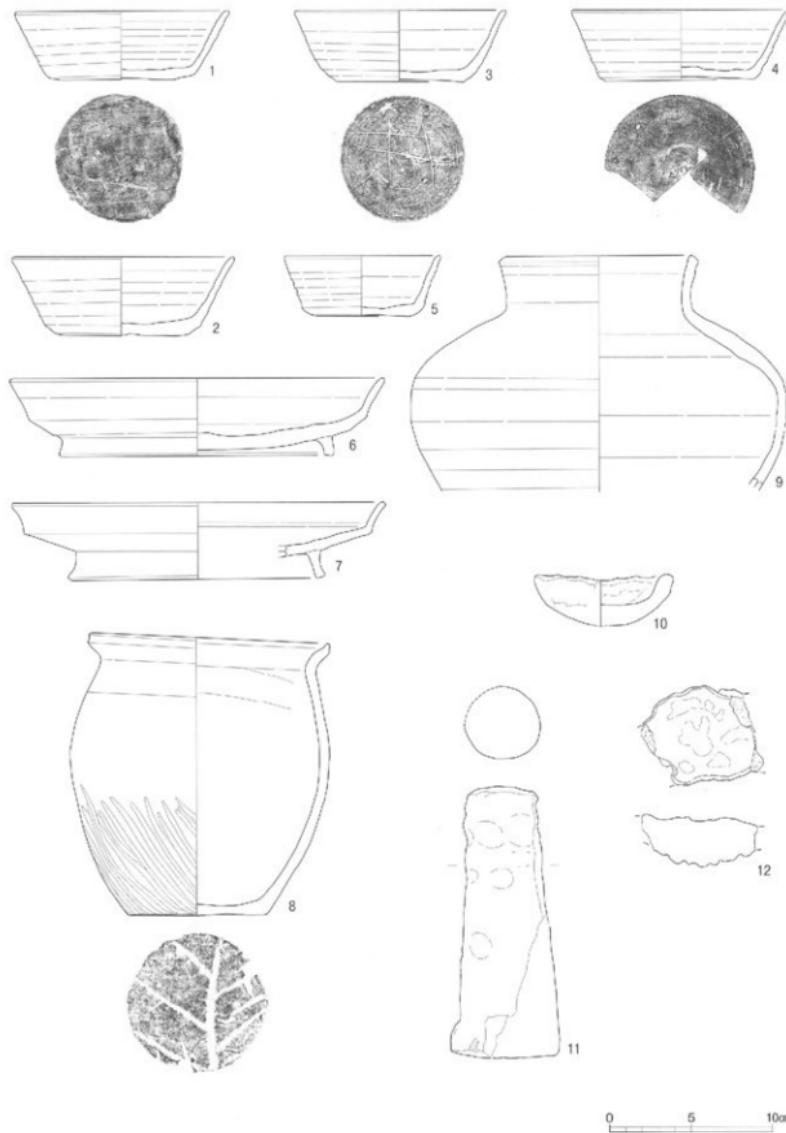
図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 环	10.8 4.0 6.0	底部凹部へラクリ離し、無調整。コクロ右回転。	長石、石英、チヤー ト、海綿骨片	普通	灰褐色	完形
2	須恵器 环	13.6 4.4 9.0	底部凹部切り離し、無調整。	長石繊、無化繊、 黒色小粒（遮光金 具粒）	普通	灰褐色	70%
3	須恵器 环	(15.0) 4.6 (8.8)	底部凹部へラクリ離し後一方角へラケズリ。コクロ右回 転。	長石繊、石英粒	良好	暗灰色	50%
4	須恵器 高台付环	15.3	高台部欠損。底部へラケズリ。コクロ右回転。	長石繊	普通	灰褐色	
5	土師器 盞	(20.5) — —	口沿部内外面ヨコナデ。	長石、石英、雲母	良好	にぶい同色	
6	土師器 盞	— — —	亂肥手。全体に器面摩耗。	長石、石英	不良	にぶい褐色	

26号住居跡（第148・149図）

位置 A区北部、M2～M3グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は東側4.12m、東西方向は4.61mを測り、平面はわずかに横長長方形を呈する。北壁と西壁を1・2号地下式坑によって、南東隅を搅乱によって壊され、大きく失う。主軸方位 N-7°-E 壁 壁高は44cmを測り、やや傾斜して立ち上がる。床 中央部は平坦で硬化し、主柱穴を含む四隅がやや低く軟弱である。周溝には新旧2条あり、内側が古い。南西隅では、新旧の周溝が接続してしまったが、最終使用時には古い周溝は埋め戻されていたであろう。掘り方は全体に深く、カマド前面部は地山のローム層が大きく掘り残されていた。また、古い周溝と合致するような一回り小さい竪穴の痕跡を確認することができた。ピット P1～4を主柱穴、P5を新出入口ピット、P6を旧出入口ピットと考える。主柱穴底面には、硬化した圧痕を明瞭に検出している。カマド・炉 1号地下式坑によって消滅しているが、北壁中央辺りに付設されていたものと推測する。焼土・灰混じりの黒褐色土は、竪穴中央付近まで広く分布する。掘り方調査時に明瞭な焚口範囲を検出した



第148図 26号住居跡



第149図 26号住居跡出土遺物

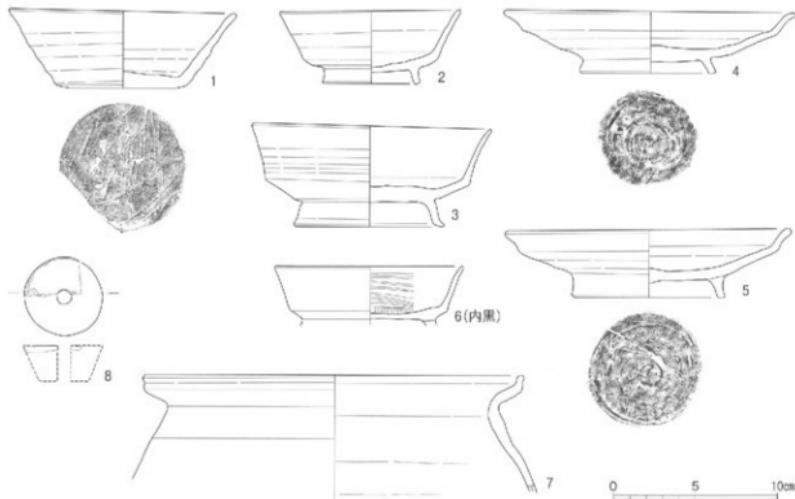
が、これは旧カマドに伴うものと推定する。また、床面中央部には明瞭な被熱部分がある。平面不整格円形で、規模は98cm×73cmを測り、知と判断した。 覆土 覆土中層には、堅穴南竪付近までカマド崩落後の粘土ブロックが点在し、人為的埋没の可能性がある。9・10層については、土壤化した壁体が想定される。 遺物 北東隅付近と、堅穴中央部西側の覆土上層～下層から、まとまって出土している。床面に遺棄されたような遺物は見られない。須恵器坏、盤類、土師器の小形壺は8世紀前半代頃のもの、9の須恵器短頭壺は湖西産の製品かと思われる。 所見 本住居跡は、主柱穴配置を全く変更せずに堅穴を拡張し、カマド・出入口ピットを更新している事例である。IH堅穴の下端平面規模は、主軸方向3.3m、東西方向3.9mと推測され、平面は新堅穴と相似形であろう。住居跡の廃絶時期は、8世紀前半代頃に求められる。

表67 26号住居跡出土遺物観察表

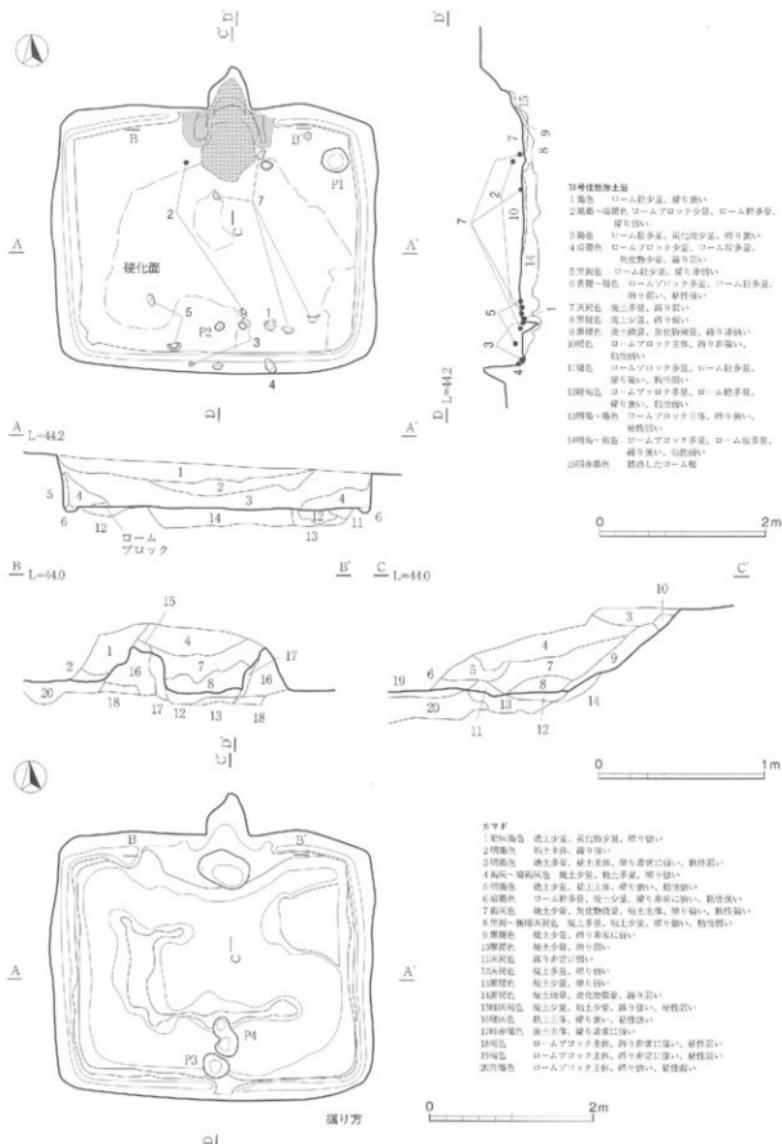
番号	種別 器種	口径 基高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	13.3 4.2 8.8	底部一方面ヘラケズリ、ヘラ記号「+」「-」。	長石、石英	普通	灰褐色	丸形
2	須恵器 坏	13.7 4.9 8.2	底部回転ヘラ切り離し、無調整。	長石、チャート織	普通	明褐色	90%
3	須恵器 坏	13.0 4.6 8.9	底部回転ヘラケズリ、ヘラ記号「井」、ロクロ右回転。内面黒釉、内底面黒色付着物あり。	長石、チャート織	普通	灰色	80%
4	須恵器 坏	(13.4) 4.3 9.5	底部回転ヘラケズリ、ヘラ記号「-」、ロクロ右回転。	長石織、石英混	良好	黑褐色	
5	須恵器 坏	(9.6) 3.7 6.2	底部ヘラ切り後一方面ヘラケズリ、ロクロ右回転。	長石、チャート、海綿骨針	普通	灰色	60%
6	須恵器 盤	23.0 4.8 16.9	底部回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石織、海綿骨針	普通	明褐色	80%
7	須恵器 壺	(23.0) 4.7 (13.6)	壺部回転ヘラケズリ淡青白結り付け。ロクロ右回転。	長石織	良好	灰色	
8	土師器 小形壺	14.5 17.1 8.5	口縁部糊み上げ、腹下半部ミガキ、底部木葉痕。	長石、石英	普通	暗褐色	80%
9	須恵器 加職器	(11.3) — —	口縁部は他方に外接し、肩部には淡緑色の自然が附かる。	灰色・白色角丸織 極少量、底分量少 量、粗良	良好	暗白色	湖西産
10	手握上器	8.5 3.1 —	外面織、内面粗顛。	石英	良好	にぶい褐色	
11	土製品 支撑	長16.6cm、幅4.7cm、厚4.5cm、重298.8g。		長石、石英	普通	明赤褐色	
12	鉄錠	長7.5cm、幅6.0cm、厚3.0cm、重176.0g。					

31号住居跡（第150・151図）

位置 A区北端部、M3グリッドに位置する。 規模と平面形 南北(主軸)方向は東側 3.15m~3.31m、東西方向は 3.88m~3.94m を測り、平面はわずかに横長の長方形を呈する。本住居跡が33号住居跡の北壁を壊している。 主軸方位 N-3°-E 壁 壁高は 45~65cm を測り、やや傾斜して立ち上がる。 床 全体に平坦で、北東隅・北西隅・P2周辺を除き、よく硬化している。中央部には軟弱な部分があり、焼土や被熱痕跡は検出できなかった。周溝は全周する。掘り方はやや深く、周溝の内側で明瞭な段差をもっており、周溝部分のみを拡張しているものと思われる。掘り方中央部はL字状に地山ロームが掘り残されて土手状になる。 ピット P1（深さ 16cm）は貯蔵穴に、P2は新しい出入口ピット（P3は掘り方）に、掘り方で確認したP4は古い段階の出入口ピットに該当する。P2で截ち割り調査を実施したところ、直径5~13cmの先細り柱状痕を検出した。 カマド 北壁中央やや東寄りに構築され、燃焼部の被熱が著しい。西袖は遺存状態が比較的良好である。掘り方では、ローム層を掘り残して両袖の基部としていた。 覆土 黒褐色上~黒褐色土による自然堆積状を呈する。西壁周溝上の5層は黒褐色に土壤化した體の痕跡の可能性がある。 遺物 南壁直下および周辺の4層中から、8世紀後葉~9世紀前葉頃の須恵器坏・盤や土師器窓、土師器内黒高台付坏などがまとめて出土している。堅穴埋没初期に一括投棄されたような出土状態と見られる。2の高台付坏と7の土師器の窓の接合関係が類似する点も注意される。 所見 堅穴と出入口ピットの造り替えは明瞭であったが、カマドの位置はほとんど変更していないようである。古い段階の堅穴の下端平面規模は、主軸方向 2.51~2.72m、東西方向 3.9m で、平面形は新しい段階の堅穴と相似形である。24号住居跡と同様、ほぼ周溝部分のみを拡張している。住居跡の発掘時期は、9世紀前葉頃と考えられる。



第150図 31号住居跡出土遺物



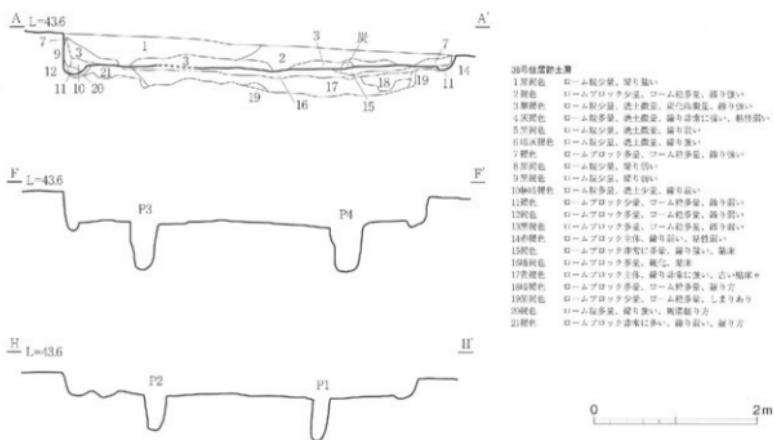
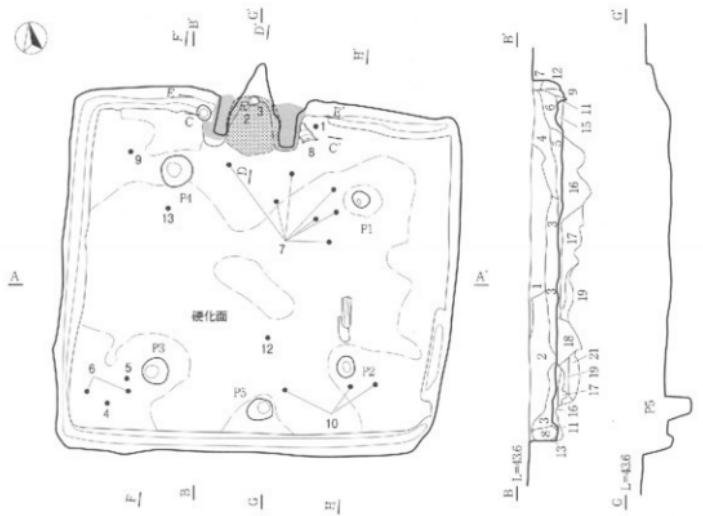
第151図 31号住居跡

表 68 31号住居跡出土遺物観察表

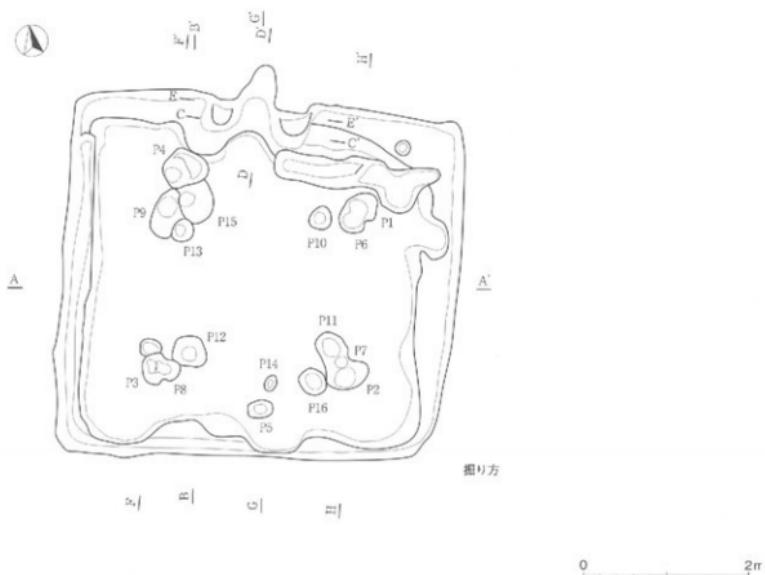
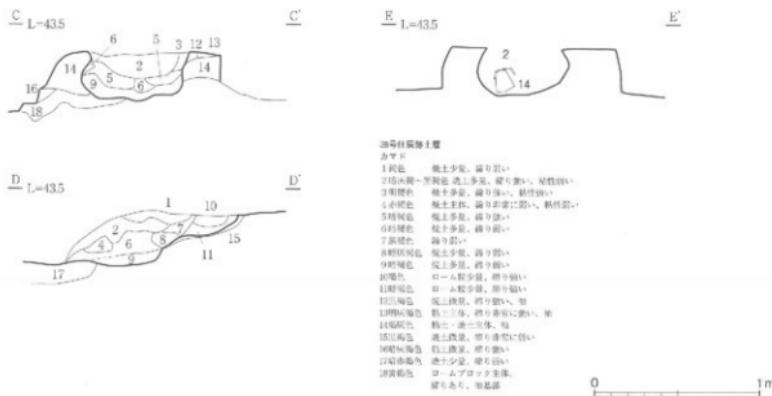
国版 番号	種別 器種	口径 底高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 环	139 49 80	底部一方にハラケズリ。ハラ記号「+」。クロロ右肩軸。	長石輝、墨色粒、良好 灰角質片層	陶黄色	60%	
2	須恵器 高台付环	111 46 90	底部周縁へハラケズリ、高台貼り付け。	長石輝、石英、薄 緑青釉	良好	灰色	80%
3	須恵器 高台付环	146 64 93	底部周縁へハラケズリ、高台貼り付け。ロクロ右肩軸。	長石輝、薄緑青釉	普通	暗灰褐色	60%
4	須恵器 小型盤	178 49 83	底部周縁へハラケズリ、高台貼り付け。ハラ記号。	長石輝、薄緑青釉	やや不良	灰色	
5	須恵器 小型盤	174 42 92	底部周縁へハラケズリ、高台貼り付け。ハラ記号「二」。	長石輝、薄緑青釉	不良	灰褐色	ほぼ完形
6	土器器 高台付环	(115) — —	内面黑色然焼、ミガキ。	長石、石英微粒	良好	褐色、黑色(内面)	
7	土器器 蓋	233	口縁部内外面ヨコナデ。腹部外側ナデ、内面へラナデ。	長石、石英	良好	にぶい褐色	
8	石製器 劫鉢	伴(48)cm、厚-0.8cm、重3.87g、斜板岩基。					

38号住居跡（第152～155図）

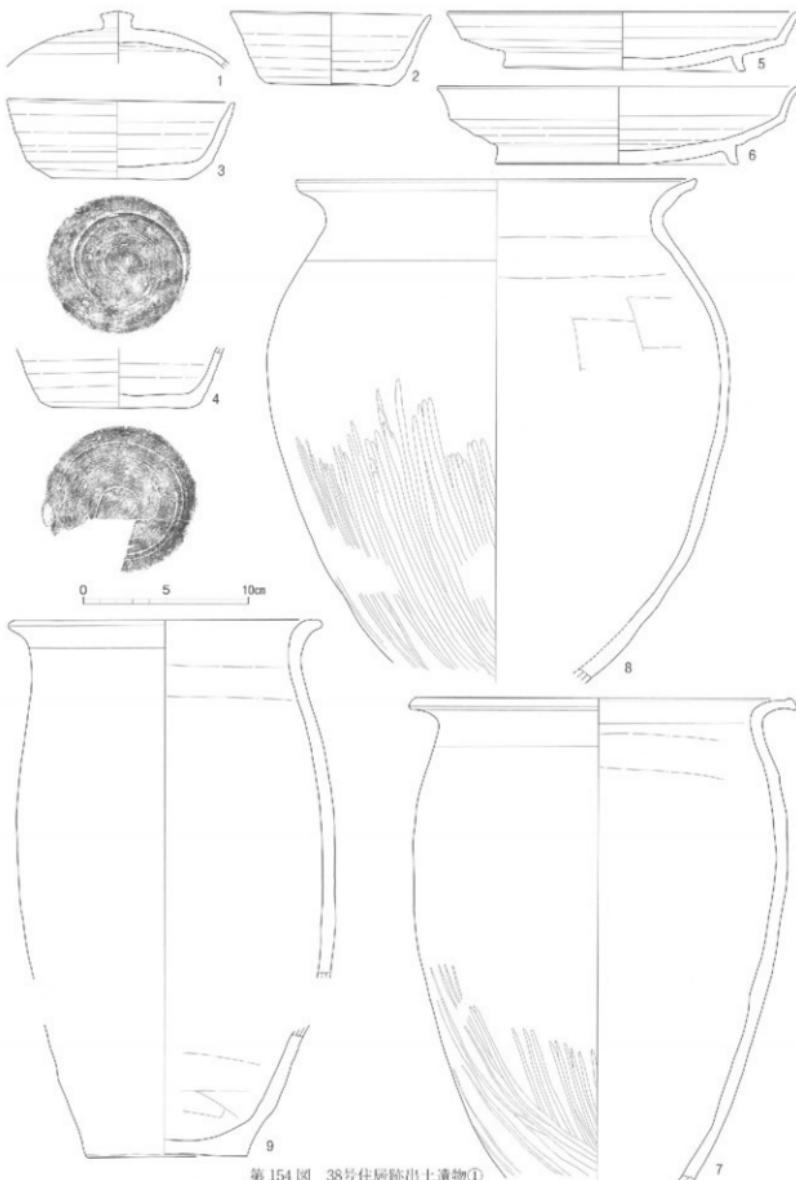
位置 A区北部調査区段、M4～N4グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向は4.34m～4.51m、東西方向は4.67m～4.86mを測り、平面形は隅丸正方形に近い。主軸方位 N-12°-E 肩高は14～38cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床 やや凹凸があり、壁際やカマド前面、柱穴の周りを除いて硬化している。中央部に床面が軟弱な部分がある。中央部の床面は貼り直されており、5～10cm程度の嵩上げを行っているようである。掘り方は全体にやや深く、一回り小さい古い堅穴を確認した。ピット P 1～4が最新主柱穴、P 6～9・15(深さ30～50cm)が新主柱穴、P10～13(深さ25～40cm)が旧主柱穴、P 5・14が新・旧出入口ピットと考えられる。柱穴配置は、(1期) P10～13とP14 → (2期) P 6～9・15とP 5 → (3期) P 1～4とP 5 という変遷を想定した。2期から3期へは連続的な拡張・更新であろう。P 1・2は軟弱な柱痕部分のみを掘り上げた。P 3・4は直径24～25cmの柱痕を断面で観察した。古い主柱穴はロームブロックを多量に含む土で埋め戻されている。カマド 北壁中央やや西寄りに構築されている。両袖はアーチ状に湾曲し、残存状態は比較的良好である。火床面の北西奥側で土製支脚が立位状態のまま出土し、支脚の上には2の須恵器環が逆位で被せられていた。环と支脚は粘土を貼り付けて固定されていたようで、支脚の周りは赤化した粘土が覆っていた。ローム層の地山を掘り残してカマド両袖の基部としている。旧堅穴に伴うカマド自体は残存しないが、掘り残しの両袖基部を確認している。覆土 1層と2層は調査前の覆土上面において明瞭に分離できた。3～5層は焼土・炭化物および灰化材が含まれ、上層焼失後の人為埋没の可能性がある。遺物 8世紀前葉から中葉頃の須恵器の蓋・环・盤類と土器器皿等が多数出土している。大半は覆土1～3層に含まれ、カマドを除き、住居廃絶時に遭棄された遺物は認められない。所見 住居跡の廃絶時期は、8世紀中葉頃に求められる。本住居跡は、堅穴と柱穴配置の拡張・更新が明瞭である。新・旧堅穴は、3期と2期の柱穴配置に対応する。旧堅穴の下端平面規模は南北3.9m×東西4.2mである。主軸方位と平面形は新堅穴と同様であろう。1期の堅穴は不明ながら、一辺3.5m程度で主軸はほぼ南北方向と想定する。



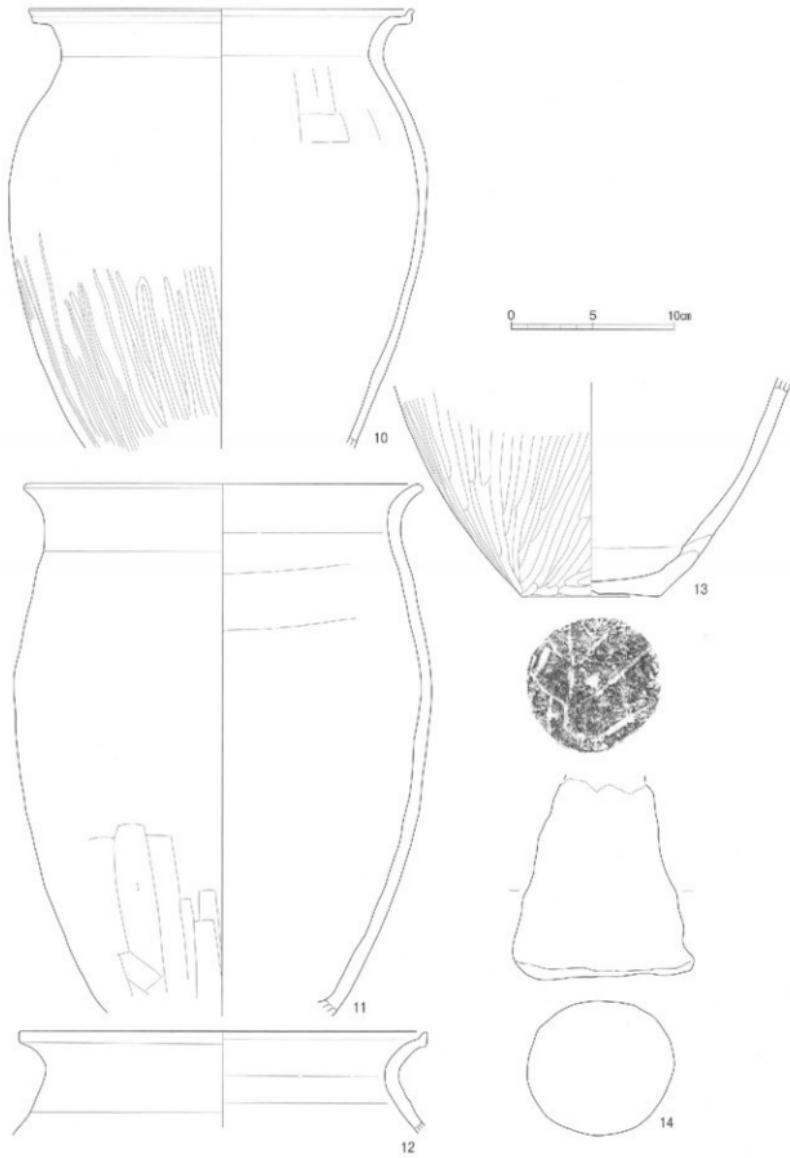
第152図 38号住居跡



第153図 38号住居跡カマド・掘り方



第154図 38号住居跡出土遺物①



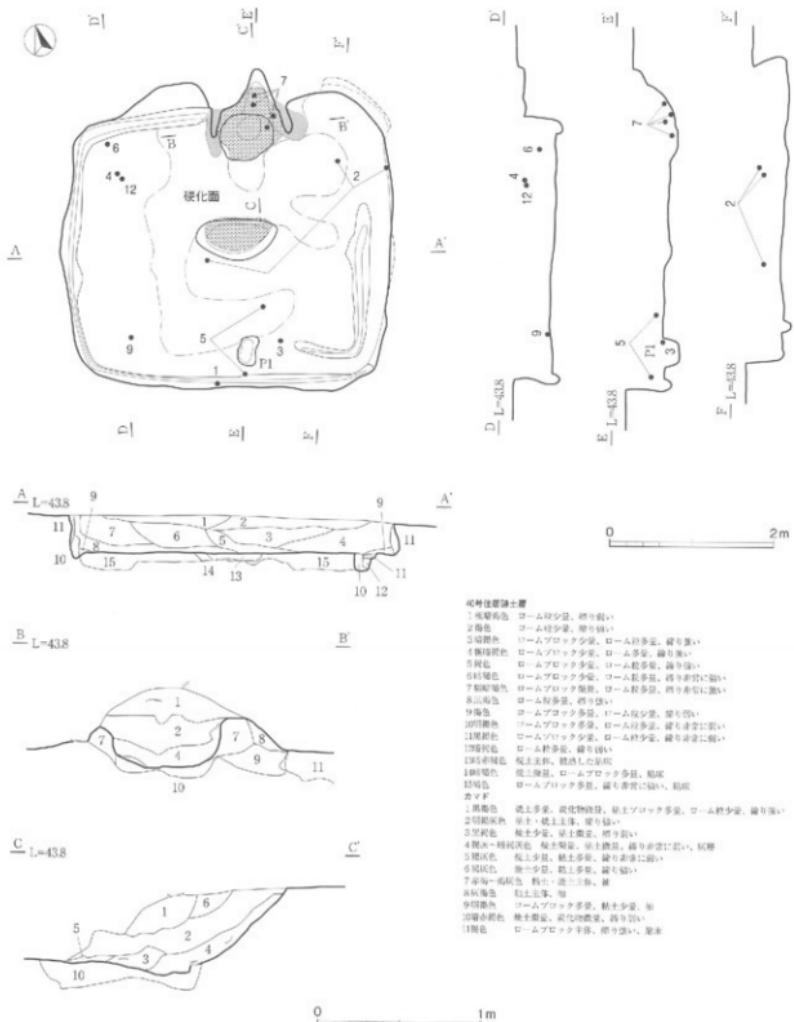
第155図 38号住居跡出土遺物②

表69 38号住居跡出土遺物観察表

団版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1 須恵器 蓋	-	-	天井部内側ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石、石英、チャート、海綿骨針	不良	にぶい褐色	
2 灰窓器 环	12.3 4.6 7.6		体部下端内側ヘラケズリ、底部丁寧な縫合ヘラケズリ。 ロクロ右回転。	長石、細少量、チャート、海綿骨針	やや不良	灰白色 灰	完形
3 須恵器 灰	(21.9) 4.9 8.2		体部下端内側ヘラケズリ、底部ヘラ切後四輪ヘラケズリ。 ロクロ右回転。	チャート(角丸)、長石、石英、海綿骨針	不良	灰白色	60%
4 須恵器 环	- 8.4		底部やや造り粗な縫合ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石、チャート、普通 海綿骨針	普通	灰褐色	
5 須恵器 蓋	(21.4) 3.6 15.2		内底面に深9cmの自然剥の疊からない重ね焼き底。	長石、石英、黑色 粘	良好	墨灰色	50%
6 須恵器 盤	(21.9) 4.8 14.9		陶化端の生焼け製品で、當場からの発見時の利用か。	長石、チャート	不良	黄褐色	40%
7 土師器 蓋	- 23.4		口縁部僅かに剥み上げ、脚下部無ミガキ。	長石、石英	普通	浅黄褐色	
8 土師器 盤	(24.3) -		口縁部僅かに剥み上げ、脚下部無ミガキ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	
9 土師器 蓋	(18.6) (33.0) 9.8		口縁部内外面ヨコナダ。頂上半部外側ナダ、内側ヘラナダ。	長石、石英	普通	灰褐色	
10 土師器 蓋	(23.5) -		口縁部内外面ヨコナダ。頂上半部外側ナダ、下半部ミガキ、内面ヘラナダ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	
11 土師器 蓋	(24.5) -		口縁部内外面ヨコナダ。頂上半部外側ナダ、下半部ヘラ ケズリ、内面下半部ヘラナダ、下半部ナダ。	長石、石英	不良	にぶい黄褐色	
12 土師器 蓋	(24.9) -		口縁部内外面ヨコナダ。	石英	良好	にぶい褐色	
13 土師器 蓋	- 8.5		頂下部無ミガキ、底部木葉灰。	長石、石英、青母	普通	灰褐色	
14 土製品 文机	長 [125] cm、幅90cm、厚8.3cm、重900g。			長石、石英	普通	褐色	

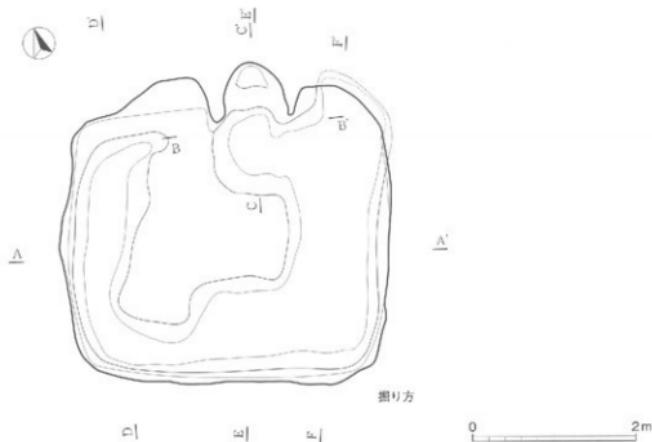
40号住居跡（第156~158図）

位置 A区北壁部付近、M 4 グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は東側 3.66m、西側 3.43m (3.72m)、東西方向は 4.00m を測る。北壁ラインは整わないが、基本形状は横向きの隅丸台形あるいは隅丸長方形であろう。主軸方位 N - 28° - E 壁 壁高は 40 ~ 46cm を測り、全体的にはほぼ垂直に立ち上がる。北壁東側は大きく抉れている。床 やや凹凸があり、炉の周りを除いた豊穴中央部が硬化する。北壁西側から南壁にかけて周溝がめぐる。また、東壁側には古い周溝を確認した。掘り方では、現況の豊穴よりも一回り小さい豊穴が認められた。古い周溝と合致するため、豊穴の拡張・更新と判断できる。ピット P 1 (深さ 21cm) を出入口ピットと推測する。カマド・炉 北壁中央やや東寄りに構築され、被熱は著しい。両袖にはオーバーハンプする部分がある。右袖中央部には、補強材の土師器蓋が逆位の状態で埋め込まれ、一部は内壁に露出している。掘り方面では、ローム層を掘り残した両袖の基部を確認している。床面中央部には強く被熱した炉があり、15cm 程度掘りこまれる。覆土 全体にローム粒が多いが、褐色



第156図 40号住居跡

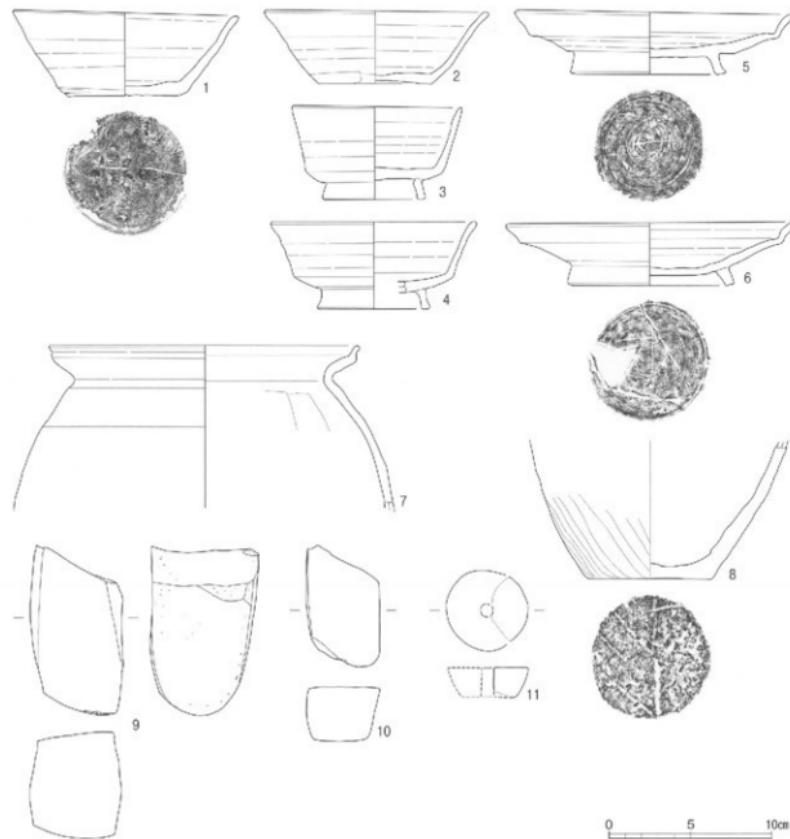
土～黒褐色土による自然堆積状を呈する。10・11層は土壤化した壁体の痕跡と思われる。西側の北壁直下では、豊穴壁が崩落して堆積したローム層と土壤化した壁体の痕跡（層厚7cmの11層が周溝際で垂直に堆積）を検出している。遺物 南壁上端際と南壁付近の床面上から、ともにはば完形の須恵器壺・盤（1・5）が出土している。カマド覆土中からも土器器壺の大型破片（7）が出土している。須恵器の壺、高台付壺、整、土器器の甕は9世紀前葉～中葉頃の遺物である。所見 豊穴と周溝を拡張・更新した事例である。24・31号住居跡等と同様、ほぼ周溝部分のみを拡張している。カマドや炉は、わずかに北側へ移設されたものと推察する。旧豊穴の下端平面規模は、主軸方向2.95m、東西方向3.6mと推測され、平面は現況の新豊穴と相似形であろう。住居跡の廃絶時期は、9世紀中葉頃に求められる。



第157図 40号住居跡掘り方

表70 40号住居跡出土遺物観察表

遺構 番号	種類 別種	口徑 器高 直徑	特徴	胎土	板模	色調	備考
1	須恵器 壺	15.9 5.3 7.3	底部縁修理いテテ、中央オサエ。体部下端にヘラ切りの ヘラ先端。コクロ右側面。底部外側ヘラ記号「—」。	長石 磬 多量、 チャート角丸型少量	普通	灰褐色	90%
2	須恵器 盤	13.8 4.6 6.9	体部下端手持ちヘラケズリ。底部四輪ヘラ切り後一方面 ヘラケズリ。	長石、石英、海綿 骨針	やや不 規則	灰褐色	70%
3	須恵器 高台付壺	(10.6) 5.8 (6.1)	蓋台脚欠損。底部泥板ヘラケズリ後裏台貼り付け。	長石、薄綿骨針	普通	暗灰色	床面直上



第158図 40号住居跡出土遺物

図版 番号	種 別 器 種	口様 器高 直徑	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
4	須恵器 高台付环	(12.5) 5.4 (7.0)	底部削輪ヘラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石輝、黒色粒	良好	灰褐色	
5	須恵器 盤	17.1 4.0 9.4	底部削輪ヘラケズリ後高台貼り付け。ヘラ記号「一」。燒 き歪み大。	長石輝、黒色粒	良好	灰褐色	内面裏ね焼き直 径9.5cm
6	須恵器 盤	17.8 3.8 10.3	底部削輪ヘラケズリ後高台貼り付け。ヘラ記号「エ」。	長石輝	不良	に赤い橙色	60%

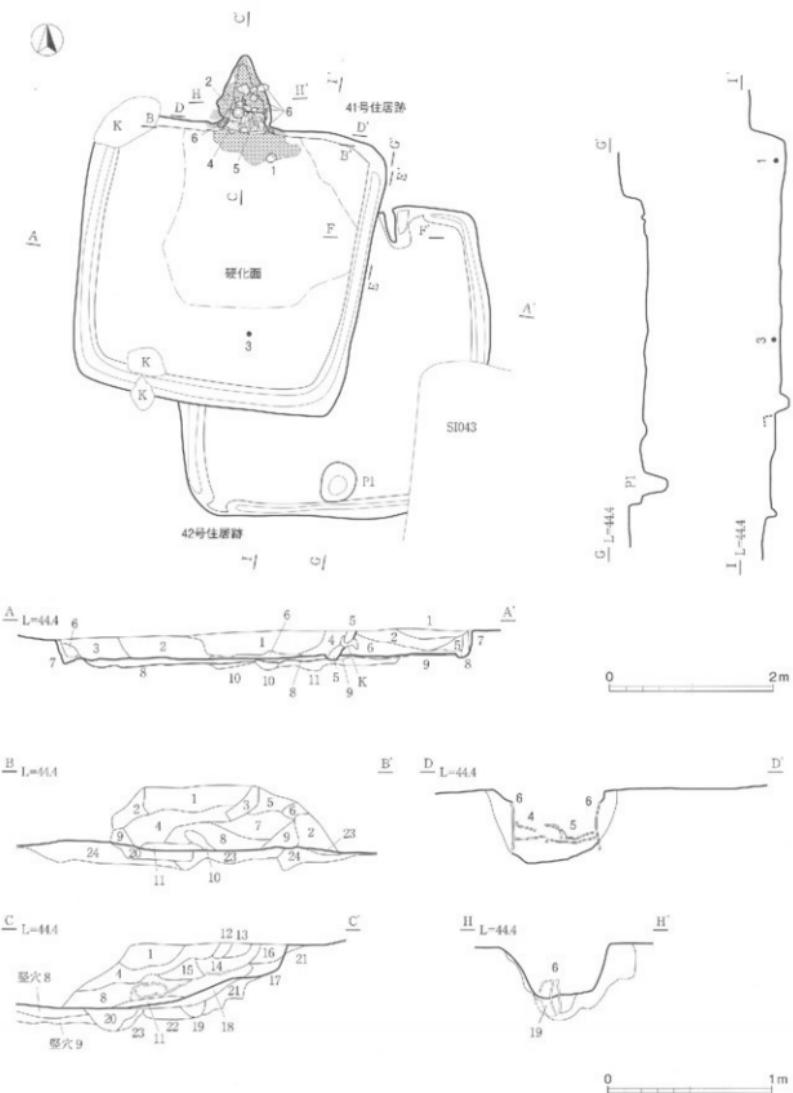
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
7	土師器 甕	19.1 —	口縁部内外面ココナラ。胴部外両ナラ、内面ヘラナラ。	灰石、石英	普通	にぶい褐色	
8	土師器 甕	— 7.7	削下半部外側ミガキ。底部木裏済。	石英、磨片	普通	褐色	
9	石製品 礫石	長10.2cm、幅5.6cm、厚4.4cm、重610g、安山岩製。					
10	石製品 礫石	長6.1cm、幅1.3cm、厚3.3cm、重1424g、輝灰岩製。					
11	土製品 筋跡草	径(4.0)cm、厚1.8cm、孔径(0.8)cm、重1453g。					

41号住居跡（第159～161図）

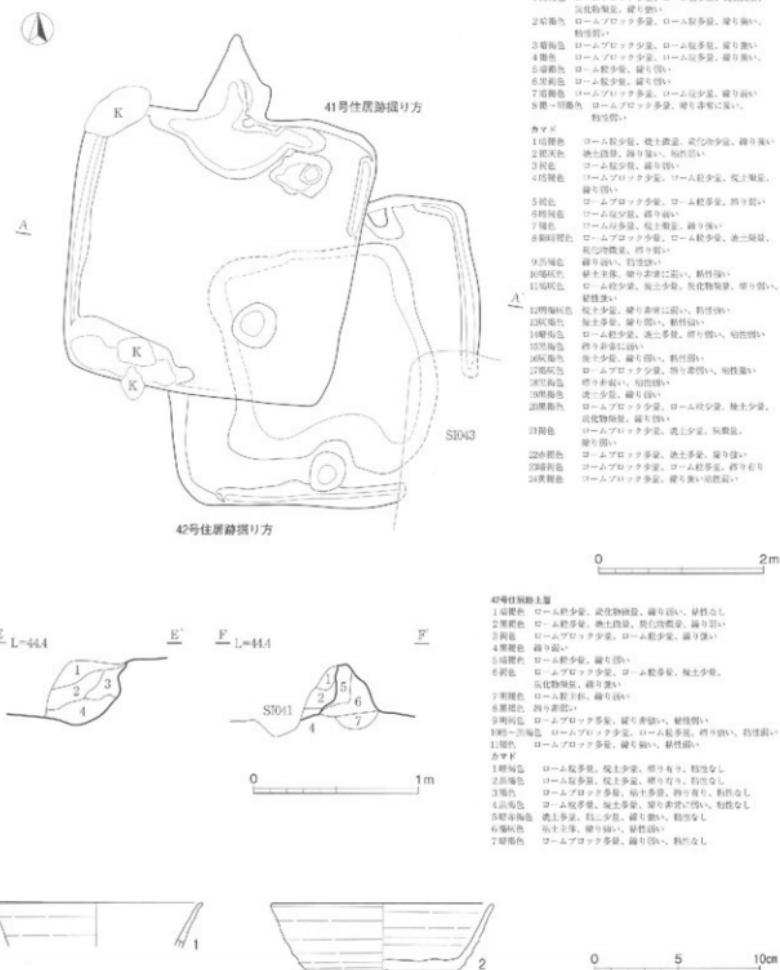
位置 A区北西端部、K 3グリッドに位置する。 規模と平面形 南北（主軸）方向は3.39m～3.53m、東西方向は3.36m～3.57mを測り、平面は正方形を呈する。42号住居跡の北西部を壊している。 主軸方位 N=9°-E 壁 壁高は25～40cmを測り、やや傾斜する。 床 全体に平坦だが、中央部がわずかに隆む。カマドから床面中央部にかけてよく硬化している。北壁以外は周溝がめぐる。掘り方は、カマド前面が土坑状に掘り込まれており、その他は全体に浅い。 ピット - カマド 北壁中央に構築され、袖は極めて短い。須恵器甕（6）を縦長破片に分割し、両袖前面に補強材として一枚ずつ貼り付け、燃焼部中央には2枚を立位埋設して支脚している。支脚上面には土師器甕の底部を被せている。また焚口部からは、天井補強材として両袖上に架かっていた土師器甕2個体（4・5）が、入れ子状に合わされた状態のまま落下していた。覆土 全体にローム粒が多いが、褐色土～黒褐色土による自然堆積状を呈している。 遺物 懸架材となっていた土師器甕の上には完形の須恵器坏（2）が置かれていた。天井部の落下・崩壊直後に遺棄されたものと考えられる。煙道部からは、袖補強材などと同一個体の須恵器破片が出土している。カマド前面の竪穴覆土下層からは1の須恵器坏が出土している。 所見 カマド袖の補強材や支脚に、分割した須恵器甕を再利用している状況は、19号住居跡（10世紀前葉）の構造と非常に似ている。棚状施設は確認できなかったが、支脚の位置や粘土分布範囲から類推すれば、竪穴北壁の外側にも屋内空間が存在したものと思われる。住居跡の廃絶時期は、出土遺物から見て9世紀後葉頃と考えられる。

42号住居跡（第159・160図）

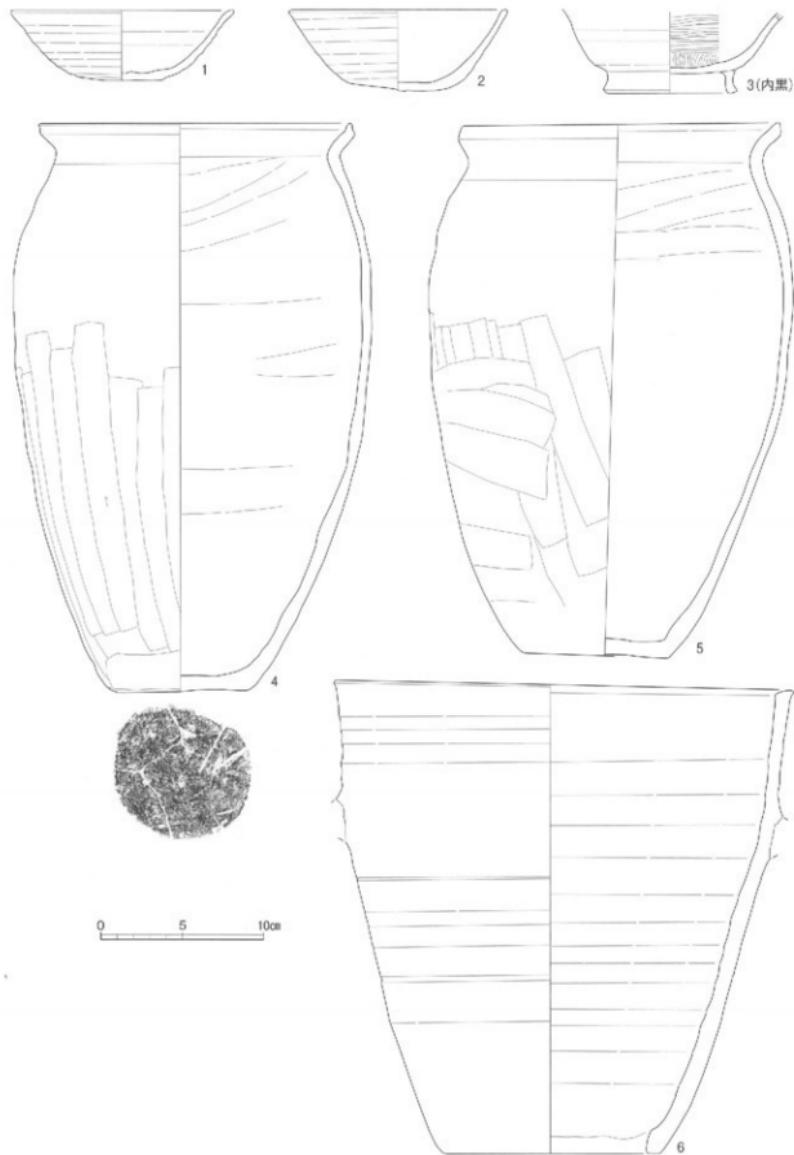
位置 A区北西端、K 3～E 4グリッドに位置する。 規模と平面形 南北（主軸）方向は3.82m、東西方向は3.86mを測り、平面は不整隅丸正方形と推測する。41・43号住居跡によって、大部分を壊されている。 主軸方位 N=3°-W 壁 壁高は7～27cmを測り、わずかに傾斜する。 床 全体に平坦で、南西隅以外はよく硬化する。残存範囲内は周溝が全周する。掘り方は、竪穴中央部が方形状に深く掘り込まれている。 ピット 1箇所。P Iは出入口ピットであろう。 カマド 右袖しか残存していない。北壁中央やや東寄りに構築され、カマド内面の被熱は弱い。 覆土 3・6層はしまりが強く、ロームブロック・ローム粒も目立ち、人為埋没の可能性がある。8層は土壤化した壁体と推測する。 遺物 覆土中から須恵器坏など少量の遺物が出土している。 所見 住居跡の廃絶時期は、出土遺物から見て、8世紀後葉頃と考えられる。



第159図 41・42号住居跡



第160図 41・42号住居跡、42号住居跡出土遺物



第161図 41号住居跡出土遺物

表71 41号住居跡出土遺物観察表

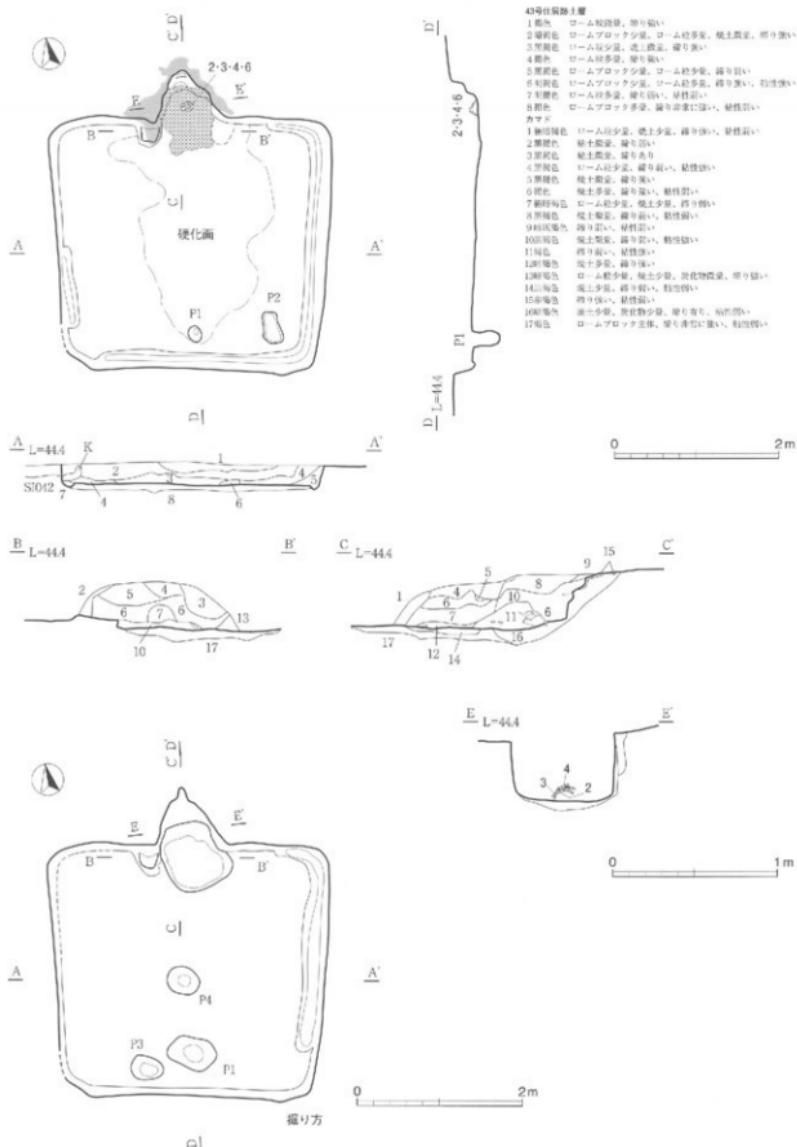
団版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 壺	(135) 44 53	底部回転ヘタ切り洗一方向ヘラケズリ・オサエ。クロロ右回転。	石英、海綿骨針	不良	浅黄褐色	60%
2	須恵器 壺	13.4 5.0 6.0	底部切削ヘタ切り離し後傾いヘラナギ。	石英、海綿骨針	不良	にぶい褐色	完形 カマド
3	土師器 高台付壺	- 8.2	底部四転ヘタケズリ後高台貼り付け。内面黒色処理。ミガキ。クロロ右回転。	長石、石英	普通	灰褐色	
4	土師器 壺	19.0 35.0 8.7	口縁部内外面ヨコナギ。胴上半部外腹ナギ、下半部綻方のヘラケズリ、内面ヘラナギ。	バミス粒・繩多量	普通	にぶい褐色	90% カマド
5	土師器 壺	19.2 32.8 8.8	口縁部内外面ヨコナギ。胴上半部外腹ナギ、下半部綻方のヘラケズリ、内面ヘラナギ。底部オサエ。	バミス粒・繩多量	普通	にぶい褐色	90% カマド
6	須恵器 壺	28.1 28.7 13.1	全体内外面ヨコナギ、底部2孔式。	長石、海綿骨針	不良	灰白色	カマド

表72 42号住居跡出土遺物観察表

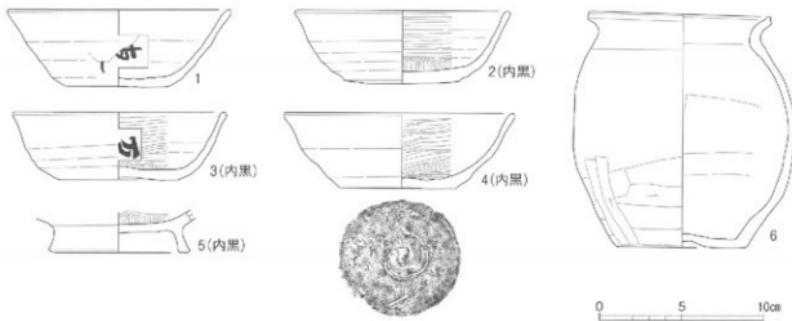
団版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 壺	(13.0) -	口縁部分。クロロ月弱い。断面内面癹化筋、表面元筋。クロロ右回転。	白色微粒、海綿骨針微量	普通	灰褐色	
2	須恵器 壺	13.6 4.2 9.0	底部回転ヘタ切り離し洗一方向ヘラケズリ。底部外側メリハリのあるクロロ目、内面のクロロ目は弱い。	石英、微砂粒、海綿骨針	普通	褐色	酸化鉄微粒 50%

43号住居跡（第162・163図）

位置 A区北端部付近、K 3～K 4グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は3.14m、東西方向は北側3.44m、南側3.10mを測り、平面は逆台形に近い方形を呈する。42号住居跡の南東部を壊している。主軸方位 N-10°-E 設 壁高は25cmを測り、わずかに傾斜する。床 全体に平坦で、カマドからP 1にかけて帯状に硬化する。周溝は、北西隅を除いて廻っている。掘り方は全体に浅い。ピット P 1が出口ピット。P 2は深さ5cmと浅い。P 3・4（深さ28cm・15cm）は掘り方で確認したが、用途不明である。カマド 北壁中央に構築され、左袖の基部のみ残存する。燃焼部中央では、土師器壺・須恵器壺や土師器壺底部など計5点を逆位に積み重ねることで支脚としており、17号住居跡のカマド支脚と似ている。順序は下から2→3→4→6の底部となる。カマドの掘り方の外側にも薄い粘土の貼りつきを検出している。覆土 全体に自然堆積であるが、4層はローム粒が多く、人為的埋没や周堤の崩れた土が堆積した可能性がある。遺物 P 2からは土師器壺の破片が出土している。カマド覆土中から焚口部周辺の床面直上にかけて、6の土師器壺の破片が散乱して出土した。本来は、この壺自体が支脚や補強材として使用されていたのであろう。カマド支脚に使われている土師器壺内黒壺や土師器小型壺は9世紀後葉頃のものである。所見 住居跡の廃絶時期は、9世紀後葉頃と考えられる。支脚の位置と粘土分布の広がりは、豊穴北壁外側にも屋内空間が存在していたことを示唆している。



第162図 43号住居跡



第163図 43号住居跡出土遺物

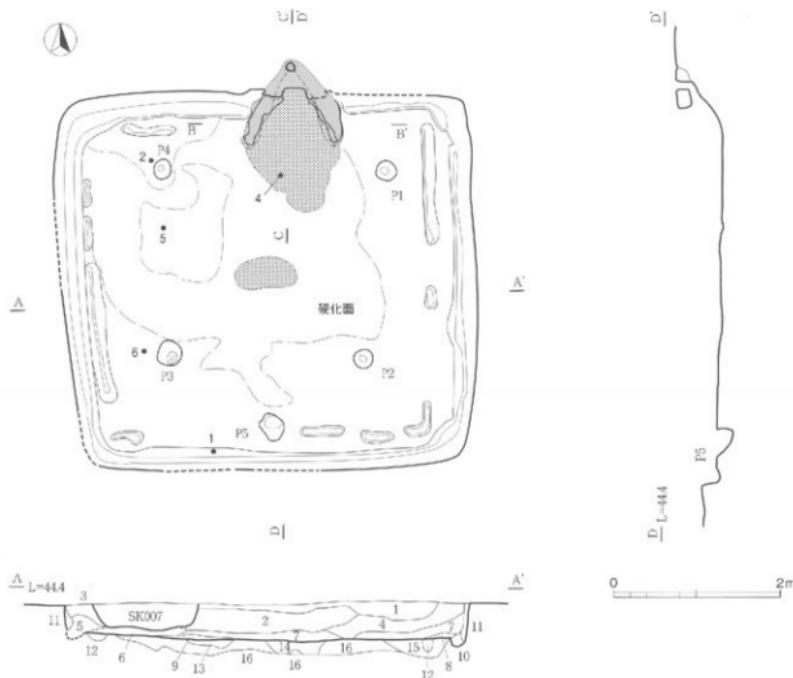
表73 43号住居跡出土遺物観察表

団版番号	種類	口径 器高 底径	特徴	地土	焼成	色調	備考
1	須恵器 环	(13.5) 47 57	底部凹部へテ切り離し、無開窓、コクロ右回転。体部側面墨書文字「匁」。	長石、石英	不良	灰白色	50%
2	土師器 环	12.8 46 71	底部凹部へテ切り離し、後ヘラナデ。体部外面クロナメ。内面墨書き。内面黑色處理。	石英、鐵鉄	良好	にぶい褐色	完形 カマド
3	土師器 环	13.0 42 7.1	底部凹部へテ切り離し、無開窓。体部外型クロナメ。内面墨書き。内面黑色處理。底部墨書き墨書き「匁万？」。	石英、長石、角閃石	良好	にぶい褐色	完形 カマド
4	土師器 环	(13.0) 46 70	底部凹部へテ切り離し、無開窓。内面墨書き。放射状墨書き。内面黑色處理。	長石、石英	良好	にぶい褐色	50% カマド
5	土師器 高台付环	— 84	底部凹部へテ切メジリ、コクロ右回転。底部2方向へラケズリ。内面黑色處理・ミガキ。	長石、石英、角閃石	良好	にぶい褐色	
6	土師器 小盤	(11.0) (14.2) 79	口縁部分に積み上げる。腰上部ナデ、下部ナコ。内面墨書き。ナコ部分ヘラケズリ後、複方向ヘラケズリ。底部外側ナデ處理で中央部が強む。	長石、石英、角閃石	普通	にぶい褐色	30% カマド

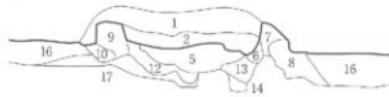
46号住居跡（第164~166図）

位置 A区北部、K 4 ~ L 4 グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は4.5m、東西方向は4.88mを測り、平面形はわずかに横長の長方形である。時期不明の6 ~ 8・10・38・40号土坑に切られる。主軸方位 真北を指す。壁 35 ~ 43cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床 やや凹凸があり、床面中央部と北西側が硬化する。周溝は内外2条めぐり、内側が古い。壁際の新周溝は全周し、旧周溝は断続的である。掘り方は全体的にやや深く、旧周溝と合致するように、一回り小さい旧堅穴を確認している。中央部にはL字形状の中島が掘り残されている。ピット P 1・2・3・4（各深度 61cm・63cm・30cm・75cm）は新主柱穴、P 6・7・8（掘り方面からの各深度 54cm・34cm・14cm）は古い主柱穴と考えられる。P 1・2・4は軟弱な柱痕部分のみを掘削し、P 3は直径24cmの柱痕を断面で確認した。古い主柱穴はロームブロックを多量に含む土で埋め戻されていた。P 5（深さ33cm）は新旧共通の出入口ピットであろう。P 9・10・11（各深度 18cm・19cm・16cm）の性格は判断が難しいが、主柱穴の可能性が残る。カ

マド・炉 北壁中央やや東寄りに構築されている。両袖はアーチ状に湾曲し、煙道部の天井が遺存しており、残存状態は比較的良好である。焼土と灰を含む薄い層がカマド前面に広く散布していた。ローム層の地山を掘り残してカマド両袖の基部としている。また、床面中央にはわずかに窪んだ被熱面がある。焼け込みが著しく、炉と判断する。覆土 1層と2層は調査前の覆土上面において明瞭に分離できた。2・4層はローム粒が多く含まれ、人為埋没の可能性がある。遺物 1・2の須恵器壺は床面から、4～6の土師器甕は覆土中～下層から出土した。手捏土器も出土している。所見 住居跡の発掘時期は、8世紀前葉頃である。本住居跡は、柱穴配置や周溝、掘り方の状況から見て、豎穴の拡張・更新が明瞭である。主柱穴配置は（1期）P 8・6・7・4 →（2期）P 1～4という変遷と考えた。ただし、豎穴の拡張に対して、主柱穴配置はわずかに縮小しているようである。古い豎穴の下端平面規模は南北 3.65m × 東西 4.0m である。主軸方位と平面形は新しい豎穴と同様である。また、P 9～11の配置は9世紀前葉の47・57号住居跡と類似している。掘り方平面図に入れたが、本来は床面で検出できていた可能性が高いため、3期目の主柱穴と捉えることも可能である。

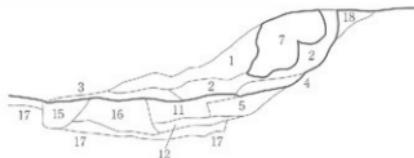


第164図 46号住居跡

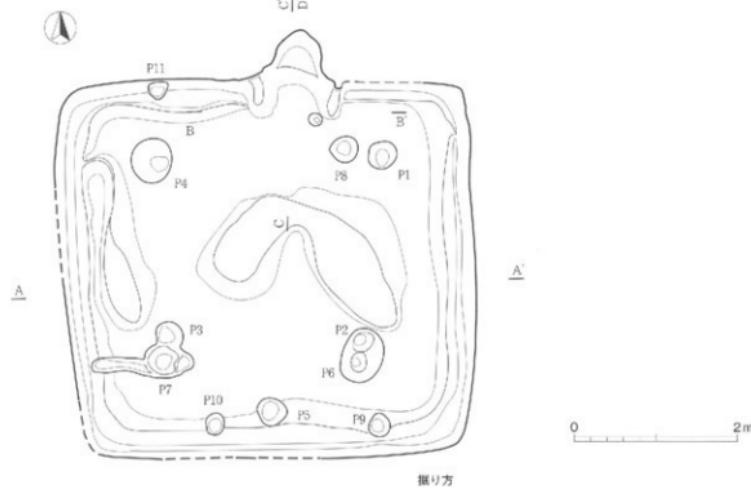
$\frac{B}{L} = 44.4$  $\frac{B'}{L} = 44.4$

46号住居跡土層

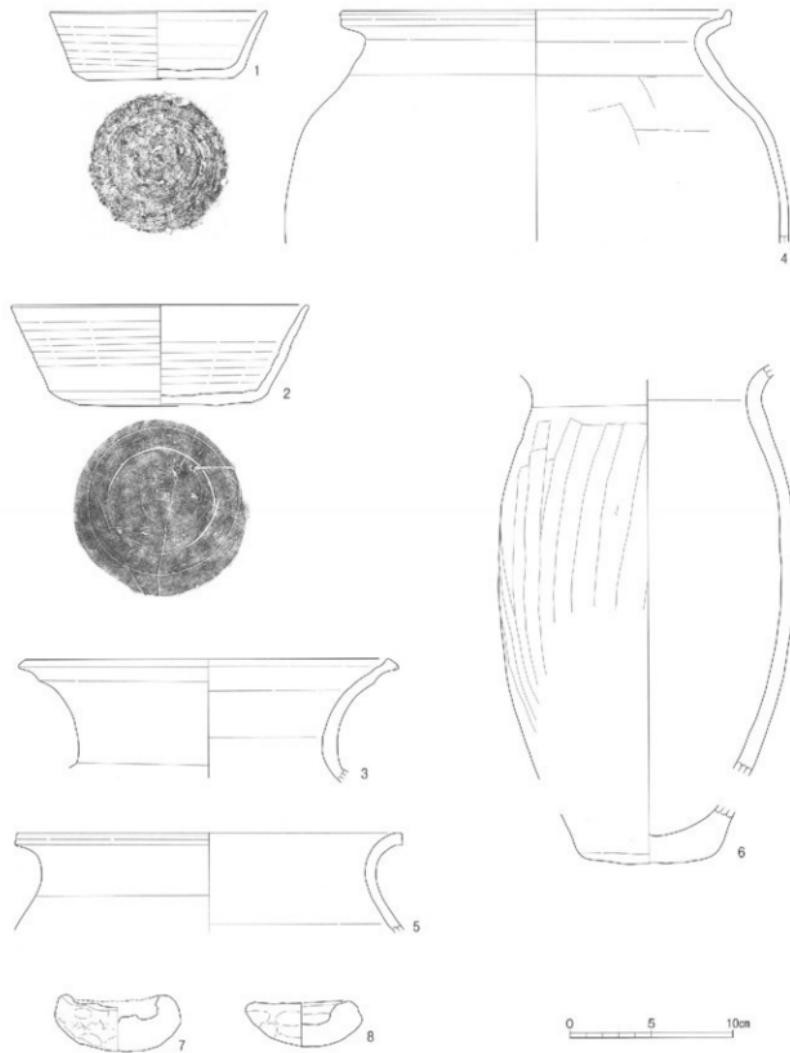
- 1 黄褐色 ローム乾燥层、擦り目有り
- 2 明褐色 ローム乾燥层、ロームブロック步留、擦り目有り
- 3 暗紅褐色 ローム乾燥层、擦り目有り
- 4 暗褐色 ローム乾燥层、ロームブロック步留、擦り目有り
- 5 棕褐色 ローム乾燥层、ロームブロック步留、擦り目有り
- 6 暗褐色 ローム乾燥层、擦り目有り
- 7 暗褐色 ローム乾燥层、ロームブロック步留、擦り目有り
- 8 棕色 ローム乾燥层、擦り目有り
- 9 棕褐色 ローム乾燥层、擦り目有り
- 10 棕褐色 ローム乾燥层、ロームブロック步留、擦り目有り
- 11 棕褐色 ローム乾燥层、ロームブロック步留、擦り目有り
- 12 棕褐色 ローム乾燥层、ロームブロック步留、擦り目有り
- 13 棕褐色 ローム乾燥层、ロームブロック步留、擦り目有り
- 14 棕褐色 ローム乾燥层、ロームブロック步留、擦り目有り
- 15 棕褐色 ローム乾燥层、ロームブロック步留、擦り目有り
- 16 棕褐色 ローム乾燥层、セムブロック步留、擦り目有り
- 17 棕褐色 ロームブロック步留、擦り目有り
- 18 棕褐色 ロームブロック步留、擦り目有り

 $\frac{C}{L} = 44.4$  $\frac{C'}{L}$

0 1m



第165図 46号住居跡カマド・掘り方



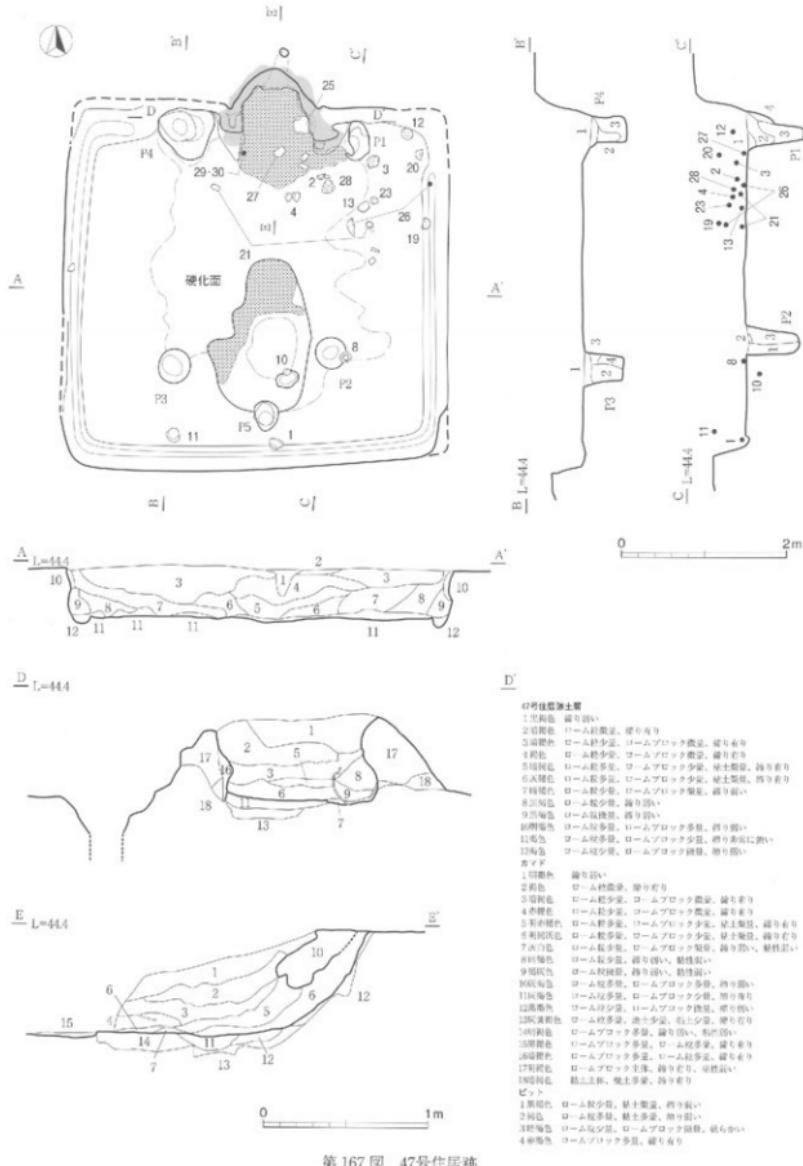
第166図 46号住居跡出土遺物

表74 46号住居跡出土遺物観察表

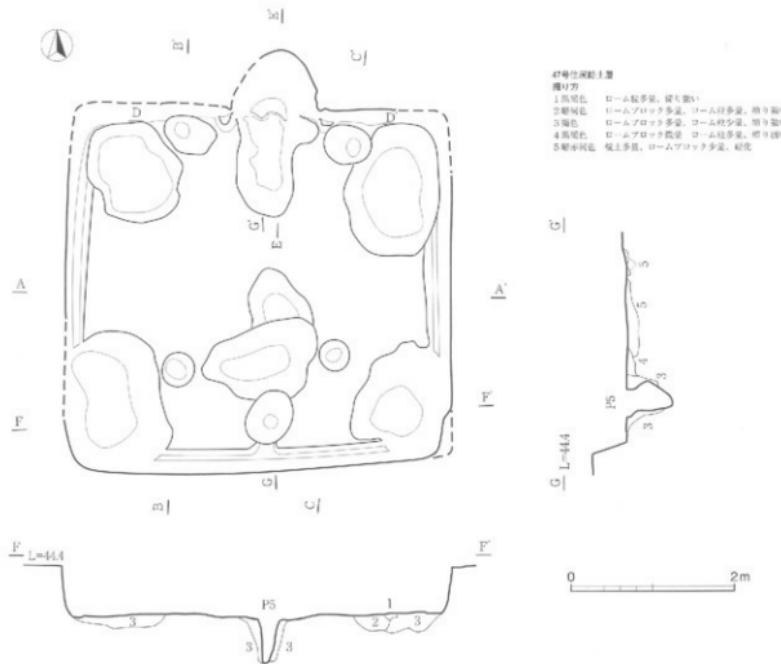
団版番号	種別 器種	口径 器高 底高	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 环	13.8 4.1 9.0	底部凹部へラケズリ。縁の狭い2次底部面を持つ。内面全体に擦り薫による平滑化した笠状底があり。ワタガ左回転。	最大8mmの白 色焼、自然焼、黒 色粒、漆接合付箇 所	良好	暗灰色	90%
2	須恵器 环	18.0 6.1 10.2	底部2段の同心円状の凸部へラケズリ。2次底部面も同様へラケズリ。クロロ右回転。	白色微粒、良さの ない漆接合付箇 所	普通	灰白色	70%
3	須恵器 環	(22.1) — —	口縁部底付。内面底付。口縁底部は平底で、外面部部直下に落し持つ。	石英、雪母	普通	暗灰色	
4	上頭器 类	(23.5) — —	口縁部分。口縁底部を下方に滴み上げる。口縁部内外面はコナダ、頭部外面ナダ、内面ヘナダ。	灰石、石灰、雪母	普通	にぶい橙色	
5	十轴器 类	(23.6) — —	口縁部分。口縁底部に平坦面をつくる。口縁部内外面はコナダ。	灰石、石灰、雪母	良好	にぶい褐色	
6	上頭器 类	— 8.0	腹部外側直方向の丁寧なヘラケズリ。内面ナダ。底部外側底付。内底面ナダ。	黄石、石英主体の 細砂粒多量	普通	暗褐色	
7	手握土器	6.7 3.4 —	口縁部分。口縁底部を強く上方に折み上げる。	灰石織、海綿骨針 微量	普通	にぶい橙色	
8	手握土器	(6.0) 2.7	厚手で、器底が長い錐漏状の荐形。	微砂粒	普通	にぶい橙色	50%

47号住居跡（第167～171回）

位置 A区北部、L 3～L 4グリッドに位置する。 規模と平面形 南北（主軸）方向は4.36m～4.67m、東西方向は4.67mを測り、平面形は正方形である。13・14・21・23・29号土坑によって部分的に壊されている。48号住居跡北壁と103号土坑西端を、本住居跡が襲している。 主軸方位 真北を指す。 壁 壁高は40～60cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。 床 中央部から壁際に向かってわずかに傾斜し、やや凹凸がある。主柱穴に囲まれた堅穴中央部とカマドから出入口部にかけての範囲がよく硬化している。周溝はほぼ全周する。掘り方は、堅穴四隅と出入口部に不整形な床下土坑がある。 ピット P 1～4が主柱穴、P 5が出入口ピットであろう。P 1・2はカマド脇の北壁直下に掘り込まれているため、カマド両袖は柱穴の掘り方に構築されている。各柱穴では、直径20cm前後の軟弱な柱痕と、ロームブロックを多量に含んだ根固め土を検出している。 カマド・炉 北壁中央に構築され、煙道部の天井が良好に残存する。右袖の内側からは、底部～胴下部を欠損した土師器窯（25）が逆位で出土した。覆土中には同一個体の破片が散見され、本来は懸け窯であったと推測する。床面中央部からP 2・3・5の間にかけては、不整長楕円形の炉がある。浅い皿状に掘り込まれ、被熱面は北西に偏る。炉の覆土は埋め戻しの可能性が高い。炉の下部は床下土坑となっていた。 覆土 5・6層は粘土のブロックが斑状に含まれ、4～6層の堆積がやや乱れることから、人为的埋没と推測する。炭化材等は検出されなかったため、焼失住居とは断定できない。床上の11層は非常に強くしまり、堆積後に踏み固められた可能性がある。 遺物 堅穴北東隅の覆土上層～下層から集中して出土している。また、南周溝際の9層からは完形の須恵器窯（1）が、北東隅周溝際の9層からは完形の須恵器窯（12）と内墨土師器窯（19）が、P 2脇の床面からは須恵器窯（9）が逆位で、それぞれ出土している。カマド覆土中からは、鉄製品が2点出土しており（29・30）、同一個体の可能性が高い。 所見 主柱穴の配置形式が特徴的である。住居跡の廃絶時期は、9世紀前葉頃に求められる。



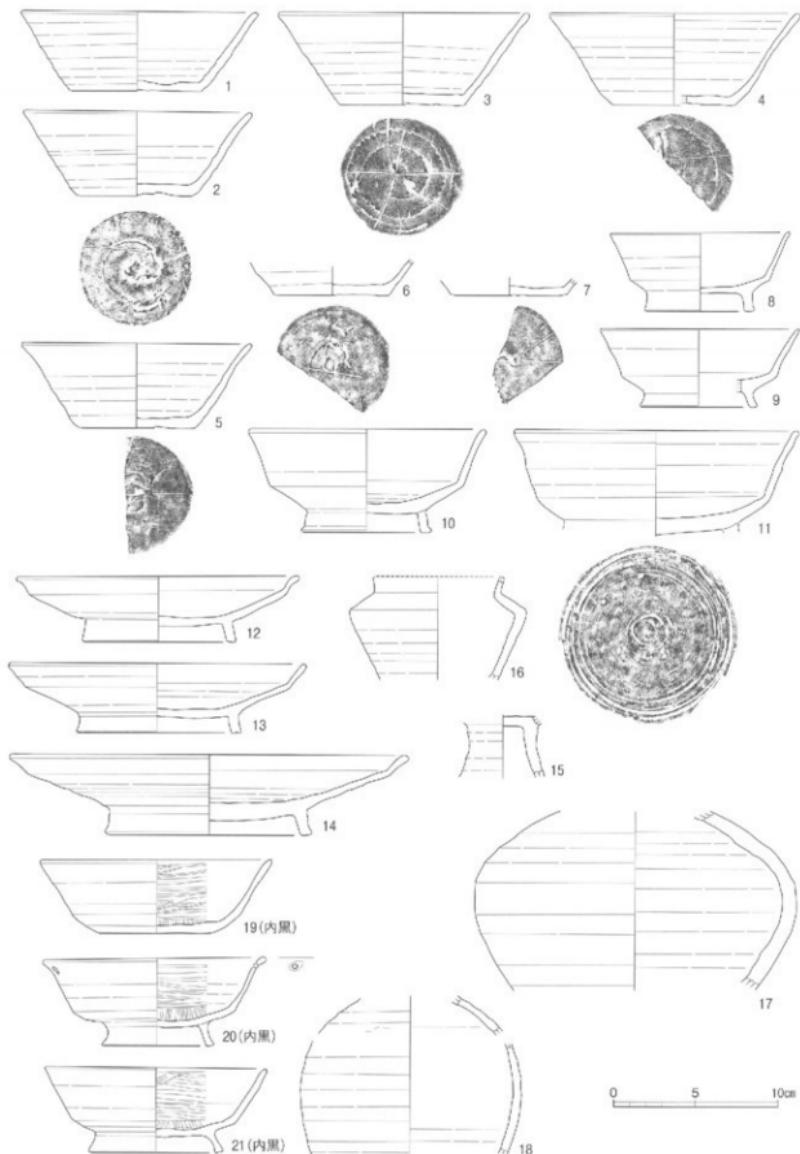
第167図 47号住居跡



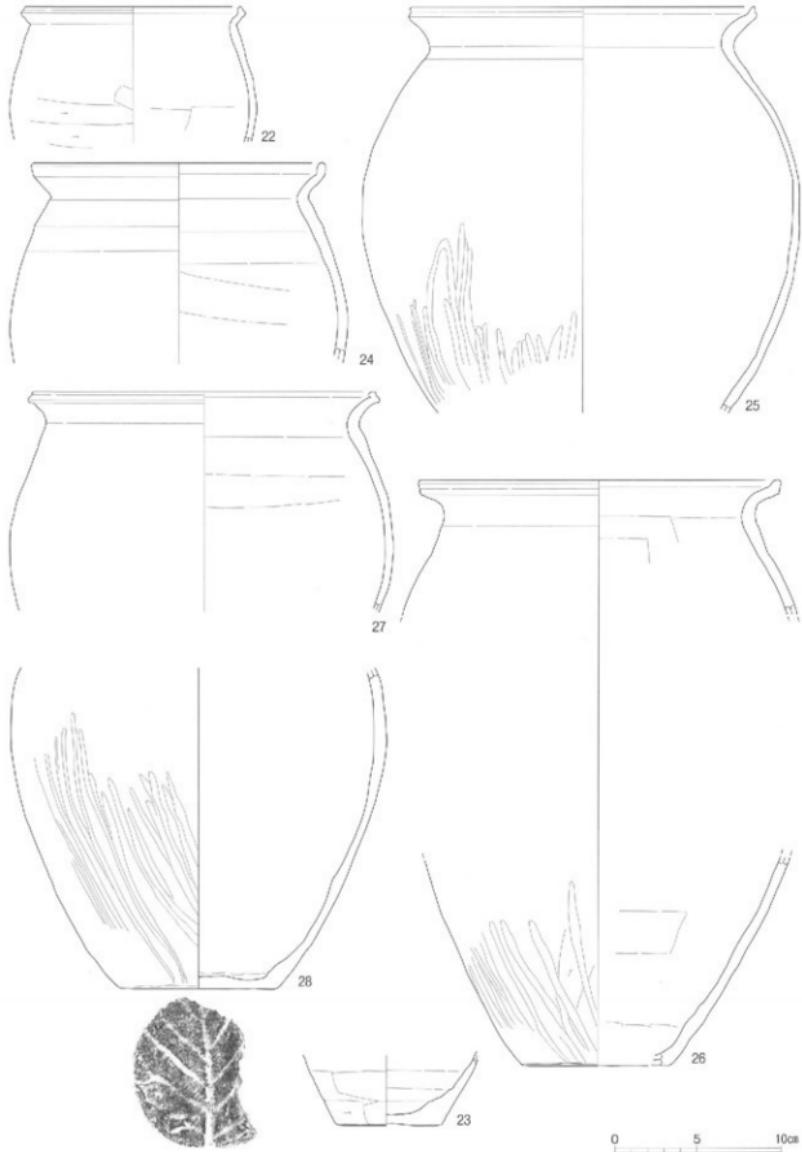
第168図 47号住居跡掘り方

表75 47号住居跡出土遺物観察表

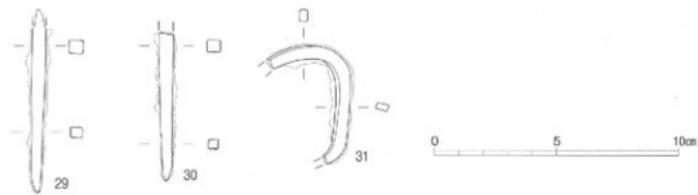
回収番号	種別 器種	口径 基部 底径	特徴	胎土	洗成	色調	備考
1	縦窓器 环	14.2 4.9 7.9	底部削り切り無し無調整。ロクロ右面紙。	灰石繊、黒色粒、 チヤート小砾	普通	灰色	完形
2	縦窓器 环	13.6 5.3 7.0	底部削り切り無し無調整。ロクロ右面紙。ヘラ記号「一」。 海鷗骨針	灰石、チヤート、 海鷗骨針	普通	灰色	70%
3	縦窓器 环	15.2 5.7 7.6	底部削り切り無し無調整。ロクロ右面紙。ヘラ記号「大」。	灰石、チヤート塵	不良	褐灰色	60%
4	縦窓器 环	15.2 5.6 7.4	底部削り切り無し無調整。ロクロ右面紙。ヘラ記号。	灰石繊、石英、海鷗 骨針	不良	灰白色	
5	縦窓器 环	14.9 5.3 7.0	底部削り切り無し後オサエ。ロクロ右面紙。ヘラ記号「一」。	灰石繊、黑色丸分 粒、海鷗骨針	普通	灰色	
6	縦窓器 环	- 7.2	底部ヘラ切り無し後オサエ。ヘラ記号。	灰石繊、黑色丸分 粒	普通	灰色	



第169図 47号住居跡出土遺物①



第170図 47号住居跡出土遺物②



第171図 47号住跡出土遺物③

回復番号	種類	口徑 器高 高径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
7	須恵器 環	— — 7.0	底部へク切り暮らし後一方にヘラケズリ。ヘラ記号。	長石、黒色鉄分粒	普通	灰色	
8	須恵器 高台付环	10.9 4.9 6.7	底面凹面へラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石、チャート、 海綿骨針	良好	褐色灰化色	80%
9	須恵器 高台付环	12.1 4.8 7.2	底面凹面へラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石、黒色鉄分粒	良好	褐色灰化色	
10	須恵器 高台付环	14.4 6.4 8.0	底部凹面へラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石、チャート、 海綿骨針	普通	灰色	60%
11	須恵器 高台付环	17.2 — —	底面凹面へラケズリ後高台貼り付け。	長石、チャート、 海綿骨針	普通	灰色	
12	須恵器 盤	17.3 4.1 9.3	底部凹面へラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石、チャート、 海綿骨針	普通	褐色灰化色	完形
13	須恵器 盤	18.2 4.3 10.0	底面凹面へラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石、石英、チャート、 海綿骨針	普通	灰色	50%
14	須恵器 盤	24.4 5.0 12.6	底部凹面へラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石、石英、チャート、 海綿骨針	良好	暗灰褐色	30%
15	須恵器 高环	— — —	高环脚基部片。	長石、石英、海綿 骨針	良好	灰褐色	
16	須恵器 小型盘	(7.8) — —	肩へ張った、小型の切削窓。	長石、黒色鉄分粒	良好	深褐色	
17	須恵器 長脚盘	— — —	肩へ脚部片。	長石、海綿骨針	普通	灰褐色	
18	須恵器 長脚盘	— — —	体部はやや小指で肩が強らしい形状。	難良	良好	深オーライブ色	
19	土師器 环	14.1 4.6 6.8	外側全体下端へ弧形凹面へラケズリ、内面黑色施塗、ミガキ。ロクロ右回転。	石英、チャート、 海綿骨針	良好	に赤い褐色	60%
20	土師器 高台付环	13.6 3.5 6.8	体部下端へラケズリ後高台貼り付け。内面黑色施塗、ミガキ。ロクロ右回転。口唇部に焼成痕穿孔径2mm強、3か所。	石英、海綿骨針	良好	に赤い褐色	60%
21	土師器 高台付环	13.6 5.2 8.2	体部下端へラケズリ後高台貼り付け。内面黑色施塗、ミガキ。ロクロ右回転。	石英、石英、チャート、 海綿骨針	良好	に赤い褐色	60%
22	土師器 甕	13.0 — —	瓶上半部掌託。下半部横方向へのラケズリ。内面へラグテ。	石英	普通	に赤い褐色	
23	土師器 甕	— — 6.4	瓶下端横方向へのラケズリ、底部オサエ。	石英、長石	良好	に赤い褐色	

図版番号	種別器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
24	土師器 壺	14.0 — —	口縁部内外面ヨコナデ。肩部外縁ナデ、内底ヘラナデ。	長石、石英、金青 母	良好	にぶい褐色	
25	上部器 壺	21.1 —	口縁部内外面ヨコナデ。頂上半部外縁ナデ、下半部ミガキ。長石、石英	普通	にぶい褐色	カマド	
26	下部器 壺	(22.0) — (8.0)	口縁部内外面ヨコナデ。胴下半部ミガキ。	長石、石英	良好	にぶい褐色	
27	土師器 壺	21.4 — —	口縁部内外面ヨコナデ。頂上半部外縁ナデ、内底ヘラナデ。長石、石英	普通	にぶい褐色		
28	上部器 壺	— — 9.6	頂下半部ミガキ。底部小突起。	長石、石英	普通	にぶい褐色	
29	鉄製品 鋤	長 [7.5] cm. 幅 0.5cm. 厚 0.33cm. 重 7.73g.					30と同一個体
30	鉄製品 鋤	長 [6.0] cm. 幅 0.5cm. 厚 0.3cm. 重 5.46g.					29と同一個体
31	鉄製品 不明	長 [5.0] cm. 幅 0.5cm. 厚 0.3cm. 重 8.49g.					

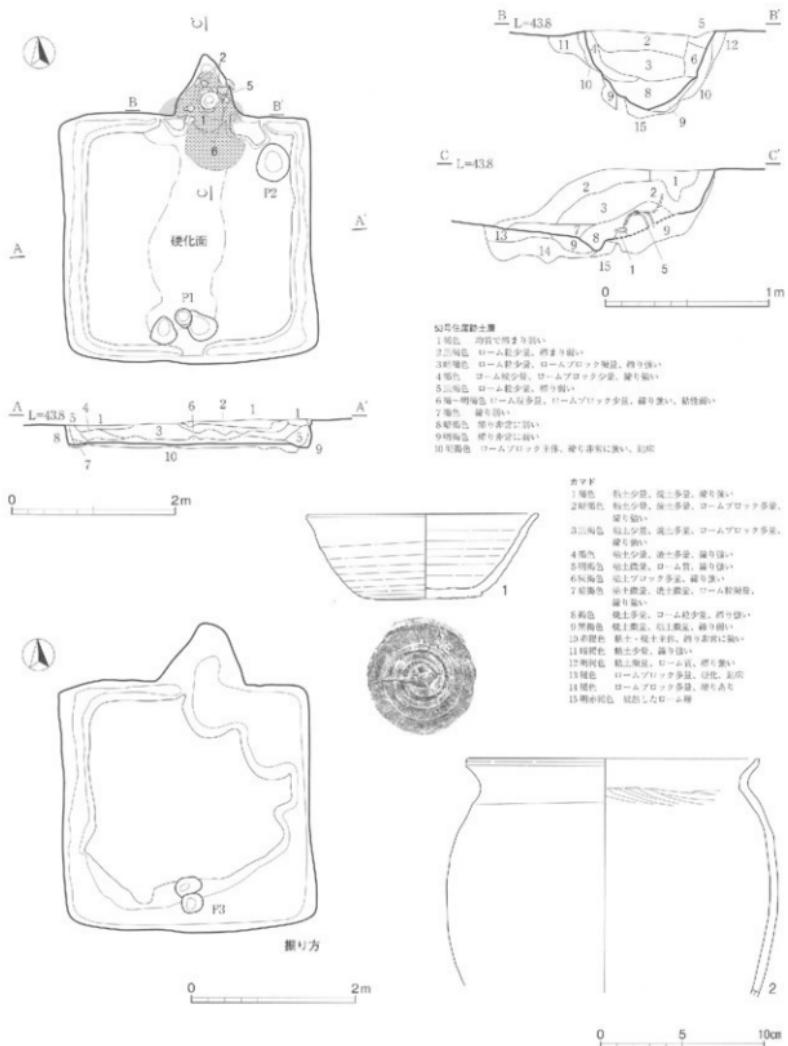
53号住居跡（第172・173図）

位置 A区北部、L 5 グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向は 3.12m、東西方向は 3.11m を測り、平面形は不整隅丸正方形である。主軸方位 N - 3° - E 裏壁高は 22 ~ 31cm を測り、わずかに傾斜する。床 ほぼ平坦で、カマドから P 1 にかけて帶状に硬化し、周溝は全周する。P 1 の両脇は浅く窪む。掘り方は全体に浅いが、周溝に合わせて横際が溝状に掘り込まれる。ピット P 1 は出入口ピットであろう。P 3 は掘り方で確認し、これも出入口ピットの可能性がある。P 2 はいわゆる貯蔵穴であろう。カマド 北壁中央やや東寄りに構築される。右袖はわずかに張り出しが、左袖は残っていない。両袖ともに基部の高まりを確認した。焚口部はやや広い。カマド中央には、完形の須恵器坏（1）の上に土師器壺底部（5）を入れ子状に逆位に積み重ねた支脚が設置されていた。これらの上部からは、2 と 6 の上部器壺が破碎して出土した。覆土 上層は自然堆積状を呈するが、4 ~ 6 層はローム粒・ブロックを疊状にやや多く

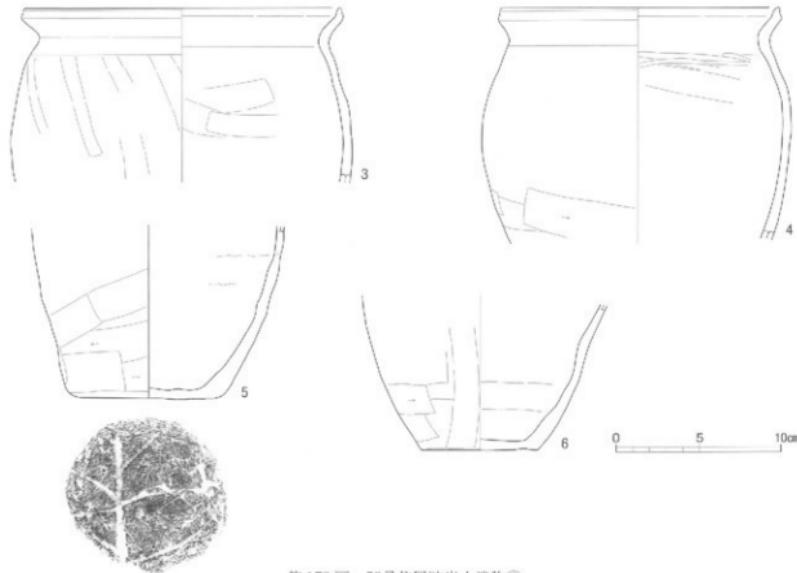
表 76 53号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	12.8 5.3 7.4	高部向かう側り部・無腹壁。底面ハケ跡号「1」。高部 及び底部の側面で碎り入り、段差を生じている。	長石、海綿骨針 等	やや不良	明灰色	90% カマド
2	土師器 壺	17.7	口縁～肩部。口縁部は全体に低く短い、壺部は上方に盛み上げる。体部外縁ナデ、内底ヘラナデ。	微砂粒	良好	にぶい褐色	表外面に企念な泥じりの乾土付着、カマド
3	上部器 壺	(19.2) — —	口縁～肩部。口縁部は全体に低く短い。壺部は盛み上げる。体部外縁ナデ。	長石、石英、チー ト、海綿骨針	普通	にぶい褐色	
4	下部器 壺	(16.7) —	口縁～肩部。口縁部は全体に低く短い。壺部は盛み上げる。体部外縁ナデ。	長石、石英、チー ト、海綿骨針	良好	にぶい褐色	
5	下部器 壺	— — 8.6	底部～腰下部。底下半部外縁下方ヘラケズリ。底部 白色細多量、石英 等	普通	にぶい褐色	カマド	
6	土師器 壺	— — 7.6	底部～腰下部。底部本系痕撲、ナデ。底下半部後方にハラケズリ、腰縁方向のハラケズリ。	長石・石英微粒、普通 チーク	にぶい褐色	カマド	

含み、人為的埋没の可能性がある。また、8層は土壤化した壁体と推測する。遺物 カマド覆土中や支脚の直上から、土師器壺の個体が破碎した状態で出土した。本來は懸け甕であったと推測する。須恵器の壺や土師器の甕は9世紀中～後葉頃の遺物である。所見 住居跡の廃絶時期は、9世紀後葉頃と考えられる。



第172図 53号住居跡・出土遺物①



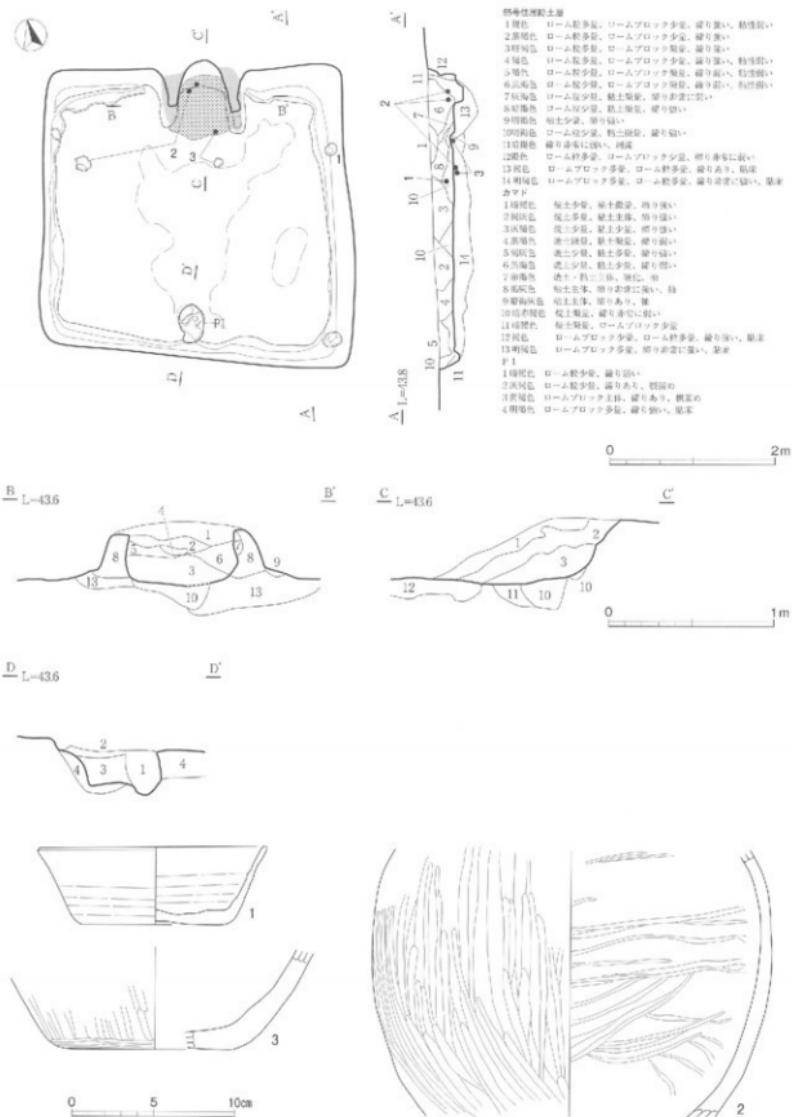
第173図 53号住居跡出土遺物②

55号住居跡（第174図）

位置 A区北部、K 5～L 5 グリッドに位置する。規模と平面形 南北方向は西側 3.37m・東側 3.74m、東西方向は北側 3.61m・南側 3.84m を測り、平面形は横向きの不整台形を呈する。主軸方位 N - 14° - W 壁 壁高は 18～33cm を測り、傾斜する。床 やや凸凹がある。カマドから P 1 にかけて帶状に硬化し、わずかに高い。掘り方は紙面の都合で平面化できなかったが、西・南壁側は周溝に合わせて幅広く溝状（幅 55～92cm）に掘り込まれる。カマド前は北東隅の周溝と接続した土坑状の掘り方になる。ピット P 1 は出入入口ピットである。カマド 北壁中央に構築される。両袖は残りが良い。煙道部が非常に短い。覆土 中から出土した 2 の土師器壺の大部分は、堅穴北東部の覆土下層から出土している。本来は懸け臺であった可能性がある。覆土 やや複雑な堆積状況を示す。カマドの粘土を含む土が広く埋没し、2 の土師器壺は

表 77 55号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	埴 土	焼成	色 斑	備考
1	須恵器 环	128 53 74	底部内板ヘフ切り離し無調整。底部ヘラ記号「一」。底部と体部の境合部で縫合入り、泥条を压じている。	長石輝、海綿骨針	やや不良	暗灰色	90%
2	土師器 壺	17.7 —	口縁～肩部片。口縁部は全体に低く低い。肩部は上方に撻み上げる。体部外側ナギ。内面ヘクナギ。	塑砂粒	良好	にぼい褐色	裏外面に全表面 亂じりの粘土付着
3	土師器 壺	19.2 —	口縁～肩部片。口縁部は全体に低く低い。肩部は撻み上げる。体部外側ナギ。	長石、石英、チャート、薄綿骨針	普通	にぼい褐色	

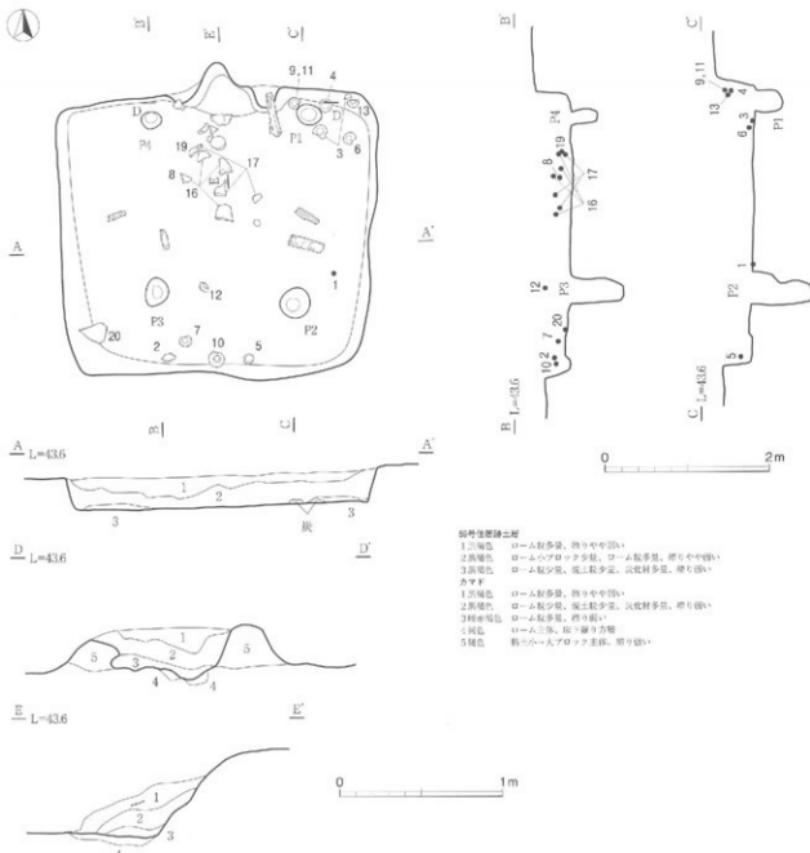


第174図 55号住居跡・出土遺物

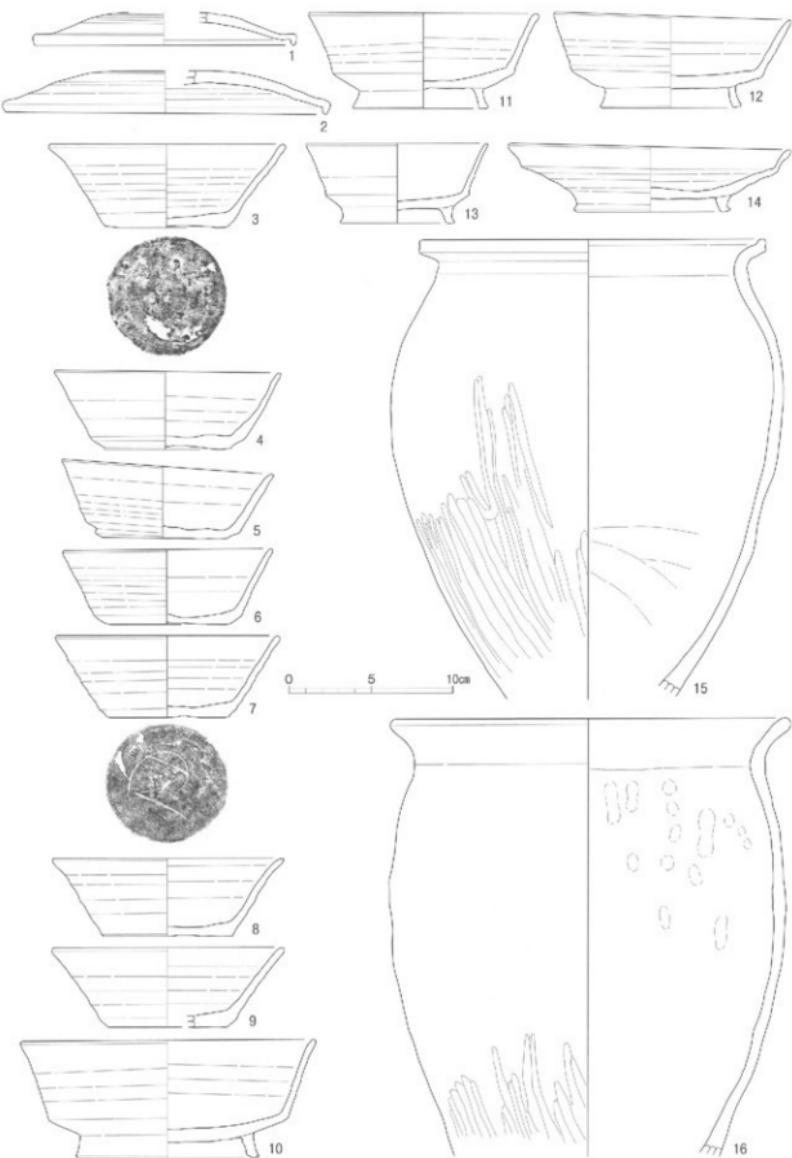
8・10層堆積時に廃棄された可能性がある。 遺物 1の須恵器壺は西壁際 10・11層から出土した。カマド前面の下層からは3の土師器底部が出土した。これらの所産時期は8世紀中葉頃のものである。北西隅と南東隅の周溝上からは自然円礫が出土した。 所見 住居跡の廃絶時期は8世紀中葉頃と考えられる。

59号住居跡（第175～177図）

位置 A区中央部、L 6 グリッドにある。 規模と平面形 3.70×3.40 m のやや横に長い方形で、61号住居跡と重複し、それよりも新しい。 主軸方向 N - 5° - W 壁 壁高 33cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 床 住居全体が硬化している。 ピット 5箇所。P 1 から P 4 は主柱穴。P 1 と P 4 は北壁の直下に位置している。 カマド 北カマドで全体の幅は 130cm で、燃焼室幅は 60cm、奥行きは 54cm ある。袖部は粘土。

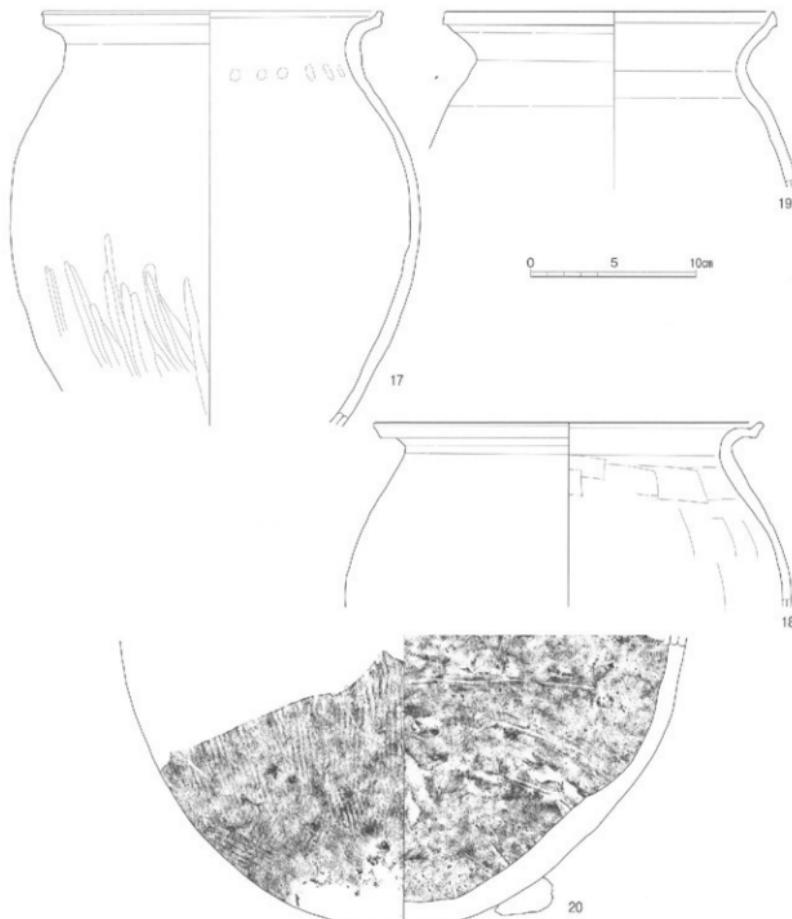


第175図 59号住居跡



第176図 59号住居跡出土遺物①

を使用して構築している。 覆土 ローム粒を多量に含んだ黒褐色土を主体にしている。 遺物 覆土中～下層にかけて須恵器の蓋、坏、高台付坏、盤、壺、土師器の壺が出土している。 所見 出土遺物から見て8世紀後葉頃～9世紀前葉頃の住居跡と考えられる。住居跡の柱穴の配置は、8世紀後葉頃の住居跡に見られる壁際に寄った位置にあり、住居の構築は8世紀後葉と考えられる。



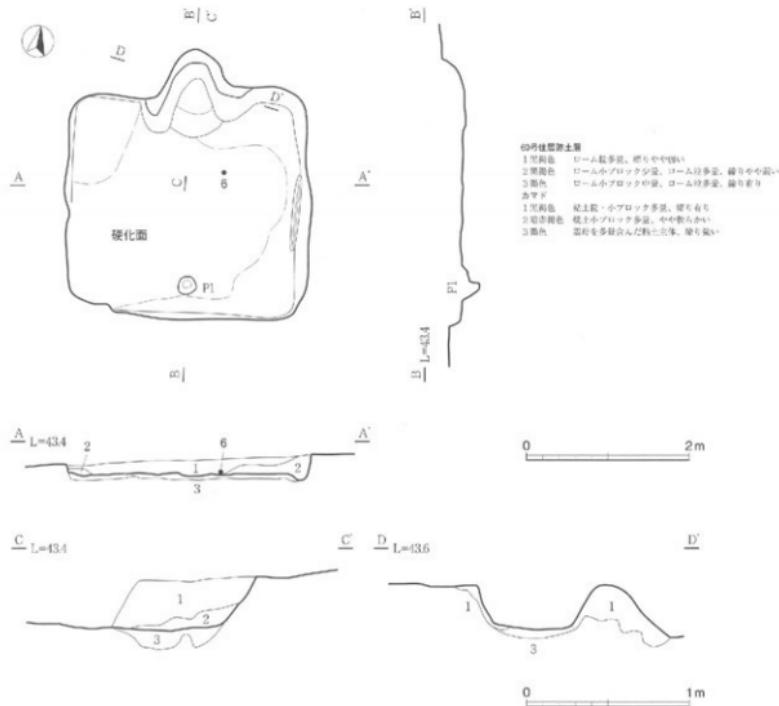
第177図 59号住居跡出土遺物②

表 78 59号住居跡出土遺物観察表

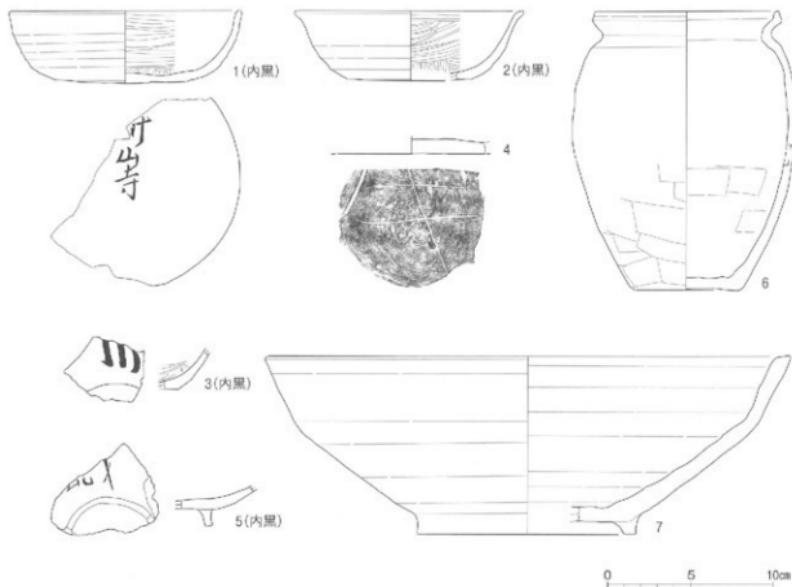
記版 番号	種別 器種	口径 基高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	16.0 —	大井部回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石、海綿骨針	普通	灰色	
2	須恵器 蓋	19.4 — —	天井部回転ヘラケズリ。	長石、精良	良好	灰色	
3	須恵器 环	14.4 6.8 7.6	底部回転ヘラ切り後オラエ。ヘラ記サ。	長石、黑色鉄分粒、 海綿骨針	普通	灰色	65%
4	須恵器 环	13.8 4.9 7.7	底部回転ヘラ切り。無開窓。ロクロ右回転。	長石等、石英、海 綿骨針、チャート	普通	灰褐色	網形
5	須恵器 环	13.9 4.9 7.7	底部回転ヘラ切り後一方舟ヘラケズリ。	石英、パミス、黑 色鉄分粒	普通	灰色	111枚光形
6	須恵器 环	12.6 4.6 7.6	底部回転ヘラ切り後一方舟ヘラケズリ。	石英、パミス、黑 色鉄分粒	不良	灰褐色	90%
7	須恵器 环	12.8 5.1 7.3	底部ヘラ切り無蓋窓。ヘラ記サ。	長石、チャート、 海綿骨針	普通	灰色	70%
8	須恵器 环	14.2 4.8 8.0	底部回転ヘラ切り無開窓。ロクロ右回転。	長石、沈燒骨針、 黑色鉄分粒	普通	灰色	50%
9	須恵器 环	14.2 4.8 7.4	底部回転ヘラ切り無開窓。ロクロ右回転。	長石、石英、海 綿骨針、黑色鉄分粒、 チャート	普通	暗灰色	
10	須恵器 高台付环	18.0 7.3 11.1	口記部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。高 台焼成半耗。	長石等、石英、海 綿骨針	普通	灰色	70%
11	須恵器 高台付环	14.1 5.9 8.3	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石等、チャート	普通	灰褐色	70%
12	須恵器 高台付环	14.5 5.9 8.6	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石等、黑色鉄分 粒	普通	灰色	60%
13	須恵器 高台付环	11.1 4.9 7.0	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石、石英、海 綿骨針、黑色鉄分粒	良好	灰褐色	50%
14	須恵器 盖	17.2 4.3 9.5	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。ロクロ右回転。	長石等	良好	灰色	90%
15	土器器 蓋	21.1 — —	口縁部内外面ヨコナダ。崩部外面上半部ナゲ、下半部ミ ガキ、内面ヘラナダ。	長石、石英	良好	に赤い褐色	
16	土器器 蓋	24.4 — —	口縁部内外面ヨコナダ。崩部外面上半部ナゲ、下半部ミ ガキ、内面指痕板。	石英	良好	に赤い褐色	
17	土器器 蓋	20.7 — —	口縁部内外面ヨコナダ。崩部外面上半部ナゲ、下半部ミ ガキ、内面指痕板。	長石、石英	普通	褐色	
18	土器器 蓋	(23.8) — —	口縁部内外面ヨコナダ。崩部外面上半部ナゲ、下半部ミ ガキ、内面ヘラナダ。	長石、石英、黒砂	良好	褐色	
19	須恵器? 蓋	20.1 — —	ロクロ口は小判形だが、内外面ともロタコナダと思われ る側面。	黒砂粒	やや良	茶褐色	
20	須恵器 蓋	— — —	丸底。外面平行取み、内面裏当て共底。	長石、石英	良好	暗灰色	

60号住居跡（第178・179図）

位置 A区中央部、L7グリッドにある。規模と平面形 2.96×2.77 mのほぼ方形で、北壁に15cm程度の奥行き差がある。61・64号住居跡と重複し、それよりも新しい。主軸方向 N-8°-W 壁 壁高19cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居中央部から南西側にかけて硬化している。住居東壁に壁溝が一部確認された。ピット 1箇所。P1は深さ22cm、出入り口ピットと考えられる。カマド 北カマドで全体の幅は135cmで、煙道部の壁外への突出は40cm以上ある。覆土 黒褐色土を主体とした自然堆積層である。遺物 6の土師器甕は床面出土の底部とカマド内出土破片があり接合していないが同一個体と判断した。他に内黒土師器坏が4点出土し、その中で1の坏の底部には「□山寺」の墨書文字が書かれている。7の須恵器鉢は、高台の付いた珍しい形態の鉢で、胎上に海綿骨針を含んでいる。所見 出土遺物から見て9世紀後葉頃の住居跡と考えられる。住居は、平面形から見て本來カマド左側に棚を持つ形の住居跡と考えられる。



第178図 60号住居跡



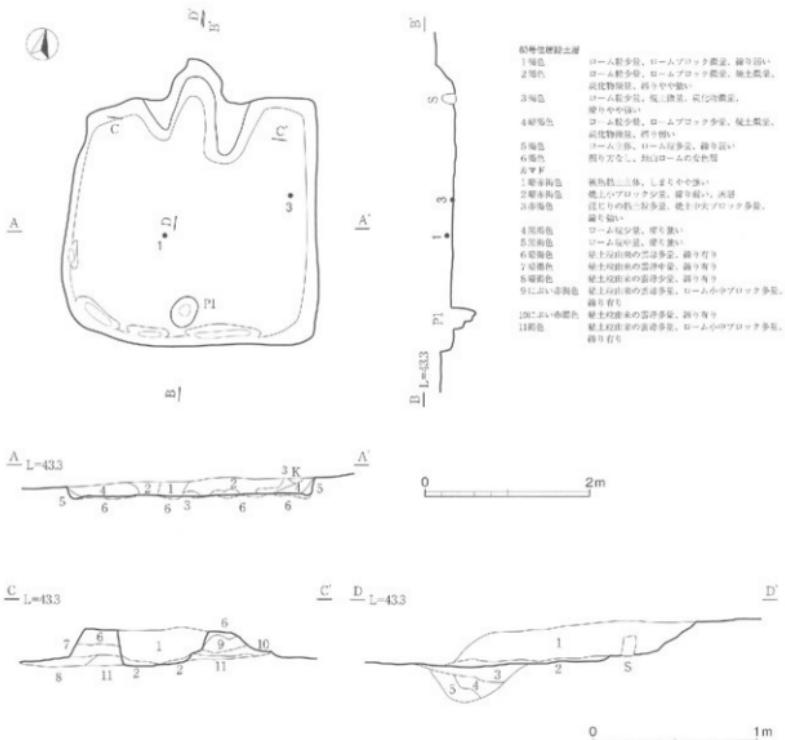
第179図 60号住居跡出土遺物

表79 60号住居跡出土遺物観察表

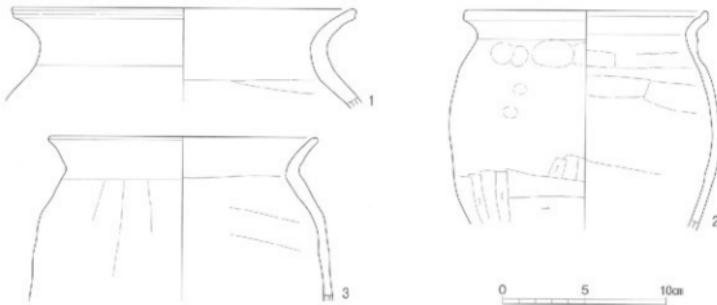
回復 番号	種別 種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 环	(14.0) 4.4 7.5	底部切削へきり無調整。内面黑色處理。ミガキ。ロクロ右側板。底部外周墨書き「日出守」。	長石、石英、海綿 骨針	良好	浅黄褐色	
2	土師器 环	(13.9) 4.3 7.6	底部下第一底部右側へきり無。内面黑色處理。ミガキ。ロクロ右側板。	長石、石英、海綿 骨針	良好	にぶい褐色	
3	土師器 环	- -	内面黑色處理。ミガキ。体部墨書き「川」?	長石、石英、海綿 骨針	良好	暗褐色	
4	須恵器 环	- - -	底部へきり無。ヘラ記号。	長石、石英、海綿 骨針	普通	灰色	
5	土師器 高台付环	- -	内面黑色處理。ミガキ。体部墨書き。	長石、石英、海綿 骨針	良好	にぶい褐色	
6	土師器 突	(11.0) (19.2) 6.4	口部内面墨コナデ。腹上半部外周ナデ。下半部横方向へきり無。内面黒テクス。底部周縁へきり無。中央ナメア・オサエ。	長石、石英、海綿 骨針	良好	にぶい暗褐色	
7	須恵器 环	(32.0) 13.4 (11.0)	底部、口縁部分。体部内外面ロクロナデ。	長石、石英、海綿 骨針	良好	灰褐色	

63号住居跡（第180・181図）

位置 A区中央部、L 7グリッドにある。規模と平面形 $3.10 \times 2.90\text{m}$ 主軸方向 N- 8° -W 壁塗高は約20cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 全体に硬化している。ピット 1箇所。P1は深さ25cm、出入り口ピットと考えられる。カマド 幅140cm、焚口部から煙道部までの長さは110cm、燃焼部幅約38cm、壁外への掘り込みは45cmある。右袖部の残りがよく長さ65cm、焼成部の中央に自然石を立てて支脚としたものが出土している。覆土 褐色土を主体にした自然堆積層。遺物 1・3の土師器甕は覆土から、2の甕はカマドから出土している。いずれも9世紀代の遺物である。所見 出土遺物から9世紀代の住居跡と考えられる。



第180図 63号住居跡



第181図 63号住居跡出土遺物

表80 63号住居跡出土遺物観察表

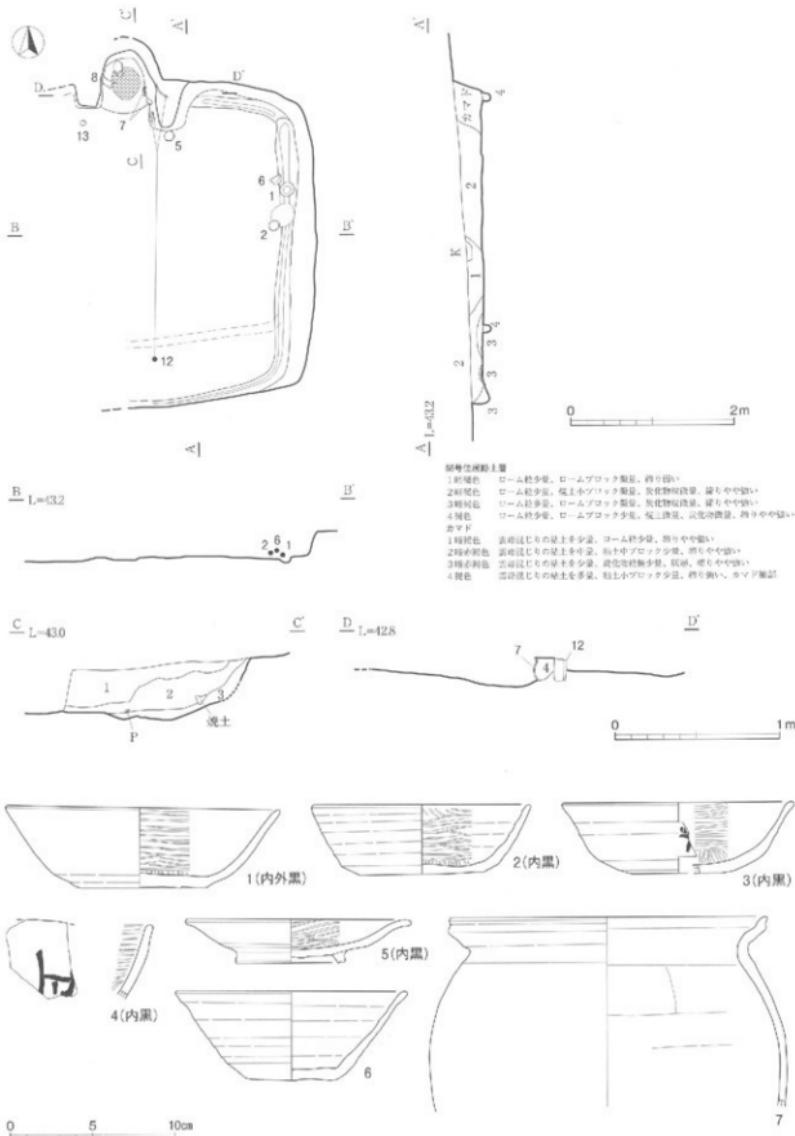
団版番号	種別 器種	口径 底面 直径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 甕	(20.9) — —	口部内外面ヨコナデ。肩部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	良好	に赤い褐色	
2	土師器 甕	(147) — —	L1形内外面ヨコナデ。胴上半部外面ナデ、下半部ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	長石、石英、バミ ス	良好	に赤い褐色	
3	土師器 甕	(16.0) — —	口輪部内外面ヨコナデ。胴部外面ヘラナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	良好	暗褐色	

65号住居跡（第182・183図）

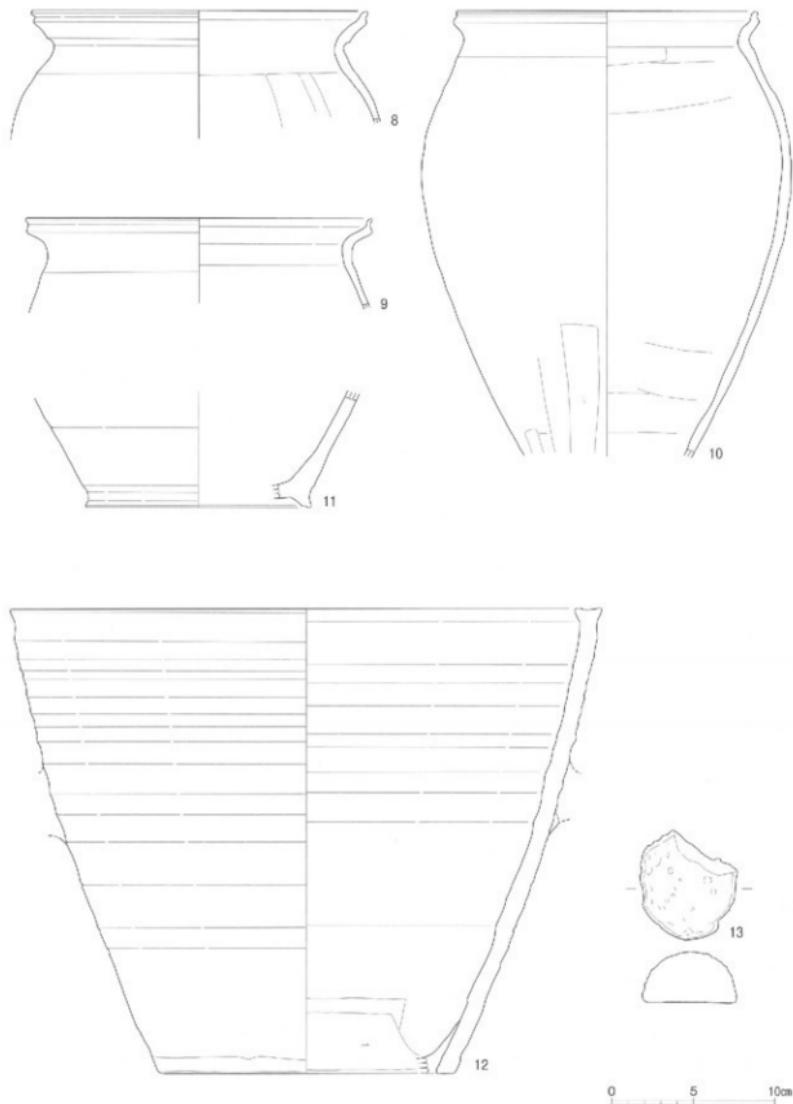
位置 A区中央部、L 7 グリッドにある。規模と平面形 3.80 × (2.8) mで、64号住居の床面を壊している。主軸方向 N-5°-E 壁 壁高は約28cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 全体に硬化している。住居床面に古い時期の南壁の壁溝状の痕跡が見られる。ピット - カマド 幅135cm、焚口部から煙道部までは90cm、燃焼部幅約50cm壁外への掘り込みは約40cmある。右袖部には7の土師器甕、12の須恵器甕を構築材として使用している。覆土 暗褐色土を主体にした自然堆積層。遺物 東壁際の覆土下層から6の須恵器甕、1・2の土師器甕が、カマド前面の床面付近から5の土師器の皿、13の軽石製の砥石が出土している。いずれも9世紀後葉頃の遺物である。所見 出土遺物から9世紀後葉頃の住居跡と考えられる。

表81 65号住居跡出土遺物観察表

団版番号	種別 器種	口径 底面 直径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 甕	16.2 5.0 7.6	体部内外面黒色処理、内面ミガキ。底部回転ヘラ切り無調整。	長石、石英	普通	黒褐色	完形
2	土師器 甕	13.2 4.3 7.5	体部内面黒色処理、ミガキ。底部回転ヘラケズリ。コクロ右側斜。	長石、石英	良好	に赤い褐色	80%
3	土師器 甕	(14.0) 4.4 5.3	体部下端回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ。内面黒色処理、ミガキ。底部無面畫文字「口」。	石英、チャート、 海綿骨針	良好	に赤い褐色	



第182図 65号住居跡、出土遺物①



第183図 65号住居跡出土遺物②

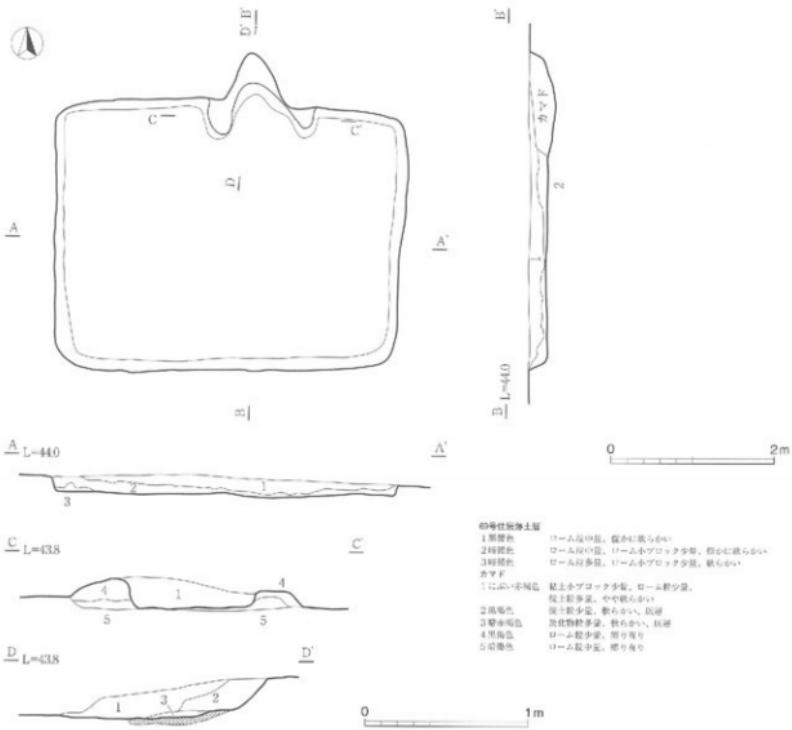
図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	土器器 環	- - - - - - - -	口縁部片。内側黒色処理・ミガキ。本部側面墨書き文字「口 石英 」。	長石、石英、チャート	良好	にぶい褐色	
5	土器器 環	13.8 2.7 6.7	体部下部内側ヘラケズリ、底部内側ヘラケズリ後両面貼り付け。内側黒色処理・ミガキ。	長石、石英、チャート	良好	にぶい褐色	光沢
6	須恵器 環	14.1 5.5 5.5	体部下部側面内側ヘラケズリ、底部内側ヘラケズリ後両面貼り付け。内側黒色処理・ミガキ。	白灰、チャート、 漆器骨針	普通	褐色	90%
7	土器器 環	19.2 -	口縁部内外面ヨコナナ。頂部外側ナナ、内凹ヘラナナ。	長石、石英	良好	にぶい褐色	
8	土器器 環	20.4 -	口縁部内外面ヨコナナ。頂部外側ナナ、内凹ヘラナナ。	石英を含む微砂粒	良好	にぶい褐色	
9	土器器 環	(21.0) -	口縁部内外面ヨコナナ。	長石、石英	良好	褐色	
10	土器器 環	(18.2) - -	口縁部内外面ヨコナナ。肩外凸上半部ナナ、中部斜め方 角ヘラケズリ後ナナ、下半部腹方向ヘラケズリ。内凹ヘ ナナ。	長石、石英	普通	褐色	
11	須恵器 環通芯	(13.8)	-	長石、チャート	良好	青灰色	
12	須恵器 環	(36.4) (28.5) (18.0)	体部内外面ヨコナナ。一対の把手斜溝痕。底部2孔式。	長石、石英、チャ ート	普通	灰色	
13	石製品 鉄石？	長 [6.8] cm、幅 6.0cm、厚 3.1cm、重 2225g、純石製。					

69号住居跡（第184図）

位置 A区中央部、M5グリッドにある。 規模と平面形 4.21 × 3.85 m の横長長方形
 主軸方向 N - 2° - W 壁 壁高は約 24cm、やや外傾して立ち上がる。 床 全体にやや硬化が弱い。
 ピット - カマド 幅 142cmで、焚口部から煙道部までは 102cm、壁外への掘り込みは 58cm である。 覆土 黒褐色土
 から暗褐色土の自然堆積で、細かな搅乱が多く入り込んでいる。 遺物 - 所見隣接する住居跡との位
 置関係や主軸方向から見て、9世紀前葉前後頃の住居跡と思われる。

70号住居跡（第185図）

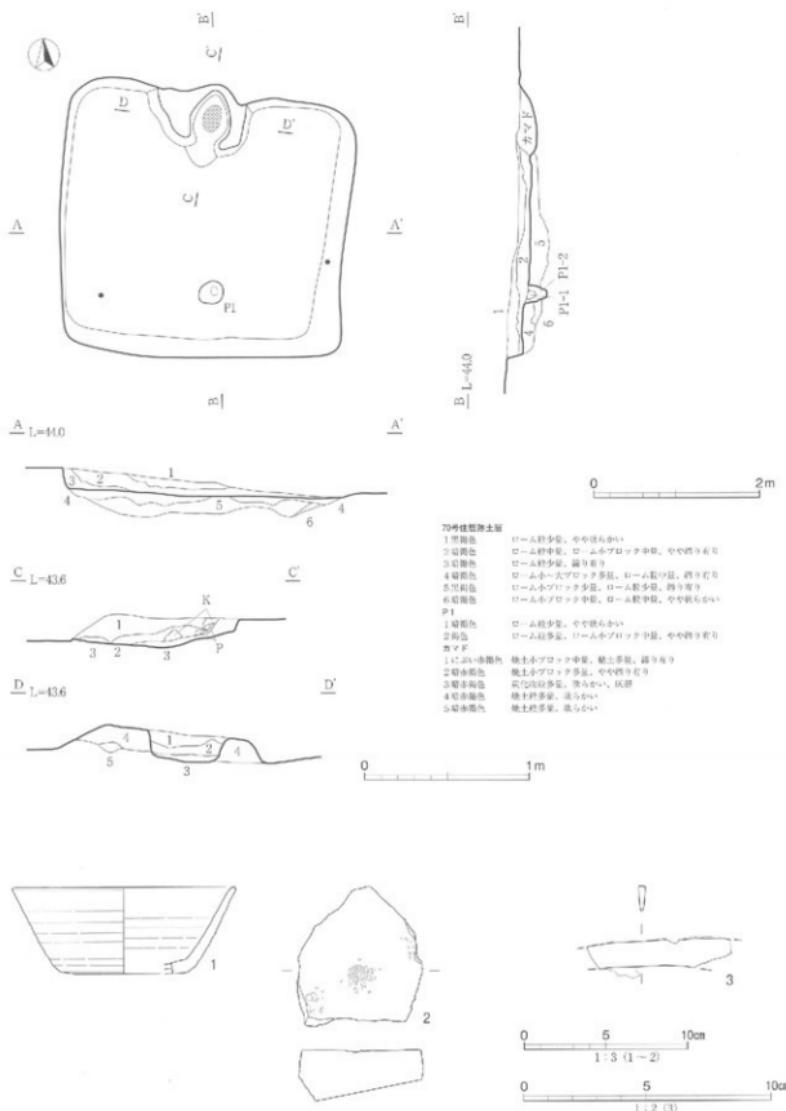
位置 A区中央部、M5グリッドにある。 規模と平面形 3.35 × 3.42 m の方形。 主軸方向 N - 14°
 - E 壁 壁高は約 20cm、外傾して立ち上がる。 床 全体にやや硬化が弱い。 ピット 1箇所。 P1
 は深さ 24cm、出入り口ピットと考えられる。 カマド 幅 132cmで、焚口部から煙道部までは 102cm、壁
 外への掘り込みは 20cm である。 覆土 黒褐色土から暗褐色土の自然堆積で、最近の植物の根の細かな搅
 亂が多く入り込み床下にまで及んでいる。 遺物 9世紀前葉頃の須恵器環、刀子が覆土中から出土してい
 る。 所見 出土遺物から9世紀前半頃の住居跡と考えられる



第184図 69号住居跡

表82 70号住居跡出土遺物観察表

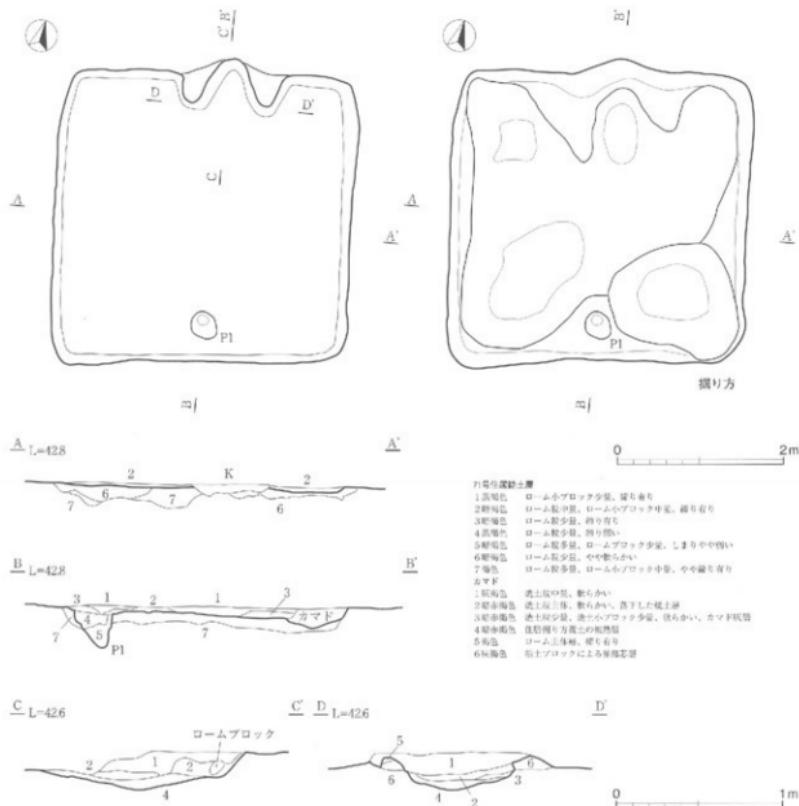
区段 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須志器 环	(134) 5.5 (7.7)	底部ハク切り削し、無調査。全体にロクロ目弱い。	石英、チャート	不良	灰白色	
2	石製台 石	長83cm、幅55cm、厚3.1cm、重237.1g、安山岩製。					
3	铁製品 刀子	長[5.8]cm、厚1.0cm、厚0.3cm、重5.22g					



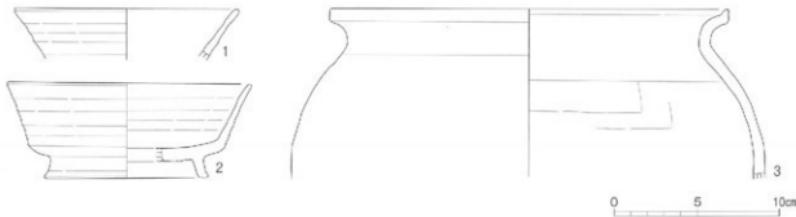
第185図 70号住居跡・出土遺物

71号住居跡（第186・187図）

位置 A区中央部、N 7グリッドにある。規模と平面形 3.50×3.44 mの方形。主軸方向 N - 12° - W 壁 高は約8cm、外傾して立ち上がる。床 全体に硬化している。ピット 1箇所。P1は深さ42cm、出入り口ピットと考えられる。カマド 幅170cmで、焚口部から煙道部までは130cm、壁外への掘り込みは18cmである。覆土 黒褐色土から暗褐色土の薄い堆積が見られた。遺物 覆土から須恵器壺、高台付壺、土師器壺が出土している。いずれも9世紀前葉頃の遺物である。所見 出土遺物から9世紀前葉頃の住居跡と考えられる。



第186図 71号住居跡



第187図 71号住居跡出土遺物

表83 71号住居跡出土遺物観察表

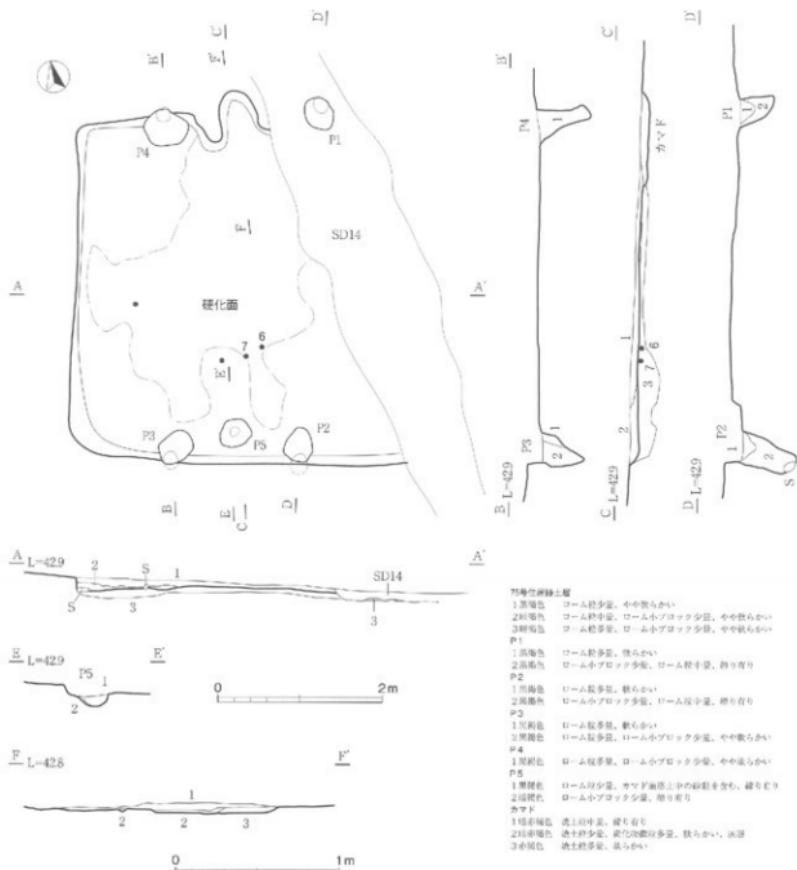
記版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 环	(13.6) — —	L1底部片。	長石	普通	暗灰色	
2	須恵器 高台付环	(14.8) 59 (9.9)	底部凹側へラケズリ後廻台詰り付片。	長石、黑色鉄分粒、 海綿骨針	普通	暗灰色	
3	土師器 类	(24.0) — —	口縁部内外面ヨコナデ。斜部外面ナダ、内面ヘラナダ。	長石、石英	普通	褐色	

75号住居跡（第188・189図）

位置 A区中央部、M 7・N 7グリッドにある。規模と平面形 4.56 × 4.12 m。主軸方向 N - 9° - E 膜 高は約 12cm。床 出入り口ビットからカマド前面にかけてと西壁寄りが特に硬化している。ビット 5箇所。P 1からP 4は主柱穴。P 5は出入り口ビットと考えられる。P 2の底部に自然石が入っている。カマド 左柱部の基底部が残存しており、やや住居内に袖部が伸びる。燃焼部の膜外への掘り込みは 28cm である。覆土 黒褐色～暗褐色土が薄く堆積している。遺物 須恵器の瓶片、土錐は床下から出土している。所見 壁際に斜立する主柱穴のある住居は8世紀後葉から9世紀前葉に見られる。遺物は全体に9世紀前半から中頃のものかと思われる。

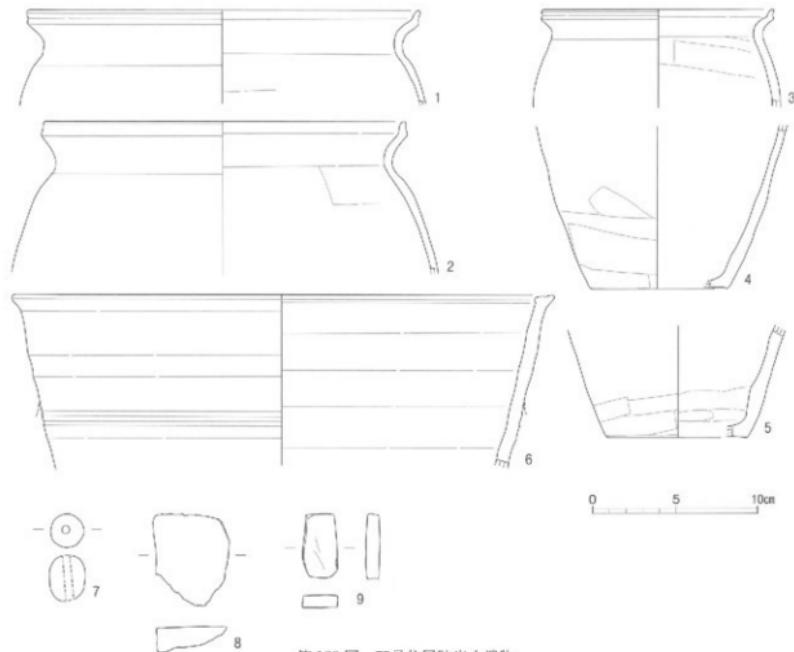
表84 75号住居跡出土遺物観察表

記版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 类	(21.8) — —	口縁部内外面ヨコナデ。斜部外面ナダ、内面ヘラナダ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	
2	土師器 类	(22.0) — —	口縁部内外面ヨコナデ。斜部外面ナダ、内面ヘラナダ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	
3	土師器 类	(14.0) — —	口縁部内外面ヨコナデ。斜部外面ナダ、内面ヘラナダ。	長石、石英、チャート、海綿骨針	良好	にぶい褐色	
4	土師器 类	— (8.6)	脚下部底張方向のヘラケズリ、内面摩耗。	石英	普通	褐色	



第188図 75号住居跡

図版番号	種別 器種	口径 器高 基盤	特 錄	胎土	焼成	色調	備考
5	土舞器 火	— (8.4)	頂下半部横方向のヘラケズリ、内面ヘラナダ。底部無剥離。	其石、石英	良好	にぶい褐色	
6	須恵器 瓶	(33.3) —	破断面は淡色透明白だが、器表面には赤褐色の酸化層を受けている。二次的な被熱痕。	長石、石英、チャート、海螺骨片	不良	にぶい褐色	

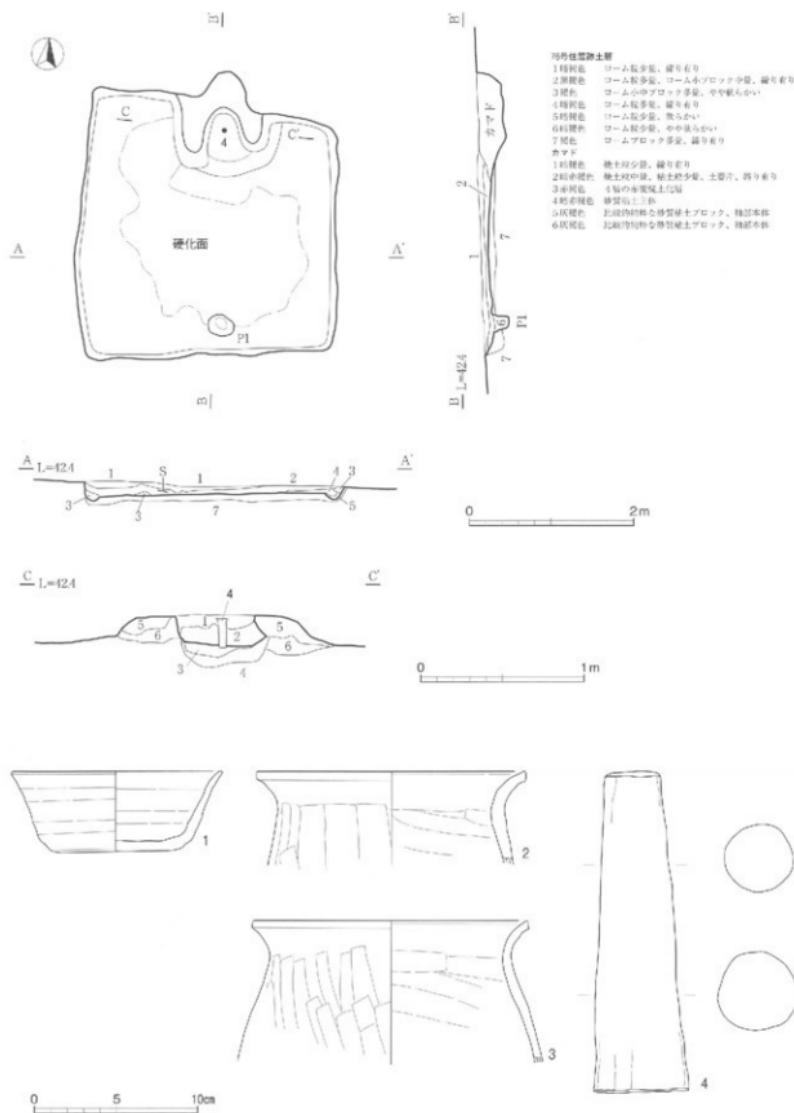


第189図 75号住居跡出土遺物

因版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
7	土製品 土瓦	径22cm、長29cm、乳径0.45cm、重10.42g					
8	石製品 砾石	長[5.6]cm、幅[4.6]cm、厚[1.5]cm、重44.37g、海浜岩製。					
9	石製品 砾石	長40cm、幅20cm、厚0.8cm、重12.36g、海浜岩製。					

76号住居跡（第190図）

位置 A区中央部、N 8グリッドにある。規模と平面形 $3.50 \times 3.12\text{ m}$ 主軸方向 N-6°-W 壁壁高は約20cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居跡中央部からカマド左側にかけて硬化している。ピット 1箇所。P 1は深さ18cm、出入り口ピットと考えられる。カマド 幅120cmで、焚口部から煙道部までは130cm、袖部壁外への掘り込みは38cmである。覆土 下層の黒褐色土はロームブロックを比較的多く含む。遺物 カマド燃焼室中央部から円柱状の土製支柱が正立状態で出土している。所見 住居の形態から9世紀頃の堅穴住居跡と考えられる。ロームブロックを含んだ下層覆土は人為堆積の可能性が考えられる。



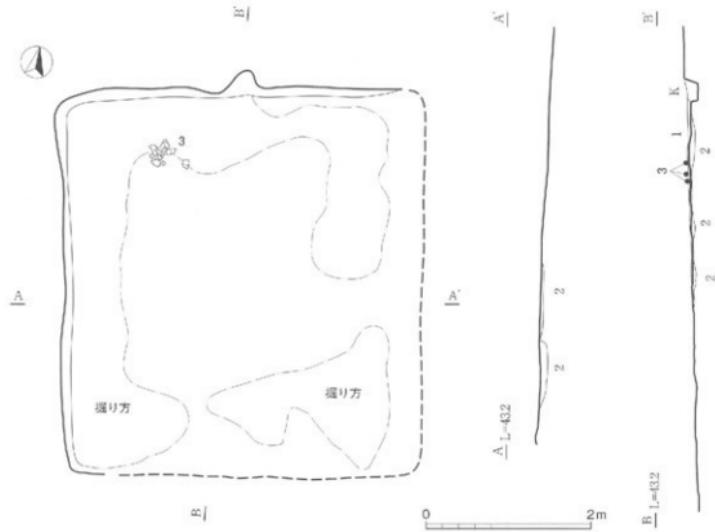
第190図 76号住居跡・出土遺物

表 85 76号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	灰陶器 壺	(13.2) 50 80	底部凹側へハラケリ後一方向へハラケリ。底部黒色付着物。	良石綿、黑色鉄分 粒	普通	灰色	60%
2	土器器 壺	(16.4) —	口縁部内外面ヨコナデ。剥離部外曲面方向のハラケリ、内面へラナデ。	長石、石英	良好	暗褐色	
3	土器器 壺	(16.8) — —	L1縁部内外面ヨコナデ。剥離部外曲面方向のハラケリ、内面へラナデ。	長石、石英	良好	暗褐色	
4	土製品 支脚	径32~58cm、長198cm、重574g		長石、石英	良好	黄褐色	

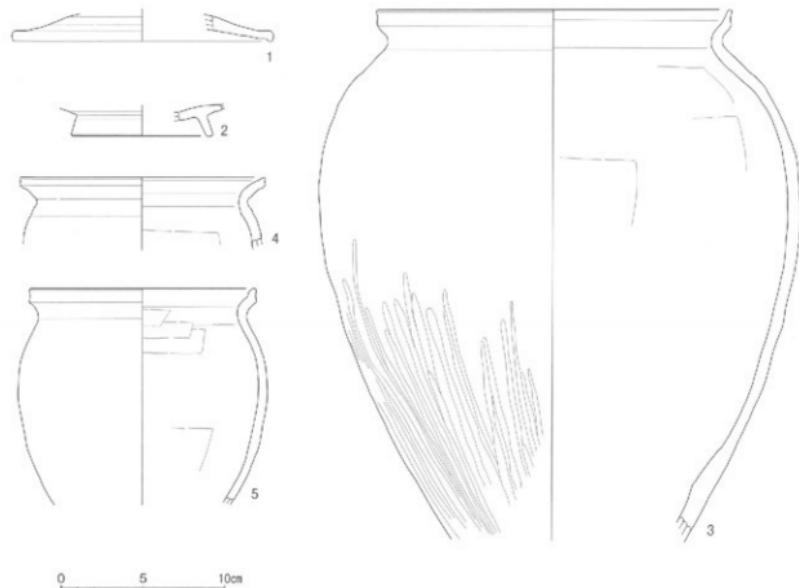
78号住居跡（第191・192図）

位置 A区中央部、M7・N7グリッドにある。規模と平面形 4.78×4.34 m の方形。主軸方向 N - 13° - W 肩壁から西壁にかけて僅かに残存している。床 住居跡床面はほとんど残存せず、床下の掘り方の範囲と地山ロームが露出している。ピット - カマド 北壁中央部に、僅かに壁外への掘り込みが見られる。覆土 覆土はほとんどなく、掘り方の覆土も浅く褐色のソフトロームが主体となっている。遺物 カマド左側前面の床上から土器器の甕が出土している。所見 主柱穴をもたないやや大型の住居跡で、出土遺物から8世紀後葉から9世紀前半頃の住居跡と考えられる。



78号住居跡土盤
1.壁根色 ローム粘り性、ローム小ブロック少數、壁も有り
2.底色 黒褐色 ソフトローム三層、やや軟らかい

第191図 78号住居跡



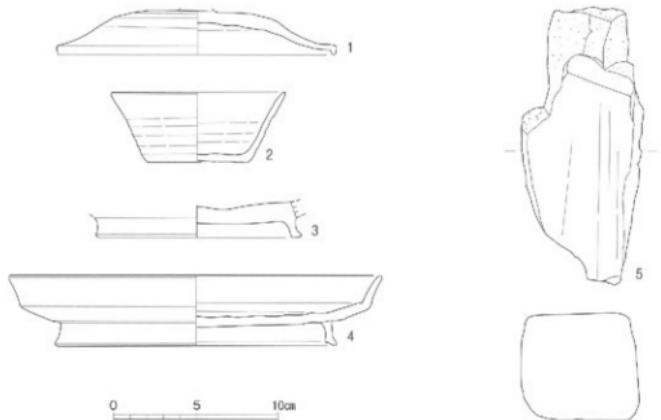
第192図 78号住居跡出土遺物

表86 78号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種 器 種	口縁 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須磨器 蓋	15.8 — —	口縁部片。口縁部を下方に短く折り返す。内外面とも ロクロ目が弱い。	長石、石英	不良	淡白色	
2	須磨器 高台付环	— — (8.6)	高台部片。	長石、石英	普通	灰色	
3	土師器 蓋	(21.5) — —	口縁部内外面ヨコナギ、腹上半部ナゲ、下半部ミガキ、 内面ヘラナギ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	25%
4	土師器 蓋	(15.0) — —	口縁部片。口縁部を上方に折み上げる。	長石、石英	良好	黒褐色	
5	土師器 蓋	(13.8) — —	口縁部片。口縁部を上方に折み上げる。	石英、チャート	良好	褐色	外面摩耗

82号住居跡（第193・194図）

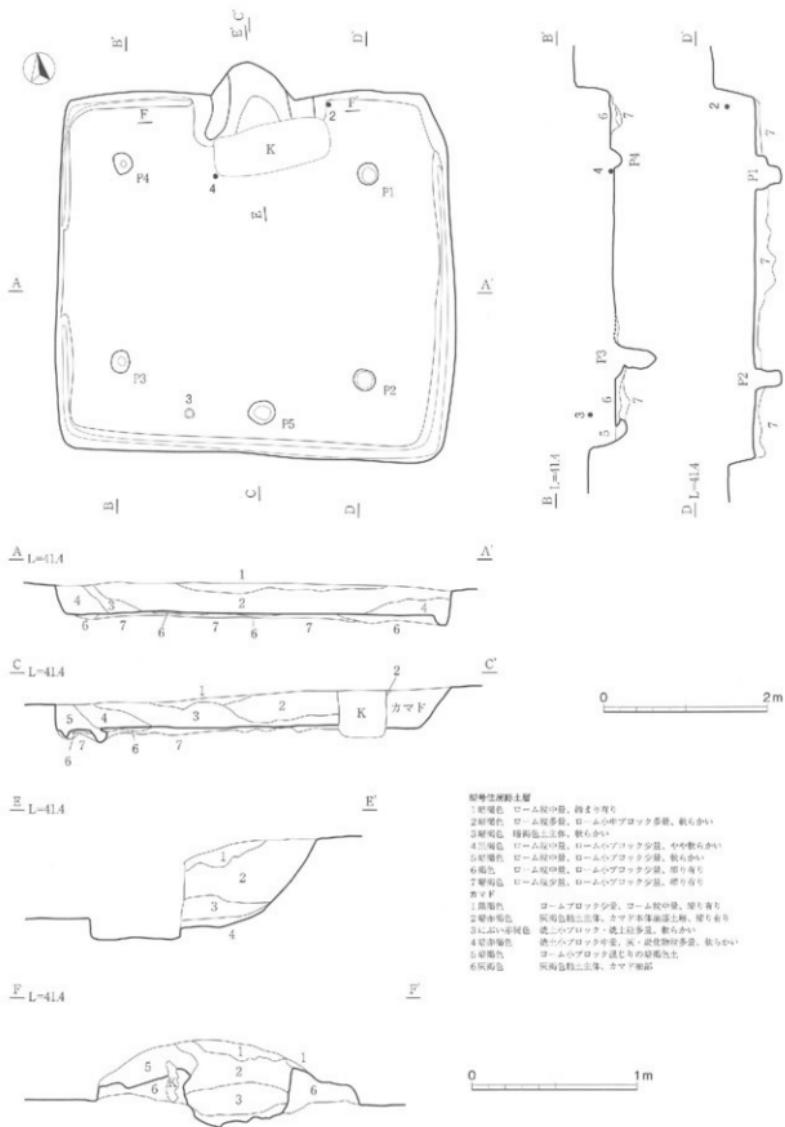
位置 A区の南東部N 10グリッドにある。 規模と平面形 488 × 484 mの方形。 主軸方向 N - 5° - E 壁 壁高は約38cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 床 明瞭な硬化面が見られず、全体に残りが悪い。 ピット 5箇所。 P 1からP 4は主柱穴。 P 5は出入り口ピットと考えられる。 カマド 幅126cmで、煙道部の壁外への掘り込みは42cmである。 覆土 南側からは、黒褐色土や褐色土の流入堆積層が見られ、その上層からは北側の床面を覆う主体層となる人為的な埋め戻し堆積が見られる。 遺物 須恵器壺、蓋、盤と砥石があり、須恵器壺は9世紀前葉頃のもの、須恵器の蓋は8世紀後葉頃のものである。 所見 住居は四本柱穴を持った8世紀後半頃のものと思われる。出土遺物は8世紀後葉～9世紀前葉頃のもので廃絶時期を示すものと思われる。



第193図 82号住居跡出土遺物

表87 82号住居跡出土遺物観察表

回復番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	粘土	焼成	色調	備考
1	須恵器 壺	17.0 — —	天井部細部ヘラケズリ、口縁部を下方に折り返す。	長石	良好	淡色	
2	須恵器 壺	10.6 43 60	全体～表面外面陶灰付着、底部調整不明。室内の焼き台として使用か？。	長石輝、黑色粒	良好	淡褐色	50%
3	須恵器 蓋	— 12.4	底部細部ヘラケズリ、後窯台貼り付け。ロクロ右回転。	長石輝、南緞骨針	普通	淡色	
4	須恵器 盤	22.8 43 17.2	底部細部ヘラケズリ後窯台貼り付け。	長石輝、石头	不良	灰白色	50%
5	石製品 砥石	長169cm、幅73cm、厚7.2cm、重1360g、云母片岩製。					

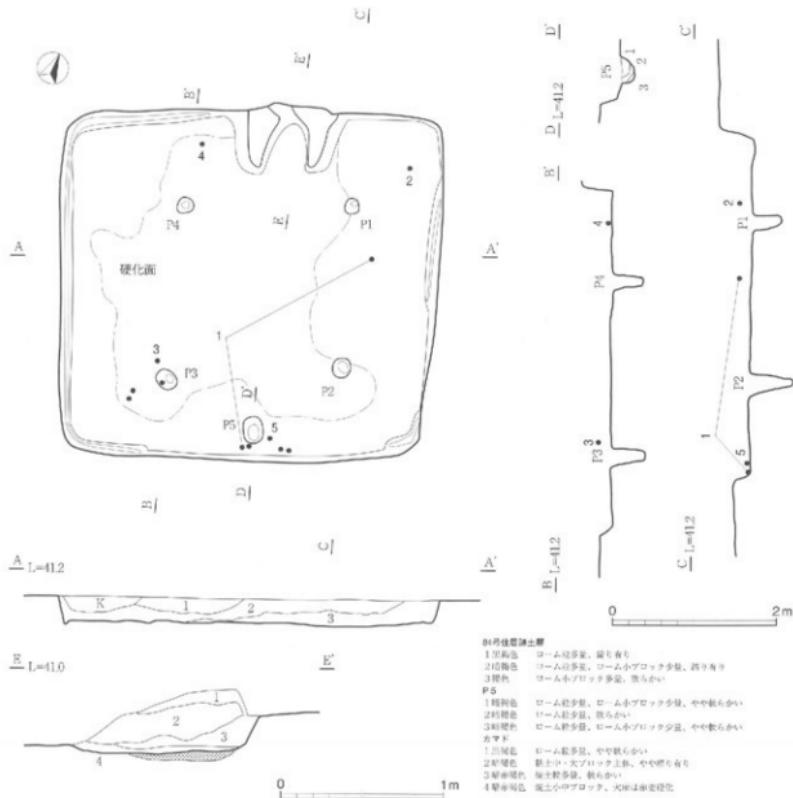


第194図 82号住居跡

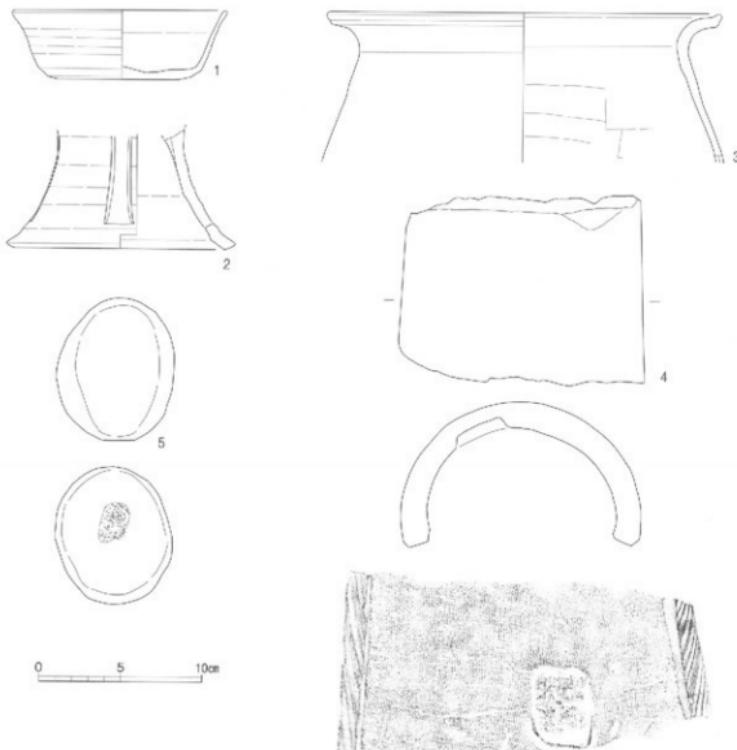
84号住居跡（第195・196図）

位置 A区南東部、O 10 グリッドにある。規模と平面形 $4.68 \times 4.40\text{ m}$ 主軸方向 N- 25° -W 壁壁高は約30cm、外傾して立ち上がる。床 カマドの前面から4本柱穴の間と西側からP3の周囲にかけて特に硬化している。ピット 5箇所。P1からP4は主柱穴。P5は出入り口ピットと考えられる。

カマド 全体の幅は125cm、袖部の長さは70cm、燃焼室の幅は40cm、奥行き約50cm、煙道部の壁外への掘り込みがほとんど見られない。覆土 上層は黒褐色土、下層は褐色土主体の覆土。遺物 土器類は覆土下層から破片で出土しており、4の丸瓦片はカマド左袖近くの床面から出土している。所見 出土遺物は土器類が8世紀代のもので、丸瓦は内面に布目痕の付く円柱に巻いて制作したものと思われ、内面に圧痕があるが、円柱原体の角状の突出物によるものと思われる。住居跡はカマド袖部の住居内への突出が長く、4本主柱穴を持つことから8世紀代の竪穴住居跡と考えられる。



第195図 84号住居跡



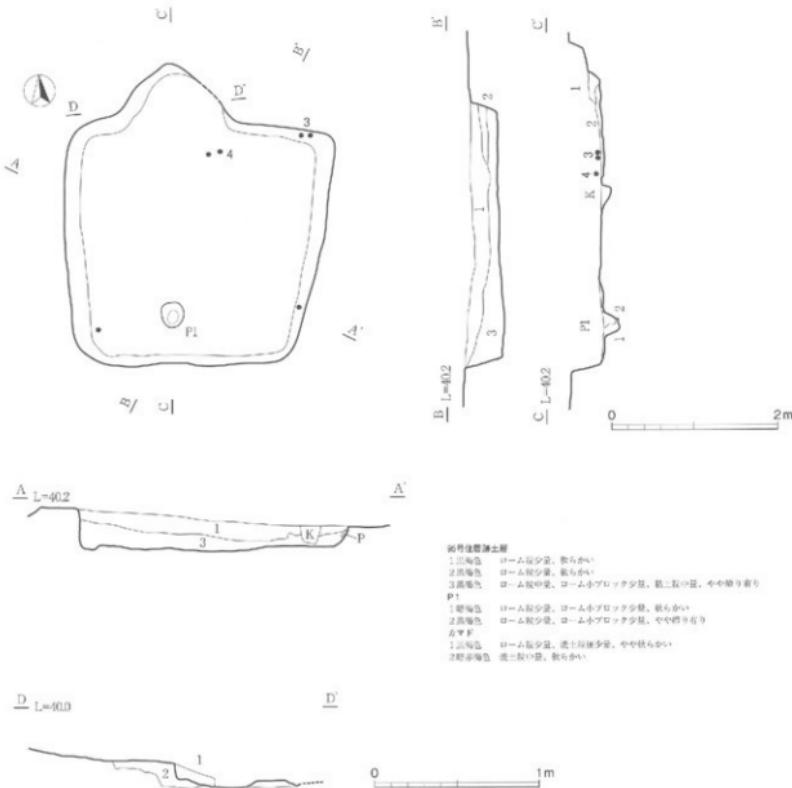
第196図 84号住居跡出土遺物

表88 84号住居跡出土遺物観察表

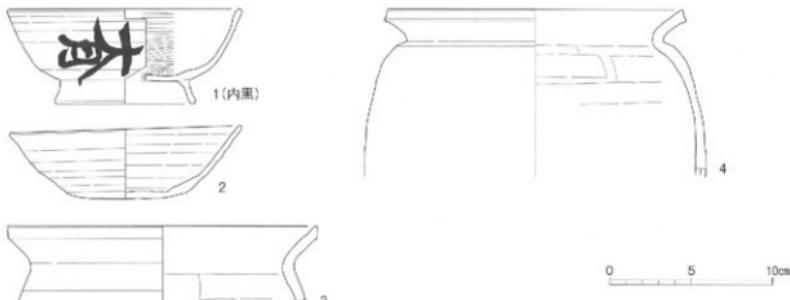
図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 環	13.1 4.3 7.5	施錆斑板ヘラケズリ。ロクロを回転。	長石、石英、沸結 骨粉	良好	灰色	80%
2	須恵器 高盤	— — (14.0)	構形片。四方透かし。	長石輝、石英	不良	灰白色	
3	土師器 甕	24.0 — —	口縁部内外面ヨコナギ。胴部外縁ナデ、内面ヘラナグ。	長石、石英	良好	褐色	
4	土製瓦 瓦	幅14.5cm、高さ8.7cm、厚1.7cm、重675g、	外面ナデ、内面布目上押压痕、端部彫取り2箇。				
5	石軸芯 串き石?	長8.8cm、幅7.0cm、重697g、凝灰質安山岩質。					

95号住居跡（第197・198図）

位置 A区の南東部O8・P8グリッドにある。 規模と平面形 3.68×3.28 mの台形状。 主軸方向 N-4°-E 壁高は約44cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 床 住居跡全体が硬化している。 ピット 1箇所。 P1は深さ20cm、出入り口ピットと考えられる。 カマド 煙道部の壁面への掘り込みの範囲はとらえられたが、火床や袖部などは残存していなかった。 覆土 黒褐色土主体で軟らかい。 遺物 1・2の壺類は覆土から、3・4の土師器甕は床上から破片で出土している。 所見 出土遺物や遺構の形態から、9世紀後葉頃の住居跡と考えられる。



第197図 95号住居跡



第198図 95号住居跡出土遺物

表 89 95号住居跡出土遺物観察表

回復 番号	種 類	口様 器高 底径	特 徴	地土	焼成	色様	備考
1	土器器 壺	144 59 86	底面部輪ヘラ切り縁と後クロナデ。体部外側ロクロナ デ、下葉面ヘラケズリ、内面墨色処理、ミガキ。	長石耀、石英粒	良好	に赤い褐色	体部背面墨色 「大刀」
2	埴輪器 环	142 45 76	底面部輪ヘラ切り縁と後オヤニ。体部外側ロクロナデ。 墨化施釉成。	石英、長石、チャート、微砂粒	普通	に赤い褐色	90%
3	土器器 壺	180 — —	口部剖析。口縁部分は上方に構み上げられ、外側が直立 した平底型となる。横部外側斜径のヘラナデ。内曲積方 向のヘラナデ。	石英、長石、チャート、微砂粒	良好	に赤い褐色	
4	土器器 壺	182 — —	口縁部分。口縁部は底部に向かって肥厚し底部は平底面 となる。底部外側ナデ。内曲積方向のヘラナデ。	長石、石英、チャート	良好	に赤い褐色	

2 挖立柱建物跡

A区では、7棟の掘立柱建物跡を確認した。2・5・8～10号建物跡は欠番である。

1号掘立柱建物跡（第199図）

位置 A区北部、L2グリッドに位置する。平面形・規模・柱間距離 古墳時代前期の5号住居跡と重複する。2間×2間の東西棟と推定する。桁行3.91m×梁行2.57mを測り、長方形を呈する。主軸方位N-7°-W 柱穴・覆土 推定8本構造のうち、5箇所確認した。覆土の状況は、いずれも抜取であろう。P1底面には、柱材端部の硬化圧痕（直径15cm）を検出した。遺物 土師器・須恵器の細片がわずかに出土した。所見 5号住居跡覆土中に本建物跡の柱穴を明瞭に確認できなかった。構築および廃絶時期は不明ながら、主軸方位は21・42号住居跡に比較的近い。

3号掘立柱建物跡（第199図）

位置 A区北部、K 3グリッドに位置する。平面形・規模・柱間距離 18号住居跡と26号土坑を破壊し、17号住居跡と重複する。2間×2間の南北棟である。桁行3.69m×梁行3.41mを測り、正方形に近い。主軸方位 N-3°-E 柱穴・覆土 6箇所確認した。本来は8本構造と推定する。全て抜取と判断した。遺物 P 2抜取部分から2の須恵器甕口縁部が、P 3抜取部分から1の須恵器壺が出土した。所見 17号住居跡の覆土を精査したが柱穴は確認できず、本建物跡の方が新しいと判断する。出土遺物から、廃絶時期は9世紀前葉頃と考えられる。

4号掘立柱建物跡（第200図）

位置 A区北部、L 3グリッドに位置する。平面形・規模・柱間距離 東西は北辺2間・南辺3間×南北2間で、中央に東柱状の小ピットを伴い、總柱構造である。桁行北辺3.72m・南辺4.2m×梁行東辺3.38m・西辺3.74mを測り、不整台形状を呈する。主軸方位 N-3°-W 柱穴・覆土 10箇所ある。P 2~4・8では柱痕と根固めを検出したが、他は明瞭な抜取であった。遺物 土師器・須恵器の細片がわずかに出土した。所見 主軸方位は21・42号住居跡に近似している（梁方向N-3°-W）。

6号掘立柱建物跡（第200図）

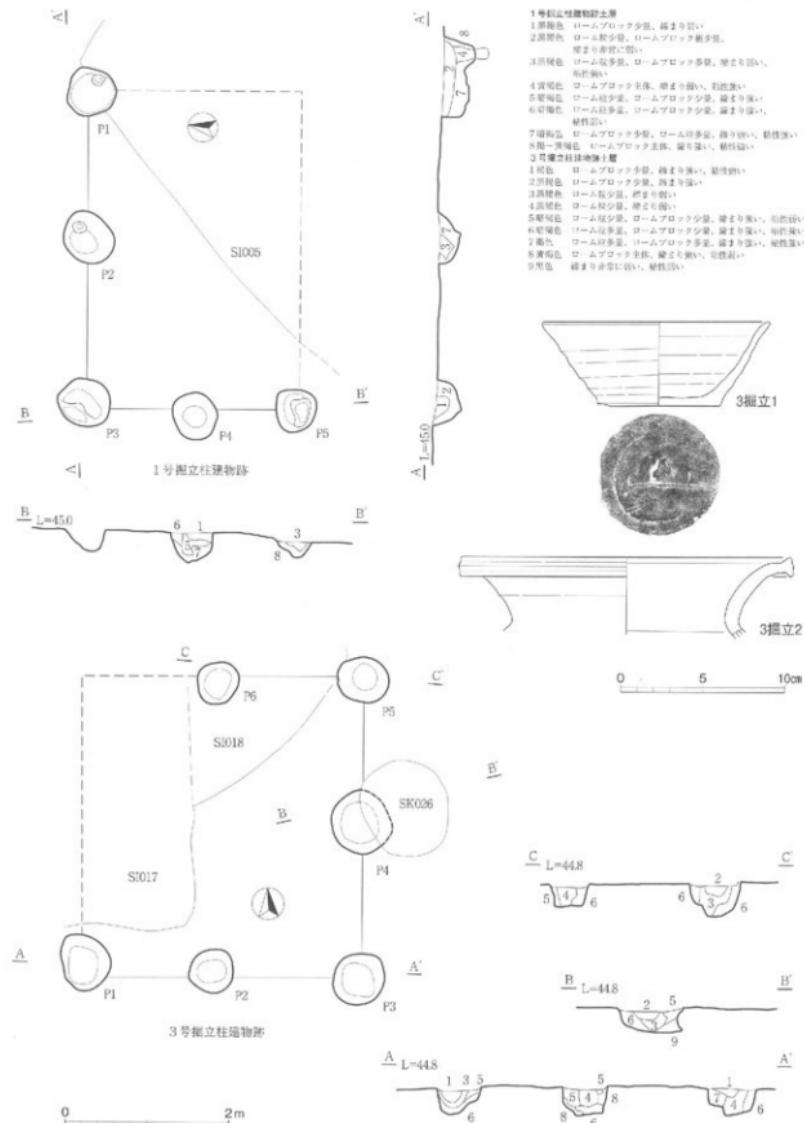
位置 A区北部、L 4グリッドに位置する。平面形・規模・柱間距離 桁行東辺3間・西辺2間×梁行2間で、南北棟の側柱構造である。桁行東辺3.78m・西辺3.57m×梁行東北辺3.27m・南辺3.0mを測り、逆台形状を呈する。主軸方位 N-17°-W 柱穴・覆土 9箇所ある。抜取痕は明瞭であった。P 8・9は浅く小さい。遺物 土師器・須恵器の小片が出土した。所見 主軸方位が7号掘立柱建物跡に近似することから、9世紀代に帰属する可能性がある。

7号掘立柱建物跡（第201・202図）

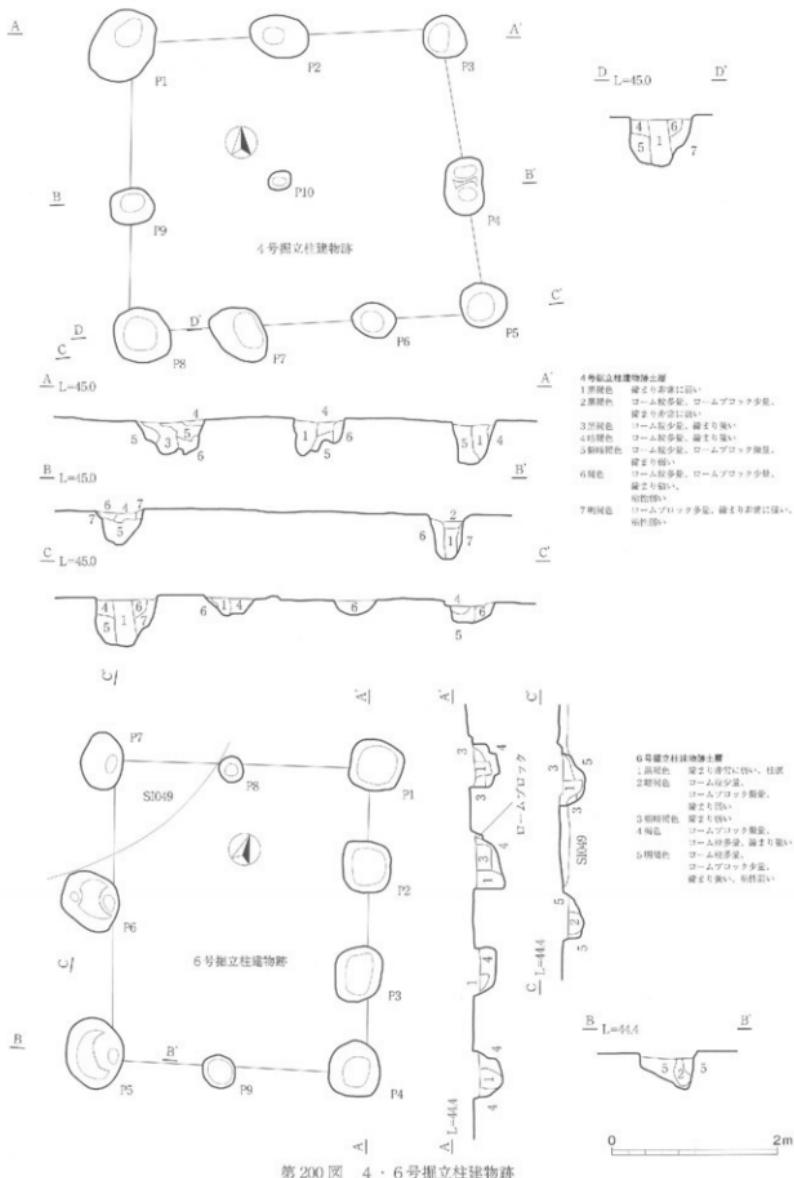
位置 A区北部、L 3グリッドに位置する。平面形・規模・柱間距離 桁行3間×梁行北辺2間・南辺3間の身舎に、桁行3間×梁行1間の東庇が付く。身舎には東柱状柱穴が1箇所ある。桁行東辺と庇の柱穴群は連結する。桁行5.03m×梁行3.65m、庇梁行0.81mを測り、平行四辺形を呈する。主軸方位 N-18°-W 柱穴・覆土 身舎と庇で15箇所あり、他に小柱穴が5箇所ある。全て抜取で、ロームブロック主体上で完全に閉塞された柱穴もある。遺物 須恵器の蓋・盤・甕や上製支脚等が出土した。所見 主軸方位は6号建物跡に近似する。出土遺物から、廃絶時期は9世紀前葉頃であろう。小柱穴が点在し、建替えや補強の可能性がある。北西隅の柱穴は10世紀の22号住居跡によって消滅している。

表90 3号掘立柱建物跡出土遺物観察表

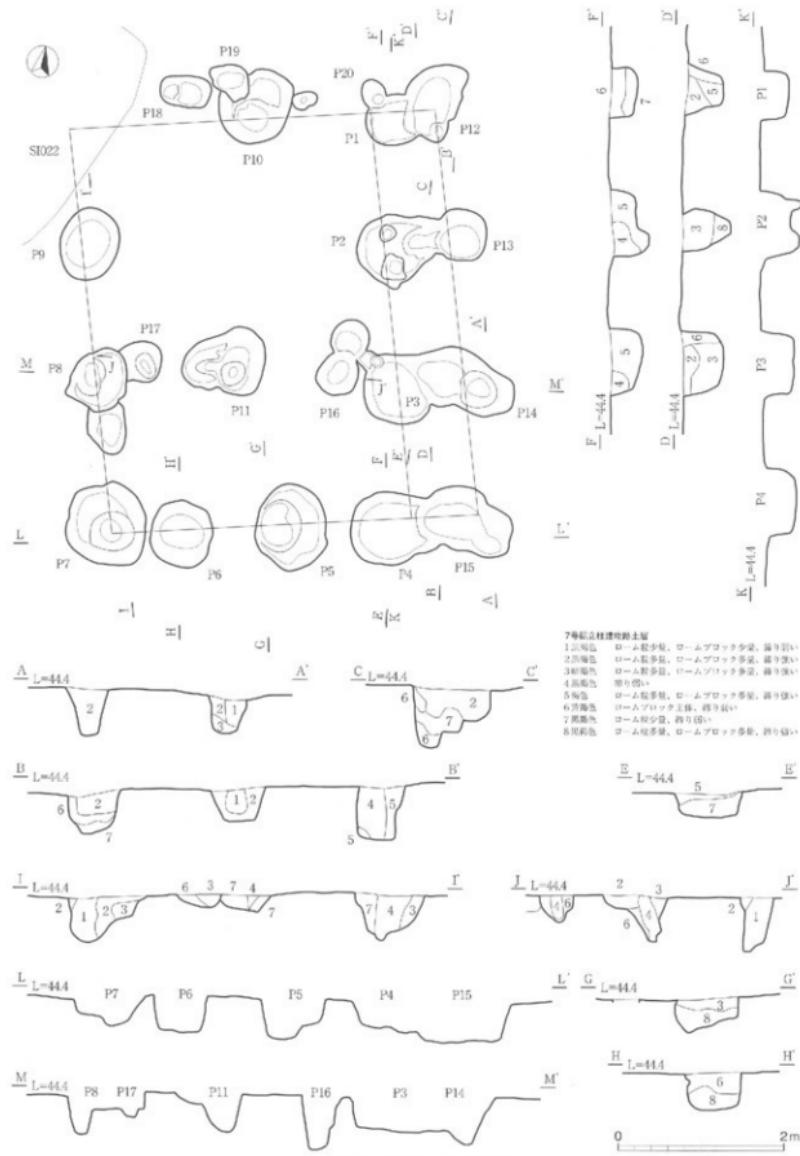
回収 番号	種 別 器 種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 甕	(13.6) 52 75	底部底盤へ切り離し、ロクロ右円鉢。ヘラ記号「-」。	良石織、泥棒骨針、 黑色融出斑	苦渋	灰褐色	60%
2	須恵器 甕	(10.0) — —	L型断片。	長石	良好	灰褐色	



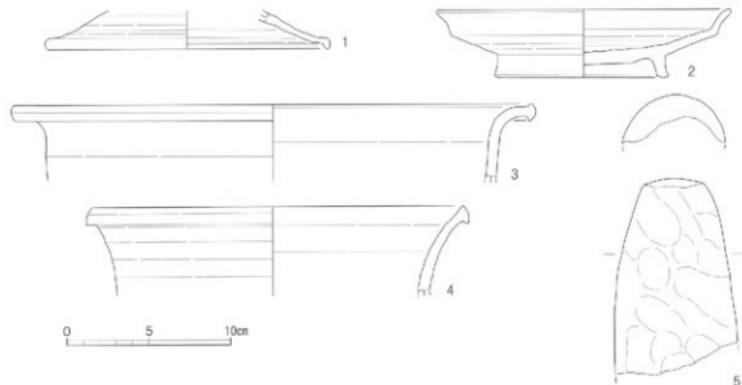
第199図 1・3号掘立柱建物跡・出土遺物



第200図 4・6号柱立柱跡



第201図 7号柱立柱建物跡



第202図 7号掘立柱建物跡出土遺物

表91 7号掘立柱建物跡出土遺物観察表

回数 番号	種別 器種	口径 器底 底径	特徴	粘土	焼成	色様	備考
1	須恵器 壺	(17.2) —	口縁部片。口縁端部を下方に折り返す。	長石、石英、チャート、海綿骨針微量	普通	灰褐色	
2	須恵器 壺	(17.8) 4.2 10.5	底部周縁部をケズリ後黃白詰り付け。	長石、石英、海綿骨針微量	普通	灰褐色	40%
3	須恵器 壺	(32.0) —	口縁部片。跡(バケツ)形の窓。	長石	良好	灰褐色	
4	須恵器 壺	(23.0) — —	口縁部片。	石英、長石	良好	暗灰褐色	P7以上
5	土製瓦 支持	長 [12.0] cm. 幅 7.4cm. 厚 - cm. 重 [131.7] g.		長石、石英、金雲母	普通	褐色	

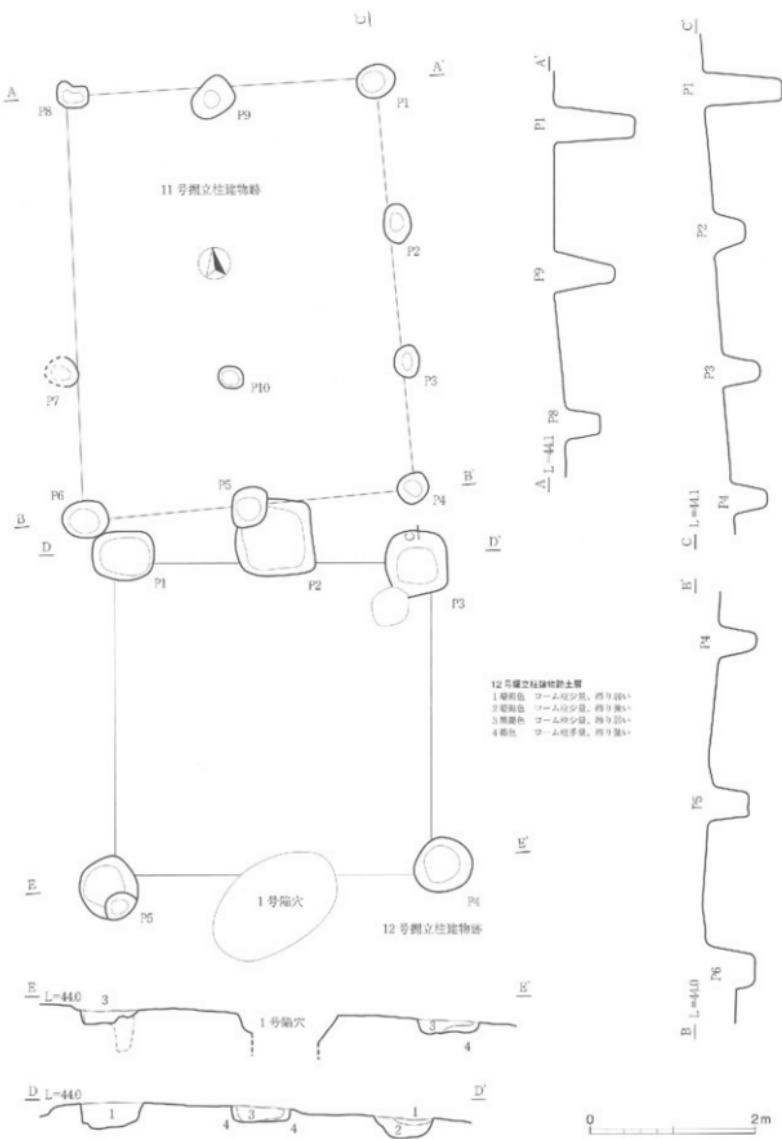
11号掘立柱建物跡（第203図）

位置 A区北部、M3グリッドに位置する。平面形・規模・柱間距離 桁行3間×梁行2間で東柱状柱穴が1箇所ある。桁行東辺5.09m・西辺5.23m×梁行北辺3.76m・南辺4.06mを測り、台形状を呈する。

主軸方位 N-4°-E 柱穴・覆土 10箇所あり、桁行西辺の柱穴は擾乱によって破壊を受ける。P1・4・6・7で直径20cm前後の抜取痕を検出した。遺物 土師器・須恵器の細片がわずかに出土した。所見主軸方位は21・31号住居跡と近似している。

12号掘立柱建物跡（第203図）

位置 A区北部、M4グリッドに位置する。平面形・規模・柱間距離 桁行2間×梁行1間の東西棟であろう。桁行北辺3.54m・南辺4.12m×梁行3.96mを測り、台形状を呈する。主軸方位 N-7°-E 柱穴・覆土 6箇所ある。概して浅く、深さ20cm前後である。南辺中央の柱穴は縄文時代の1号陥穴と重複し、確認できなかった。遺物 土師器・須恵器の細片がわずかに出土した。所見 梁間が4m近くあり、中間に浅い柱穴が存在した可能性がある。本建物跡のP2は、11号掘立柱建物跡のP5によって切られている。

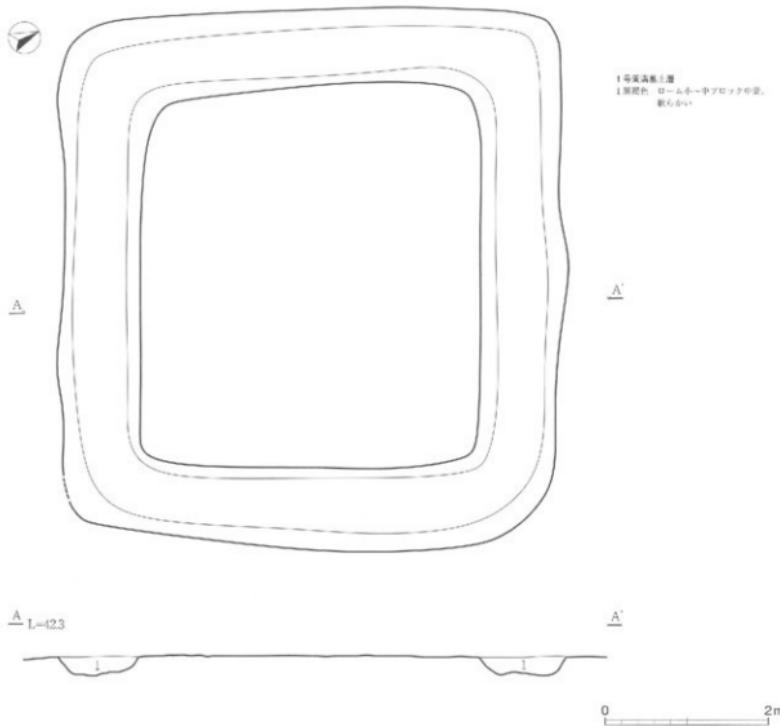


第203図 11・12号掘立柱建物跡

3 方形周溝状遺構

1号方形周溝状遺構（第204図）

調査区南部のN8～N9グリッドには、方形周溝墓に形の似た、方形に廻る溝遺構がある。全体の規模は、南北方向 6.10m × 東西方向 6.60m、溝幅は 0.90～1.05m で、深さ約 25cm を測る。出土遺物がなく時期は不明であるが、溝覆土は黒褐色土で軟らかく、奈良・平安期の遺構覆土と共通しているように思われる。



第204図 1号方形周溝状遺構

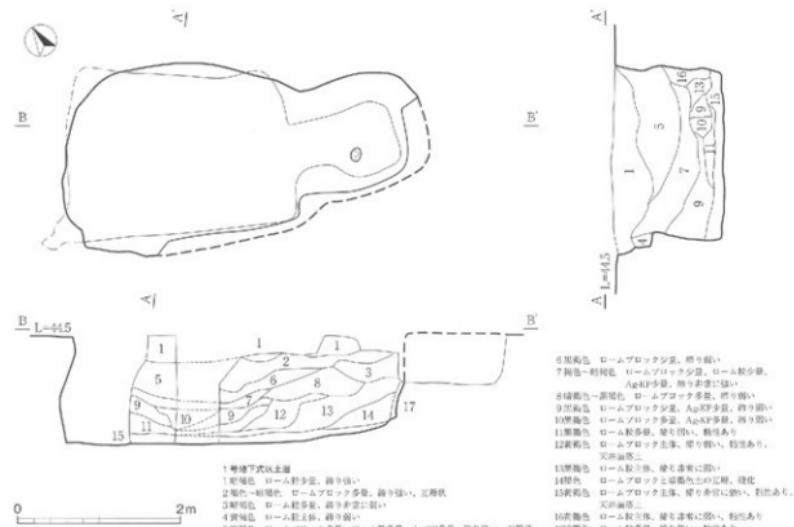
第5節 中世以降

1 地下式坑（第205～209図）

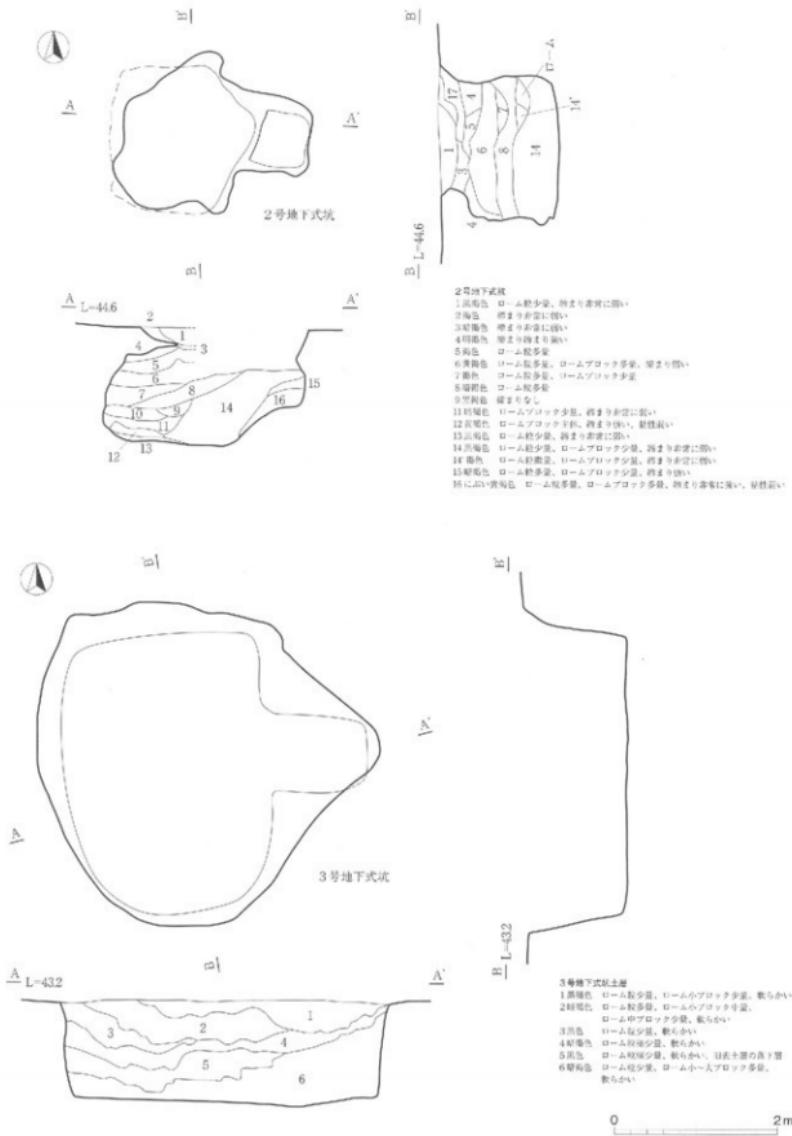
地下式坑は、調査区北部で1・2号地下式坑の2基（とともに26号住居跡と重複）、中央部で3～6号地下式坑の4基、中央部東端で浅く小規模だが地下式坑と似た平面形の大型土坑があり、7号地下式坑としている。1～6号の地下式坑は竪坑入口部を東に向かって、7号地下式坑は、西向きに開口している。竪坑から主室を見たときの主室の平面形は、1と6号が縦長で、3～5、7が横長平面形である。2号地下式坑は、主室の規模が他とくらべて特に小型で、天井が一部残り、主室と竪坑の間に段差が伴う。縦長平面の主室を持つ6号地下式坑は、竪坑の底面から主室の底面まで、緩やかな傾斜を持っている。その他の地下式坑は竪坑底面と主室底面は傾斜や段差をもたず平坦な状態である。6号地下式坑の出土遺物は古瀬戸の平塗など、15世紀代のもの、5号地下式坑出土の鉢類も低高台を持ち同じ頃のものかと思われる。規模等は一覧表に示している。

表92 地下式坑一覧表

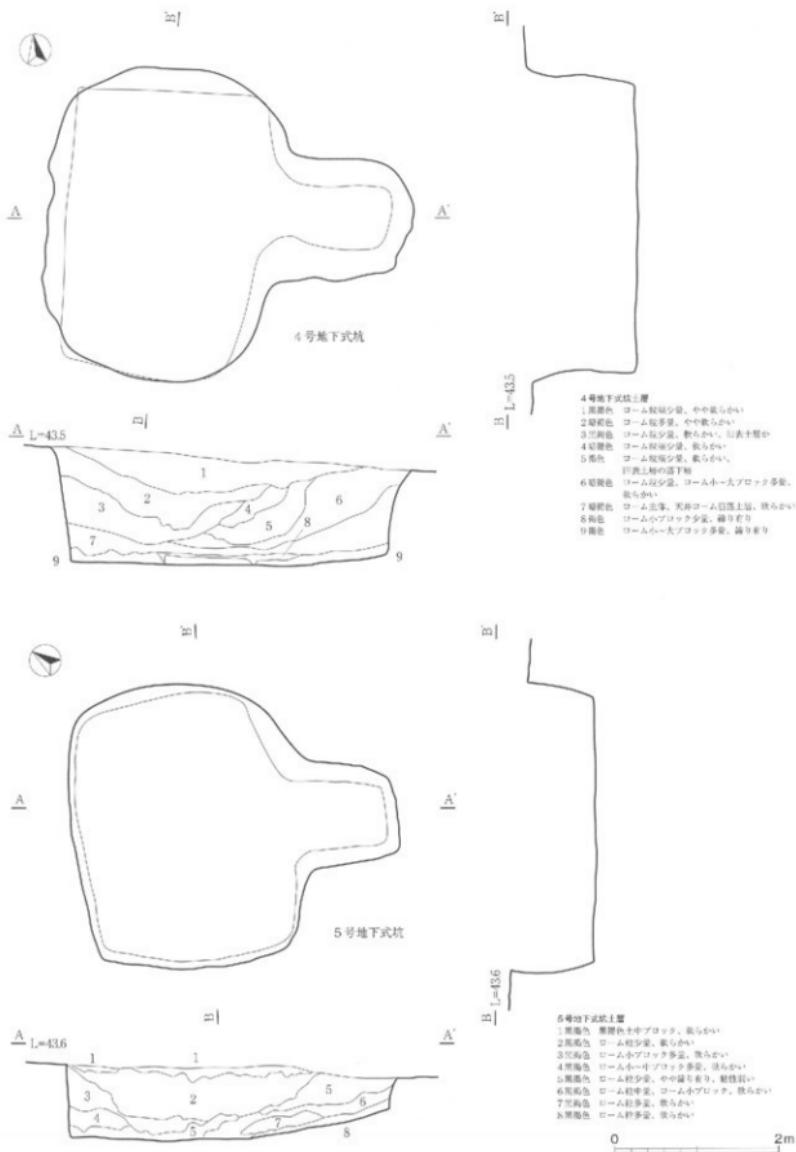
遺構名	位置	主室平面形態	規模（溝道×窓洞×深さ、cm）	備考
1号地下式坑	M2	縦長方形	410 × 210 × 132	
2号地下式坑	M3	横長長方形	233 × 176 × 138	
3号地下式坑	M7	横長長方形	400 × 385 × 130	
4号地下式坑	M6	横長長方形	410 × 390 × 140	常津広口型
5号地下式坑	M5	横長長方形	403 × 353 × 80	常滑描模、内耳鳴
6号地下式坑	M6	縦長長方形	554 × 250 × 130	古瀬戸平塗・深墨、内耳鳴
7号地下式坑	D7	横長長方形	340 × 310 × 40	



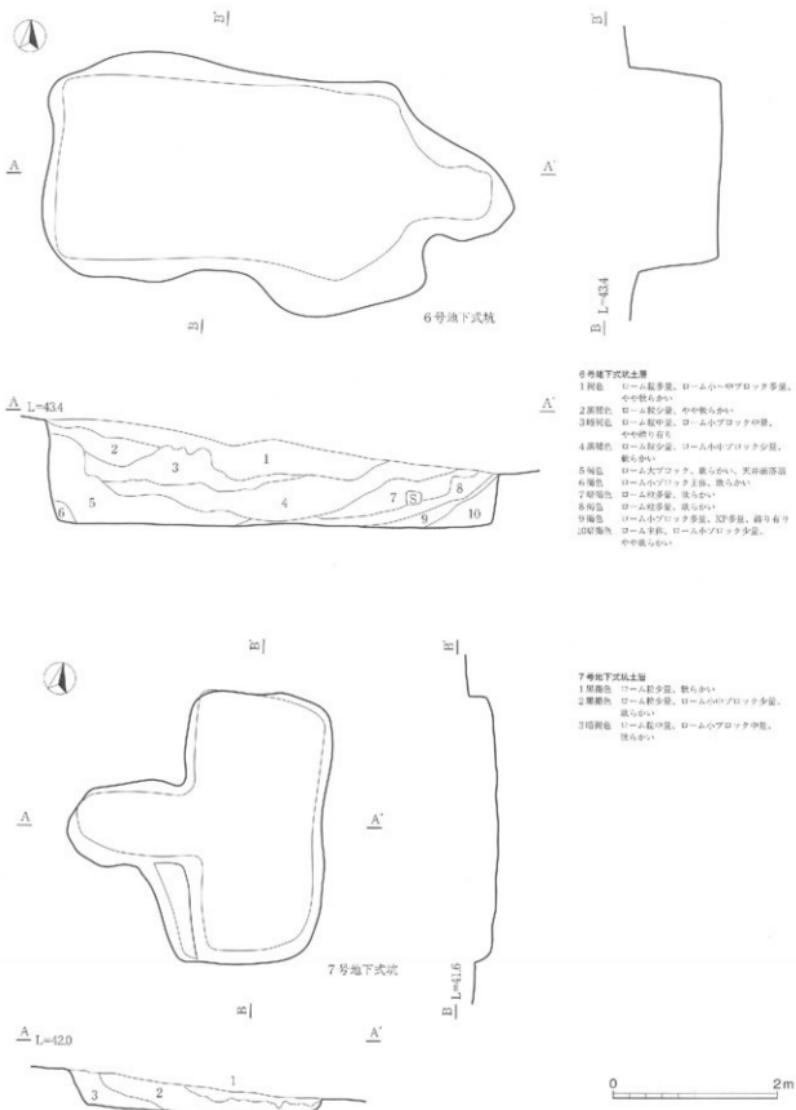
第205図 1号地下式坑



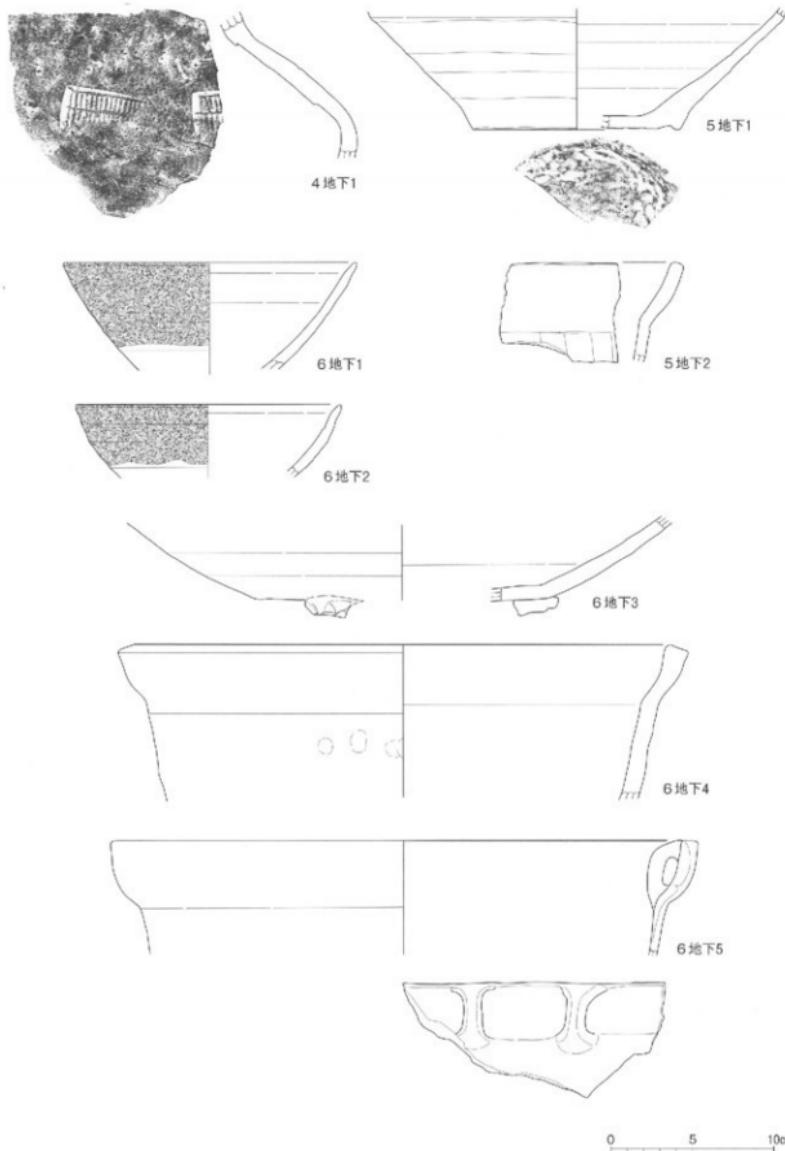
第206図 2号・3号地下式坑



第207図 4号・5号地下式坑



第208図 6号・7号地下式坑



第209図 地下式坑出土遺物

表93 地下式坑出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4地下 1	常滑 広口瓶	-	肩部片。彫刻ナデ、肩部ヘタナデ、スタンプ文を印刻する。	良石	良好	灰青褐色	
5地下 1	常滑 深鉢	(12.6)	体部外側上半部ロクロナデ、下半部回転方向のヘタケズリ。高台は低い三角高台。	良石	良好	灰青褐色	
5地下 2	内耳皿	-	体部と口縁部の境で屈曲する。口縁部内外凹コロナデ、体部外回転方向のヘタケズリ。	右英を含む鐵砂粒	良好	に赤い褐色(内)	
6地下 1	古墳口 平底	(18.0)	口縁部分。体部は直線的に開く。	鐵砂	不良	灰白色	
6地下 2	古墳口 平底	(16.2)	口縁部分。体部はやや内湾して立ち上がる。	鐵砂	良好	灰白色	
6地下 3	古墳口 深皿	-	体下半部底部片。底部に低い足が付く。	鐵砂	良好	灰青色	
6地下 4	内耳皿	(35.0)	口縁部分。体部と口縁部の境で屈曲する。口縁部内外面 石英、海藻骨針 コロナデ、体部外回転屈曲。	普通	に赤い褐色		
6地 5	内耳皿	(36.0)	体部と口縁部の境で屈曲する。口縁部内外面ヨコナデ、脚部若干 体部外回転屈曲。	不良	浅黄褐色		

2 井戸 (第5・210・211図)

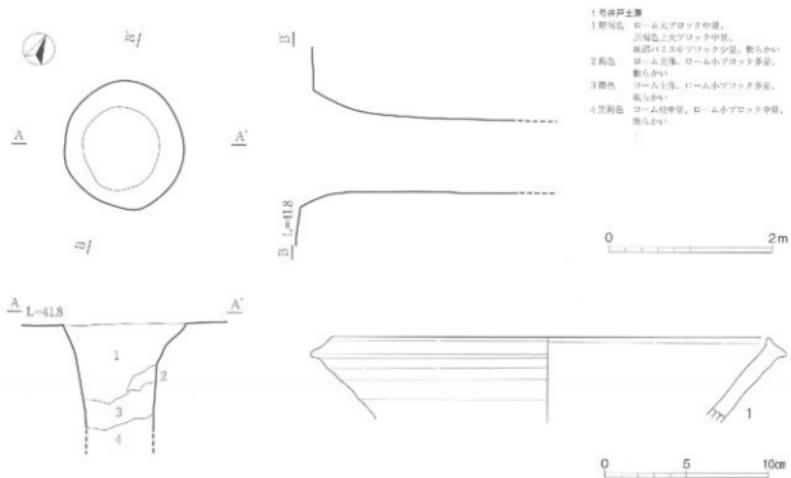
A地区中央部東端に1号・2号井戸の2基、南部に3号井戸1基の合計3基の井戸がある。1号井戸からは常滑攝鉢片が、3号井戸中層からは、大きさ5~20cmの花崗岩・安山岩・砂岩等の被熱礫が38個と内耳皿片が出土している。出土遺物から見て中世以降の時期の井戸と見られる。その他規模等は遺構一覧表を参照していただきたい。

表94 井戸一覧表

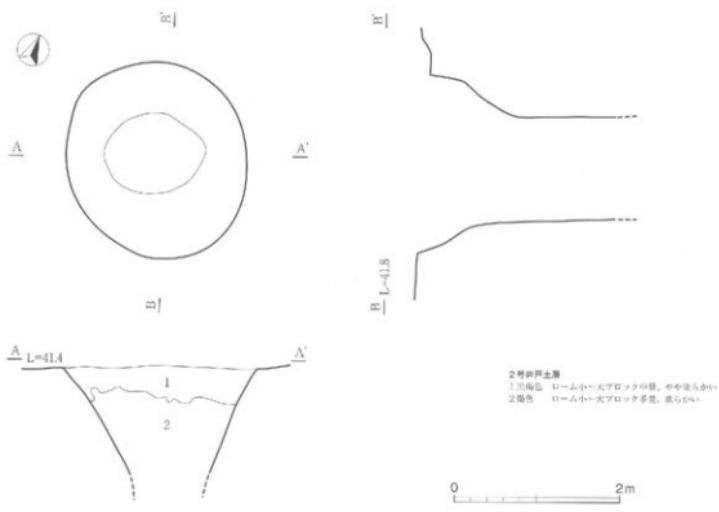
井戸名	位置	平面形態	規模 (直径×口径×深さ, cm)	備考
1号井戸	D7	円形	80 74 260 常滑攝鉢	
2号井戸	D7	円形	284 226 240	
3号井戸	O9	円形	96 84 200	

表95 井戸出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1#井戸 1	常滑 深鉢	(29.0)	口縁部分。体部内外凹ロクロナデ。	良石、石英	良好	褐色(外)	
3#井戸 1	内耳皿	-	体部と口縁部の境の屈曲が弱く、体部から内側気泡に口 縫部に当る。	良石、海藻骨針 混入	普通	黒褐色	旧SK79



第210図 1号井戸・出土遺物



第211図 2号井戸

3 土坑（第5・212図）

A区全体で116基の土坑があり、A区北部では、略円形あるいは楕円形の土坑が計83基確認された。大きく分けると、直径0.9m前後の略円形、直径1.2m前後の略円形、長径1.4～1.6m前後の楕円形の3種類がある。深さは12～47cmの間に収まり、30cm前後が主体である。その分布は集中し、土坑同士の重複事例が多い。覆土は暗褐色系で、多量のロームブロックを斑状に混入する場合もみられ、基本的にはほとんどが埋め戻されていると考えられる。出土遺物はほぼ皆無で、わずかに奈良・平安時代の須恵器や土師器の小片が認められたが、いずれも混入であろう。これらの土坑は弥生時代や奈良・平安時代の住居跡を破壊しているが、ただし、26号土坑は3号掘立柱建物跡P4によって切られていた。これら土坑群の構築時期が古代以降であることはほぼ間違いないが、個別遺構の詳細時期は不明とせざるをえない。近現代の円形の里芋穴が多く含まれる可能性も多い。

A地区南部では、地下式坑ほど大型ではないが、一辺2mを超えるやや大型の土坑がある。72号土坑は方形で、古瀬戸深皿片が出土している。出土遺物はないが中世の遺構の可能性のあるものは69号土坑で、底面にピットを2箇所持ち方形竪穴のような形状である。その他の土坑は長辺2m、短辺1m以下の長方形の土坑で、出土遺物がないが覆土は近世以降の時期に見られるような堆積土で芋穴的なものの可能性が考えられる。一覧表として掲載している。



第212図 72号土坑出土遺物

表96 72号土坑出土遺物観察表

団体 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	古瀬戸 深皿	(3.0) — —	口縁部。内外面淡オーリーブ色の灰被歩け。	積出。灰色青白	良好	淡黄色	

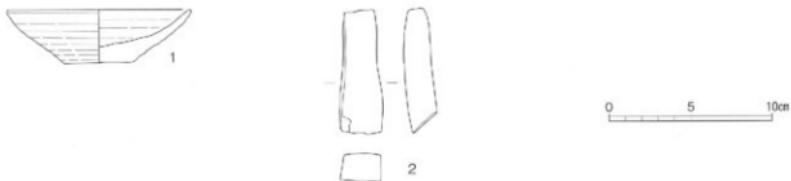
表97 A区土坑一覧表

遺構名	位 置	平面形態	規格 (cm)	備 考	
			長径	短径	深さ
1号土坑	L2	円形	145	110	30
2号土坑	M2	円形	130	124	33
3号土坑	K4	円形	125	120	34
4号土坑	K4	円形	130	115	38
5号土坑	K3	円形	96	79	32
6号土坑	L4	椭円形	140	120	25
7号土坑	K4	円形	—	—	46
8号土坑	K4-L4	椭円形	75	—	25
9号土坑	K4-L4	椭円形	155	123	30
10号土坑	K4	椭円形	115	104	19
11号土坑	L3-L4	椭円形	150	126	24
12号土坑	L4	円形	135	125	21
13号土坑	L4	椭円形	174	122	25
14号土坑	L4	円形	110	109	38
15号土坑	K4-L4	円形	130	123	32
16号土坑	K4-L4	円形	140	128	26
17号土坑	L4	椭円形	150	129	32
18号土坑	L4	円形	150	120	21
19号土坑	L4	椭円形	139	—	12
20号土坑	N2	円形	123	—	16
21号土坑	L3	椭円形	112	98	44
22号土坑	N2	円形	82	—	20
23号土坑	L3	椭円形	149	112	—
24号土坑	L3	円形	116	—	45
25号土坑	K3	椭円形	168	114	25
26号土坑	K3	椭円形	118	105	33
27号土坑	K3	椭円形	135	123	34
28号土坑	K3	椭円形	103	89	—
29号土坑	L3	円形	121	116	47
30号土坑	L3	椭円形	100	81	37
31号土坑	L3	椭円形	88	73	15
32号土坑	L3	円形	85	82	26
33号土坑	L3	円形	97	—	18
34号土坑	L3	円形	105	101	20
35号土坑	L3	椭円形	100	75	13
36号土坑	L3	椭円形	156	140	30
37号土坑	K3	椭円形	70	66	—
38号土坑	K4	円形	93	—	11
39号土坑	K4	円形	120	110	22
40号土坑	L4	椭円形	115	—	23
41号土坑	L4	椭円形	104	90	25
42号土坑	L4	椭円形	106	91	16
43号土坑	L4	円形	120	115	22
44号土坑	N7	長方形	72	—	37
45号土坑	N7	長方形	—	95	20
46号土坑	M5	長方形	163	52	97
47号土坑	—	—	—	—	欠番
48号土坑	L6	長方形	100	—	40
49号土坑	N5	長方形	200	80	36
50号土坑	—	—	—	—	欠番
51号土坑	L7	長方形	154	—	8
52号土坑	D7	長方形	185	78	66
53号土坑	D7	長方形	130	66	38
54号土坑	N7	長方形	143	117	—
55号土坑	N7	長方形	200	—	35
56号土坑	N6	長方形	242	95	12
57号土坑	N6	長方形	246	107	—
58号土坑	N6	長方形	—	73	17
59号土坑	N6	長方形	157	72	34
60号土坑	N6	長方形	236	185	30
61号土坑	N6	長方形	134	73	34
62号土坑	N6	長方形	200	108	57
63号土坑	N6	長方形	235	90	32
64号土坑	N6	長方形	190	95	33
65号土坑	N7	長方形	185	80	23
66号土坑	N7	長方形	186	119	44
67号土坑	T8	長方形	130	60	15
68号土坑	D8	長方形	132	95	32

遺構名	位 置	平面形態	規格 (cm)	備 考	
			長径	短径	深さ
69号土坑	D8	長方形	255	150	75
70号土坑	D8	長方形	410	155	20
71号土坑	M7	長方形	260	175	18
72号土坑	N7	長方形	230	200	61
73号土坑	—	—	—	—	欠番
74号土坑	D8	長方形	230	230	30
75号土坑	—	—	—	—	7号地下式坑に変更
76号土坑	—	—	—	—	欠番
77号土坑	—	—	—	—	欠番
78号土坑	—	—	—	—	欠番
79号土坑	—	—	—	—	3号井戸に変更
80号土坑	L4	円形	135	105	15
81号土坑	L4	椭円形	—	110	24
82号土坑	L4	圓形	150	125	21
83号土坑	L4	椭円形	—	94	16
84号土坑	L4	椭円形	135	120	28
85号土坑	L4	椭円形	134	112	20
86号土坑	L4	椭円形	—	50	21
87号土坑	L4	椭円形	109	85	39
88号土坑	L4	椭円形	130	—	38
89号土坑	L4	椭円形	—	94	37
90号土坑	L4	椭円形	—	88	18
91号土坑	L4	椭円形	123	110	32
92号土坑	M4	椭円形	133	150	29
93号土坑	L4	円形	120	—	25
94号土坑	L4	円形	120	—	21
95号土坑	L4	円形	119	105	14
96号土坑	L3	椭円形	118	110	23
97号土坑	L3	円形	103	—	20
98号土坑	L3	椭円形	80	70	14
99号土坑	L3	椭円形	148	119	30
100号土坑	L3	椭円形	130	85	27
101号土坑	L3	円形	120	115	40
102号土坑	L3	円形	88	85	37
103号土坑	L3	異形内形	—	50	55号2号穴に変更
104号土坑	K4	椭円形	172	—	8
105号土坑	—	—	—	—	欠番
106号土坑	K4	椭円形	156	130	18
107号土坑	K4	円形	100	92	13
108号土坑	K4	円形	95	90	10
109号土坑	K4	椭円形	165	93	9
110号土坑	K4	椭円形	118	100	36
111号土坑	K4	椭円形	102	83	14
112~	—	—	—	—	—
114号土坑	—	—	—	—	欠番
115号土坑	K3	円形	122	102	21
116号土坑	K3	円形	111	107	20
117~	—	—	—	—	欠番
120号土坑	—	—	—	—	—
121号土坑	L2	—	—	75	21
122号土坑	L2	椭円形	132	75	17
123~	—	—	—	—	—
125号土坑	—	—	—	—	欠番
126号土坑	L3	椭円形	134	110	36
127号土坑	L3	長方形	122	80	42
128号土坑	K4	椭円形	73	42	12
129号土坑	K4	椭円形	116	105	42
130号土坑	K4	椭円形	87	75	23
131号土坑	—	—	—	—	—
132号土坑	M4	椭円形	89	70	31
133号土坑	—	—	—	—	欠番
134号土坑	N4	椭円形	153	70	21
135号土坑	—	—	—	—	欠番
136号土坑	—	—	—	—	欠番
137号土坑	N11	円形	112	110	18

4 淀井状遺構（第5・213図）

南部の東端には、奥行き6m以上のくぼ地遺構がある。下層から中世のかわらけが完形で一点出土しており、中世の遺構の可能性があるが、近代まで機能していた溝の落とし口にもなっており、かわらけを混入とすれば新しい時期のもの可能性もある。



第213図 淀井状遺構出土遺物

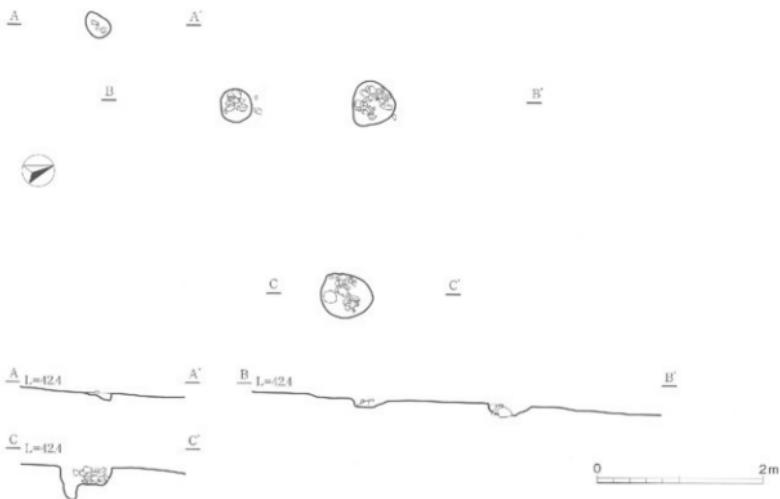
表98 淀井状遺構出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	上部幾十層 小皿	11.3 3.3 4.1	底部凹軸ヘラケズリ後高台陥り付け。	長石繊、海綿骨針 微量	普通	灰褐色	80%
2	石製品 砾石	長7.6cm、幅2.5cm、厚1.8cm、重51.26g、表面研製。					

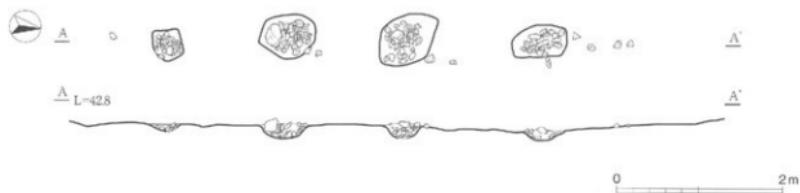
5 ピット群・ピット列（第214～216図）

直線的に並ぶピット列が、調査区の中央部で3列確認されている。1号ピット列は、径40～70cmの楕円形の深いピットが1.4m間隔で並んでおり、2号ピット列と平行して並んでいる。各ピットの中には礫を主体に、常滑の鉢片、鉄滓、不明鉄片が少量含まれている。自然礫は、大きさ4～20cmで、各ピットP1からP4まで、礫の個数は20、51、55、86個を数え、岩石の種別は安山岩が主体で、花崗岩も見られる。出土した陶器標本には御目があり、近世期のものと思われる。2号ピット列は14号溝と重なっており、重なったピットは14号溝の底面で確認されている。深さが浅く底面形状は一定しておらず、覆土にしまりがない。表土に近い堆積土のため、樹木の根穴跡のように見られる。一定の間隔をあけて並んでいるので、植栽列になるものかと思われる。3号ピット列も2号ピット列と同様な性格のものかと思われる。3号ピット列は、深さ5～26cm、径28～42cmの楕円形で間隔が1.1m前後で並んでいる。P5は擾乱土坑と重なって深くなっているものと思われる。

1号ピット群は1号ピット列と同様に、自然礫を詰めた小ピットで、不整なL字形に並んでいる。礫は3～20cmの大の花崗岩と安山岩を主体とし、片岩、石臼片、土器・陶器片を含んでいる。陶器の中に近世の陶器片を含み、近世以降のものと見られる。



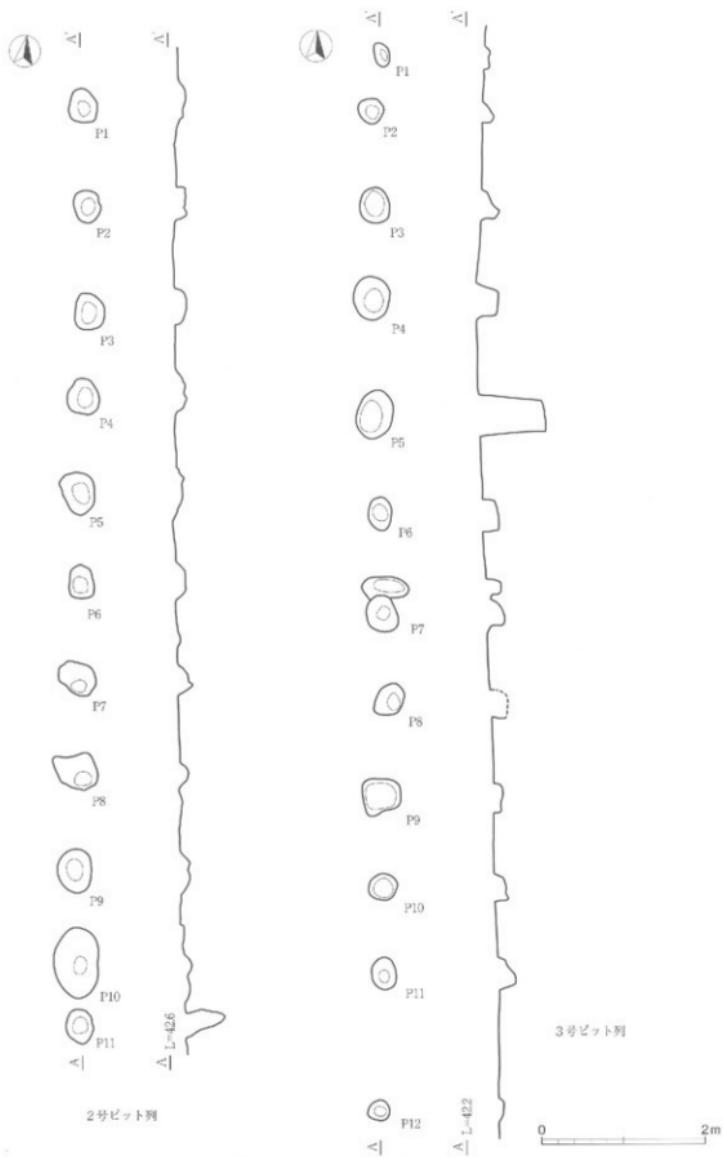
第214図 1号ピット群



第215図 1号ピット列

表99 溝・道路跡出土遺物観察表

遺物 番号	種別 器種	口縁 等高 線	特徴	胎土	焼成	色調	備考
9溝 1	古窯口 深皿	- -(22.2)	内底面に3本1单位凹痕が残る。	磁青、黑色小粒	良好	に赤い黄褐色	
1道路 1	堀清 広口皿	(34.8)	口縁部分、縁唇上半部が上方に低く立ち上がる。	灰石	良好	灰青褐色	
1道路 2	常滑 碗	(37.6) -	口縁部分、縁唇上半部が上方に立ち上がる。	長石橄欖	良好	に赤い黄褐色	



第216図 2号・3号ビット列

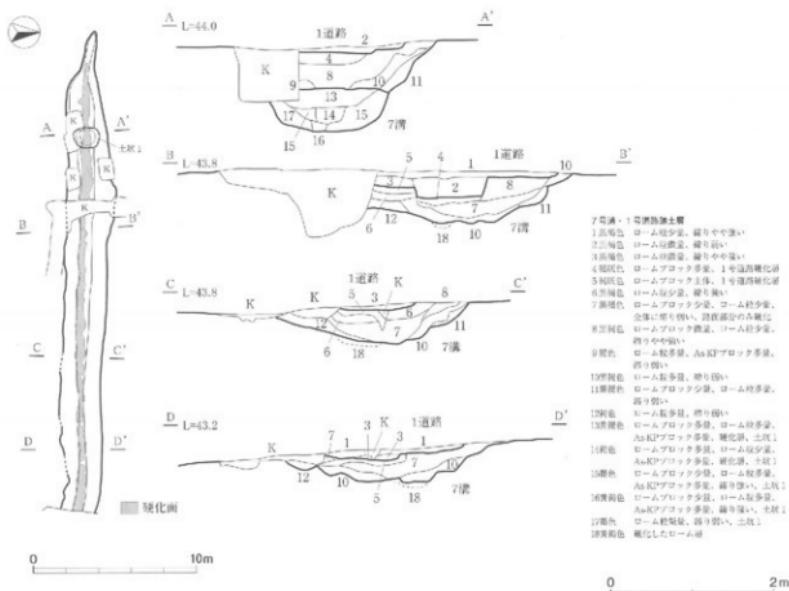
6 溝・道路跡（第5・217・218図）

A区北部では、古代～中世に構築されたと考えられる溝が6条確認された（4号溝は欠番）。1号溝はA区北端部を東西方向に12.8m走行し、上面幅42～98cm、下面幅23～74cm、深さ20cm前後を測る。東端は搅乱で消滅し、調査区外へと延びる可能性がある。西端は1号住居跡の一部を破壊するが、さらに西側へは伸びないようである。底面には小ピットを伴う。3号溝は短く、2号溝および1号段切り状遺構に破壊され、上面幅74～101cm、下面幅50～70cmを測り、深さは15cm程度である。1・3号溝の覆土の状況は奈良平安時代の遺構覆土にも近似しており、構築時期は古代～中世と推定する。2号溝は平面クランク状を呈し、1号段切り状遺構と併せて同一遺構を形成する。南・北端は調査区外へと延びており、19.6m確認した。上面幅70～96cm、下面幅14～42cm、深さはクランク部分を境にして北側で45～57cm、南側の段切り部で20cm前後である。北側西壁にはテラスが伴い、クランク箇所の底面には開仕切り状あるいは障壁状の高まりや段差がある。規模は大きくなかったが、構造から見れば、構築時期は中世以降と推察する。幅の狭い5号溝は直線的に約60mにわたって南北方向（N - 11° - W）に走行し、上面幅37～128cm、下面幅28～106cmを測り、深さは20cm以下である。底面には多数のピットが不規則に穿たれている。北端は自然消滅するが、南端は1号道路跡と8・9号溝の直前に止まる。平面位置や走行方向を考えれば、規模こそ大きく違うものの、5号溝と8・9号溝は同一の目的・機能を推測でき、7号溝・1号道路跡とも密接な関係を想定できる。6号溝は5号溝と並行する浅い溝で、形状・覆土等は5号溝と同様である。

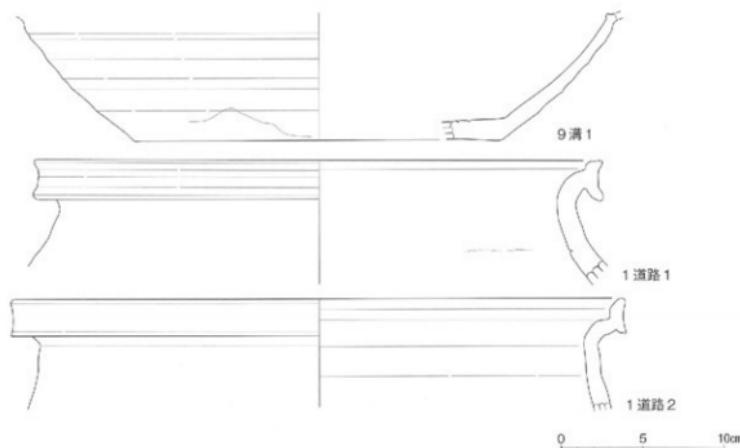
7号溝と1号道路跡は基本的に同一遺構である。上面幅208～283m、下面幅0.29～1.47m、深さ10～65cmを測り、総延長29.4mを確認した。断面形は逆台形～緩やかなU字状を呈する。全体に西端から東端へと緩やかに下り傾斜する。7号溝底面は踏みしめられて、幅15～74cmの硬化面が形成されている。ある程度まで7号溝が自然埋没した後に、1号道路の硬化面が形成される。よって7号溝の用途も本来は道路であろう。西端にはロームブロック・Ag-KPブロックで硬く埋め戻された土坑1がある。1号道路跡の硬化範囲・路面は平面図示していないが、7号溝を全く踏襲して構築されていた。B断面周辺は硬化面に明らかな段差を伴っていた。覆土からは13世紀後半～14世紀前半頃の常滑の甕口縁部片が2点出土している。8・9号溝は断面逆台形状の大溝で、ほぼ直線的に並走する。8号溝覆土上層は、9号溝掘削時の排土であるロームブロックで埋め戻されており、新旧関係は明瞭であった。底面には不規則にピットが穿たれる。規模は、8号溝が上面幅1.05～2.27m、下面幅0.32～0.79m、深さ46～62cm、9号溝が上面幅(1.02)～(1.57)m、下面幅0.39～1.02m、深さ36～91cmを測る。

A区南部では、近世以降近代までの時期の区画溝と考えられる溝が10条見られる。東西方向に短く延びる16・17号溝、南北方向では、15号溝のように短いものもあれば、10・11・14号溝は南北方向に連なるように長く延びるものもある。いずれも切り合い関係や覆土、出土遺物から見て新しい近世以降の時期のものと見られる。10・11・14号溝は北部で2・3号ピット列と重なり、北端で東へ折れ、18号溝として東の調査区外へ延びている。幅は0.5～1.3mで、深さ約20cm、全体では130m程の長さで直線的に延びており、区画とともに道の側溝的な役割があったかもしれない。東西方向に延びる12号溝と13号溝は、隣接して平行に走っており、13号溝は同じところで2回以上の掘り直しを行っている。出土遺物に近代の遺物があり、最近まで機能していた区画溝と思われる。13号溝底面は東へ向かって緩やかに傾斜し、水が流れるならば東端部でくぼ地に向かって流れ込むようになっているものと思われる。

このほか、調査区北部と中央部の東端部斜面には、段切り状に斜面を平坦にする造成を行っている箇所がある。出土遺物がなく時期は不明である。



第217図 7号溝・1号道路跡



第218図 溝・道路跡出土遺物

第V章 B1区の遺構と遺物

第1節 弥生時代

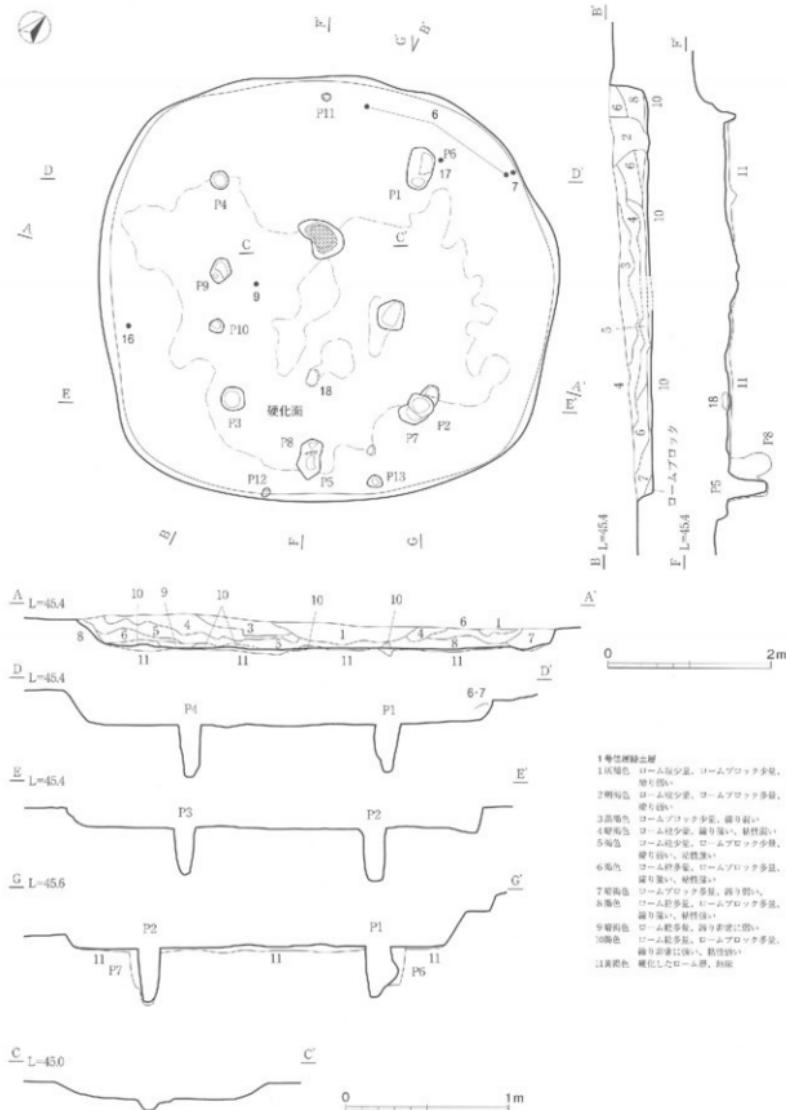
1 竪穴住居跡

1号住居跡（第219・220図）

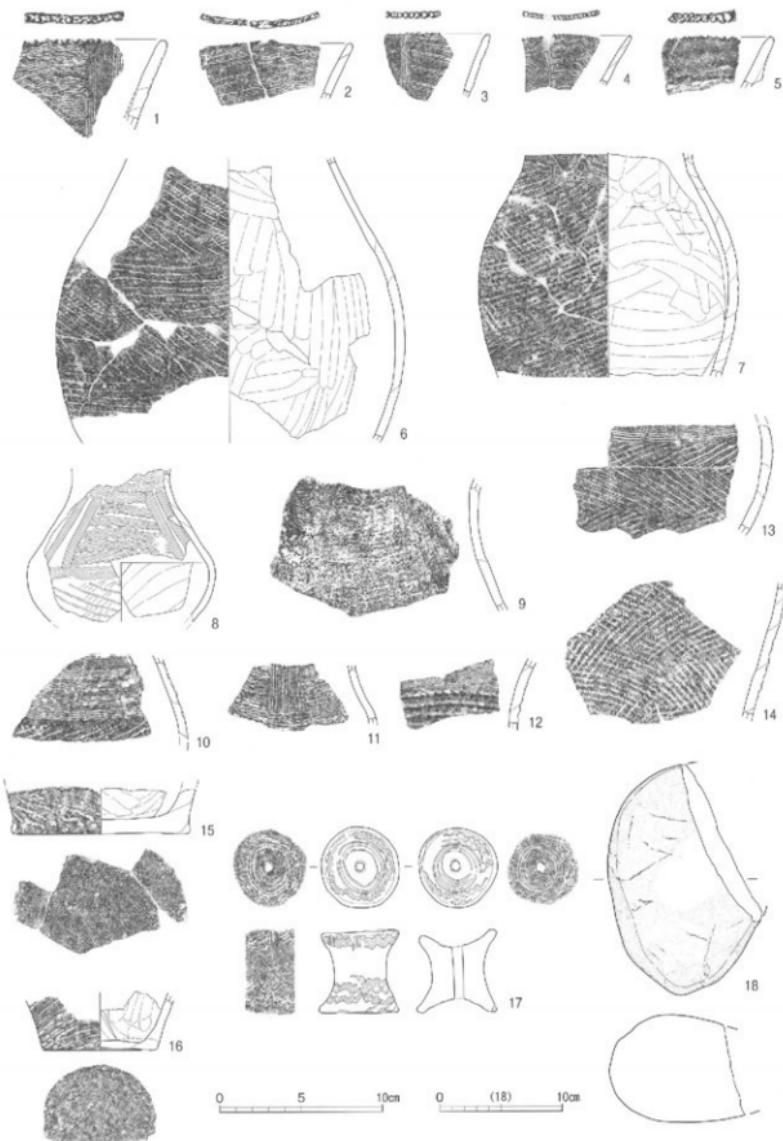
位置 B1区、G3～H3グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向5.24m、東西方向5.65mを測り、丸みを帯びた不整隅丸正方形を呈する。北東側の覆土上層は搅乱に切られる。主軸方位 N - 40° - W 壁 壁高は20～43cmを測る。床 ほぼ平坦で、炉の北側と壁際以外は硬化する。ピット10箇所ある。P1～4が新柱穴、P6・7が旧柱穴、P5・P8が新・旧の出入口ピットと考えられる。柱穴配置の変遷はP3・P4・P6～P8→P1～5と考えられる。P9（深さ45cm）・P10（同40cm）は貼床で閉塞されていたが、補助的支柱であろうか。P11～13は壁柱穴であろう。炉 60cm×43cmの不整形で、浅皿状を呈する。被熱は強い。覆土 竪穴中央部上層は黒褐色土、床面上～壁際は褐色土が堆積する。遺物 覆土上層には弥生土器の大形破片や筒体（6・7）が目立つ。床面中央からは18の台石が出土している。遺物量は多く、小～中破片の割合が高い。ほぼ十王台式後半期の土器で占められている。下層出土の17は上製の幼獣車である。所見 住居跡の廃絶および構築時期は、弥生時代後期後半に求められる。

表100 1号住居跡出土遺物観察表

回版番号	種別 器種	口径 基高 基底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	口唇部擴大基部によるキザミ、口縁部4本筋の腹壁直線文 → 横底波状文（下→上）。内面は模作のナダ。	石英、灰石、骨針	良好	浅褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	-	口唇部擴大基部によるキザミ。口縁部5本筋の腹壁、直線文。内面は横・斜筋のナダ。	石英、角閃石	良好	に赤い褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	-	口唇部ハラキザミ。口縁部5本筋の腹壁直線文→腹壁の波状文。内面は横・斜筋のナダ。外側全周にスッカ付。	石英	普通	外：褐灰色 内：に赤い褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	-	口唇部ハラキザミ。口縁部4本筋の腹壁直線文→横底波状文。内面は横・斜筋のナダ。	石英	普通	に赤い黄褐色	十王台式
5	弥生土器 壺	-	口唇部擴大基部によるキザミ、口縁部焼文（腹壁のナダ）。石英、金星母、多量の白色粘土斑状文。内面は腹・横筋のナダ。外側スッカ付。最の白色化。	石英	普通	に赤い黄褐色	十王台式
6	弥生土器 壺	-	瓶～初張附2基2種焼文（R-R、L+L+L→下）。内面は剥離部・横筋のナダ。外側斜筋部に横状のスス、内面剥離部に空吹のヨゴレ付。	石英、多量の灰石、良質	普通	外：に赤い褐色 内：褐色	上層出土 十王台式
7	弥生土器 壺	-	瓶～初張附2基2種焼文（R-S、L-Z、下→上）を不規則な形で施して、瓶部は一横筋・斜筋のナダをナゴレし。内面は剥離部のナダ。外側横筋部のナダ。外側部にスス集中、被熱による赤色化。	石英、角閃石、金星母、多量の白色粘土	普通	に赤い黄褐色	上層出土 十王台式
8	弥生土器 壺	-	瓶附2基2種焼文（L-L）。内面は剥離部のナダ。内面は剥離部のナダ。外側斜筋部にスス付。	石英、角閃石、多量の白色粘土	普通	淡黄色	十王台式
9	弥生土器 壺	-	瓶附2基2種焼文（R-R、L+L+L→下）。内面は剥離部のナダ。内面も剥離れやすい。	多量の石英、長石、良質	不良	に赤い黄褐色	上層出土 十王台式
10	弥生土器 壺	-	瓶附2基2種焼文（R-S、L-Z）。内面は剥離部のナダ。外側スス、内面ヨゴレ付。	多量の石英、長石、不良	に赤い黄褐色	十王台式	



第219図 1号住居跡



第220図 1号住居跡出土遺物

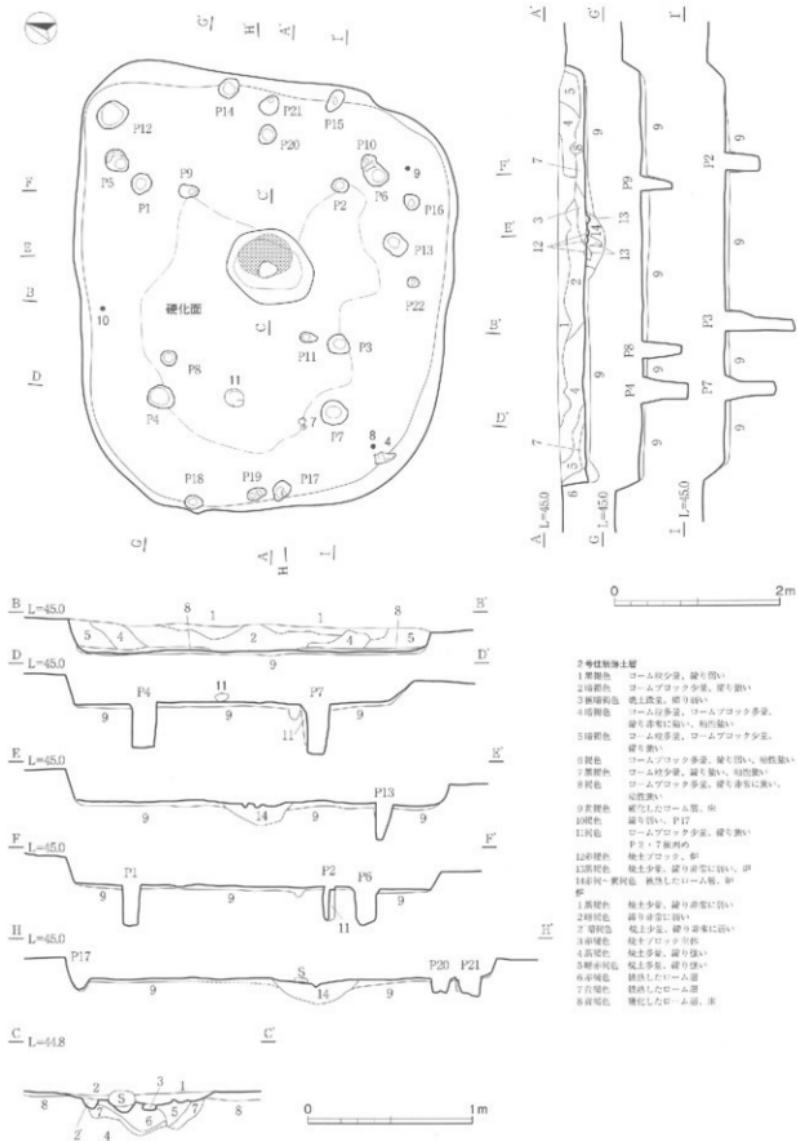
回版 番号	種別 器種	口径 器底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
11	弥生土器 壺	-	彌制界4本壺の被位区画直縞文→彌制3条一單位の被位直縞文→被位波状文(上→下)。内面は斜位のナガ。	石英、角閃石	普通	淡黄色	十王台式
12	弥生土器 壺	-	彌制界4本壺の出目彌制3条→7本壺の被位直縞文・被位波状文・山形波状文(下→上)。内面は横・斜位のナガ。外曲ス付有。	石英、角閃石	良好	にぶい褐色	十王台式
13	弥生土器 壺	-	頭部附加条2種屬文(R+L、L+R: 下→上)。→彌制界4本壺の被位区画直縞文(時計回り)。内面は斜位のヘラナカ。外曲ス付有。内面はさらにス付有。被位による赤色化、内面はさらにヨコレ付有。	石英、角閃石	普通	外: にぶい褐色 内: にぶい黄褐色	十王台式
14	弥生土器 壺	-	頭部附加条2種屬文(R-S、L-Z: 下→上)。内面は被位のナガ。内曲全面に赤ヨコレ付有。	石英、長石、角閃石、斜位、赤色斑	良好	外: にぶい褐色 内: 黑褐色	十王台式
15	弥生土器 壺	(10.8)	頭部附加条不明の附加条縞文(R-Z、L-S: 下→上)。内面は斜位のナガ。外曲ス付有。	石英、角閃石、骨 鹿部市有縞(彌制界ナゲ窯)。内面は斜位のナガ。外曲 頭・足部にス付有。	普通	にぶい黄褐色	十王台式
16	弥生土器 壺	(6.8)	頭部附加条2種縞文(R+L)。底部が直筒。内面は横・斜位のナガ。外曲頭部位にヘラ工具の工具痕。	石英、角閃石、多 量の白色粘	普通	外: 明黄褐色 内: にぶい黄褐色	下层出土 十王台式
17	上新品 紡錘車	-	往(475~495)、孔径51.孔深(6.0)、墨[52.9] g。X字型。表裏面とも外輪部は3单位の波状文・直縞文。側面は下の溶け込み3本壺の被位直縞文・被位波状文。全体的に磨削艶有。	多量の石英・白色 透、角閃石、金 母、骨針	普通	にぶい黄褐色	下层出土
18	石器 合石	-	欠損品。直律形の表芯中央に斜持縫。石材: 砂岩。残存長18.9cm・残存幅12.5cm・厚さ8.8cm・重さ2602.2g。				床面出土

2号住居跡(第221・222図)

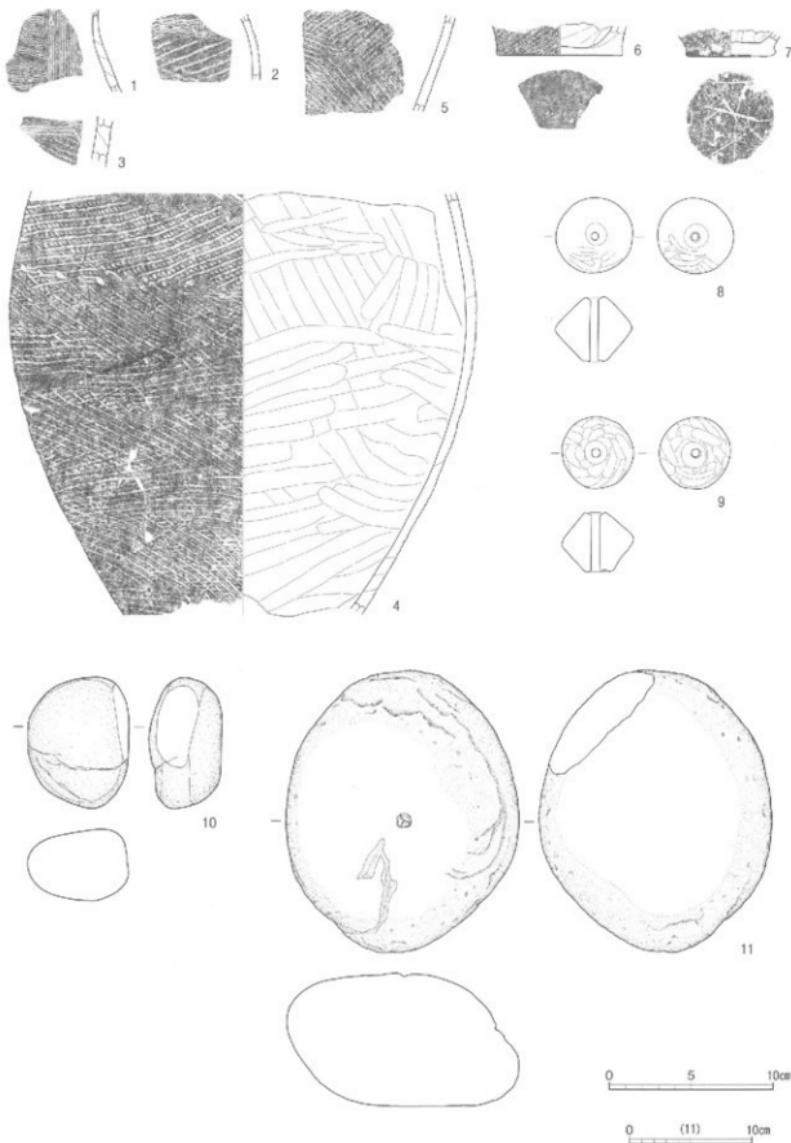
位置 B 1区、H 3~II 4グリッドに位置する。規模と平面形 東西(主軸)方向 5.28m、南北方向 4.64mを測り、不整隅丸逆合形状を呈する。主軸方位(新)N-69°-E、(旧)N-21°-W 壁 壁高は24~40cmを測る。床 ほぼ平坦で、炉の東側と壁際以外は硬化する。ピット 22箇所ある。P 1・4・6・7が新主柱穴、P 2・3・8・9が旧主柱穴、P17・P13が新・旧の出入口ピットと考えられる。P10(深さ32cm)はP 6の、P11(深さ51cm)はP 3の補助柱穴と推測する。P12・14・15・18~21は新壁柱穴と推測され、深さは13~36cmを測り、平均22cmである。P 5・16・22は旧壁柱穴と考えられ、深さは17~28cmを測る。炉 106cm×91cmの不整円形で、浅皿状を呈する。被熱は強い。中央の炉石は被熱が弱い。覆土 壁穴中央部は暗~黒褐色土、床面上~壁際は褐色土が主体で、自然堆積状を呈する。遺物 南東隅とP 6脇の下層から紡錘車(8・9)が出土した。P 4~7の中間地点の床面には台石(11)が遺棄されていた。壁穴西南隅からは胴部大型片(4)が出正在している。全体の遺物量は少なく、小~中破片の割合が高い。十王台式後半期の土器が主体で、5は二軒屋式と考えられる。所見 柱穴配置から、建替え並びに拡張が明瞭である。炉を起点にして主軸を90°、北から東へ変更している。旧壁穴の痕跡は不明である。住居跡の廢絶および構築時期は、弥生時代後期後半に求められる。

表101 2号住居跡出土遺物観察表

回版 番号	種別 器種	口径 器底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	彌制界4本壺・3条一單位の被位直縞文→彌制波状文(上→下)。内面は斜位のナガ。外曲全面波有、内面ヨコレ付有。	石英	普通	外: 黑褐色 内: にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	-	頭部附加条不明の附加条縞文(r-S、L-Z)→彌制界4本壺の被位直縞文→彌制波状文。内面はナガ。外曲ス付有。	石英	普通	にぶい黄褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	-	頭部附加条不明の附加条縞文(L-Z)→彌制界6本壺の被位直縞文。内面は斜位のナガ。外曲ス付有。	石英、角閃石、多 量の白色粘	普通	にぶい黄褐色	十王台式



第221図 2号住居跡



第222図 2号住居跡出土遺物

因版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器窯	-	頭部前面2種縦文(R-L, L+L:下→上)。内面は頭部中～下に斜紋・斜位のナガ、側部上に斜位のナガ。	石英、長石、金雲母等	良好	外：灰褐色 内：ぶい青褐色	下層出土 十王台式
5	弥生土器窯	-	頭部附加条1種縦文(R-L+2L, LR+2R:下→上)。内面は頭・斜位のナガ、頭部下位は斜位のナガ。	石英、赤色等	良好	外：灰褐色 内：ぶい青褐色	
6	弥生土器窯	-	頭部附加条1種縦文(L-R+2R)。底部有孔。内面は頭・斜位のナガ。外面部スリ付着。	石英、角閃石 (76)	良好	外：ぶい青褐色 内：暗灰褐色	
7	弥生土器窯	53	頭部焼損不明の石製多角文(L-L-Z)。底部有孔。内面は頭・斜位のナガ。外面部スリ付着。	石英、赤石、骨粉	不良	灰青褐色	下層出土
8	土製品 彷彿車	-	径46cm、高40cm、孔径0.65m、重量65.0kg。片側穿孔。表面粗粒。2/3剥落。	石英、長石、角閃石 骨粉	良好	ぶい青褐色	下層出土
9	土製品 彷彌車	-	径40cm、高37cm、孔径0.5m、重量59.0kg。片側穿孔。表面粗粒。2/3剥落。	石英、多量の白色 骨粉	良好	ぶい青褐色	下層出土
10	石器 磨石	-	自然形の右端面に顯著な研磨面。石材：砂岩。長さ80.0cm、幅62.0cm、厚さ4.45cm、重さ317.4kg。	-	-	-	下層出土
11	石器 磨石	-	欠損品。大抵残る表・裏面に磨耗面。裏面は平滑。表面中央に輪打痕。石材：石英安山岩。長さ231cm、幅18.5cm、厚さ10.9cm、重さ6400kg。	-	-	-	床面出土

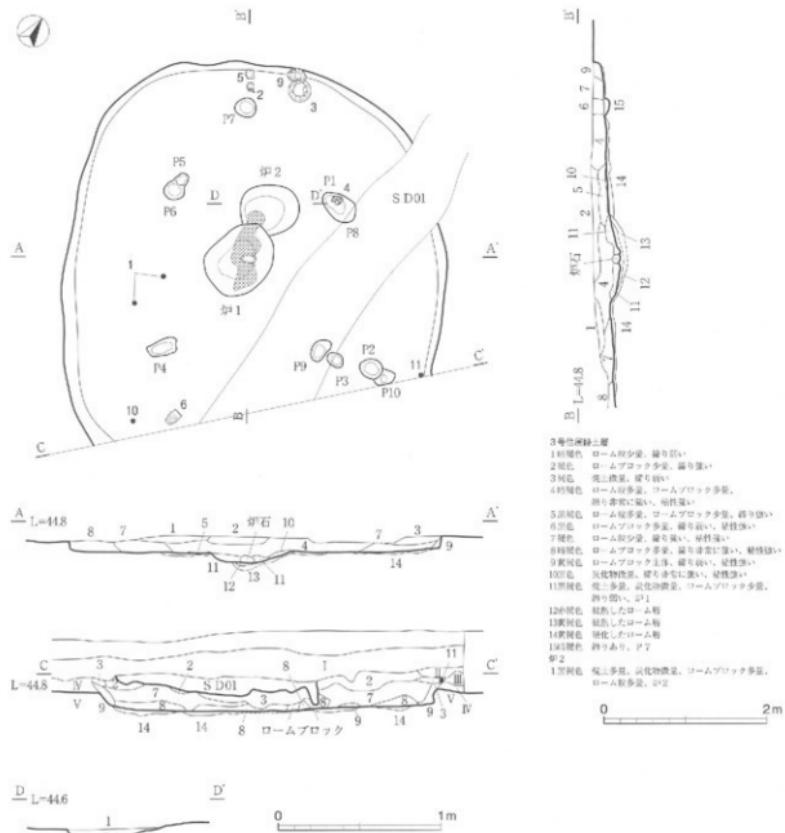
3号住居跡（第223～225図）

位置 B1区G4グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向4.77m以上、東西方向4.68mを測り、楕円形に近い形状を呈する。1号溝によって覆土上層が破壊される。主軸方位 N-36°W 壁・壁高は14～34cmを測る。床 ほぼ平坦な地床で、全体に硬化する。ビット 10箇所ある。P1・3・4・6が新主柱穴、P8・9・4・5が旧主柱穴と考えられる。P3・P6が49cm・52cmと深く、他は20～40cmの間に取まる。P2は主柱穴の可能性が残る。炉 規模は91cm×72cmで、平面不整楕円形の浅皿状を呈する。被熱は著しい。中央に自然凹窓の炉石を置く。覆土 褐色土主体で、上面が黒褐色上で覆われる。自然堆積状を呈する。遺物 全体の遺物量は非常に多く、十王台式後半期の土器を主体とする。北壁際床面からは頭部個体（3・9）が出土しており、その周囲の覆土中にも略完形個体（2・5）が認められる。P1上面からも大型破片（4）が出土した。3は十王台式の頭部文様と円形浮文が施文され、頭部縦文は羽状構成を知らない。ほぼ末直の6は頭部に無文帯と刺突文を有し、附加条1種縦文が施文される。10の紡錘車は下層出土である。

所見 主柱穴配置を更新しており、建替えと考えられる。住居跡の時期は、弥生時代後期後半に求められる。

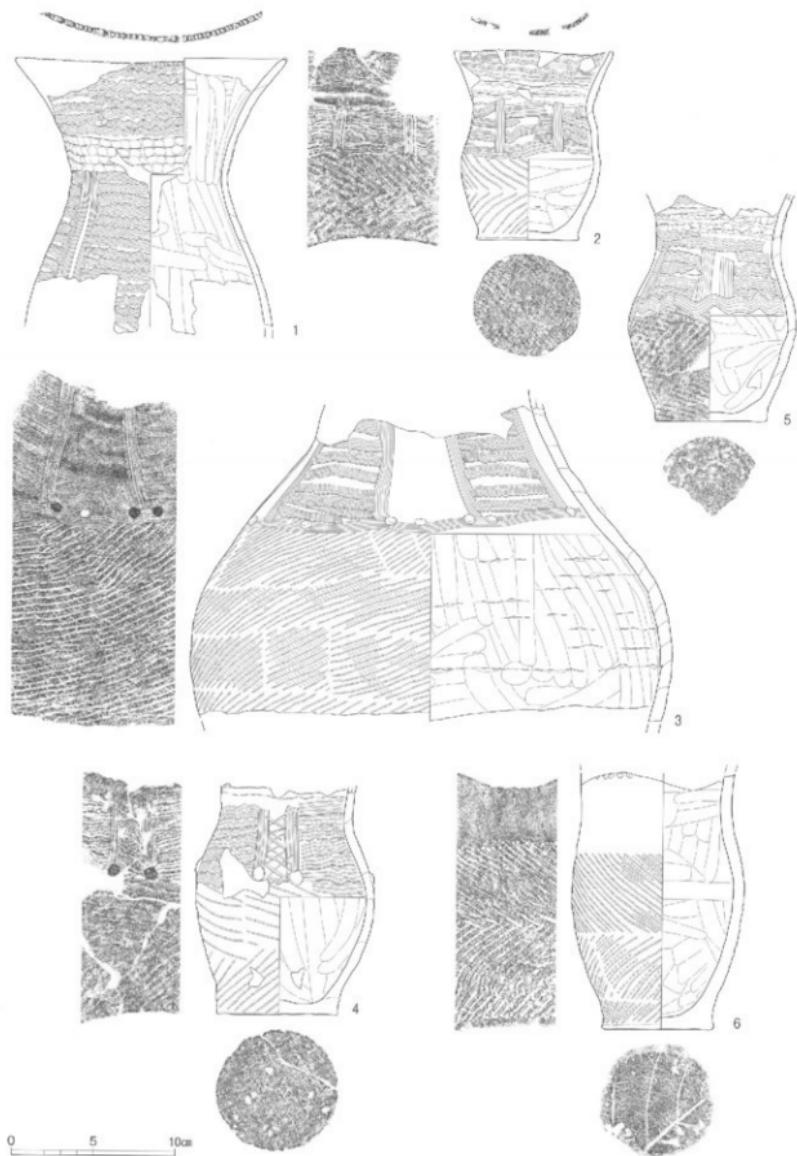
表102 3号住居跡出土遺物観察表

因版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器窯	(6.2)	口直径ヘタキギ底、小丸窯。口横幅5次廻の横位底状況(下→上)。近縁窯・浮出部頂部。頭部焼損不明の頭部加条文(1-Z)。頭部焼損後底部焼成狀(1-Z)。頭部3あるいは4の頭部加条位焼成狀(1-Z)。内面は口縁部・蓋部中位に焼位のナガ。他は継位のナガ。外面部全体にスリ付着。内面全体にゴミ付着。	石英、角閃石	良好	外：ぶい青褐色 内：灰青褐色	中～下層出土 十王台式
2	弥生土器窯	(9.6) 11.7 6.1	口直径ヘタキギ底、小丸窯。頭部薄い表接隆起。頭部焼損不明の頭部加条文(1-Z)。内面は口縁部・蓋部中位に焼位のナガ。他は継位のナガ。外面部全体にスリ付着。頭部上～頭部下位に深いスリ付着。内面は頭部上より上にゴミ付着。	石英、多量の白色 骨粉	普通	外：灰褐色 内：灰青褐色	下層出土
3	弥生土器窯	-	頭部焼損の附条2種縦文(R+R, L-L:下→上)。頭部焼損7本の頭位下面直義窓→2舟一舟の頭位の頭部焼成狀(1-Z)。内面は頭・斜位のナガ。頭部中位と頭部下位に焼位の黒斑。	石英、角閃石、多 (5.5) 6.1	良好	外：灰青褐色 内：ぶい青褐色	床面出土

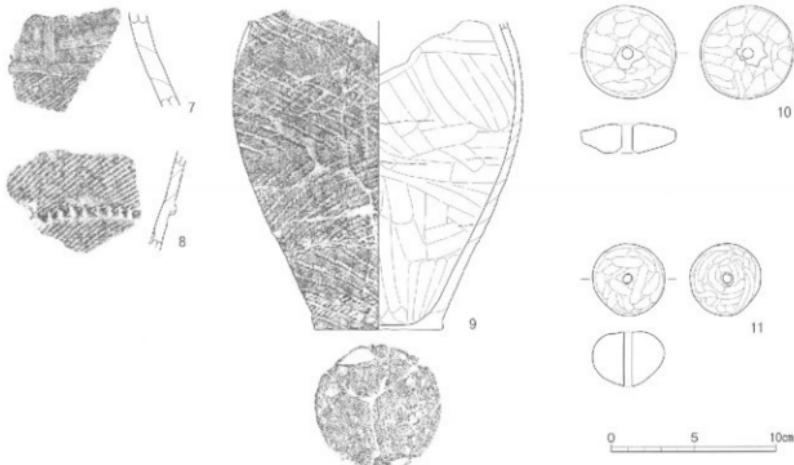


第223図 3号住居跡

図版番号	種別	口径 器皿 直径	特徴	粘土	焼成	色調	備考
4	弥生上窓 窓	- 7.4	頭部裏S-押縁保有、剖面輪郭不明の陶器系縄文（R-S-L-Z:下→上）→頭頂部4本歯の複数窓口（頭頂部S）→頭部裏S-窓の直縁又→複数の窓口状（下→上）、複数窓口の内側に斜め付付。底部有目板。内面は頭部下窓が複数のナメ、斜窓がナメ。外表面更に上にスス、他は黒いスヌ付。内面はヨゴレ付着。	多量の石英、長石、白角粒	普通	外：に赤い、黒色 内：に赤い、黄褐色	P1上面出土 十王台式
5	弥生上窓 窓	- (65)	頭部裏S-押縁保有、剖面輪郭A-1種縄文（R-L-Z-L-S）。頭頂部4本歯で2条の窓口の複数窓口（頭頂部S）→複数窓口の複数窓口（頭頂部S）→複数窓口の複数窓口（頭頂部S）→複数窓口の複数窓口（頭頂部S）。外面有目板。内面は頭部、斜窓のナメ、斜窓が複数のナメ。外表面全体にスス付着。内面は頭部中空より上にヨゴレ付着。	石英、長石、多量の白色粒	普通	外：黒褐色 内：に赤い、黄褐色	上層出土 十王台式



第224図 3号住居跡出土遺物①



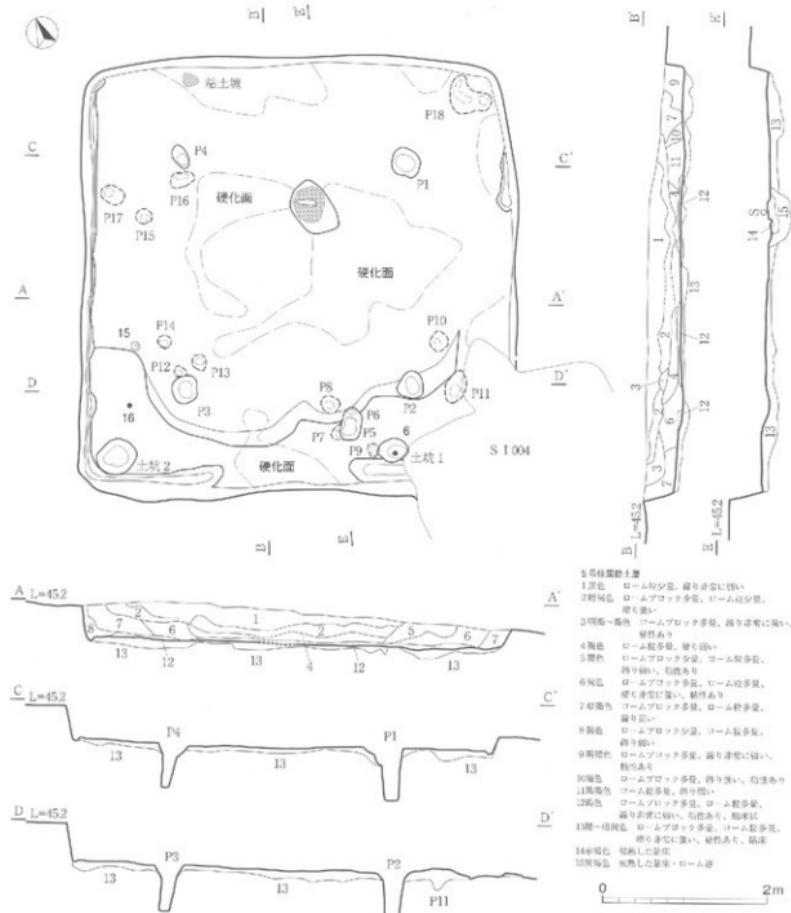
第225図 3号住居跡出土遺物②

図版番号	種別 器種	口径 底面 底径	特徴	粘土	焼成	色調	備考
6	陶牛土器 壺	- 6.6	腹部下部に丸頭状工具による削痕を有し、剥突文以下は無文帯(被削のナダ)。側部附加条1種横文(R L + 2 L, R R + 2 R; 下→上)。底堅木葉模。内面は被削のナダ、外面まばらなスヌ、被熱による赤色化。	多量の石英・白色 粒、角閃石	良好	にぶい褐色	東面出土
7	陶牛土器 壺	- -	腹型横脱不規則附加条文(R - S) - 腹部6本縫の継 び直線文 - 傷裂状波文 - 頸部界隈強堂直腹文。内面は被削 のナダ、外面スヌ有り。	多量の石英・白色 粒、角閃石、金雲母	良好	にぶい黄褐色	中正面式
8	陶牛土器 壺	- -	口縁部附加条1種横文(L R + 2 R) - 口縁部下部同様 の底体によるキザミ。内面は被削のナダ、剥離。	多量の石英・長石	良好	にぶい褐色	二軒連式
9	陶牛土器 壺	- - 7.7	腹部附加条2種横文(L + L, R + R; 下→上)。底部削 目縫(剥離のナダ消滅)。内面は剥離中位が優・斜径のナ ダ、私は剥離のナダ。外面部削部はまばらなスヌ、底 部は焼締みにスヌ、剥離部上半は濃いスヌ有り。内面全体ヨ ガレ付着。	多量の石英・白色 粒、角閃石	普通	外:にぶい黄褐色 内:黒褐色	上層出土 中正面式
10	土製品 軋跡車	径5.7、高1.8、孔徑0.66、重量65.16g、片側穿孔。表 裏面ナダ剥離。	石英、角閃石、多 量の白色粒	良好	黄褐色		下層出土
11	土製品 軋跡車	径4.4、高3.4、孔徑0.5、重量64.55g、片側穿孔。表裏面 ナダ剥離。	石英、骨灰	良好	にぶい褐色		上層出土

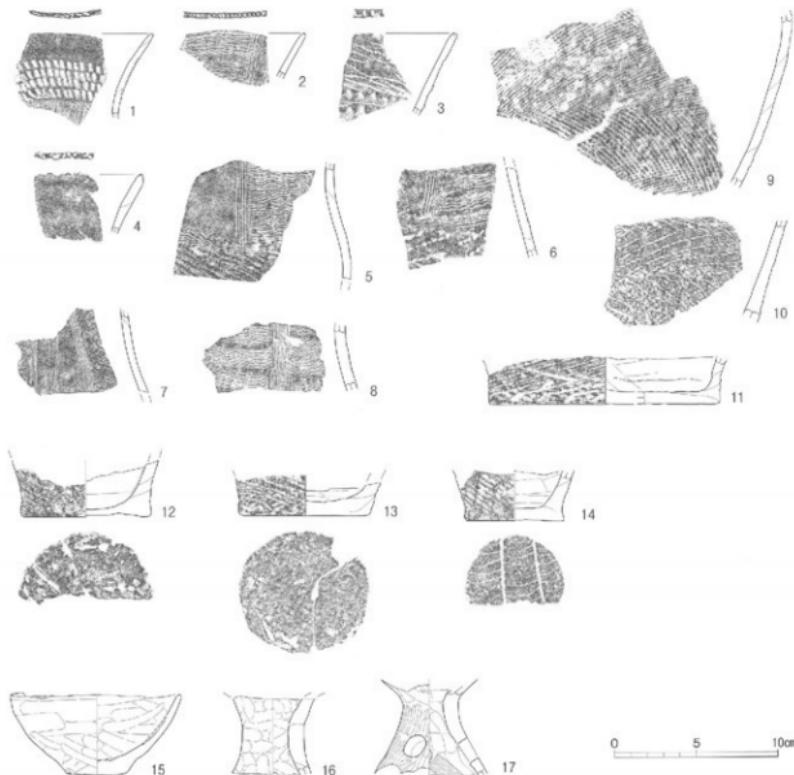
5号住居跡（第226・227図）

位置 B 1区、G 4グリッドに位置する。規模と平面形 南北(主軸)方向 5.3 m、南北方向 5.42 m を測り、不整隅丸正方形を呈する。4号住居跡によって南東隅が破壊される。主軸方位 N - 22° - E 壁 壁高は 38cm を測る。床 炉の周りと壁際が部分的に硬化する。南側はベッド状に高い。壁際の掘り方は溝状に掘り込まれるが紙幅制約のため平面図は割愛した。ピット 18箇所ある。P 1 ~ 4 が新生柱穴、P 5 ~ 6 が新出入口ピットである。旧主柱穴は P 1 ~ 10・16、P 12・13・14 のグループであろう。掘り方面で確認したピットは破線で表現した。P 5 の東脇に深さ 11cm の上坑 1 が、南西隅に深さ 8 cm の土坑 2 がある。

非常に浅いが、貯蔵穴の可能性がある。炉 規模は 63cm × 43cm で、平面不整椭円形、浅皿状を呈する。被熱は強い。中央に自然棒状礫の炉石を置く。覆土 塗色土主体で、上層は黒褐色土で覆われ、自然堆積状を呈する。北壁際の下層で粘土塊を検出した。遺物 出土量はやや多く、小～中破片の割合が高い。十王台式後半期の土器を主体とする。1 は頸部に樹葉状工具による帯状刺突文が施文される。9・12・14 は二軒屋式系と考えられる。15・16 は弥生系の鉢・高杯で、17 は土師器の器台である。所見 主柱穴配置から、建替えが判明している。出土遺物の主体は弥生土器であるが、住居構造や土師器の出土を考慮すると、住居跡の廃絶および構築時期は、弥生時代終末～古墳時代前期初頭に求められる。



第226図 5号住居跡



第227図 5号住居跡出土遺物

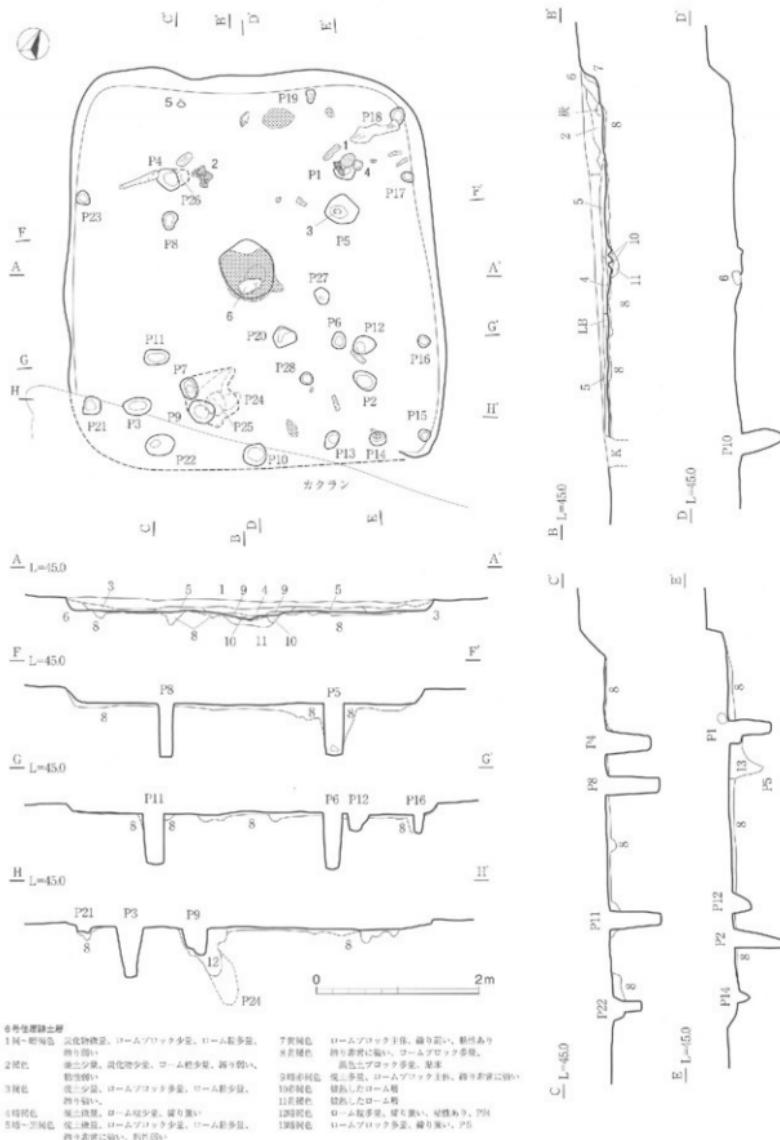
表103 5号住居跡出土遺物観察表

調査番号	種別	口径 器底 底径	特徴	土質	焼成度	色調	備考
1	厚生土器 壺	—	口唇部無縫陶文(L)を回転施文、口唇部無文(底位のテラフ)。脚部施釉工芸による当塗利文化4系から赤茶の板状直線文、ハク彫き新唐子文等。内面は斜位のナギ。外面スヌ、内面ヨゴレ付着。	石英・角閃石多量の白色粒	普通	外:褐灰青色 内:青褐色	十王台式
2	厚生土器 壺	—	口唇部ハラキザミ。口縁部4本筋の複数直線文→複数波状文。内面は厚・横位のナギ。外面スヌ、内面ヨゴレ付着。	石英	良好	外:黒褐色 内:灰青褐色	十王台式
3	厚生土器 壺	—	口唇部ハラキザミ。瓶詰縫合のハラキ縫合線、薄い脚部縫合→焼成焼接不明の羽加奈繩文(L-Z)。外面スヌ付着。瓶面黒色。	石英	良好	外:褐青褐色 内:に赤い青褐色	十王台式
4	厚生土器 壺	—	口唇部無縫陶文キザミ。口縁部無文(新作のナギ)。内面は横位のナギ。外面スヌ付着、口唇部付近に帯状の赤いスヌ付着。	多量の石英、金雲母、骨針	普通	に赤い褐色	十王台式

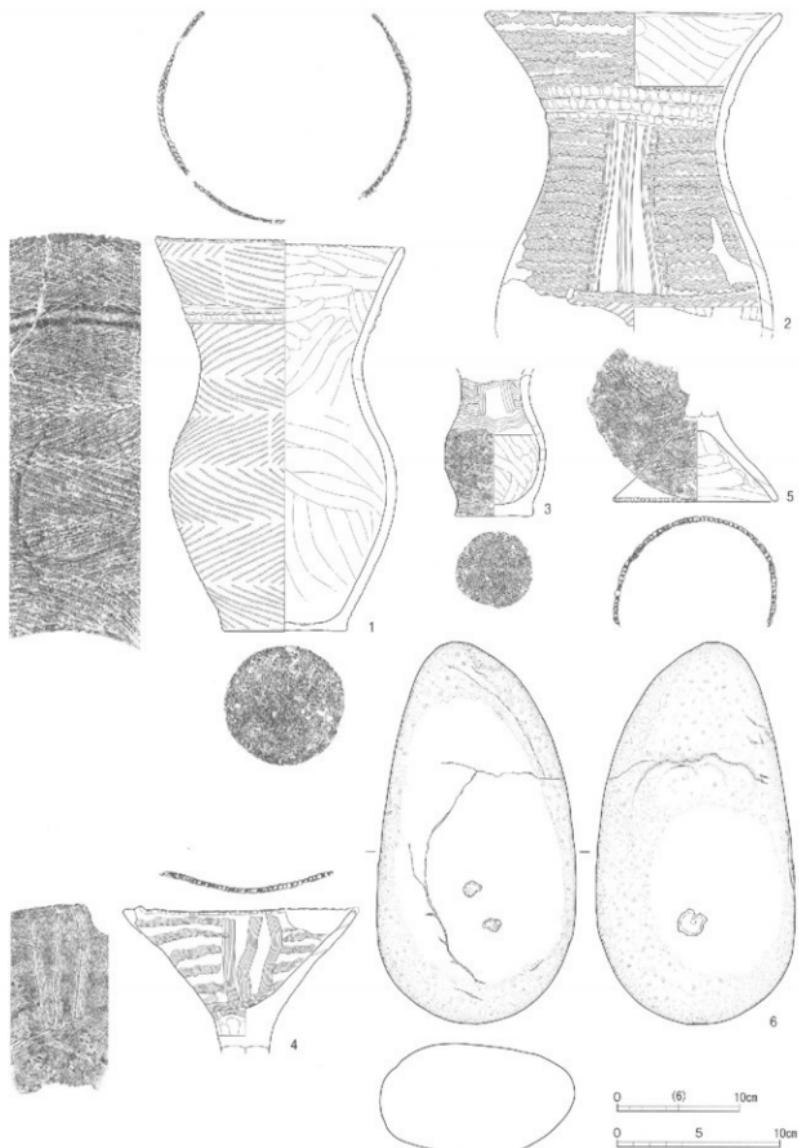
図版番号	種別 器種	口径 高さ 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
5	弥生土器 盆	-	腹部縦溝本筋の附加条溝文（L - Z）→頂部界5本筋の附加条溝文（L - T）。内面は模・斜位のナダ。外面糊明系にスス、内面ヨゴレ付帯。	右美	良好	外：にびい黄褐色 内：にびい黄褐色	十王台式
6	弥生土器 盆	-	腹部縦溝不規則の附加条溝文（Z - S）→頂部界本筋の疑・多量の石英・白色位底模文→頸部界模文に前底状文、颈部横位底状文。内・外部は模・斜位のナダ。	普通	外：にびい黄褐色 内：明黄褐色	上杭（出土） 十王台式	
7	弥生土器 盆	-	腹部ら本筋・3条・1位筋の縦位底模文→横位底模文（上：右美→下：S）。内面は模・斜位のナダ。外周窓いスス付帯。	良好	外：灰黃褐色 内：にびい黄褐色	十王台式	
8	弥生土器 盆	-	腹部10本筋の縦位底模文→横位底模文（上：S）。内面は模・斜位のナダ、剥落。	普通	にびい褐色		
9	弥生土器 盆	-	底部附加1種模文（R L + 2 L）。密接する輪模不明の附加条溝文（X - S）。内面は模位のナダ。外側スス付帯。	多量の石英・長石	普通	外：にびい黄褐色 内：にびい黄褐色	二軒屋式
10	弥生土器 盆	-	鶴折附加2種模文（L R + R）、輪模不明の附加条溝文（L - S : 下→上）。内面は斜位のナダ。	右美、無凹石	良好	外：にびい黄褐色 内：褐色	十王台式
11	弥生土器 盆	(3.8)	腹側縦溝下例の附加条溝文（L - S）。底部砂質。内面は模・斜位のナダ。	右美、長石、多量 の金雲母	外：にびい黄褐色 内：灰褐色	十王台式	
12	弥生土器 盆	(7.8)	腹部附加1種模文（R L - 2 L）。底部木痕状。内面は器底観察。外周まばらにスス、被熱による赤化色。内面コケ付帯。	多量の石英・長石	普通	外：灰黃褐色 内：にびい褐色	二軒屋式
13	弥生土器 盆	7.9	腹部附加2種模文（L + L）。底部布目模。内面は模位のナダ。	右美、長石、角閃 石、金雲母、骨片	浅褐色		十王台式
14	弥生土器 盆	6.0	腹部輪模不明の附加条溝文（L - Z）。底部木痕状。内面は模位のナダ。外側スス付帯。	多量の石英・長石	良好	外：灰褐色 内：にびい褐色	二軒屋式
15	弥生土器 鉢	10.4 5.0 3.7	外側は模位のヘラケズリ→模・斜位のナダ。内面は模・斜位のヘラケズリ→模・斜位のナダ。内面あわら状の剥落。	右美、多量の長 石・白石、角閃 石	良好	細赤褐色	座面出土
16	弥生土器 盆	-	外側は模・横位のナダ。内面は模・斜位のナダ。	多量の石英・白色 料、骨片	普通	外：淡褐色 内：暗褐色	中層出土
17	土器等 等台	-	外壁は底部斜位のナダ→鉢底のミガキ、乳凸ナダ→瓶・筒形底・新井の石 等位のミガキ。内面は底部底位のナダ。脚部底・新井の石 等位のハリメ。脚部3方向に透孔。	普通	にびい褐色		

6号住居跡（第228・229図）

位置 B 1区、G 5グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向推定481m、東西方向4.63mを測り、不整隅丸長方形を呈する。南壁は擾乱で消滅する。主軸方位 N - 28° - W 壁 高さは12~30cmを測る。床 ほぼ平坦で、全体に硬化する。貼床が認められる。ピット 28箇所ある。P 1~4・26が新主柱穴、P 5・6・8・11・12が旧主柱穴と考えられる。P 8・11はローム質土で閉塞されていた。P 26はP 4よりも古い。P 12はP 6の補助柱穴と想定する。P 10は出入口ピットであろう。P 13~19・21・22は壁柱穴で、深さは11~37cmを測り、平均20cmである。P 7・9・20・24・25・27・28は用途不明である。特にP 7・24・25がそれぞれ深さ70cm・90cm・53cmと概して深く、P 24は斜めに掘り込まれる。炉 規模は76cm×54cmで、平面不整円形の浅皿状を呈する。被熱は強く、南寄りに6の台石を炉石として置く。覆土 暗~黒褐色土による自然堆積と想定する。竪穴北側の下層には少量の炭化材が含まれ、焼失住居と判断する。遺物 遺物の出土量は多く、略定形個体が多い。P 1直上からは1・4が、P 26の東側下層からは2が、北壁直下からは5が出土した。また、P 5底面には3のミニチュア土器が横位で遭棄されていた。十王台式後半期の土器を主体とし、4の高坏には壺の頸部文様が施される。所見 主柱穴配置は大きく拡大しているが、壁柱穴配置は新・旧の主柱穴配置とともに整合することから、竪穴の規模・形状に大きな変更はないものと推測する。住居跡の廃絶および構築時期は、弥生時代後期後半に求められる。



第228図 6号住居跡



第229図 6号住居跡出土遺物

表104 6号住居跡出土遺物観察表

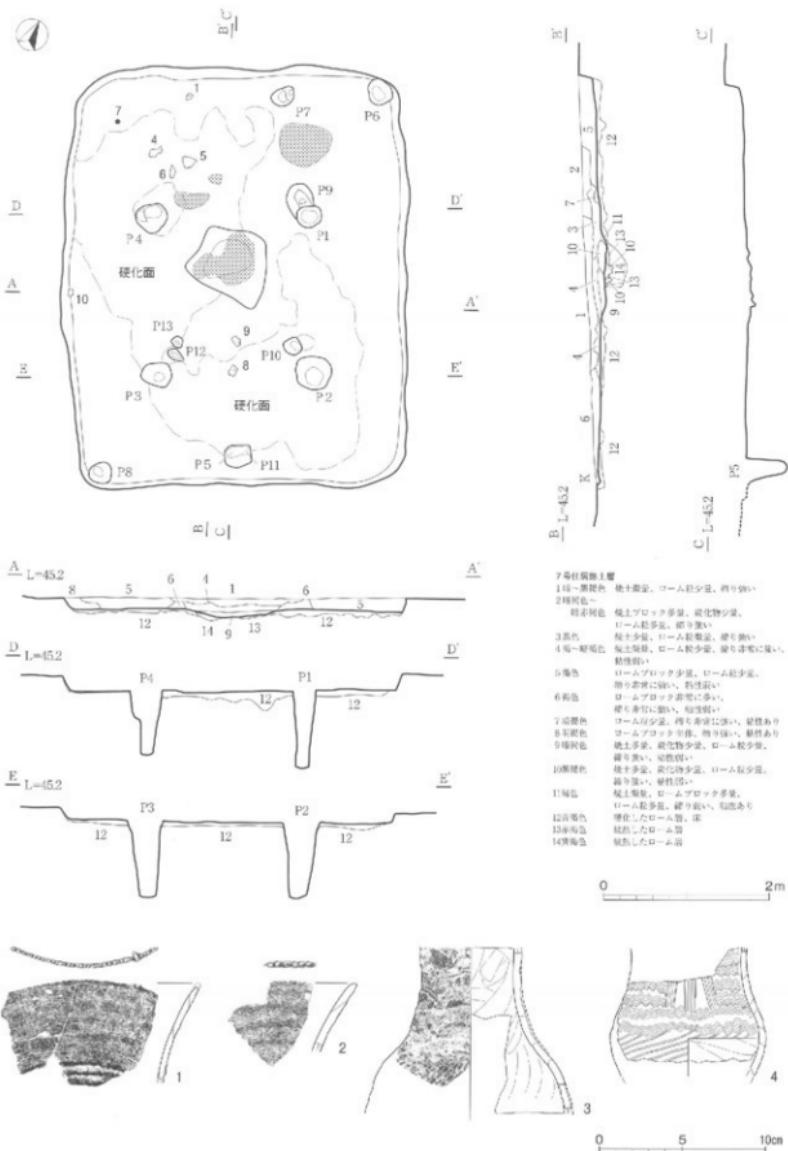
団版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	土質	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	15.2 21.2 7.5	口唇部裏面にサザミ、断面横長筒形2条、口唇部斜面不規則 加須縞文（R・S・L）、口唇部中央付近より上は下へと反時 計回り、胴部中央より下は上へと、反時計回り、底部帯片 内側は底付近に圓錐形のナダ、口唇部横縞文のナダ、先端部 全体に深長のスヌード（縦割れが多い）、外腹部2/3にス ヌ付着、底部に凹面形成部にもスヌ付着。他にスヌ縫合跡。 内底は実底面若干部分にヨゴレ付着、あばた状の網織。	多量の石英、長 石、角閃石、骨片	良好	外：淡黄色 内：にぶい黄褐色	P1.上部出土 上工台式
2	弥生土器 壺	18.3 -	口唇部へヨコサミ、茎部薄い押捺痕、肩部輪郭不明の 加須縞文（R・S）→口部部4/5周の横縞文（下ト 上ト）、腹部3箇所一帯の横縞文、底辺・底部帯片 区画横状、腰位底付文（上ト）。内側は円錐形縦、斜 位のナダ、下からJへ斜縫、外腹部に造いスヌ、内底 ヨゴレ付着。	石英、多量の白色 粘土	良好	灰黃褐色	下部出土 下工台式
3	弥生土器 壺	- 47	ミニチュア型、茎部輪郭不明の附加縞文（E・S・L ・E・E・E・3種）、輪郭部3-4周の本質の横縞文（下ト 上ト）、腹部の横縞文、底辺・底部帯片横縞文（上ト） 外腹部強化泊付、内底金物にヨゴン付着。	多量の石英、長 石、骨片、チャーレ ト	普通	外：にぶい青褐色 内：灰黃褐色	P5.底面内 十工台式
4	弥生土器 壺	(14.1) -	口唇部へヨコサミ、小突起。杯部下部の直縁文（E→3 度→Eの複数縞）→直縁→4平底→腰位底付文（下ト上ト）。 輪郭のナダ、腰部縫合付、底辺上部によるギザミ。内 底は底付、斜窓のナダ。マーブル状の筋付。	石英、多量の骨片	普通	外：淡黄色 内：にぶい黄褐色	P1.上部出土 上工台式
5	弥生土器 壺	- 9.9	輪郭輪縁に明るい若葉赤縞文（R・S・反対斜付りカ）を保 持位底付、底部状態底付。肩部輪縁付（肩上によるギザミ）。多量の骨片 内底は筋、斜窓のナダ。マーブル状の筋付。	石英、チャーレ ト	良好	暗赤褐色	下層出土
6	石器 石斧	-	磨→段。大型鋸の刃、表面中央に磨耗痕。肩部輪縁同様に最打痕とみられる円穴。表面は被熱により赤褐色 色に変色。石斧：安山岩。長さ30.7cm、幅16.3cm、厚さ9.0cm、重さ16850.0g。	石英			

7号住居跡（第230・231図）

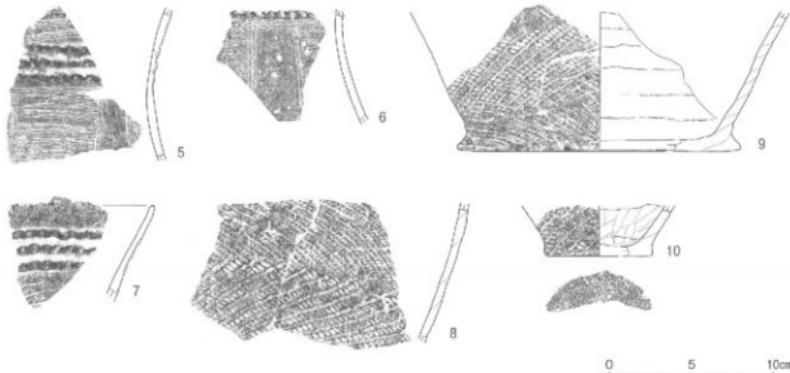
位置 B1区、F4～F5グリッドに位置する。 規模と平面形 南北（主軸）方向 5.12m、東西方向 4.18mを測り、隅丸長方形を呈する。 主軸方位 N-28°-W 膜 壁高は 10～20cm を測る。 床 ほぼ平坦で、中央部が硬化する。 ピット 13箇所ある。 P1～4が新主柱穴、P4・9・10・12・13が旧主柱穴と考えられる。 P5・11は新・旧出入口ピットであろう。 P9～13は硬化した地床を剥がして検出した。 旧主柱穴は 25～44cm と深くないが、新主柱穴は深さ 90cm を超え、床面は硬化する。 炉 規模は 95cm × 98cm の不整形で、浅皿状を呈する。被熱は強い。 覆土 炉の上は覆土上層まで焼土混じりの黒褐色土が堆積し、埋没途中にも被熱していた可能性がある。また、竪穴北側の覆土上面にも焼土が散布する。 遺物 遺物量はやや多く、大半は覆土下層からの出土である。 小～中破片の割合が高く、十工台式後半期の土器を主体とする。3は二軒屋式の細頭壺である。 所見 新旧の主柱穴配置はほぼ同地点を選択しており、建替えに伴う竪穴の変更・拡張はなかったと判断する。住居跡の廃絶および構築時期は、弥生時代後期後半に求められる。

表105 7号住居跡出土遺物観察表

団版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	土質	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	口唇部へヨコサミ、小突起。肩部薄い押捺跡→口唇部 5本束の横縞状文。内底は横窓のナダ。外底スヌ付着。 内底ヨゴレ、あばた状の網織。	石英、多量の白色 粘土	普通	外：黒褐色 内：灰黃褐色	覆土上層 十工台式
2	弥生土器 壺	-	口唇部輪縁にヨコサミ、口唇部6本束の横縞文。内底 は横窓のナダ。外腹部スヌ、内底ヨゴレ付着。	石英、多量の白色 粘土	良好	外：にぶい青褐色 内：にぶい黄褐色	十工台式
3	弥生土器 壺	-	輪縁6本束の下窓を連続文（時計回り）。縫合輪縁1 段縞文（E-L→L）。一軒屋式不明の附加縞文（R・S →下）。内底は程、斜窓のナダ。外腹部にスヌ無し、 内外面とも赤褐色。	多量の石英、長 石、角閃石	普通	にぶい青褐色	二軒屋式



第230図 7号住居跡・出土遺物①

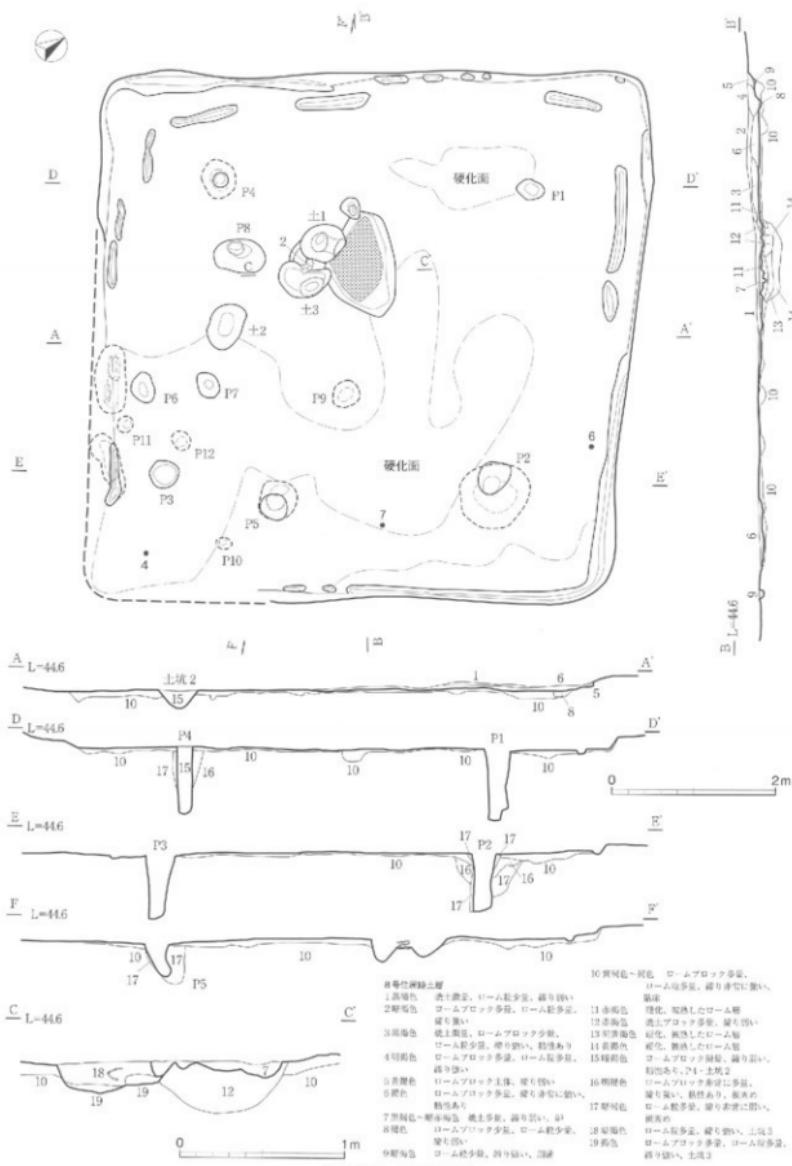


第231図 7号住居跡出土遺物②

回数 番号	種別 器種	口径 基底 底盤	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
4	弥生土器 豆	-	側部附着面不明の衝立条痕文(r-S, L-Z: 下→上) →側部4本面の横位区帯波状文2条→底部2条+平位 の複位直線文3部位。内面は横・斜位のナガ。外面全 体にスミ、被焼による赤褐色。正面面部に帯状のゴロ。	石英、多量の白色 粘土	普通	外: 深褐色 内: に赤い黄褐色	下層出土 十王台式
5	弥生土器 壺	-	底部薄い→押捺波状3条→口唇部5本面の横位波状文、箇 部附着面下に横位直線文→底部2条+平位の複位直線文 →側位波状文(上→下)。内面は横・新位のナガ。外面スミ、 内面ヨゴレ付。	石英、金雲母、骨 片	良好	外: 黑褐色 内: 暗褐色	下層出土 十王台式
6	弥生土器 壺	-	底部系統のある押捺波→降帶部下に4本面の横位区帯 波状文→側部2条+平位の複位直線文→側位波状文(上 →下)。内面は横・新位のナガ。外面スミ、内面ヨゴレ付。	石英	良好	外: 黑褐色 内: に赤い黄褐色	下層出土 十王台式
7	弥生土器 壺	-	口唇部無痕文(L-L)を回転独立文。口唇部押捺波帯 3条。頭部附着不明の側部直線文(r-S)。内面は複位 のナガ、被焼。	石英、多量の長石、 金雲母	普通	に赤い黄褐色	下層出土 十王台式
8	弥生土器 壺	-	側部附着2種類文(R+R, L+L: 下→上)。内面は横・ 斜位のナガ。9と同一個体。	石英、金雲母、多 量の白色粘土	不良	外: に赤い黄褐色 内: 暗褐色	下層出土 十王台式
9	弥生土器 壺	(17.2)	側部附着2種類文(R+R, L+L: 下→上)。底部砂妙。内面 は横・斜位直線文。8と同一個体。	石英、金雲母、多 量の白色粘土	不良	外: に赤い黄褐色 内: 暗褐色	上層出土 十王台式
10	弥生土器 壺	(64)	側部附着2種類文(R+R)。底部砂妙。内面は複・ 斜位のナガ。内面ヨゴレ付。	石英、角閃石、金 雲母、骨片	良好	外: 黑褐色 内: に赤い褐色	下層出土 十王台式

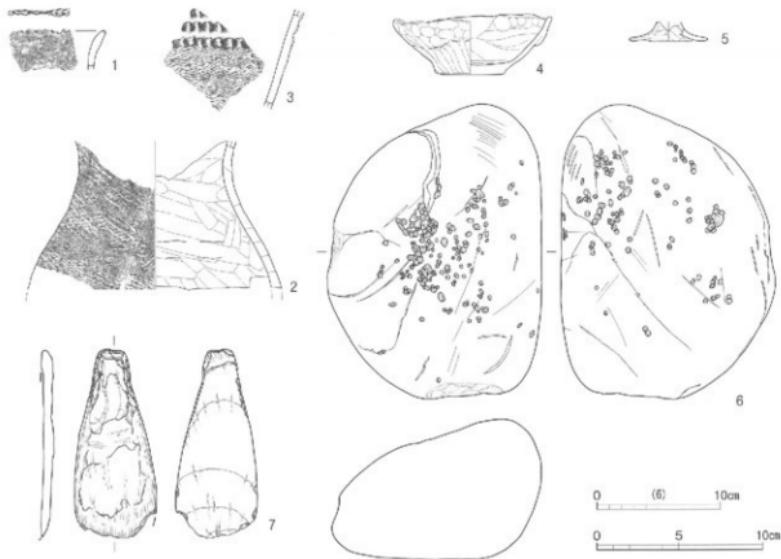
8号住居跡（第232・233図）

位置 B1区、F5～G5グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向 6.47 m、東西方向 6.3～6.72 m を測り、不整隅丸正方形形状を呈する。主軸方位 N - 59° - W 壁 壁高は 10cm を測る。南隅の壁は残存しない。床 やや凸凹があり、中央部がわずかに高い。硬化面は炉の南側と南壁際に広がる。周溝は断続的・部分的で、内側にも確認できたため竪穴を掘り直した可能性がある。掘り方は壁際が溝状に浅く掘り込まれるが紙幅制約のため平面図化していない。ピット 12箇所ある。P1～4が主柱穴、P5が出入口ピットであろう。P1～4は底面の硬化圧痕（あたり）が顕著であった。P6～12は用途不明で、P10～12は掘り方で確認した（破線で表現）。炉の周りにはP8（深さ 40cm）も含めて小土坑（深さ 29



第232図 8号住居跡

~36cm)が4基点在する。新旧関係は、土坑3 → 炉 → 土坑1となる。炉 規模は126cm × 86cmの不整形で、浅皿状を呈する。被熱は強い。覆土 自然堆積であろう。遺物 出土量は少なく、小~中破片の割合が高い。十王台式主体と考えられる。2は土坑3から出土した。4は南関東系と考えられる鉢である。5はミニチュア高杯の脚部とした。下層から6の台石、床面から7の磨製石斧が出土している。所見 住居構造は古墳時代前期の様相と考えられるが、弥生土器しか出土していない。住居跡の発掘および構築時期は、弥生時代後期後半あるいは終末期~古墳時代前期初頭の過渡期と推測される。



第233図 8号住居跡出土遺物

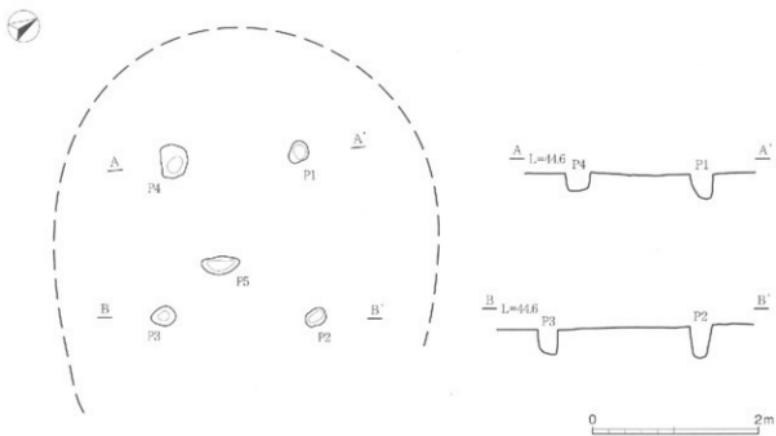
表106 8号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口径 底面 断面 流れ	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	— — —	口沿部横文ギザミ。口縁部横文(横窓のナデ)。内面は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英、角閃石 普通	外:灰青褐色 内:灰黄色	P9出土 十王台式	
2	弥生土器 壺	— — —	肩部削痕不明の附加垂繩文(L・Z・L・S:下→上)。内面は斜窓のヘラナデ、ナデ。外面まばらにスス付着。	石英、長石、金雲母、赤色粒 普通	外:淡黄色 内:灰青褐色	土坑3出土 十王台式	
3	弥生土器 壺	— —	腹部押捺縫合→5本前の横段波状文(下→上)。内面は斜位のナデ、ヘラナデ。	石英、多量の金雲母 良好	外:浅黄色 内:灰黄色	圓り方土山 十王台式	
4	弥生土器 鉢	9.6 37 41	折り返し口縁。底部半復原、斜位のナデ→口縁部スピオセニエ、ナデ。内面は底部復原、斜位のナデ、口縁部スピオセニエ。	石英、多量の白色粒 良好	にぶい黄褐色	下層出土	

団版番号	種別器種	口径 新高 度径	特　徴	土色	焼成	色調	備考
5	弥生土器 高杯	— (48)	ミニチュア高杯。脚部擦痕のナデ、脚部部ヨビオサニ。 内面は緑・斜めのナデ。	石灰、多量の白色 埃	普通	黒褐色	
6	石器 石斧		岩→鉄。大型礫の表面全体に磨耗板。磨耗範囲の一部に擦痕や擦削。表・裏面中央に敲打痕。右材：鉄岩。 長さ34.4cm・幅17.3cm・厚さ11.5cm・重さ6700kg。				
7	石器 磨製石斧		欠損品。縞皮をもつ板状剥片を素材とし研磨による調整加工。刃部附近は顯著な磨耗面。表・裏面の上部には欠損後の小さな剥離面。右材：鈎板岩。残存長11.45cm・残存幅4.9cm・残存厚0.9cm・重さ51.7kg。				下層粘土

9号住居跡（第234図）

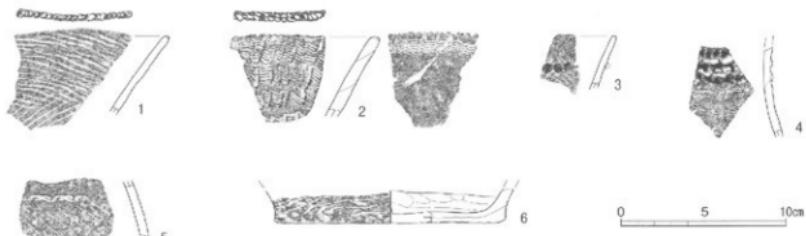
位置 B1区、G5グリッドに位置する。規模と平面形　竪穴が残存しないため不明。主軸方位 N-61°-W　壁・床・覆土 不明。ピット 5箇所ある。P1～4が主柱穴と判断する。P5は深さ10cm程度で、用途不明である。遺物 なし。所見 主柱穴配置は3号住居跡に近い。遺物はないが、周辺の遺構分布状況から、住居跡の帰属時期は弥生時代後期後半と推測される。



第234図 9号住居跡

2 遺構外出土遺物（第235図）

1～6は遺構外出土の弥生土器である。1・4・6は十王台式の範疇で捉えられる。2は樽式土器に類似する振り幅の広い波状文が施文され、内面にも波状文が施文される。また、口唇部は繩文原体によるキザミを有する。5は回転結節文が施文されることから、南関東系の土器と考えられる。



第235図 遺構外出土遺物

表107 遺構外出土遺物観察表

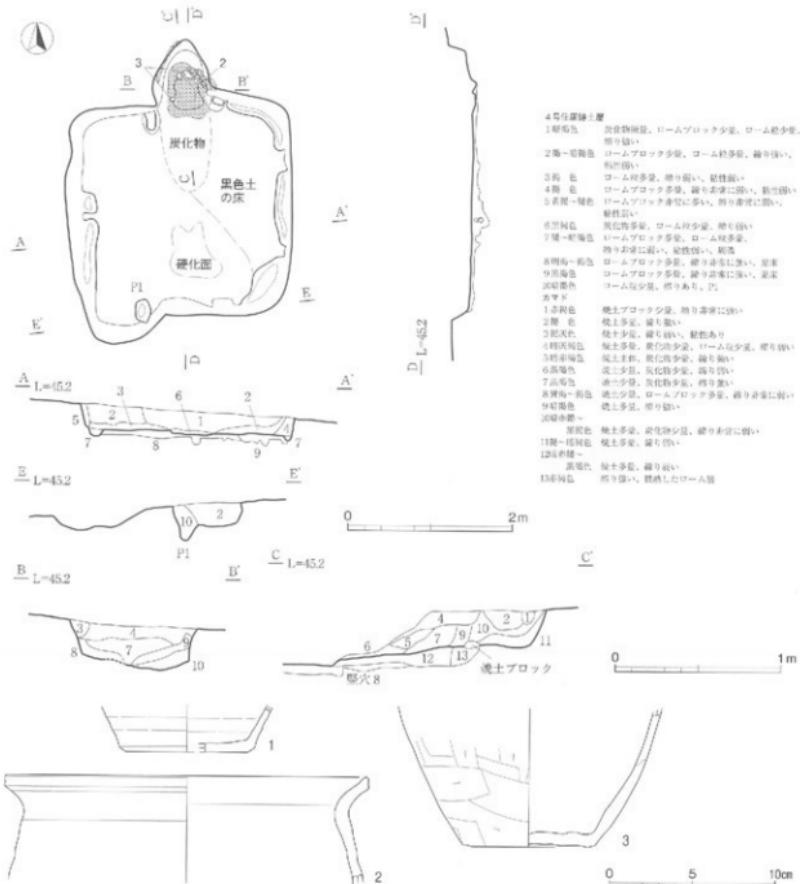
図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	粘土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- -	口縁部テラキザミ。口縁部微弱不明の附加条純文(R-S、石美 L-Z、ド+上)。内面は横、斜位のナデ。	石美、角閃石	良好	外：淡黄色 内：にぶい褐色	B1区一括 十三面式
2	弥生土器 壺	- -	口縁部繩文茎部によるキザミ。口縁部先端齊状の鶴嘴状工具(6面鏡)による横位波次文(ド+上、時計回り)。内面は横位のナデ→口縁部直下に外面と同様の繩文状工具(接続は5本)による横位波次文1条。外側の波次文は瘤状文のように止めながら難定。	石美、角閃石	普通	にぶい黄褐色	B1区一括
3	弥生土器 壺	- -	折り返し横位。口縁部微弱不明の附加条純文(R-S)によるキザミ。口縁部繩文(瓶位のナデ)、輪縄不明の附加条純文(L-Z)→口縁下端に小突起3個。内面は横位のナデ。外側スム、内面ヨゴレ付着。	石美、多量の白色 粘	普通	外：にぶい褐色 内：黒褐色	B1区一括
4	弥生土器 壺	- -	腹部押捺跡並・颈部5本条の横位波次文(ド+上)。内面は横位のナデ。外側スム・スス付着。	石美、角閃石、多 量の白色粘	良好	外：黒褐色 内：灰黃褐色	B1区一括 十三面式
5	弥生土器 壺	- -	断部押捺跡並1種純文(R-L=2L、断部結節)、輪縄不明の附加条純文(1-S±)。内面は横位・斜位のナデ。外側スム、内面ヨゴレ付着。	多量の石美	不良	外：にぶい褐色 内：黒褐色	B1区一括
6	弥生土器 壺	(14.0)	断部押捺跡並の附加条純文(1-S)。底部斜直。内面は横位のナデ。内面ヨゴレ付着。	多量の石美・其 石、角閃石、金雲母	良好	外：灰褐色 内：黒褐色	B1区一括

第2節 奈良・平安時代

1 壺穴住居跡

4号住居跡（第236図）

位置 B1区、G4グリッドに位置する。規模と平面形 南北（主軸）方向 2.56～2.74m、東西方向 2.75mを測り、不整隅丸正方形状を呈する。南西隅の上端がやや張り出す。5号住居跡の一部を破壊する。主軸方位 N-4°-W 壁 壁高は14cmを測る。床 わずかに凹凸があり、出入口部が硬化し、北東半分は黒褐色土の軟弱な床である。ピット P1は深さ20cmで、出入口ピットであろう。カマド 燃焼部はやや窪み、煙道部にかけて赤化・硬化著しい。袖は残存しないが、両袖の基部にあたるわずかな高まりが残存する。中央部からは大きな焼土塊が出土し、支脚の可能性もある。覆土 暗～黒褐色土主体の自然堆積状である。遺物 カマド覆土中から上師器壺の個体が出土した。懸け壺と推測する。所見 住居跡の廃絶時期は、8世紀中葉頃と考えられる。



第236図 4号住居跡・出土遺物

表108 4号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種類 別種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	環足鋸 环	— (7.4)	底部平、底部内弧へラケズリ、クロコ右回転。	長石、石英	良好	灰白色	
2	土師器 甕	(22.2) —	口沿加片、口縁部内外面ヨコナデ、腹部内外面ナデ。	石英、金雲母	良好	橙色	カマド焼土
3	土師器 甕	— 8.1	底部片。底部剥離ナデ、腹部外表面ヘラケズリ。	石英、金雲母	良好	橙色	カマド山上

2 溝

1号溝（第6図）

位置 B1区、G3・G4グリッドに位置する。規模と形状 上面幅0.46～1.64m、下面幅0.18～0.76m、深さ5～20cmを測る。総延長22.5mを確認した。断面形は浅皿状～緩やかなU字状（第223図C-C'）である。走行方向 わずかに弯曲するが、ほぼ南北方向に走向する。N-1.5°-W 覆土 均質な黒色土が堆積する。遺物 須恵器壺の破片が出土しているが、小片のため同化に至らなかった。所見 覆土の状況や出土遺物などから、構築時期は古代と推測する。4号住居跡と主軸方向が近似することも示唆的である。

第3節 時期不明の遺構と遺構外出土遺物

1 時期不明の遺構

掘立柱建物跡と土坑・ピットが確認されている。1号掘立柱建物跡はG4～G5グリッドに位置する。調査区外にかかるため、桁行西辺しか調査できなかった。さらに調査区外では竪穴住居跡と重複するようである。桁行西辺2間、3.61m。桁行柱間1.7m・1.9m。主軸（桁方向）方位はN-75°-Eである。柱穴は3基確認し、全て抜取であった。

土坑は小規模で時期不明なものが5基点在する。1・2号土坑は隣り合って位置し、どちらも略円形で浅い。3号土坑もピット状で浅い。4・5号土坑は連結し、覆土は1号溝に類似する。いずれも壁面が硬化するが、土坑の性格は不明である。5基ともに時期判断すべき遺物に欠ける。計測値等は一覧表に記載した。

ピットは1号溝内やその周辺から、25基

確認された。1・18号は欠番である。深さは16～68cmを測り、平均33cmである。覆土は褐色土主体と黒褐色土主体に分かれ。全て詳細時期不明ながら、1号溝とは何らかの関連が想定される。

表109 B1区土坑一覧表

編成名	位置	平面形態	規模(cm)			備考
			長径	短径	深さ	
1号土坑	G4	不整円形	62	60	14	
2号土坑	G4	不整円形	90	88	16	
3号土坑	G4	不整圓形	72	37	9	
4号土坑	F4	稍円形	156	103	47	5号土坑と重複
5号土坑	F4	稍円形	108	94	32	4号土坑と重複

2 遺構外出土遺物

縄文土器片が弥生後期の遺構や表土層から4点出土した。細別は中期中葉阿玉台II式と晩期中葉（1）に比定され、他は縄文のみ施される胸部片である。



第237図 遺構外出土遺物

表110 遺構外出土遺物観察表

図版番号	種別	口径 器高 底径	特徴	粘土	焼成	色調	備考
1	縄文土器 片	- - -	口縁部～背部片：体部に平行縄文(L2)を複数施す→L2側に多段骨質工具の痕（L3跡）を複数見せる→L3側に複数の平行凹窓→底面に同様の工具による痕突起。口部に多段骨質工具による削痕。内面は横・縦堅肋のミガ4。	多量の白色粒	良好	外：褐色 内：明茶褐色	B1区6号住居跡 表土層 晩期中葉

第VI章 B 2区の遺構と遺物

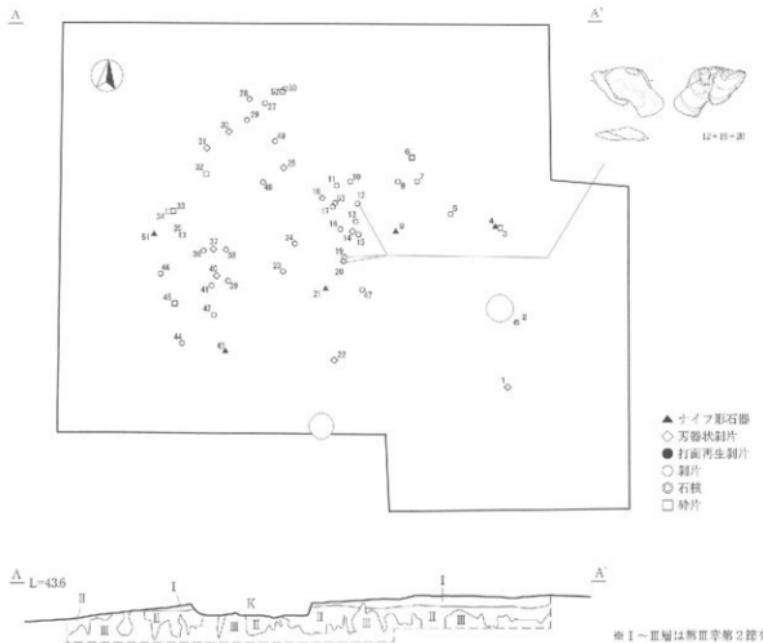
第1節 旧石器時代

1 石器集中地点

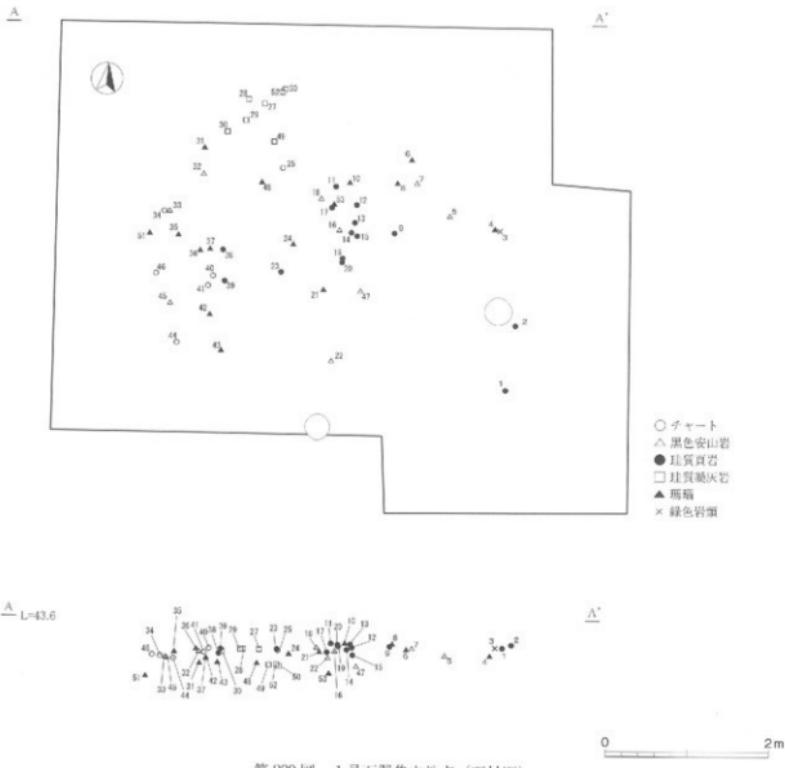
1号石器集中地点（第238～241図）

位置 調査区の西側中央、G 9グリッドに所在する。 **規模** 東西4.56m×南北3.35m。標高42.88m～43.31m。 **層位** II層のソフトロームおよびIII層のハードローム中から出土し、その多くはII層中で検出された。III層中からも少量確認されているが、II・III層間が一定しないことに起因するもので、II層中の出土石器と同一のブロックに伴うものと見做される。 **遺物** 石器は59点出土した。ナイフ形石器5点、刃器状剥片8点、打面再生剥片1点、剥片34点、石核2点、碎片9点が認められており、總出土量における剥片や碎片の占める割合が高い(88%)。 **石器概要** 2次加工が施された石器ではナイフ形石器5点(No.4・9・21・43・51)が検出された。しかし、完形品は少なくNo.43以外は、先端部や基部が欠損している。各石器の製作工程を外観すると、素材剥片には単設打面石核および両設打面石核から剥片剥離された比較的小型の刃器状剥片が利用されており、単設打面石核から剥離されたものが多用されている。2次加工の部位は、剥片の末端部に施すNo.21・51、打面周辺に施すNo.4・9・43の2種類に分けられ、一側縁加工が施されるNo.4・9・43・51や二側縁加工が施されるNo.21に細分される。各石器の2次加工技術は、No.4を除き主要剥離面側から背面側へ刃漬し加工が連続的に施されており、いずれも急角度(60°～71°)な剥離角をもつ。形態的な特徴については、基部が尖基状(V字状)に加工されるNo.4・21・43や基部が方形状(打面が残存)のNo.9・51の2種類が認められる。なお、尖基状の基部をもつNo.4・43については、片側の打面周辺が大きく加工されていることから、刃漬しによる調整が施される前に切断している可能性が考えられる。また、No.43の基部には剥片剥離後の細長い剥離痕(縫状剥離)が認められることから、彫器としての機能を有している可能性も考えられる。刃器状剥片8点が検出されており、いずれも人為的な細部加工の痕跡は認められなかった。素材となる石核には、刃器状剥片の背面の剥離面構成により2点が単設打面石核、6点が両設打面石核が使用されている。これらの打面を観察すると、調整打面をもつNo.1・22・37、平坦打面をもつNo.30が認められる。しかし、No.14・25・31・40は剥片剥離後に打面が除去(斜位・平坦)されていることから、打面の状態が不明瞭である。石核は2点検出された。No.55はチャート製で切削面とみられる剥離面を除き、小型な剥離面が1箇所認められたのみである。No.2は珪質頁岩製の小型石核であり、形状などから残核と考えられる。剥離面の構成から両設打面石核と判断され、刃器状剥片を連続的に作出していたと推測される。また、作業面や打面周辺には小型剥離痕が多く、打面再生や頭部調整などが頻繁であったことが窺える。剥片類43点は、打面・末端部が遺存していない小型剥片や小型不整形なものが主体であるが、珪質頁岩製の剥片No.19・20および碎片No.12による接合資料が1点確認されている。No.20は縦打面をもち、背面全体が原礫面に覆われていることから、剥片剥離工程における初期段階の剥片と判断される。No.19は、No.20に連続する剥片剥離作業により作出された剥片である。上記の石核No.2や接合資料No.12・19・20などは、本遺跡における素材剥片作出を目的とする剥片剥離工程の一端を示す良好な資料と言える。 **石材** チャート・黒色安山岩・珪質頁岩・珪質凝灰岩・瑪瑙・緑色岩類などが使用されており、珪質頁岩・瑪瑙が半数以上を占める(54.2%)。それらの石材の多くは、ナイフ形石器や刃器状剥片に利用される傾向が認められる。

また、珪質頁岩製の石器 17 点では、礫皮・色調・混入物などの特徴などから、石核No.2 を除き接合資料No.12・19・20 と同一母岩と推測される。さらに、黒色安山岩・珪質凝灰岩・瑪瑙製の石器に關しても色調・混入物などの観察から、同一母岩である可能性が考えられる。なお、母岩別資料については、肉眼観察による識別である。分布状況 器種別の分布状況をみると、ナイフ形石器・刃器状剥片・碎片などは集中地点内に散在しているのに対して、剥片は小規模な集中範囲が3箇所認められた。そのうち、北西寄りと中央の集中範囲2箇所では、石材別分布の珪質頁岩・珪質凝灰岩と同様の分布状況を示している。石材別の分布状況をみると、黒色安山岩・瑪瑙は集中地点内に散在しているが、チャート・珪質頁岩・珪質凝灰岩は小範囲にまとまって分布している。所見 1号石器集中地点は出土層位や遺物から砂川期に推定され、器種別および石材別の分布状況などから、石器製作に関連する可能性が考えられる。



第238図 1号石器集中地点（器種別）

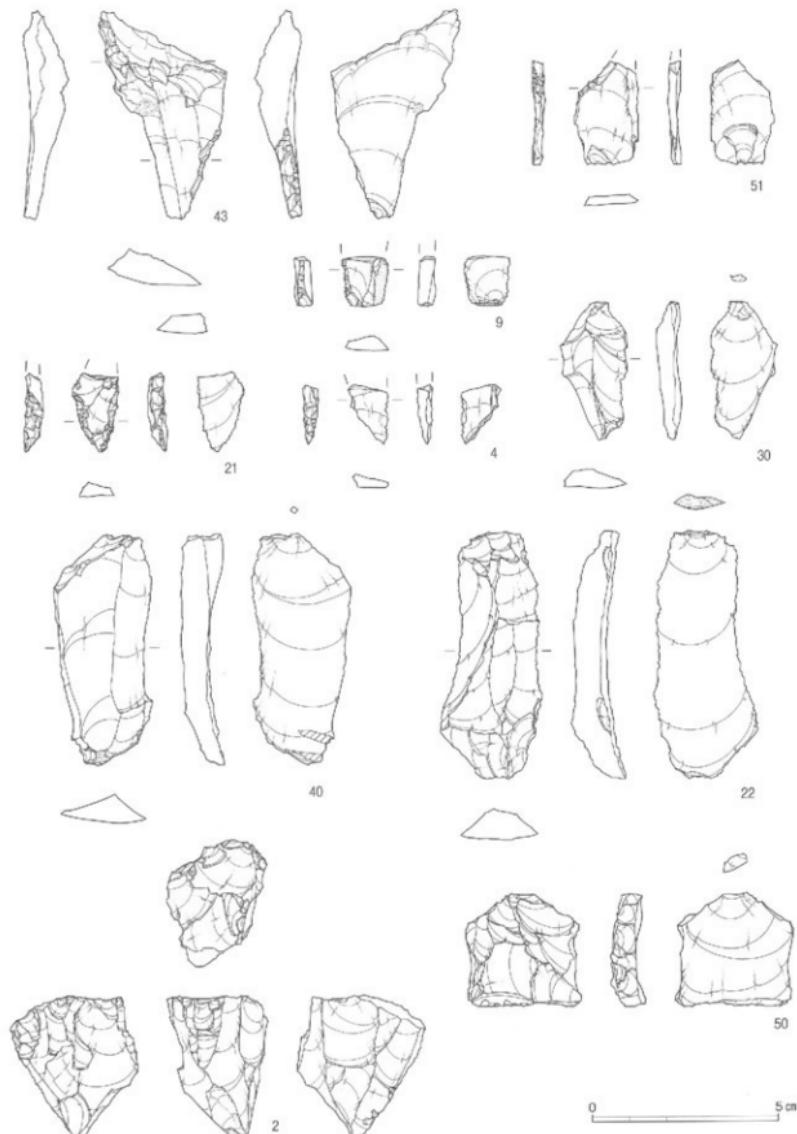


第239図 1号石器集中地点（石材別）

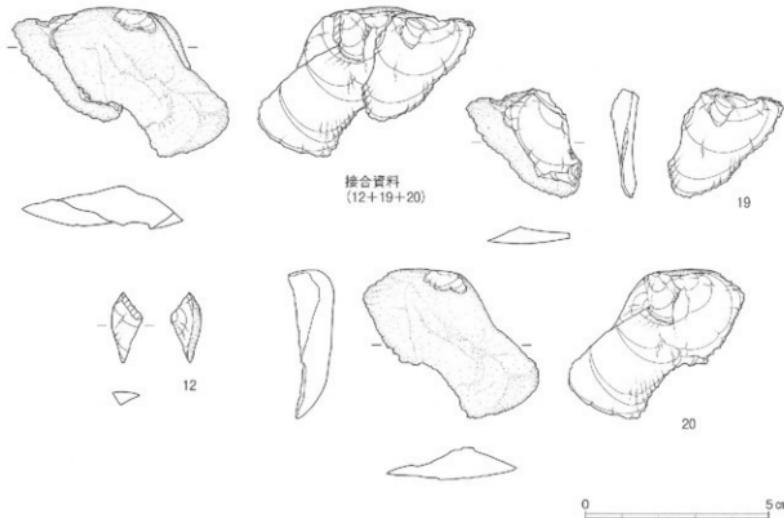
表111 1号石器集中地点出土石器組成表

	チヤート	黒色安山岩	珪質頁岩	珪質礫岩	瑪瑙	緑色岩頭	合計
ナイフ形石器	0	0	1	0	4	0	5
	6	0	0.09	0	1382	6	1471
刃器状剥片	2	1	2	1	2	0	8
	1.06	18.07	7.50	2.98	329	0	66.12
打削再生剥片	9	0	0	1	0	0	1
	0	0	0	6.71	0	0	6.71
剥片	4	7	12	4	7	0	34
	30.21	36.9	39.94	7.23	36.04	0	134.35
石核	1	0	1	0	0	0	2
	16.28	0	0.22	0	0	0	46.77
碎片	1	3	1	1	2	1	9
	0.04	1.05	0.37	0.36	1.01	0.14	3.27
合計	8	11	17	7	15	1	59
	11.21	36.53	29.11	17.08	54.16	0.14	222.23

上段：点数
下段：重量 (g)



第240図 1号石器集中地点出土遺物①



第241図 1号石器集中地点出土遺物②

表112 1号石器集中地点出土石器一覧表

No.	器種	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	欠損 割位	背面の 打撃方向	出土 層位	報告書 番號	備 考
1	刃削状剥片	珪質頁岩	5.44	2.81	0.64	5.36		2方向	Ⅰ層		右端部に擦皮が残存。調點打面。
2	石核	珪質頁岩	3.88	2.35	3.45	30.49			Ⅰ層	○	両設打面石核。原形調整が觀者。
3	碎片	褐色碧玉	(0.73)	(0.56)	(0.33)	0.14	端部		Ⅰ層		無少碎片。
4	ナイフ形石器	瑪瑙	(1.62)	(1.05)	(0.40)	0.47	先端部	1方向	Ⅰ層	○	基部に一側縁加工。打面微去々。
5	剥片	黑色安山岩	1.96	1.56	0.45	1.25			Ⅲ層		末端部は切削か。
6	碎片	瑪瑙	1.80	0.60	0.45	0.39			Ⅰ層		一側縁に不規範な削離面。
7	剥片	黑色安山岩	1.98	1.79	0.18	0.62		1方向	Ⅰ層		細辺にガジリ有り。末端部は切削か。
8	剥片	瑪瑙	0.98	0.72	0.24	0.17		1方向	Ⅰ層		末端部は切削か。
9	ナイフ形石器	珪質頁岩	(1.20)	(1.25)	(0.49)	0.89	先端部	1方向	Ⅰ層	○	基部に一側縁加工。
10	剥片	瑪瑙	2.16	2.07	0.42	1.56		1方向	Ⅲ層		跡理面が残存。末端部は切削か。
11	剥片	珪質頁岩	0.93	1.36	0.33	0.38			Ⅱ層		調整剥片。
12	碎片	珪質頁岩	1.90	0.84	0.35	0.37			Ⅱ層	○	No.20の剥片剥離に伴う碎片。
13	剥片	珪質頁岩	3.55	2.46	1.25	3.35		1方向	Ⅱ層		末端部に不規範な削離面。
14	刃削状剥片	珪質頁岩	3.35	1.96	0.42	2.16		2方向	Ⅱ層		打面・尖端部は切削か。
15	剥片	珪質頁岩	3.54	2.79	0.99	9.98		1方向	Ⅲ層		擦皮が残存。
16	剥片	黑色安山岩	(1.85)	1.96	0.66	2.00	末端部	2方向	Ⅱ層		擦皮が残存。打面は切削か。
17	剥片	珪質頁岩	2.51	1.63	0.49	1.08		1方向	Ⅱ層		擦皮が残存。
18	剥片	黑色安山岩	3.29	2.09	0.75	3.50		2方向	Ⅱ層		

第貢京 B.2区の遺物と遺物

No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	欠損部位	背面の打撃方向	出土層位	報告書番号	備考
19	剥片	珪質灰岩	3.00	3.23	0.76	3.33		1方向	II層	○	Ex.20との複合資料。裸打面。
20	剥片	珪質灰岩	4.10	4.80	1.25	12.97	縫隙	II層	○	Ex.12-19との複合資料。裸打面。	
21	ナイフ形石器	瑪瑙	(2.15)	1.25	0.50	1.15	先端部	1方向	II層	○	基部にて削除加工。
22	刀器状剥片	黒色安山岩	6.80	2.75	1.45	18.07		1方向	II層	○	今や人型。平刃打面。
23	剥片	珪質灰岩	1.82	1.62	0.42	1.09		1方向	II層		裸皮が残存。末端部は切断。
24	剥片	瑪瑙	2.77	2.35	1.31	7.10		2方向	II層		節理面が残存。末端部は切断。
25	刀器状剥片	チャート	1.90	1.19	0.26	0.49		1方向	II層		打面・末端部は切断。
26	欠壊										
27	剥片	珪質灰岩	1.78	1.48	0.33	0.66		II層			調査剥片。背面に裸皮が残存。
28	剥片	珪質灰岩	3.60	2.95	1.42	5.67		II層			打面露出剥片。背面に痕跡消滅板。
29	剥片	珪質灰岩	(1.58)	(1.46)	0.44	0.72	右半部	1方向	II層		末端部は切断。
30	刀器状剥片	珪質灰岩	3.30	1.80	0.65	2.88		2方向	II層	○	末端部に小さな刻痕板。ナイフ形石器。平刃打面。
31	刃部状剥片	瑪瑙	2.55	1.50	0.79	2.30		2方向	II層		打面・末端部は切断。
32	缺片	黒色安山岩	1.68	1.31	0.30	0.94			II層		小型。
33	碎片	黒色安山岩	0.84	0.42	0.20	0.09					極少碎片。
34	碎片	チャート	0.76	0.53	0.14	0.04			II層		極少碎片。
35	碎片	瑪瑙	0.96	1.54	0.63	0.62			II層		小型。風化が顕著。
36	剥片	瑪瑙	3.59	3.15	1.38	12.94		2方向	II層		裸皮が残存。
37	刀器状剥片	瑪瑙	2.39	1.38	0.31	0.99		2方向	II層		剥離打面。打面・末端部は切断。
38	剥片	珪質灰岩	0.91	1.23	0.18	0.21		1方向	II層		打面・末端部は切断。
39	剥片	珪質灰岩	2.31	2.98	1.33	6.35			II層		隣近にガリ有り。
40	刃部状剥片	チャート	6.30	2.65	1.15	15.17		2方向	II層	○	二側面の一部に剝離剥落。打面除去。
41	剥片	チャート	2.74	3.88	0.90	7.85		1方向	II層		第3端部が残存。末端部は切断。
42	缺片	珪質灰岩	1.27	1.02	0.25	0.30		2方向			末端部は切断。
43	ナイフ形石器	瑪瑙	5.70	3.45	1.27	10.72		2方向	II層	○	基部に一側面加工。断面の可塑性有り。
44	剥片	チャート	2.58	1.41	0.35	0.80		2方向	II層		末端部は切断。
45	碎片	黒色安山岩	1.42	1.04	0.49	0.52			II層		小型。
46	剥片	チャート	0.88	0.72	0.23	0.08		1方向	II層		打面は切断。
47	剥片	黒色安山岩	1.48	1.27	0.56	0.93		1方向	II層		打面は切断。
48	剥片	瑪瑙	1.89	1.22	0.37	0.86		1方向	II層		裸皮が残存。
49	剥片	珪質灰岩	1.69	0.52	0.36	0.28			II層		小量。背面に不連続な剥離板。
50	打面剥落剥片	珪質灰岩	3.10	3.15	0.95	6.71			II層	○	單斜打面右斜の打面剥落剥片。尖端部は切断。
51	ナイフ形石器	瑪瑙	(2.85)	1.73	0.35	1.48	先端部	1方向	II層	○	末端部に一直線加工。
52	碎片	珪質灰岩	(1.56)	(0.59)	0.17	0.16	左半部	1方向	II層		極少碎片。
53	剥片	瑪瑙	1.60	0.96	0.47	0.61	1方向	II層		打面・末端部は切断。	
54	剥片	瑪瑙	3.79	2.58	1.61	12.80		2方向	II層		風化が顕著。
55	石核	チャート	3.64	3.00	1.72	16.28	端部	一括			裸皮が残存。小型側面削面-首面。
56	剥片	チャート	1.68	2.05	0.50	1.59			II層		調査剥片。
57	剥片	珪質灰岩	1.74	1.39	0.26	0.65		1方向	II層		打面は切断。
58	剥片	珪質灰岩	1.91	1.16	0.10	0.13					小型。打面は切断。
59	剥片	黒色安山岩	2.65	1.84	0.40	1.95					風化が顕著。打面・末端部は切断。
60	剥片	黒色安山岩	1.93	1.06	0.30	0.66			II層		小型。風化が顕著。打面・末端部は切断。

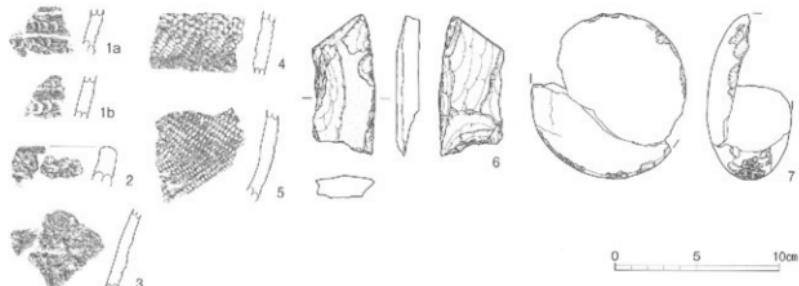
※単位: cm. g ○ 内は残存僅

第2節 繩文時代

1 壁穴住居跡

1号住居跡（第242・243図）

位置 調査区の南東部、H 9 グリッドに所在する。規模と平面形 調査範囲や耕作痕による搅拌のため住居跡南端が不明瞭となる。 $[5.78\text{以上}] \times 3.86\text{m}$ 。長方形。主軸方向 N-38°W。壁 壁高は約 12cm で、ほぼ垂直に立ち上がる。床 硬化等は認められない。ピット 45 基。P 1～P 6 および P 7 は主柱穴に想定される（深さ 34～65cm）。そのうち、P 1 の掘り込みが非常に大きい。また、壁穴の壁際などに多数のピット（深さ 10～40cm、平均 21cm）が穿たれ、列状を呈するものも見出された。床下では北側に浅い掘り込みが散在する。B 2 区 1 号土坑が壁穴内に位置するが、その関係は不明である。炉 長径 108cm、短径 66cm、深さ 8cm の長楕円形。さらに、P 1 脇でも被熱痕が見受けられた。覆土 黒褐色土や褐灰色土の 1・

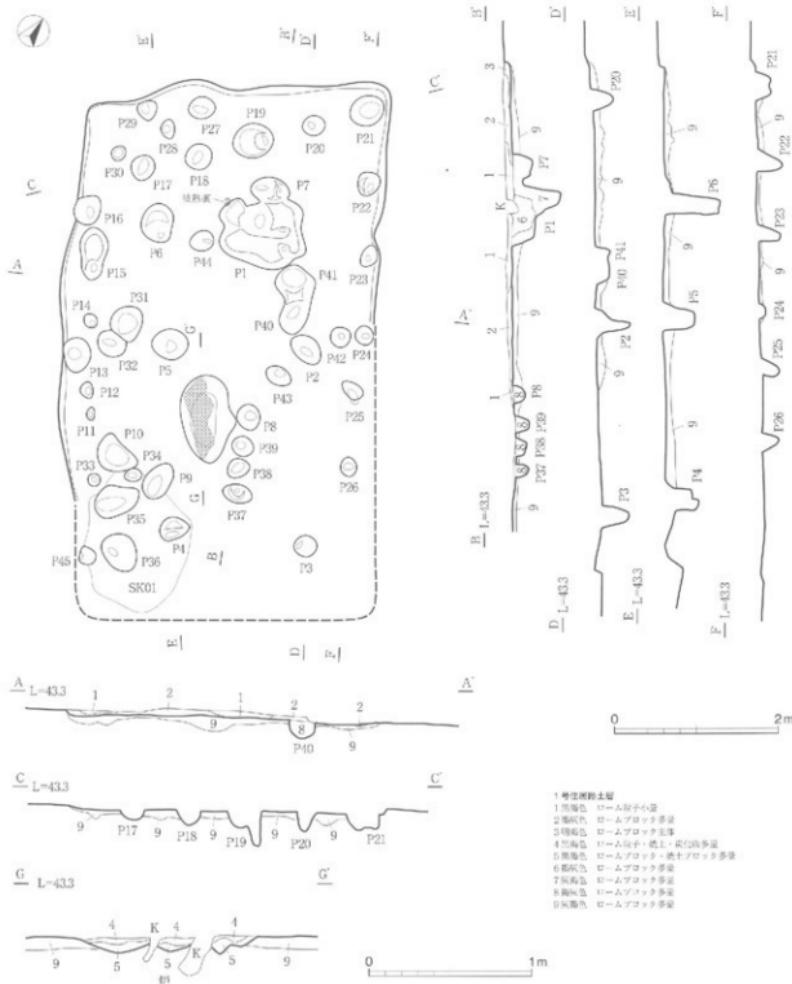


第242図 1号住居跡出土遺物

表113 1号住居跡出土遺物観察表

開拓番号	種別 器種	口径 基面 底面	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	縄文土器 漆鉢	— — —	口縁部分：平底竹管状工具の内面による模様の捺壓記録。 内面にはミガキ。	無鉢	不良	外：暗褐色 内：明褐色	黒浜式
2	縄文土器 漆鉢	— — —	口縁部分：單錐彫文(RL)を模倣施文。内面にはナデ。	片岩・織維	不良	外：暗褐色 内：暗褐色	床面出土 黒浜式
3	縄文土器 漆鉢	— — —	剥離片：縄文施文。内外面共に胎面剥れが著しい。	多量の石英、 織維	不良	外：褐色 内：暗褐色	床面出土 黒浜式
4	縄文土器 漆鉢	— — —	剥離片：平筋彫文(RL・LR)を模倣羽状施文。内面にはミガキ。 ガラス、胎面剥れが著しい。	織維	不良	外：暗褐色 内：暗褐色	黒浜式
5	縄文土器 漆鉢	— — —	剥離片：弦壓彫文(RL・LR)を模倣羽状施文。内面にはミガキ。	織維	不良	外：灰青褐色 内：灰青褐色	黒浜式
6	石器 スクレイパー		磨耗を持つ削片の縁辺部（二邊）に剥離、微細剥離痕。石材：片岩。長さ 8.6cm・幅 3.9cm・厚さ 1.5cm・重さ 566.8g。				床面出土 赤須
7	石器 磨石・研石		円形の自然縞を使用。表面に擦痕、縁辺に敲打痕。被熱により燒跡。1/2次粗。石材：砂岩。残存長 10.2cm・残存幅 9.5cm・残存厚 5.1cm・重さ 360.2g。				床面出土 赤須

2層で覆われ、壁際にロームブロックを主体とする3層が堆積している。 遺物 繩文時代前期中葉の土器片、石器が少量出土している。 所見 住居の形態や他時期の混入が認められない遺物の検出状況から、繩文時代前期中葉黒浜式期の住居跡に比定される。



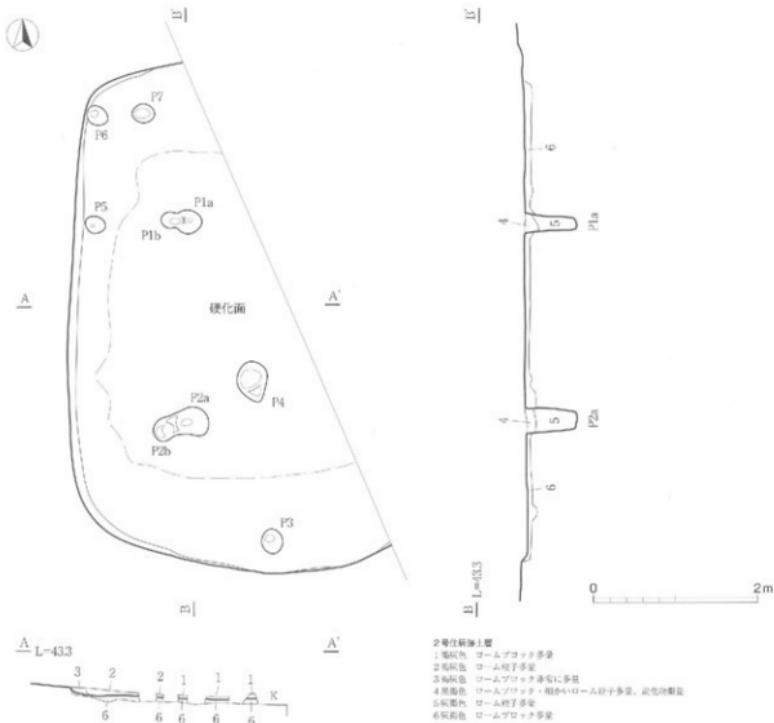
第243図 1号住居跡

第3節 弥生時代

1 堅穴住居跡

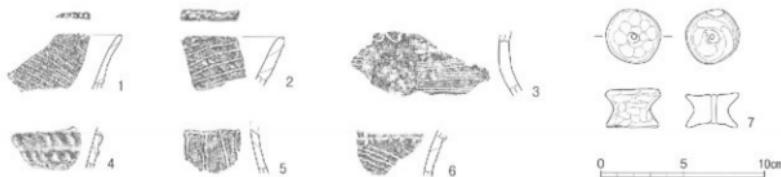
2号住居跡（第244・245図）

位置 調査区の南東部、II 9 グリッドに所在する。規模と平面形 調査範囲や耕作痕による搅拌のため住居跡東側が不明瞭となる。[6.06 以上] × [3.54 以上] m。隅丸長方形。主軸方向 N - 0° 壁 壁高は約 9 cm で、傾斜して立ち上がる。床 主柱穴を囲む堅穴の中央が硬化する。ビット 9 基。P 1a・P 1b・P 2a・P 2b は主柱穴に想定される（深さ 60 ~ 67 cm）。柱の付け替えが見受けられ、内側の P 1a・P 2a、外側の P 1b・P 2b が対応する。P 1a・P 1b、P 2a・P 2b はそれぞれ重複するが、耕作痕による搅拌のため新旧関係は観察できなかった。P 3 は出入り口ビットである（深さ 36 cm）。また、堅穴の中央やや南側に P 4（深さ 27 cm）、北西壁に沿って P 5・P 6・P 7（深さ 20 ~ 47 cm）が認められる。炉 検出



第244図 2号住居跡

されなかった。耕作痕により削平されたものと考えられる。 覆土 ロームブロックやローム粒子を含む褐色土色上の1・2層で覆われ、壁際にロームブロックを主体とする3層が堆積している。また、床面下の掘り方にはロームブロックを含む灰褐色土が認められた。 遺物 弥生時代後期の土器片が少量出土した。また、紡錘車(7)が検出されている。 所見 住居の形態や出土遺物から、弥生時代後期の住居跡に比定される。



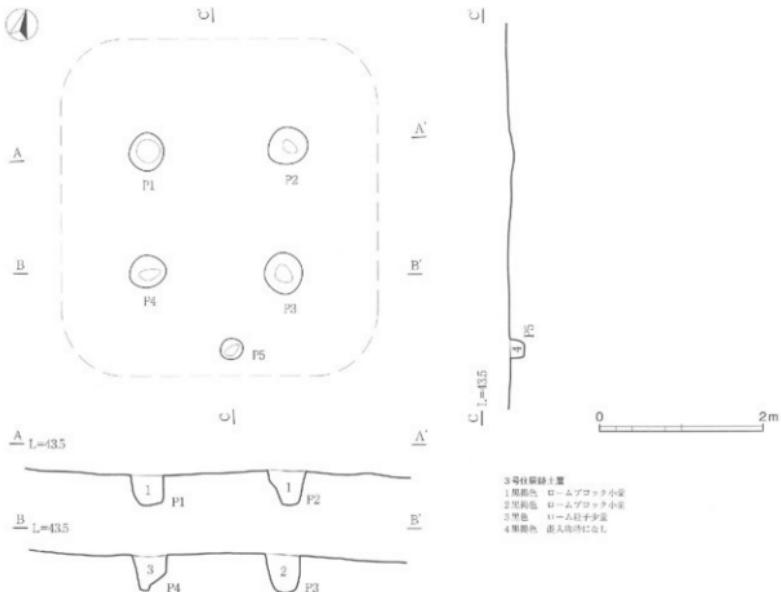
第245図 2号住居跡出土遺物

表114 2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種類 器種	口径 底高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	— —	口唇部丸状工具によるキザミ。口縁部輪郭不明の剥離入子(「L」型)。内面は横・斜位のナギ。外縁歪いヌス、内面ヨコレ付。	石英、角閃石 普通	外: 黒褐色 内: 灰褐色	十王台式	
2	弥生土器 壺	— —	口唇部附加舟2種続文(「K」+「2」型)を回転施文。口縁部河原の原体を模位施文。内面はナギ。	石英 普通	外: 明褐色 内: にほい褐色	十王台式	
3	弥生土器 壺	— —	底部4本脚の継続直続文→複数直続文ないし屢次文。スリット内に横続波状文。内面は横・斜位のナギ。外縁ヌス付。	多量の石英、白色 砂、角閃石、赤色 鉄 不良	外: にほい黄褐色 内: にほい褐色	十王台式	
4	弥生土器 壺	— —	脚部印地輪帶。4本脚の継続直続文→複数直続文。内面は横・斜位のナギ。外縁ヌス付。5と同一個体。外縁ヌス付。	石英、角閃石 良好	外: にほい黄褐色 内: 粉色	十王台式	
5	弥生土器 壺	— —	脚部印地輪帶。4本脚の継続直続文→複数直続文。内面は横・斜位のナギ。外縁ヌス付。4と同一個体。外縁ヌス付。	石英、角閃石、骨 針 良好	外: にほい黄褐色 内: 粉色	十三台式	
6	弥生土器 壺	— —	脚部丸状工具によるキザミ隠帶(隠带直下にも皿形)。輪廻不規の附加金輪文(「K」-「Z」)。内面は複数のナギ。外縁ヌス付。	多量の石英、白色 砂 普通	外: 黑褐色 内: 灰褐色		
7	土製品 紡錘車	後33.高24.孔径0.3.重量[23.50]g. X字形。片切丸子 表面無ナギ・ユビガサエ調節。	石英、角閃石、骨 針、多量の白色粒 普通	にほい黄褐色			

3号住居跡(第246図)

位置 調査区の中央やや南東側、G 8・G 9 グリッドに所在する。 規模と平面形 柱穴のみの確認で、不明である。 主軸方向 N-16°-W。壁 削平されている。 床 ほぼ削平されている。 ピット 5基。 P 1 ~ P 4 は主柱穴(深さ37~46cm)、P 5 は出入り口ピット(深さ19cm)に想定される。 炉 検出されなかった。削平されたものと考えられる。 覆土 柱穴の周りに褐色土が散在する。 遺物 P 2 から弥生時代後期の上器片が1点出土した。 所見 柱穴配置や出土遺物から、弥生時代後期の住居跡に比定される。



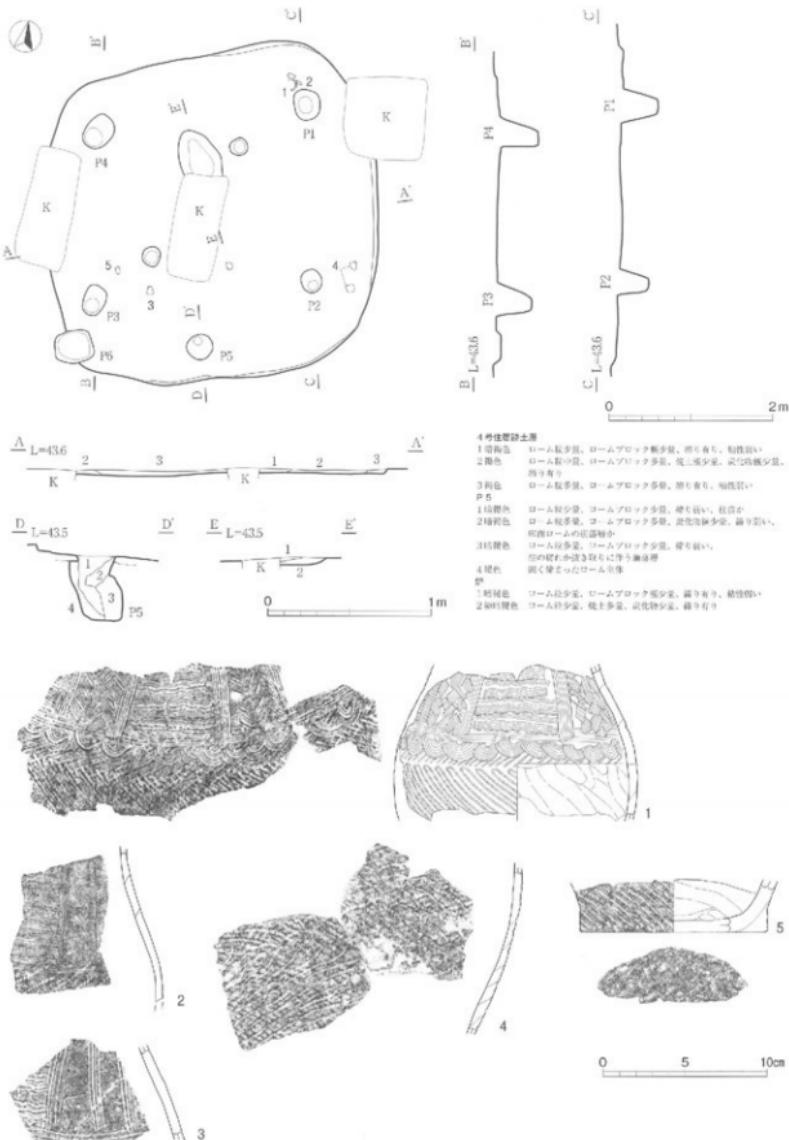
第246図 3号住居跡

4号住居跡（第247図）

位置 B 2 区北部、F 8・G 8 グリッドにある。規模と平面形 4.08×4.00 m の隅丸方形。主軸方向 N - 11° - W。壁 壁高は約 10cm、外傾傾向に立ち上がる。床 床面全体に硬化している。ビット 6箇所。P 1～P 4 は主柱穴と考えられる。P 5 は出入り口ビット、P 6 は深さ 6 cm の深いビットである。炉 住居中央北寄りに位置し、縦長の楕円形になるものと思われる。搅乱穴によって南側を壊されている。覆土 暗褐色土を主体にした自然堆積層である。遺物 覆土下層から弥生時代後期の壺形部・底部片が出土している。所見 弥生時代後期の住居と考えられる。

表115 4号住居跡出土遺物観察表

回収番号	種別	口徑 器高 底径	特徴	埴土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	剥離輪郭不明の附着系縄文 (R - S, L - Z) 焼き灰し気吹 - 刻痕界 6. 本壺の横位直線縄文 (内付瓦引) → 上剥きの後瓦文 (反時計回り)、瓶群 2 余・縦位の範囲直線縄文	石英、角閃石、多量の金星 - 白色	良好	にぶい黄褐色	十王台式
		-	→ 横位直線縄文 (下→上)、瓶群形次文 (下→上、左→右)、一部段位直線縄文 → 刻痕界横位直線縄文 (横位直線縄文の部分あり)、内面は腹部付近のナデ → 直接縫合位のナデ、外面に墨斑 2 ヶ所、内面にも外側と対応する位置に薄い墨斑 2 ヶ所。	砂			
		-	剥離輪郭不明の附着系縄文 (R - S) → 刻痕界 7 本壺の横位直線縄文 → 刻痕界直線縄文 → 横位直線縄文 (上→下)、内面は横・斜位のナデ。外縁スコ、内面ヨコゴレ付。	多量の石英、白色 粒、角閃石、斜長	普通	にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	-					



第247図 4号住居跡・出土遺物

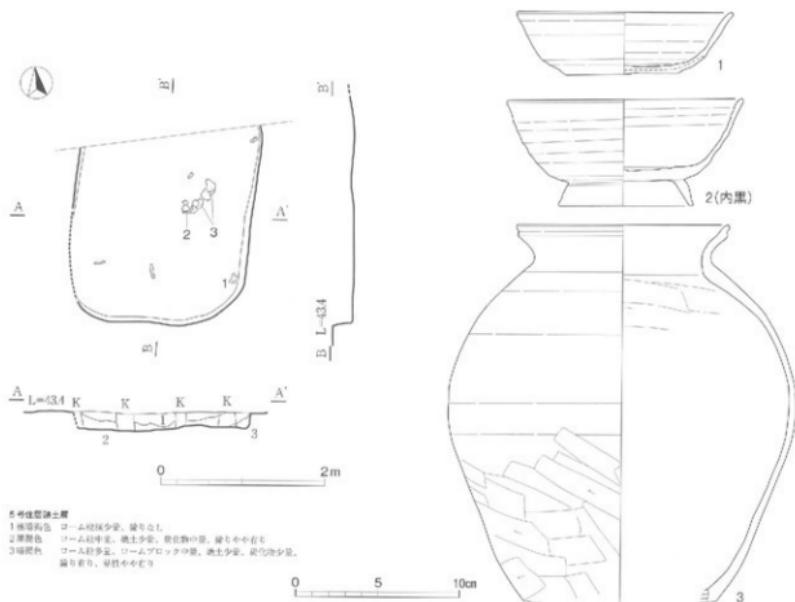
図版 番号	種別 分類	口径 深さ 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	弥生土器 甕	- - -	網目状 2面の縫合部→側縫合部→側縫合部。内面は斜伐のナメ。外面スス、内面全体コケ付着。	多量の石英・長石 普通	外：にぶい黄色 内：墨褐色	十王台式	
4	弥生土器 甕	- - -	網目状 2面縫合 (R.L + 2 R, L + L : 下→上) ナメ。内面は厚・新伐のナメ。	石英、金雲母、骨灰 普通	にぶい黄褐色	十王台式	
5	弥生土器 甕 (11.4)	- -	網目状 2面縫合 (R.L + 2 L)。近底毎目板 (網縫ナメなし)。内面は薄・斜伐のナメ。	多量の石英、角閃石、骨灰、赤褐色、 多量の白色斑 良好	外：にぶい褐色 内：にぶい黄褐色		

第4節 奈良・平安時代

1 墓穴住居跡

5号住居跡 (第248図)

位置 B2区北部、G7・G8グリッドにある。規模と平面形 2.18 × 2.30m 以上の縱に長い隅丸長方形。主軸方向 N = 16° - E 壁 壁高は約24cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 全体にやや硬化している。ピット - カマド - 覆土 床上を全体に暗褐色土を主体とした2枚の層が被覆している。遺物 住居中央部や東寄りの床面から土師器の塊と酸化焰焼成の須恵器焼が、南東部の床面から土師器壺が出土している。所見 出土遺物から平安時代10世紀以降の住居跡と考えられる。



第248図 5号住居跡・出土遺物

表116 5号住居跡出土遺物観察表

図版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺	13.2 3.8 6.6	底部周縁へラ切り差し、口クロ右斜傾。体部内外面クロナデ。微化粧と炭化粧があり、二次焼熱を受けているか。	石英、消済骨針	良好	に赤い褐色（酸化部分）	20%
2	土師器 壺	14.4 6.6 8.1	体部内外面クロナデ。外側に赤い褐色内面黒化。	石英、角閃石	普通	に赤い褐色	80%
3	原色器 壺	(12.9) (23.2) (11.7)	口縁部外面斜め方向傾み上げ、頸部外側面クロナデ。肩部下部ハラケズリ。	長石、石英	良好	褐褐色	80%

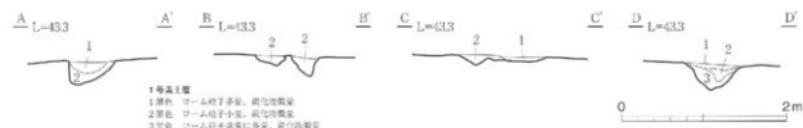
第5節 時期不明の遺構と遺構外出土遺物

1 溝

1号溝（第7・249図）

位置 調査区の南東部、H 8・H 9グリッドに所在する。規模と形態 調査範囲や耕作痕による攪拌のため部分的に不明瞭となる。南北に向向し、南側が屈曲する。幅36~160cm、深さ2~27cm。主軸方向 N-3~58°-W ピット 19基。性格は不明で、溝と同様の覆土が埋没する。（深さ5~50cm、平均25cm）。

覆土 ローム粒子や炭化物を含む黒色土が堆積している。遺物 繩文時代前期前半や弥生時代後期の土器片が僅少出土した。所見 所産時期は不明である。流水の痕跡が認められることから、区画等を目的とした溝と考えられよう。



第249図 1号溝

2 土坑・ピット（第7・250図）

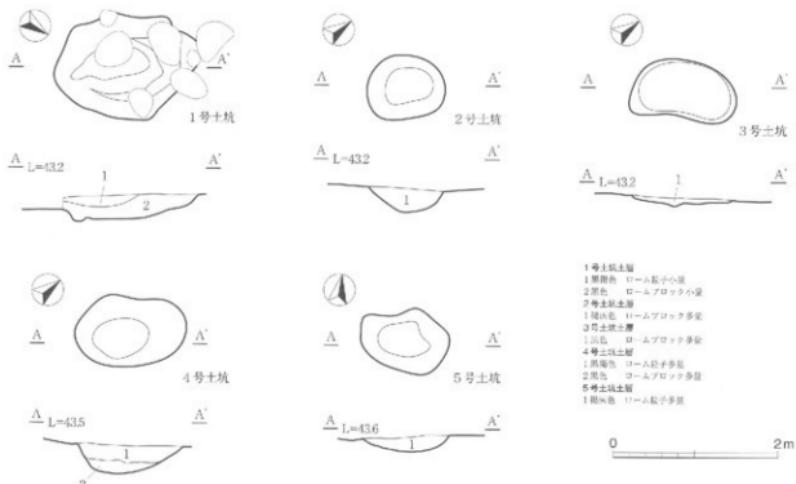
調査区内から5基の土坑が確認された（表117参照）。平面は梢円形ないし不整梢円形、断面形は逆台形状・弧状等で一定しない。覆土は黒・黒褐色土（1・3・4号土坑）や褐灰色土（2・5号土坑）で、ロームブロックやローム粒子を含む。遺物はほとんど出土せず、時期判断が難しい。1号土坑は1号住居跡と重複するが、攪拌のため新旧関係は観察できなかった。5号土坑には根跡が多く、植栽の可能性がある。

ピットは64基確認された（P 1~66、P 9・10は欠番）。調査区北東部および南西部に集中するが、有意な配列等は認められなかった。平面は円形ないし梢円形を呈し、深さは一定しない（深さ14~85cm、平均35cm）。覆土はロームブロック

表117 B 2区土坑一覧表

遺構名	位置	平面形態	規模(cm)			備考
			長径	短径	深さ	
1号土坑	H 9	不整梢円形	163	130	30	1往七重復
2号土坑	H 9	梢円形	94	80	30	
3号土坑	H 9	不整梢円形	139	70	10	
4号土坑	G 9	不整梢円形	134	87	34	
5号土坑	G 8	不整梢円形	110	78	19	

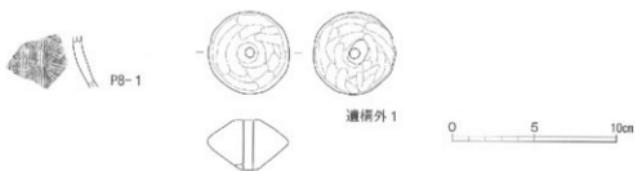
クを少量含む黒褐色土、ロームブロックを多量含む灰褐色土、ローム粒子を小量含む灰褐色土等である。遺物はほとんど出土せず、時期判断が難しい。P 8で弥生時代後期の土器片が出土した（第251図）。



第250図 1号～5号土坑

3 遺構外出土遺物（第251図）

1は無文の土製紡錘車で、ナデによって表裏面が調整されている。



第251図 ピット・遺構外出土遺物

表118 ピット・遺構外出土遺物観察表

団体番号	種別 器種	口径 断面 条件	特徴	胎土	焼成	色調	備考
P 8 1	弥生土器 盤	— — —	頂部2条一單位・3本画の範囲直摩文→横位抜底文。内則は横・斜位のナデ。外面スス付着。	石英	普通	外：暗灰黄色 内：にぶい黄橙色	土台式
遺構外 1	土製品 紡錘車	— — —	径5.0、高3.1、孔径0.6、重さ [59.52] g. 片側穿孔。表面ナデ調整。表面被熱による赤色化。	多量の石英	普通	黒褐色	表土出土

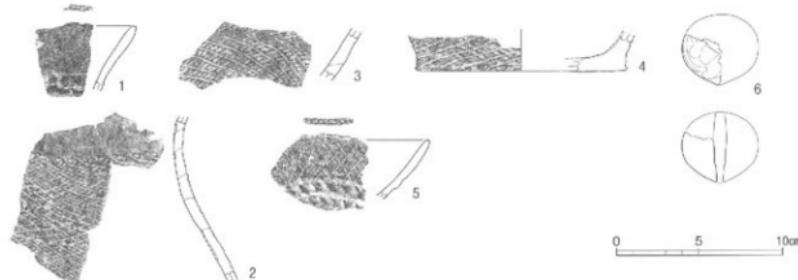
第VII章 B3区の遺構と遺物

第1節 弥生時代

1 積穴住居跡

1号住居跡（第252・253図）

位置 調査区の北西部。H 11・H 12 グリッドに所在する。規模と平面形 削平のため住居跡西側が不明瞭となる。[5.94以上]×[3.74以上]m。隅丸長方形。主軸方向 N-29°-W 壁 壁高は約7.5cmで、やや傾斜して立ち上がる。床 硬化等は認められない。ピット 11基。P 1～P 8は主柱穴に想定される。柱の付け替えが見受けられ、内側のP 1～P 4（深さ55～67cm）、外側のP 5～P 8（深さ27～52cm）が対応する。P 1に伴う浅い掘り込みは柱の抜き取り痕に推察されよう。P 9・P 10は出入り口ピットで、主柱穴の付け替えに対応する（深さ31・26cm）。P 11は貯蔵穴の可能性もあるが、本遺構に伴うものか不

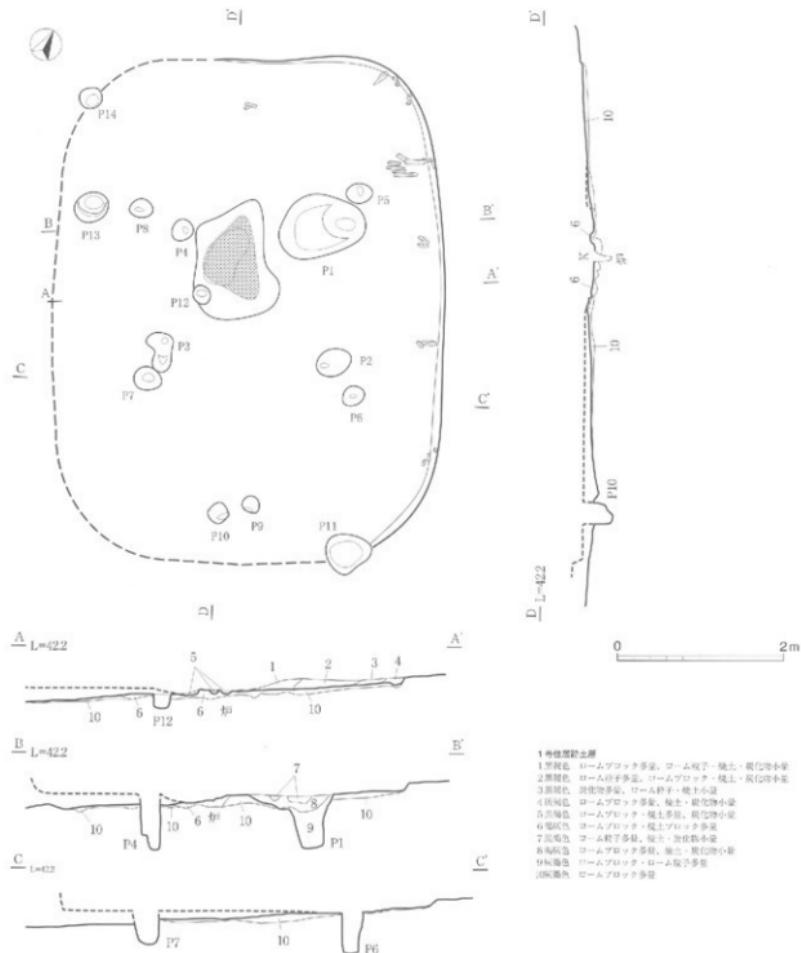


第252図 1号住居跡出土遺物

表119 1号住居跡出土遺物観察表

発掘番号	種別 器種	口径 縦溝 横溝 底溝	特徴	土質	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	- - -	L1脇部横文原体による芋字文、L1脇部横文（横幅のナダ）、脇部底溝のある薄い押捺縫合。内面は横幅のナダ、外面全体に浅い付着。	多量の石英、白色砂、角閃石	普通	外：黒褐色 内：に赤い黄褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	- - -	脇部無文壺（腹・斜肩のナダ）。脇部附着1枚縫文（R L + 2 L、L R + 2 R：下→上）。内面は脇部が稍・斜位のナダ、剥離が腹・斜肩のナダ。	石英	良好	褐色	
3	弥生土器 壺	- - -	脇部横文2種縫文（L + L、R + R：下→上）。内面は複数のナダ。外面スス付着・放熱による赤褐色化、内面白グレ付着。	多量の石英、角閃石、金雲母	良好	外：に赤い黄褐色 内：灰黄褐色	西側方 十王台式
4	弥生土器 壺	- - (130)	脇部附着2枚縫文（R + R）。底部砂痕。内面は剥落。	石英、長石、角閃石	普通	外：に赤い黄褐色 内：に赤い黄褐色	十王台式
5	弥生土器 壺	- - -	口唇部充填状工具によるキザミ文。口唇部窓い押捺縫合→4本側の山形文（右+左）・へラ結び斜格子文（左上がり+右上がり）→横掠波状文。内面は削・削脱のナダ。	石英、角閃石、赤色砂	普通	淡黄色	十王台式
6	土製品 筋縫厚	洋 (4.5)、高 (4.3)、乳径 (0.6)、重 (21.72) g、開口部穿孔。	ナダ調査。	石英、長石、多量の白色砂	普通	に赤い黄色	

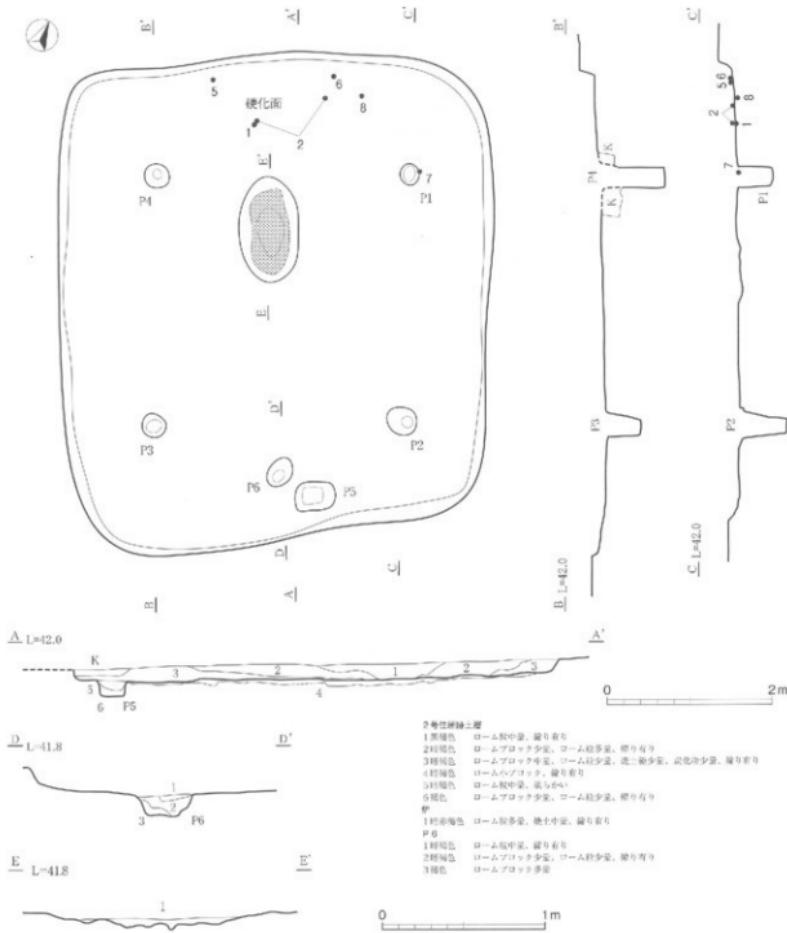
明である（深さ10cm）。炉 長径141cm、短径96cm、深さ5cmの不整形。掘り方を有する。覆土 ロームブロック・ローム粒子・焼土・炭化物を含む黒褐色土の1~3層で覆われ、壁際にロームブロックを主体とする4層が堆積している。また、床面下の掘り方にはロームブロックを含む灰褐色土が認められた。遺物 弥生時代後期の上器片が少量出土した。また、球状の紡錘車（6）が検出されている。東壁際には炭化材や焼土塊が放射状に並ぶ。所見 住居の形態や出土遺物から、弥生時代後期の住居跡に比定される。



第253図 1号住居跡

2号住居跡（第254～256図）

位置 B3区北部、112グリッドにある。規模と平面形 5.88×5.27 mの縦長長方形。主軸方向 N - 25° - W 壁高20cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居中央部を中心に全体によく硬化している。ピット 6箇所。P1～4は主柱穴。P6は炉の対面の壁寄りにあり、出入り口ピットと考えられる。P5は方形基調で深さ13cm、出入り口ピットと関連のある位置にある。床下掘り方で、P7～9が確認され

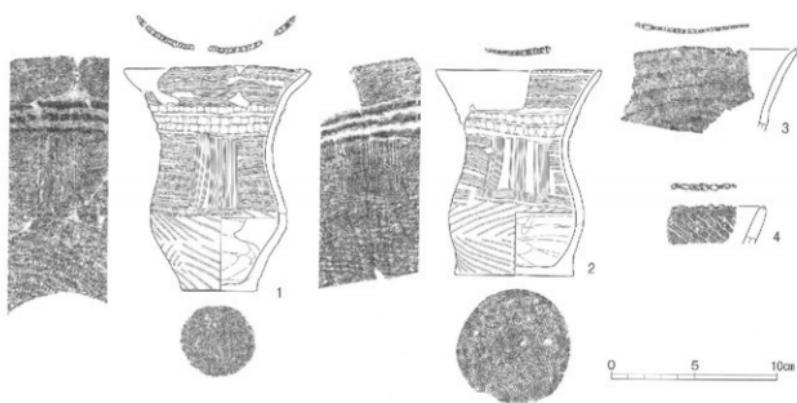


第254図 2号住居跡

Ⓐ

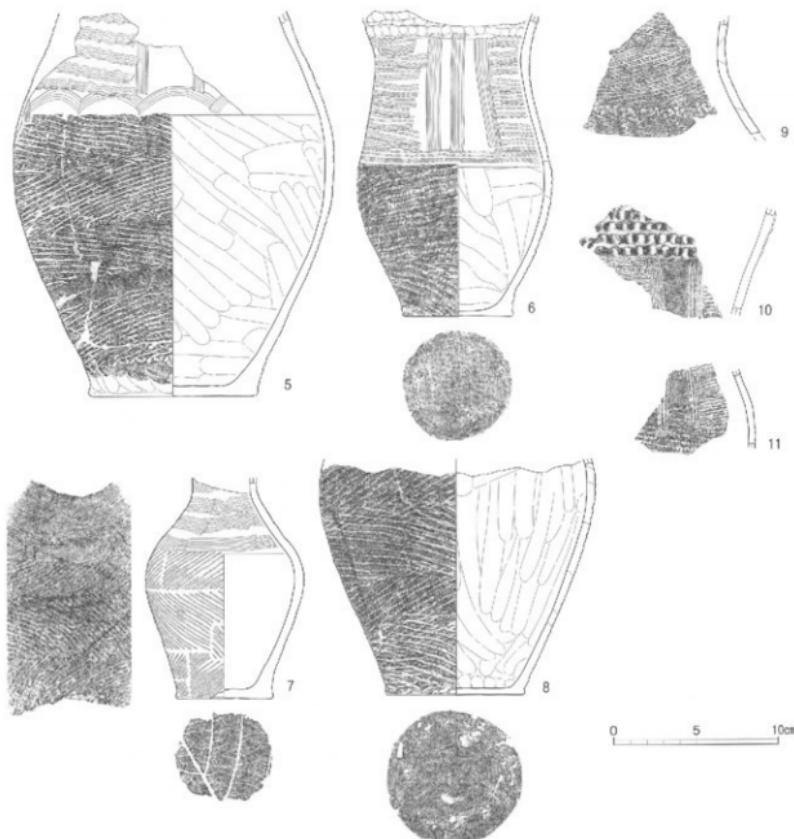


掘り方



第255図 2号住居跡掘り方・出土遺物①

た。深さは48~64cmあり、古い段階の柱穴と考えられる。 炉 長径120cm、短径72cmの楕円形で深さ4cm。 覆土 最上層は黒褐色の自然堆積層、下層の暗褐色土はロームブロックや遺物が多く混じっている。 遺物 6や8の壺は底部下端が床に接し転倒した状態で、7の壺はP1の覆土上層中から出土している。 出土遺物は多く、大破片の割合が高い。十王台式後半期の土器を主体とし、郡河川流域（1・2・6）および久慈川流域（5・10）の特徴を有する土器がそれぞれ確認できる。7は二軒屋式の細頸壺である。 所見出土遺物から弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第256図 2号住居跡出土遺物②

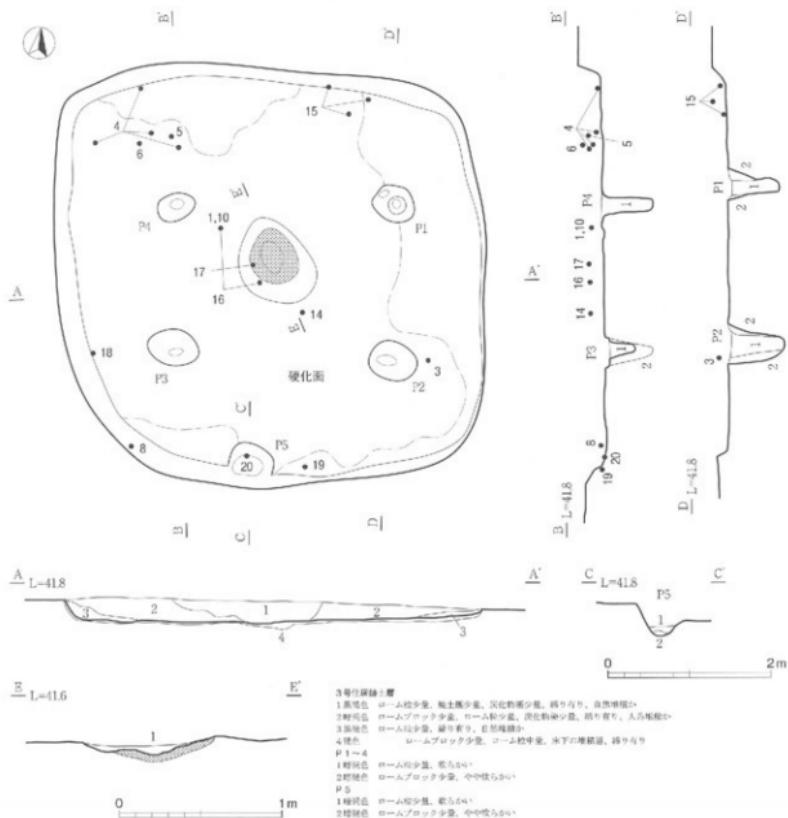
表120 2号住居跡出土遺物観察表

団版 番号	種 別 器 種	口徑 器 高 度	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 豆	(11.4) 13.9 4.6	頭部附焼3条を口部後方下部の複数焼成文(ドーム、輪内葉文等)、頭部底部不規則の附加焼成文(L、S、L、Z、下上、反対2回り文)→頭部底部は複数焼成文→底部3条と茎部の複数焼成文(頭部底部は複数焼成文(下上)、底部有目底(頭部3条ナメ底))。当面は口縁→頭部底部は複数焼成文(ナメ)、底部有目底部のナメ。外口縁→頭部まばらにスヌ、内面頭部底部よりこにヨゴレ付。口縫部底部は濃いヨゴン。	多量の石英、角閃石、赤色。	普通	外:灰青褐色 内:灰黄色	十王台式
2	弥生土器 豆	(10.1) 12.7 7.3	口縁部ヘラキザミ、小突起。頭部焼成不明の附加焼成文(ドーム、輪内葉文等)、頭部底部は複数焼成文(下上)、頭部3条と茎部の複数焼成文(3条→側壁は複数焼成文(下上)。内面は口縁部有目底部のナメ、外口縁部のナメ。底部有目底部(頭部3条ナメ)。外口縁→頭部まばらにスヌ、内面頭部底部以下にまばらなヨゴレ付。	石英、角閃石	普通	灰黄色	十王台式
3	弥生土器 豆	-	口縁部ヘラキザミ、小突起。口縫部7本筋の複数焼成文(下上)。製造造出し難要素。内面は口縁部有目底部のナメ、外口縁部のナメ。外口縁部以下にスヌ付。	石英	良好	外:灰青褐色 内:灰青褐色	十王台式
4	弥生土器 豆	-	口縫部焼成原体よりによるキザミ、模倣のナメ。口縫部軸 輪不規則の附加焼成文(L、Z)。内面は模倣のナメ。	多量の石英、長石	良好	外:にぶい黄褐色 内:にぶい褐色	十王台式
5	弥生土器 豆	- 10.4	頭部焼成加条2種焼文(RL+2Rカ)、輪不規則の附加焼成文(L、Z)、交下上→輪内葉文。頭部下端斜め焼成文(頭部3条)、底部4本筋の下端斜め焼成文(底部軸不規則)→頭部2条。一早い頭部底部文+複数焼成文。底部有目底。内面は頭部底部のナメ、底部付近底部のナメ。外頭部軸部上位より上に適度なスヌ、内面頭部上位より下位に寄沫の薄いヨゴン。その下に濃いヨゴン付。	多量の石英、金雲母、白雲母、角閃石、白色。	良好	にぶい黄褐色	十王台式
6	弥生土器 豆	- 6.6	頭部焼成不規則の附加焼成文(R、S、L、Z、下上)→頭部焼成不規則の附加焼成文(頭部2本筋の複数焼成文(2回り)、輪内葉文等)、底部有目底。内面は薄、頭部のナメ。外頭部軸部上位より上に適度なスヌとスヌ化焼成。底張周縁にスヌ付。内面頭部より上にヨゴレ付。	石英、チャート、角閃石、多量の白色、赤色、金雲母	普通	にぶい黄褐色	十王台式
7	弥生土器 豆	- 6.0	頭部焼成加条1種焼文(RL+2L、RL+2R、下上、反対2回り)→頭部7本筋の2~3筋に複数焼成文(輪内葉文等)、頭部2条(輪内葉文等)、底部有目底(頭部3条ナメ)。複数焼成文(底部軸部不規則)。内面は頭部底部、模倣のナメ。以下は測定。外頭部まばらにスヌ付。	多量の石英、長石	良好	外:にぶい黄褐色 内:灰青褐色	二糸屋式
8	弥生土器 豆	- 18.4	頭部焼成不明の附加焼成文(R、S)→附加2種焼成文(RL+2L、Z)、反対2回り→頭部6本筋の複数焼成文(頭部底部文)、底部有目底(頭部3条ナメ)。内面は薄、斜削のナメ、外頭部まばらにスヌ付。被熱による赤色化。内面全体に濃いヨゴレ付。	石英、多量の白色	良好	灰青褐色	十王台式
9	弥生土器 豆	-	頭部焼成加条1種焼成文(RL+2R、RL+2L、下上)。内面は斜削のナメ。外頭部スヌ、内面ヨゴレ付。	石英、長石	良好	外:にぶい黄褐色 内:灰青褐色	十王台式
10	弥生土器 豆	-	口縫部押掛焼等→頭部4本筋の複数焼成文+複数焼成文。内面は薄、斜削のナメ。	石英、金雲母	良好	外:にぶい黄褐色 内:深褐色	十王台式
11	弥生土器 豆	-	頭部焼成不明の附加焼成文(L、Z)、頭部4本筋の複数焼成文+複数焼成文(下上)。内面は頭部のナメ。外頭部スヌ、内面ヨゴレ付。	石英	普通	灰青褐色	十王台式

3号住居跡(第257~260図)

位置 B3区北部、I 11・I 12グリッドにある。規模と平面形 5.23 × 5.20 m の方形。主軸方向 N - 28° - W 壁 壁高 24cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 西壁側に寄った住居の3分の1の範囲を除いて硬化している。ピット 5箇所。P 1~4は主柱穴。P 5は南壁際に位置し、壁に向かって外類としており入り口ピットと考えられる。炉 長径 75cm、短径 62cm の楕円形で深さ 10cm。覆土 床を被覆する2層はロームブロックを均質に含んでいる。遺物 住居北東隅から中央部にかけての覆土から壺の破片が出土している。確認された住居跡の中では出土遺物が最も多く、略完形個体・大破片の割合が高い。十王台式前半期を主体とするが、施文方法等が一般的なものと異なる個体が多い。4は十王台式の頭部文様の一

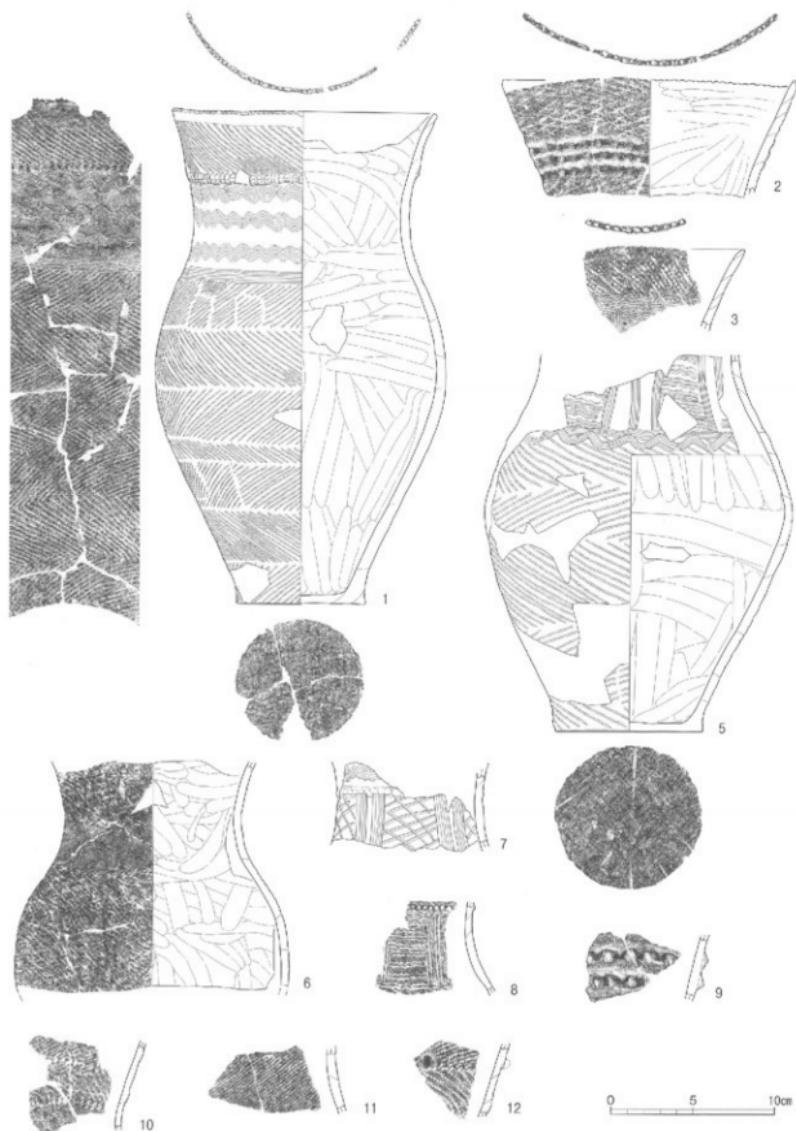
部に巣状文が用いられている。二軒屋式土器の出土量も多く、1・10～12・14が該当する。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



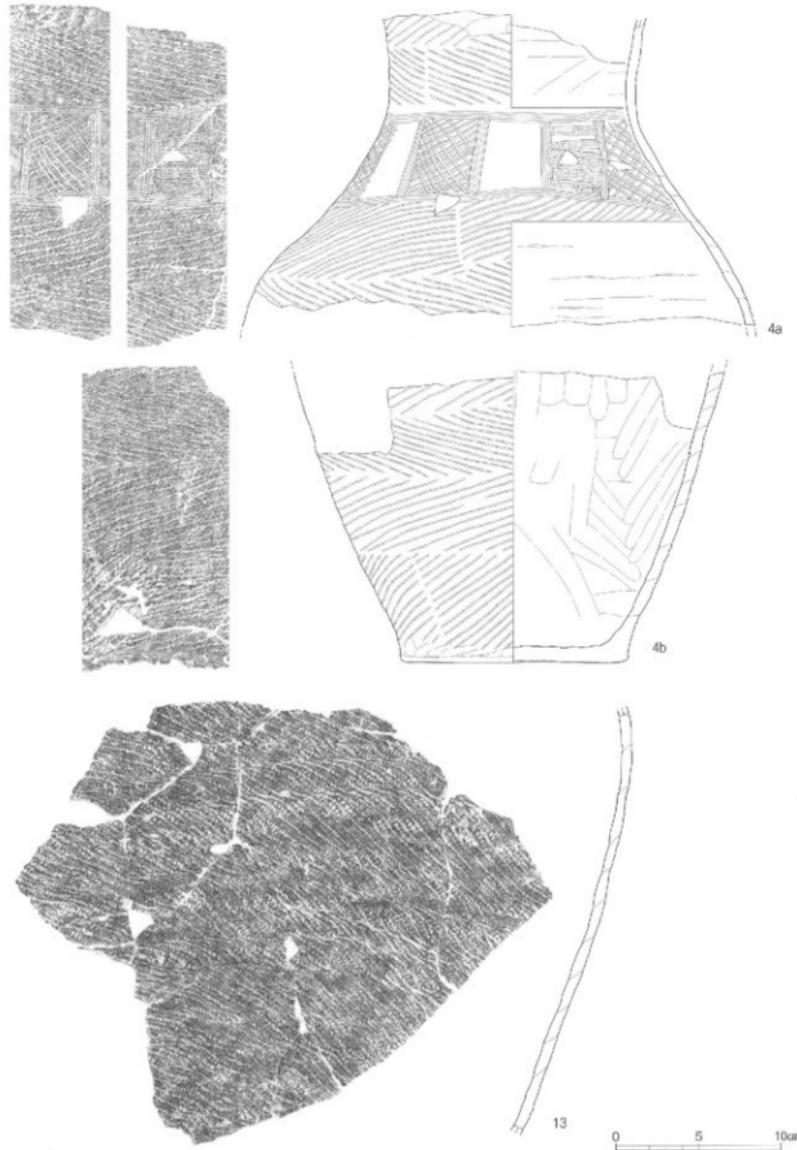
第257図 3号住居跡

表121 3号住居跡出土遺物観察表

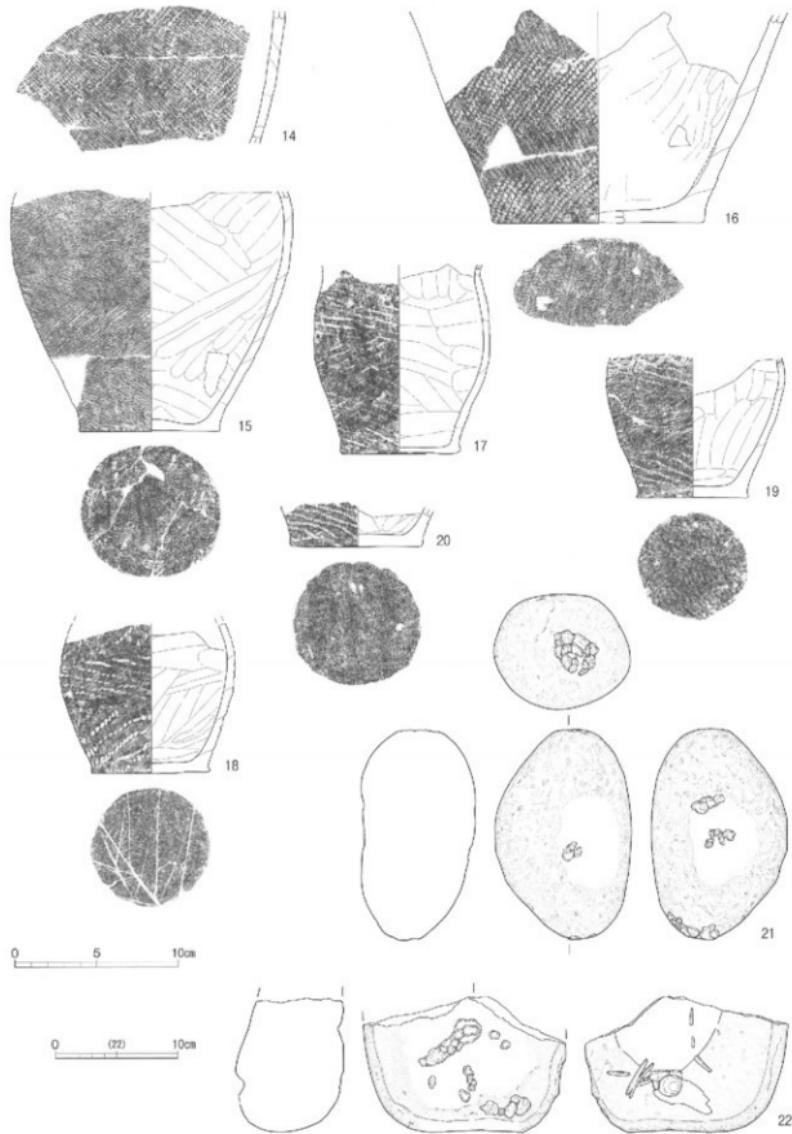
段段番号	種別	口径 深さ 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	16.0 30.5 7.8	口唇部弦文系によるヨギテコ、口縁部加須1種縄文(1.1+2.1)、口唇部付近部位のナマ、口縁部下部縄文(2.1+3.1)によるナマ、瓶形鉢(直径1種縄文(1.1+2.1)、口縁部付近部位のナマ)、直縁奈良型土器の輪郭区画直縁文→瓶形直縁式文、直縁奈良型土器(船身付)、内曲面は剥離中一下段反、位向のナマ→口縁→壁底部上位縫、斜位のナマ、外曲面直縁部左半分にスス、内面は外曲面ススと対応する位置に長いヨゴレ、他は金面ヨゴレ付等。	多量の石英・長石、赤色	良好	外: に赤い・黄褐色 内: 深赤(ゴレ)	二軒屋式



第258図 3号住居跡出土遺物①



第259図 3号住居跡出土遺物②



第260図 3号住居跡出土遺物③

回版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特 徴	胎土	焼成	色調	備考
2	弥生土器 壺	(80)	口沿部腹壁全体によるキザミ。口縁部軸側不明の付加系縫文 (R - S, L - Z : 上→下)。腹部薄い押捺溝文 (S - S)。内面は横・斜位のナガ、凹面に凹れ、剥落。	右肩、長石、チヤー 普通 ト、丸筒石、骨針		淡黄色	
3	弥生土器 壺	-	口沿部底付体によるキザミ。口縁部軸側不明 1種縫文 (R L + 2 L) →脚部 2.5 杯底の横筋直縫文など。内面は横・斜位のナガ、凹面に凹れ、剥落。	右肩、角閃石、金 良好 青母、赤色粒		外：灰青褐色 内：褐色	王台式
4	弥生土器 壺	139	口沿部底付体 (脚部 L + 2) によるキザミ。口縁部軸側不明 1種縫文 (R L + 2 L) →脚部 2.5 杯底の横筋直縫文など。内面は横・斜位のナガ、凹面に凹れ、剥落。	多量の石英、黄石、良好 角閃石		外：灰青褐色 内：褐色	
5	弥生土器 壺	90	口沿部底付体 (脚部 L + 2) によるキザミ。口縁部軸側不明の付加系縫文 (R - S, R - Z : 下→上) →頭部・底付体のナガ、凸出部・腹縫文 2 条、單位の腹縫文 (無文部) が黒点、文様部が半位。→2.5 杯底斜縫文 (右肩がり→左肩がり)。等間隔止の横筋文 (上→下、右→左)。一部脚部直縫文 (左側) →脚部 L 丈又→脚部直縫文 (右側) の部分がリ、頭部 L 丈又→脚部直縫文 (右側) の部分がリ、頭部 L 丈又→脚部直縫文 (左側) の部分がリ。内面は横筋直縫文 (左側)、頭部 L 丈又→脚部直縫文 (左側) の部分がリ。外縁まわりにスス、崩出 2.5 杯底に対応する黒斑。手摩跡跡黒色化。	右肩、角閃石、多 量の白色粒	普通	外：灰青褐色 内：褐色	王台式
6	弥生土器 壺	-	脚部直縫文 (丁寧な縫、斜位のナガ)。脚・脚部附加条縫文 (R - S : 下→上) →5 本筋 3 条、單位の腹縫文 (無文部) が黒点、文様部が半位。→2.5 杯底斜縫文 (右肩がり→左肩がり)。等間隔止の横筋文 (上→下、右→左)。一部脚部直縫文 (左側) →脚部 L 丈又→脚部直縫文 (右側) の部分がリ、頭部 L 丈又→脚部直縫文 (左側) の部分がリ。内面は横筋直縫文 (左側)、頭部 L 丈又→脚部直縫文 (左側) の部分がリ。外縁まわりに集中してスス付着、内面に横縫部中→下位にヨゴシ付着。	右肩、等封	普通	外：灰青褐色 内：褐色	
7	弥生土器 壺	-	脚部直縫文 (丁寧な縫、斜位のナガ)。脚・脚部附加条縫文 (L - L + 1) 2 条、内面は横筋直縫、斜位のナガ。外縁部に集中してスス付着、内面にヨゴシ付着。	右肩、等封	普通	外：灰青褐色 内：褐色	王台式
8	弥生土器 壺	-	頭部直縫工具による刺繡跡、頭部附加条縫文 (R - S : 下→上) →5 本筋 3 条、單位の腹縫文 (無文部) が黒点、文様部が半位。→2.5 杯底斜縫文。内面は横筋・斜位のナガ。外縁スス付着。	右肩、多量の白色粒	普通	外：灰青褐色 内：褐色	王台式
9	弥生土器 壺	-	頭部直縫工具による刺繡跡、頭部附加条縫文 (R - S : 下→上) →5 本筋 3 条、單位の腹縫文 (無文部) が黒点、文様部が半位。→2.5 杯底斜縫文。内面は横筋・斜位のナガ。外縁スス付着。	右肩、多量の白色粒	普通	外：灰青褐色	
10	弥生土器 壺	-	頭部軸側不明の加縫系縫文 (R - S, L - Z)。口縁部下端斜縫文 (無筋部) が斜位、斜面山形の突起。内面は横・斜位のナガ、凹面に凹れ、剥落。外縁スス付着。	右肩、多量の右肩、良好 角閃石	不良	外：褐色 内：明黄褐色	二井型式
11	弥生土器 壺	-	頭部直縫文 (付位のナガ)。頭部附加条縫文 (L R + 2 R)。内面は頭部直縫文のナガ、頭部腹縫文のナガ。外縁スス付着。	右肩、白色粒	普通	外：灰青褐色	P3
12	弥生土器 壺	-	頭部軸側不明の頭部直縫文 (R - S, L - Z) →口縁部下端斜縫文 (無筋部) が斜位、斜面山形の突起。内面は横・斜位のナガ、凹面に凹れ、剥落。外縁スス付着。	右肩、長石 良好		外：褐色	二井型式
13	弥生土器 壺	-	頭部直縫文 (L L + 1 : 下→上) で非累伏状成。内面は横位のナガ、凹面に凹れ、剥落。	右肩、角閃石、多 量の白色粒		外：灰青褐色	
14	弥生土器 壺	-	頭部直縫工具による刺繡跡、頭部附加条縫文 (R - S : 下→上) →5 本筋 3 条、單位の腹縫文 (無文部) が黒点、文様部が半位。→2.5 杯底斜縫文。内面は横位のナガ。外縁スス、剥落。	右肩、多量の右肩、白色粒	良好	外：灰青褐色 内：褐色	二井型式
15	弥生土器 壺	87	頭部直縫工具による刺繡跡、頭部附加条縫文 (R + L, L + L)。底部は白質、軽土付。底部は白質、軽土付。内面は横位のナガ。外縁スス、剥落。	右肩、等封 普通		外：灰青褐色 内：褐色	
16	弥生土器 壺	-	頭部直縫文 (R L, L R : 上→下) を模倣文。底部は白質。内面は斜位のナガ、剥落。	右肩、角閃石、赤 色粒、多量の白色粒	良好	外：灰青褐色 内：褐色	
17	弥生土器 壺	74	頭部軸側不明の頭部直縫文 (R - S, L - Z : 上→下) →底部砂質。内面は横・斜位のナガ。外縁全周スス、剥落による横筋状の変色化。	右肩、長石、金 青母、多量の白色粒	普通	外：黑褐色 内：灰青褐色	王台式
18	弥生土器 壺	74	頭部軸側不明の頭部直縫文 (R - S, R - Z)。底付木質。内面は横・斜位のナガ。外縁スス付着、頭部下端による赤色化。	右肩、多量の骨針	普通	外：灰青褐色 内：灰青褐色	王台式
19	弥生土器 壺	68	頭部軸側不明の頭部直縫文 (R - S, L - Z : 下→上) →底部砂質。内面は横・斜位のナガ。外縁全周スス、剥落によるヨゴシ付着。	右肩 良好		外：灰青褐色 内：褐色	

図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
20	弥生土器壺	—	閉唇袖構不明の附加系縄文(左・S・L)。底部布片状。内・石英、角閃石 は斜位のナメ。	良好	にぶい黄褐色		
21	石器 磨石類	表面(底→墨)裏面(墨→灰)、自然端の表・底面に墨純灰や墨打痕。上・下腹部に黒打痕。石材:石英安山岩。長さ128cm・ 幅83cm・厚さ7.0cm・重さ1042.1g。					
22	石器 内石	欠損品。大型壺の表・裏面や下部に複数の斜位。墨純灰は運搬時に浅く運び、表・裏面の一部に被り板とみられる円穴。輪郭に浅い横状の擦痕。石材:砂岩。残存長11.0cm・厚さ8.8cm・重さ2386.9g。					

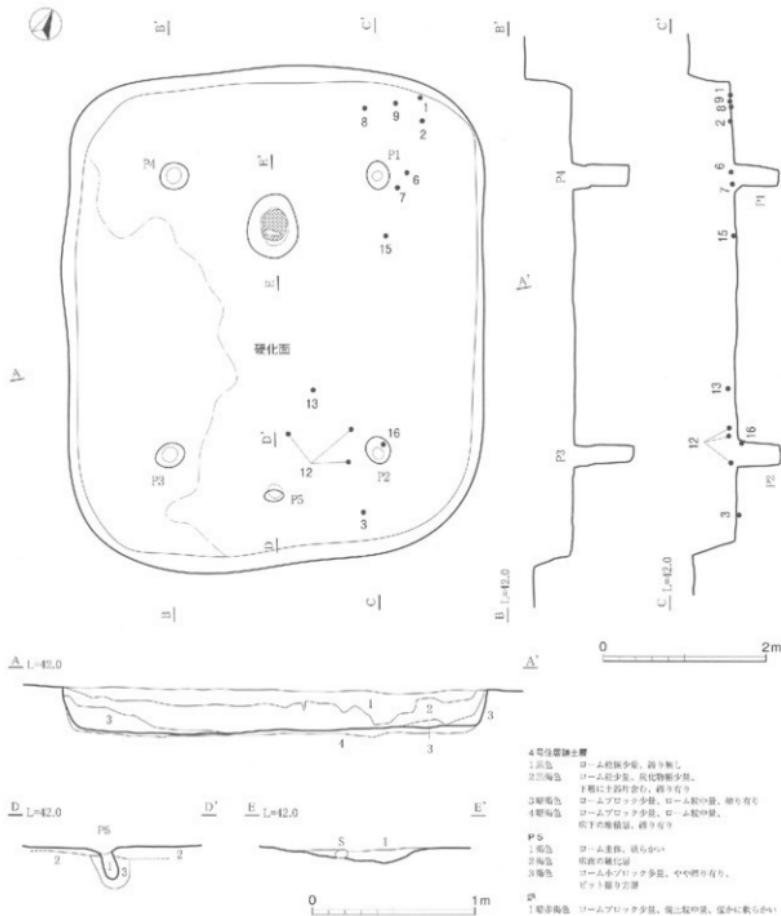
4号住居跡(第261~264回)

位置 B3区中央部、I 12グリッドにある。規模と平面形 5.10×6.00mの縱長長方形。主軸方向 N=27°-W 壁 壁高42cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 全体に硬化しているが、東壁のやや北寄りの範囲と北壁の西寄りの範囲がやや軟質である。ピット 5箇所。P1~4は主柱穴。P5は南壁寄りにあり、外傾しており出入り口11ピットと考えられる。炉 長径75cm、短径62cmの梢円形で深さ10cm。炉石を持つ。覆土 床面を覆う黒褐色土の2層は下層に土器を含んでいる。遺物 壺を主体とする土器類は住居跡北東隅とP2付近の床から出土している。北東隅の壺は完形品が多い。16の管玉はP2覆土上層から出土している。出土遺物は非常に多く、ほぼ完形個体・人破片の割合が高い。十王台式後半期を主体とし、二軒屋式(9・11)も少量出土している。15は土製の紡錘車、16は片側に段を有する緑色凝灰岩製の管玉である。

所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

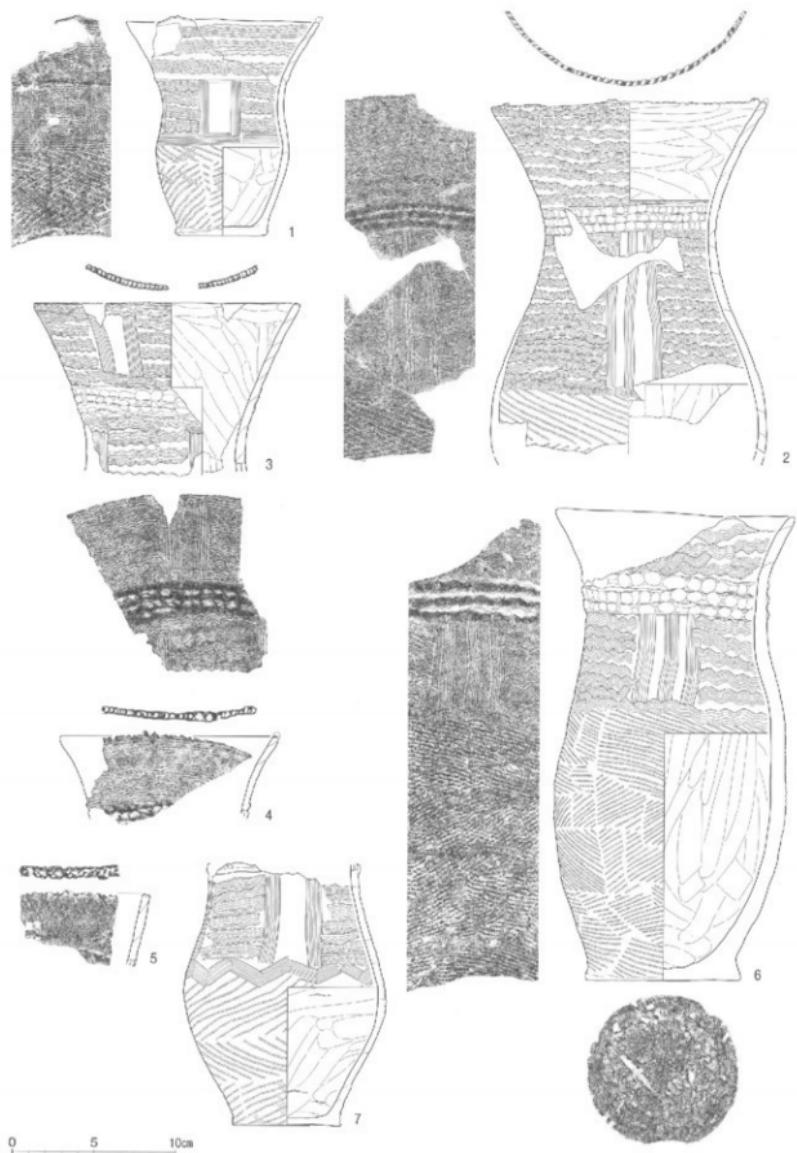
表122 4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	(120) 135 (56)	口萼部小突起。口額界を段。頸部袖構不明の附加系縄文(R-L+Z、LR+Z+1、上→下)。口縫部5本筋の底模定紋式(時計回り)3条、頸界部縦模文(直角縦線文)→頸部2条。単位の袖構底模文4單位→斜位底模文(下→上)3つ→4条。底部模文、内面は縦・斜位のナメ。外側スムース。内面にはヨゴレ付。	石英、長石、金雲母 母	良好	外:褐色 内:にぶい黄褐色	十王台式
2	弥生土器壺	(167) —	口唇部ハラギザミ、小突起4单位。頸部造り出しの押捺痕3条。削壓袖構不明の附加系縄文(左・S・L-Z、左→下→上)→頸部5本筋・3条の单位の直角縦模文3單位。口縫部模文底模文(左→上、反対斜位)、頸部底模文(直角縦模文)→頸部模文底模文(左→下、左→右)。内面は斜位のナメ。外側スムース。内面はヨゴレ付。内面は全体に濃いスムース。内面は金目で薄いヨゴレ。底部は位は濃いヨゴレ。	石英	良好	にぶい褐色	十王台式
3	弥生土器壺	(156) — —	口唇部丸棒状工具によるキザミ。腹部造り出し押捺痕3条。底模無文(縦・斜位のナメ)。内面は複位のナメ。	石英、長石、角閃石 母	良好 多量の白色粘土	にぶい黄褐色	1層出土 十王台式
4	弥生土器壺	(133) —	口唇部ハラギザミ、小突起。口縫部4本筋の底模定紋式(下→上)。内面は斜位のナメ。外側全周にスス付着。	石英、長石、角閃石 母	良好	外:褐色 内:にぶい褐色	1層出土
5	弥生土器壺	—	口唇部袖構不明の附加系縄文(左・S)を回転出文。口縫部無文(縦・斜位のナメ)。内面は複位のナメ。	石英、長石、金雲母 母	良好	浅褐色	十王台式
6	弥生土器壺	(146) 28.5 9.5	頸部押捺痕3条、頸部袖構不明の附加系縄文なし直角縦模文(R-S-L-Z)を模・斜位旋文(下→上、反対斜位)4回。口縫部6本筋の底模定紋式(下→上)、頸部3条。底模文(直角縦模文)→頸部模文(直角縦模文)。内面はハラギザミ、斜位のナメ。底部模文(直角縦模文)→底部模文(直角縦模文)。内面はヨゴレ付。内面はヨゴレ付。外蓋の1/3を底部に覆うリテラ。底部に赤鉄。	石英、長石、チャート、青玉	良好	にぶい黄褐色	十王台式

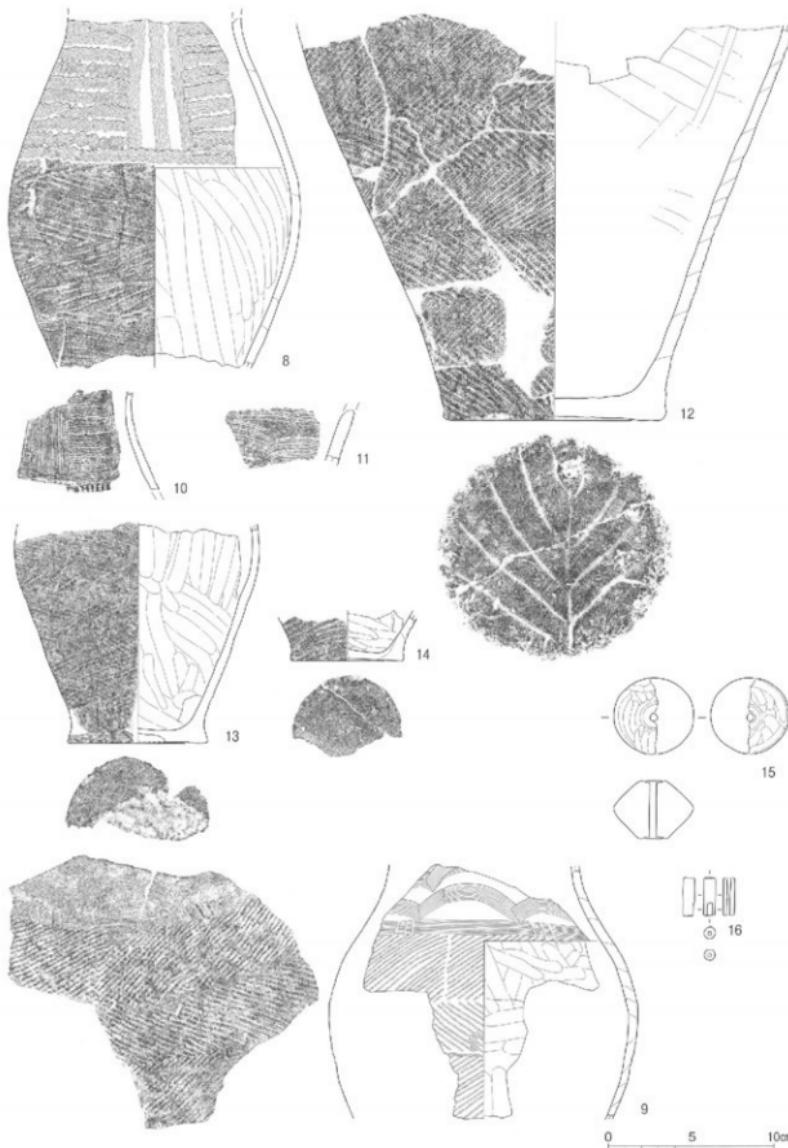


第261図 4号住居跡

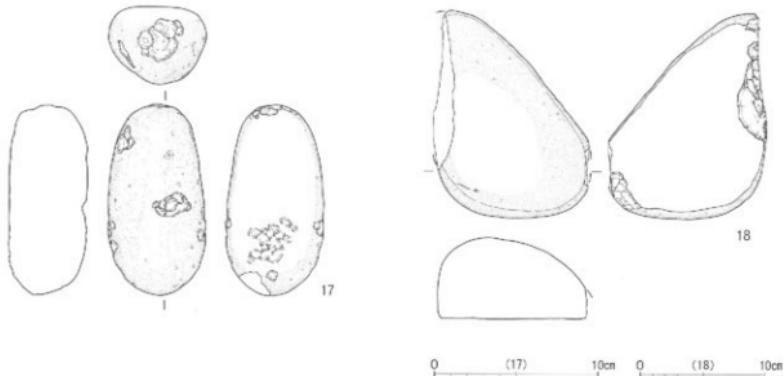
団版番号	種別 器高径	口径 器高径	特　　性	土　　士	達成	色調	備考
7	弥生土器 盤	- 6.6	厚形系窓のある仰倚障壁、剖面附加条2種埋文(R+R')、 輪縁不規の附加系窓(1. Z)を下へ突出・輪縁 輪縁本体の山形文(輪縁回り)→底部2条・一筋の複数 室縁文→輪縫波状(上→下)。底延長板、内側は底部 斜傾のナメ→底部底板のナメ、あたたけ状の剥離。外正面 全体にスス、底部付近はまだらにスス、内面にミゴレ付着。	石英	良好	外：にじい黄褐色 内：褐色	十王台式



第262図 4号住居跡出土遺物①



第263図 4号住居跡出土遺物②

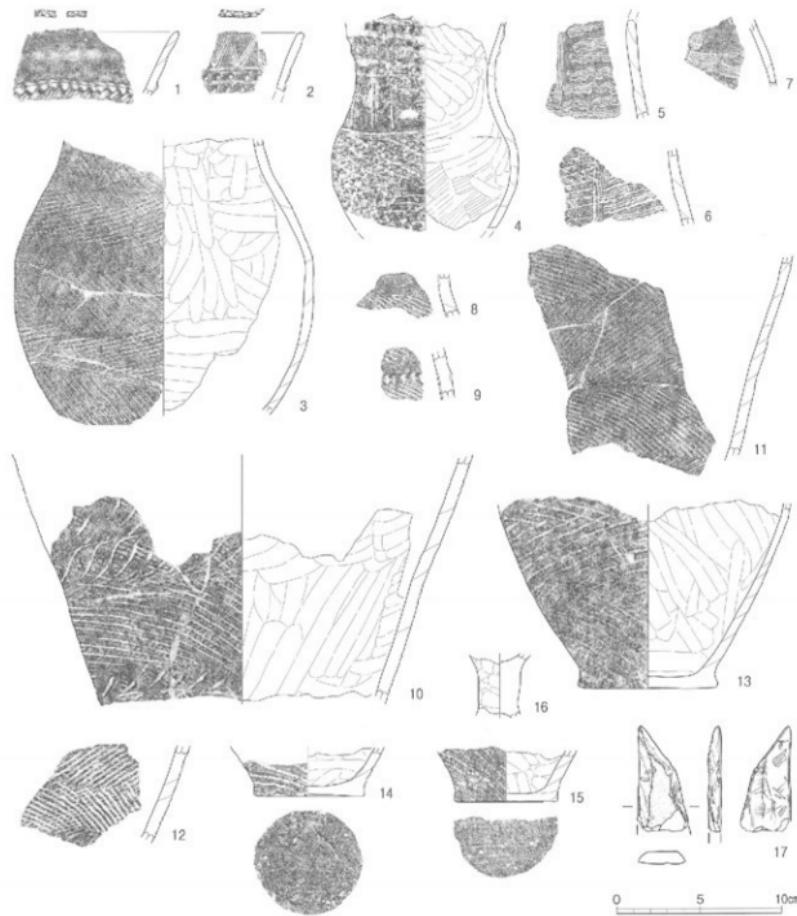


第264図 4号住居跡出土遺物③

回数 番号	種別 器種	口径 底面 直径	特徴	胎土	施紋	色調	備考
8	強生土器 壺	-	腹部横縫の折加条縫文（R・S、L・Z：下→上）→強第7本壺・3条一辺位の範囲波状文・斜割系基盤区 両波状文・腹部波状文（上→下）。内面は斜位のナザ (下→上)。外側底部上半に漆いヌス、底部下半は薄いヌス、 内面は斜部下部にヨゴレ付着。	石英	良好	外：に赤い黄褐色 内：褐色	十王台式
9	強生土器 壺	-	斜部附加1種縫文（R L・2 L）、輪縫不規則の複合縫 文（R・S）を斜位中位→上、下へ施文・斜縫表9本前 の波状加条縫文（寺町近弓）→腹部下部2波状文（反 時計回り）。無文部は複位のナザ。内面は斜部斜位のナザ、 斜部上位→中位縱・横位のナザ・腹部下位縫表のナザ、 全体的に丁寧に仕上げる。各部分間に漆いヌス、内面斜 部下部に漆いヨゴレ、以上は薄いヨゴレ付着。	石英、長石、多量の白色粘	良好	外：灰褐色 内：灰褐色	二野原式
10	強生土器 壺	-	頭部下部へラギヨリ縫帶、頭部界5本前の中位区段波状 文・斜縫表9本前・2波状波状文。内面は斜位のナザ。 外側全体に漆いヌス付着。	石英、多量の白色粘	良好	外：褐色 内：明赤褐色	十王台式
11	強生土器 壺	-	頭部7本前の中位の弱い波状文（上→下、反時計回り）。内面 は斜位のナザ。外側全体にヌス付着。鏡口緑（再加工）。	多量の石灰・長石	良好	外：褐灰色 内：明赤褐色	1号出土 二野原式
12	強生土器 壺	131	頭部附加1種縫文（R L・2 L・L R + 2 R：下→上）。 底部本葉前。内面は新條のナザ、表面荒れ。外側まばら にヌス付着、斜部中位に波状の黒斑。内面に漆状のヨ ゴレ付着。	多量の石英・長石	普通	外：淡黄色 内：に赤い褐色	1号出土
13	強生土器 壺	- (85)	頭部附加2種縫文（L + L）、輪縫不明の複合縫文（R - S）・深腹表3本前以上の範囲波状波状文。底部目模。 外側底部上半にヌス、内面ヨゴレ付着。	石英	普通	に赤い黄褐色	1号出土 十王台式
14	強生土器 壺	- (67)	輪縫不明の複合縫文（R - S）。底部布目模。内 面は横・斜位のナザ、外側ヌス付着。	石英	普通	に赤い黄褐色	1号出土 十王台式
15	土製品 刷毛	径(47)、高355、孔径(0.45)、重(32.09)g 表裏面ナ マ調整。片側穿孔。	石英、多量の白色 粘	普通	浅褐色		
16	石製品 磨玉	長2.3、径0.25、重182g。全面研磨し、片側 は波状で加工。両側穿孔。暗褐色斑岩。		普通	外：浅黄色 内：暗灰褐色	P2上層出土	
17	石器 碧玉類	欠損品。壁一層。自然石の表面に漆厚な焼附灰。表・裏面や周縁部に墨打痕。上端部に縫・磨痕。石材：石 英安山岩。長さ16.6cm、幅5.95cm、厚さ4.78cm、重さ4900g。					
18	石器 石斧	欠損品。柄の表・裏面に漆厚灰。裏面の棒部に漆厚後焼附灰。石材：安山岩。長さ16.95cm・残存厚12.6cm・ 厚さ6.7cm、重さ19852g。					

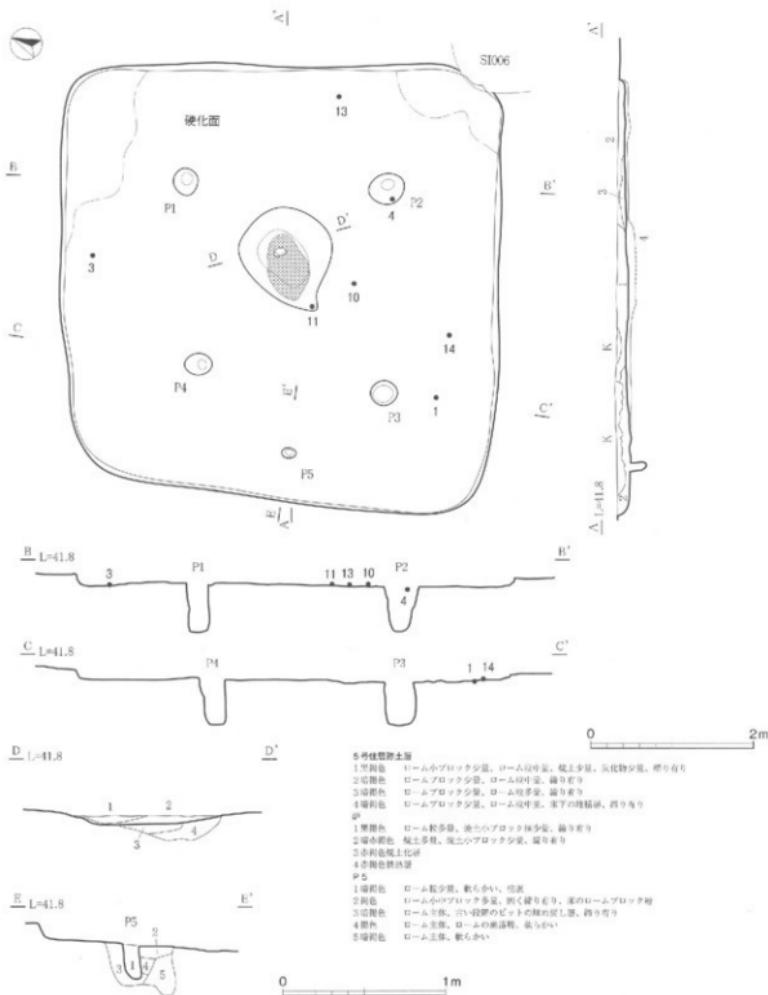
5号住居跡（第265・266図）

位置 B 3区中央部、I 12グリッドにある。規模と平面形 $5.30 \times 4.98\text{ m}$ のほぼ方形。主軸方向 N - 19° - W 壁 壁高10cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 床面全体に硬化している。ピット 5箇所。P 1～4は主柱穴。P 5は西壁寄りにあり、出入り口ピットと考えられる。炉 長径112cm、短径107cmの楕円形で深さ5cm。炉石を持つ。覆土 上層は黒褐色土、下層は暗褐色土の自然堆積層。遺物 ほとんどの遺物は床面か最下層中から出土している。出土遺物は多く、中～大破片の割合が高い。十王台式前



第265図 5号住居跡出土遺物

半期を主体とする。8・9・12は二軒屋式系と考えられる。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



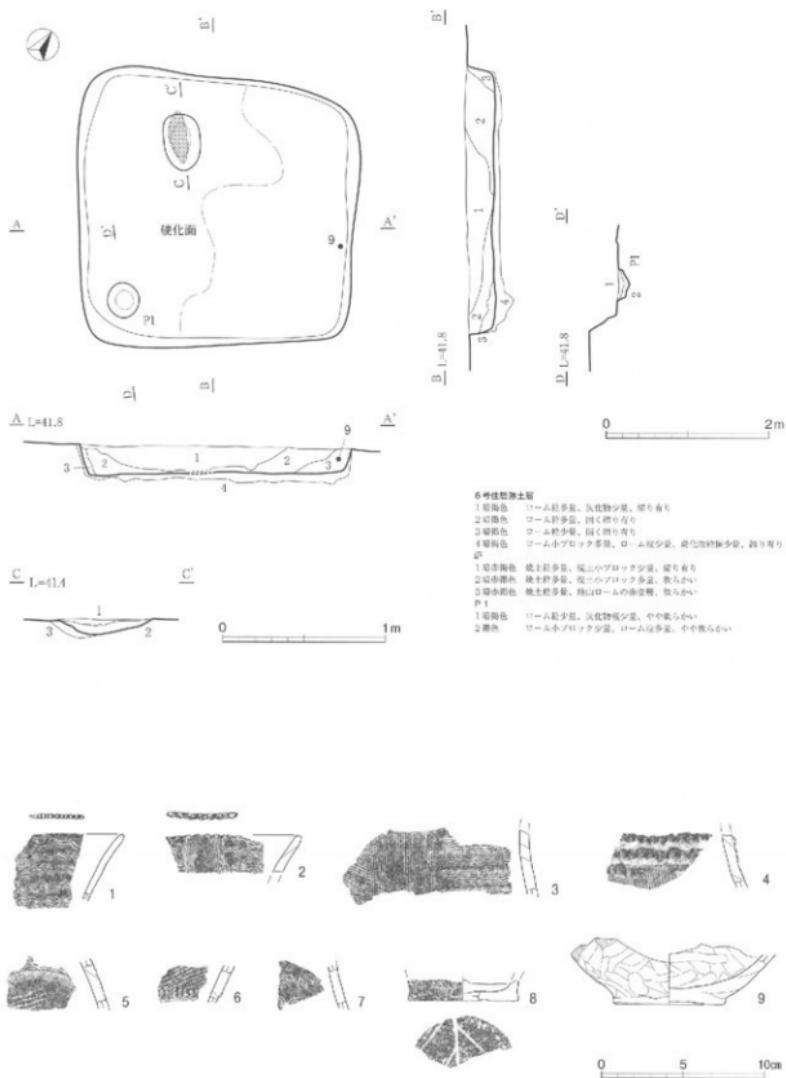
第266図 5号住居跡

表123 5号住居跡出土遺物観察表

団版 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	口唇部擴大筒体によるケギミ。口縁部波文(模様のナダ)、腹部下部に斜位のナダがある神龜形窓→2本側以上横位置状況。内側は斜位のナダ。	多量の石英、白色 粘土	良好	に赤い褐色	十王台式
2	弥生土器 壺	-	口唇部擴大筒体によるケギミ。腹部丸柱状工具による斜突とスピザエ(爪痕あり)による模様等→口縁部3本側の山形文(時計留)。内側は斜位のナダ。外腹全体にスズ付。	石英、骨針 粘土	普通	外:灰黄褐色 内:に赤い褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	-	腹部輪廓不規の附加筒形文(共・乙、L・S)。内面は模様のナダ・斜位のナダ。外腹波文。外腹稍粗、脇部に1本側の山形文。軸部下部は被焼による赤化色。内面下部はヨコリげ付着。外蓋3ヶ所、内蓋1ヶ所に泥斑。	石英、角閃石、金 石英、骨針、多量 の白色粘土	普通	外:灰黄褐色 内:に赤い褐色	
4	弥生土器 壺	-	腹部輪廓不規の附加筒形文(共・S、L・Z)。内面は4本側の底部区画波文→底部3本側+単位の斜位波文→横位置波文。内側は腹部底面のある斜位のナダ→腹部各部のナダ。外腹スズ付や、被焼による赤化色。内口頭部にまばらなヨコリげ付。	多量の石英、白色 粘土	普通	外:明赤褐色 内:に赤い褐色	十王台式
5	弥生土器 壺	-	腹部輪廓不規の附加筒形文(共・乙)→腹部底面直線文→傾位波文。内面は斜位のナダ。外腹スズ、内蓋ヨコリげ付。	石英、骨針 粘土	普通	灰黄褐色	十王台式
6	弥生土器 壺	-	腹部3本側の横位波文→ヘラ括き崩れ文(上部がより→上上がり)→横位波文。内面は斜位のナダ。外腹スズ付。	石英、角閃石 粘土	普通	に赤い褐色	十王台式
7	弥生土器 壺	-	腹部輪廓不規の附加筒形文(共・乙)→腹部底面直線文→傾位波文区画直線文→上部波文波文、傾位直線文→傾位波文。内面は斜位のナダ。外腹スズ付。	石英、金雲母 粘土	普通	外:に赤い褐色 内:灰黄褐色	十王台式
8	弥生土器 壺	-	腹部斜加厚+傾曲文(R L + 2 L)→腹部無文部(傾位のナダ)。内面に泥斑。	多量の石英、長石 粘土	普通	に赤い褐色	二軒屋式
9	弥生土器 壺	-	腹部斜加厚+傾曲文(R L + 2 L)→腹部同様の筒体によるケギミ。内面は泥斑。	多量の石英、長石 粘土	普通	に赤い褐色	二軒屋式
10	弥生土器 壺	-	腹部斜加厚+傾曲文(共・R、L + 2 L・下→乙)。内面は石英、角閃石 粘土	普通	灰黄褐色	十王台式	
11	弥生土器 壺	-	腹部斜加厚1機脚文(R L + 2 R)、軸部不明の附加筒形文(L・Z)。底子→下→乙。内面は斜位のナダ・傾位のナダ。	石英、角閃石、骨 石英、多量の白色粘 土	普通	外:浅黄色 内:に赤い褐色	
12	弥生土器 壺	-	腹部斜加厚+傾曲文(R L + 2 L、L R + 2 R:下→乙)。内面は泥斑、斜位のナダ。	多量の石英、長石 粘土	良好	外:に赤い褐色 内:に赤い褐色	二軒屋式
13	弥生土器 壺	84	軸部輪廓不規の附加筒形文(R・S、L・Z:下→乙)。底子を日食(河津傳ナ ド)消し。内面は斜・斜位のナダ。外腹スズ、内蓋ヨコリ げ付。	石英、金雲母、骨 石英、多量の白色粘 土	普通	外:に赤い褐色 内:灰黄褐色	
14	弥生土器 壺	67	腹部斜加厚2種類文(L + Lカ).底子を日食(河津傳ナ ド)消し。内面は斜・斜位のナダ。外腹スズ、内蓋ヨコリ げ付。	石英、角閃石、骨 石英、赤色粘土	普通	外:灰黃色 内:明赤褐色	十王台式
15	弥生土器 壺	-	軸部輪廓不規の附加筒形文(L・Z)。底子を日食。内 面は斜位のナダ。外腹スズ、内面ヨコリげ付。外腹周部 周縁→軸部スズ付。	石英、角閃石、骨 石英、骨針	普通	外: 内:	十王台式
16	弥生土器 壺	-	脚部中実。外腹は傾・斜位のナダ。内面はナダ。	石英	良好	外:に赤い褐色 内:に赤い褐色	
17	石器 磨製石器	-	次回品。石器をもつ状状片を去すと刃部や研削による溝状加工。研削耗耗には擦痕や剥離が観察。表面下部に漏斗状の穴。石材:社社岩。残存長6.6cm・底面幅3.05cm・残存厚0.8cm・重さ18.55g。	石器			

6号住居跡（第267図）

位置 B3区中央部、I 12グリッドにある。規模と平面形 3.86×3.42 m のほぼ方形で、5号住居の南東隅を壊している。主軸方向 N-27°-W 壁 壁高38cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 西側半分が硬化している。ピット 1箇所。P 1は南西隅にあり、一般的に「貯藏穴」と呼称されるピットと考えられる。炉 長径68cm、短径45cmの楕円形で深さ3cm。覆土 暗褐色土主体の自然堆積層。遺物 覆土中から弥生土器が少量出土している。小破片が中心である。十王台式後半期を主体とする。6は二軒屋式と考えられる。7は波状文がコンバス文風に描かれる。9は外面にハケメのある土師器壺である。所見 覆土中の遺物は弥生時代後期のものだが、遺構の形態からは古墳時代前期の小形住居跡の可能性も考えられる。



第267図 6号住居跡・出土遺物

表124 6号住居跡出土遺物観察表

団版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 瓶	-	口唇部ハラキザミ。口縁部6本筋の横位波状文(下→上)。内壁は山筋部堅位のナメ→外輪部付近横位のナメ。外底スズ付着。	多量の石英・白色粒	普通	灰褐色	十王式
2	弥生土器 罐	-	口唇部波状文キザミ(弧形)。口縁部5本筋・2条の一旦。石英、長石、金雲母。外底位の堅位波状文(下→上)。内壁は横位のナメ。外底スズ付着。	石英、長石、金雲母、多量の白色粒	普通	黄褐色	十王式
3	弥生土器 罐	-	頭部6本筋・3条+半位の複位直線文→済位波状文(下→上)。内壁は堅位のナメ→外輪部スズ付着。	石英、骨針、多量、良好の白色粒	普通	外:に赤い黄褐色 内:褐色	十王式
4	弥生土器 罐	-	頭部2条+横位波状文(木筋の複位直線文)。内壁は堅位のナメ→外底スズ付着。	石英、金雲母、多量の白色粒	普通	外:暗灰褐色 内:に赤い黄褐色	十王式
5	弥生土器 罐	(6.8)	頭部横溝不明の附加各綱文(下→上)。頭部4本筋の下開き波状文(海軒式)。内壁は堅位のナメ。外底スズ付着。	石英、金雲母、多量の白色粒	良好	外:黑褐色 内:に赤い黄褐色	十王式
6	弥生土器 瓶	-	口唇部加条1種繩文(L.R+2R)→口縁部下端窪位。石英の塗布によるキザミ。腹部纏曲不明の横位波状文。内壁は堅位のナメ。	石英	良好	外:に赤い褐色 内:褐色	二重式
7	弥生土器 瓶	-	頭部6-7本筋・コンバックス支脚の横位波状文(降計算)。内壁は堅位のナメ→外底スズ付着。	多量の石英、角閃石	普通	褐色	
8	弥生土器 瓶	(6.8)	头部單面綱文(R.L.S.)を複位施塗。底部木素底。内壁は堅位で見え。外底滑部に墨斑。	石英	普通	浅黄色	
9	土器器蓋	-	頭部斜位のハケメ→堅位のナメ。内壁は堅位のナメ。	石英、金雲母、多量の白色粒	不良	外:瑪瑙褐色 内:に赤い黄褐色	
		6.8					

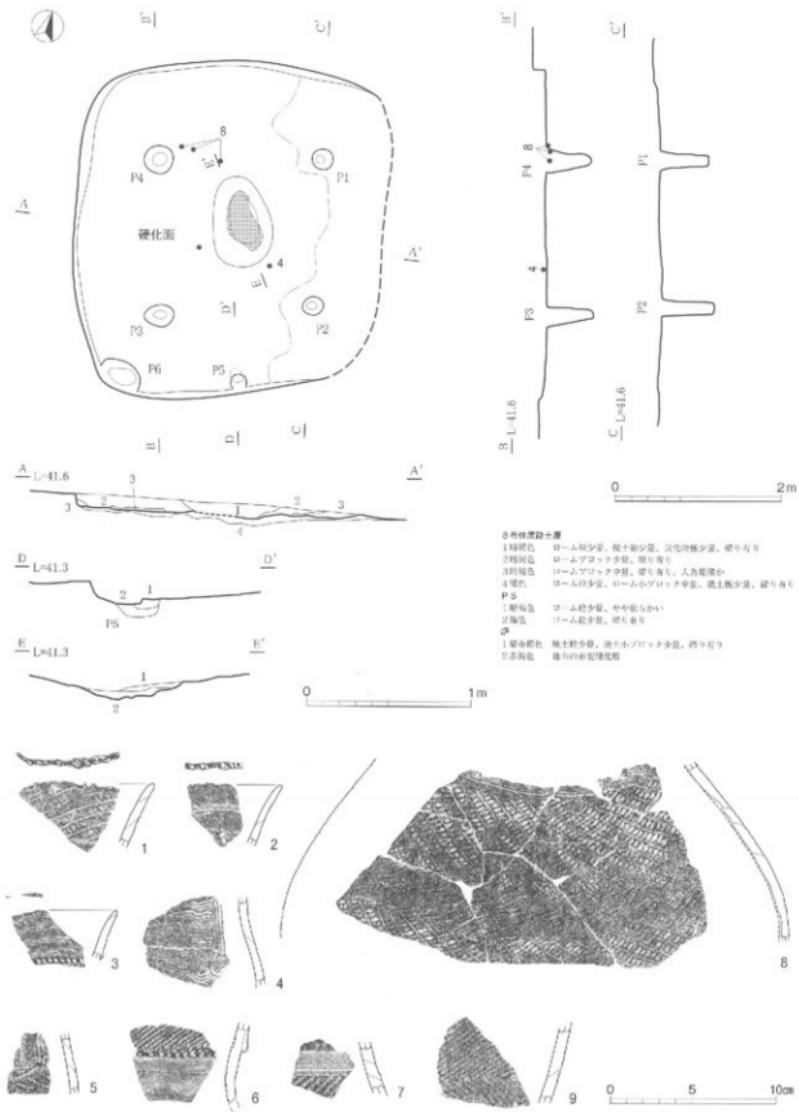
8号住居跡(第268図)

位置 B3区中央部東寄り、J 12グリッドにある。規模と平面形 (3.85) × 4.08 m。主軸方向 N-15°-W 壁 壁高17cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 東壁寄りの部分を除いて全体に硬化している。

ピット 6箇所。P 1~4は主柱穴。P 5は南壁際にあり、出入り口ピットと考えられる。P 6は南西隅にあり、比較的浅いピットである。炉 長径112cm、短径72cmの楕円形で深さ4cm。覆土 上層は暗褐色土主体の自然堆積層で、最下層はロームブロックを多く含む人為堆積層。遺物 炉の周辺部の床面から壺破片(4・8)が出土している。出土遺物は少なく、小~中破片が中心である。十王式前半期の土器が主体で6・7は二軒屋式である。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

表125 8号住居跡出土遺物観察表

団版番号	種別器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 瓶	-	口唇部丸頭狀工具によるキザミ。頭部波状凹凸によるキザミと兼合する。内壁は横位のナメ。外底スズ付着。	多量の石英、骨針	普通	外:灰褐色 内:に赤い黄褐色	十王式
2	弥生土器 瓶	-	口唇部丸頭狀工具によるキザミ。頭部波状凹凸、4本筋の横位波状文。内壁は横位のナメ。	石英、角閃石	普通	外:に赤い褐色 内:に赤い黄褐色	
3	弥生土器 瓶	-	口唇部丸頭狀工具によるキザミと兼合する。内壁は横位のナメ。	石英、角閃石	良好	外:灰褐色 内:に赤い黄褐色	十王式
4	弥生土器 瓶	-	頭部界3本筋の横位波状文によるキザミと兼合する。内壁は横位のナメ。外底スズ付着。	石英、骨針	普通	に赤い黄褐色	十王式
5	弥生土器 瓶	-	頭部丸頭狀工具の附加各綱文(L-Z)→頭部4~5本筋の横位直線文→波状文に近い上開き波状文。内壁は堅位のナメ。外底スズ付着。	石英、角閃石	普通	に赤い黄褐色	十王式
6	弥生土器 瓶	-	口唇部丸頭狀工具によるキザミ。口縁部下端窪位の複位直線文→波状文に近い下開き波状文。内壁は堅位のナメ。割削。	多量の石英、長石	普通	に赤い黄褐色	二重式
7	弥生土器 瓶	-	頭部附加各綱文(下→上)→頭部10~11本筋の横位直線文。内壁は堅位のナメ。	石英	褐色		

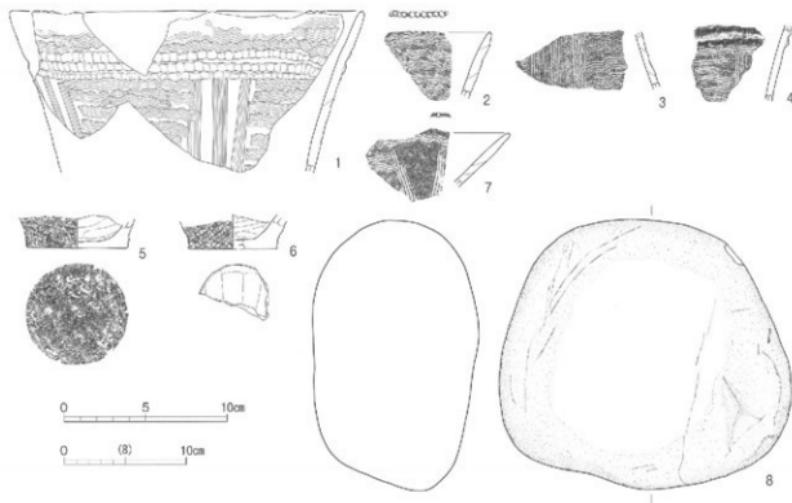


第268図 8号住居跡・出土遺物

団体 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	粘土	焼成	色調	備考
8	弥生土器 壺	- -	側部附着あり縦彫文 (R+R, L+L, Y→上) →側 面2本同様施工具による擦痕及直彫文、底位直彫 文、底位波状文。内面は斜壁のナメ、剥落。	石英、金雲母、多 量の白色粒	普通	にぶい黄褐色	十王台式
9	弥生土器 壺	- -	側部附着あり縦彫文 (LR+2R, RL+2L:下→上)。多量の石英・長石 内面複・斜位のナメ。外面部付着。	多量の石英・長石	良好	外: 黒褐色 内: にぶい褐色	二軒屋式

9号住居跡（第269・270図）

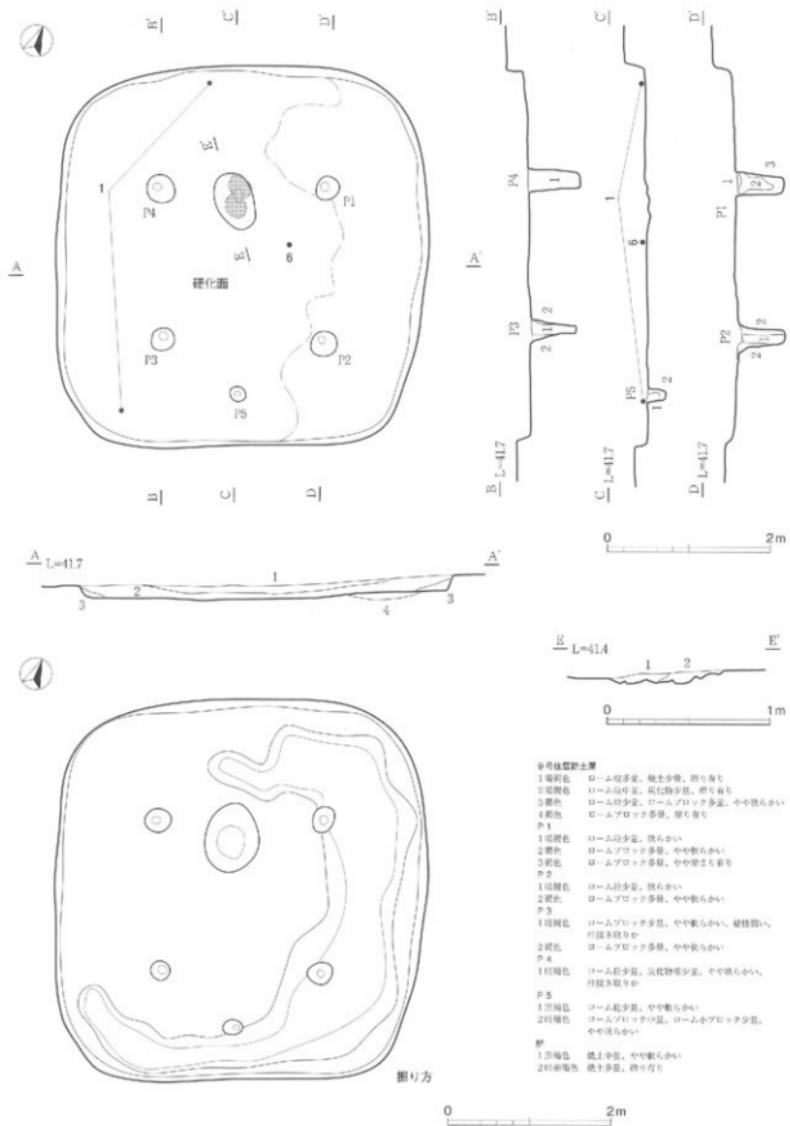
位置 B3区中央部南寄り、I 13グリッドにある。規模と平面形 $4.55 \times 4.73\text{m}$ のほぼ方形。主軸方向 N- 22° -W 壁 壁高22cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 東壁寄りの部分を除いて全体に硬化している。ピット 5箇所。P 1~4は主柱穴。P 5は南壁寄りにあり、出入り口ピットと考えられる。炉 長径72cm、短径77cmの楕円形で深さ6cm。覆土 暗褐色土主体の自然堆積層。遺物 少量の遺物が床面から出土している。小~中破片が中心である。十王台式後半期を主体とし、明確な二軒屋式土器は出土していない。また、図示できなかったが、土器器窓の脇部片が多数出土している。6は底面をヘラケズリ→ナメ調整する。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第269図 9号住居跡出土遺物

表126 9号住居跡出土遺物観察表

団体 番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	粘土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	(21.4) - -	口唇部丸棒状工具によるキザミテ。口縁部押捺跡等3条 →口縁部5本角の擦痕波状文(上→下)、腹部3条×単位 の底位直彫文→側位波状文(上→下)。内面は擦・斜位の ナメ。	石英、角閃石	普通	にぶい黄褐色	十王台式



第270図 9号住居跡

第Ⅲ章 B3区の遺構と遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
2	弥生土器 壺	-	口部斜め横次工具によるキザミ。口縁部5本齒の横位直縫文(下→上)。内側は横位のナデ。外面スス付箇。	石英 白灰	良好	外: 黒褐色 内: に赤い褐色	P1台式
3	弥生土器 壺	-	口部5本齒・3条一帯の縫位直縫文→横位波状文。内面は斜位のナデ。	石英、余霧石	良好	外: 暗赤褐色 内: に赤い褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	-	近都押塙形→4本齒の縫位直縫文→横位波状文(下→上)。内面は斜位のナデ。	石英、骨灰	普通	外: 深褐色 内: に赤い褐色	十王台式
5	弥生土器 壺	6.2	側部附加2種横文(し・し)。底部布目耳。内面は斜位のナデ。	多量の石英・長石、骨灰	普通	に赤い黄褐色	十王台式
6	弥生土器 壺	(5.4)	側部輪郭不明の附加条横文(R・S)。底部へカケリ→ナデ痕跡。内底は焼・新焼のナデ。	石英、角閃石、多量の白色粒	普通	外: 黑褐色 内: に赤い黒褐色	
7	弥生土器 壺	-	口部丸括状2具によるキザミ。口縁部5本齒の横位直縫文→横位波状文(下→上)。内底は焼・斜位のナデ。	石英	良好	外: 純色 内: に赤い黄褐色	
8	弥生土器 壺	石器 台石	大型壺の表面中央に焼熱板。底面右上の一部は被熱による痕跡。石材: 砂岩。長さ222cm、幅237cm、厚さ136cm、重さ98000g。				

10号住居跡(第271図)

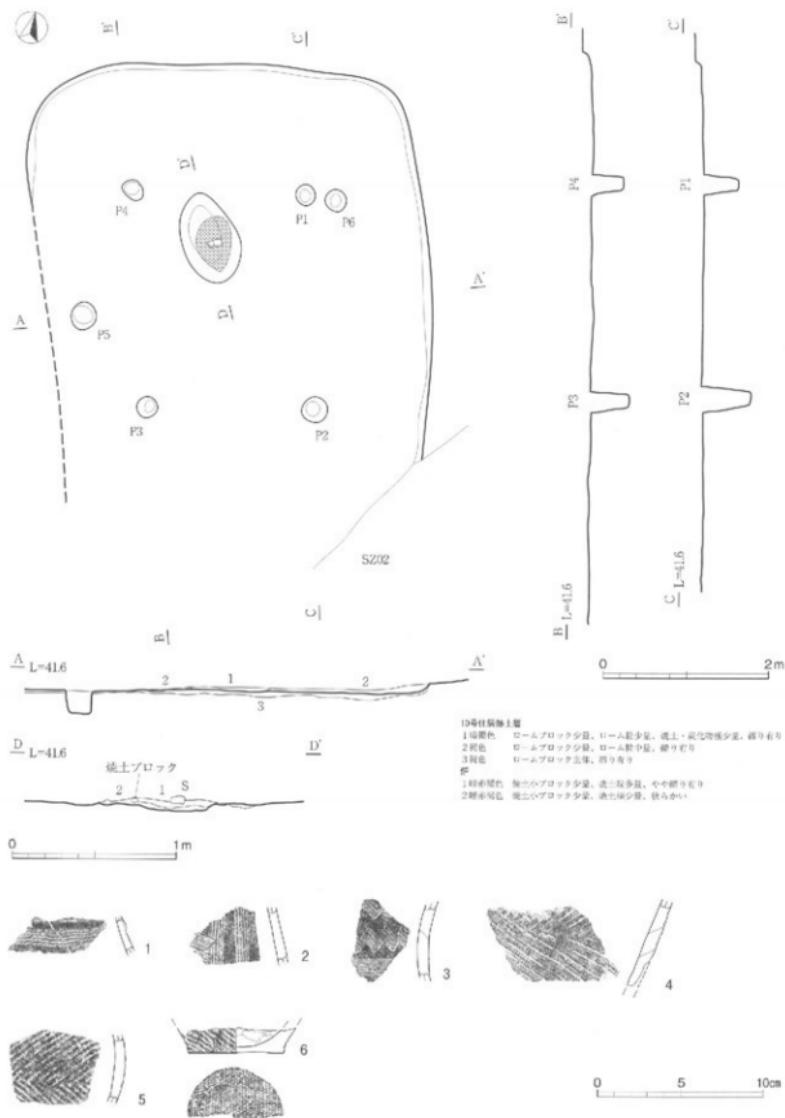
位置 B3区中央部、I 13グリッドにある。規模と平面形 $4.46 \times (5.00)$ mで、7号住居跡に南東部を壊されている。主軸方向 N-22°-W 壁 壁高8cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 全体に硬化は弱い。ピット 6箇所。P 1~4は主柱穴、P 6は古い段階の主柱穴か。炉 長径90cm、短径70cmの楕円形で深さ4cm。覆土 上層は暗褐色、下層は褐色土の自然堆積。遺物 出土遺物は少なく、小破片が中心である。十王台式を主体とする。3は二軒屋式、4は附加条1種縫文(附加1条)の側部片である。所見 出土遺物と造構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

表127 10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	縫位縫文の跡葉(断面三角形)→5本齒の横位直縫文。内面は斜位のナデ。外面スス付箇。	石英、骨灰	普通	灰黃褐色	P2出土 十王台式
2	弥生土器 壺	-	縫位5本齒の縫位直縫文→横位波状文。内面は横位のナデ。外面スス付箇。	石英、多量の白色粒	普通	外: に赤い黄褐色 内: 灰黃褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	-	縫位5本齒・3条一帯の縫位直縫文・横位波状文「火」。多量の石英・長石等(記述)。内底は焼・斜位のナデ。外面スス付箇。	石英	普通	外: に赤い黄褐色 内: 純色	二軒屋式
4	弥生土器 壺	-	側部附加条1種縫文(I, R + R, R L + 2 L = 「火」-)。多量の石英・白色粒。内面は焼・斜位のナデ。外面スス付箇。	石英、白色粒	普通	外: 灰黃褐色 内: 純色	二軒屋式
5	弥生土器 壺	-	側部附加条1種縫文(「火」+ 2 R, R L + 2 L = 「火」-)。石英、多量の白色粒。内面は焼・斜位のナデ。外面スス付箇。	石英、白色粒	普通	外: 灰黃褐色 内: 純色	二軒屋式
6	弥生土器 壺	(5.8)	側部輪郭不明の附加条横文(「し」-)。底部布目耳。内面は横位のナデ。外面スス付箇。	石英、長石、骨灰	良好	に赤い黄褐色	十王台式

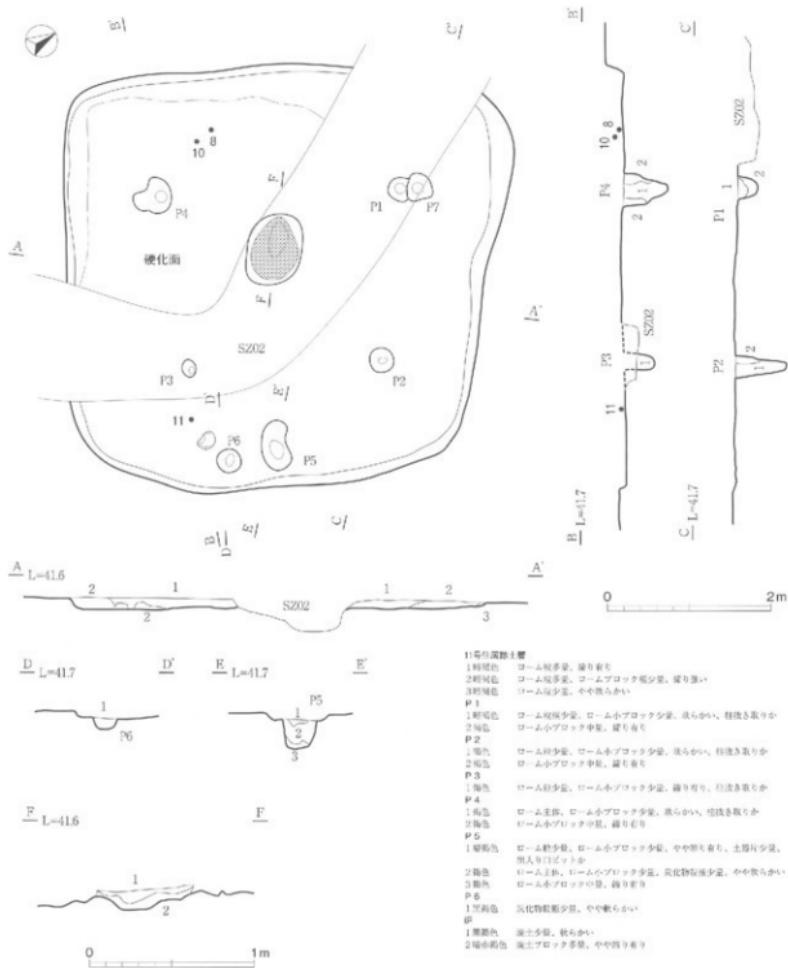
11号住居跡(第272・273図)

位置 B3区南部、I 13・J 13グリッドにある。規模と平面形 5.13×5.20 mで、2号方形周溝墓に中央部を壊されている。主軸方向 N-25°-W 壁 壁高18cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 P 4周辺が硬化している。ピット 7箇所。P 1~4は主柱穴、P 5は出入り口ピット。P 6・7は不明である。炉 2号方形周溝墓の溝に上層部を削られ、溝の内側斜面に、長径85cm、短径68cmの楕円形の範囲が被熱を受けた状態で確認されている。覆土 1~2層はローム粒を均質に含む暗褐色土である。遺物 遺

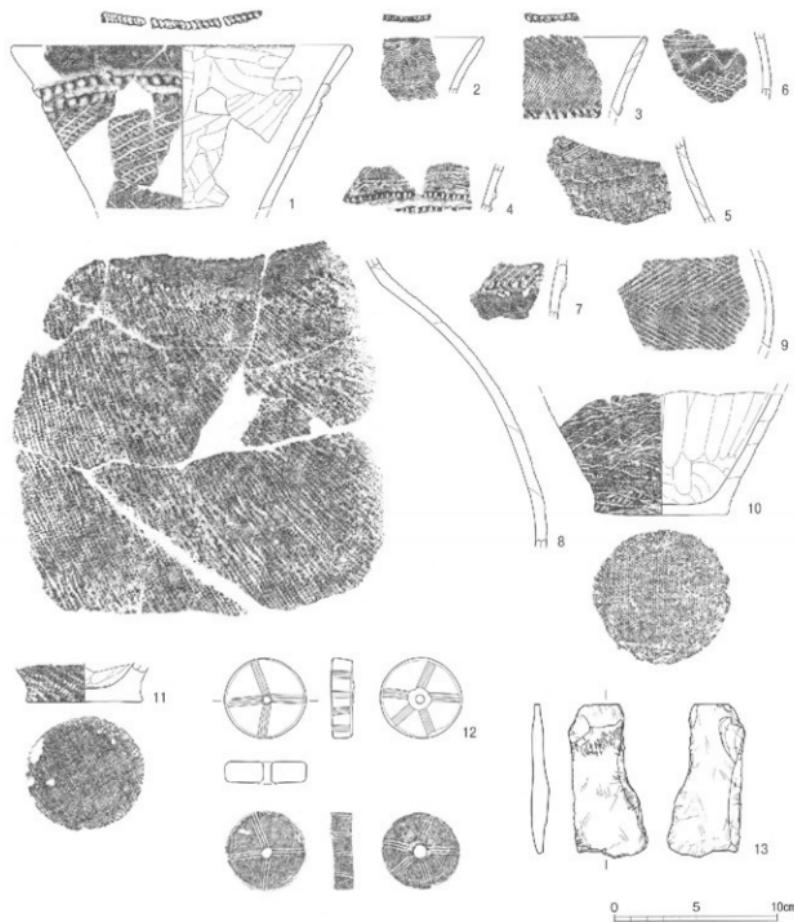


第271図 10号住居跡・出土遺物

物は床に近いレベルから破片で出土している。出土遺物はやや多く、中～大破片もある。十王台式前半期を主体とするが、二軒屋式（3・7）も目立つ。8は頭部に無文帯を有し、胴部には単節R L繩文が施文される。12は表裏面に菊備状工具による放射状の直線文、側面に直線文が施文される。13は使用痕が顕著に見られる砥石である。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第272圖 11号住居跡



第273図 11号住居跡出土遺物

表128 11号住居跡出土遺物観察表

同族 番号	種 別 器 種	口径 器高 底径	特 性	施土	焼成	色調	備考
1	陶文土器 深鉢	(20.6) — —	口唇部裏文体によるキザミ。口縁部裏文(横位のケズリ・ナデ)。裏部押捺茎帯2条→側加条2種輪文(R=R,L+L)。内面は腹・斜位のナデ→横位のナデ。	石英、長石、金雲母	普通	にぶい黄褐色	P5出土 十三台式
2	弦文土器 鉢	— —	口縁部ヘラキザミ。口縁部4本筋の横位波状文(下→上)。内面は横位のナデ。外面スス付層。	石英	良好	外: 黑褐色 内: 黄褐色	十三台六

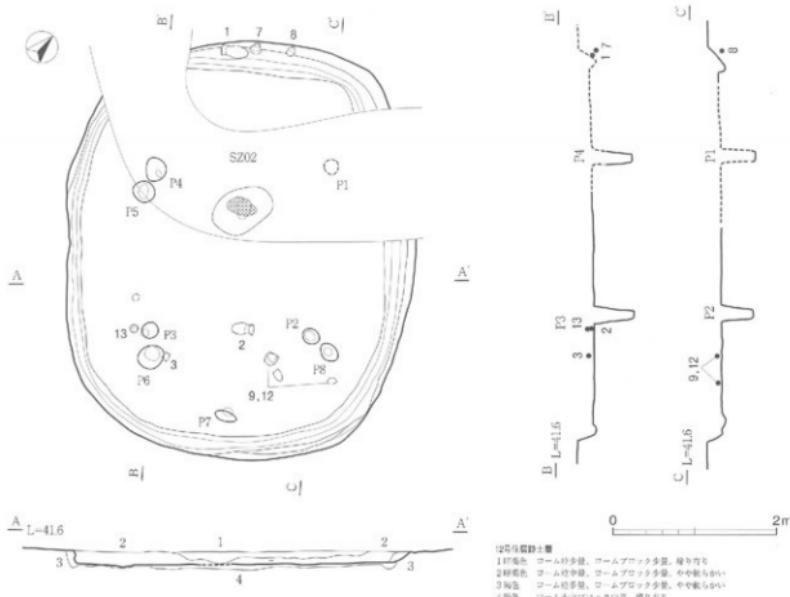
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	弥生土器 壺	-	口縁部・口縁部下部に鉛文有体によるキザミ。口縁部附近 2条1基鉛文(R L + 2 L , L R + 2 R : 下→上)。内面は 堆積のナダ。外面スヌ付着。	石英	良好	外:灰青褐色 内:に赤い黄褐色	二軒屋式々
4	弥生土器 壺	-	口縁部丸錐状工具によるキザミ・鋸分→3本歯の横位鉛文次 文。内面は横位の鉛ナダ。外面スヌ付着。	石英、金雲母、青 銅針	普通	外:灰青褐色 内:に赤い黄褐色	十王台式
5	弥生土器 壺	-	頭部4本歯の鋸位鉛文々・横位波状文。内面は堆積瓦。	石英、角閃石、多 量の白色粒	普通	に赤い黄褐色	十王台式
6	弥生土器 壺	-	頭部鉛文不明の附加鉛文(L - Z - L - S)ないし 附加鉛文2種鉛文→頭部鋸分3本歯の横位鉛文→横 位鉛文波状文→横位波状文。内面は鋸位のナダ。外面液 いスヌ、内面ヨゴ付着。	石英	普通	外:黒褐色 内:に赤い黄褐色	十王台式
7	弥生土器 壺	-	口縁部鋸分1基鋸分(L + 2 L)→口縁部下端刃根 の原体によるキザミ。頭部鋸分(L + 2 L)。内面 は鋸・斜位のナダ。外面スヌ、内面ヨゴ付着。	多量の石英・白色 粘	普通	外:黒褐色 内:灰青褐色	二軒屋式々
8	弥生土器 壺	-	頭部無文章(横位のナダ)。頭部鋸分R L 鉛文を横位施文 (非鋸位施文 → 下→上)。内面は頭部鋸位のナダ。底部鋸・ 鋸位のナダ。外面はらん焼然による赤褐色。	多量の石英・長石	普通	外:浅黄色 内:橙色	
9	弥生土器 壺	-	頭部鋸位2基鋸分(L - Z - L - Z : 上→上)。内面 は斜・斜位のナダ。外面スヌ、内面ヨゴ付着。	石英、角閃石、青 銅針	普通	外:暗青褐色 内:に赤い黄褐色	
10	弥生土器 壺	81	頭部鋸位2基鋸分(L - L -)。鉛文不明の附加鉛文(R - S)を下→上で施す。底部鋸位。外面はらんスヌ、 内面ヨゴ付着。	石英、角閃石、青 銅針、赤色粒	良好	外:浅黄色 内:に赤い黄褐色	十王台式
11	弥生土器 壺	-	頭部鋸位2基鋸分(L R + 2 L)。底部R L 鉛(粘土付 着)。内面は鋸・斜位のナダ。外面スヌ付着。	石英、角閃石	普通	外:灰青褐色 内:に赤い黄褐色	十王台式
12	土製臼 研磨臼	71	径(5.0)、高(1.4)、孔径(0.45)、重 [169] g。表面面部3分 割の取剥文。側面は鉛文11条、小字調節。片側单耳。	石英、角閃石、青 銅針	良好	淡黄色、に赤い黄 褐色	
13	石器 研磨臼	-	研磨臼の表・裏面と両側面に頭側や底側が張る。上部は研磨により平滑。斜辺の一部に研磨剤難痕。右 側: 流れ跡。長さ 9.3cm 、幅 4.75cm 、厚さ 11cm 、重さ 38.9 g。				

12号住居跡（第274～276図）

位置 B 3区南部、I 13・I 14 グリッドにある。規模と平面形 (5.50) × (5.20) m のやや縱長長方形で、2号方形周溝墓に中央部北側を壊されている。主軸方向 N - 38° - W 壁高11cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 床面全体が硬化している。住居の古い段階で周溝を持っている。ピット 7箇所。P 1～4は主柱穴、P 5・6・8は古い段階の柱穴、P 7は出入り口ピット。炉 2号方形周溝墓の溝に覆土を削られ、火床面以下が残存している。長径 112cm、短径 73cm。覆土 ロームブロックを少量含む暗褐色土が主体である。遺物 北壁際中央の床面から1の弥生土器が横倒し、7が斜位、8が立位の状態で出土している。また、P 6～P 8間でも弥生土器がまとめて出土しており、2は覆土下層から横倒しの状態で、3・9・12は覆土上層から出土している。出土遺物は非常に多く、ほぼ完形個体・大破片の割合が高い。弥生土器は十王台式後半期を主体とし、明確な二軒屋式系土器は出土していない。十王台式は久慈川流域（1）、那珂川流域（2）の特徴を有する良好な個体がそれぞれ確認できる。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

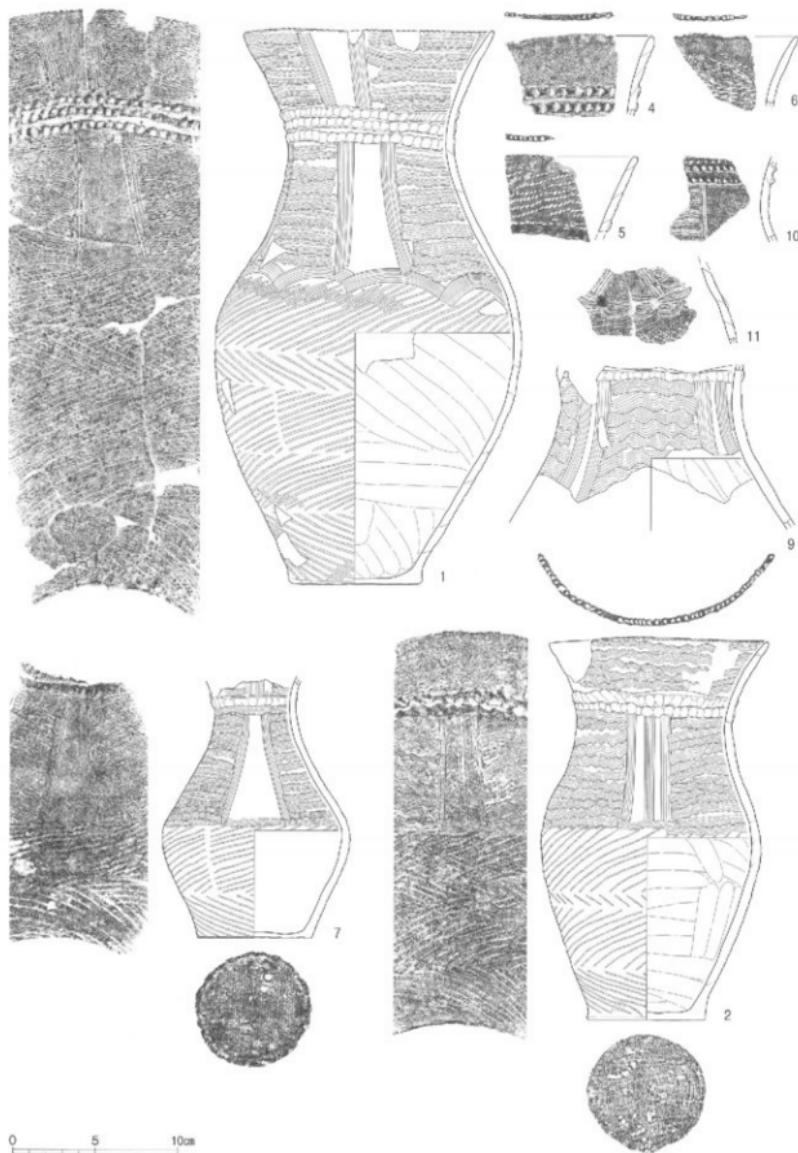
表129 12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	15.3 34.2 8.0	口部ヘタキザミ。頭部鋸位2基(R L + 2 L , L R + 2 L : 下→上)、頭部鋸位2基鉛文(R L + 2 L)→頭部鋸位下 部に赤い黄褐色	多量の石英・長石、普通 チャート、金雲母		外:灰青褐色 内:に赤い黄褐色	十王台式

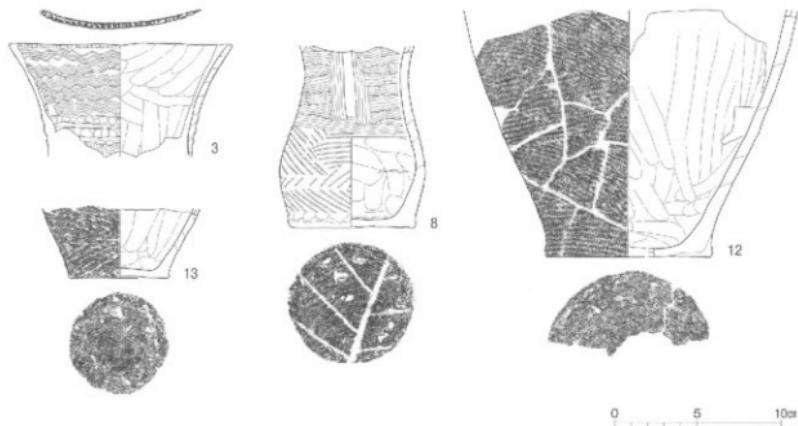


第274図 12号住居跡

団庫番号	種別 器種	口径 深さ 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
2	泥牛土器 壺	(13.3) 23.5 7.2	口部幅ヘタキザミ。腹部薄い押捺縦肋3条・口部輪廓不明の押捺状文(下→上)、腹部輪廓直線文(上→下)5条、腹部3条の横筋文・横筋文3半段・横筋輪廓区割直線文→腹部輪廓波状文(下→上)13条。底部布目筋、内面は口縁・斜盤部上位・斜盤のナギ、斜盤下位筋、斜筋ナギ、外縁口縁・斜盤部・斜筋長にスス巻、以下はスス巻化消失。内面は薄グリ状のヨゴレ付有。	石英、長石、チャート、多量の白色粒	普通	にぶい黄褐色	十王台式
3	泥牛土器 壺	(13.5) — —	口部幅ヘタキザミ。輪部薄い押捺縦肋3条・口部輪廓不明の押捺状文(下→上)、腹部輪廓直線文・横筋状文。内面は腹部輪廓のナギ→口部輪廓のナギ、外縁スス、内面ヨゴレ付有。	多量の石英・白色粒	良好	外: 黒褐色 内: 黄褐色	十王台式
4	泥牛土器 壺	— — —	口部幅ヘタキザミ。斜盤工具によるキザミ。輪部押捺工具によるキザミ。輪部押捺縦肋→口部輪廓不明の押捺状文(下→上)2条・斜盤工具によるキザミ。内面は斜盤のナギ、外縁スス、内面ヨゴレ付有。	石英、多量の角閃石、赤褐色	普通	にぶい黄褐色	十王台式
5	泥牛土器 壺	— — —	口部幅ヘタキザミ。輪部輪廓工具によるキザミ。輪部押捺工具によるキザミ。輪部押捺縦肋→口部輪廓不明の押捺状文(下→上)2条・斜盤工具によるキザミ。内面は斜盤のナギ、外縁スス、内面ヨゴレ付有。	石英、多量の白色粒、骨粉	良好	外: 黄褐色 内: にぶい黄褐色	十王台式
6	泥牛土器 壺	— — —	口部幅ヘタキザミ。輪部輪廓工具によるキザミ。輪部輪廓工具によるキザミ。輪部輪廓工具によるキザミ。内面は斜盤のナギ、外縁スス、内面ヨゴレ付有。	石英	普通	墨褐色	十王台式
7	泥牛土器 壺	— — 7.0	頭部厚い押捺縦肋1条。頭部輪廓不明の押捺縦肋(下→上)2条・半段の輪廓直線文3段位(頭部)→腹部輪廓波状文12~13条(上→下)→頭部輪廓直線文の横筋区割状文。底部布目筋(頭部・頭部輪廓のナギ消し)。内面は頭部輪廓、斜・頭部輪廓のナギ。	石英、長石、骨粉	良好	深褐色	十王台式



第275図 12号住居跡出土遺物①

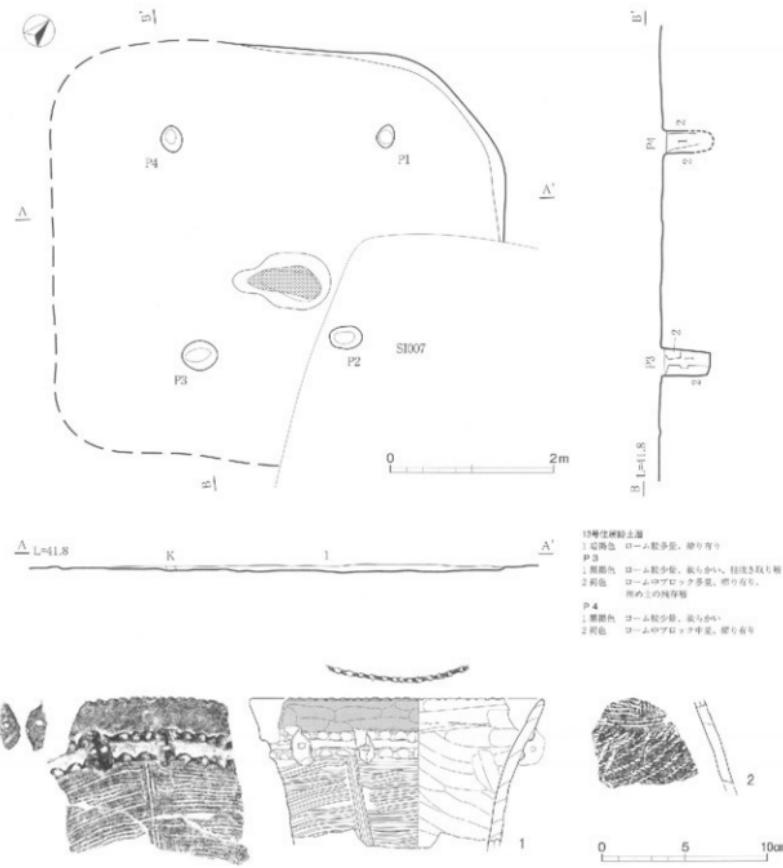


第276図 12号住居跡出土遺物②

図版番号	種別	口縁 器皿 遺物	特徴	粘土	透成	色調	備考
8	弥生土器 壺	-	頸部軽縫不明の新加彌文(R-S, L-Z:下→上, 石英、角閃石、多量好反時計回り)を輪。新加彌文→頸部界6cm位の頸部以降直線文2条→唇位の腹底直線文3条位→頸部斜位波状文(下→上)。底部水質岩。内面は頸部位下・頸部斜位波状。頸部下位横位のナデ。外側は全体にスヌ、一部スヌ進化消失。内面斜位位より上にコグ付着。	石英の白色粒	良好	外: に赤い黄褐色 内: に赤い褐色	十王台式
		7.5		石英の白色粒	良好	に赤い褐色	十王台式
9	弥生土器 壺	-	底部斜位波形(下→上)。内面は複位のナデ→斜位のナデ(下→上)。内面に墨痕。	石英、骨針、赤色	良好	に赤い褐色	十王台式
10	弥生土器 壺	-	底部斜位波状によるキザシ降低→3本の腹底直線文と横位波状文。内面は新征のナデ。外面スズ村石。	石英、角閃石、多量 の白色粒	普通	外: 黑褐色 内: 黑色	十王台式
11	弥生土器 壺	-	頸部軽縫不明の附加彌文(R-S, L-Z:上→下)。新加彌文5本の側位区画有字文→上開き彌文。斜位横位直線文→横位波状文→円形柱状文。内面は纏・斜位のナデ。	石英	普通	外: に赤い黄褐色 内: 黄褐色	十王台式
12	弥生土器 壺	- (10.1)	頸部軽縫不明の附加彌文(R-S, L-Z:下→上)。石英、角閃石、骨 好反時計回り)なし。新加彌文。底部有直(頸部斜位波不負)。針 内面横位・斜位のナデ。外面スヌ、内面底位に薄いゴブ 付着。	石英、多量の白色 スヌ	良好	に赤い黄褐色	十王台式
13	弥生土器 壺	- 60	頸部斜位波の附加彌文(R-S, L-Z:下→上)。石英、多量の白色 スヌ、内面ゴブ付着。	石英、多量の白色 スヌ	普通	外: 黑褐色 内: に赤い黄褐色	十王台式

13号住居跡 (第277図)

位置 B3区南部、I12-I13グリッドにある。規模と平面形 (5.35) × (5.02) m の隅角縦長方形で、7号住居跡に東部を壊されている。主軸方向 N - 47° - E 壁 壁高 4 cm、やや外傾して立ち上がる。床 残存する床面は全体が弱く硬化している。南西部の床面は削平されている。ピット 4箇所。P1~4は主柱穴、P2は7号住居の床下から確認されている。P3の柱抜き取り穴径は、約7.5cmである。炉住居中央南寄りに位置し、火床面は長楕円形を呈している。覆土 ローム粒を多量含む暗褐色土が主体である。遺物 遺物の出土量是非常に少なく、1以外は小破片が中心である。十王台式前半期が主体と考えられる。1は穿孔された半月形の貼付文を有し、無文の口縁部が赤彩される特殊な壺である。2は1と同一個体の可能性がある。所見 出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期後半の住居跡と考えられる。



第277図 13号住居跡・出土遺物

表130 13号住居跡出土遺物観察表

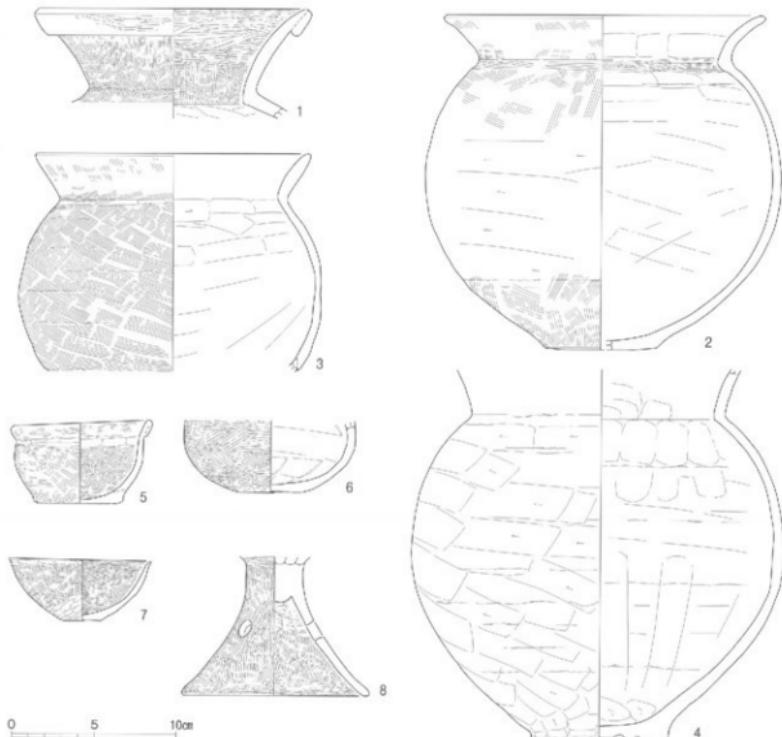
区段 番号	種別 器種	口徑 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	(18.0) — —	口唇部縦文原体によるキザ(無縫合又)、口縫部縦文、素面、底部厚い押捺縦帶2条→3本前の腹壁直縦文→横紋波状文(下→上)→縦帶型に穿孔を有する手形片の縫合文(内側は口縫部横位のナデ、腹壁斜位のナデ)、2と同一個体。	多量の石灰・長石	良好	外: にぶい黄褐色 内: 明赤褐色	
2	弥生土器 壺	— — —	側部折れ足1神籠文(下→上)→黒刷毛3本前の腹壁区西周縦文→腹壁直縦文→横紋波状文(下→上)。内面は縦・斜位のナデ。外面スス付岩石。1と同一個体。	多量の石灰・長石	普通	外: にぶい黄褐色 内: にぶい黄褐色	

第2節 古墳時代

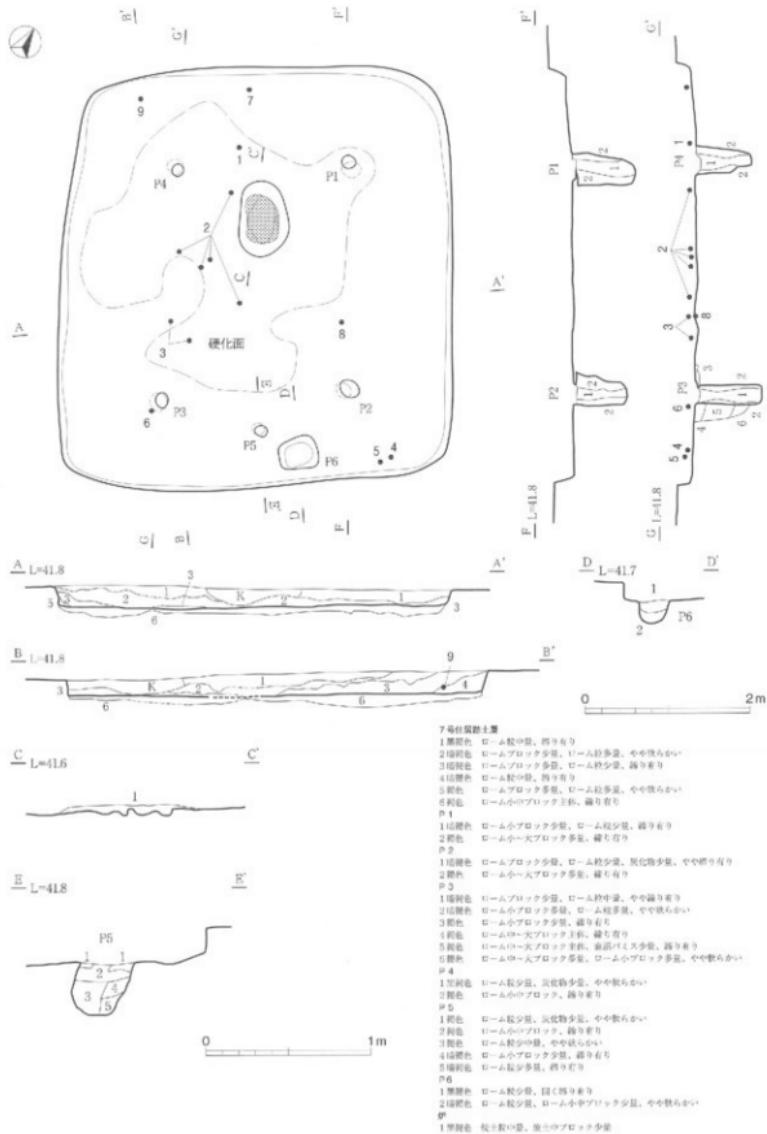
1 堅穴住居跡

7号住居跡（第278~280図）

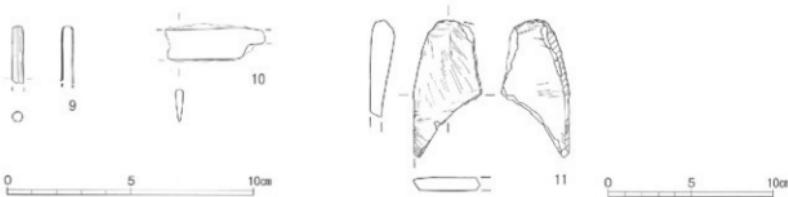
位置 B3区中央部、I12・I13グリッドにある。規模と平面形 $4.82 \times 5.15\text{m}$ のほぼ方形で、13号住居の南東部を壊している。主軸方向 N-30°W 壁 壁高27cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床 住居の中央部から西壁側の一部にかけて硬化している。ピット 6箇所。P1~4は主柱穴。P5は南壁寄りの中央部にあり、出入り口ピットと考えられる。P6はP5と南東壁の間にあり、通常「貯蔵穴」と呼称されるピットと考えられる。炉 長径94cm、短径57cmの楕円形で深さ6cm。覆土 暗褐色土主体の自然堆積層。遺物 弘生時代後期の土器を含みながら、古墳時代前期の遺物を主体として覆土下層から出土している。所見 出土遺物と遺構の形態から古墳時代前期の住居跡と考えられる。



第278図 7号住居跡出土遺物①



第279図 7号住居跡



第280図 7号住居跡出土遺物②

表131 7号住居跡出土遺物観察表

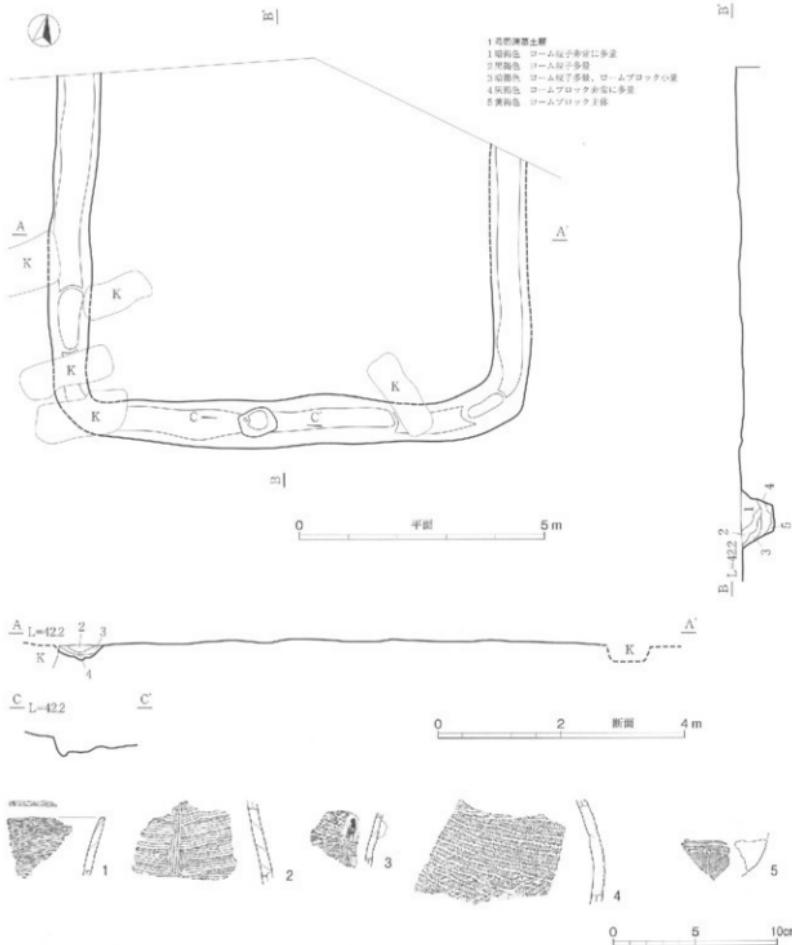
図版番号	種別 器種	口径 断面 形状	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 甕	16.9 —	口縁部外側ハケメ後にハラミガキ。口縁部内面ヘウミガキ。	石英、雲母、骨針 混入	普通	褐色	口縁部外側赤 茶、土器台製用 か
2	土師器 甕	19.6 20.5 6.8	口縁部ヨコナデ、胴部外側ヘラケズリ後にハケメ、底部 外側ナデ、底部内面ハケメ、割補～底部内面ヘラミガキ。	石英、チャート 混入	普通	褐色	胴部上半外側に スス付着
3	土師器 甕	16.8 —	口縁部ヨコナデ、胴部～胴部外側ハケメ、底部～胴部内 面ヘラナデ。	石英、チャート、 褐色鉄 混入	普通	にぶい黄褐色	胴部上半外側ス ス付着
4	土師器 甕	— — 8.4	胴部外側ヘラケズリ後にハケメだが磨滅、底部外側ナデ、 胴部～底部内面ヘラナデ。	石英、チャート 混入	普通	褐色	胴部上半外側に スス付着
5	土師器 甕	8.6 5.1 5.5	口縁部ヨコナデと指揮痕、底部～底部外側ハケメ後にナ デ、底部～底部内面ハケメ後にハラミガキ。	石英、骨針 混入	普通	褐色	
6	土師器 甕	— — 3.6	体部～底部外側ヘラケズリ後にハラミガキ、体部～底部 内面ヘラナデ。	石英、骨針 混入	普通	にぶい黄褐色	体部外側赤茶
7	土師器 甕	8.6 3.8 2.2	口縁部ヨコナデ、体部～底部外側ヘラケズリ後に体部ヘ ラミガキ、底部～底部内面ヘラミガキ。	石英、チャート、 褐色鉄 混入	普通	明黄褐色	
8	土師器 甕	— — 11.5	胴部3方向に透孔。胴部外側ハケメ後にヘウミガキ、胴 部内側ヘラミガキ。	石英、雲母、骨針 混入	普通	にぶい黄褐色	胴部外側赤茶
9	銅製品 不明		残存長23cm、幅5cm、厚さ1mmの管状を呈する。				
10	鉄製品 刀子		残存長41cm、幅15cm、厚さ2.5mm。				
11	石製品 砥石		欠損品。3面使用。砥石には擦痕や鋸刃が認める。 石斧：流紋岩。残存長8.4cm、残存幅4.1cm、残存厚1.45cm、重さ453g。				

2 周溝墓

1号周溝墓（第281図）

位置 調査区の北部、H 11グリッドに所在する。規模と平面形 調査範囲や耕作痕による搅拌のため遺構の北・東側が不明瞭となる。9.80×[7.40以上]m。矩形。主軸方向 N-10°-W。周溝溝の幅は72～100cmで、ほぼ一定する。深さは15～38cmで、北側が浅い。また、南溝中央・東隅、西溝南側は段状に崖み、接続する溝より10cmほど深くなる。土坑1基。南溝中央に穿たれる。下層（4層）上面でも掘り込みが区別できており、土坑構築の時機が窺われる。長径72cm・短径56cm・溝からの深さ20cmで、一部ピッ

ト状を呈する（深さ4cm）。覆土 上～中層に黒褐・暗褐色土、下層に多量のロームブロックを含む灰褐色・黄褐色土が堆積する。土坑の掘り込み面を考慮すると、下層の4・5層は掘り方の可能性が導出されよう。遺物 弥生時代後期の土器片が少量出土した。また、紡錘車が検出されている。所見 所産時期は、根柢となる遺物がいずれも小片であることから、不明である。



第281図 1号周溝墓・出土遺物

表132 1号周溝墓出土遺物観察表

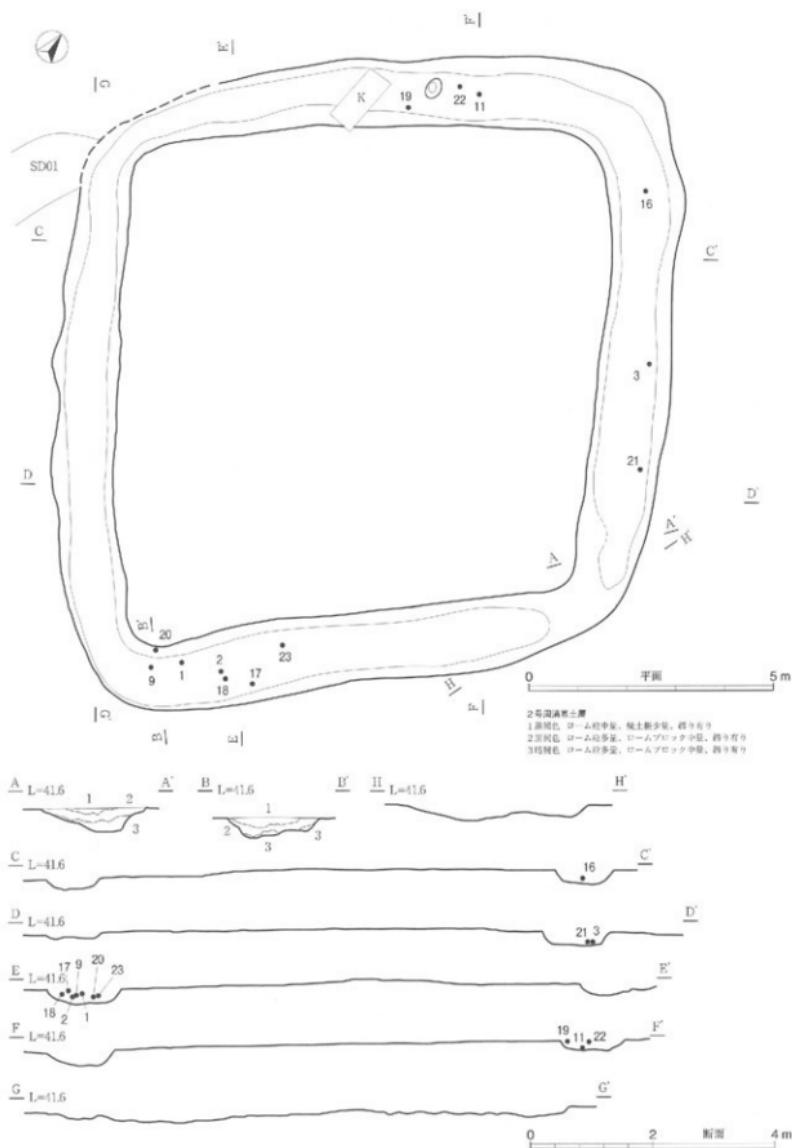
図版番号	種別 器種	口径 高さ 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	-	口縁部黒褐色文（R）+赤土施文。口絞部4本脚の横位脚見えない赤土文（ト→上、底付引回り）。内面は焼・付着の跡。外底スズ付着。	石英、角閃石	良好	明黄褐色	
2	弥生土器 壺	-	底部4本脚の横位脚文→横位状文（下→上）、内面は横位のナメ。外底スズ、内面まばらなヨゴミ付着。	石英、赤鉄鉱	良好	外：灰青色 内：明黄褐色	十王台式
3	弥生土器 壺	-	口縁部加厚2極黒文（L...L）→断面平行形の點文。頭部5本脚の横位脚文→横位状文（下→上）。内面は横位のナメ。外底スズ、内面ヨゴミ付着。	石英	普通	淡褐色	
4	弥生土器 壺	-	底部脚不明の附加条黒文（R-S-L-Z：上→下）+内面は横位のナメ。外脚4～5本脚の横位脚文。内面は焼・斜位のナメ。外底スズ付着。	石英、多量の含鉄・ 白色粘	普通	に赤い黄色	十王台式
5	土製品 鍛錠	-	径一...、高一...、重[7.13] g。外面ナゲ調整。二本同 時施具による鍛錠。鍛錠部	石英、チャート、 多量の白色粘	普通	に赤い黄色	

2号周溝墓（第282・283図）

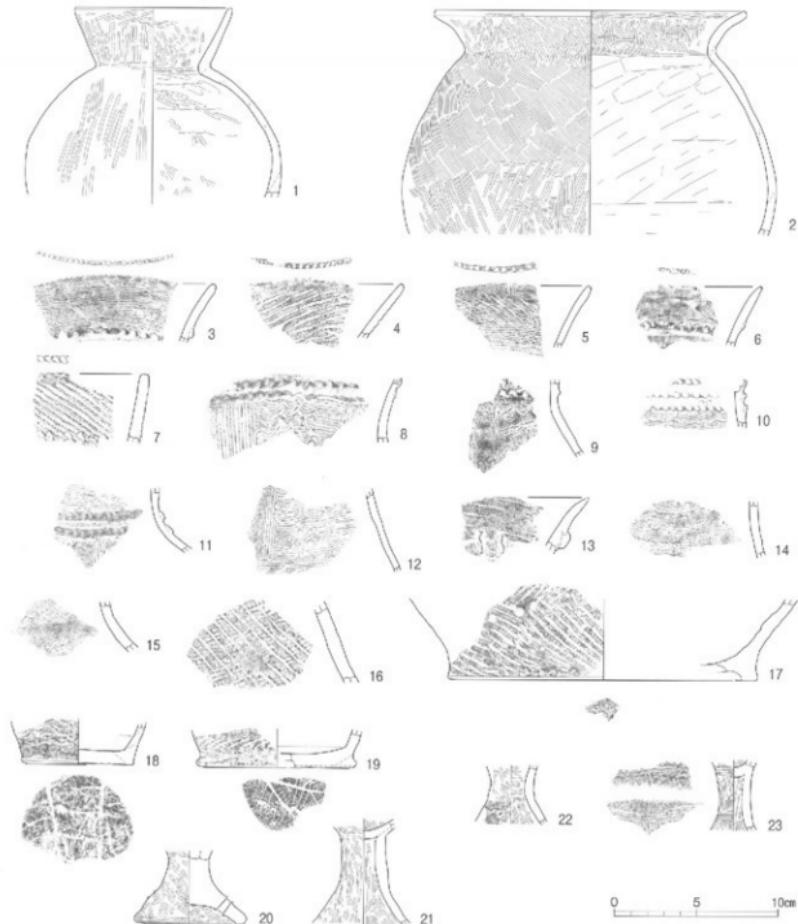
位置 B区南部、E3～E4・D4グリッドにある。規模と平面形 方台部長南北方向10.4m、東西方向10.1mの僅かに菱形に歪んだ方形。周溝が11号住居と12号住居跡を壊して掘り込んでいる。主軸方向南北の周溝方向でN=7～11° E 周溝 周溝幅は1.04～1.54m、深さは20～40cmで、南東コーナー部と西辺の中央部がやや浅くブリッジ状になっている。覆土 上層が暗褐色土下層が褐色土の自然堆積層である。遺物 周溝南西部の覆土中から土師器の壺と壺が、弥生の住居と重複する箇所の覆土中層から下層にかけて弥生土器が出土している。所見 弥生時代後期の住居跡との切り合い関係と出土遺物から古墳時代の方形周溝墓と考えられる。

表133 2号周溝墓出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 高さ 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺	(9.5)	口縁部-側部外面ハケメ後にミガキ及び赤土、口縁部内面ハケメ後にミガキ及び赤土、頭部内面ナメ後に焼なみガキ。	石英、骨針	良好	赤褐色	
2	土師器 壺	(18.6)	口縁部内面ヨコナメ、頭部外囲4カギ、頭部外側ハケメ、頭部内面ハケメ、側部内面ハケケズリ後にヘラナメ。	石英、骨針	普通	淡褐色	頭部外側にスズ 付着
3	弥生土器 壺	-	口縁部ヘラキザミ。口縁部横位脚、6本脚の横位脚状文3種。	石英、青母	普通	褐色	十王台式
4	弥生土器 壺	-	口縁部黒褐色文によるキザミ。口縁部輪脚不明の附加条 黒文（R-S-L-Z：上→下）。	石英、チャート	普通	に赤い黃褐色	十王台式
5	弥生土器 壺	-	口縁部ヘラキザミ。口縁部輪脚不明の附加条黒文（し...Z） →7-8本脚の横位脚。	石英、骨針	普通	に赤い黃褐色	
6	弥生土器 壺	-	口縁部黒褐色文によるキザミ。口縁部輪脚1本脚文	石英、角閃石	普通	に赤い黃褐色	
7	弥生土器 壺	-	口縁部黒褐色文によるキザミ。口縁部輪脚1本脚文	石英多量	普通	明黄褐色	一新規式
8	弥生土器 壺	-	頭部押錐型+5本脚の横位脚状文→横位状文。	石英、青母、骨針	普通	に赤い褐色	十王台式
9	弥生土器 壺	-	頭部竹当状工具によるキザミ陰窓、茎帯下に5本脚の横位脚文→横位脚文→横位状文。	石英、チャート	普通	褐色	十王台式
10	弥生土器 壺	-	頭部丸棒状工具によるキザミ陰窓→3本脚の横位脚状文 （下→上）。	石英、角閃石	普通	褐褐色	十王台式
11	弥生土器 壺	-	口縫部押錐型2条+頭部5本脚の横位脚状文（下→上）、 頭部横位脚文→横位脚状文。	雲母	普通	に赤い黃褐色	十王台式
12	弥生土器 壺	-	頭部附加条黒文+頭部輪脚1本脚状文→頭部5本脚 の横位脚状文→横位脚状文（下→上）。	石英、雲母	普通	に赤い褐色	十王台式
13	弥生土器 壺	-	折り返し口絞。口縫部輪脚不明の附加条黒文（L-Z） →頭部平行形の跡に文2個。	雲母、チャート	普通	に赤い黃褐色	



第282図 2号周溝墓



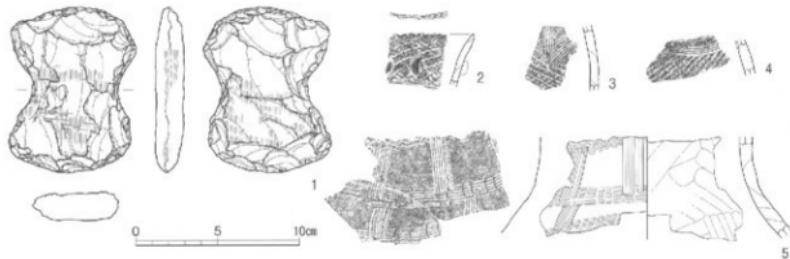
第283図 2号周溝墓出土遺物

図版 番号	種類 器種	口縁 器底 底盤	特徴	胎土	焼成	色調	備考
14	弥生土器 壺	—	頸部3本筋の横波状紋、椎状文(反時計回り)。	陶母、チャート	普通	にぶい黄褐色	
15	弥生土器 壺	—	頸部振り幅の広い6本筋の横波状紋。	石英	普通	にぶい黄褐色	
16	弥生土器 壺	—	肩部附加条2様純文(L+Lカ)。底部布目底。	石英、雲母	普通	明赤褐色	十王台式
17	弥生土器 壺	(188)	肩部附加条1種純文(L+Lカ)。底部布目底。	石英、チャート、 骨針	普通	にぶい黄褐色	内面剥離

図版番号	種別	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
18	乳生土器 壺	- (6.8)	脚部焼付不明の附加条文(R + S), 底部水痕。	石英、雲母	普通	にぶい褐色	
19	乳生土器 壺	- (9.6)	脚部焼付不明の附加条文(R + S), 底部水痕。	石英、骨灰	普通	にぶい褐色	
20	乳生土器 壺	- 6.7	脚部焼成痕孔4ヶ所、内外面ナデ、雜なヘラミガキ。	石英、角閃石	普通	褐色	
21	乳生土器 壺	-	脚部内外面ナデ、雜なヘラミガキ。	雲母、チャート	普通	にぶい褐色	
22	乳生土器 壺	-	脚部3~4本筋の横空腹状文、内外面ナデ、雜なヘラミガキ。	雲母、骨灰	普通	明黄褐色	
23	乳生土器 壺	-	脚部4本筋の横空腹状文、ないし直腹文、内外面ナデ、雜なヘラミガキ。	石英	普通	褐色	

第3節 遺構外出土遺物

弥生時代後期の遺構から打製石斧が出土した(1)。やや小型の分銅形で、純文後・晩期に多い形態を呈する。当該期の痕跡は A 区で後期初頭・前業、B 1 区で晩期中葉の土器片が採取されているものの、本調査区では認められない。遺構や土器を伴わない活動痕跡を反映している可能性等が考えられよう。2~5 は弥生土器である。2・3・5 は十王台式、4 は二軒屋式土器の壺と考えられる。5 も二軒屋式系とみなせるが、縦位の短い櫛描直線文を単位をずらしながら施すなど異質な特徴を有する。



第284図 遺構外出土遺物

表134 遺構外出土遺物観察表

図版番号	種別	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	石器 打製石斧	-	分銅形。基部近辺に磨耗状が観察。石英: ホルンフェルス。長さ 10.06cm・幅 7.68cm・厚さ 1.75cm・重さ 186.16 g.		SJ-11		
2	弥生土器 壺	-	LH脚部純文鋸刃によるカザリ。口縁部斜削条2種横文(R + R) → 1本筋以上の輪空直線文、半月形の施付文。内面は模様のナデ。外面スム付着。	石英、角閃石	普通	青灰色	表土
3	弥生土器 壺	-	瓶型附削条2種純文(L + S) → 瓶型界4~7本筋の下書き通風文→瓶部復原直線文→横空腹状文。内面は模様のナデ。外面スム付着。	石英、金雲母	普通	黄灰色	表土
4	弥生土器 壺	-	脚部附加条1種純文(LR + 2 S) → 深腹窓6~7本筋の模様直線文ないし上書き通風文。内面はナデ。	多量の石英・白色粘土	普通	明赤褐色	表土 二軒屋式
5	弥生土器 壺	-	瓶型7本筋の上書き通風窓(深時計回り)、波状文→複数直線文。先端部齊整の指文を使用。内面は量・鋭度のナデ。外面被熱による赤色化。	多量の石英・白色粘土	普通	外: にぶい青褐色 内: 明赤褐色	表土

第VIII章 総括

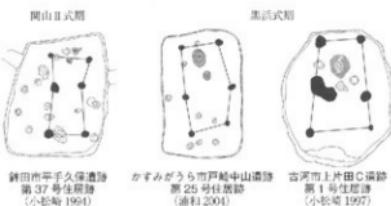
第1節 繩文時代

繩文時代の遺構として、前期中葉の堅穴住居跡1軒（B2区1号住居跡）、陥穴2基（A区1号陥穴・A区2号陥穴）が検出された。また、早期中葉から晩期中葉の繩文土器や石器が確認されている。ここでは本調査（塙谷遺跡A区・B1～3区）で得られた成果について、洞沼前川から分岐する同じ谷沿いの城谷遺跡C区（高野2008）、長峰東遺跡（上生2010）、長峰西遺跡（大賀2010）と合わせて概観したい。なお、当該遺跡群は友部丘陵南東端に位置し、小支谷がA区、B・C区、長峰東遺跡、長峰西遺跡を分断する（第1図）。C区はB区と同じ丘陵の先端に位置し、1基の陥穴が報告されている（C区3号土坑）。長峰東遺跡では重複する陥穴（1a・1b号陥穴）の他に、調査区北側の埋没谷上層（基本層序4層）で閑山II式および黒浜式期の遺物包含層が調査された。長峰西遺跡は少量の繩文土器や石器が散見された程度である。

これらの遺跡から確認された繩文土器は、早期前・中葉、前期中・後葉、中期前・後葉、後期初頭・前葉、晩期中葉に相当する。検出点数が少ないので有意な傾向を読み取ることは難しいものの、本地域が用益活動に繰り返し供されてきたことを窺わせる。とくに、前期中葉の資料が多くを占め、各調査地点に分布している。この状況はB2区1号住居跡など近在の集落¹⁾から派生する活動域を反映したものと推察されよう。

B2区1号住居跡の所産時期は出土遺物から黒浜式古段階に比定された。住居跡の形態に着目すると、長方形の平面・長軸方向に偏る地床炉・6本の主柱穴・周縁する壁柱穴など当該期の定型的な要素を備えており、土器型式と符号する²⁾。ただし、関東地方東部では住居の平面形や柱穴配置が弛緩する傾向にあり、平面が椭円形を呈する住居跡も多い（小松崎1997）。本事例は前期初頭から認められる系統だが、茨城県域では前期中葉閑山II式期ないし黒浜式古段階から遡れて散見されるようになる（第285図）。壁岡溝の非受容など異なる遷移を有するもの、関東地方西部からの影響を検証する必要があろう³⁾。

陥穴はA区北側、C区、長峰東遺跡の5基が検出され、いずれも単体で設営されている。形態は、I：平面が椭円形・短軸の断面がU字状（A区1号陥穴、C区3号土坑、長峰東遺跡1a・1b号陥穴）、II：平面が長楕円形・短軸の断面がV字状（A区2号陥穴）の2種が認められ、長峰東遺跡1b号陥穴の底面には小穴が見受けられた。A区1号陥穴は遺物の出土状況から前期中葉閑山II式期に近い所産時期が予想される。茨城県下の陥穴を集成した武田石高遺跡の報告書（鈴木1998）では、形態I・II共に繩文前期以前に想定しており⁴⁾、本事例と整合する。当該期に比定されるB2区1号住居跡との関係は明瞭でない。



第285図 茨城県における繩文前期前半の6本主柱穴住居跡

注 1) B2区1号住居跡は陥穴の深度が浅く、残存状況が良くない。加えて、同じB2区に集中するピット（第7図）などを考慮すると、削平されてしまった住居跡の存在が予想される。

2) 鎌森尾一氏（鎌森1981～1982）は関東地方西部における閑山I式～黒浜式の住居跡について、平面長楕形・6本主柱穴の系統を示した。

3) 閑山II式期における定型的な6本主柱穴住居跡の事例は少数に止まる。また、前期前葉の事例が南小瀬遺跡第79号住居跡（中村はか1998）等で散見されるものの、閑山I～II式期の様相を覗みると本事例に直接系統するものではないようである。

4) 武田石高遺跡における分類では、IがC類および底面に柱穴を有するC-p類に相当する。IIは遺構上半の削平を踏みA2類ないしB2類に比定されるが、陥穴の配置状況から繩文前期以前のA2類に帰属するものと見做した。

第2節 弥生時代

今回の調査で弥生時代の住居跡は69軒が確認された。平成19年度に調査されたC区（高野2008）でも10軒が確認されており、それらを含めると79軒になる。いずれも後期後半の十王台式期に比定され、等間市域では最も住居軒数が多い集落となった。また、谷地を挟んだ西側の丘陵上には同時期の住居跡11軒が確認された長峰東遺跡（土生2010）が所在する。本節では、長峰東遺跡を含めた既往の調査成果を踏まえ、境谷遺跡における弥生土器の編年と集落の変遷について検討してみたい。

(1) 境谷遺跡出土土器の変遷

十王台式土器は現在、鈴木素行氏により那珂川流域を中心に分布する型式群（葉王院式～武田式石高段階）と久慈川流域を中心に分布する型式群（富士山式～小祝式幌巾段階新期）に大別されている（鈴木素2010）。本遺跡の位置する潤沼川流域の十王台式土器は茨城町大畑遺跡（長谷川1998）、矢倉遺跡（飯島1998）、大戸下郷遺跡（近藤2004、綿引・松木2006）などからなる大戸遺跡群の出土例から基本的には那珂川・久慈川流域系統の土器によって構成されていることが明らかになっている。本遺跡は潤沼川の支流である潤沼前川の左岸に位置しており、大戸遺跡群よりも約9km西に位置するものの、十王台式土器については、概ね同様な様相を呈している。ただし、典型的な那珂川・久慈川流域の十王台式土器から逸脱する資料も多いことから、本遺跡における十王台式上器の特徴を抽出してみたい。編年は鈴木素行氏の研究（鈴木素1998・2001・2010）を参考にしながら、その特徴を確認する。第286回では那珂川系の十王台式土器（1・3・4・11～13）、久慈川系の十王台式土器（2・5・6・14）を中心に掲載した。

1期 今回の調査区では確認されていないが、C区1・9号住居跡で該期の土器が出土している。葉王院式に並行する。

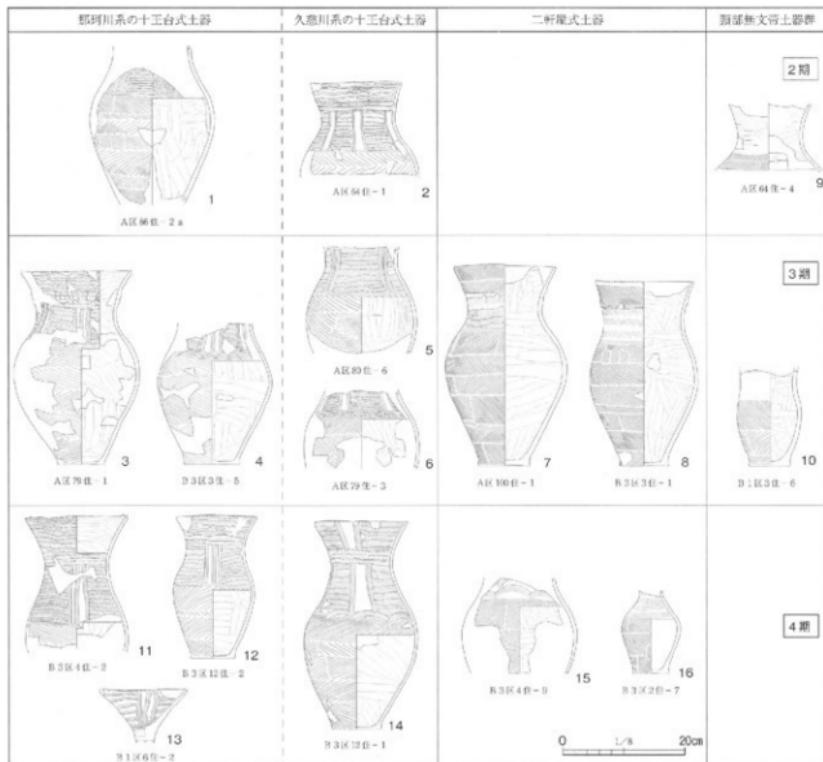
2期（1・2） A区37・64・74・85・86・98号住居跡、B2区4号住居跡、B3区11号住居跡、C区4号住居跡、1号堅穴が該当する。口縁部は幅が狭く、無文ないし縄文が施文されることが多い。墳帯は厚く、櫛齒の本数は3～4本と少ない傾向にある。頸胴界の区画文は直線文である。大烟式、富士山式に並行する。文様等から那珂川系・久慈川系を区分したが、区分は明瞭でない個体も多い。

3期（3～9） A区16・18・27・29・39・44・49・52・58・66・77・79・80・100号住居跡、B1区1～3・6・7号住居跡、B3区3・5・8号住居跡、C区3号住居跡・1号堅穴状遺構、長峰東遺跡2・9号住居跡が該当する。口縁部は幅が拡張され、櫛描文が施文される。また、頸胴界の区画には直線文と波状文ないし、上開きの連弧文が組み合わされたものが目立つ。武田式西堀段階古期、小祝式幌巾段階に並行する。4期との区分は明瞭でなく、一部は4期に含まれる可能性もある。

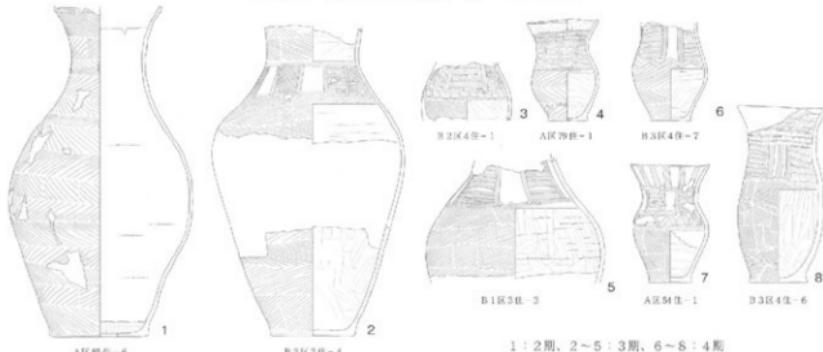
4期（10～16） A区48・54号住居跡、B3区2・4・6・12号住居跡、C区2・10号住居跡、長峰東遺跡1・4・6・7号住居跡などが主な住居跡である。小祝式において頸胴界の区画文が下開きの連弧文となることを指標とする。武田式西堀段階新期、小祝式幌巾段階古期に並行する。

5期 本遺跡では非常に少なく、小片でしか確認できない。A区57号住居跡、B1区5号住居跡、長峰東遺跡12号住居跡などが該当する。武田式において頸部の隆帯が帯状刺突文に置き換わることを指標とする。長峰東遺跡12号住居跡ではS字彫B類と十王台式上器の共伴が確認されており、本時期には確実に土師器との共伴が確認できる。武田式石高段階、小祝式幌巾段階新期に並行する。

6期 古墳時代前期の土師器が主体的に出土する造構を対象とした。古墳時代の土師器編年では前期後半の様相を呈する。A区1・4・5・8・23号住居跡、B3区7号住居跡、2号周溝墓が該当する。長峰東遺



第286図 弥生土器の変遷図（2～4期を抜粋）



第287図 典型的な十王台式土器から外れる個体

跡では3・5・10・11・13・14・15号住居跡が本時期に該当するが、このうち、3・5号住居跡は前期前半に帰属する。弥生土器も小片が伴う多くは混入と考えられる。

(2) 埼谷遺跡出土の十王台式土器

第287図では典型的な那珂川・久慈川流域の十王台式から外れる個体を抽出した。これらを概観すると製作技法において附加1条を典型とする附加条1種縄文の使用(1・4・7)、多量の石英・長石を含む胎土、底部の木葉痕、粘土を多量に使い、底部付近を厚く仕上げるなどの諸特徴がみられる。これらはいずれも二軒屋式土器の特徴であり、本遺跡の十王台式土器は那珂川・久慈川流域の土器をベースとしながらも二軒屋式土器の製作技法を取り入れて造られていることが確認できる。文様要素では口縁部や頸胴界に櫛描山形文を施文することが目立つことがあげられる(7など)。これらは潤沼川中流域の遺跡群でも数点しか出土していない個体である。また、頸胴界の区画文に直線と一単位の幅が狭い上開きの連弧文を採用する個体(4)も目立つ。これらは在地の十干台式土器の指標となる可能性があり、今後、類例の増加とともに型式学的検討が望まれる。

なお、胎土に金雲母を含むものは久慈川流域の製品であることが指摘されている(鈴木素1998)。A区27号住居跡4(第28図)は胎土に金雲母とともに多量の石英・長石を含み、頸部の縦位直線文は3条1單位で那珂川流域の特徴を有する。A区64号住居跡1(第286図2)は頸部文様は久慈川系統ながら、胎土に金雲母を含まない。このように本遺跡では金雲母を含む胎土と久慈川流域における十王台式土器の型式学的特徴が対応しない事例が多い。したがって、金雲母を含む個体をもって久慈川流域産の十王台式土器と判断することはできず、金雲母の供給地を本遺跡周辺に求めることも視野に入れて考える必要があろう。

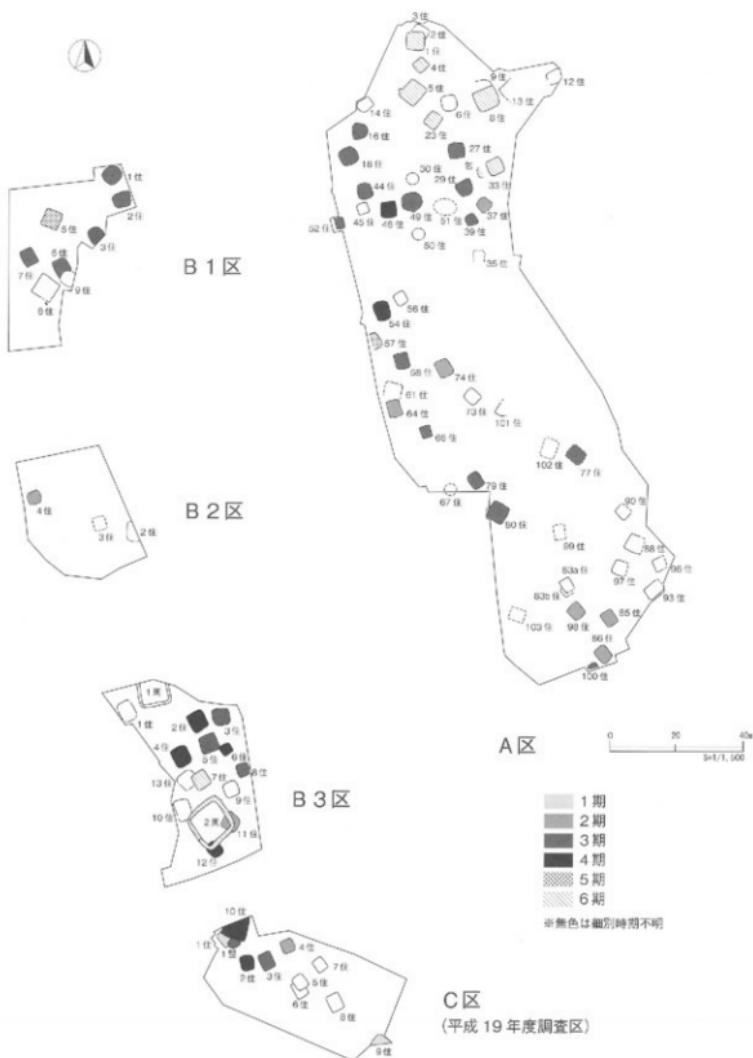
(3) いわゆる二軒屋式土器について

「二軒屋式土器」は近年、鈴木正博氏による再検討(鈴木正1999・2008)の途上にあり、型式名として使用することは適切でないかもしれないが、前項で触れた諸特徴に加え、8~10本歯の櫛描波状文・連弧文が施文されることなどから十王台式土器とは明確に区別されるため、それらを指標として抽出した。

本遺跡出土の二軒屋式土器はA区100号住居跡(第286図7)、B3区3号住居跡(8)・4号住居跡(15)などで良好な個体が出土している。二軒屋式土器が確実に伴うのは3期からであるが、小片を含むと2~4期に伴出することが確認できた。十王台式土器の編年に対応する形で変遷を見てみると、文様は3期までは頸部波状文、頸胴界の区画文が直線文であることが多いのに対し、4期では頸部文様は下開きの連弧文、頸胴界の区画は廉状文であることが多い。埼谷遺跡出土の二軒屋式土器は出土弥生土器全体の約12%を占め、大戸遺跡群と比較すると、二軒屋式土器の組成比率が高い傾向にある。さらに、本遺跡の南方約600mに位置する友部町三本松遺跡(板野ほか2003)および、それ以西の遺跡では二軒屋式土器が主体となることから、本遺跡周辺が十王台式土器の主体的な分布圏の西限と想定される。

(4) その他の外来系土器・特殊な遺物

十王台式・二軒屋式以外の土器で最も目立つのは頸部に無文帯を持つ土器群である。これらの土器群は現在数種類の型式名が与えられており、二軒屋式土器の中にも無文帯をもつものが存在するため、小片から型式を特定することは困難である。したがって頸部に無文帯を持つ土器群として一括した。出土弥生土器全体に占める比率は約1%である。第286図9は原体の異なる2種類の單節縄文を横位施文し、羽状構成をなしている。10は頸部に刺突文をめぐらし、9と同様羽状構成をなす。原体は附加2条の附加条1種縄文である。いずれも潤沼川以南に系譜が求められる土器群である。その他、小片ながら回転結節縄文を施文する南関東系の土器がA区85号住居跡から1点(第72図16)、B1区の遺構外から1点(第235図5)、樽式土器の



第288図 弥生集落の変遷

模倣と考えられる土器が同じくB1区遺構外から1点（第235図2）出土している。土器以外の遺物では管玉2点（A区66住、B3区4住）、鉄斧1点（A区83a住）が出土している。

（5）集落の変遷

本遺跡では弥生時代後期以前の土器が確認できることから、集落の継続期間は弥生後期後半から古墳時代前期後半までと推測する。以下では時期別に集落の変遷を概観する（第289図）。なお、B1～C区とA区の間は谷地となっており、谷地を「n」字状にとりまく舌状台地上に集落が立地する。

1期 住居はC区でのみ確認され、集落の開始期は舌状台地の先端部に住居が造られる。また、住居軒数も2～3軒の小規模な集落であったと考えられる。

2期 居住域の中心はA区南端部へと移行し、A区の中央部などにも住居が散在する。1期に比べやや住居軒数が増えるものの、10軒を超えることはないと想定される。

3期 住居跡が急増する時期である。A区北端部からB1区にかけてこの時期の住居が集中する。B3区でもややまとまる。谷地を挟んだ西側の丘陵上でも集落（長峰東遺跡）の造営が開始される。

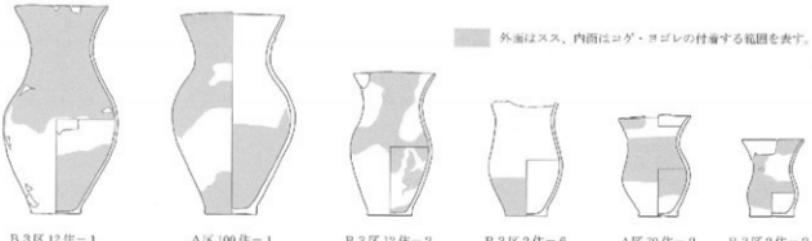
4期 分布はB3区～C区とA区北半～B1区、長峰東遺跡にまとまりが見られる。集落の中心が西ないし、北西方向へと移行していく様相が捉えられる。

5期 この時期の住居は極端に少なくなるが、5期に相当する土器が本遺跡でほとんど確認できないことから、4期とした土器がこの時期まで残る可能性もある。A・B1区、長峰東遺跡に住居が散在する。

6期 住居軒数は再び増加傾向にあり、A区の北端部や長峰東遺跡でまとまって住居が造られる。B3区では弥生時代の13号住居跡を壊して7号住居跡が造られ、4期の12号住居跡を壊して2号周溝墓が造成される。土器とともに住居構造・墓制を含めた古墳時代への移行が完了する時期と考えられる。

以上、塙谷遺跡における弥生時代後期の土器と集落の変遷を中心に概観してきたが、4期において確実な古墳時代の土器と弥生土器の共存が確認できなかったものの、この時期に一部住居の形態が正方形を呈し、明確な貼床をもつ住居跡（B1区8号住居跡など）が出現する。このことから、4期は古墳時代への移行を示す一つの画期と言えよう。塙谷遺跡の所在する小原地区では近年、三本松遺跡、小原遺跡（吉田ほか2005）、長峰東遺跡、長峰西遺跡（大賀ほか2010）などで十王台式期の集落が相次いで報告されており、従来不明であった該期の集落・土器様相が急速に判明しつつある。本遺跡では調査範囲外にも住居の分布が濃密であることが予想され、推定住居軒数は100軒を超るとみられる。当該期の集落としては大洗町銚金遺跡や土浦市原田遺跡群に次いで茨城県内でも屈指の規模を有する。今後検討すべき課題は多いが、塙谷遺跡の調査成果は涸沼川流域における弥生・古墳時代研究に大きく寄与するものと評価できよう。

注 1) 鈴木正博氏のご教授による。



第289図 付図・弥生土器のスス・コゲ

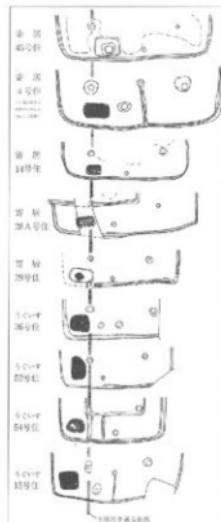
第3節 古墳時代

塙谷遺跡の古墳時代の住居跡は、前期が11軒、後期が4軒である。前期の住居跡は、A区に9軒、B区に2軒で、A区北部には7軒が集中しており、遺構の残存状態がよく遺物の量も多い。

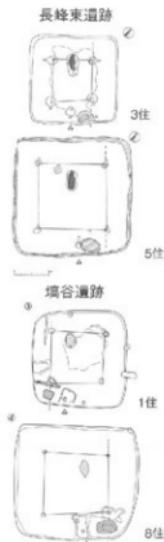
A区北部の住居は、大形で4本主柱穴を持つものが3軒、やや小形で主柱穴をもたないものが4軒ある。内部の施設は大形・小形とも炉、出入り口ピット、貯蔵穴を共通して持つており、小形の竪穴も独立した生活の単位と考えられる。大形の5号住居と小形の4号住居は出土遺物から見るところと壺や器台に共通した形態的特徴があり、建物の配置や主軸方向も関連性が見られ、同時期に併存していたものと思われる。大形住居の1・5・8号住居の出土遺物には、有段の鉢形や直口縁の壺があり、壺・甕は胴部中位に最大径があり丸く膨らむ形状で、壺の底部は小さく窪むといった特徴がある。1号住居には口縁端部を面取りする小形の甕や器台があり、8号住居には半球形の大形の鉢があるなど違う面もあるが、共通する器種構成から大きく捉えると、各住居は前期の後半代の遺物を主体としていると考えられる。

古墳時代前期の住居の新旧を住居の形態的な特徴から捉える方法として、貯蔵穴の位置についての視点がある（第290図）。県南部の土浦市にある寄居（寄45号住）から新しい時期（う15住）までの28軒の住居がある。古い時期の住居の場合、主柱穴を縦に結ぶ方向の線を基準として貯蔵穴の位置を見ると貯蔵穴は縦の内側に位置している。新しい時期の住居の貯蔵穴は住居コーナー寄りにあり、寄居14住や寄居28A住などその中间の位置にあるものもある。時期を追って並べた図が第290図で、貯蔵穴は住居の内側からコーナーに向かって移動しているように見える。塙谷遺跡周辺で同じ状況が見られるかを見てみると、塙谷遺跡に隣接する長峰東遺跡の3号・5号住居跡は、元屋敷系の大形の高坏、裾広がりの小形開脚高坏を持ち、古墳時代前期前半代のものと考えられる。これらの住居の貯蔵穴の位置は住居の柱穴の縦方向を結ぶ線の内側に位置する。これに対し、塙谷遺跡の8号住居跡の貯蔵穴は住居の柱穴を結ぶ線上かやや内側、1号住居は柱穴線上かそのやや外側の位置にある。出土遺物が示す年代は、住居が機能していた期間の後半～終末頃に使われていた土器群であろうから出土遺物から見ると前期の後半に廃絶していると考えるが、貯蔵穴の位置から見た集落の始まりの時期は、出土遺物から見る時期よりも古い時期となるものと思われる。

古墳時代後期の住居跡は4軒あり、A区北部に1軒、南部に3軒ある。出土遺物は、土師器では壺、鉢、甕、壺があり、石製品では不定形の大形



第290図 「貯蔵穴の移動」より



第291図 長峰東・塙谷遺跡住居の比較

砥石や板状砥石、軽石がある。土師器坏は、15号住居のように無赤彩のものを主体に赤彩品が少量ある組み合わせや92・94号住居のように体部内外面にミガキを入れたものが主体のものもある。丸底で口縁部が内済形態の土師器坏に黒色処理のものはないので、6世紀中頃から後半を主体とした時期のものと思われる。

第4節 奈良・平安時代

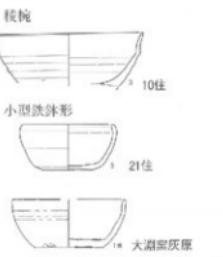
塙谷遺跡A区からは、奈良・平安時代の堅穴住居跡が33軒、B区からは2軒、掘立柱建物跡はA区から7棟、B区からは1棟確認されている。A区の堅穴住居跡を出土遺物から見ると、8世紀の前葉頃に廃絶しているものが1軒(46住)、8世紀中葉頃の廃絶が5軒(26・38・55・76・84住)、8世紀後半～後葉頃のものが6軒(10・11・24・42・59・82住)、9世紀前葉頃のものが8軒(7・21・31・47・69・70・71・78住)、9世紀中葉頃のものが4軒(40・63・65・75住)、9世紀後葉頃のものが6軒(17・41・43・53・60・95住)、10世紀前葉頃のものが3軒(19・22・95住)である。掘立柱建物は、7号掘立出土遺物が9世紀前葉頃のもので、3号掘立は、9世紀後葉頃の住居に壊されており、7号掘立は10世紀前葉頃の住居に壊されていることなどから、掘立柱建物は少なくとも8世紀後葉～9世紀代の中では堅穴住居とともに存在していたものと見られる。集落の変遷をまとめると、8世紀の前半に最大5軒程度から始まった集落は、8世紀中葉～後葉と次第に数を増し、掘立柱建物が建てられ、9世紀代には堅穴住居跡10軒を超える集落に成長したものと見られる。集落は9世紀をピークに10世紀前葉ころまで継続し、その後集落は断絶したものと思われる。

集落を構成する堅穴住居跡の平面形状は、8世紀前半では1辺5m前後のやや大型で4本主柱穴を持つものが主体で、8世紀後半ではやや小形化傾向が見られるとともに、4本主柱穴の柱穴の位置に変化が見られる。カマド側2本が北壁際に寄った位置に聞くもの(59・47住)、さらに入出入口側の主柱2本も壁直下に聞くもの(75住)が見られる。その後、9世紀代には床上に主柱穴を持たない小形化した住居が主体になる。出入り口ピットは弥生時代後期・古墳時代から奈良時代、9世紀になども傾斜する一本柱を設置した形式のものが続くが、9世紀後半代に床上には出入り口ピットの痕跡がなくなり、出入り口の位置が不明になるものもある。掘立柱建物については、集落の中心域に3群に分かれて建てられているが、それらの先後関係や堅穴住居の集落との関係は不明な点がある。

出土遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、土製品、石製品、金属製品がある。土器類は、須恵器の供膳具が多く、つぎに土師器の斐



第292図 堅穴住居の変化



第293図 特殊な器形の須恵器

や須恵器の瓶・壺が多い。土師器の供膳具は8世紀後半から9世紀前半段階で少量見られ、9世紀後半以降須恵器の供膳具と数量が逆転する。灰釉陶器は1点長頸瓶が出土しているのみで、非常に少ない。土製品は円柱状のカマド支脚が8世紀代の住居から5点出土している。土器祭祀に使われたと思われる手捏上器は、8世紀前葉の46号住居から2点出土している。石製品は、砥石が6点あり、小形定形品は凝灰岩製で、大形定形のものや大形で不定形のものは砂岩、安山岩、雲母片岩製と多様な種類がある。鉄製品も少なく、70号住居から刀子が1点出土している。

最も数多く出土している須恵器の中には、8世紀中葉頃の38号住居の酸化焰焼成の盤、9世紀前葉頃の7号住居の焼き歪みの激しい坏、9世紀中葉頃の40号住居の焼き歪んだ盤といった、窯場近くで得られる不良品の雑続的利用が見られる。また、8世紀中葉頃の26号住居の須恵器坏底部の「一」「井」のヘラ記号、9世紀前葉頃の7号住居の「*」のヘラ記号、9世紀中葉頃の40号住居の須恵器坏・盤底部の「一」「大」のヘラ記号というように、ヘラ記号を多用した窯場製品の使用も、8世紀後半から9世紀中葉にかけて雑続的に行っている点に特徴が見られる。ほとんどの須恵器は在地の製品であるが、8世紀中葉頃の26号住居からは湖西産と見られる壺形の須恵器が出土している。

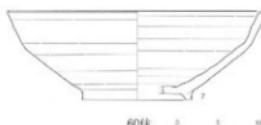
特殊な器形の須恵器では、10号住居跡出土の大型の稜塊や、21号住居出土の小形鉄鉢形坏、60号住居出土の大形高台付鉢がある。21号住居の坏は、笠間市大洞窯のA地点1号窯の灰原出土品にやや似た器形のものがある。60号住居の大形高台付鉢は、須恵器生産窯で類似例は今のところ見られないが、同じ笠間市内の平安時代の寺崎台地遺跡から、似た器形のものが出土している。現在調査中の小原地区の遺跡からも類似品が少數確認されており、分布の地域的な偏りは、笠間市域がこの鉢型須恵器の生産地であることを推測させる。

土師器の供膳具では、8世紀後半の31号住居の6の高台付坏や8世紀後葉頃の47号住居の20・21の高台付坏が非常に特徴のある土器である。これらは土器制作の前半段階に、須恵器と同じ器形イメージのもとロクロを使用して成形され、後半段階に土師器生産技術である内面黒色処理とミガキを施し、酸化焰焼成で仕上げられている。この須恵器の器形に近いロクロ使用内黒土師器は、他に図示できない細片が他の住居でも見られ、多くはないが一定量流通しているようである。

墨書き器は、9世紀後葉頃に見られ、大形高台付鉢須恵器を出土した60号住居から、土師器坏底部に「口



寺崎台地遺跡1号住



第294図 須恵器大形高台付鉢

土師器



47住

第295図 8世紀の土師器供膳具



第296図 「口山寺」 墓膏 (60住)

「山寺」と書かれた寺院名を示すと思われるものが出土している。

第5節 中世

塙谷遺跡の中世の遺構は、△区の中央を南北に走る溝、溝と直交して東西方向に延びる道路状遺構、A区の中央部に分布する地下式坑である。溝は、南北で規模が違い、北側の溝は幅・深さとも区画の役割程度の溝で、南側の溝は底部が平坦で幅も広く堀のような防御の溝と見られる。南側の規模の大きい溝は同じ形状の溝を少しづらして2回掘削している。道路状遺構は、南北方向に延びる台地東斜面を切り通しの溝状に掘削し、道路として使用している。南北方向の溝と交差する部分で、溝が止まっており、道路面はさらに西に向かって延びていたものと思われ、道路と溝は一連の時期のものと推測される。道路状遺構や溝からは古瀬戸の深皿や常滑広口壺破片が出土しており、中世後半でも15世紀前頃の遺構と考えられる。

地下式坑は、全部で7基あり、分布は中央部道路状遺構の北側に2基、道路状遺構の南側に5基ある。北側の1基は、主室が堅坑から見て、縦長の平面形状で、堅坑底面から緩やかなスロープを持っている。両側にも縦長平面の地下式坑があり、この覆土中から古瀬戸平碗が出土している。15世紀頃の遺構になるものと思われる。

参考文献

- 飯島一生 1998『矢倉遺跡』『北岡東臼輪車道（友部～水戸）送設地内埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ 財団法人茨城県教育財団
 板野晋輔ほか 2003『三本松遺跡』 友部町三本松遺跡調査会
 茨城県考古学協会・十四町教育委員会 1999『茨城県における弥生時代研究の到達点～弥生時代後期の集落構成から～』
 浦利敏郎 2004『戸崎中山遺跡』 財団法人茨城県教育財団
 海老澤淳 2000『茨城県における弥生後期の土器編年』『東日本弥生時代後期の土器編年』第2分冊 東日本埋蔵文化財研究会
 人見賛ほか 2010『長峰西遺跡』 笠間市教育委員会・有限会社勾玉工房 Mogi
 小松崎猛彦 1994『主要地方遺跡』鉢出佐原遺跡改良工事池内埋蔵文化財調査報告書！ 財団法人茨城県教育財団
 小松崎猛彦 1997『一般国道4号改然工事地内埋蔵文化財調査報告書3』 財団法人茨城県教育財団
 近藤伊彌 2004『大戸下郷遺跡』 財団法人茨城県教育財団
 鈴森豊一 1981～1982『櫛文時代前期の住居と集落（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）』『土曜考古』土曜考古学研究会
 純文時代研究会 1993『茨城県における縄文時代前期前半の住居跡の形態について』『研究ノート2号』 財団法人茨城県教育財団
 鈴木正博 1995『茨城弥生式の葬焉』『古代』100号 千葉大学考古学会
 鈴木正博 1999『北岡東後期弥生式「二軒屋式」の研究』『日本考古学協会第65回総会 研究発表要旨』 日本考古学協会
 鈴木正博 2008『井頭遺跡から観た「二軒屋式・須和田式・板張式」への展開』『板木県考古学協会誌』29号 板木県考古学会
 鈴木正行 1998『武田石高遺跡－鉢石器・繩文・弥生時代編－』 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
 鈴木正行 2001『船出西塙遺跡－鉢石器・繩文・弥生時代編－』 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
 鈴木正行 2005『船塙遺跡』 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
 鈴木正行 2010『弥生時代後期「十工方式」の集落構造』『武田高遺跡－縄折・縄造繩－』ひたちなか市教育委員会
 高野浩之 2008『塙谷遺跡』 笠間市教育委員会・（株）地域文化財コンサルタント
 千草重樹 1995『寺台北地遺跡』 笠間市寺台北地遺跡発掘調査会
 中村敬治ほか 1998『茨城中央工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書』 財団法人茨城県教育財団
 中山仁美 1987『笠間山大須庭跡』 笠間山史跡園委員会
 旗島清光ほか 2007『小原遺跡発掘調査報告書』 笠間市小原遺跡発掘調査会
 長谷川聯 1998『大畑遺跡』『北岡東臼輪車道（友部～水戸）送設地内埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ 財団法人茨城県教育財団
 牛生朗治 1994『新竪穴の移動について』『研究ノート』3号 財団法人茨城県教育財団
 土生朗治 2010『長峰東遺跡』 笠間市教育委員会・（有）毛野考古学研究所
 薩田典夫 2000『板木県における弥生後期の土器編年』『東日本弥生時代後期の土器編年』第2分冊 東日本埋蔵文化財研究会
 古田寿ほか 2005『小原遺跡』 友部町小原遺跡調査会・大成エンジニアリング株式会社
 稲引英樹・松本直人 2006『大戸下郷遺跡2』 財団法人茨城県教育財団

写 真 図 版



小学生の免耕体験学習(平成20年11月11日)



1号竪穴完掘状況(北東から)



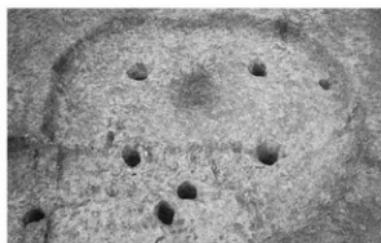
2号竪穴完掘状況(東から)



6号住居跡完掘状況(南から)



14号住居跡完掘状況(南東から)



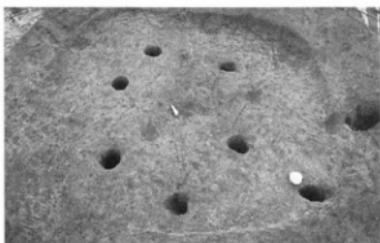
16号住居跡完掘状況(南から)



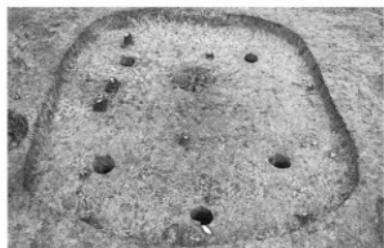
27号住居跡完掘状況(南から)



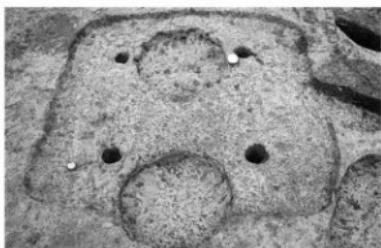
29号住居跡完掘状況(南東から)



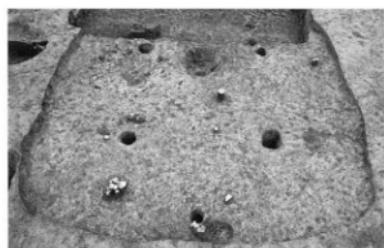
37号住居跡完掘状況(北東から)



44号住居跡完掘状況(南から)



45号住居跡完掘状況(南から)



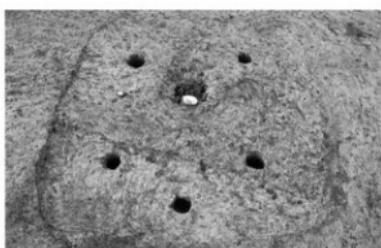
48号住居跡完掘状況(南から)



49号住居跡完掘状況(南から)



54号住居跡完掘状況(南東から)



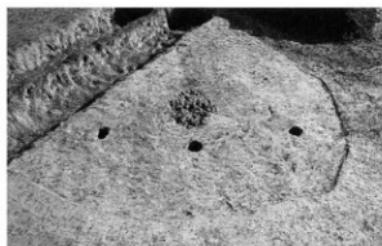
56号住居跡完掘状況(南東から)



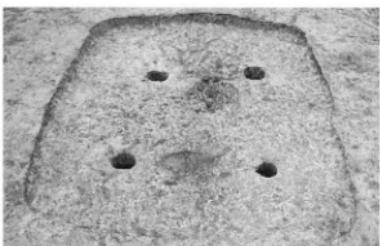
57号住居跡完掘状況(南東から)



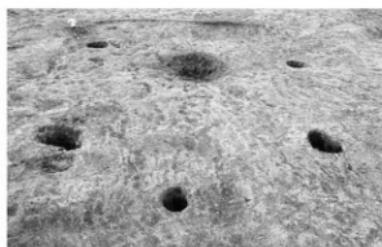
58号住居跡完掘状況(東から)



67号住居跡完掘状況(北西から)



73号住居跡完掘状況(南東から)



77号住居跡完掘状況(南東から)



79号住居跡完掘状況(南東から)



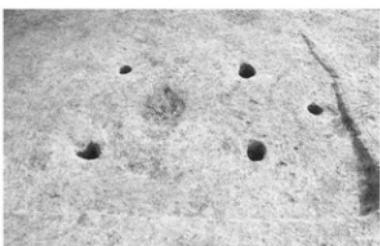
85号住居跡完掘状況(南東から)



85号住居跡遺物出土状況(南から)



86号住居跡完掘状況(北東から)



88号住居跡完掘状況(北西から)



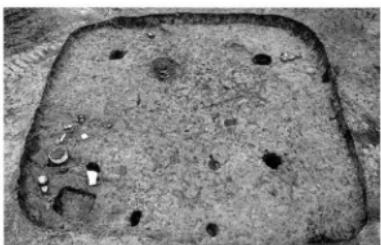
93号住居跡完掘状況(北西から)



97号住居跡完掘状況(北東から)



102号住居跡完掘状況(南西から)



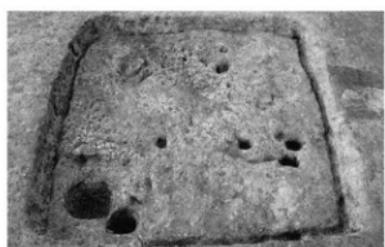
1号住居跡遺物出土状況(南から)



1号住居跡遺物出土状況(南西から)



1号住居跡掘り方完掘状況(南から)



4号住居跡完掘状況(南東から)



4号住居跡遺物出土状況(南東から)



5号住居跡遺物出土状況(南東から)



8号住居跡完掘状況(南から)



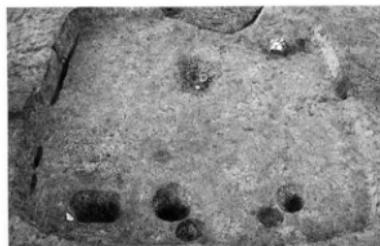
8号住居跡出入り口ピット(西から)



15号住居跡完掘状況(南から)



15号住居跡カマド遺物出土状況(南から)



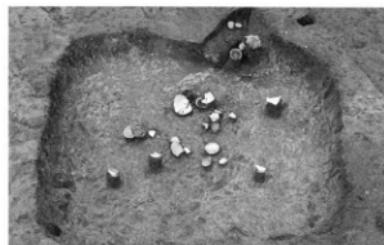
33号住居跡完掘状況(南東から)



87号住居跡掘り方完掘状況(南から)



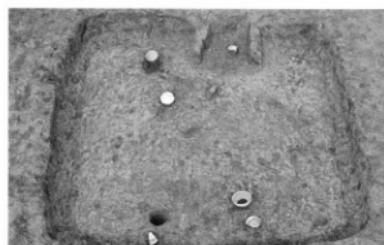
92号住居跡完掘状況(南から)



7号住居跡遺物出土状況(西から)



7号住居跡カマド遺物出土状況(西から)



10号住居跡完掘状況(南東から)



11号住居跡完掘状況(南から)



17号住居跡完掘状況(南から)



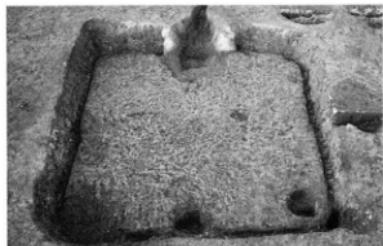
17号住居跡カマド支脚出土状況(南東から)



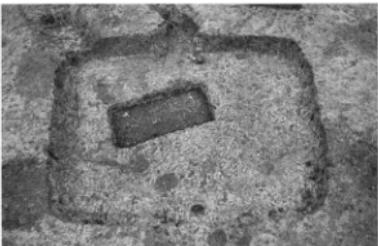
19号住居跡完掘状況(南から)



19号住居跡カマド完掘状況(南から)



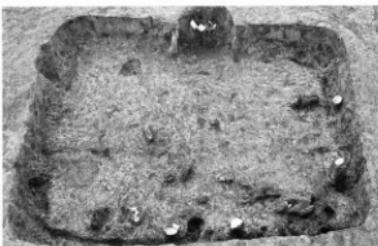
21号住居跡完掘状況(南から)



22号住居跡完掘状況(南西から)



24号住居跡完掘状況(南から)



24号住居跡遺物出土状況(南から)



26号住居跡完掘状況(南から)



31号住居跡完掘状況(南から)



38号住居跡完掘状況(南から)



38号住居跡カマド遺物出土状況(南から)



38号住居跡旧床面検出状況(南から)



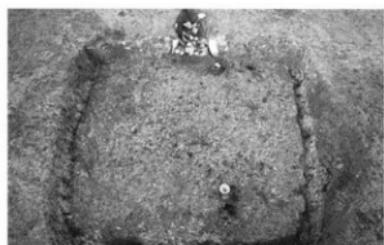
40号住居跡完掘状況(南西から)



40号住居跡カマド遺物出土状況(南西から)



41~43号住居跡完掘状況(南から)



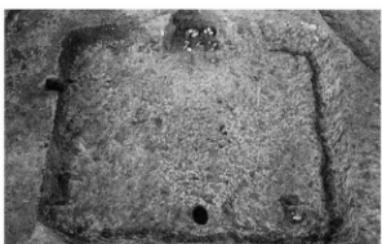
41号住居跡完掘状況(南から)



41号住居跡カマド遺物出土状況(南から)



41号住居跡カマド完掘状況(南から)



43号住居跡(南から)



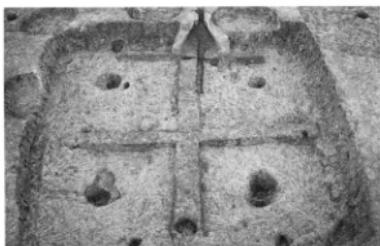
43号住居跡カマド支脚出土状況(南から)



46号住居跡完掘状況(南から)



46号住居跡カマド完掘状況(南から)



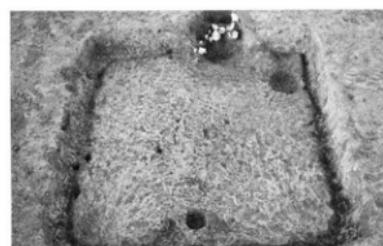
46号住居跡掘り方完掘状況(南から)



47号住居跡完掘状況(南から)



47号住居跡カマド遺物出土状況(南から)



53号住居跡完掘状況(南から)



53号住居跡カマド遺物出土状況(南から)



55号住居跡完掘状況(南西から)



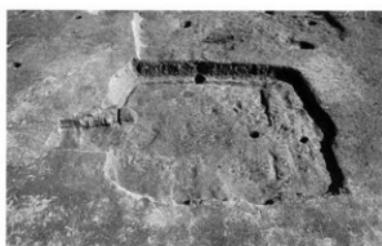
59号住居跡完掘状況(南から)



60号住居跡完掘状況(東から)



60号住居跡掘り方完掘状況(南から)



65号住居跡完掘状況(西から)



65号住居跡掘り方完掘状況(西から)



75号住居跡完掘状況(南から)



84号住居跡完掘状況(南東から)



1号掘立柱建物跡完掘状況(南から)



3号掘立柱建物跡完掘状況(南から)



4号掘立柱建物跡完掘状況(南から)



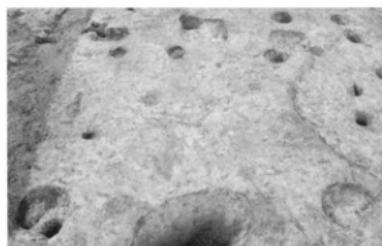
6号掘立柱建物跡完掘状況(南東から)



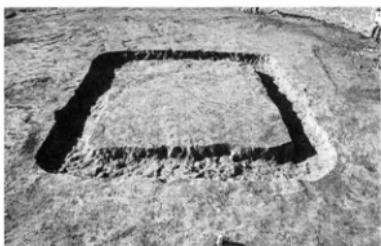
7号掘立柱建物跡完掘状況(南東から)



11号掘立柱建物跡完掘状況(南から)



12号掘立柱建物跡完掘状況(南から)



1号方形周溝状遺構完掘状況(南から)



1号地下式坑完掘状況(南東から)



2号地下式坑完掘状況(南から)



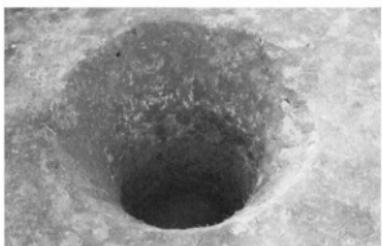
3号地下式坑完掘状況(西から)



4号地下式坑完掘状況(西から)



7号地下式坑完掘状況(東から)



1号井戸完掘状況(東から)



2号井戸完掘状況(東から)



A区北側土坑群完掘状況(東から)



溜井状遺構完掘状況(北東から)



1号溝完掘状況(西から)



2号溝・1号段切り完掘状況(南から)



5号溝完掘状況(北から)



7号溝・1号道路跡完掘状況(東から)



7号溝・1号道路跡完掘状況(西から)



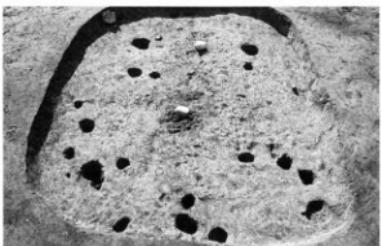
8・9号溝完掘状況(北から)



8・9号溝完掘状況(南から)



1号住居跡完掘状況(南東から)



2号住居跡完掘状況(東から)



3号住居跡完掘状況(南東から)



3号住居跡遺物出土状況(北東から)



4号住居跡完掘状況(南から)



6号住居跡完掘状況(南東から)



7号住居跡完掘状況(南東から)



8号住居跡完掘状況(南東から)



1号石器集中地点遺物出土状況(北から)



1号石器集中地点遺物出土状況(北から)



1号住居跡完掘状況(南東から)



1号住居跡完掘状況(南東から)



2号住居跡完掘状況(南から)



2号住居跡完掘状況(南から)



4号住居跡完掘状況(南から)



1号溝完掘状況(南東から)



1号住居跡完掘状況(南東から)



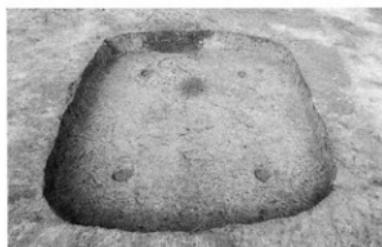
2号住居跡完掘状況(南東から)



3号住居跡遺物出土状況(南から)



3号住居跡遺物出土状況(東から)



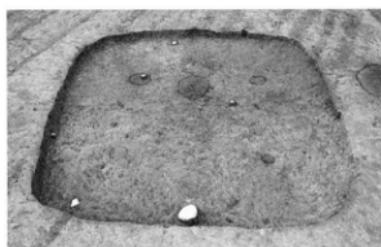
4号住居跡完掘状況(南東から)



5号住居跡完掘状況(南東から)



8号住居跡完掘状況(南から)



9号住居跡完掘状況(南から)



10号住居跡完掘状況(南から)



11号住居跡完掘状況(東から)



12号住居跡完掘状況(南東から)



7号住居跡完掘状況(南東から)



7号住居跡遺物出土状況(北東から)



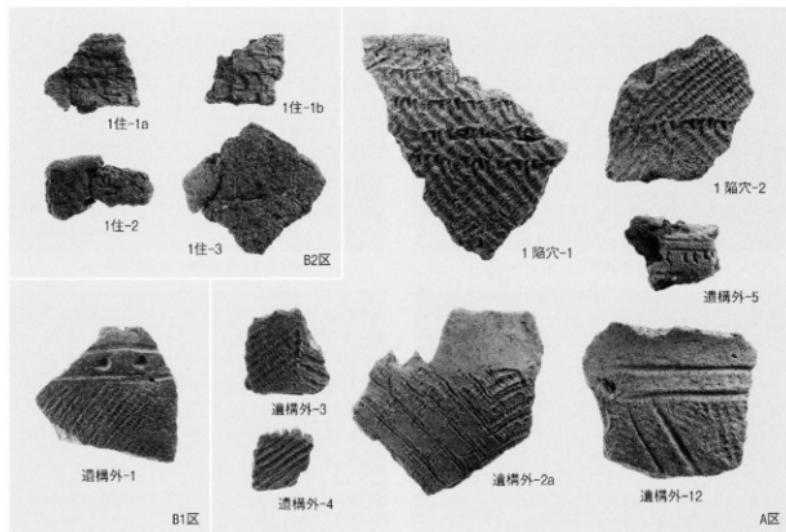
1号周溝墓遠景(北西から)



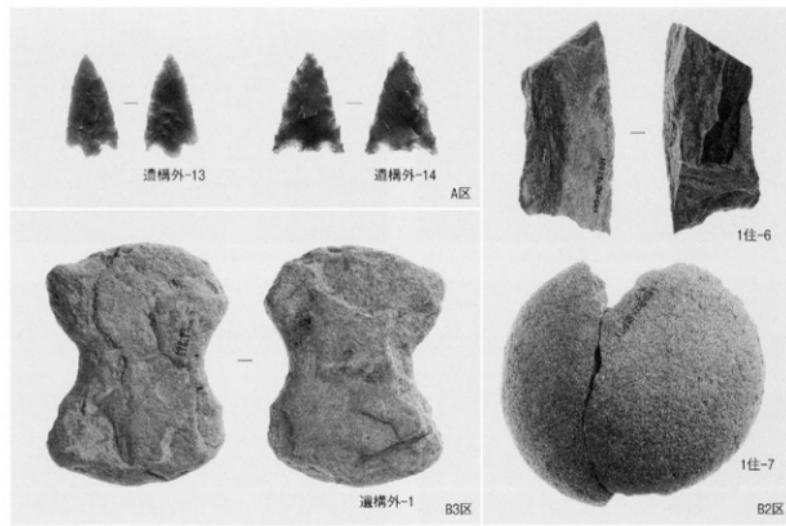
1号周溝墓完掘状況(南から)



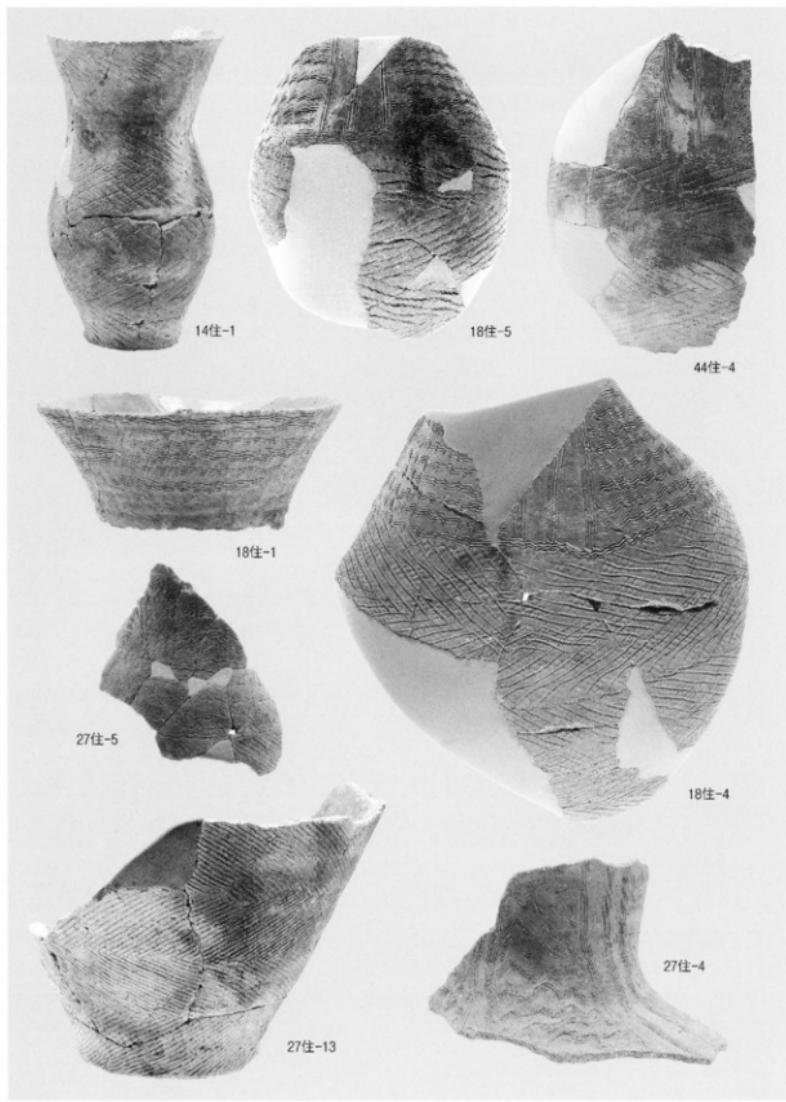
2号周溝墓完掘状況(北から)

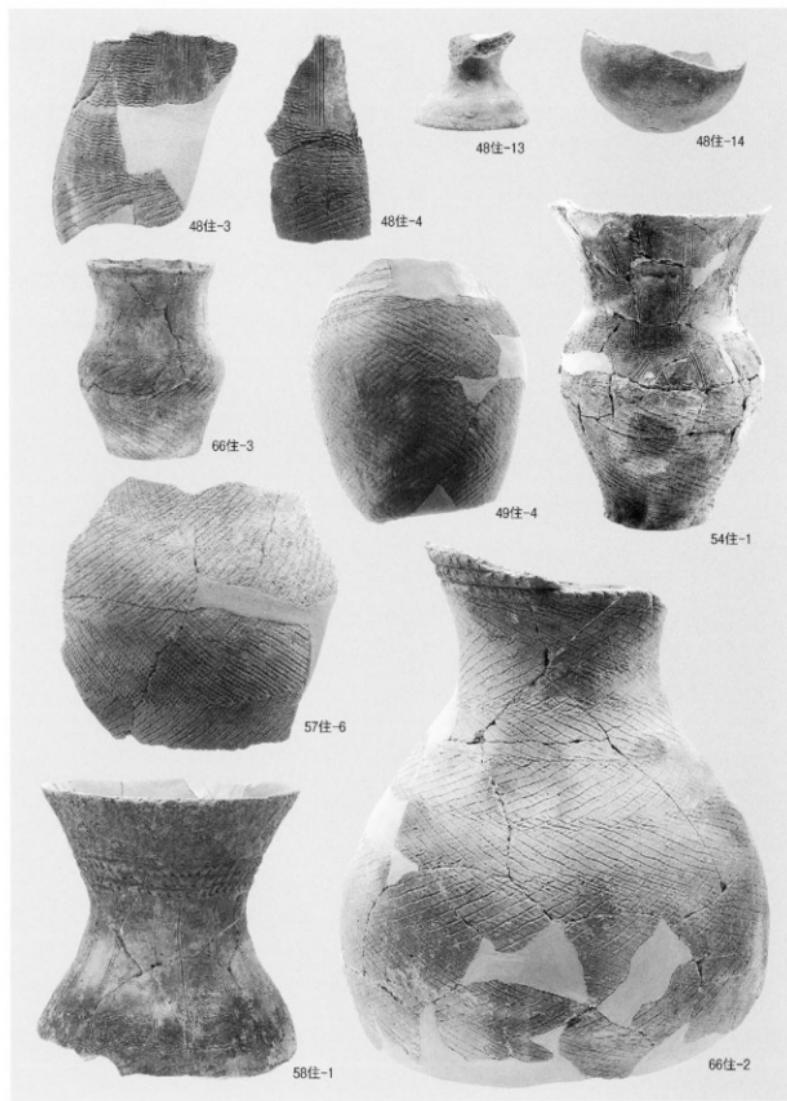


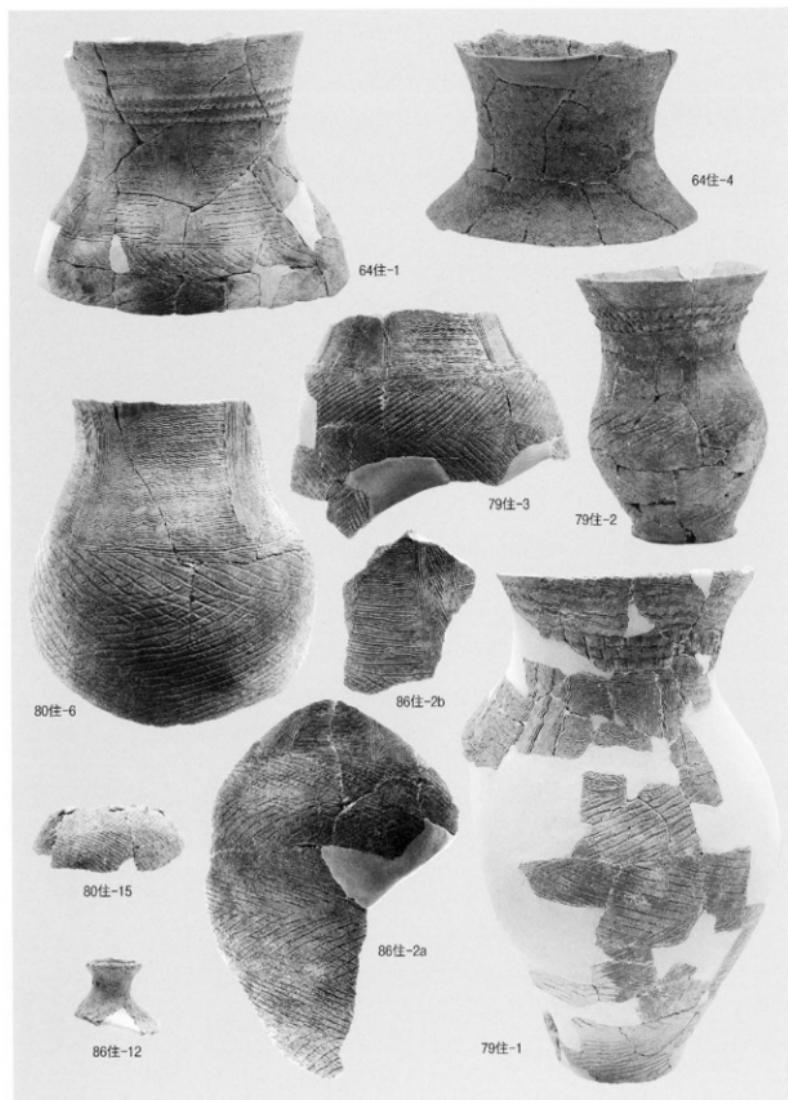
縄文土器 S=1/2

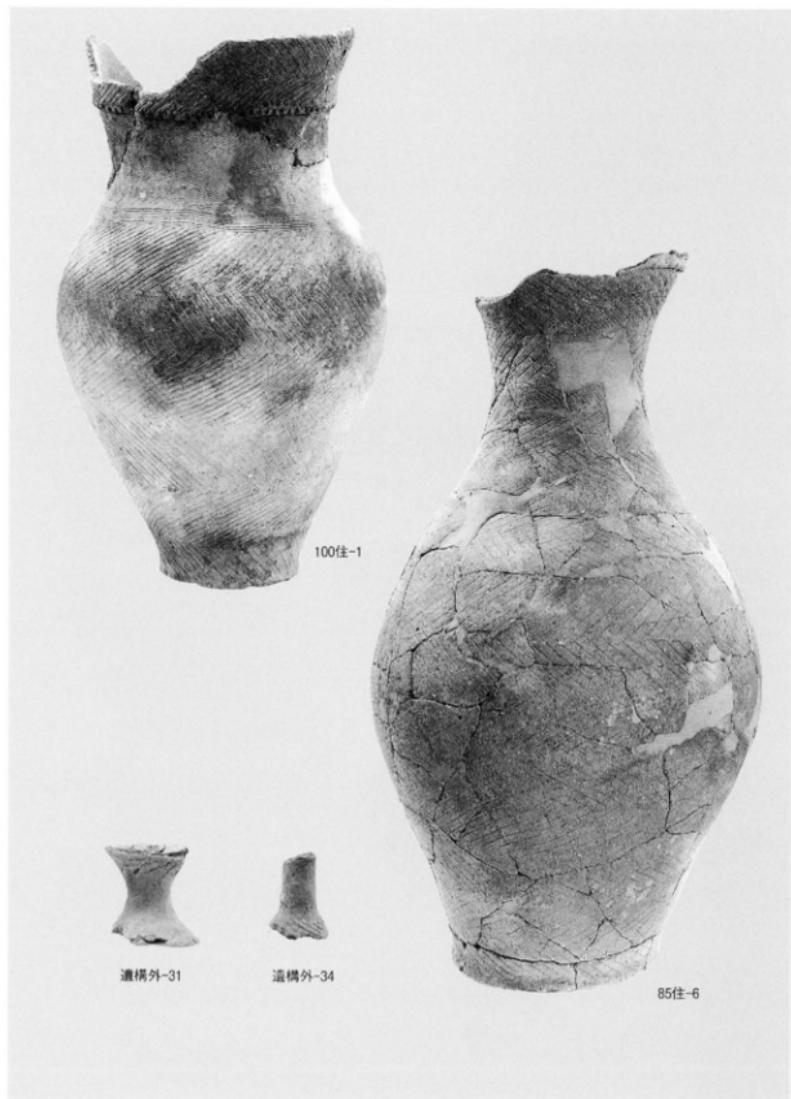


石器 S=1/1, 1/2

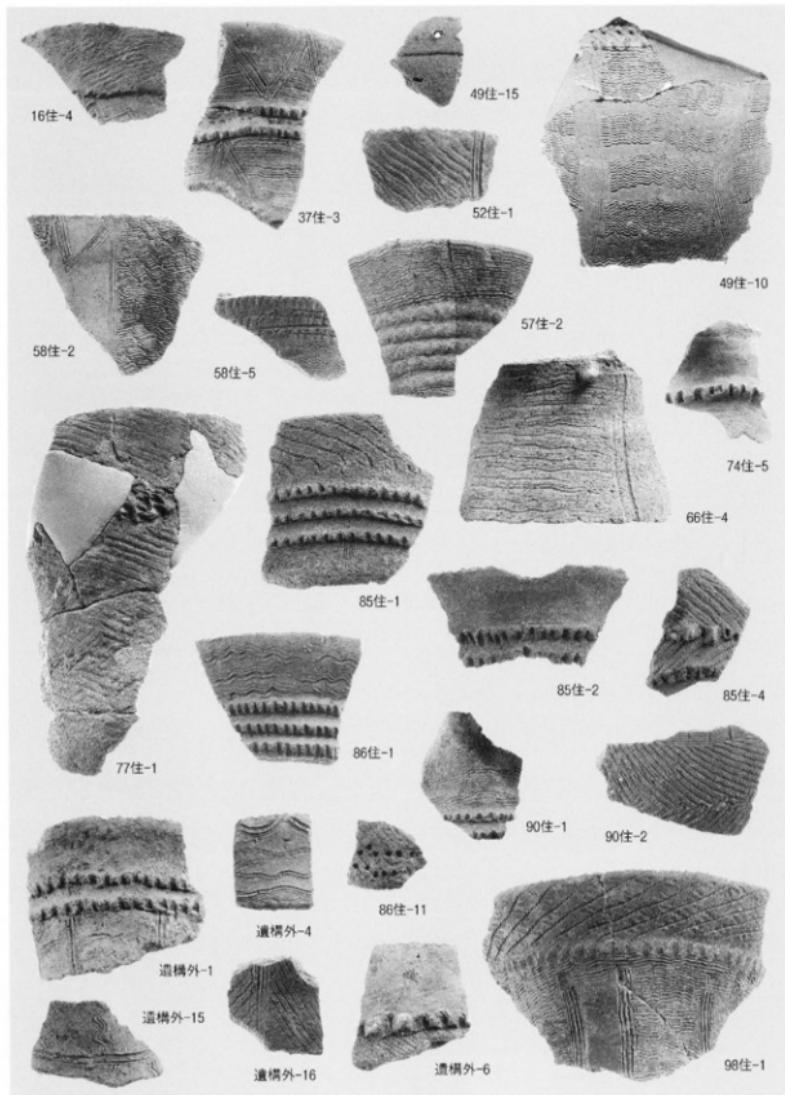


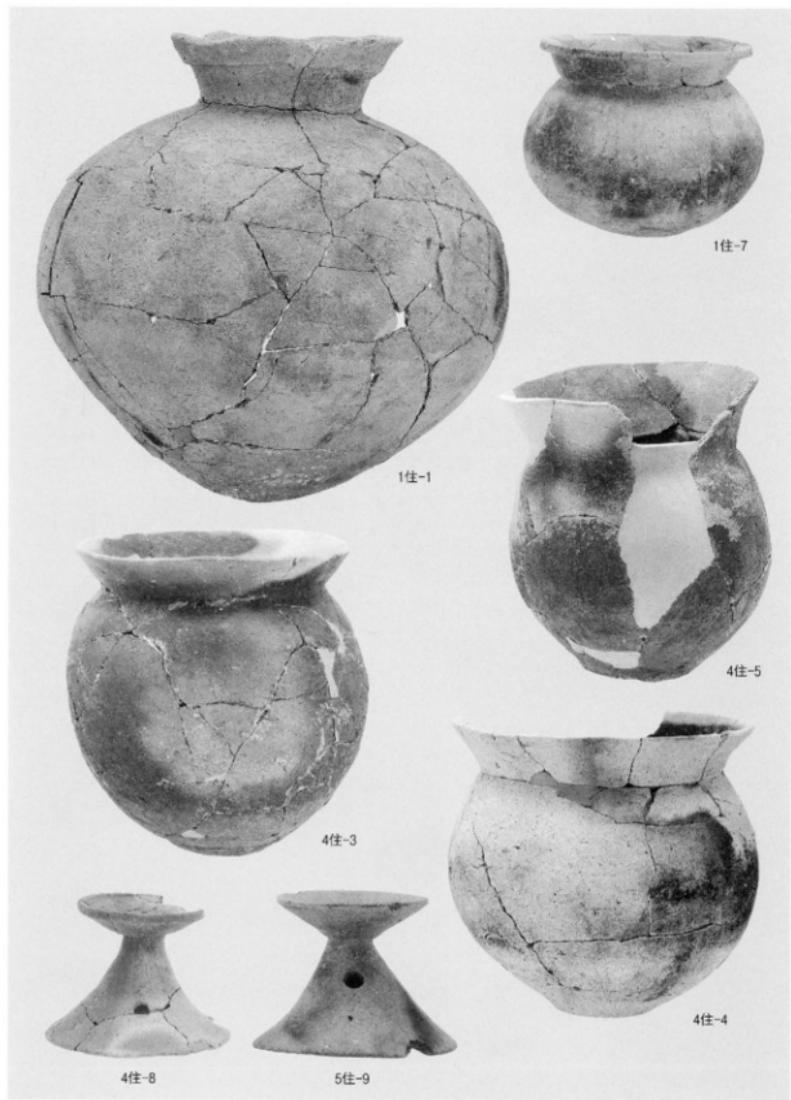


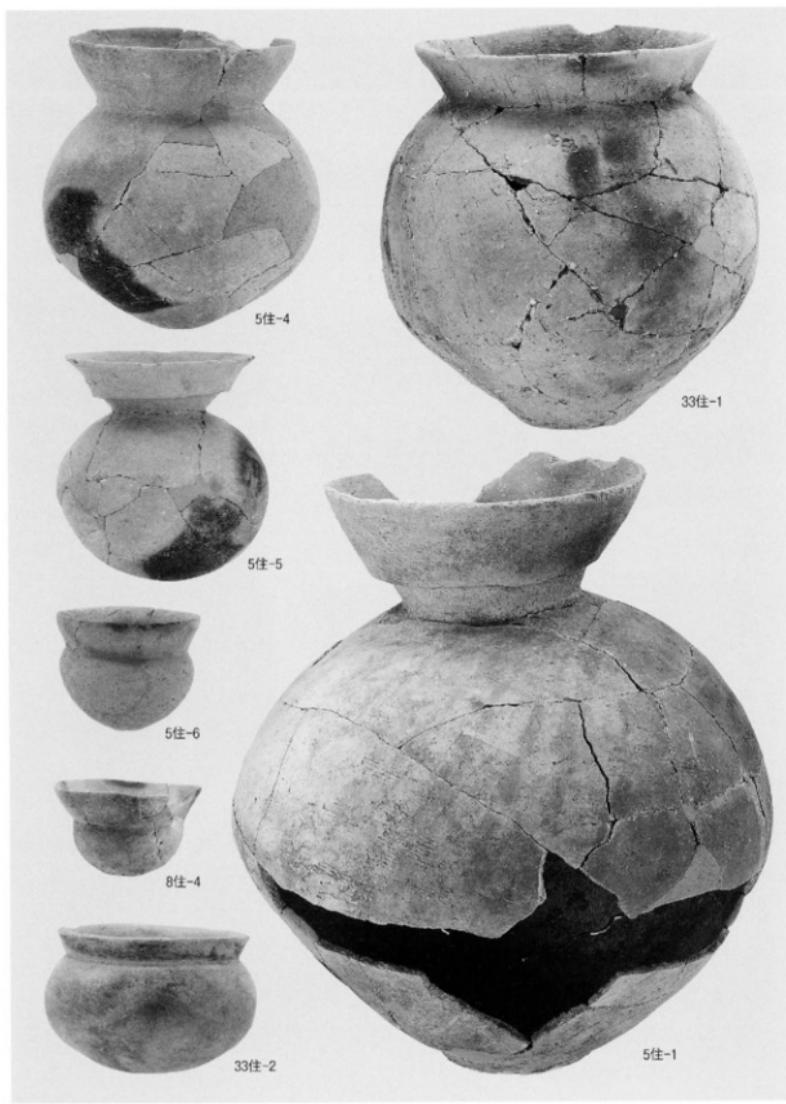


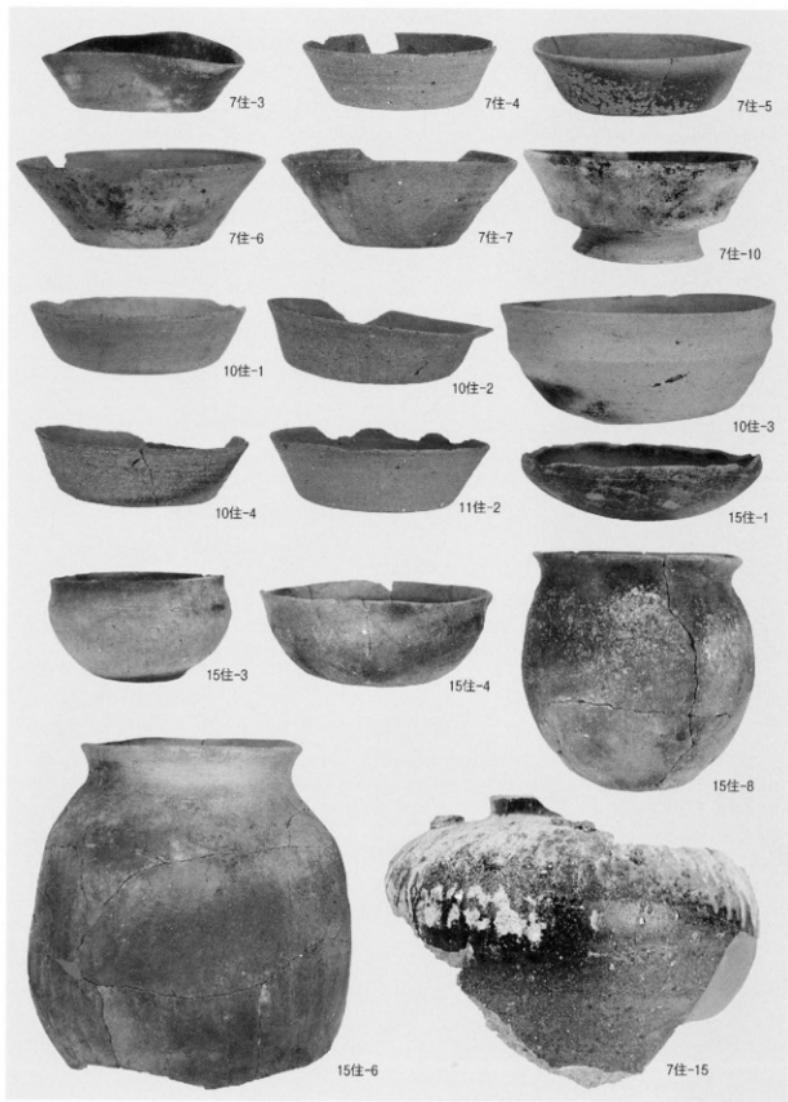


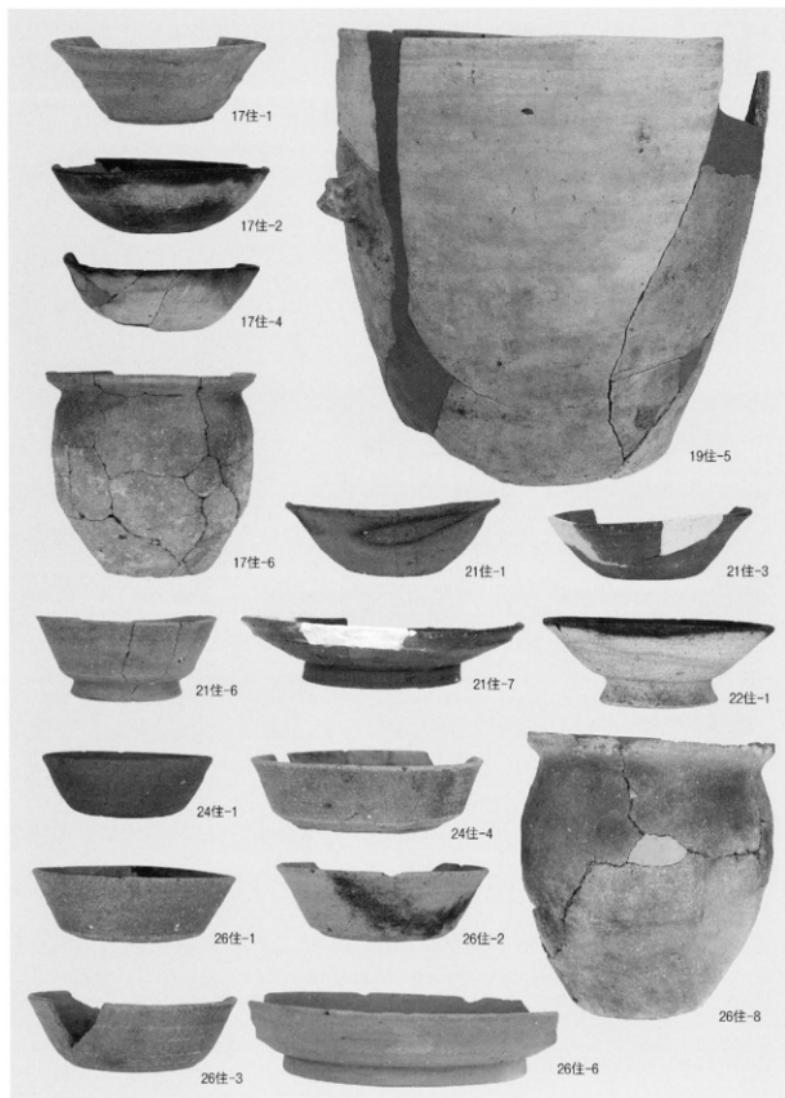
S=1/3(85住-6はS=1/4)

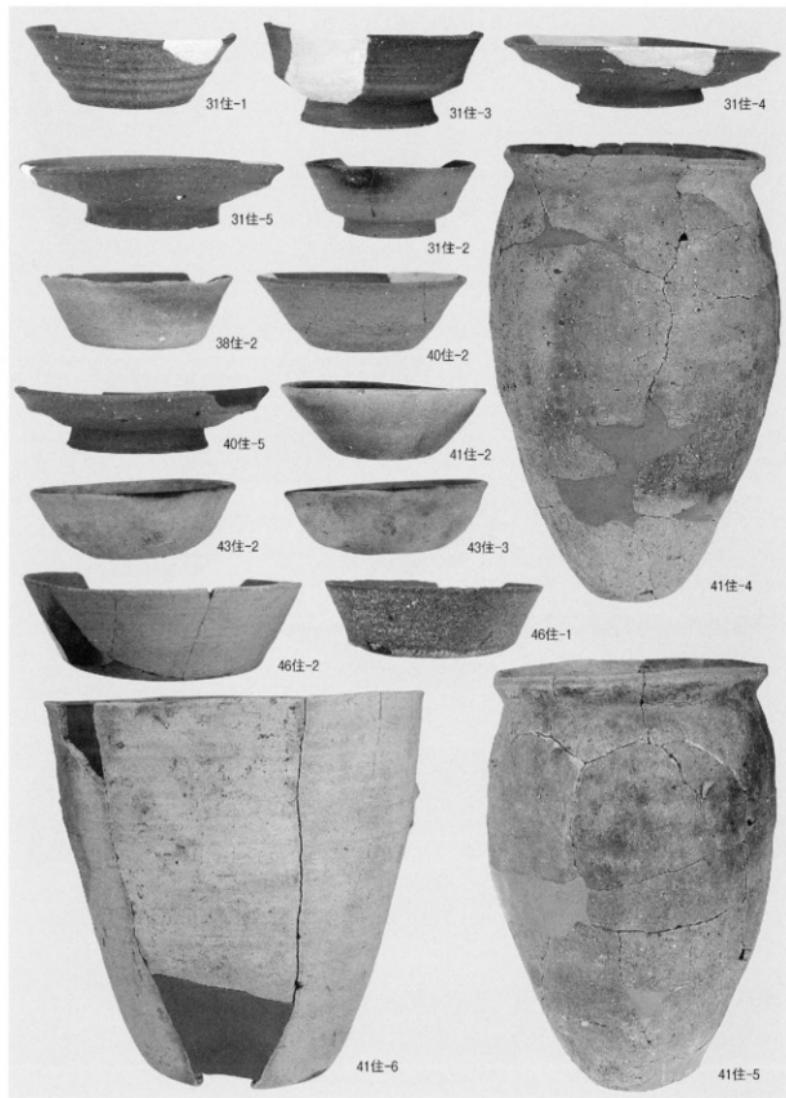




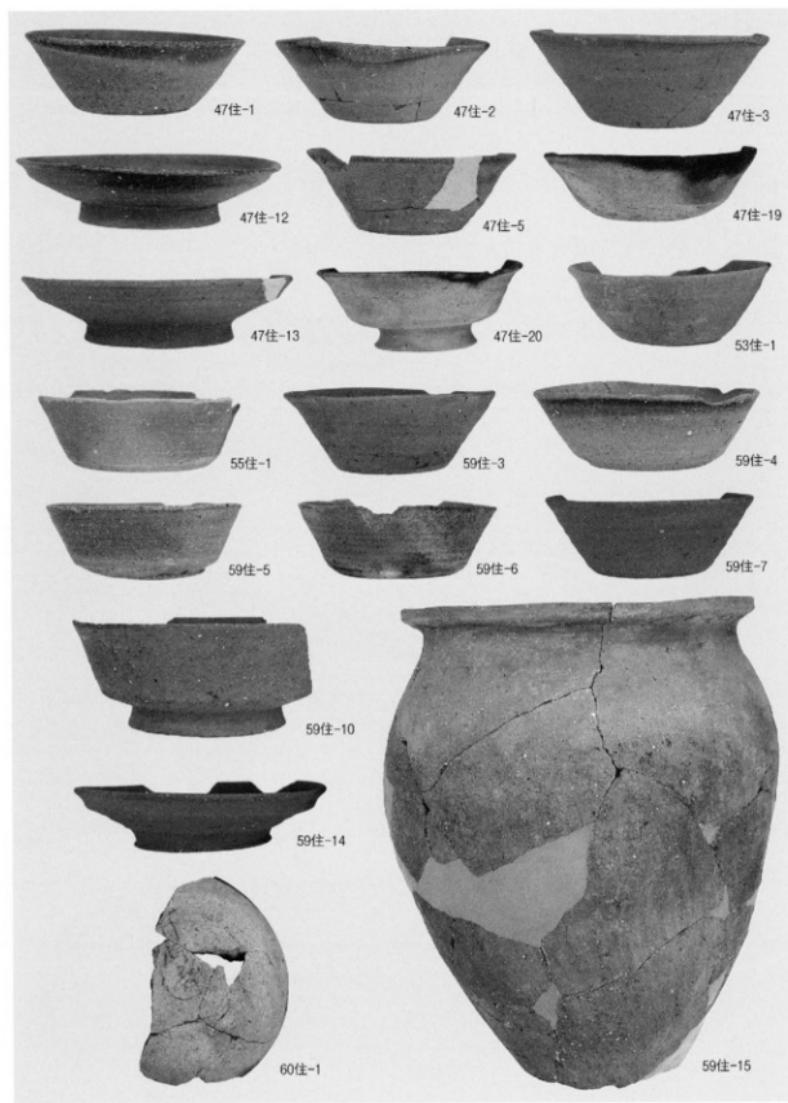


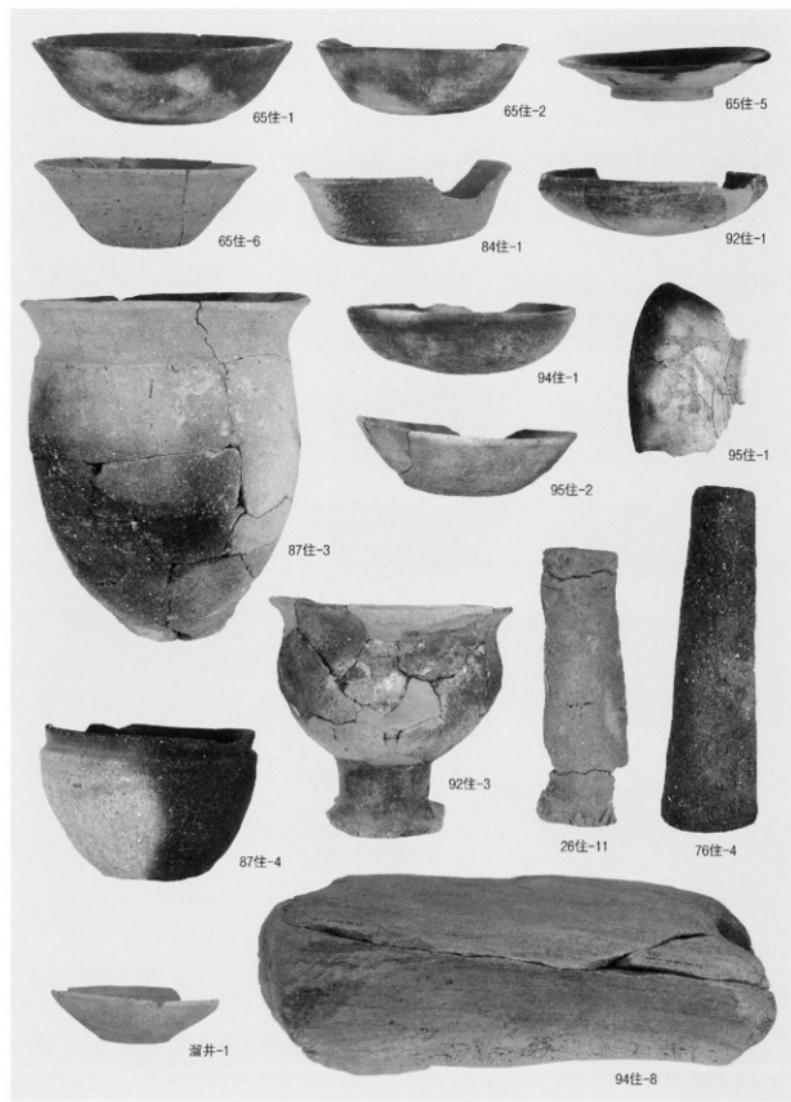






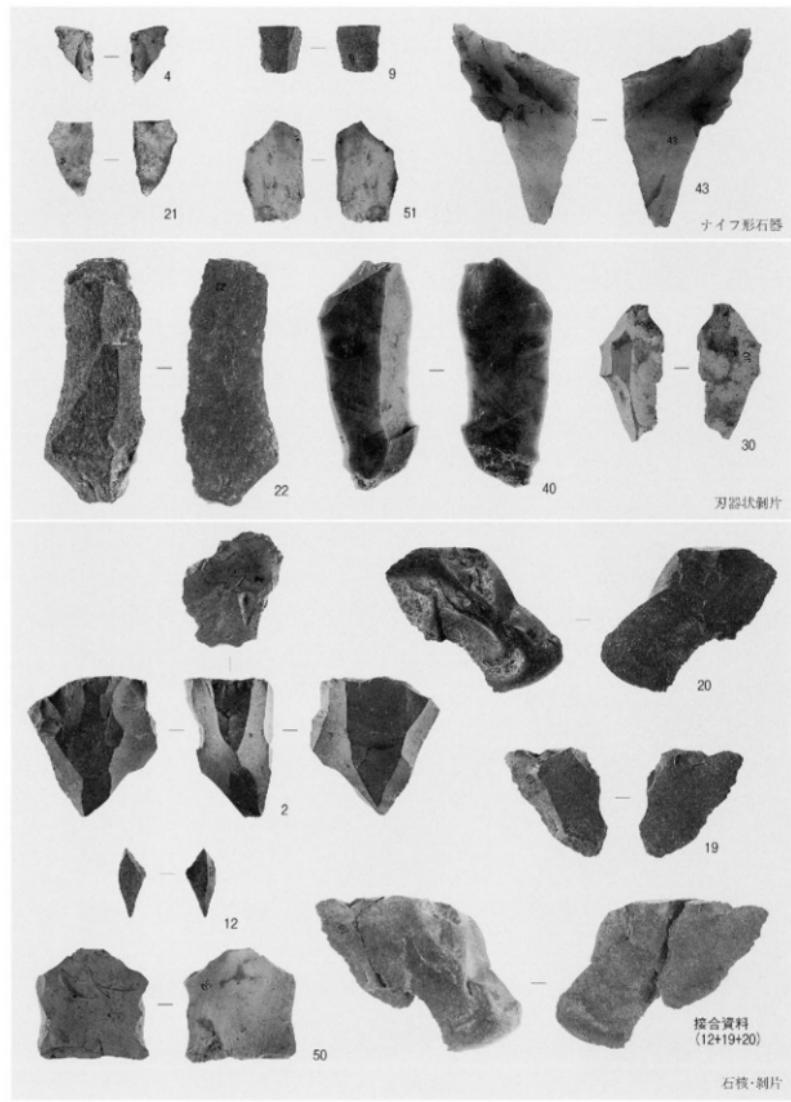
$S=1/3$ (41住-4-5-6は $S=1/4$)

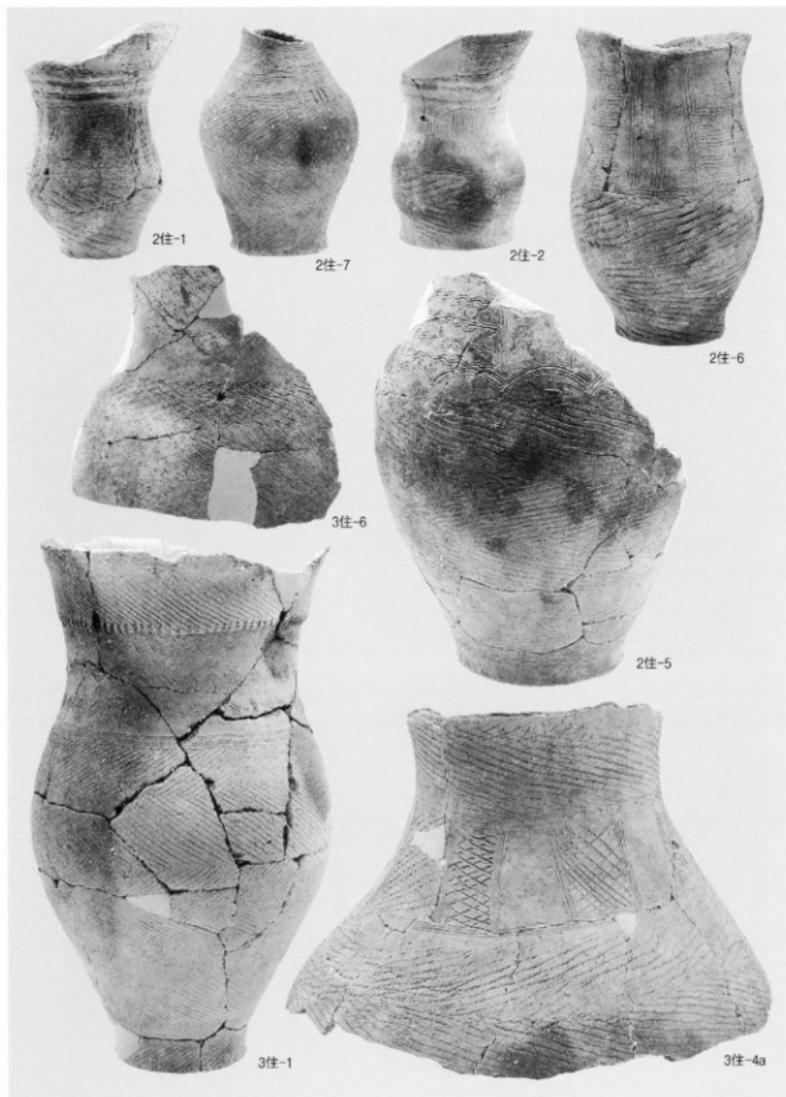


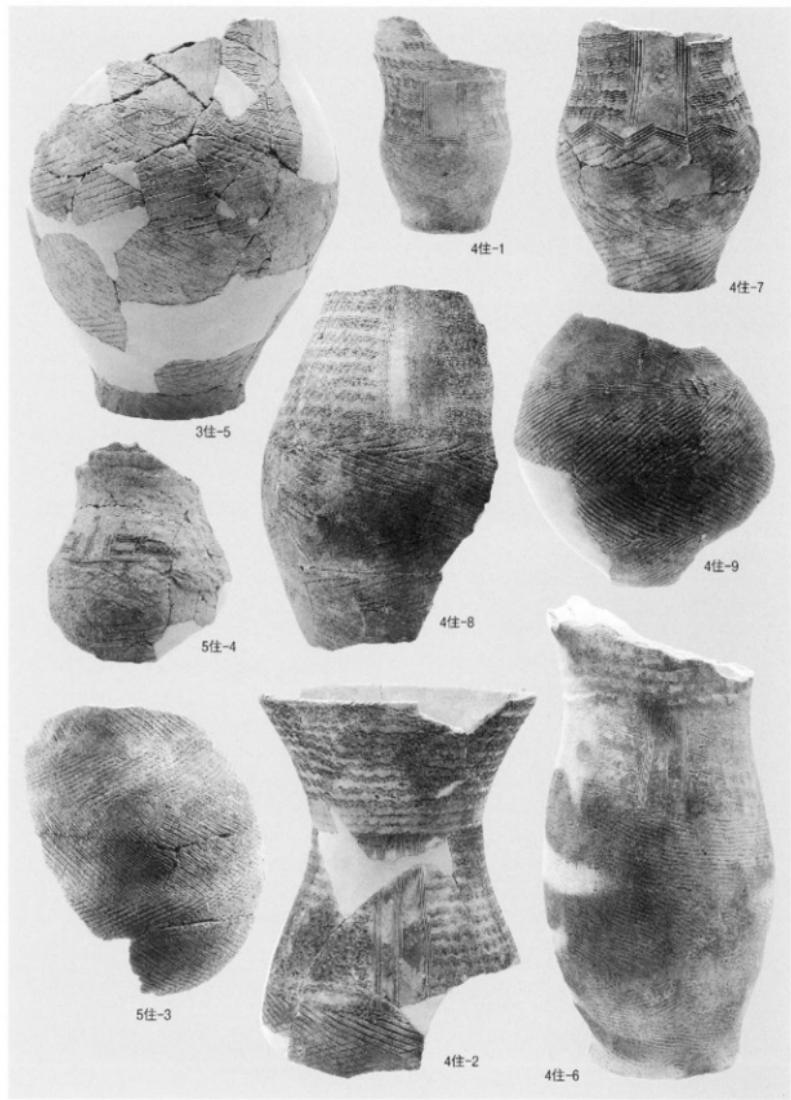


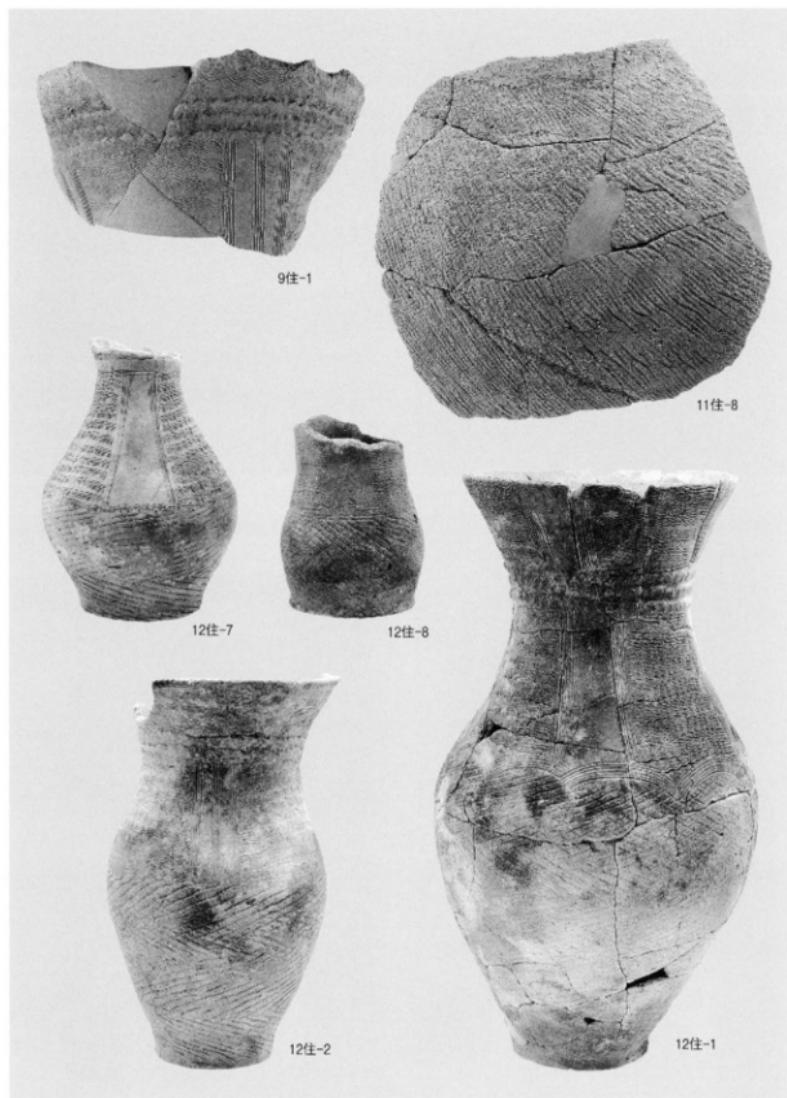


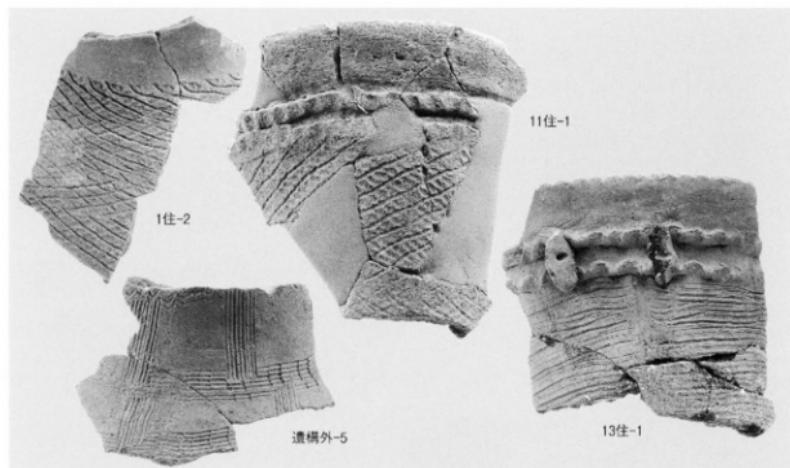
S=1/3



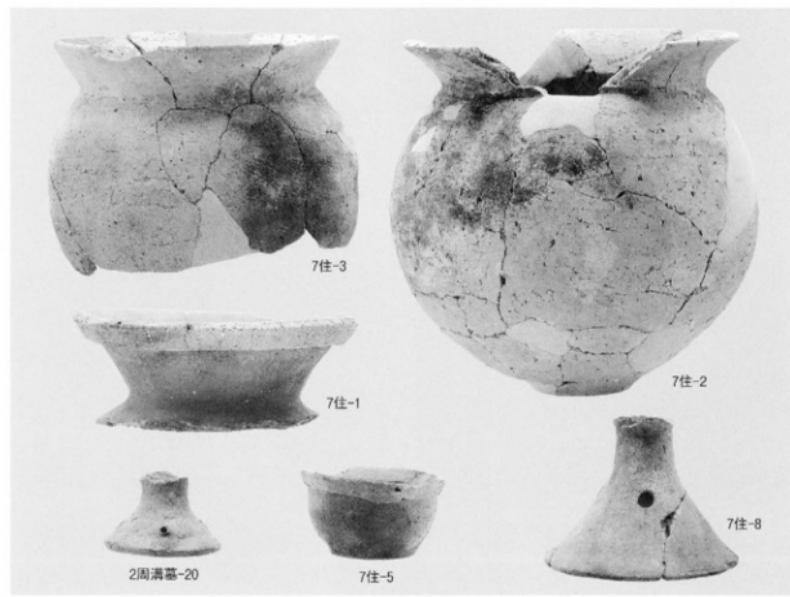




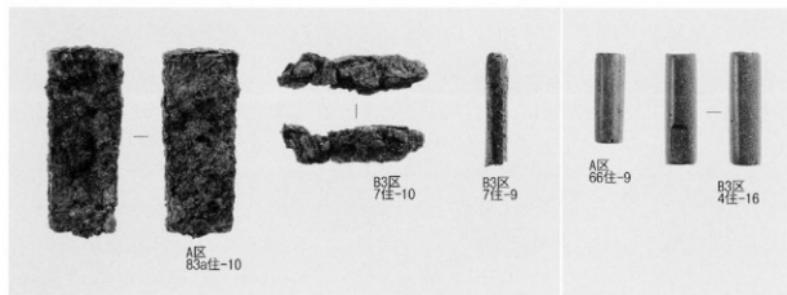




弥生時代 S=1/2

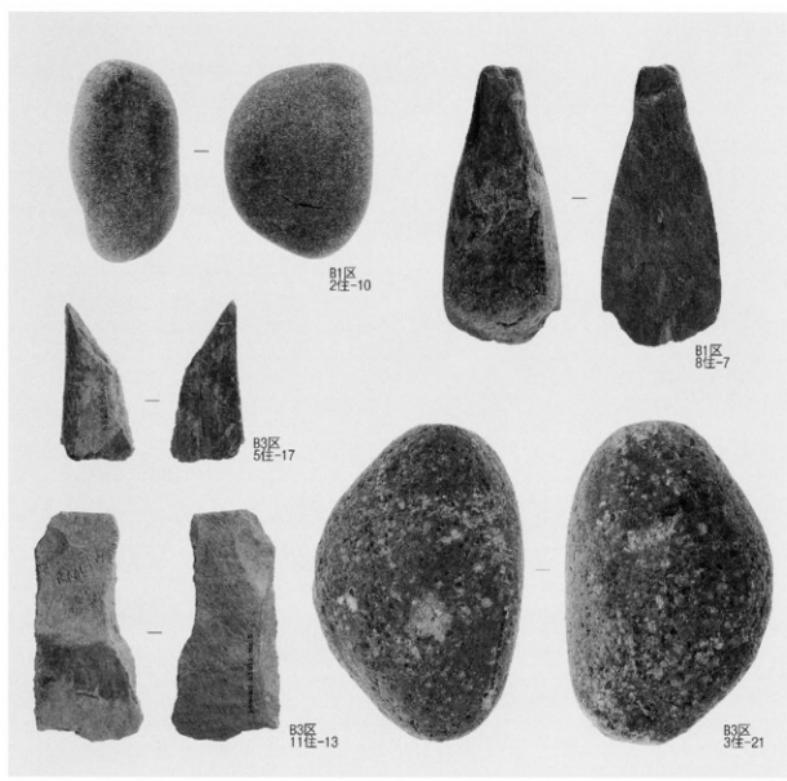


古墳時代 S=1/3

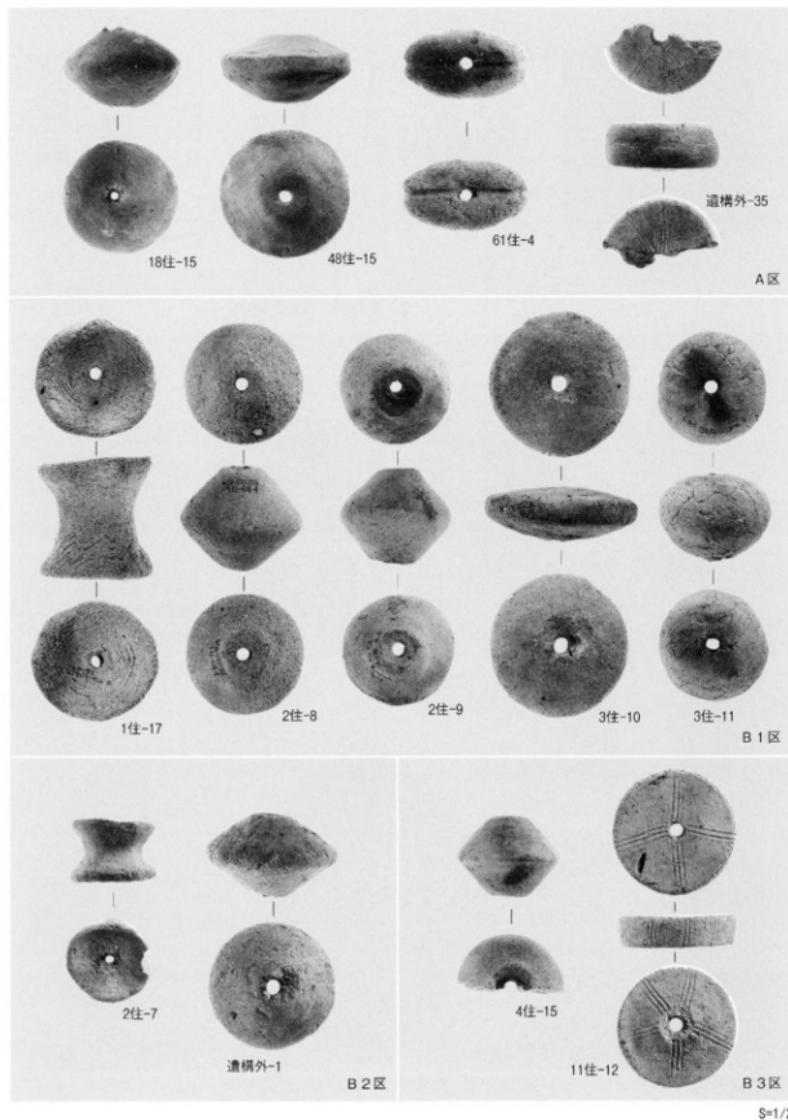


鉄製品 S=1/2, 銅製品 S=1/1

石製玉類 S=1/1



石器 S=1/2

 $S=1/2$

報告書抄録

ふりがな	はんがいいせき						
書名	塙谷遺跡2						
副書名	県営畠地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	笠間市文化財調査報告書						
シリーズ番号							
編著者名	常深尚、上生朗治、南田法正、浅間陽、高橋清文、上井道昭						
編集機関	有限会社毛野考古学研究所						
所在地	〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1						
発行機関	笠間市教育委員会						
所在地	〒309-1698 茨城県笠間市石井717番地						
発行年月日	平成23年3月15日						
所取遺跡名	所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯 °°°'	東経 °°°'	調査期間	調査面積	調査原因
はんがいいせき 塙谷遺跡	笠間市小原 48番地ほか	08321089	36° 22' 10"	140° 19' 59"	20080818 ~ 20090130	11.849m ²	県営畠地帯 総合整備事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
塙谷遺跡	集落	旧石器時代	石器集中地点 1箇所	ナイフ形石器、刃器状剥片、打向再生剥片、剥片、石核、碎片	ナイフ形石器を含む石器59点が集中するユニットが1箇所確認された。	縄文前期中葉の住居跡が検出された。 弥生後期後半の大規模な集落を確認。B3区3・4号住居跡では十五台式土器と二軒屋式土器の良好な個体が出土した。 古墳前期の方形周溝墓2基が確認された。	
		縄文時代	竪穴住居跡 1軒	縄文土器、石器			
		弥生時代	竪穴住居跡 2基	弥生土器、土製紡錘車、土鍤、磨石、台石、砥石、菅瓦、鐵斧			
		古墳時代	竪穴住居跡 69軒	土師器、土製紡錘車、土鍤、磨石、台石、敲石、砥石、刀子、銅製品			
		奈良平安時代	竪穴住居跡 16軒	土師器、須恵器、灰釉陶器、刀子、砥石、紡錘車			
		中世以降	竪穴住居跡 34軒	土師器、平安時代の60号住居跡からは「山寺」墨書き土器と高台の付いた鉢形の須恵器が出土した。			
			掘立柱建物跡 7棟	陶器(古漁戸、常滑)、内耳壺、かわらけ、鐵滓			
			土坑 1基				
			方形周溝状遺構 1基				
			地下式坑 7基				
	井戸 3基						
	上坑 2基						
	溜井状遺構 1基						
	ピット群 1基						
	ピット列 2条						
	溝 19条						
	道路跡 1条						
	土坑 121基						
時期不明							

茨城県笠間市

塙谷遺跡2

—県営畠畠地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書—

平成23年3月10日 印刷

平成23年3月15日 発行

編集 有限会社 毛野考古学研究所
〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1
電話 027-265-1804 FAX 027-265-5352

発行 笠間市教育委員会
〒309-1698 茨城県笠間市石井717番地
電話 0296-77-1101

印刷 朝日印刷工業株式会社
〒371-0846 群馬県前橋市元総社町67番地
電話 027-251-1212

